

茨城県教育財団文化財調査報告第85集

土浦北工業団地造成地内  
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

原田北遺跡Ⅱ  
西原遺跡

平成6年3月

住宅・都市整備公団つくば開発局  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第85集

# 土浦北工業団地造成地内 埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

はら だ きた  
原 田 北 遺 跡 Ⅱ  
にし はら  
西 原 遺 跡

平 成 6 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局  
財団法人 茨城県教育財団



原田北・西原遺跡全景（南から北方向を望む）



原田北遺跡第112号住居跡遺物出土状況

# 序

茨城県は、筑波研究学園都市における、世界の科学技術都市として集積された発展エネルギーを、広域つくば圏に拡大して、地域の振興を図ることを目的とする「グレーターつくば構想」を進めております。

その一環として、住宅・都市整備公団は、土浦市北部の今泉地区に「テクノパーク土浦北」の建設を進めており、その予定地内に、埋蔵文化財包蔵地である原田北遺跡ほか3遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と開発地域内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、平成2年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」として刊行しました。

本書は、平成4年度に調査を行った原田北遺跡と西原遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより郷土の歴史への理解を深め、ひいては教育、文化向上の一助として活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である住宅・都市整備公団はもとより茨城県教育委員会、土浦市教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 儀田 勇

# 例 言

- 1 本書は、平成4年度に住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が実施した、茨城県土浦市大字今泉字原田1984-9ほかに所在する原田北遺跡と土浦市大字今泉字西原1864-1ほかに所在する西原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 原田北遺跡、西原遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	角 田 芳 夫	平成3年7月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
常 務 理 事	本 田 三 郎	平成3年4月～平成5年3月	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅	平成2年4月～平成5年3月	
	安 藏 幸 重	平成5年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	主 任 調 査 員	根 本 康 弘	平成3年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	川 井 正 一	平成5年4月～
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～
経 理 課	課 長	藤 田 和 行	平成4年4月～平成5年3月
		小 幡 弘 明	平成5年4月～
	課 長 代 理	鈴 木 三 郎	平成5年4月～
	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～
	主 事	大 貫 吉 成	平成4年4月～平成5年3月
調 査 課	課 長	石 井 毅	平成元年4月～平成5年3月
	(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調 査 第 三 班 長	小 泉 光 正	平成4年度
	主 任 調 査 員	上 野 修 生	平成4年度調査
	主 任 調 査 員	中 村 敬 治	平成4年7月～平成5年3月調査
整 理 課	主 任 調 査 員	江 幡 良 夫	平成4年度調査
	課 長	沼 田 文 夫	平成2年4月～平成5年3月
		阿 久 津 久	平成5年4月～
	主 任 調 査 員	江 幡 良 夫	平成5年4月～整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第4章遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、南関東系の弥生式土器については、千葉県埋蔵文化財センターの小高春雄氏に近世陶磁器は財団法人出光美術館学芸員の荒川正明氏に、縄文式土器は茨城県立歴史館主任研究員の斎藤弘道氏に御指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して御指導・御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

遺跡名	原田北遺跡, 西原遺跡				
フリガナ	ハラダキタイセキ, ニシハライセキ				
副題	土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ				
シリーズ	茨城県教育財団文化財調査報告第85集				
著者	江幡 良夫				
編集機関	財団法人 茨城県教育財団				
発行機関	財団法人 茨城県教育財団				
発行	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番2号				
発行日	1994(平成6)年3月31日				
所収遺跡	市町村	コード	北緯	東経	標高
原田北遺跡	土浦市	08206-C72	36° 08' 02"	140° 11' 51"	27.4m
西原遺跡	土浦市	08206-C51	36° 08' 06"	140° 12' 05"	26.9m
所収遺跡	主な時代		主な遺構		主な遺物
原田北遺跡	縄文, 弥生(後期), 古墳(中期)		住居跡34, 土坑66, 溝4, 井戸3		土器, 土製品(紡錘車), 石器, 石製品
西原遺跡	縄文, 弥生(後期), 平安, 近世		住居跡23, 土坑33, 溝3, 火葬墓1, 土器棺墓6, 炭 焼窯跡2, 掘立柱建物跡1, 井戸1		土器, 土製品(紡錘車), 石器, 金属製品(古銭, 煙 管)

# 目 次

口絵

序

例言

目次（図版・写真・表目次を含む）

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査方法	9
第1節 地区設定	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構確認	10
第4節 遺構調査	11
第4章 遺構・遺物の記載方法	12
第1節 遺構の記載方法	12
第2節 遺物の記載方法	14
第5章 原田北遺跡Ⅱ	19
第1節 遺跡の概要	19
第2節 遺構と遺物	19
1. 竪穴住居跡	19
(1) 弥生時代の竪穴住居跡	20
(2) 古墳時代の竪穴住居跡	82
2. 土坑	127
3. 井戸	136
4. 溝	138
5. 遺構外出土遺物	143
第3節 まとめ	148

第6章 西原遺跡	151
第1節 遺跡の概要	151
第2節 遺構と遺物	151
1 旧石器時代	151
2 竪穴住居跡	161
3 土坑	230
4 土器棺墓	236
5 火葬墓	242
6 溝	244
7 炭焼窯跡	250
8 掘立柱建物跡	252
9 遺構外出土遺物	254
第3節 まとめ	261

## 插图目次

第 1 图	原田北·西原遺跡周辺遺跡分布图	5	第 30 图	第109号住居跡実測图	47
第 2 图	調査区呼称方法概念图	9	第 31 图	第109号住居跡出土遺物実測·拓影图	47
第 3 图	原田北遺跡基本土層图	9	第 32 图	第110号住居跡実測图	48
第 4 图	西原遺跡基本土層图	10	第 33 图	第110号住居跡出土遺物実測·拓影图	49
第 5 图	原田北·西原遺跡調査区	17	第 34 图	第111号住居跡実測图	50
第 6 图	第27号住居跡実測图	20	第 35 图	第111号住居跡出土遺物実測·拓影图	51
第 7 图	第27号住居跡出土遺物実測·拓影图	21	第 36 图	第112号住居跡実測图	52
第 8 图	第76号住居跡実測图	22	第 37 图	第112号住居跡出土遺物実測图(1)	53
第 9 图	第76号住居跡出土遺物実測·拓影图	23	第 38 图	第112号住居跡出土遺物実測图(2)	54
第 10 图	第96号住居跡実測图	25	第 39 图	第112号住居跡出土遺物拓影图(3)	55
第 11 图	第96号住居跡出土遺物実測·拓影图	26	第 40 图	第113号住居跡実測图	57
第 12 图	第97号住居跡実測图	27	第 41 图	第113号住居跡出土遺物実測·拓影图	58
第 13 图	第97号住居跡出土遺物拓影图	28	第 42 图	第115号住居跡実測图	60
第 14 图	第99号住居跡実測图	29	第 43 图	第115号住居跡出土遺物実測·拓影图(1)	61
第 15 图	第99号住居跡出土遺物実測·拓影图	30	第 44 图	第115号住居跡出土遺物実測图(2)	62
第 16 图	第100号住居跡実測图	31	第 45 图	第116号住居跡実測图	64
第 17 图	第100号住居跡出土遺物実測·拓影图	32	第 46 图	第116号住居跡出土遺物実測图(1)	65
第 18 图	第102号住居跡実測图	33	第 47 图	第116号住居跡出土遺物実測·拓影图(2)	66
第 19 图	第102号住居跡出土遺物実測·拓影图	34	第 48 图	第116号住居跡出土遺物実測·拓影图(3)	67
第 20 图	第103号住居跡実測图	35	第 49 图	第118号住居跡実測图	69
第 21 图	第103号住居跡出土遺物実測·拓影图	36	第 50 图	第118号住居跡出土遺物実測·拓影图	70
第 22 图	第105号住居跡実測图	38	第 51 图	第119号住居跡実測图	73
第 23 图	第106号住居跡実測图	39	第 52 图	第119号住居跡出土遺物実測·拓影图	74
第 24 图	第106号住居跡出土遺物実測·拓影图(1)	40	第 53 图	第120号住居跡実測图	75
第 25 图	第106号住居跡出土遺物実測·拓影图(2)	41	第 54 图	第121号住居跡実測图	76
第 26 图	第107号住居跡実測图	43	第 55 图	第121号住居跡出土遺物実測·拓影图	76
第 27 图	第107号住居跡出土遺物実測·拓影图	43	第 56 图	第122号住居跡実測图	77
第 28 图	第108号住居跡実測图	45	第 57 图	第122号住居跡出土遺物拓影图	78
第 29 图	第108号住居跡出土遺物実測·拓影图	46	第 58 图	第123号住居跡実測图	79

第 59 図	第124号住居跡実測図	80	第 91 図	第 3 号井戸出土遺物実測図	138
第 60 図	第124号住居跡出土遺物実測・拓影図	81	第 92 図	第 4 号溝実測図	139
第 61 図	第17号住居跡実測図	83	第 93 図	第 5・6・7 号溝実測図	141
第 62 図	第17号住居跡出土遺物実測・拓影図	84	第 94 図	第 5 号溝出土遺物実測図	139
第 63 図	第58号住居跡実測図	86	第 95 図	遺構外出土遺物実測図(1)	144
第 64 図	第58号住居跡出土遺物実測図	87	第 96 図	遺構外出土遺物実測・拓影図(2)	145
第 65 図	第66号住居跡実測図	89	第 97 図	遺構外出土遺物実測・拓影図(3)	146
第 66 図	第66号住居跡出土遺物実測図(1)	91	第 98 図	原田北遺跡弥生時代時期別住居跡配置図	150
第 67 図	第66号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)	92		西原遺跡	
第 68 図	第98号住居跡実測図	95	第 99 図	旧石器時代調査エリア内遺物出土地点図	152
第 69 図	第98号住居跡出土遺物実測図(1)	96	第100図	旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図(1)	152
第 70 図	第98号住居跡出土遺物実測図(2)	97	第101図	旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図(2)	153
第 71 図	第98号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)	98	第102図	旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(1)	154
第 72 図	第101号住居跡実測図	101	第103図	旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(2)	155
第 73 図	第101号住居跡出土遺物実測図	102	第104図	旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(3)	156
第 74 図	第104号住居跡実測図	104	第105図	旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(4)	157
第 75 図	第104号住居跡出土遺物実測図(1)	106	第106図	第 1 号住居跡実測図	162
第 76 図	第104号住居跡出土遺物実測図(2)	107	第107図	第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影図	163
第 77 図	第104号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)	108	第108図	第 2 号住居跡実測図	165
第 78 図	第114号住居跡実測図	112	第109図	第 2 号住居跡出土遺物実測・拓影図	166
第 79 図	第114号住居跡出土遺物実測図(1)	114	第110図	第 3 号住居跡実測図	168
第 80 図	第114号住居跡出土遺物実測図(2)	115	第111図	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影図	169
第 81 図	第114号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)	116	第112図	第 4 号住居跡実測図	171
第 82 図	第117号住居跡実測図	120	第113図	第 4 号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)	172
第 83 図	第117号住居跡出土遺物実測図(1)	121	第114図	第 4 号住居跡出土遺物実測図(2)	173
第 84 図	第117号住居跡出土遺物実測図(2)	122	第115図	第 5 号住居跡実測図	174
第 85 図	第117号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)	123	第116図	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)	176
第 86 図	第138・147・149号土坑実測図	128	第117図	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)	177
第 87 図	第181・186・197・200・201号土坑実測図	131	第118図	第 6 号住居跡実測図	178
第 88 図	第202・203号土坑実測図	132	第119図	第 6 号住居跡出土遺物実測図(1)	179
第 89 図	第150・155・157号土坑出土遺物実測図	133	第120図	第 6 号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)	180
第 90 図	第 1・2・3 号井戸実測図	137	第121図	第 7 号住居跡実測図	183

第122图	第7号住居跡出土遺物実測拓影图	184	第154图	第22号住居跡実測图	225
第123图	第8号住居跡実測图	186	第155图	第22号住居跡出土遺物実測·拓影图	226
第124图	第8号住居跡出土遺物実測·拓影图	187	第156图	第23号住居跡実測图	228
第125图	第9号住居跡実測图	189	第157图	第23号住居跡出土遺物拓影图	228
第126图	第9号住居跡出土遺物実測·拓影图	190	第158图	第1·5·6·7号土坑実測图	231
第127图	第10号住居跡実測图	191	第159图	第32号土坑実測图	233
第128图	第10号住居跡出土遺物実測·拓影图	192	第160图	第4·8·33号土坑出土遺物実測·拓影图	234
第129图	第11号住居跡実測图	193	第161图	第2号土器棺墓実測图	236
第130图	第11号住居跡出土遺物拓影图	194	第162图	第3·4号土器棺墓実測图	237
第131图	第12号住居跡実測图	196	第163图	第2·3·4号土器棺墓出土遺物実測图	238
第132图	第12号住居跡出土遺物実測·拓影图	197	第164图	第5号土器棺墓実測图	240
第133图	第13号住居跡実測图	198	第165图	第6·7号土器棺墓実測图	240
第134图	第13号住居跡出土遺物実測·拓影图	199	第166图	第5号土器棺墓出土遺物実測图	241
第135图	第14号住居跡実測图	200	第167图	第7号土器棺墓出土遺物実測图	242
第136图	第14号住居跡出土遺物実測·拓影图	201	第168图	第1号火葬墓実測图	243
第137图	第15号住居跡実測图	203	第169图	第1号火葬墓出土遺物実測图	243
第138图	第15号住居跡出土遺物実測·拓影图	204	第170图	第1·3号溝実測图	245
第139图	第16号住居跡実測图	206	第171图	第2号溝実測图	247
第140图	第16号住居跡出土遺物実測·拓影图	207	第172图	第1·2·3号溝出土遺物実測·拓影图	249
第141图	第17号住居跡実測图	209	第173图	第1·2号炭烧跡実測图	251
第142图	第17号住居跡出土遺物実測·拓影图	210	第174图	第2号炭烧跡出土遺物実測图	252
第143图	第18号住居跡実測图	211	第175图	第1号掘立柱建物跡実測图	253
第144图	第18号住居跡出土遺物拓影图	212	第176图	第1号掘立柱建物跡出土遺物実測·拓影图	254
第145图	第19号住居跡実測图	213	第177图	遺構外出土遺物実測图(1)	256
第146图	第19号住居跡出土遺物実測·拓影图(1)	214	第178图	遺構外出土遺物拓影图(2)	257
第147图	第19号住居跡出土遺物実測·拓影图(2)	215	第179图	遺構外出土遺物実測·拓影图(3)	258
第148图	第20号住居跡実測图	217	第180图	遺構外出土遺物実測·拓影图(4)	259
第149图	第20号住居跡出土遺物実測·拓影图(1)	218	第181图	西原遺跡弥生時代時期別住居跡配置图	264
第150图	第20号住居跡出土遺物実測图(2)	219			
第151图	第21号住居跡実測图	221			
第152图	第21号住居跡出土遺物実測图(1)	222			
第153图	第21号住居跡出土遺物実測·拓影图(2)	223			

## 表 目 次

表 1 原田北・西原遺跡周辺遺跡一覽表 …… 6	表 4 西原遺跡住居跡一覽表 …… 229
表 2 原田北遺跡住居跡一覽表 …… 126	表 5 西原遺跡土坑一覽表 …… 235
表 3 原田北遺跡土坑一覽表 …… 134~136	

## 写真図版目次

P L 1 調査後全景 E 地区, 調査後全景 F 地区	跡, 第113号住居跡遺物出土状況, 第
P L 2 調査後全景 G 地区(1), 調査後全景 G 地区(2)	115号住居跡, 第115号住居跡遺物出土状況(1)
P L 3 遺構確認状況 E 地区, 遺構確認状況 G 地区	P L 8 第115号住居跡遺物出土状況(2), 第115号住居跡遺物出土状況(3), 第116号住居跡, 第116号住居跡遺物出土状況(1)
P L 4 第27号住居跡, 第76号住居跡, 第76号住居跡炉, 第96号住居跡, 第96号住居跡遺物出土状況, 第97号住居跡, 第99号住居跡, 第99号住居跡遺物出土状況(1)	P L 9 第116号住居跡遺物出土状況(2), 第118号住居跡, 第118号住居跡遺物出土状況(1), 第118号住居跡遺物出土状況(2), 第119号住居跡, 第119号住居跡遺物出土状況, 第121号住居跡, 第124号住居跡
P L 5 第99号住居跡遺物出土状況(2), 第100号住居跡, 第102号住居跡, 第103号住居跡, 第105号住居跡, 第106号住居跡, 第106号住居跡遺物出土状況, 第107号住居跡	P L 10 第17号住居跡, 第17号住居跡遺物出土状況, 第58号住居跡, 第66号住居跡, 第66号住居跡小ピット列, 第66号住居跡遺物出土状況(1)
P L 6 第107号住居跡遺物出土状況, 第108号住居跡, 第109号住居跡, 第110号住居跡, 第110号住居跡遺物出土状況, 第111号住居跡, 第112号住居跡, 第112号住居跡遺物出土状況(1)	P L 11 第66号住居跡遺物出土状況(2), 第98号住居跡, 第98号住居跡遺物出土状況(1) 第98号住居跡遺物出土状況(2)
P L 7 第112号住居跡遺物出土状況(2), 第112号住居跡遺物出土状況(3), 第113号住居	P L 12 第101号住居跡, 第101号住居跡遺物出土状況, 第104号住居跡, 第104号住居跡遺物出土状況(1), 第104号住居跡遺

- 物出土状況(2)
- P L 13 第114号住居跡, 第114号住居跡遺物出土状況(1), 第114号住居跡遺物出土状況(2), 第114号住居跡遺物出土状況(3), 第117号住居跡
- P L 14 第117号住居跡遺物出土状況(1), 第117号住居跡遺物出土状況(2), 第117号住居跡遺物出土状況(3), 第138号土坑, 第147号土坑
- P L 15 第181号土坑, 第183号土坑, 第186号土坑, 第197号土坑, 第200号土坑, 第201号土坑, 第202号土坑, 第203号土坑
- P L 16 第1～3号井戸, 第4号溝, 第5・6号溝, 遺構外遺物出土状況
- P L 17 第76・96・99・100・102・103・106号住居跡出土土器
- P L 18 第106・107・110・112・113号住居跡出土土器
- P L 19 第113・115・116号住居跡出土土器
- P L 20 第116・118・119・124号住居跡出土土器
- P L 21 第124・17・58・66号住居跡出土土器
- P L 22 第66・98号住居跡出土土器
- P L 23 第98号住居跡出土土器
- P L 24 第98・101・104号住居跡出土土器
- P L 25 第104・114号住居跡出土土器
- P L 26 第114号住居跡出土土器
- P L 27 第114・117号住居跡出土土器
- P L 28 第76・117号住居跡・157号土坑・遺構外出土土器
- P L 29 出土土製品・石器
- P L 30 出土石器・石製品・金属製品
- P L 31 第17・27・66・76・99・100・102号住居跡出土土器
- P L 32 第104・106・111・112・113号住居跡出土土器
- P L 33 第113～118号住居跡出土土器
- P L 34 第119・121・122・124号住居跡・遺構外出土土器
- P L 35 調査後全景, 遺構確認状況(西から)
- P L 36 調査後全景(南東から), 第1号住居跡, 第1号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡, 第3号住居跡炉石英礫出土状況
- P L 37 第3号住居跡, 第4号住居跡, 第4号住居跡遺物出土状況, 第5号住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況
- P L 38 第6号住居跡, 第6号住居跡遺物出土状況(1), 第6号住居跡遺物出土状況(2), 第7号住居跡, 第7号住居跡炉石英礫出土状況, 第8号住居跡, 第8号住居跡遺物出土状況
- P L 39 第9号住居跡, 第10号住居跡, 第10号住居跡遺物出土状況, 第10号住居跡炉, 第11号住居跡, 第11号住居跡遺物出土状況
- P L 40 第12号住居跡, 第13号住居跡, 第14号住居跡, 第14号住居跡遺物出土状況, 第15号住居跡, 第15号住居跡遺物出土状況, 第16号住居跡, 第17号住居跡
- P L 41 第18号住居跡, 第19号住居跡, 第19号住居跡遺物出土状況(1), 第19号住居跡遺物出土状況(2), 第19号住居跡遺物出

- 土状況(3)
- P L 42 第20号住居跡, 第20号住居跡遺物出土状況(1), 第20号住居跡遺物出土状況(2), 第21号住居跡, 第21号住居跡遺物出土状況(1), 第21号住居跡遺物出土状況(2), 第21号住居跡遺物出土状況(3)
- P L 43 第22号住居跡, 第22号住居跡遺物出土状況, 第23号住居跡, 第1号土坑, 第4号土坑遺物出土状況, 第5号土坑, 第6号土坑, 第3・7号土坑
- P L 44 第32号土坑, 第2号土器棺墓遺物出土状況, 第3号土器棺墓遺物出土状況, 第4号土器棺墓遺物出土状況, 第5号土器棺墓遺物(土層セクション), 第7号土器棺墓遺物出土状況
- P L 45 第5号土器棺墓(第8号住居跡内), 第5号土器棺墓遺物出土状況
- P L 46 第1号火葬墓遺物出土状況, 第1・2号炭焼窯跡(1), 第1・2号炭焼窯跡(2)
- P L 47 第3号溝, 第3号溝土層断面, 第3号溝遺物出土状況
- P L 48 試掘土層断面, 遺構外遺物出土状況(1), 遺構外遺物出土状況(2)
- P L 49 西原遺跡出土遺物, 土器棺墓出土遺物
- P L 50 第1～6号住居跡出土土器
- P L 51 第4～10・12～16号住居跡出土遺物
- P L 52 第15・17～21号住居跡出土遺物
- P L 53 第21・22号住居跡・4・33号土坑・1号火葬墓出土遺物
- P L 54 第3～5・7号土器棺墓・1～3号溝・2号炭焼窯跡・遺構外出土遺物
- P L 55 出土土器(粃・布目・木葉痕)
- P L 56 旧石器時代調査エリア内出土遺物, 旧石器時代調査エリア外出土遺物(1)
- P L 57 旧石器時代調査エリア外出土石器(2)
- P L 58 出土石器(1)
- P L 59 出土石器(2)
- P L 60 出土土製品・金属製品
- P L 61 第1～3号住居跡出土土器
- P L 62 第3～6号住居跡出土土器
- P L 63 第7～9号住居跡出土土器
- P L 64 第10～13号住居跡出土土器
- P L 65 第14～17号住居跡出土土器
- P L 66 第18・19・21・22号住居跡出土土器
- P L 67 遺構外出土土器

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

茨城県は、筑波研究学園都市における、世界の科学技術都市として集積された発展エネルギーを、広域つくば圏に拡大して地域の振興を図ることを目的とする「グレーターつくば構想」を進めている。

昭和63年4月、土浦市は茨城県と協議し、「土浦北部地区工業開発」を進めていくことを決定した。工事に先立ち、昭和63年5月、土浦市から土浦市教育委員会に「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」照会があり、昭和63年6月、土浦市教育委員会は開発区内の表面観察と確認調査（試掘調査）を進めた結果、埋蔵文化財の存在を確認し、平成元年5月、土浦市（土浦市企画部特定開発課）へ確認結果を回答した。

平成元年9月、茨城県教育委員会は土浦市教育委員会から「土浦北部地区工業開発」の開発主体が、平成元年6月26日付で、土浦市（土浦市企画部特定開発課）から住宅・都市整備公団に変更になった旨連絡を受けた。以後、埋蔵文化財の取り扱いについては、茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団との間で協議を進めることとなった。平成2年1月、住宅・都市整備公団つくば開発局と茨城県教育委員会は、開発区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から協議を重ねた。その結果、一部を現状保存し、原田北遺跡ほか3遺跡については記録保存の措置をとることとなった。

平成2年1月、茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団に、埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。同年2月、住宅・都市整備公団から茨城県教育財団に、原田北遺跡ほか3遺跡の発掘調査の依頼があり、茨城県教育財団は住宅・都市整備公団と発掘調査について協議を行った。その後、茨城県教育財団と住宅・都市整備公団は、原田北遺跡ほか3遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、平成2年4月から原田北遺跡ほか3遺跡の発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

原田北遺跡は、A～G・Z地区に分けて、平成2年4月から平成5年3月にかけて調査を行った。A～D・Z地区については、平成2年度から3年度にかけて調査し、その成果は平成5年に「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡Ⅰ・原田西遺跡」として刊行している。

以下、原田北遺跡E～G地区と西原遺跡について平成4年度に調査を実施した調査経過の概要を記述する。

(平成4年)

4月 8日に事務所を再開し、原田北・西原・原出口遺跡の発掘調査を実施するための諸準備を行った。9日から伐開作業を開始し、原出口遺跡は16日から、西原遺跡は23日から、原田北遺跡は28日から試掘調査に入った。

5月 前月に引き続き、試掘調査を実施した。その結果、原田北遺跡からは、弥生式土器片・土師器片、西原遺跡からは、弥生式土器片・石器が出土し、住居跡や溝と考えられる遺構が確認できた。

6月 西原遺跡は、重機による表土除去作業を11日から、原田北遺跡は25日から開始し、それと並行して遺構確認作業を行った。西原遺跡からは、弥生式土器片や石核・剝片が出土し、住居跡、溝、炭焼窯跡等を確認した。

7月 表土除去作業、遺構確認作業を継続し、8日に重機による表土除去作業を終了した。その後、遺構確認作業を続け、確認状況の写真撮影、遺構配置図作成を行った。

8月 原出口遺跡の遺構調査を優先して行うため、原田北・西原遺跡の調査は一時中断した。

9月 事務所・倉庫を現場近くに移設し、1日から新事務所にて業務を行った。

10月 原田北遺跡E・G地区の遺構調査を、14日から開始した。調査は、住居跡から行い、14軒まで調査を進めた。

11月 中旬からは住居跡と並行して、土坑の調査にもに入った。11日からF地区の調査も開始し3地区に分かれての作業となった。

12月 中旬には、原田北遺跡の調査を終了し、16日に航空写真撮影を行った。確認された遺構は、住居跡34軒(弥生時代26、古墳時代8)、井戸3基、溝4条、土坑66基であった。17日から、西原遺跡の調査に入った。

(平成5年)

1月 5日から調査を再開し、住居跡、炭焼窯跡と進めて行った。第6号住居跡から、十王台式土器が完形で出土した。29日に、これまで調査した遺構・遺物の性格を明確にするために、班内研修会を実施した。

2月 前半、霜による調査の遅れも多少あったがほぼ順調に進み、住居跡20軒の調査を終了した。23日に、住宅・都市整備公団つくば開発局、土浦市教育委員会等への発掘調査報告会を行った。27日に現地説明会を実施し、250名程の見学者があった。

3月 9日に、航空写真撮影を終了し、以後、補足調査を実施した。事務所では、これまでに作成した図面類の点検・修正を行い、それと並行して遺跡内の安全対策を行い、25日に現地の調査を終了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

原田北遺跡は、土浦市大字今泉字原田1984-9ほかに、西原遺跡は土浦市大字今泉字西原1864-1ほかに所在しており、土浦市役所から北へ約7.5kmで土浦市の北端部に位置している。

土浦市は、北は新治郡千代田町、東は同郡出島村に接するとともに、霞ヶ浦の土浦入に面している。南は稲敷郡阿見町、牛久市、西はつくば市、新治郡新治村に接している。

当市の地形は、中央部の霞ヶ浦の土浦入に注ぐ桜川流域の沖積低地と、北東側の新治台地と、南西側の稲敷台地の三つに分けられる。新治台地は、筑波山塊から南東に延びた標高24～27mの洪積台地で、台地上は畑地、山林となっている。稲敷台地は真壁台地から南東に延びた標高24m前後の洪積台地で、台地上は畑地、山林となっている。桜川とその支流による沖積低地は、多くは水田として利用されているが、河口付近は市街地となっている。

遺跡の所在する新治台地は、筑波山塊南麓から東南東の出島村へ連続する台地で、霞ヶ浦に注ぎ込む恋瀬川の支流である天ノ川をはさんで北側と南側に分かれ、それぞれ異なる特徴を持っている。天ノ川の北側の台地は、筑波山塊西側から発する北西から南東方向の水系に刻まれ、多くの支谷が形成されているため台地面の保存状態が良好でない。一方、当遺跡がある南側では、支谷が西北西から東南東方向に発達している。新治台地の段丘崖や開析谷斜面の傾斜は、一般に8°～20°で、30°～40°の急斜面を持つ所もある。

新治台地の地質は、下位より海成砂層及び礫層、常総粘土層または竜ヶ崎砂礫層、関東ローム層となっている。海成層は、成田層と呼ばれる一群の累層で主として砂層からなり、貝化石を含む事が多い。ローム層の直下に常総粘土層が発達しているが、一部分砂礫層が発達している所が見られる。これは、竜ヶ崎砂礫層と呼ばれる新たに陸化した土地に流れ出した延長河川の堆積物である。

原田北・西原遺跡は、新治台地北西端部に位置し、標高24m～27mの平坦な台地で、畑地や山林として利用されている。遺跡の北側には天ノ川の低地があり、水田として耕作されている。遺跡西側は、小支谷が樹枝状に入り込み舌状台地となっている。台地と水田との比高は、9mほどである。

地元の話によると、以前は一部の谷津頭から湧水が流れ出ており、その水量は大変多く、周囲の水田はこの湧水でまかなえられるほどであったということである。当遺跡のある地区の字名が今泉ということからも、このことがうかがわれる。

## 第2節 歴史的環境

霞ヶ浦沿岸地方は、利根川下流域や東京湾沿岸地方とともに多くの遺跡が所在することで知られ、霞ヶ浦西岸に位置する土浦市周辺もその例にもれない。県内で発見された縄文時代の貝塚は350か所ほどであるが、なかでも霞ヶ浦周辺からは集中して発見され、明治12年(1879)に飯島魁・佐々木忠次郎によって調査された陸平貝塚(美浦村)を筆頭に安食平貝塚(出島村)、若海貝塚(玉造町)、椎塚貝塚(江戸崎町)、上高津貝塚(土浦市)等は早くから知られた著名な遺跡である。とりわけ国指定史跡の上高津貝塚は、古くは明治39年(1906)に江見水蔭により調査されたのを初めとし、近年の調査の成果から縄文時代の後・晩期にわたって馬蹄形に形成された、ヤマトシジミを主とする貝塚遺跡であることが判明している。このように、霞ヶ浦周辺は、縄文時代を中心とした遺跡の宝庫である。

旧石器時代の遺跡は、県内において90遺跡ほど報じられている<sup>(6)</sup>。土浦市においては、10か所の遺跡が確認されており、昭和61年に調査された向原遺跡<sup>(7)</sup>では、ナイフ形石器(安山岩)・石核(メノウ)・磨石(硬質砂岩)等が報告されている。

縄文時代になると、土浦市内で146か所の遺跡が確認され、早期では当教育財団が昭和62年に手野町で調査したゴリン山・原ノ内遺跡・真木ノ内遺跡<sup>(8)</sup>があり、原ノ内遺跡からは早期の屋外炉2基と田戸下層式の土器片が出土している。当遺跡の周辺では、根鹿西遺跡<18>で茅山式土器が採集されている<sup>(9)</sup>。前期では前述の向原遺跡があり、黒浜式期の住居跡1軒が調査されている。中期では、住居跡やフラスコ状土坑が多数確認された木田余台遺跡<sup>(10)</sup>があり、当遺跡周辺においても裏山遺跡<52>、中都遺跡<53>において土器の散布が確認されている。後・晩期になると、前述の上高津貝塚のほか、昭和54年に土浦市教育委員会により調査された池の台遺跡<sup>(11)</sup>があり、地点貝塚も伴っている。

弥生時代の遺跡は、当教育財団が平成5年3月に「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」として刊行した原田北<44>・原田西遺跡<45>を初め、烏山遺跡、弁の内遺跡、永国遺跡があり、いずれも弥生時代後期の住居跡が確認されている。その他、穴塚遺跡では、第1号墳の墳丘下で10軒の住居跡を確認している。どの住居跡も隅丸方形のプランで、炉を中央より北あるいは西に持つと思われる<sup>(12)</sup>と報告されているが、不明な点が多い。弥生時代の遺跡は、土浦市全体としては縄文時代の遺跡に比較すると少ないが、天の川流域においては増加している。代表的な遺跡として後期後半の県南地域の土器である「上稲吉式」の標式遺跡である千代田町の上稲吉西原遺跡<35><sup>(13)</sup>がある。上稲吉西原遺跡は、当教育財団により昭和53年に調査された遺跡でA・B地区合わせて10軒の弥生時代の住居跡が調査されている。出土土器は、これまで霞ヶ浦周辺地域で何例か知られている、口縁部に貼瘤、頸部下半に無文帯がみられる土器が主体を占めて



第1図 原田北・西原遺跡周辺遺跡分布図

いた。これらの土器群は既存の土器型式にはなかったもので、しかもその分布も知られるようになってきたことから、「上稲吉式」が設定された。<sup>(14)</sup> 原田北・西原遺跡と上稲吉西原遺跡は近接しており、天の川に沿ってかなりの数の集落が存在したことがうかがえる。この他の天の川流域の遺跡としては、右岸地域に土浦市吹上坪遺跡<16>、根鹿北遺跡<17>、根鹿西遺跡<18>、原出口遺跡<43>、原田西遺跡<45>などがあり、左岸地域に新治村永井寄居遺跡<3>、談所前遺跡<11>、鹿島神社前遺跡<13>、飯島遺跡<29>、泉前遺跡<27>、三島後遺跡<15>等がある。

古墳時代の遺跡としては、土浦市指定の王塚古墳と后塚古墳が霞ヶ浦を望む手野町台地上に存在する。后塚古墳は、全長約55mの前方後方墳で、王塚古墳は、全長約90mの柄鏡形の前方後円墳である。両者ともに外部施設の埴輪が確認されず、埴輪出現以前の様相を持つことで、4世紀末頃のものとしてされている。当遺跡の周辺では、天の川右岸台地上に愛宕山古墳群<48>が存在する。愛宕山古墳群は、2基の前方後円墳と約20基の円墳とから形成されている。<sup>(16)</sup> 盟主墳とされる

表1 原田北・西原遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺跡名	遺跡の時代					図中 番号	遺跡名	遺跡の時代				
		縄文以前	弥生	古墳	奈良平安	中世以降			縄文以前	弥生	古墳	奈良平安	中世以降
1	永井寄居須恵器窯跡				○		29	永井飯島遺跡	○	○	○	○	
2	永井能西寺瓦谷遺跡			○	○		30	ろくろうじ古墳			○		
3	永井寄居遺跡	○	○	○			31	堂原古墳群			○		
4	本郷宮後遺跡		○	○			32	吉兵衛屋敷古墳			○		
5	本郷南前・五量遺跡		○				33	下佐谷遺跡				○	
6	本郷原山古墳群			○			34	中佐谷遺跡			○		
7	本郷下川遺跡			○	○		35	上稲吉西原遺跡		○	○		
8	永井腰当遺跡			○	○		36	中佐谷南遺跡	○		○		
9	永井館跡					○	37	西田古墳群			○		
10	永井馬場後遺跡			○	○		38	原山A遺跡	○				
11	永井談所前遺跡		○	○			39	原山B遺跡	○				
12	永井中妻遺跡	○	○	○			40	御手洗古墳群			○		
13	永井鹿島神社前遺跡		○	○			41	下田原遺跡			○	○	
14	永井柵遺跡			○	○		④2	西原遺跡	○	○			
15	永井三島後遺跡	○	○				43	原出口遺跡		○	○		○
16	吹上坪遺跡			○			④4	原田北遺跡	○	○	○	○	○
17	根鹿北遺跡		○	○			45	原田西遺跡	○	○			
18	根鹿西遺跡	○	○	○			46	八幡神社古墳			○		
19	吹上片蓋古墳群			○			47	愛宕山古墳			○		
20	兵伏塚					○	48	愛宕山古墳群			○		
21	永井笹田西遺跡			○	○		49	今泉古墳			○		
22	永井十三塚遺跡			○	○		50	今泉城跡					○
23	細内遺跡			○	○		51	永井内田遺跡		○	○	○	
24	塙台遺跡			○	○		52	裏山遺跡	○				
25	登戸遺跡			○			53	中都遺跡	○		○		
26	大門遺跡			○			54	西山遺跡	○		○		
27	永井泉前遺跡		○	○	○		55	板谷遺跡			○		
28	永井唐崎遺跡			○	○		56	西後遺跡				○	

愛宕山古墳は全長約55m、高さ約4mで、地主の久家重中氏宅にはかつて盗掘された際に発見したという人物埴輪及び円筒埴輪の破片が保管されている。愛宕山古墳群の東側には、小支谷を挟んで全長約50mの前方後円墳と推定される八幡神社古墳<46>が存在し、本遺跡周辺は古墳時代においても一中心地域となっていたことをうかがわせる。同時代の集落跡としては、大門遺跡<26>、登戸遺跡<25>、吹上坪遺跡<16>、根鹿西遺跡<18>などがあげられる。

奈良・平安時代になると、土浦市域は筑波郡・信太郡・茨城郡・河内郡の四郡にまたがり、今泉地区は茨城郡の佐野郷に所属していたようである。同時代の集落跡として細内遺跡<23>、埴台遺跡<24>、下田原遺跡<41>がある。さらに、北側に位置する新治村の丘陵斜面には、小野須恵窯跡群<sup>(17)</sup>、東城寺須恵窯跡群、永井寄居須恵窯跡群<1>など数群の窯跡が存在し、一帯が大窯業地帯となっていたことが知られる。

中世の城館跡としては、当遺跡と天の川を挟んだ位置に今泉城跡<50>が存在する。今泉城は小田氏に仕えた今泉五郎左衛門の城と伝えられている。永禄2年(1556)頃の築城とされ、大掾氏や佐竹氏の侵攻に備えたものといわれる<sup>(18)</sup>。周辺には永井館<9>、館山、甲山城などの城館跡も存在する。

※文中の< >内の番号は、表1、第4図中の該当番号と同じである。

#### 引用・参考文献

- (1) Iijima and Sasaki 「Okadaira Shell-mounds at Hitachi」 Memoris of the Science Department, University of Tokyo Vol.1 1883 年
- (2)~(5) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1991年
- (6) 茨城県 『茨城県史料=考古資料編=先土器・縄文時代』 1979年
- (7) 土浦市教育委員会 『向原遺跡』 1987年
- (8) 茨城県教育財団 「霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」 『茨城県教育財団文化財調査報告』第43集 1987年
- (9) 土浦市教育委員会 『土浦の遺跡』 1975年
- (10) 土浦市教育委員会 『茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査概報 木田余台』 1987年
- (11) 土浦市教育委員会 『池の台遺跡調査報告』 1982年
- (12) 注9に同じ。
- (13) 茨城県教育財団 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書I」 『茨城県教育財団文化財調査報告』第5集 1980年
- (14) 勝田市史編纂委員会 『勝田市史別編Ⅲ 東中根遺跡』 1982年

- (15) 慶応義塾大学考古学研究会 「茨城県新治郡新治村内遺跡群の調査」 『研究報告』 2  
1982年
- (16) 茨城県教育委員会 『重要遺跡調査報告書Ⅰ』 1982年
- (17) 高井悌三郎 「新治郡小野窯跡」 『日本考古学年報』 5 日本考古学協会 1955年
- (18) 土浦市教育委員会 『図説 土浦の歴史』 1991年



作業風景



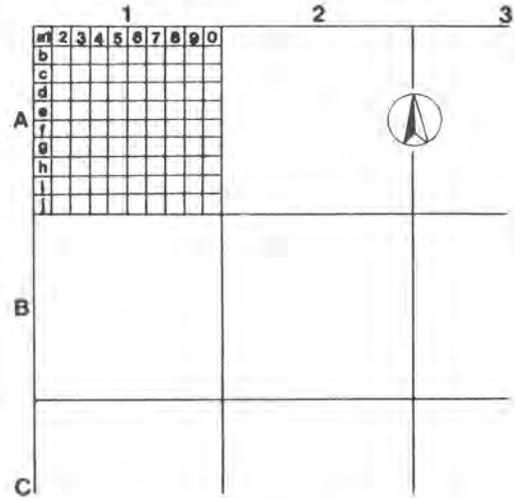
現地説明会

# 第3章 調査方法

## 第1節 地区設定

発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第Ⅸ系座標を用いて区画し、原田北遺跡、西原遺跡ともに、X軸（南北）+15,160m、Y軸（東西）+32,600mの交点を基準とし、この基準点から東西・南北にそれぞれ40m平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区も同様に北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1」「B2b2」のように呼称した。したがって、原田北遺跡E・F・G地区は、C2～H2を南北、C2～C7を東西とする四角形内に位置する。また、西原遺跡は、B12～D12を南北、B12～B15を東西とする四角形内に位置している。



第2図 調査区呼称方法概念図

## 第2節 基本層序の検討

### (1) 原田北遺跡

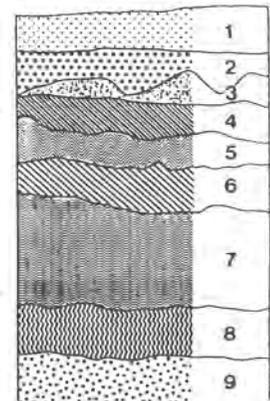
原田北遺跡の中央部、G6c9区にテストピットを設定し、土層を観察した。

第1層は、厚さ20～25cmほどの黒褐色土で、ローム粒子、炭化粒子を微量含み締まりの弱い表土（耕作土）である。第2層は、厚さ15～25cmの暗褐色土で、ローム粒子を少量含み、耕作による攪乱を受けている。第3層は、厚さ5～15cmの褐色土で、ローム粒子を少量含み、ソフトローム層

27.8m—

27.0 —

26.0 —



第3図 原田北遺跡基本土層図

への漸移層である。第4層は、厚さ15～25cmのソフトローム層で、明褐色土である。第5層は、厚さ20cm前後の明褐色土で、ローム粒子を多量にロームブロックを中量含み粘性がやや有り、ソフトローム層とハードローム層を分ける鍵層となるものである。第6層は、厚さ20～30cmの明褐色を呈するハードローム層であるが、第4層より彩度がやや落ちる。第7層は、厚さ50cm前後の明褐色土で、黄橙色の鹿沼バミスを微量含む。第8層は橙色、第9層は黄橙色を呈するハードローム層であり、極めて締まりのある層である。

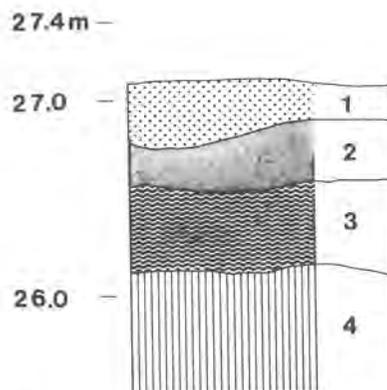
原田北遺跡の遺構の多くは、第4層のソフトローム層を掘り込んで構築されているが、溝ではハードローム層に達する例もみられた。

## (2) 西原遺跡

西原遺跡のテストピットは、D13a8区に設定し、土層を観察した。

第1層は、厚さ18～36cmの暗褐色土で、木根が多い締まりの弱い表土（耕作土）である。第2層は、厚さ24～32cmの暗褐色土で、ローム粒子を中量含みや締まりが有り、ソフトローム層への漸移層である。第3層は、厚さ50cm前後の褐色土で、締まり粘性共に有るソフトローム層である。第4層は、第3層より彩度がやや高い褐色の極めて締まりのあるハードローム層である。

西原遺跡の遺構は、第3層の上面で確認されており、竪穴住居跡は第3層から第4層を掘り込んでいる。



第4図 西原遺跡基本土層図

## 第3節 遺構確認

原田北遺跡、西原遺跡の調査前の状況は平地林や畑地であり、両遺跡の畑地からは、弥生式土器片が採集されていることから、弥生時代を中心とした遺構の存在が予想された。

両遺跡の遺構確認は、次のような方法で実施した。まず、調査区域全域に小調査区を設定し、調査面積の16分の1、次いで8分の1の割合で試掘調査を行い、遺構の確認を試みた。その結果、弥生式土器片や土師器の破片が出土し、住居跡や土坑と思われる遺構が確認された。表土の厚さは20～45cmであることも判明した。この試掘調査の結果をふまえ、調査区域全面の重機による表土除去を実施した。その後、遺構確認作業を行い、原田北遺跡においては、住居跡34軒、土坑66基、溝4条、井戸3基などを確認した。西原遺跡では、住居跡23軒、土坑33基、溝3条、掘立柱建物跡1棟、炭焼窯跡2基、火葬墓1基、土器棺墓6基などを確認した。

## 第4節 遺構調査

原田北遺跡、西原遺跡における遺構調査は、次の方法で行った。

住居跡の調査は、平面プラン確認後、土層観察用ベルト2本を遺構の中央部で直交するように設定して四分割し、それぞれを掘り込む「四分割法」で実施した。それぞれの地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。重複している場合には、新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。

土坑の調査は、長径方向で二分割して掘り込む「二分割法」で実施した。溝の調査は、長さに応じて数か所の土層観察用ベルトを設けて掘り込みを実施した。

土層については、色相、含有物の多少・大小、粘性、締まり具合等を観察して、分類の基準とした。色相については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社発行）を使用した。

遺物は、原位置を保って遺構を掘り下げた後、住居跡、土坑、溝等の名称と出土地区の名称、取り上げ番号、レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で行い、土層断面や遺構断面の実測は、標高をもとに、水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は20分の1を基本としたが、炉や部分的な微細図については、10分の1の縮尺で作成した。

調査の記録は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては、野帳及び調査記録カードに記録し、さらに遺構カードに整理した。遺構番号は、調査順に付していった。



掘り込み作業風景

## 第4章 遺構・遺物の記載方法

### 第1節 遺構の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

#### (1) 使用記号

名称	住居跡	土坑	溝	炭焼窯	ピット	土器	土製品	石器・石製品	金属製品	拓本土器
記号	S I	S K	S D	S Y	P 1~	P	D P	Q	M	T P

#### (2) 遺構・遺物の実測図中の表示



● 弥生式土器    ○ 土師器    □ 石器・石製品    ★ 土製品    △ 金属製品

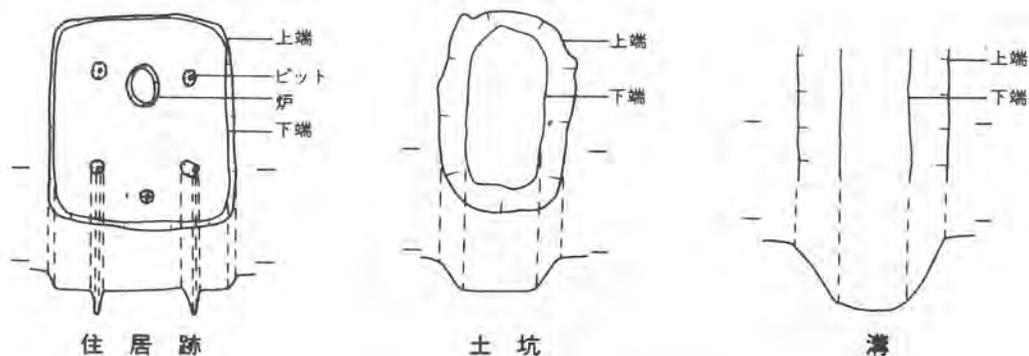
#### (3) 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別毎、調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

#### (4) 土層の分類

土層観察における色調の判定は、図版実測図中に記載した。攪乱層については「K」と表記した。

#### (5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



① 各遺構の実測図は、80分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

② 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また、同一図中で同一標高の場合に限り、一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。

③ 本文中の記載について

- 「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。
- 「重複関係」は、他の遺構との切り合い関係を記した。
- 「平面形」は、現存している形状の上端部で判断し、方形、長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。  
 方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの）、長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）
- 「規模」は、平面形の上端部の計測値であり、長軸（径）、短軸（径）をm単位で表記した。
- 「主軸方向」は、炉をとおる線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。  
 （例 N-10°-E, N-10°-W）なお、〔 〕を付したものは推定である。
- 「壁」は、床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直、65°～80°を外傾、65°未満を緩斜、さらに90°以上を内傾とした。壁高は、残存壁高の計測値である。
- 「壁溝」は、その形状や規模を表記した。規模は床面からの計測値とした。
- 「床」は、凹凸、平坦等の様子や床質等を記述した。
- 「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられる総数を記した。ピットをPで表示し、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。
- 「貯蔵穴」は、その形状を記述し、数字は長径、短径、深さを示した。
- 「覆土」は、堆積の状況を記した。
- 「遺物」は、主な遺物の種類や出土位置、出土状態等を記録した。
- 「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

(6) 表の見方

① 住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸)	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	壁高	床面	内部施設					炉	覆土	出土遺物	備考	
							壁溝	支柱穴	貯蔵穴	ピット	入口					

- ピット数は総数を記し、その中で、支柱穴・入口施設ピットと思われるものを、それぞれの覧に記した。調査エリアの都合により、すでに分割調査済のピットについては、( )で示した。
- 壁溝は、その有無を記した。
- 炉及び貯蔵穴は、その数を記した。
- 出土遺物は、遺物の種類を記した。

○「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」と記した。

○備考は、重複関係等について記した。

② 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径(m)×短径(m)	深さ(cm)						

○平面形は、掘り込み上面の形状を記した。

円形(短径:長径=1:1.1未満のもの) 楕円形(短径:長径=1:1.1以上のもの)

○深さは、遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値(cm)を表した。

○壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。

65°未満の傾き

65°~85°の傾き

81°~90°の傾き

緩斜

外傾

垂直

## 第2節 遺物の記載方法

### (1) 遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については、実測図、拓影図、写真等により掲載した。

- ① 土器の実測図は、四分画法を用い原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- ② 土器拓影図は、右側に断面を図示した。
- ③ 遺物は、原則として実測図をトレースしたものを3分の1の縮尺で掲載した。しかし、種類や大きさにより、異なる場合もある。
- ④ 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

### (2) 表の見方

#### ① 出土土器観察表

##### ア. 弥生式土器

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考

##### イ. 土師器

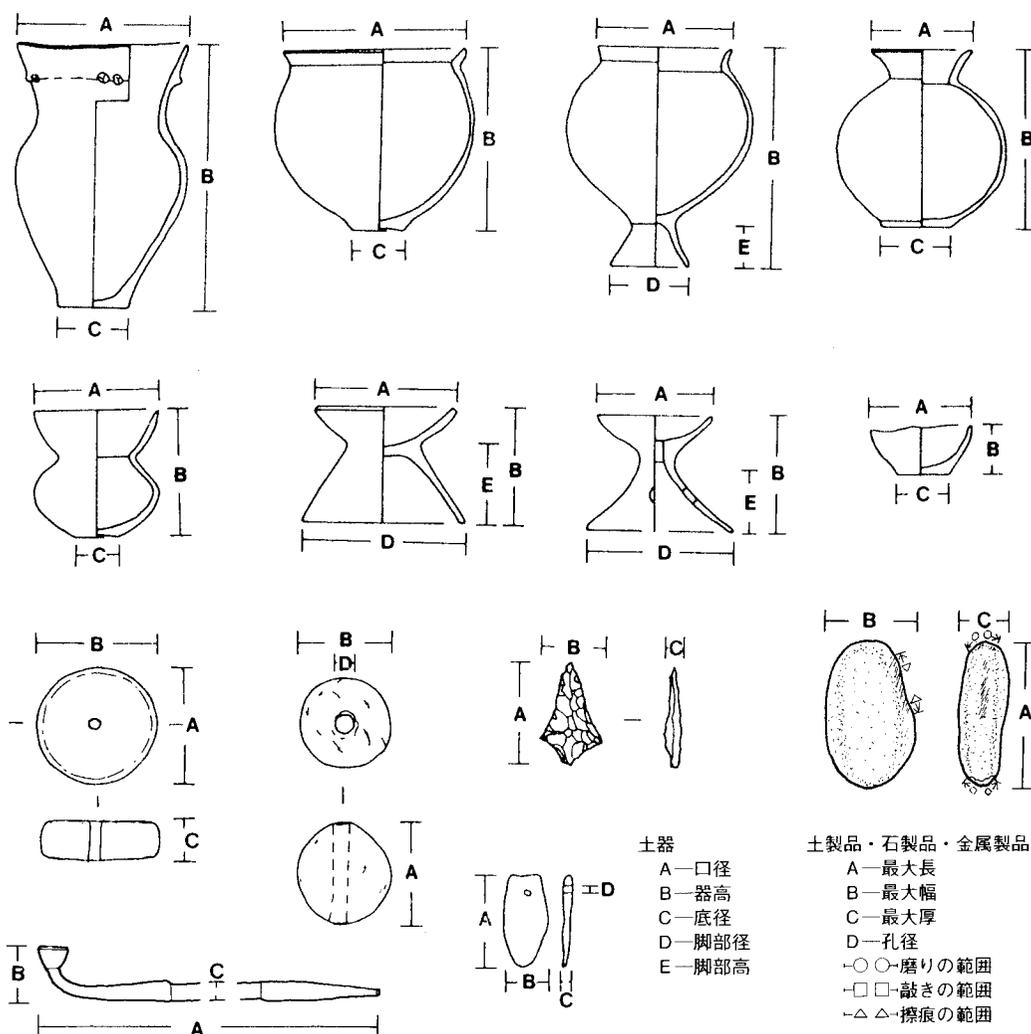
図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考

○計測値は、A—口径 B—器高 C—底径 D—脚部径 E—脚部高 単位はcmである。

なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

○胎土・色調・焼成の欄は、上から胎土、色調及び焼成の順で記した。色調については、前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については、良好、普通及び不良に分類し、焼き締まって硬いものは良好、焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。

○備考の欄は、土器の現存率、実測（P）番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。



② 土製品観察表

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					

○計測値の欄で、( )を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

○備考の欄は、実測(DP)番号、遺物の特記すべき内容について記載した。

③ 石器・石製品観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

○計測値の欄で、( )を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

○備考の欄は、実測(Q)番号、遺物の特記すべき内容について記載した。

④ 金属製品一覧表

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	

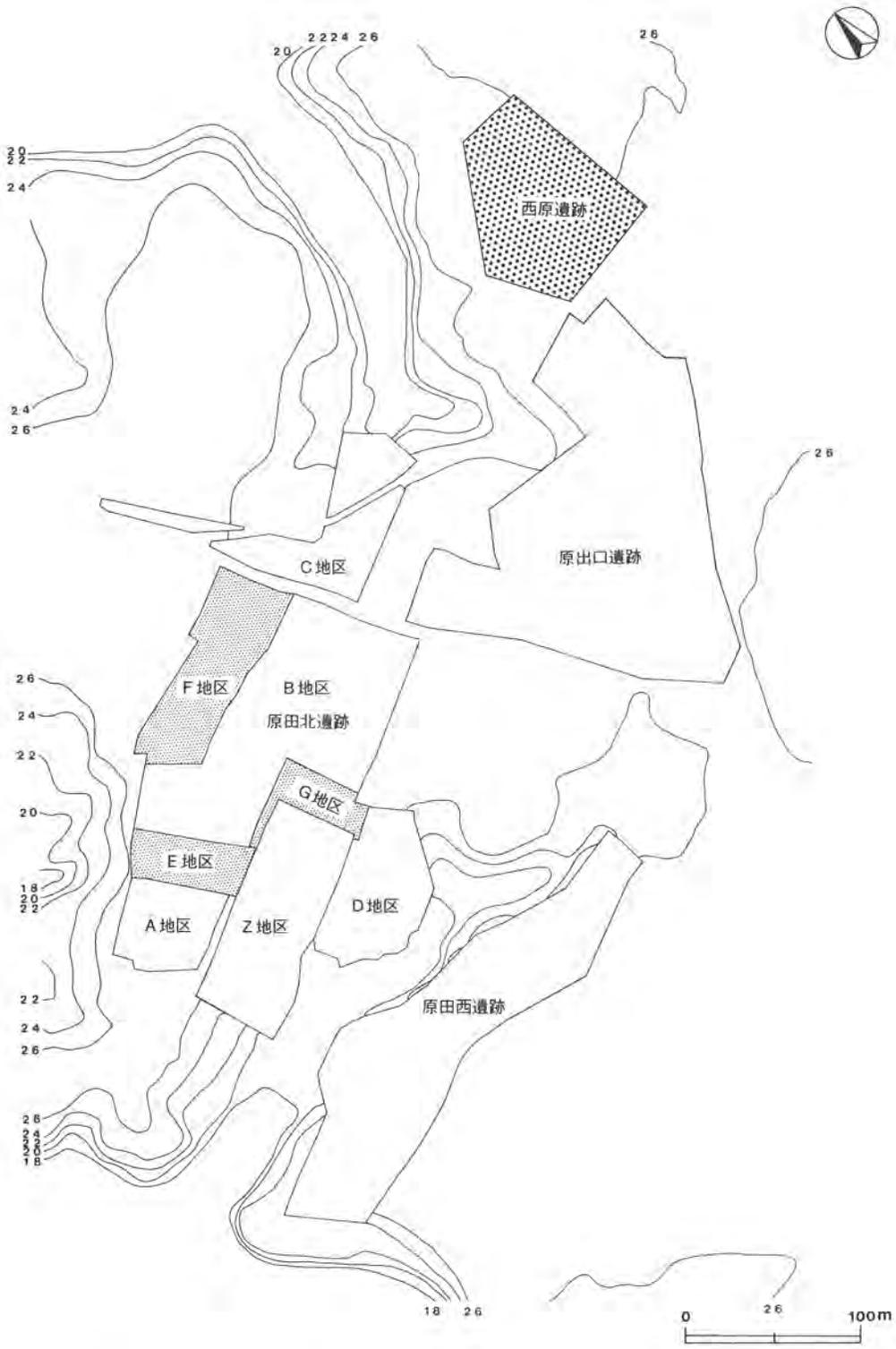
○計測値の欄で、( )を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

○備考の欄は、実測(M)番号、出土位置及び遺物の特記すべき内容について記載した。

⑤ 古銭一覧表

図版番号	鋳名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	出土地点	備考

○備考の欄は、実測(M)番号、遺物の特記すべき内容について記載した。



第5図 原田北・西原遺跡調査区



## 第5章 原田北遺跡Ⅱ

### 第1節 遺跡の概要

原田北遺跡が所在する新治台地北西部は、土浦市の北端部に位置し標高23～27mの平坦な台地で、畑地や山林として利用されている。当遺跡の北側には天の川の低地があり、その低地は水田として利用されている。当遺跡の西側からは小支谷が樹枝状に入り込み、周辺は複雑な地形となっている。当遺跡には弥生式土器片や土師器片が散布しており、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡として確認されていた。

平成4年度の調査区は3地区に分かれており、E地区は遺跡の西部寄りに、F地区は北部に、G地区は中央部から南部に位置する。調査面積は、E地区1,377㎡、F地区5,110㎡、G地区959㎡である。

今回の調査によって確認された遺構は、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡34軒、土坑66基、溝4条、井戸3基である。

縄文時代の遺構はみられなかったが、前期の栗島台式、十三菩提式、中期の加曾利EⅢ式、後期の堀之内Ⅰ式などの土器片が数点出土している。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡26軒で、調査区全域にみられる。時期はすべて後期後半のもので、形状は隅丸長方形や隅丸方形のものが多い。

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡が遺跡西部のE地区とG地区から8軒確認された。いずれも中期(和泉式期)のものであり、形状は方形で、床面積64㎡以上のものが3軒あり、最大のものは約112㎡である。

遺物は遺物収納箱で52箱ほど出土している。縄文時代のものとしては、土器の他に打製石斧・石鎌などが確認面や覆土中から出土している。弥生時代・古墳時代の住居跡からは、壺・甕などの弥生式土器、及び壺・甕・高坏・埴などの土師器が比較的多量に出土している。その他、紡錘車・土玉等の土製品、磨製石斧・石鎌・穂摘具などの石器、石製模造品・砥石などの石製品なども出土している。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1 竪穴住居跡

当遺跡からは34軒(弥生時代後期26軒、古墳時代中期8軒)の竪穴住居跡が確認されている。弥生時代の住居跡は、小支谷に囲まれた台地全域にみられ、古墳時代の住居跡は、遺跡西部の台地中央部に集中してみられる。これらの住居跡は、重複し合っているものは3か所と少なく、遺

構の遺存状態は比較的良好である。以下、確認された住居跡の特徴や主な出土遺物について時期別に記載していくことにする。

(1) 弥生時代の竪穴住居跡

第27号住居跡（第6図）

位置 G地区南部，H5a8区を中心に確認されている。住居跡の南東部は調査区外で平成3年度にD地区として調査済みである。

規模と平面形 長軸6.40m，短軸5.12mの隅丸長方形である。

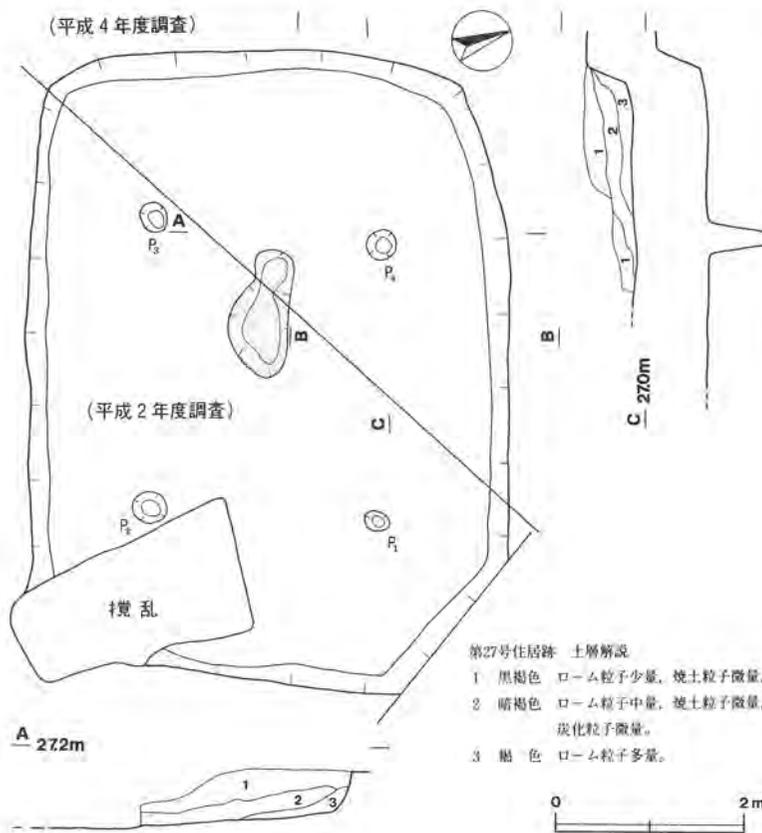
主軸方向 N-67°-W

壁 壁高47～55cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部はよく踏み固められている。

ピット 4か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径25～35cmの円形で深さ52～61cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。

炉 長軸線上の中央からやや北西寄りにあり，平面形は長径136cm，短径62cmの不定形で，床を



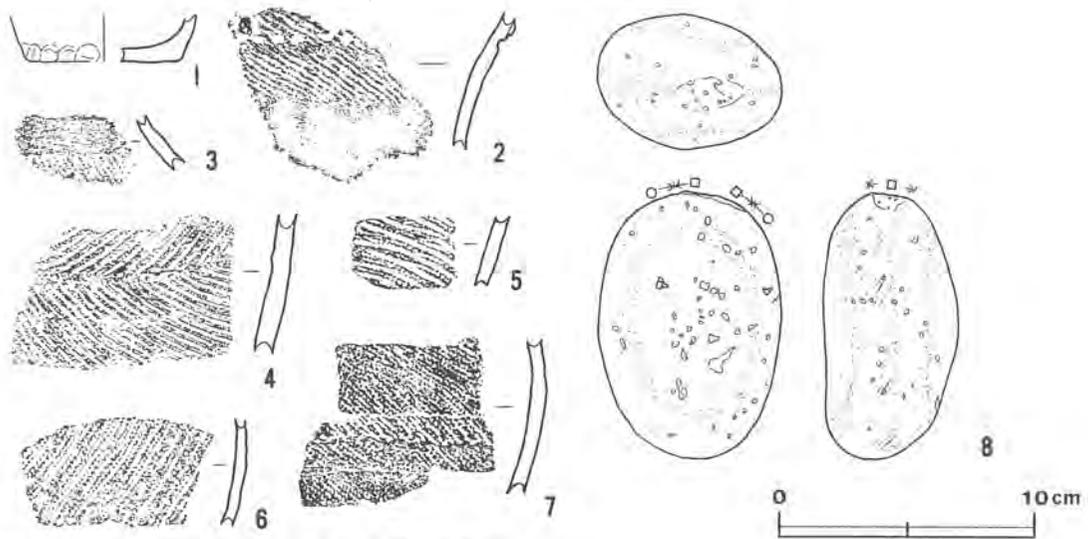
4 cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 南東部は，平成2年度の調査で既に除去されている。壁際には，ローム粒子を多量含む褐色土があり，ここから弥生式土器片が多く出土している。広がりや出土レベルから判断すると，北西コーナー側から投げ込まれたと考えられる。その上に暗褐色土が中央部床面まで厚く堆積している。

第6図 第27号住居跡実測図

遺物 北西壁付近の覆土下層から、弥生式土器片が多数出土している。また、覆土中層からは土師器片が数点出土している。1は、弥生式土器広口壺の底部で覆土下層から出土している。8の磨石は北西壁寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第7図 第27号住居跡出土遺物実測・拓影図

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	壺 弥生式土器	B(1.9) C(6.0)	底部片。平底で、立ち上がり部に指頭圧痕による張り出しを持つ。胴部は底部から内彎して立ち上がる。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P15 5%

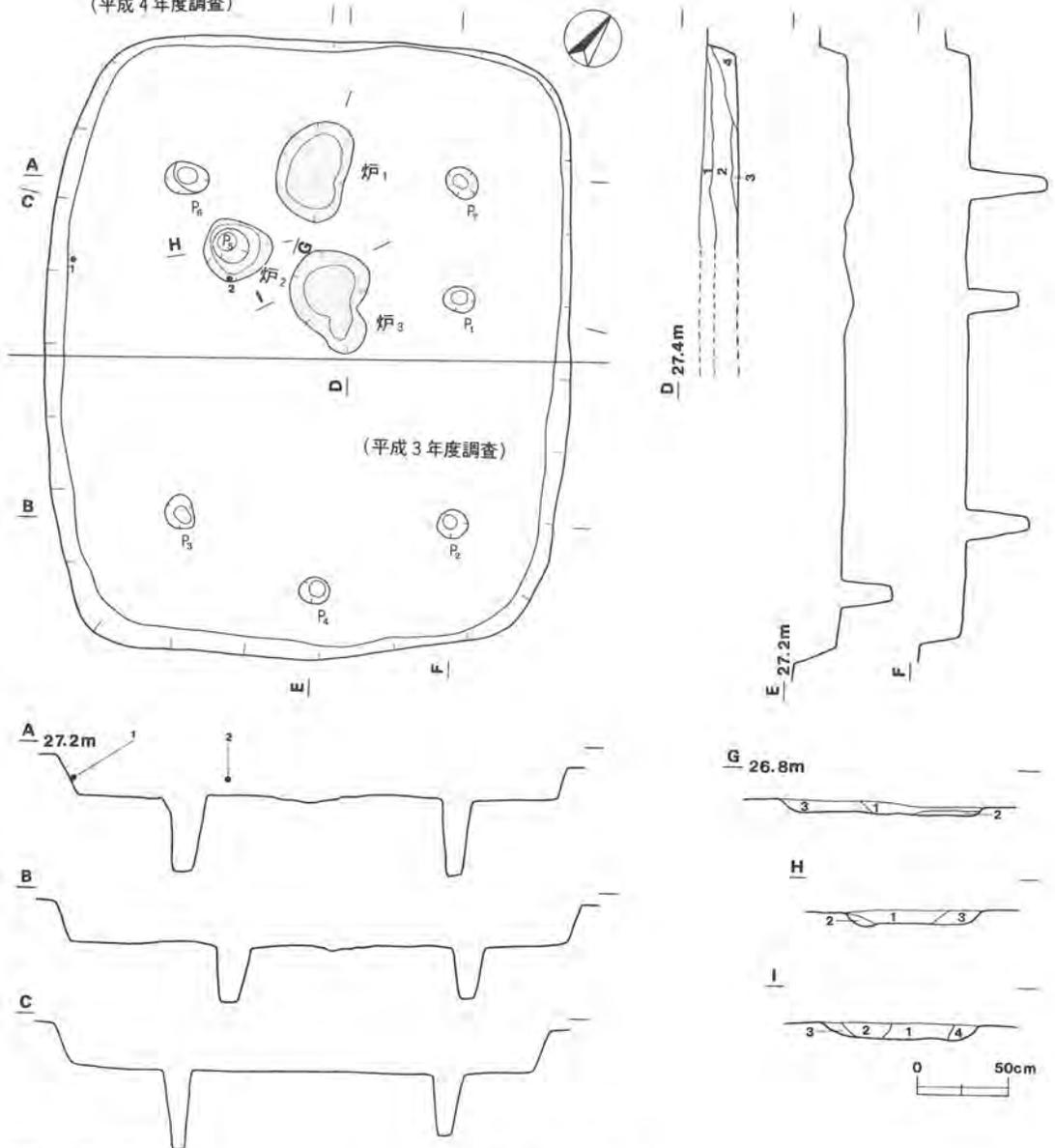
第7図2～7は、第27号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は頸部から口縁部にかけての破片で、頸部下半を無文とする。口縁部下端には、棒状工具による刺突文が施され、瘤が貼られている。3は胴部から頸部にかけての破片で、頸部を無文としている。4～7は胴部片で、4・5は附加条1種（附加2条）、6は附加条2種（附加1条）、7は単節縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第7図8	磨石	10.5	7.1	5.3	566.4	砂岩	覆土下層	Q3 敲石兼用

第76号住居跡（第8図）

位置 B地区北部、E5c<sub>8</sub>区を中心に確認されている。南側2分の1は、平成3年度に調査済みで

(平成4年度調査)



第76号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック極少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子極少量。
- 4 黒褐色 ローム粒子少量。

第76号住居跡 炉1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・焼土ブロック少量。

第76号住居跡 炉2土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量。

第76号住居跡 炉3土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子極少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子極少量。

第8図 第76号住居跡実測図

ある。

規模と平面形 長軸6.80m、短軸5.75mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高42~52cmで、外傾して立ち上がっている。

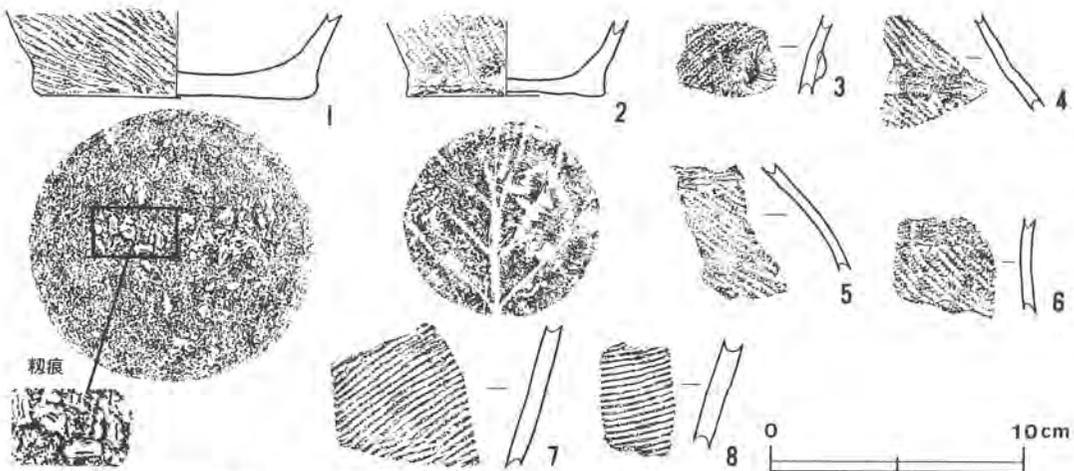
床 平坦で、炉周辺はよく踏み固められている。

ピット 7か所。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、径32~34cmの円形で深さ59~72cmである。P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>は、長径40~46cm、短径32~36cm不整楕円形で、深さ64~70cmである。P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は、径34~37cmの円形で深さ60~75cmである。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は、主柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P<sub>4</sub>は、出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>5</sub>は、炉<sub>2</sub>の直下に位置している。

炉 3か所。炉<sub>1</sub>は、中央から北西寄りにあり、平面形は長径112cm、短径74cmの楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。炉<sub>2</sub>は、炉<sub>1</sub>の南側にあり、P<sub>5</sub>の直上に位置する。P<sub>5</sub>の柱穴を埋めた後に炉を設置したと思われる。平面形は、長径74cm、短径68cmのやや楕円形で、床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。炉<sub>3</sub>は、前年度の調査で南側に確認されたもので、今回の調査で炉全体を捉える事ができたため、改めて報告する。炉<sub>1</sub>の南西部にあり、平面形は長径118cm、短径58cmの不整楕円形で、床を9cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく熱を受け赤変硬化している。炉<sub>3</sub>確認時では、炉上面の一部にロームが張ってある状態で、炉<sub>1</sub>・炉<sub>2</sub>より古いと思われる。

覆土 壁際は、焼土粒子をわずかに含む褐色土で、更にも上から床面に掛けてローム中ブロックをわずかに含む褐色土が堆積している。遺物は、覆土下層である第4層からの出土が多い。

遺物 1は、弥生式土器広口壺の底部で、南西壁際中央の覆土下層から斜位の状態で出土している。底面に靱痕がある。2は広口壺の底部で、北コーナーの壁近くの覆土下層から倒位の状態で



第9図 第76号住居跡出土遺物実測・拓影図

出土している。1・2は、どちらも壁際の床面近くから出土している。

所見 炉<sub>3</sub>には、部分的ではあるがロームを貼っている所が確認できた。また、炉<sub>2</sub>がP<sub>5</sub>を廃棄した跡に作られていることから、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>を支柱穴とし炉<sub>3</sub>を使用した住居の時期があったと思われる。その後、住居拡張のためP<sub>5</sub>を抜いてP<sub>6</sub>を作り、炉<sub>3</sub>にロームを貼って床とし、新たに炉<sub>1</sub>・炉<sub>2</sub>を作ったと考えられる。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第76号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	壺 弥生式土器	B(3.4) C 11.2	底部片。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に数個体の稜痕有り。	砂粒,石英,長石 雲母 橙色 普通	P38 10%
2	壺 弥生式土器	B(3.0) C 7.8	底部片。平底でわずかに張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕有り。	砂粒,石英,長石 雲母 明褐色 普通	P39 10%

第9図3～8は、第76号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は口縁部片で附加条1種(附加2条)の縄文と竹管状工具による刺突文が施され、さらに瘤が貼られている。4～6は胴部から頸部にかけての破片である。4は胴部と頸部を無文帯で区画している。5・6は頸部を無文とし、それ以外には縄文が施されている。縄文原体は、4が附加条1種(附加2条)、5・6が単節である。7・8は胴部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

#### 第96号住居跡(第10図)

位置 E地区南東部、F4j<sub>1</sub>区を中心に確認されている。北東側3分の1は、平成3年度に調査済みである。

規模と平面形 長軸5.90m、短軸4.58mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-33°-W

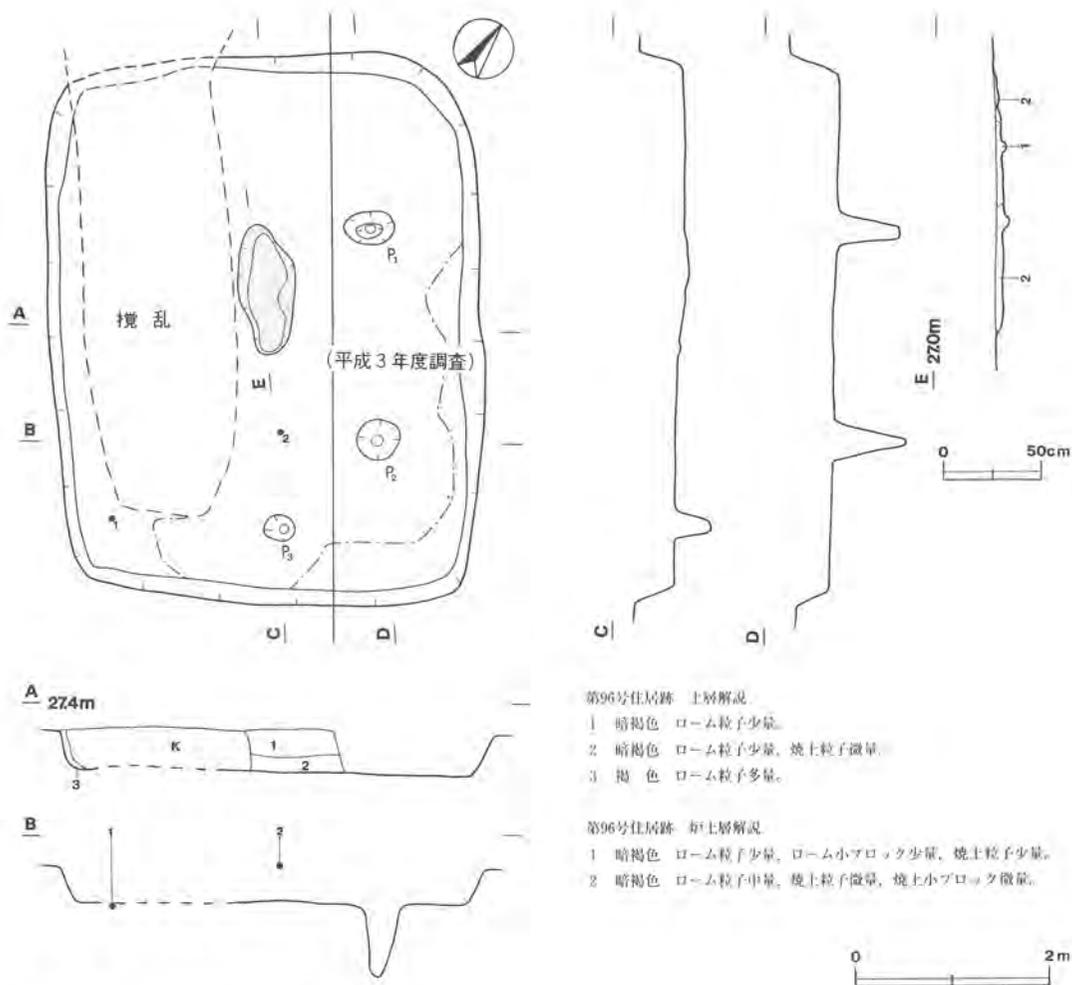
壁 壁高38～52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 炉の西側は、攪乱され確認できない。現存部は、ほぼ平坦でよく踏み固められている。

ピット 3か所。P<sub>1</sub>は、長径54cm、短径38cmの楕円形で深さ66cmである。P<sub>2</sub>は、径44cmの円形で深さ78cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、支柱穴である。P<sub>3</sub>は、径33cmのほぼ円形で深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 ほぼ中央にあり、平面形は長径120cm、短径62cmの楕円形で床面を4cm掘り込んでいる。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 攪乱がひどく、残存している覆土はごくわずかであるが5層まで確認できた。壁際は褐色土が堆積している。第1層は焼土粒子をわずかに含んでいる。遺物は、覆土下層である第3層と



第10図 第96号住居跡実測図

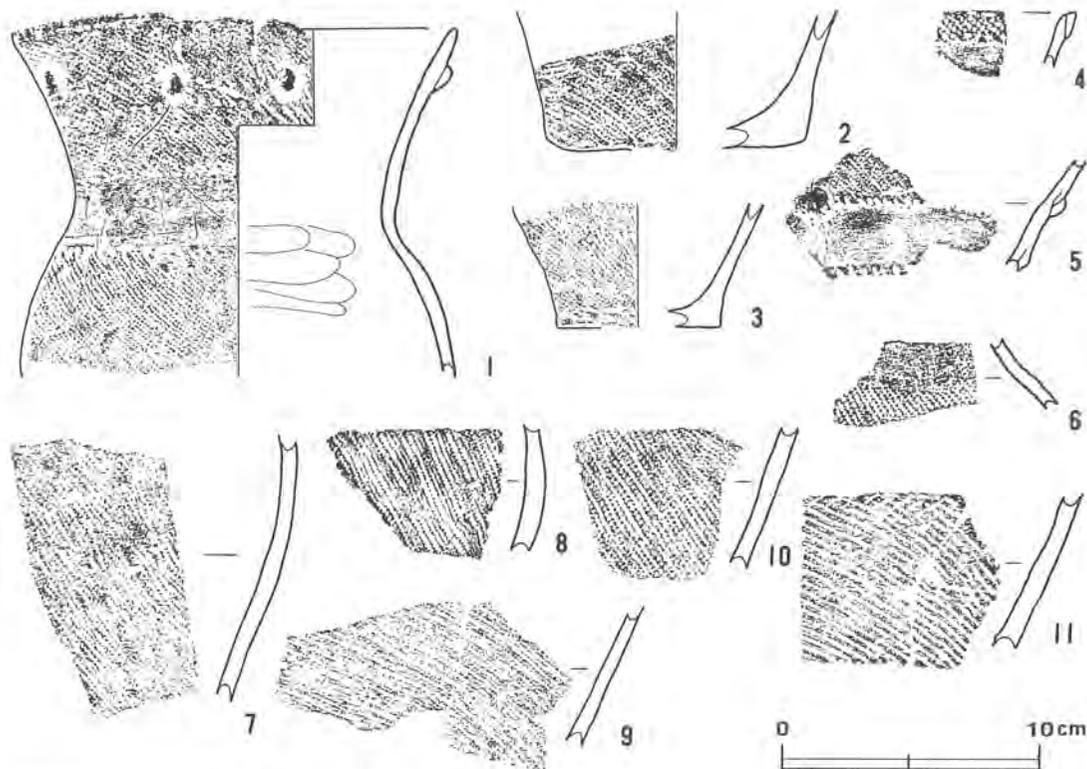
第96号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第11図	広口壺 弥生式土器	A 17.5 B (13.9)	胴上半部。胴部は内傾して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反している。最大径を口縁に持つ。縄文施文の単口縁で頸部を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口唇部にも縄文が施され、口縁下端には等間隔に計10個の瘤が貼られ、さらに縄文原体による2列の押圧が施されている。内面はヘラケズリ後横位にナデられている。	砂粒、石英、長石 雲母 橙色 普通	P40 50% 内・外面炭化物付着
2	壺 弥生式土器	B (5.5) C (10.4)	胴下半部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P41 5%
3	壺 弥生式土器	B (4.9) C (6.4)	胴下半部片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P42 5%

第4層の境界付近から多く出土している。

遺物 南東壁寄りに多く出土している。1は弥生式土器広口壺の口縁部で、南コーナー付近の床面直上から正位で出土した。2は壺の胴部下半から底部で、覆土第2層の上面から出土している。3は覆土下層から出土している。

所見 南西壁寄りには大きく攪乱されており、さらに2か所あると思われる支柱穴は確認できなかった。遺物出土地点は、炉周辺と南コーナーに限られてしまう。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第11図 第96号住居跡出土遺物実測・拓影図

第11図4～11は、第96号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4は縄文施文の複合口縁である。5は2段構成の複合口縁で、各段の下端には棒状工具による刺突文が施されている。口縁1段目には、さらに附加条1種（附加2条）の縄文と瘤が施されている。6は、頸部から胴部にかけての破片で、頸部は無文帯とし、胴部には単節縄文が施されている。7～11は胴部片で、7・8は単節、9は附加条1種（附加1条）、10・11は附加条1種（附加2条）の縄文がそれぞれ施されている。

#### 第97号住居跡（第12図）

位置 E地区南端部、G3d<sub>9</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 緩やかな傾斜地の為、南西方向に削平され全体を捉える事はできないが、柱穴から判断すると長軸〔5.30〕m、短軸〔3.70〕mの隅丸長方形と思われる。

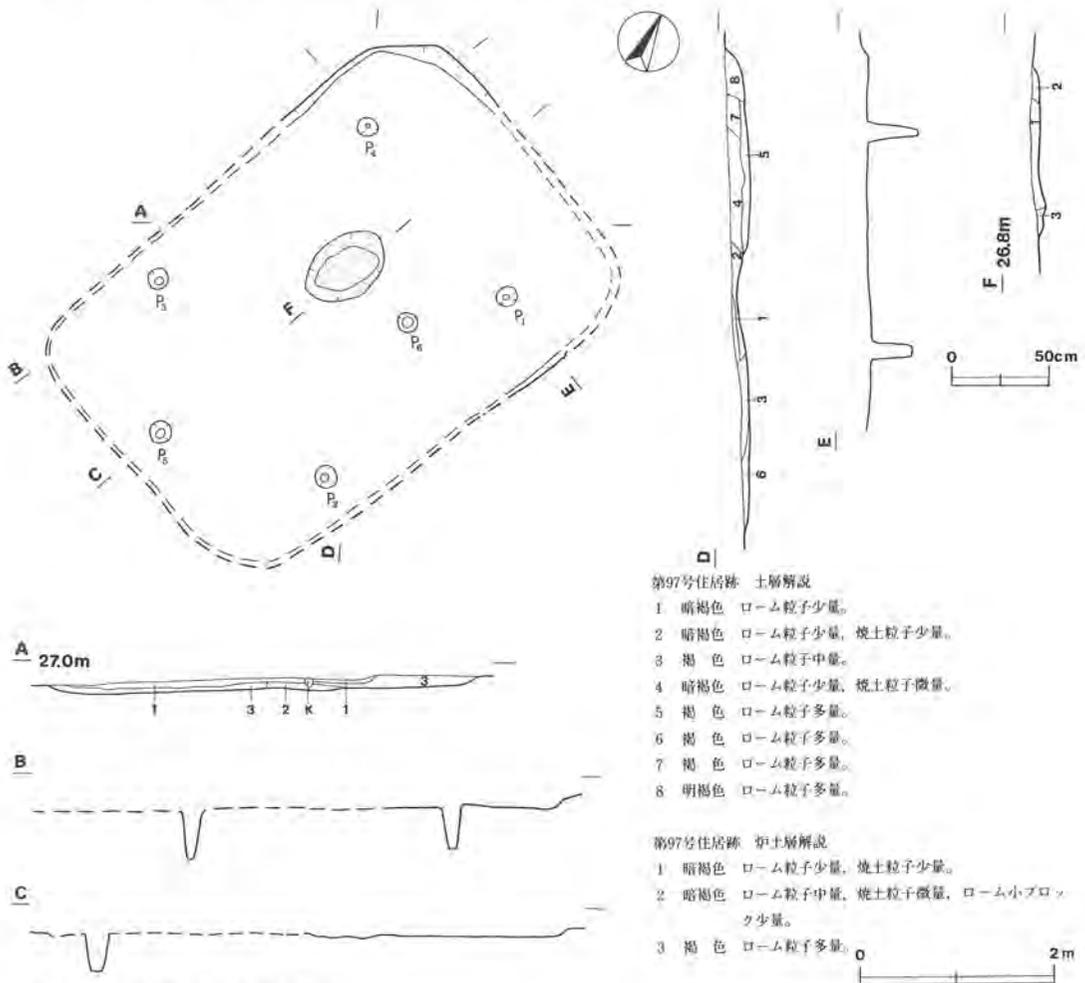
長軸方向 N-21°-E

壁 現存している北西側の隅は、壁高10cmで外傾して立ち上がっている。斜面部であり、更に削平を受けているため壁のほとんどが確認できない。

床 凹凸があり、硬化面がなくあまり踏み固められていない。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径22~27cmの円形で深さ50~62cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形である。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は、径22~23cmの円形で深さ38~39cmである。P<sub>5</sub>は、出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>は、補助柱穴と思われる。

炉 中央からやや北東寄りにあり、平面形は長径96cm、短径64cmの楕円形で床面を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

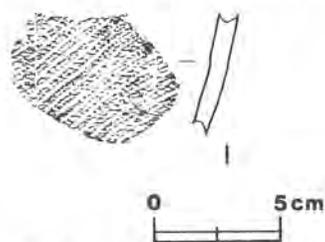


第12図 第97号住居跡実測図

上 本跡の上を農道が通っていたため、覆土は固く締まっている。削平により覆土の厚さは624cmと浅く、北側では一部攪乱が入っている。第2・4層は、焼土粒子を少量含む暗褐色土であるが、下層は褐色土が広がっている。

遺物 炉の北西寄りの覆土中から、弥生式土器・土師器細片が僅かに出土している。弥生式土器片は、壺の胴部片と思われる。

所見 出土遺物が極めて少なく、なおかつ床面上のものが無いので時期決定は困難であるが、覆土中の遺物と住居跡の形態から弥生時代後期と思われる。



第13図1は、第97号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は附加条1種（附加2条）の縄文施文の胴部片である。

第13図 第97号住居跡出土遺物拓影図

#### 第99号住居跡（第14図）

位置 G地区のほぼ中央部、G5c4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.45m、短軸3.40mの隅丸方形である。

主軸方向 N-54°-W

壁 壁高25-33cmで、外傾して立ち上がっている。

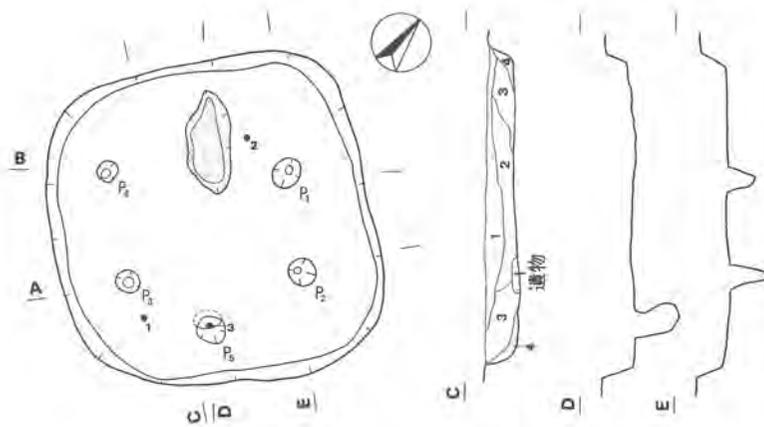
床 平坦で、炉周辺は踏み固められている。炉周辺には、炭化粒子が散在している。

ピット 5か所。P1-P4は、径22-30cmの円形で深さ31-41cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は、長方形である。P5は、径30cmの円形で深さ48cmの出入口施設に伴うピットと思われ、南東壁寄りに約26°傾斜している。

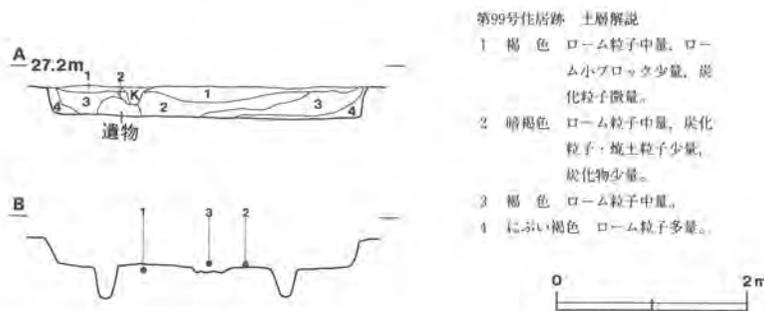
炉 中央から北西寄りにあり、平面形は長径112cm、短径46cmの不整楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。北西壁近くまでのびており、壁との間は約20cmである。炉床は、南東部が赤変硬化している。

覆土 各壁際にはにぶい褐色土が堆積している。中央部下層は、炭化粒子、焼土粒子を少量含む暗褐色土で、そこから弥生式土器片や土師器片が出土している。上層は、ローム小ブロック、炭化粒子を含む褐色土で、南コーナー付近に一部攪乱がある。

遺物 P5周辺に多く出土している。1はほぼ完形の弥生式土器広口壺で、南コーナーの床面直上から出土している。出土状態は斜位で、底部が床面直上で口縁部は第2層に接している。3は壺の底部で、第2層から斜位で出土している。2は完形の広口壺で、ほぼ床面で炉の北側に横位で



出土した。  
 所見 本跡は、遺跡内の同時期の住居跡のなかでは小型であり、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第99号住居跡 土層解説

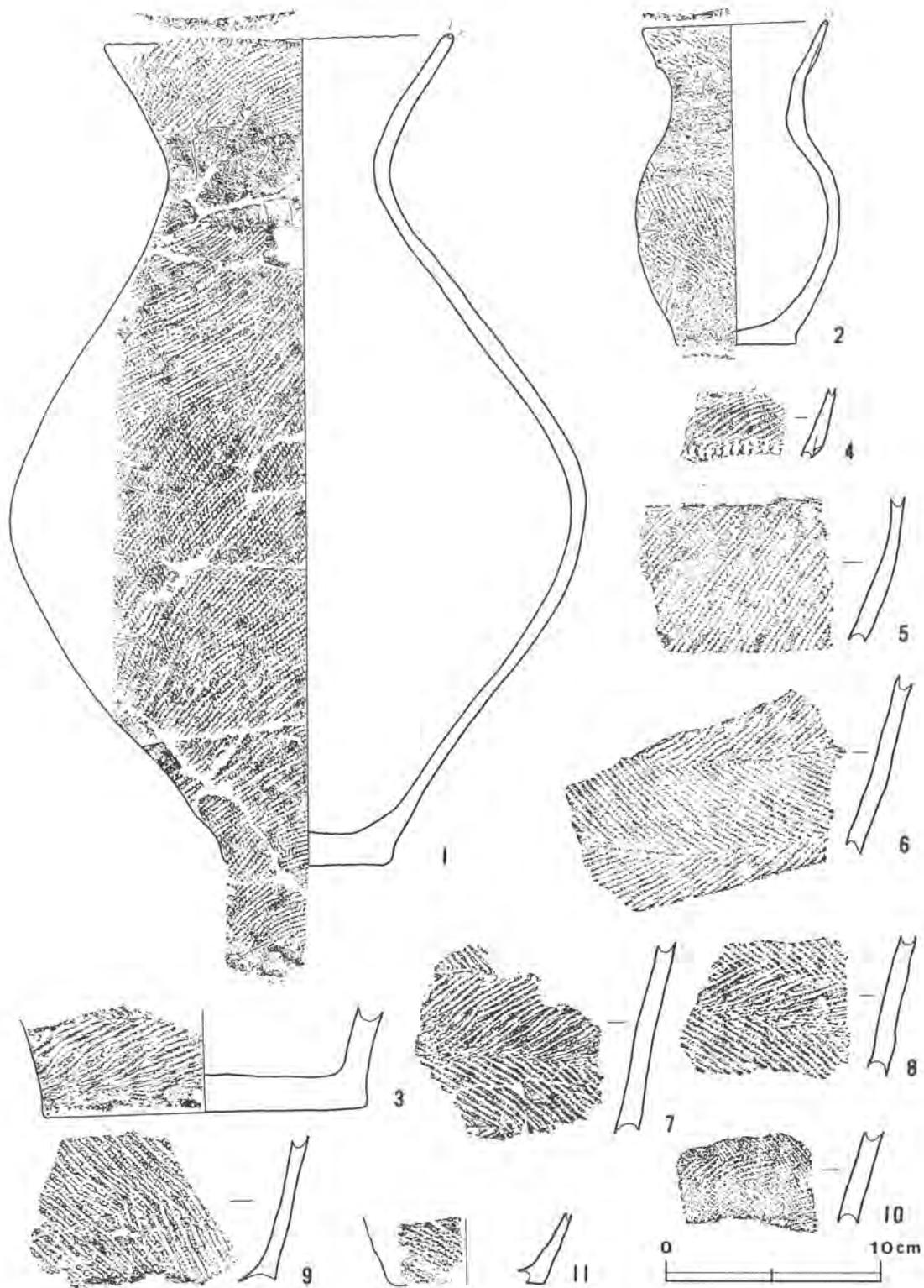
- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小フロッタ少量、炭化粒子微量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量、炭化物少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量。
- 4 にぶい褐色 ローム粒子多量。

第14図 第99号住居跡実測図

第99号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	壺 弥生式土器	A 16.3 B 39.4 C 7.6	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。頸部から口縁部は外反する。頸部下半を無文とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母 にぶい黄橙色 普通	P 65 95% 内面炭化物附着
2	壺 弥生式土器	A 8.8 B 15.4 C 5.8	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反する。最大径を胴部中位に持つ。縄文施文の複合口縁で、頸部を無文とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口唇部は縄文が施文されている。羽状構成をとらない。	砂粒、石英、長石 雲母 にぶい黄橙色 普通	P 66 100%
3	壺 弥生式土器	B(4.9) C 15.0	底部片。平底で、胴部は底部から外傾して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母 橙色 普通	P 67 5%

第15図4～11は、第99号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4は附加条1種（附加2条）の縄文施文の複合口縁で、口唇部は欠損している。口縁部下端には、縄文原体による押圧が施されている。5～10は胴部片で、5は附加条1種（附加1条）、6～10は附加条1種（附加2条）の縄文が施され、6・7・8・10は羽状構成をとる。11の底部片は、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。



第15図 第99号住居跡出土遺物実測・拓影図

第100号住居跡（第16図）

位置 E地区西端部，F2d<sub>9</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.01m，短軸4.88mの方形である。

主軸方向 N-11°-W

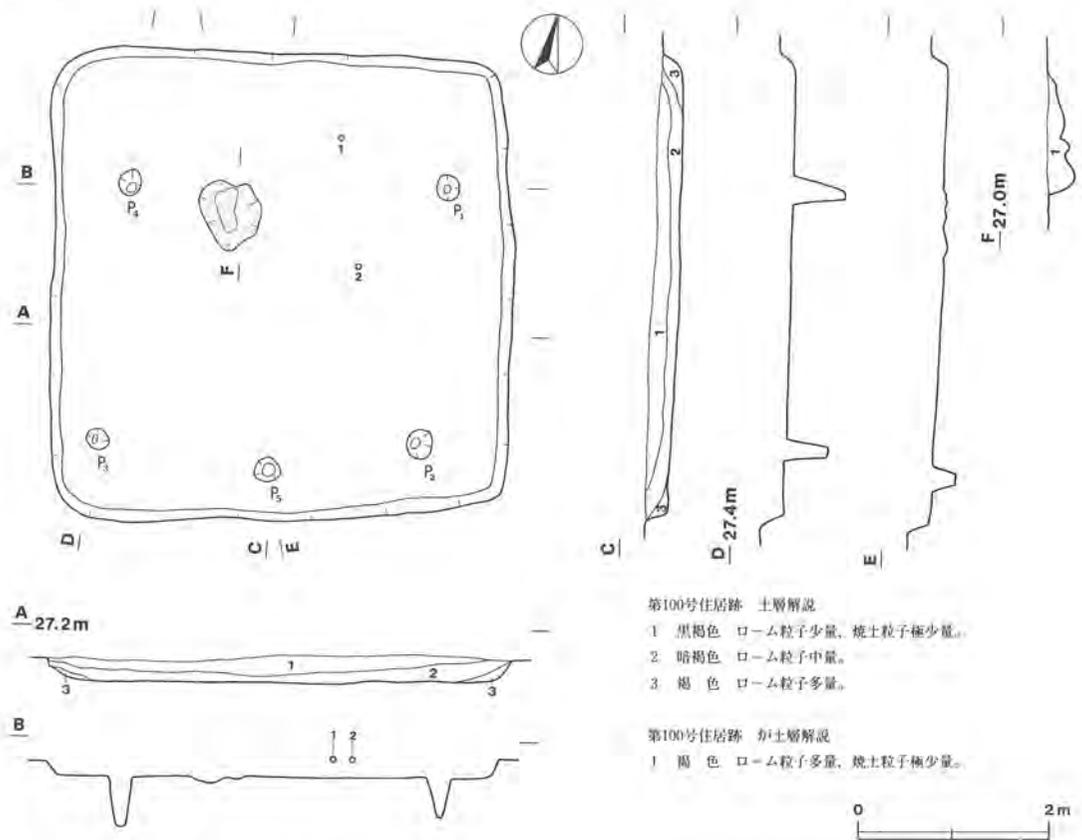
壁 壁高15~28cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，炉周辺は踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，径26~38cmのほぼ円形で深さ44~59cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は，方形となる。P<sub>5</sub>は，28cmの円形で深さ25cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央からやや北北東寄りにあり，平面形は長径76cm，短径66cmの不整楕円形で，床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。

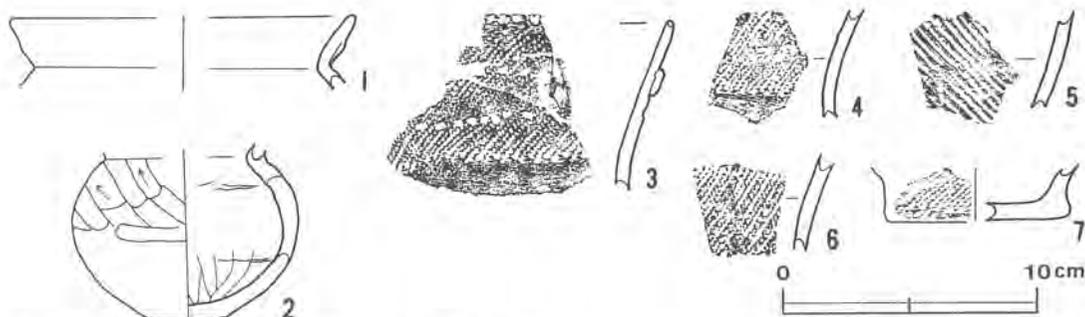
覆土 掘り込みが浅く，覆土は薄い。各壁際には，ローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。下層は，ローム粒子を中量含む暗褐色土である。上層は，ローム粒子，焼土粒子を少量含む黒褐色土で，上・下層共によく締まっている。覆土上層から，高坏・埴等の土器器片が出土している。



第16図 第100号住居跡実測図

遺物 2は土師器甕の底部で、1の甕の底部と同じく覆土上層から出土している。

所見 覆土上層から弥生式土器片と土師器片が出土しているが、接合できた遺物は少ない。床面直上の遺物がなく時期決定は困難であるが、住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期と思われる。



第17図 第100号住居跡出土遺物実測・拓影図

#### 第100号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	甕 土師器	A(13.6) B(2.9)	口縁部片。口縁部は外反して開く。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母 橙色 普通	P68 5%
2	甕 土師器	B(6.9) C 2.8	体部片。平底。体部は球形状で最大径を中位に持つ。	体部外面ヘラナデ、内面下位縦位の強い指ナデ、上位横ナデ。体部内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P69 20%

第17図3～7は、第100号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部には附加条1種（附加2条）の縄文を施し、口唇部は縄文原体で押圧されている。口縁部中位には、縄文原体による押圧が2列横位に施され、さらに瘤が貼られている。4は頸部から口縁部下半にかけての破片で、頸部を無文とし口縁部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。5・6は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。7の底部片は、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

#### 第102号住居跡（第18図）

位置 E地区南東部、F3h7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.40m、短軸4.02mで隅丸方形である。

主軸方向 N-71°-W

壁 壁高は33～40cmで、外傾して立ち上がっている。

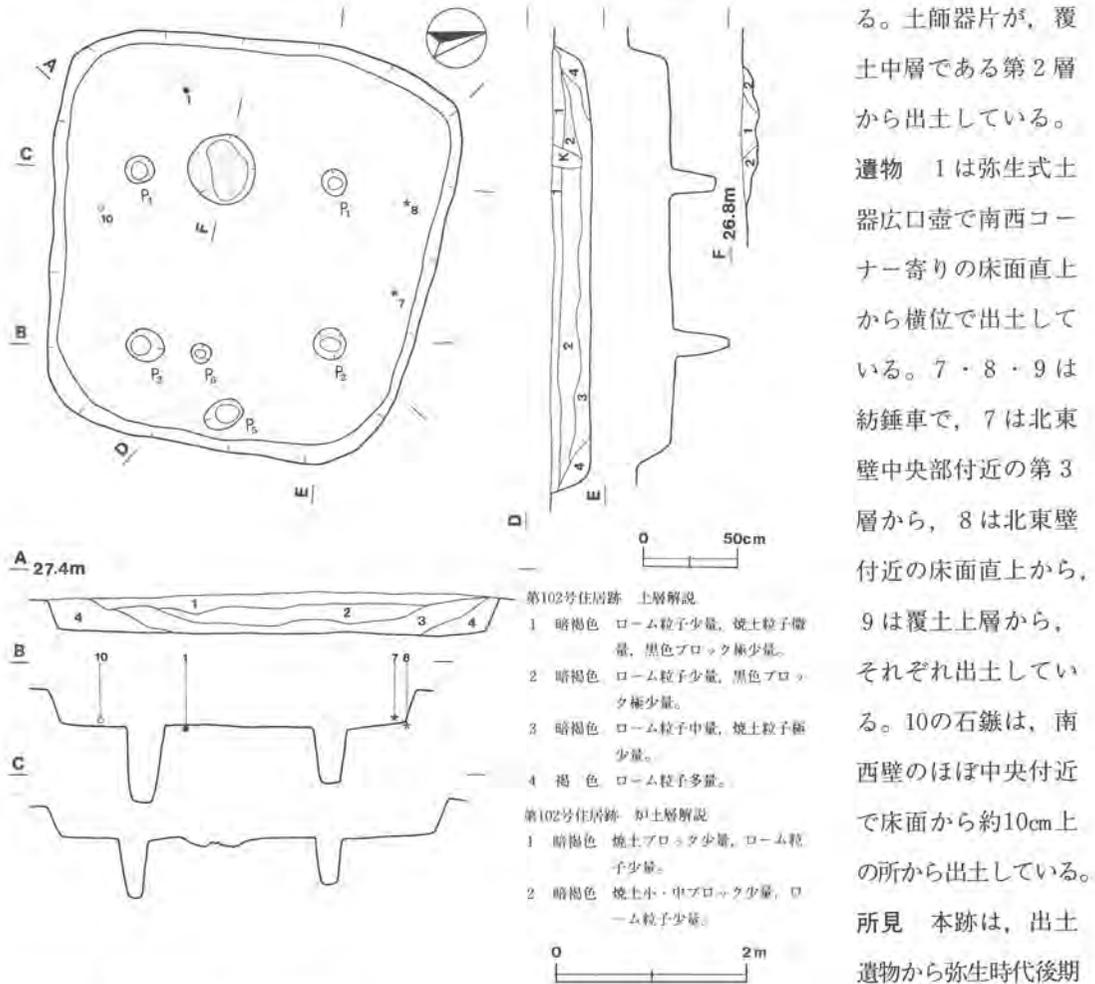
床 平坦で炉の南東側はよく踏み固められているが、全体的には軟らかい。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径26～38cmの円形で深さ50～83cmの主柱穴である。主柱穴を結ん

だ線は、方形となる。P<sub>6</sub>は、径21cmの円形で深さ60cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>5</sub>は、長径42cm、短径31cmの楕円形で深さ15cmの補助柱穴である。

炉 中央からやや西北西寄りにあり、平面形は径76cmのほぼ円形で床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。

覆土 各壁際には、ローム粒子を多量含む褐色土が堆積している。北コーナー付近に小さな攪乱があり、第2層までとどいている。第1層から第3層までは暗褐色土であるが、含有物が異なり第1層・第2層には黒色ブロックを極少量含み、第1・3層には焼土粒子がわずかに含まれてい

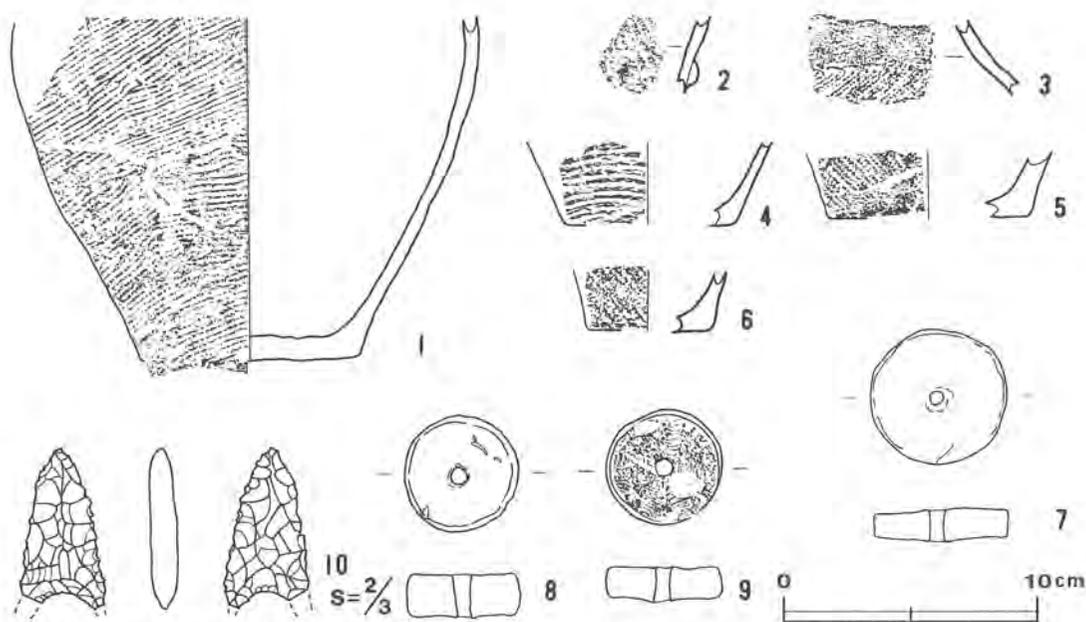


る。土師器片が、覆土中層である第2層から出土している。遺物 1は弥生式土器広口壺で南西コーナー寄りの床面直上から横位で出土している。7・8・9は紡錘車で、7は北東壁中央部付近の第3層から、8は北東壁付近の床面直上から、9は覆土上層から、それぞれ出土している。10の石鏃は、南西壁のほぼ中央付近で床面から約10cm上の所から出土している。所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第18図 第102号住居跡実測図

第102号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第19図	壺	B(13.7)	胴下半部。平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。羽状構成をとらない。	砂粒、石英、長石	P80 30%
1	弥生式土器	C 8.4		雲母 にぶい褐色 普通	内・外面炭化物付着



第19図 第102号住居跡出土遺物実測・拓影図

第19図2～6は、第102号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は縄文施文の単口縁で、口縁部上端は欠損している。口縁部中位には、棒状工具による刺突文と瘤がある。3は胴部から頸部にかけての破片で、頸部は無文とし胴部には附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。4～6の底部片は、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第19図7	紡錘車	5.3	5.3	1.4	7.0	46.5	100	覆土中層	DP3
8	紡錘車	4.5	4.4	1.8	7.0	47.8	100	床面直上	DP4
9	紡錘車	4.6	4.5	1.4	7.0	(36.3)	95	覆土上層	DP5

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第19図10	石鏃	(1.7)	(3.1)	0.5	(2.1)	チャート	覆土下層	Q11 一部欠損

### 第103号住居跡（第20図）

位置 E地区南東部，G3a9区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.49m，短軸4.02mの隅丸方形である。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は40～51cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，炉周辺は踏み固められている。

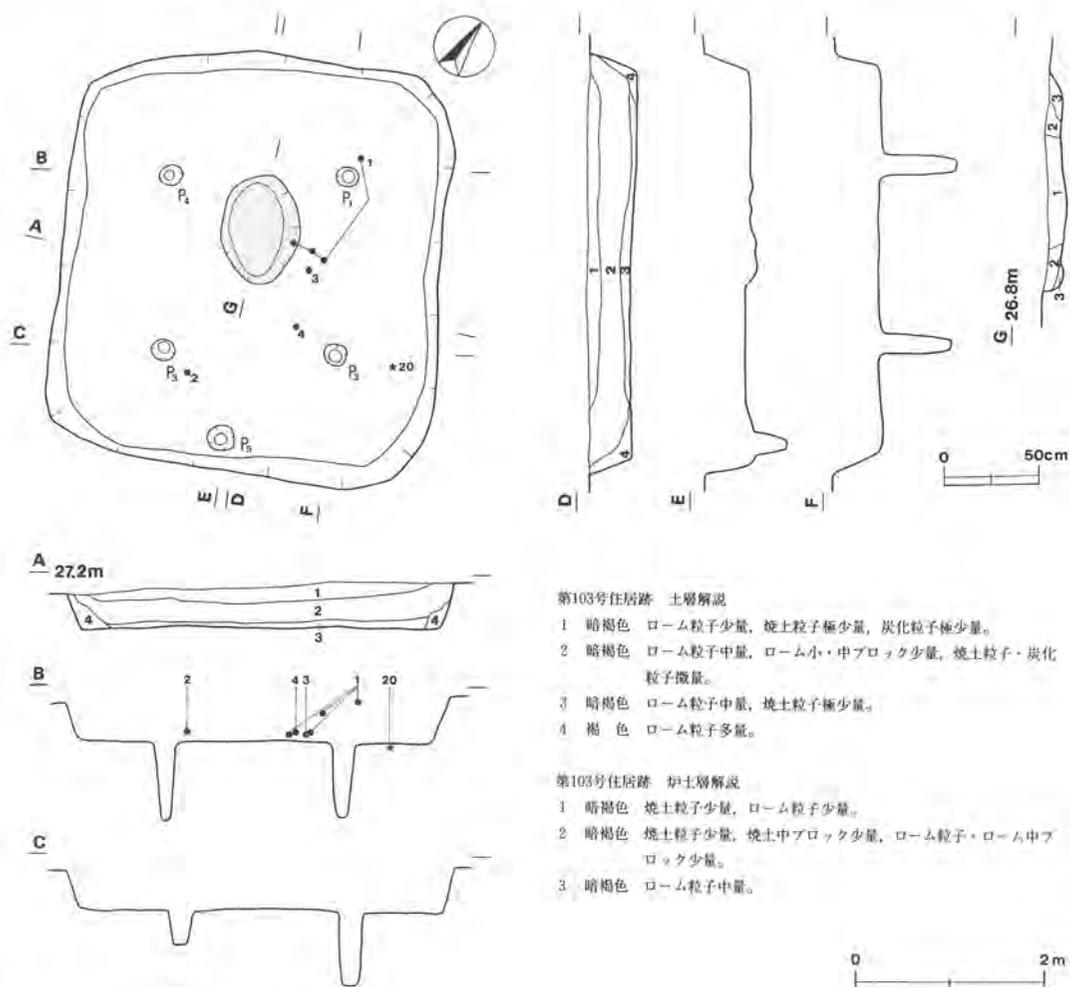
ピット 5か所。P1～P4は，径24～26cmの円形で深さ40～85cmの主柱穴である。主柱穴を結ん

だ線は方形となる。P<sub>5</sub>は、径28cmの円形で深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径114cm、短径84cmの楕円形で、床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉の中央部は、赤変硬化している。

覆土 各壁際には、ローム粒子を多量含む褐色土が堆積している。中央部は3層からなり、どの層も暗褐色土で、下層は炭化粒子を、中層はローム小・中ブロック、焼土粒子、炭化粒子を、上層は炭化粒子、焼土粒子を、それぞれ含んでいる。弥生式土器片や土師器片は、中層から多く出土している。

遺物 1は弥生式土器広口壺の胴部で、中央部付近の覆土第2層から出土しており、北コーナー寄りの上層から出土した土器片と接合している。2の広口壺の胴部は、中央部からやや南側の床近くから出土している。3は高坏で覆土中から出土している。4は高坏の脚部で、中央からやや東寄りの覆土中層から出土している。20の紡錘車は、北東壁寄りの覆土下層から出土している。



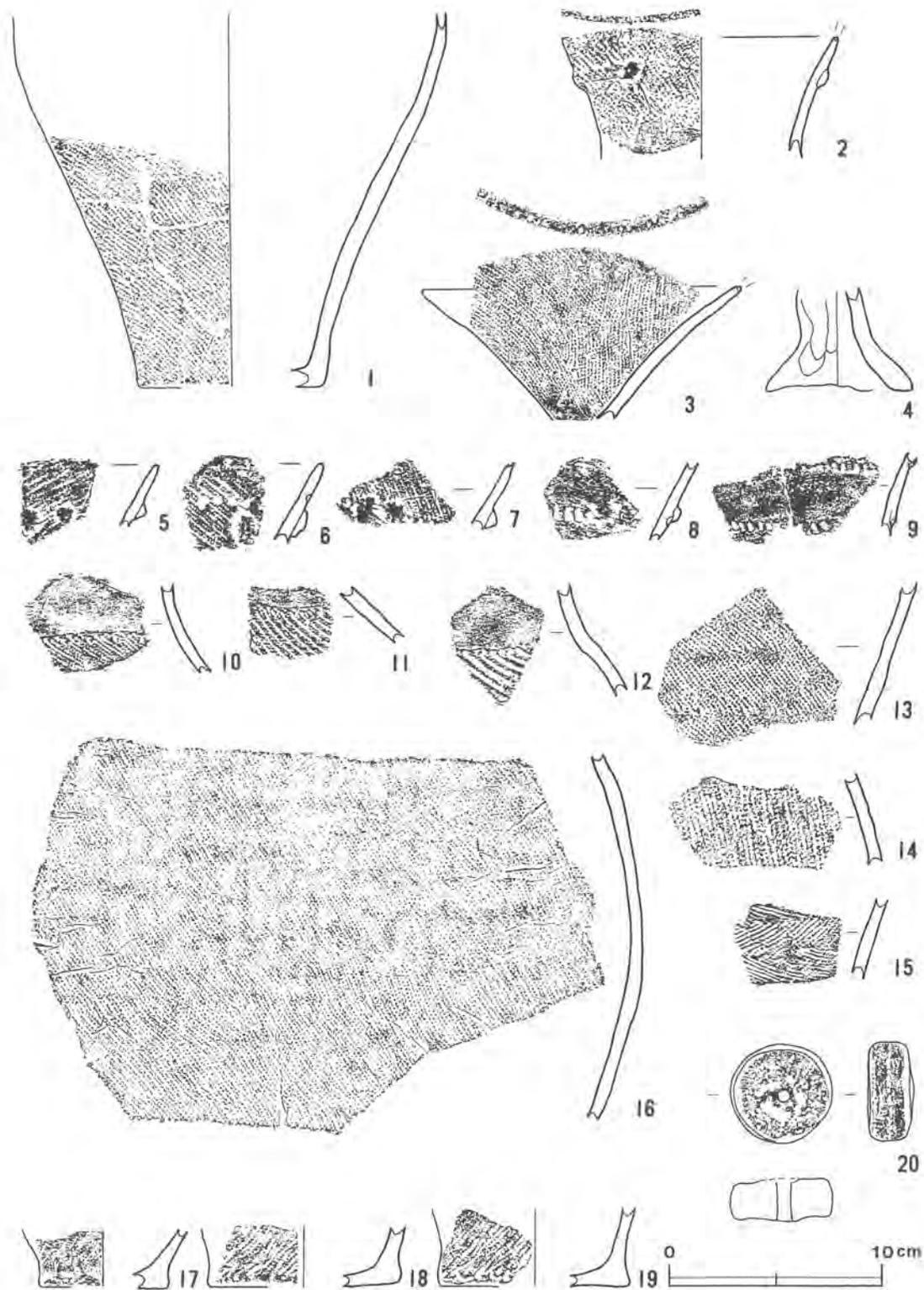
第20図 第103号住居跡実測図

第103号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量、炭化粒子極少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子極少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。

第103号住居跡 炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子少量、焼土中ブロック少量、ローム粒子・ローム中ブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量。



第21図 第103号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は，出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第103号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	壺 弥生式土器	B(17.7) C( 8.4)	底部から胴下半部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり，附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。羽状構成はとらない。	砂粒、石英、長石 雲母 にぶい橙色 普通	P 81 10% 外面スス付着
2	広口壺 弥生式土器	A(13.0) B( 5.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。附加条1種（附加2条）の縄文施文の単口縁で、下端に刺突文が施され、さらに瘤が貼られている。頸部は無文である。	砂粒、石英、長石 スコリア にぶい橙色 普通	P 82 5% 外面スス付着
3	高坏 弥生式土器	A(14.8) B( 6.3)	坏部片。坏部は大きく開き、外傾して立ち上がる。外面には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口唇部には、縄文原体による圧痕が施されている。	砂粒、石英、長石 スコリア 橙色 普通	P 85 20%
4	高坏 弥生式土器	D 6.9 E( 4.9)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。外面ヘラケズリ後横位のナデ、内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 86 40%

第21図5～19は，第103号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～9は口縁部片である。5～7は附加条1種（附加2条）の縄文施文の単口縁で瘤が貼られている。7の口唇部は欠損している。8は単口縁で、口縁部下端には竹管状工具による刺突文が施され、さらに瘤が貼られている。口唇部は欠損している。9は2段の複合口縁で、各段の下端に棒状工具による刺突文が施されている。10は頸部から口縁部下半にかけての破片で、口縁部には附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。11・12は胴部から頸部にかけての破片で、頸部は無文とし胴部には附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。13～16は胴部片で、縄文原体は13・14が単節、15・16は附加条1種（附加2条）である。17～19の底部片は胴部に縄文が施され、縄文原体は17が附加条1種（附加2条）、18・19が単節である。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第21図20	紡錘車	4.7	4.7	2.1	8.0	(53.7)	95	覆土下層	D P 6

第105号住居跡（第22図）

位置 E地区南端部，F3j3区を中心に確認されている。

重複関係 第186号土坑が本跡の南東壁を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.28 m，短軸3.06 mの方形である。

主軸方向 N-25°-W

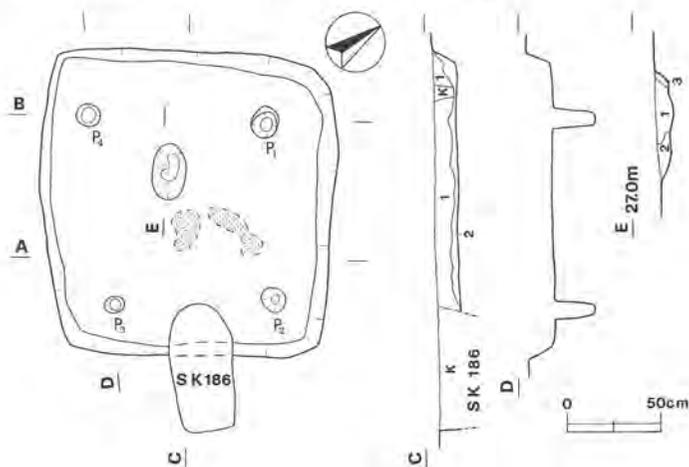
壁 壁高24～27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、あまり踏み固められておらず、全体に軟らかい。

ピット 4か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径18～28cmの円形で、深さ44～51cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。

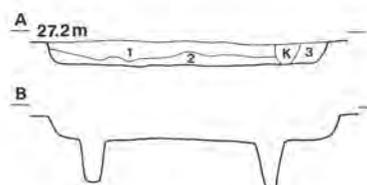
炉 中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径60cm、短径38cmの楕円形で、床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け、赤変硬化している。

覆土 木根によると思われる攪乱が数か所ある。中央部の覆土は大きく2層からなり、両方とも褐色土であるが、第1層は焼土粒子、焼土小・中ブロック、炭化粒子を含んでいる。遺物は、土師器片が覆土第1層から少量出土している。



遺物 第1層から土師器壺、高坏、柑の細片が少量出土している。床面直上からは出土していない。

所見 本跡は、遺跡内の住居跡の中では小型である。時期を判断できる遺物は出土していないが、住居跡の形態から弥生時代後期と思われる。



第105号住居跡 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子極少量、焼土小・中ブロック極少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。

第105号住居跡 炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・小ブロック少量、ローム粒子少量。
- 2 褐色 焼土小ブロック極少量、ローム粒子多量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。



第22図 第105号住居跡実測図

第106号住居跡 (第23図)

位置 F地区西端部、E5d<sub>1</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.50m、短軸4.05mの隅丸方形である。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高10～22cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺はよく踏み固められている。

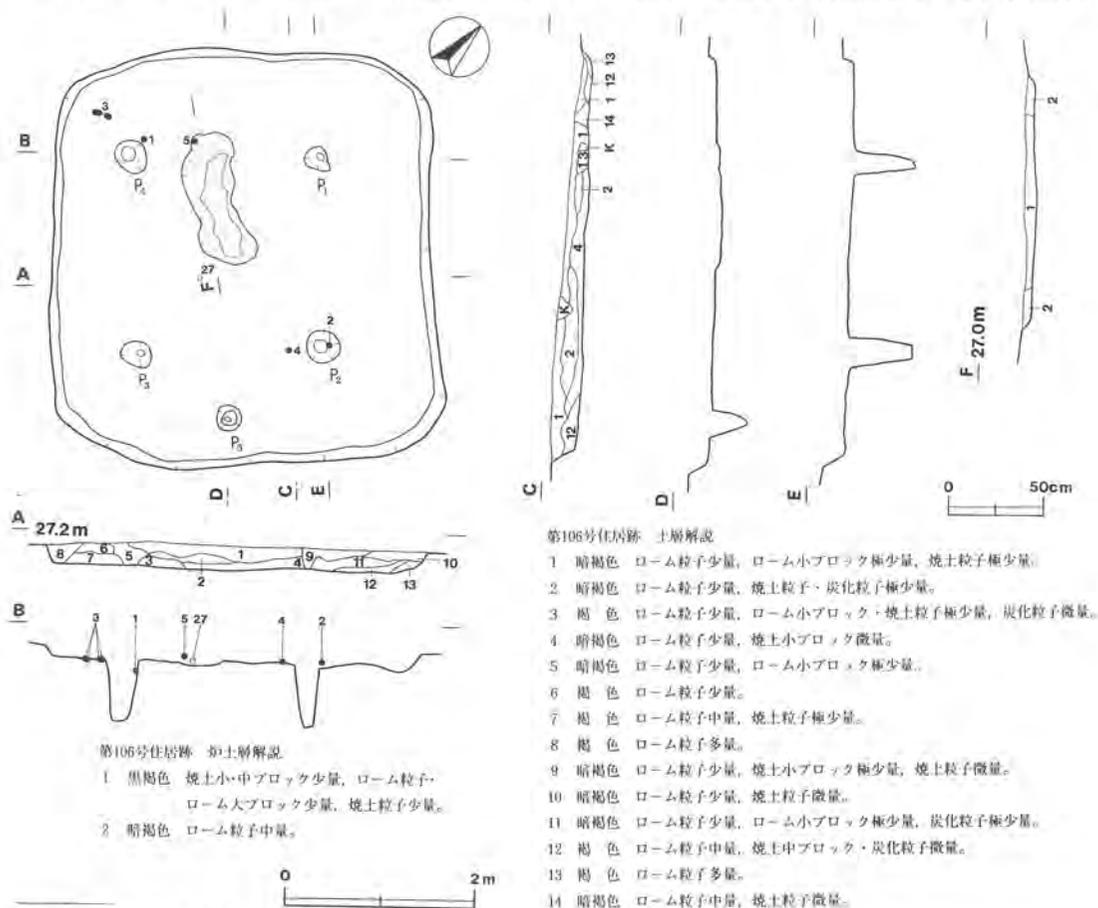
ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径30～38cm、短径22～32cmの楕円形で深さ68～79cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は、方形となる。P<sub>5</sub>は、径26cmの円形で深さ41cmの出入口施設に伴うピット

トと思われる。

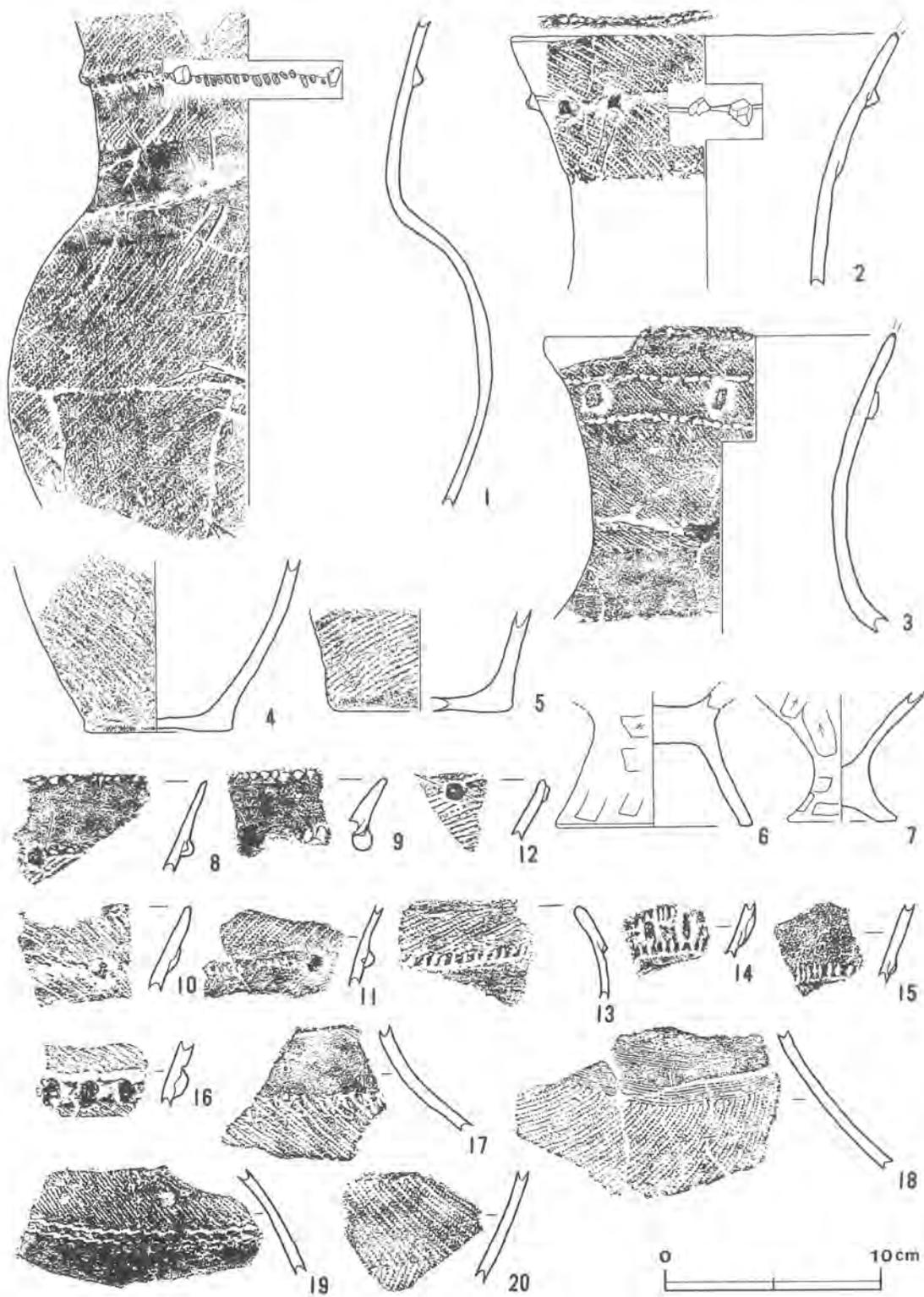
炉 中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径146cm、短径38cmの不整楕円形で床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が赤変硬化しており、北西側は南東側よりやや高い。

覆土 南東壁を除く各壁際に褐色土が堆積している。その上に北西・北東・南東壁際では焼土中ブロック、炭化粒子を微量含む褐色土が堆積している。全体的に焼土ブロック、焼土粒子が混入している覆土である。木根によると思われる攪乱がひどく、特に北西壁寄りの覆土は乱れている。遺物は、第1～4・7層から弥生式土器片、土師器片が出土している。

遺物 1は、弥生式土器広口壺で西コーナー付近の床面近くからつぶれた状態で出土している。2・3は、広口壺の口縁部から頸部で西コーナー付近から2つ並んで、2は正位、3は口縁部側が低い斜位の状態で、それぞれ出土している。4は壺の胴下半部で東コーナー付近の床面直上から逆位で出土している。5の底部は、覆土中層から出土している。6は土師器台付甕の脚部でP<sub>2</sub>付近の床面直上から横位で出土している。7は高坏の脚部でP<sub>3</sub>付近の床面直上から出土している。27は敲石で、中央部床面直上から出土している。26の紡錘車は覆土中から出土している。P<sub>4</sub>付近



第23図 第106号住居跡実測図

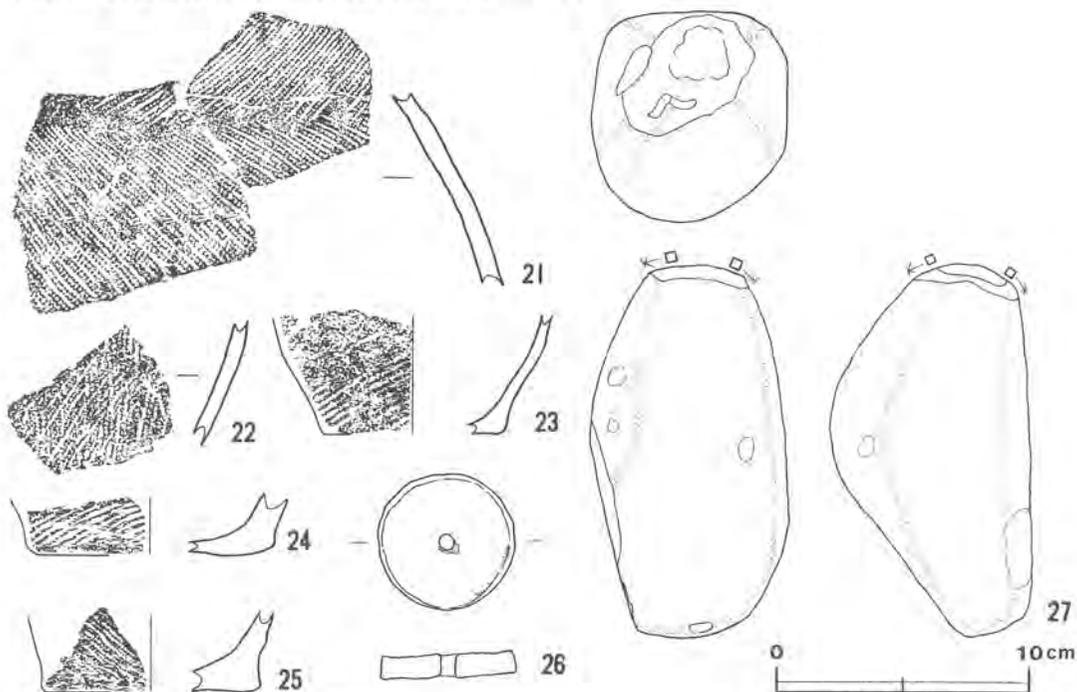


第24図 第106号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

の床面直上からの出土が多い。

所見 炉は形態と炉床のレベル差から長径方向で2分割あるいは拡張したものとも考えられる。

本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第25図 第106号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第106号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	壺 弥生式土器	B(23.0)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内傾し、頸部は外傾して立ち上がる。複合口縁で、頸部を無文帯とし、それ以外に附加条1種(附加2条)の縄文を施し、羽状構成はとらない。下端には棒状工具による刺突文が周回し、さらに瘤が貼られている。	砂粒・石英・長石 雲母 にぶい褐色 普通	P102 60% 内・外面炭化物付着
2	壺 弥生式土器	A 18.1 B(12.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。縄文施文の2段の複合口縁で1段目下端には、2個1組の瘤が7単位にわたり貼られ、2段目下端には、縄文原体による押圧が施されている。口唇部には、縄文原体による押圧がなされ、頸部は無文帯である。	砂粒・石英・長石 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P103 30%
3	壺 弥生式土器	A 16.4 B(14.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。頸部上半から口唇部にかけて附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部下半を無文とする。口縁部下端には刺突文が2列周回しその間に瘤が貼り付けられている。	砂粒・石英・長石 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P104 30%
4	壺 弥生式土器	B( 8.0) C 6.9	底部から胴部下半の破片。平底で胴部はやや内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・長石 雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P105 15%
5	壺 弥生式土器	B( 3.8) C[ 8.0]	底部から胴部下半の破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒・石英・長石 雲母・スコリア 明褐色 普通	P106 5% 内面炭化物付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第24図 6	台付甕 弥生式土器	B( 6.2)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P108 5%
		D 9.2			
		E 5.0			
7	高坏 弥生式土器	B( 6.0)	口縁部欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。脚部・坏部ともに外面はヘラケズリされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P109 50%
		D 5.0			
		E 2.8			

第24・25図8～25は、第106号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8～16は口縁部片である。8～11は刺突文が、13～15はキザミ目が施されている。縄文原体は、8・10～13が附加条1種（附加2条）、16は直前段反撚である。17・18は胴部から頸部にかけての破片で、頸部は17が無文、18は8本櫛歯による横走文で、胴部にはどちらも附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。19～22は胴部片である。19は単節縄文と結節文、20～22は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。23～25の底部片は、いずれも胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第25図26	紡錘車	5.4	5.4	1.0	5.0	39.2	100	覆土中層	D P 7

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第25図27	蔽石	14.8	7.9	7.9	(1217.4)	砂岩	床面直上	Q15 一部欠損

### 第107号住居跡（第26図）

位置 F地区の西部、E5d<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸〔3.80〕m、短軸4.09mの隅丸長方形と思われる。

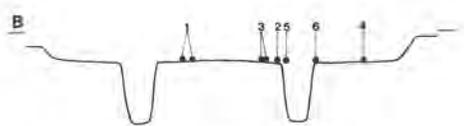
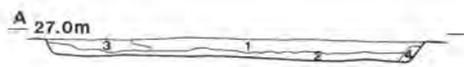
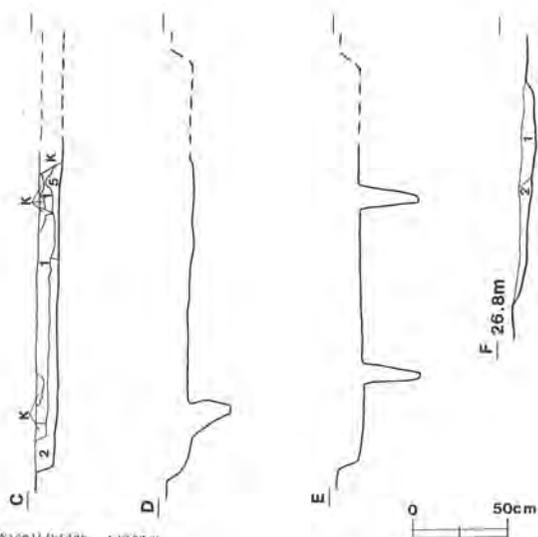
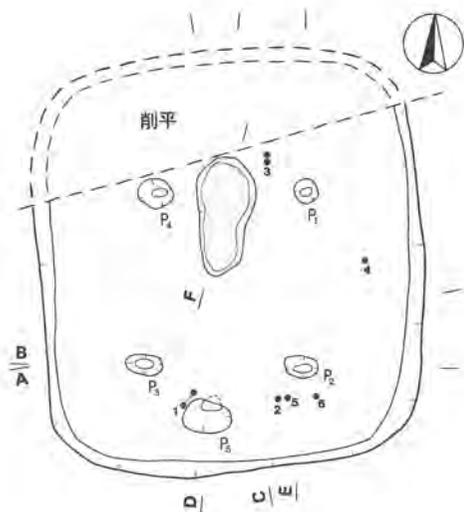
主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は、13～25cmで緩やかに外傾して立ち上がっている。北壁は、削平されているため確認できない。

床 平坦で、中央部がよく踏み固められており、特に炉周辺は硬く締まっている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径26～40cm、短径24～30cmの楕円形で深さ65～70cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は、方形となる。P<sub>5</sub>は、長径54cm、短径34cmの楕円形で深さ50cmの出入口施設に伴うピットと思われる。南壁側に、やや傾斜している。

炉 中央からやや北寄りにあり、平面形は長径128cm、短径34cmの不整楕円形で床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化し特に北寄りがよく焼けている。



第107号住居跡 土層解説

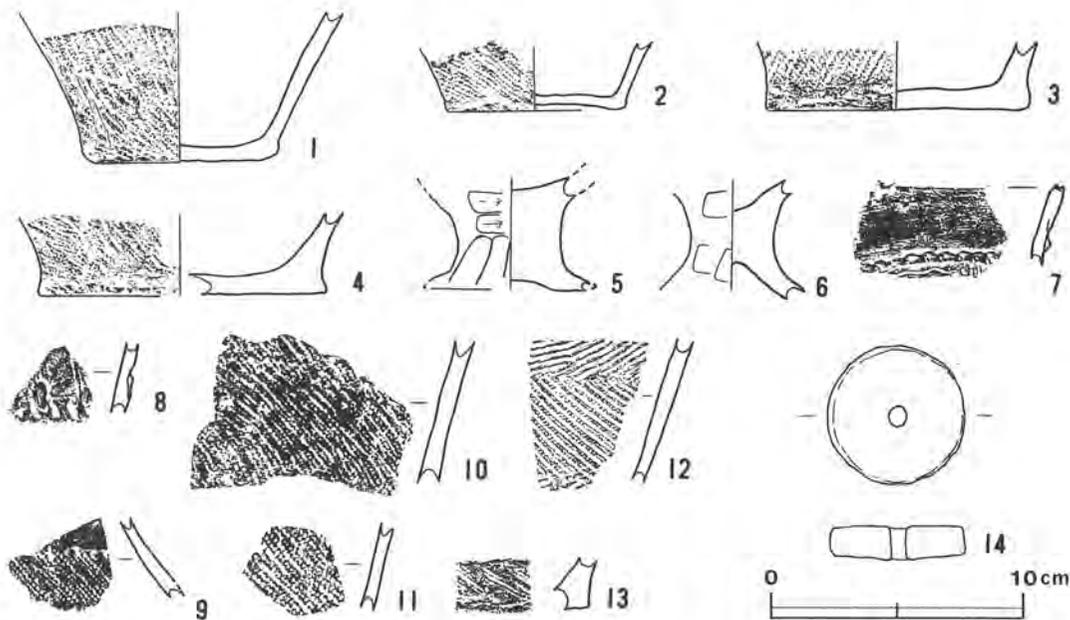
- 1 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック・焼土粒子極少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム中ブロック微量。
- 3 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子極少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・焼土粒子少量。

第107号住居跡 和土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量, 焼土粒子少量。
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子少量。



第26図 第107号住居跡実測図



第27図 第107号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土 壁際から床面全体にかけて、ローム中ブロックと焼土粒子を含む褐色土が堆積し、覆土下層を形成している。上層は、焼土粒子、ローム小・中ブロックを少量含む褐色土である。北側は削平、南側は木根による攪乱が入っている。

遺物 1～4は弥生式土器広口壺の底部である。1はP<sub>3</sub>付近の床面直上から斜位で出土し、P<sub>5</sub>内から出土した底部片と接合している。2はP<sub>5</sub>周辺の床面直上から、3は炉の北側の床面直上から、4は東壁中央部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。5・6は高坏の脚部で、どちらも南壁寄りのほぼ床面直上から出土している。14の紡錘車は、P<sub>4</sub>内から出土している。

所見 P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>内の覆土中から1の一部と14が出土していることから、意識的に柱を抜き取ったものと考えられる。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第107号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	壺 弥生式土器	B(5.9) C 7.7	底部から胴部下半にかけての破片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい黄橙色 普通	P111 10% 内面炭化物付着
2	壺 弥生式土器	B(2.7) C 7.0	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P112 10%
3	壺 弥生式土器	B(2.7) C 10.4	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P113 5%
4	壺 弥生式土器	B(3.2) C[11.1]	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P114 5%
5	高坏 弥生式土器	B(4.4) E(3.9)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。外面はヘラケズリされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P115 30%
6	高坏 弥生式土器	E(4.7)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。外面はヘラケズリされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P116 10%

第27図7～13は、第107号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7の口縁部片は押圧隆起線により口縁部と頸部を区画している。8の口縁部片は下端に棒状工具による刺突文を施し、さらに瘤を貼っている。9は頸部から口縁部にかけての破片で、頸部を無文とし胴部には単節縄文が施されている。10～12の胴部片と13の底部片は、いずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第27図14	紡錘車	5.5	5.4	1.4	7.0	51.7	100	P <sub>4</sub> 内 覆土	DP8

第108号住居跡（第28図）

位置 F 地区西部，E 5c4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸〔5.01〕m，短軸〔2.69〕mの隅丸長方形と思われる。

主軸方向 N-43°-E

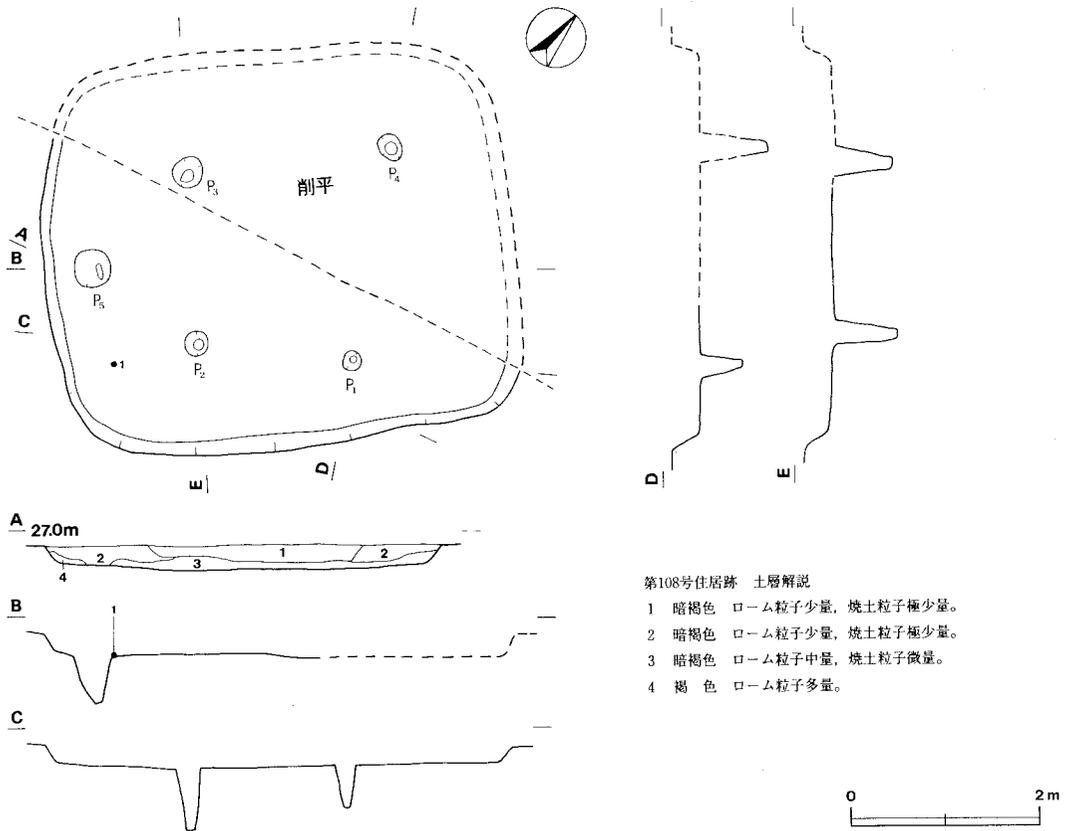
壁 壁高は，18～30cmで外傾して立ち上がっている。北側半分は，大きく削平されているため確認できない。

床 平坦で，中央部がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>4</sub>は，削平のため床面から約40cmほど下がった位置で確認されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，長径24～34cm，短径20～32cmの楕円形で深さ48～70cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は，不整形となる。P<sub>5</sub>は，径40cmの円形で深さ74cmの出入口施設に伴うピットと思われる。南西壁側に，やや傾斜している。

炉 削平のため確認できず。

覆土 壁際には，褐色土が堆積している。下層は焼土粒子をわずかに含む暗褐色土で，南東壁側から流れ込んだと思われる。その上にローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土が広く堆積して

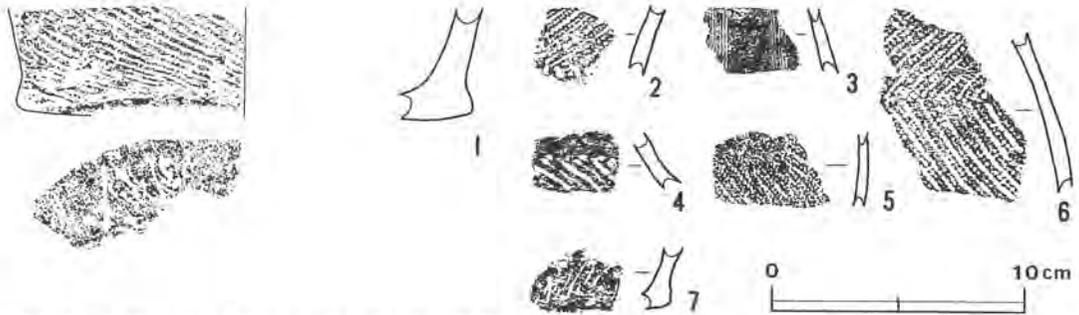


第28図 第108号住居跡実測図

いる。遺物は、弥生式土器片、土師器片が覆土中・上層から少量出土している。

遺物 1 は弥生式土器広口壺の底部で、南コーナー付近の床面近くから出土している。

所見 削平により遺構の半分は失われているため不明な点が多いが、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第29図 第108号住居跡出土遺物実測・拓影図

第108号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	壺 弥生式土器	B(4.5) C(18.0)	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 橙色 普通	P117 5%

第29図2～7は、第108号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は縄文施文の単口縁で、下端は棒状工具により刺突されている。3の頸部片は、7本楕歯による縦線文が施されている。4は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。5・6の胴部片と7の底部片は、いずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施され、6は羽状構成をとる。

第109号住居跡(第30図)

位置 F地区南端部、E5d6区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.55m、短軸2.54mの隅丸方形である。

主軸方向 N-23°-W

壁 壁高24～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部はよく踏み固められている。

ピット 2か所。P1・P2は、長径26～29cm、短径22～25cmの楕円形で深さ32～52cmの主柱穴である。P2は、南側にやや傾斜し、床から24～28cm下がった位置に段を持つ。

炉 炉は確認されていない。

覆土 南東・北東壁際に褐色土が、南西壁際には暗褐色土が堆積している。覆土中央部は2層か

らなりどちらも暗褐色土であるが、上層には焼土粒子がわずかに含まれる。北東壁寄りに攪乱があり、弥生式土器片が混入している。

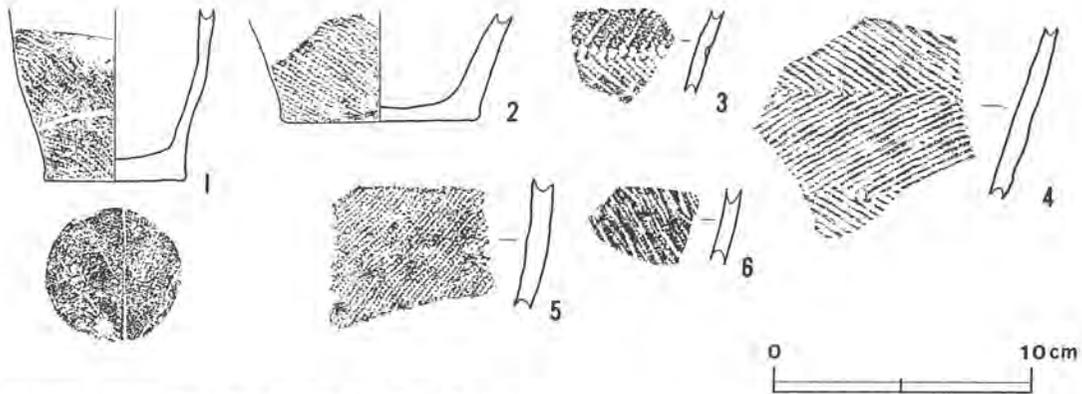
遺物 1・2は弥生式土器広口壺の底部で、1は中央からやや南東壁寄りのほぼ床面直上から、



2は南東コーナー付近の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 炉は確認されなかったが、床面は踏み固められており住居跡として扱うことにした。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第30図 第109号住居跡実測図



第31図 第109号住居跡出土遺物実測・拓影図

第109号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	壺 弥生式土器	B( 6.8) C 5.5	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は底部からやや内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 スコリア 明褐色 普通	P118 20%
2	壺 弥生式土器	B( 4.3) C 7.8	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は底部からやや内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 スコリア 明褐色 普通	P119 10%

第31図3～6は、第109号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3の口縁部片は、縄文原体により押圧されている。4～6は縄文施文の胴部片である。縄文原体は、いずれも附加

条1種（附加2条）で、4は羽状構成をとる。

第110号住居跡（第32図）

位置 F地区中央部，D5j0区を中心に確認されている。

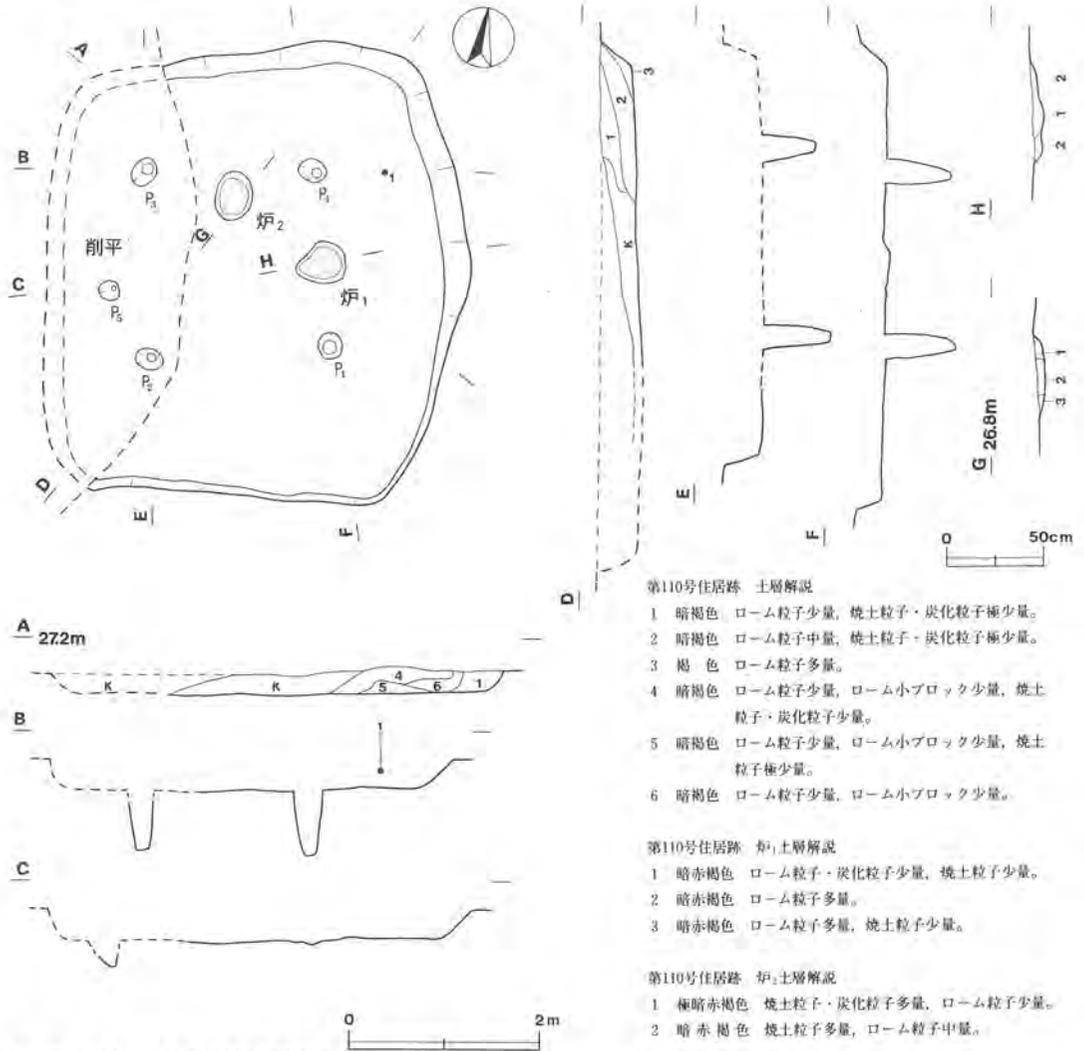
規模と平面形 長軸4.79m，短軸〔4.52〕mの隅丸方形である。

主軸方向 N-76°-E

壁 壁高27~35cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，炉周辺は踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，長径28~32cmの楕円形で深さ58~74cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形である。P<sub>5</sub>は，径21cmの円形で深さ〔28〕cmの出入口施設に伴うピットと思われる。



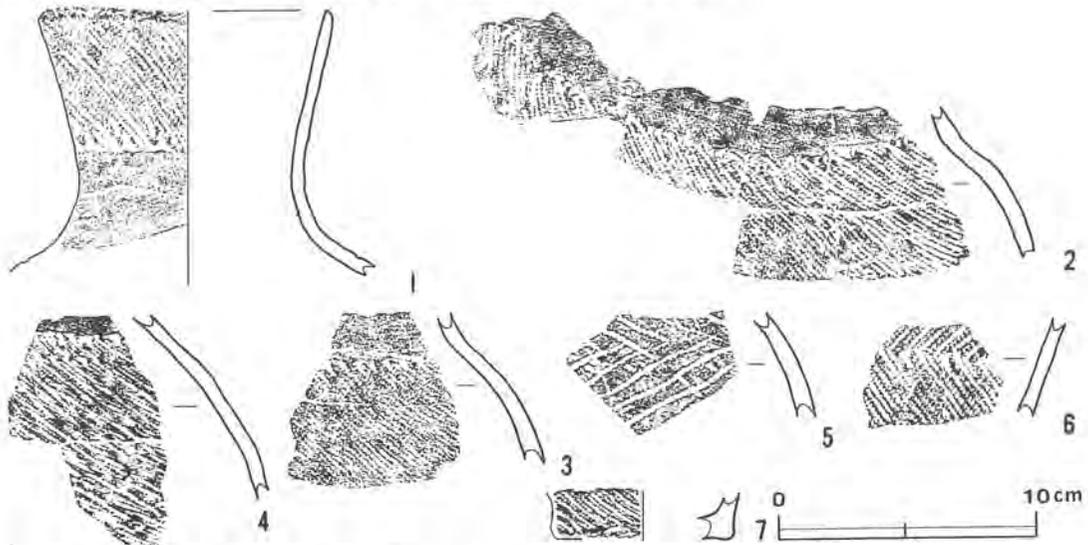
第32図 第110号住居跡実測図

炉 2か所。炉<sub>1</sub>は、中央からやや東北東寄りでP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結んだ線上のほぼ中央にあり、平面形は長径54cm、短径46cmの不整楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。炉<sub>2</sub>は、中央からやや北北東寄りにあり、平面形は長径52cm、短径40cmの楕円形で、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく熱を受け赤変硬化している。

覆土 西側の覆土の半分は、削平され消失している。現存している覆土の半分は攪乱を受け、原存しているのは全体の4分の1ほどである。南東コーナーの壁際は、ローム小ブロックを含む暗褐色土で、北東コーナー壁際は、ローム粒子を多量に含む褐色土である。全体的に覆土は暗褐色土で焼土粒子、炭化粒子を含んでいるが、南東コーナー側はロームの小ブロックが混入している。

遺物 1は弥生式土器広口壺の口縁部で、P<sub>4</sub>付近の東壁寄り覆土中層から横位で出土している。覆土中・下層から弥生式土器細片が出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第33図 第110号住居跡出土遺物実測・拓影図

第110号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	壺 弥生式土器	A(11.6) B(10.6)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。頸部を無文帯とし、口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。口唇部には擦痕があり元の口縁上端部欠損後に再利用したと思われる。	砂粒、石英、長石にぶい・橙色 普通	P120 20% 口縁部作り替え

第33図2～7は、第110号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2～4は胴部から頸部にかけての破片で、いずれも頸部を無文とし胴部には縄文が施されている。縄文原体は、2・3が単節、4は直前段反撚である。2と3は同一個体と思われる。5・6は縄文施文の胴部片

で、縄文原体は5が附加条2種（附加1条）、6は附加条1種（附加2条）である。7の底部片は、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

### 第111号住居跡（第34図）

位置 F地区東部，D6e1区を中心に確認されている。

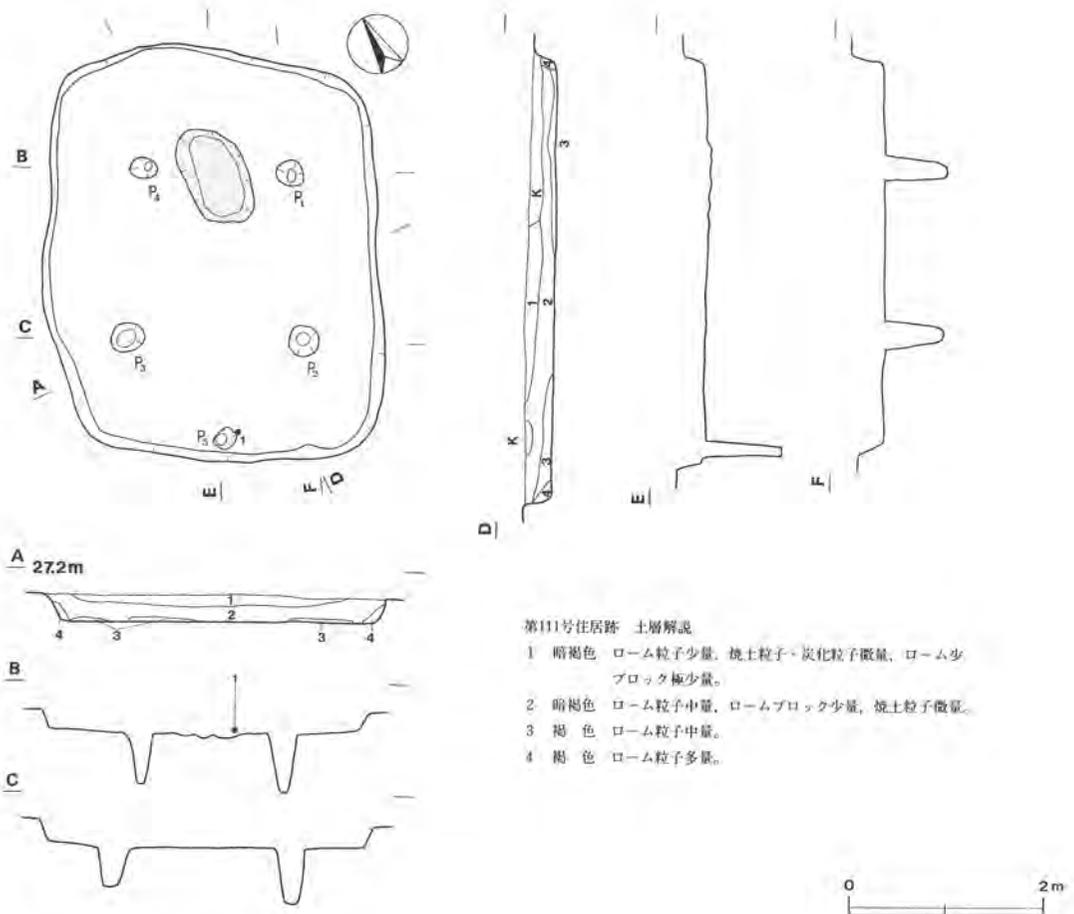
規模と平面形 長軸4.42m，短軸3.51mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-29°-E

壁 壁高22~26cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，長径30~38cm，短径24~32cmの楕円形で深さ54~60cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は，長径26cm，短径24cmの不整楕円形で深さ82cmの出入口施設に伴うピットと思われる。



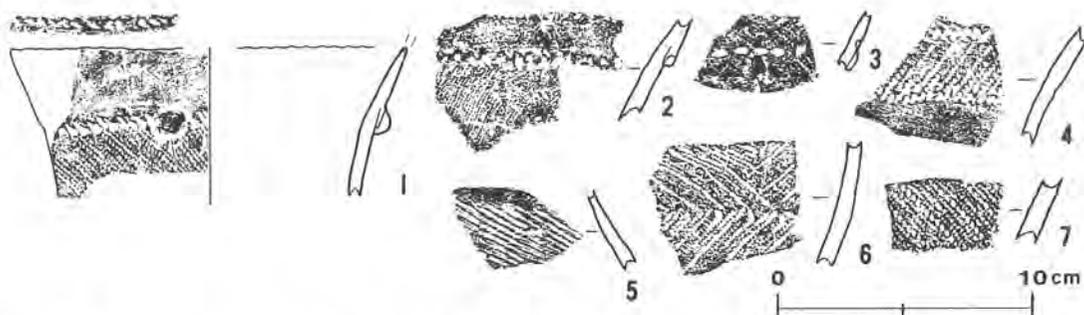
第34図 第111号住居跡実測図

炉 中央からやや北東寄りで、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結んだ線上のほぼ中央にあり、平面形は長径114cm、短径66cmの楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、南側半分が熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際は褐色土で、床面中央付近まで緩やかな傾斜で伸びているが、北西・南東壁側は堆積状況が異なり断続している。ロームブロックと焼土粒子を含む暗褐色土が全体に厚めに堆積し、壁の上部から床面中央まで達している。中央部中層にはローム小ブロック、焼土・炭化粒子を含む暗褐色土がなだらかに広がっている。覆土下層である第3層から、弥生式土器片が多く出土している。

遺物 弥生式土器細片が約130点ほど出土しているが、ほとんど接合できない。1は弥生式土器広口壺の口縁部で、南西壁近くの覆土中層から破片で出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第35図 第111号住居跡出土遺物実測・拓影図

#### 第111号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	壺 弥生式土器	A[15.6] B(6.0)	口縁部片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。無文の複合口縁で、下端には棒状工具による刺突文と瘤が施されている。口唇部には縄文原体による押圧がなされ、頸部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 にふい橙色 普通	P121 5% 外面スス付着

第35図2～7は、第111号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は複合口縁で、下端には刺突文が施されている。3は単口縁で、竹管状工具による刺突文が施され、さらに瘤が貼られている。4の口縁部片は、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。さらに縄文原体による押圧が2列施されている。5は胴部から頸部にかけての破片で、頸部を無文とし胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。6・7は縄文施文の胴部片で、縄文原体は6が附加条1種(附加2条)、7は附加条1種(附加1条)である。

第112号住居跡（第36図）

位置 G地区北西部，F5i1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.34m，短軸4.19mの隅丸方形である。

主軸方向 N-34°-W

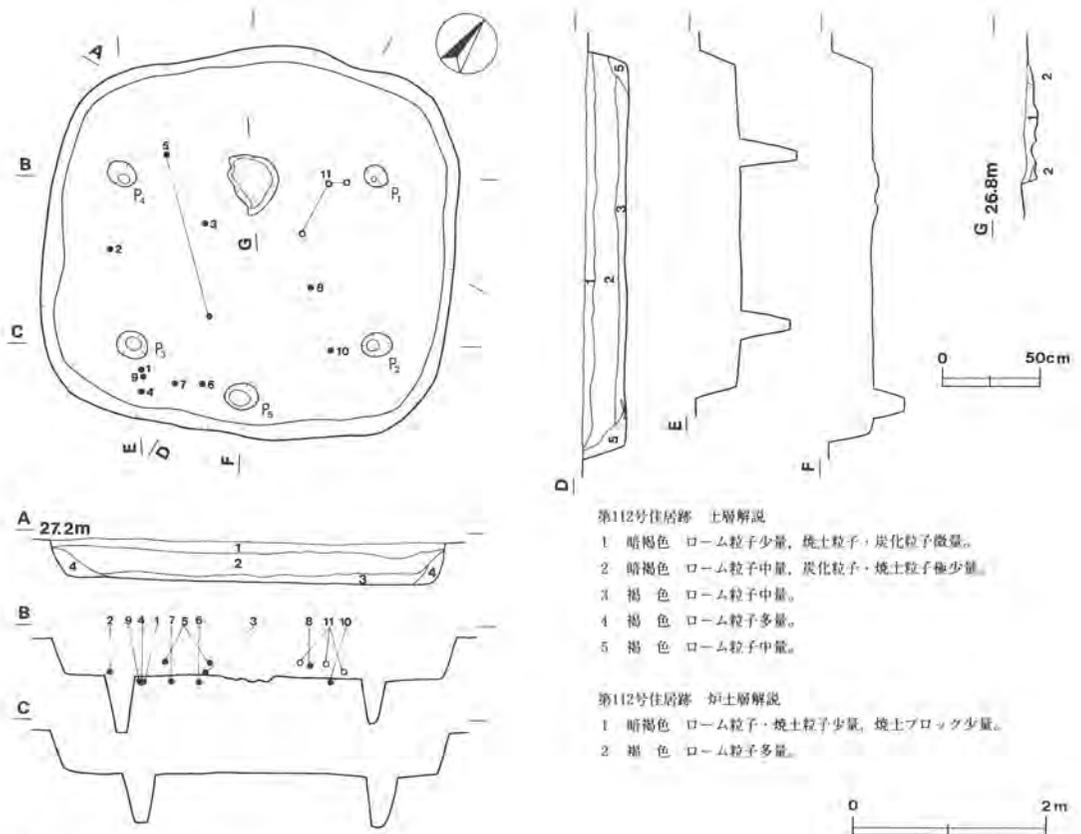
壁 壁高38~46cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，全体に踏み固められている。

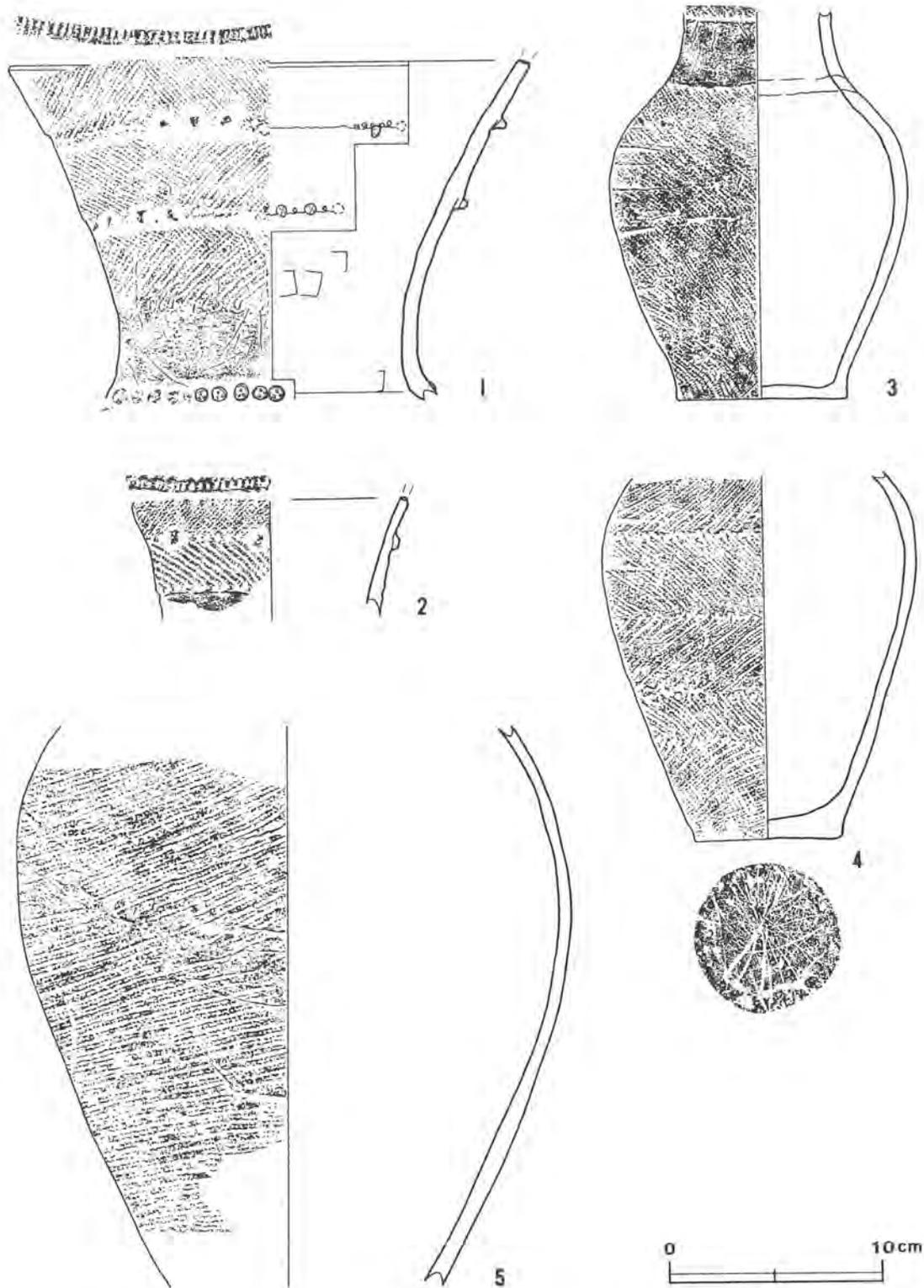
ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，長径26~34cm，短径22~30cmの楕円形で深さ48~64cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は，長径38cm，短径30cmの楕円形で深さ30cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央からやや北寄り，P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結んだ線上の中央にあり，平面形は長径68cm，短径48cmの不整半円形で，床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

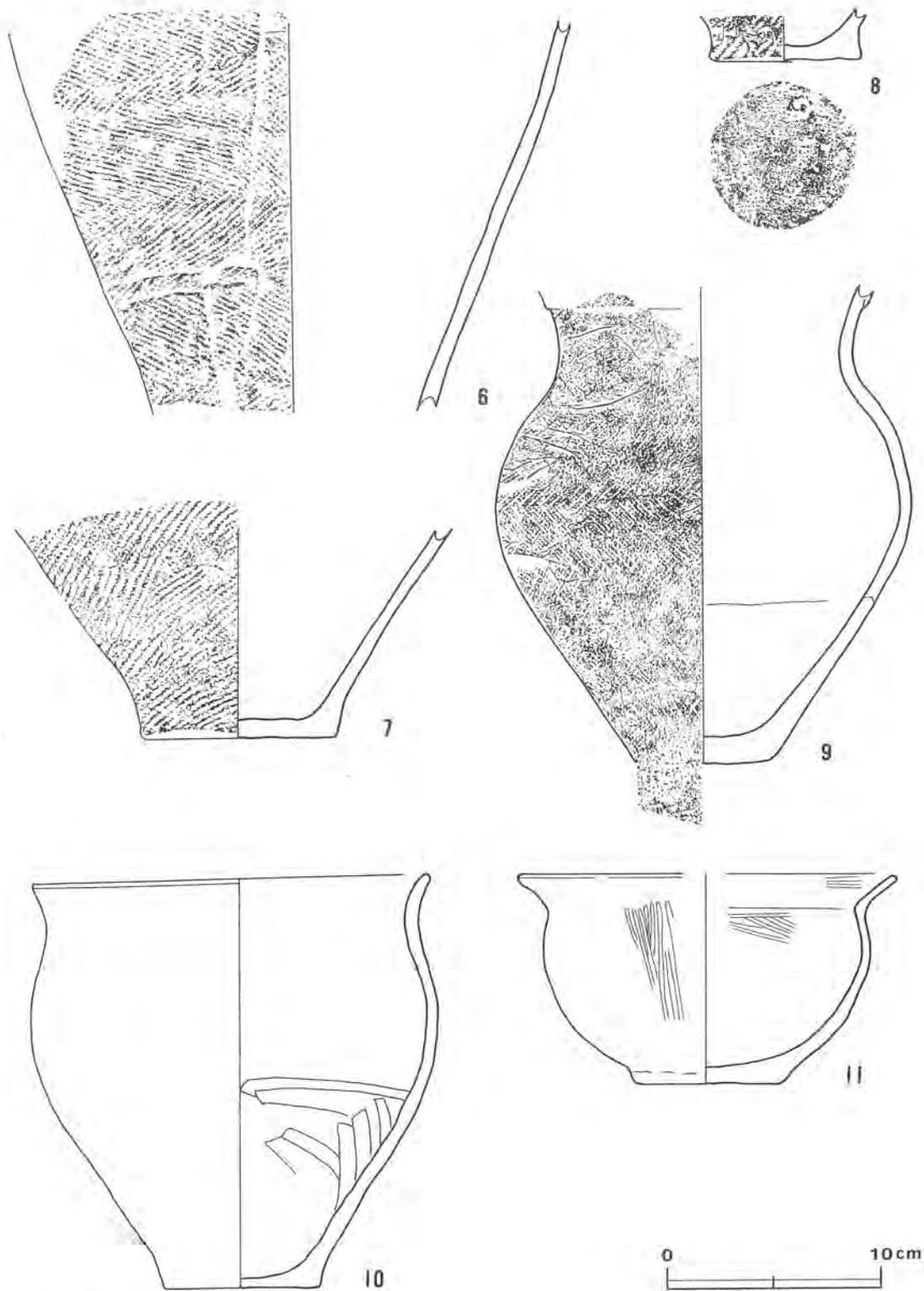
覆土 各壁際は褐色土で，中央部の覆土は3層から成る。下層は褐色土で，上・中層は焼土・炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。遺物は，中・下層全体から出土している。



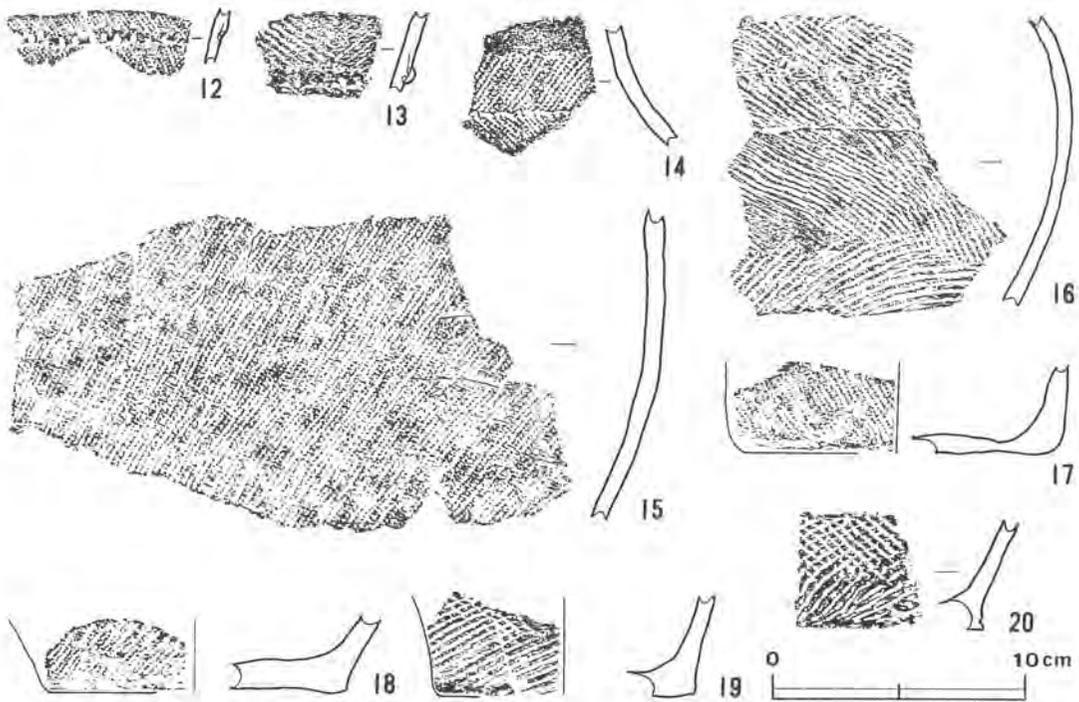
第36図 第112号住居跡実測図



第37图 第112号住居跡出土遺物実測図(1)



第38図 第112号住居跡出土遺物実測図(2)



第39図 第112号住居跡出土遺物拓影図(3)

遺物 1～9は弥生式土器広口壺である。1・4・6・7・9は、南コーナーの床面直上から一括して出土しており、正位の1の口縁部内に9が正位で納まった状態で出土した。2の口縁部は南西壁寄りの覆土下層から、5は西コーナー付近の覆土中層から、8の底部は中央部の覆土中層から横位で出土している。10の蓋は、東コーナー付近の床面直上から横位で出土している。11の土師器小形鉢は、北コーナー付近の覆土中層から破片で出土している。

所見 P<sub>3</sub>とP<sub>5</sub>の間の床面直上から数個体の壺が一括で、しかも重ね合わせた状態で出土しており、住居内空間の利用方法を知るうえで貴重な遺物である。当遺跡内では、本跡は小型である。

本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第112号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第37図	広口壺 弥生式土器	A 24.3 B (16.0)	頭部から口縁部にかけての破片。口縁部は頭部から外傾して立ち上がる。2段の複合口縁で1・2段目下端には棒状工具による刺突文が周回し、さらに3個1組の瘤が6単位にわたり貼り付けられている。頭部上半から口唇部にかけて附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。頭部上半と口縁部ではそれぞれ別の羽状構成をとっている。頸部下半を無文帯とし、下端にはボタン状の瘤が3個貼り付けられ、棒状工具による刺突文が3か所ずつ施されている。頭部内面はヘラナデ、口縁部内面は横位のナデ。	砂粒、石英、長石 スコリア 橙色 普通	P122 20%
2	広口壺 弥生式土器	A (12.8) B ( 5.6)	口縁部片。口縁部は頭部から外反して立ち上がる。縄文施文の単口縁で、中央に縄文原体による押圧と瘤が施されている。口唇部にはキザミ目が施されている。内面は横位のナデ。	砂粒、石英、長石 雲母 にぶい黄橙色 普通	P123 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第37図 3	広口壺 弥生式土器	B(18.3) C 8.1	底部から頸部にかけての破片。平底で胴部は底部から内彎して、頸部は外反して立ち上がる。頸部下半を無文帯としてそれ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。頸部内面に輪積み痕がある。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P124 60%
4	壺 弥生式土器	B(17.2) C 7.0	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒,石英,長石 スコリア 橙色 普通	P125 60% 二次焼成 外面スス附着
5	壺 弥生式土器	B(26.5)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。羽状構成はとらない。	砂粒,石英,長石 スコリア 明黄褐色 普通	P126 30%
第38図 6	壺 弥生式土器	B(18.5)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒,石英,長石 スコリア 橙色 普通	P127 10%
7	壺 弥生式土器	B( 9.9) C 9.0	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には単節縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 橙色 普通	P128 10%
8	壺 弥生式土器	B( 2.5) C 7.2	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には前々段多条の縄文が施されている。底面には薄く木葉痕がある。	砂粒,石英,長石 橙色 普通	P129 5%
9	広口壺 弥生式土器	B(22.5) C 6.3	口縁部一部欠損。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。頸部から口縁部にかけて外反する。縄文施文の複合口縁部である。頸部は無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文を施し、羽状構成をとる。頸部・胴部とも内面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 スコリア にぶい褐色 普通	P131 85% 外面スス附着
10	広口壺 弥生式土器	A 18.2 B 19.5 C 7.2	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がる。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部は内・外面横位のナデ、胴部は外面ナデ、内面ヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P132 95%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 11	小形鉢 土師器	A(17.7) B 9.9 C 6.9	平底で突出している。体部は底部から内彎して立ち上がり口縁部は外反して大きく開く。	体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。口縁部外面ナデ、内面ハケ目調整。	バミス、スコリア にぶい橙色 普通	P133 60%

第39図12~20は、第112号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。12・13は縄文施文の複合口縁で、下端には棒状工具による刺突文が施されている。13は縦回転による羽状構成をとっている。14は頸部から口縁部にかけての破片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。15・16は縄文施文の胴部片で、16は羽状構成をとる。17~20は底部片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、19・20は羽状構成をとっている。

### 第113号住居跡(第40図)

位置 G地区北西部、G5a3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.10m、短軸3.82mの隅丸方形である。

主軸方向 N-44°-W

壁 壁高38~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部から炉周辺とP3・P5周辺がよく踏み固められている。

ピット 4か所。P1~P3は、径30~34cmの円形で、深さ40~70cmの主柱穴である。主柱穴を結ん

だ線は二等辺三角形となる。P<sub>1</sub>は、長径26cm、短径22cmの楕円形で深さ34cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

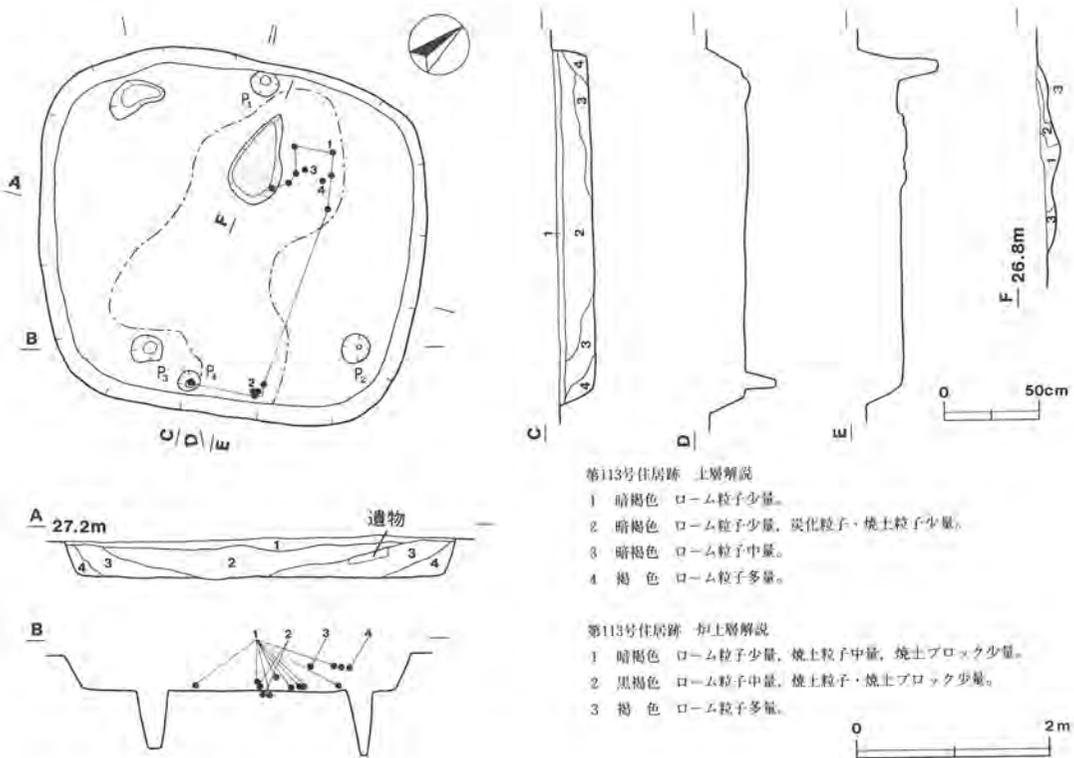
炉 中央から北西寄りでP<sub>1</sub>の近くにあり、平面形は長径102cm、短径56cmの不整楕円形で、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、南東部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 各壁際は褐色土で、中央部の覆土は3層からなる暗褐色土である。第2層が厚めに堆積し、焼土・炭化粒子を含んでいる。遺物は、覆土中層である第2層から多く出土している。

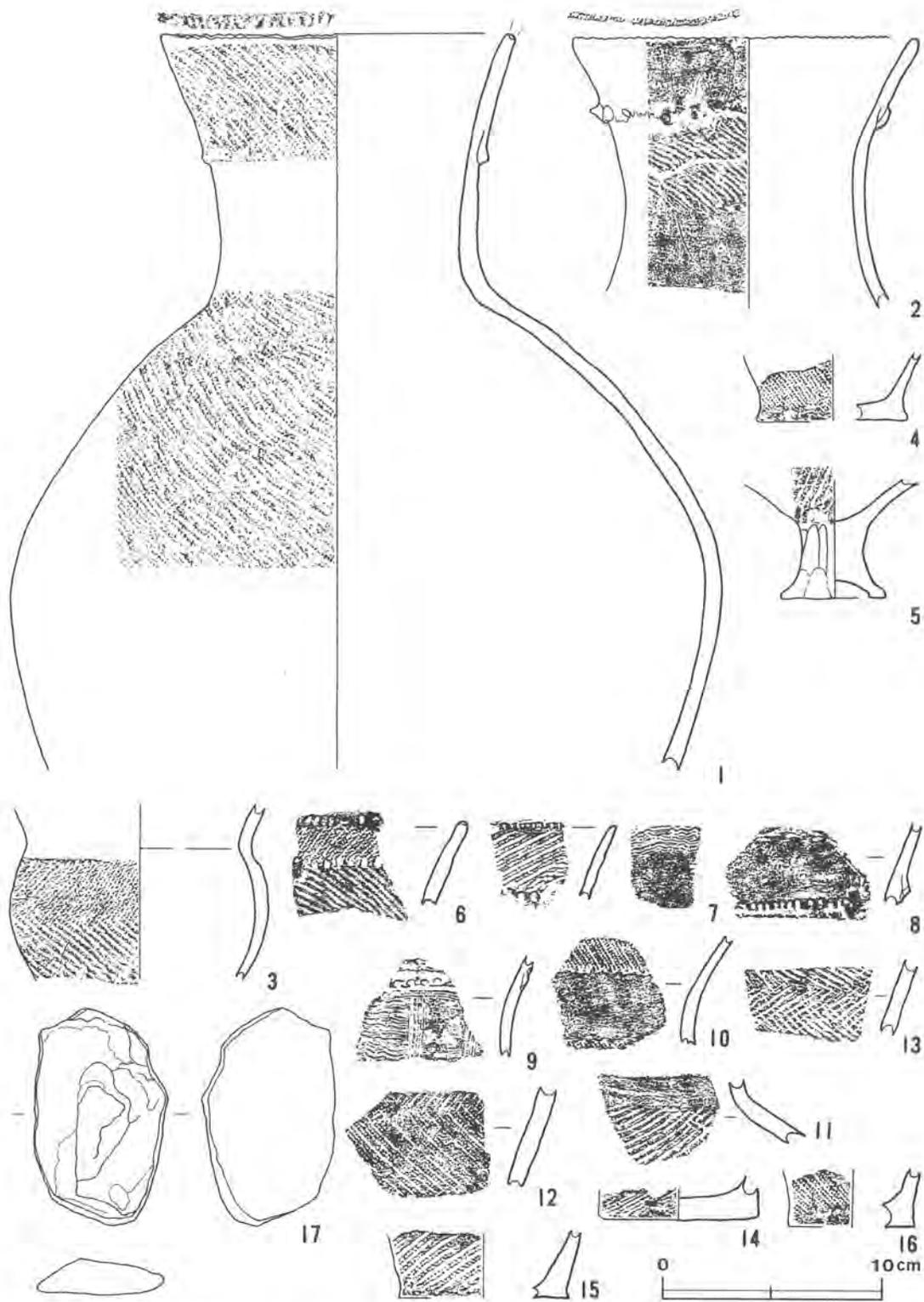
遺物 1～4は弥生式土器広口壺で、1は中央部覆土中層から、2の口縁部は南東壁際の床面直上から横位で、3・4は北コーナー付近の覆土中層から破片でそれぞれ出土している。5は高杯で、南東壁際の覆土中層から出土している。17は北東壁寄りの覆土中層から出土している。

所見 北コーナー付近の覆土から弥生式土器片が一括して出土しており、第3層が形成されて間もなく北方向から投げ込まれたものと思われる。当遺跡での3本柱の住居跡は本跡のみである。

西コーナー壁際に、長径60cm、短径30cmの不定形で深さ4cmの落ち込みがあり、覆土中には鉄錆の様な物が見られた。鉄があった可能性も考えられる。当遺跡内では、本跡は小型である。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第40図 第113号住居跡実測図



第41图 第113号住居跡出土遺物実測・拓影図

第113号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.2 B(34.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形状に内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部は無文帯としほかは附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。複合口縁で、口唇部にはキザミ目が施されている。	砂粒,石英,長石 スコリア にぶい橙色 普通	P134 50%
2	広口壺 弥生式土器	A 16.0 B(12.4)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけては外反して立ち上がる。無文の複合口縁で、下端に縄文原体による押圧が施され、さらに2個1組の瘤が6単位貼られている。頸部上半と口唇部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。頸部下半を無文帯とする。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P135 20%
3	壺 弥生式土器	B(8.2)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は球形状に内彎して立ち上がり、頸部は外反する。頸部を無文帯とし、胴部には2種類の附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい黄橙色 普通	P136 15% 外面スス付着
4	壺 弥生式土器	B(3.1) C[6.9]	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 スコリア 橙色 普通	P137 5%
5	高坏 弥生式土器	B(5.5) D 4.7 E 3.2	口縁部欠損。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。坏部は外反して大きく開く。脚部外面はヘラケズリされている。坏部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 スコリア 明黄褐色 普通	P138 80%

第41図6～16は、第113号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6～9は口縁部片である。6・7は、口唇部にはキザミ目、口縁部下端には棒状工具による刺突文が施されている。7の内面上位には、櫛歯状工具による横走波状文が密に施されている。8は、口縁部下端が棒状工具により刺突され、さらに瘤が貼られている。9は、頸部と口縁部を櫛歯状工具による横走文で区画し、頸部はスリット手法により区画され、充填波状文が施されている。10・11は、附加条1種(附加2条)の縄文が施された頸部片である。12・13は胴部片で、羽状構成をとっている。14～16は底部片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第41図17	不明石製品	10.1	6.2	1.8	142.1	ホルンフェルス	覆土中層	Q16 穂積具の可能性有り

第115号住居跡(第42図)

位置 G地区西端部, G5b1区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の上から第17号住居跡が、本跡の壁の大部分を掘り込んでいる。

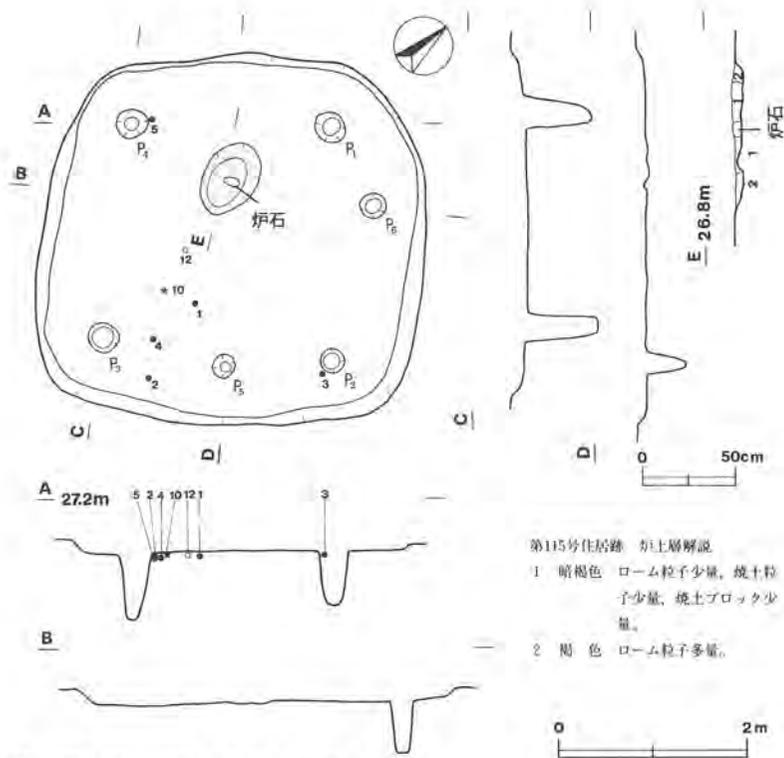
規模と平面形 長軸4.07m, 短軸4.05mの隅丸方形である。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高8～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部から炉周辺がよく踏み固められている。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径26～34cmの円形で、深さ58～76cmの主柱穴である。主柱穴を結



第42図 第115号住居跡実測図

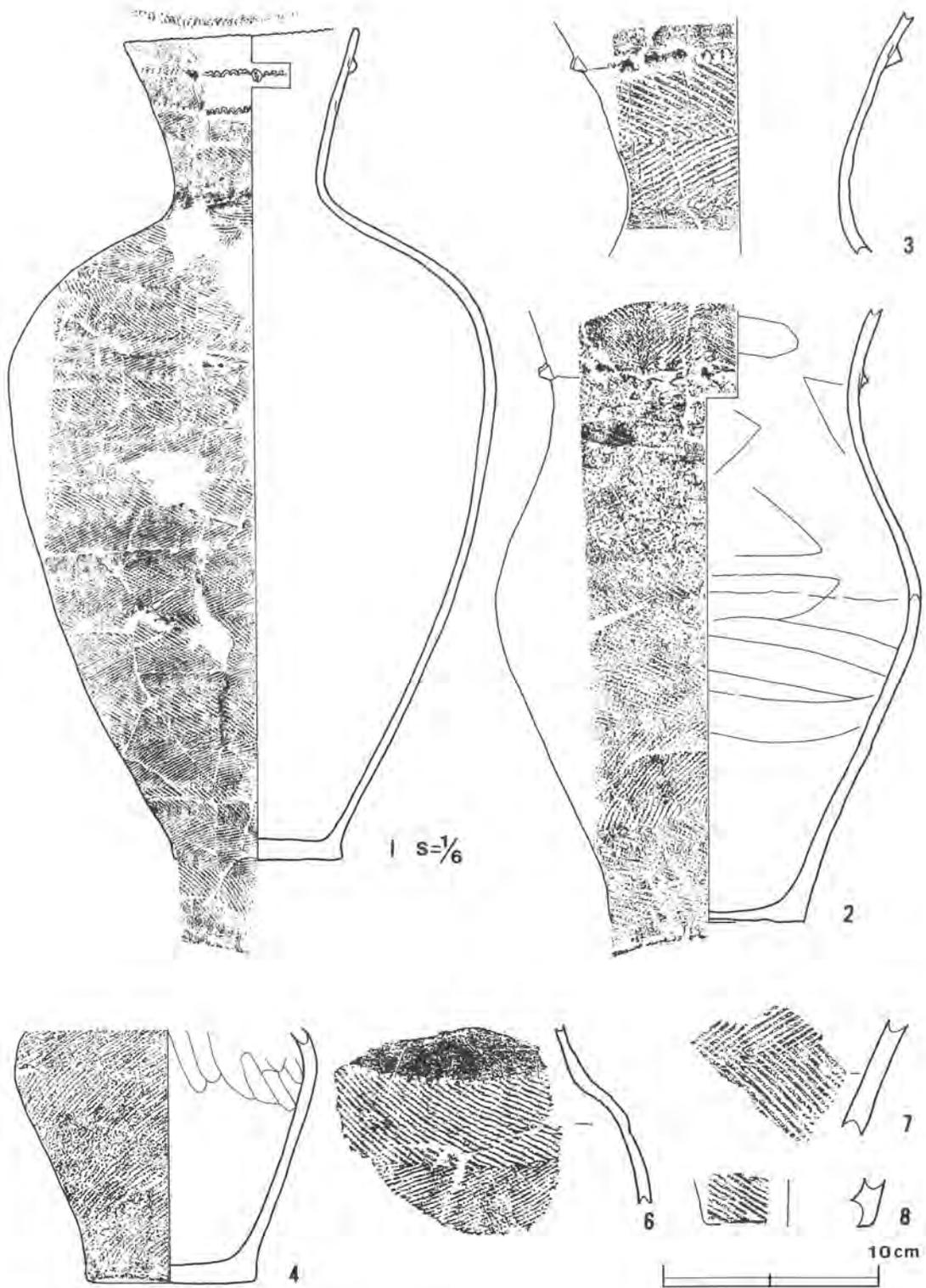
んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は、径26cmの円形で深さ44cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>は、径26cmの円形で深さ56cmの補助柱穴である。炉 中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径84cm、短径58cmの楕円形で、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。炉の中央部に長さ約20

cm、幅約10cmの炉石があり、炉の長軸と直交するように置かれている。

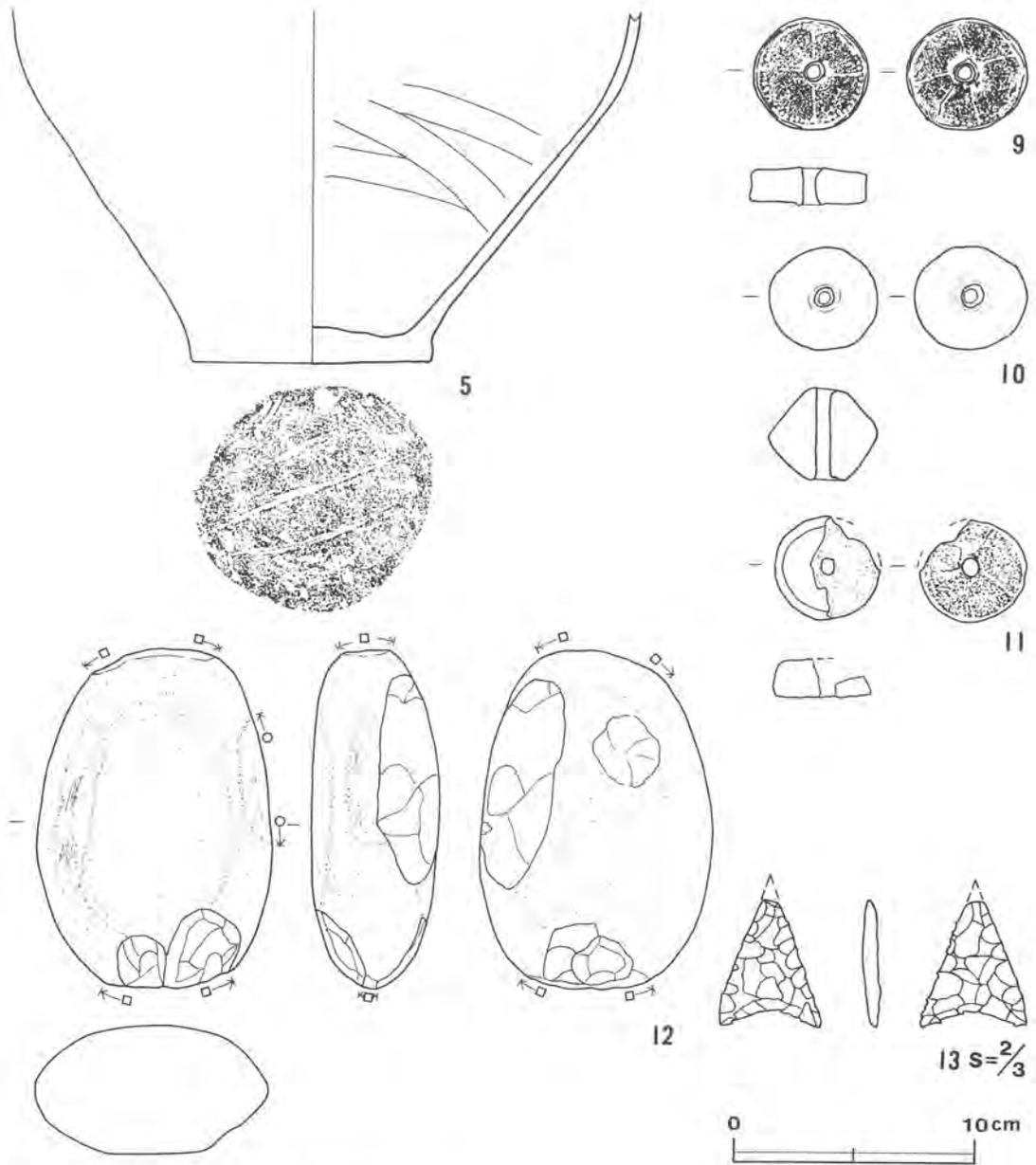
覆土 本跡と重複している第17号住居跡により覆土のほとんどが掘り取られているため、土層の観察は不可能である。

遺物 1・2は弥生式土器広口壺で、1は南東壁寄りの床面直上からつぶれた状態で、2は南東壁際の床面直上から横位でそれぞれ出土している。3の口縁部は東コーナーのほぼ床面直上から横位で、4の胴部下半から底部は南東壁寄りの床面直上から正位で、それぞれ出土している。5の胴部から底部は西コーナー付近の床面直上から斜位で出土している。9～11は紡錘車で、9は南コーナー付近から、10と11は中央部付近から、それぞれ出土している。12の敲石は中央部床面直上から、13の石鏃は北東壁寄りの覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 2の広口壺は、第17号住居跡の床面を作る時に一部破壊されたものと思われ、割れ口と床面が平行でほぼ同一レベルで出土している。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第43図 第115号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第44図 第115号住居跡出土遺物実測図(2)

第115号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第43図	広口壺 弥生式土器	A 22.0 B 77.8 C 15.4	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。最大径を胴部中位に持つ。2段の複合口縁で、1段目には縄文が施され、下端には縮と棒状工具によるキザミ目が施されている。2段目と頸部下半は無文で、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、羽状構成をとっている。口唇部にも縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P165 80%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第43図 2	広口壺 弥生式土器	B(28.6) C 9.0	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。最大径を胴部上位に持つ。複合口縁で、下端に2個1組の瘤が10単位貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P166 20% 内面炭化物付着 頸部外面剥離
3	広口壺 弥生式土器	B(11.2)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。複合口縁部で、下端には縄文原体による押圧が施され、さらに3個1組の瘤が6単位貼られている。口縁部と頸部下位を無文帯とし、それ以外は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P167 30% 外面スス付着
4	壺 弥生式土器	B(11.9) C 7.8	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 明黄褐色 普通	P168 50% 外面炭化物付着
第44図 5	壺 弥生式土器	B(14.8) C 9.9	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部外面にはナデ、内面にはヘラナデがされている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 スコリア にぶい橙色 普通	P170 50% 二次焼成

第43図6～8は、第115号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6は胴部から頸部にかけての破片で、7は胴部片、8は底部片である。いずれも胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、6・7は羽状構成をとっている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第44図9	紡錘車	4.6	4.8	1.6	8.0	43.7	100	床面直上	D P 9
10	紡錘車	4.3	4.5	3.8	8.0	63.3	100	床面直上	D P 10
11	紡錘車	4.4	(4.3)	1.6	6.0	(26.6)	55	床面直上	D P 11

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第44図12	敲石	14.2	9.6	5.3	1011.3	砂岩	床面直上	Q23 磨石兼用
13	石鏝	(2.7)	2.1	0.4	(1.6)	安山岩	覆土中層	Q25 先端部欠損

### 第116号住居跡(第45図)

位置 G地区東端部、G5c6区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西壁は第114号住居跡に掘り込まれ、北コーナーから南東壁にかけての床面は第5・6号溝に掘られている。

規模と平面形 長軸〔6.29〕m、短軸5.75mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-36°-W

壁 壁高20～44cmで、外傾して立ち上がっている。

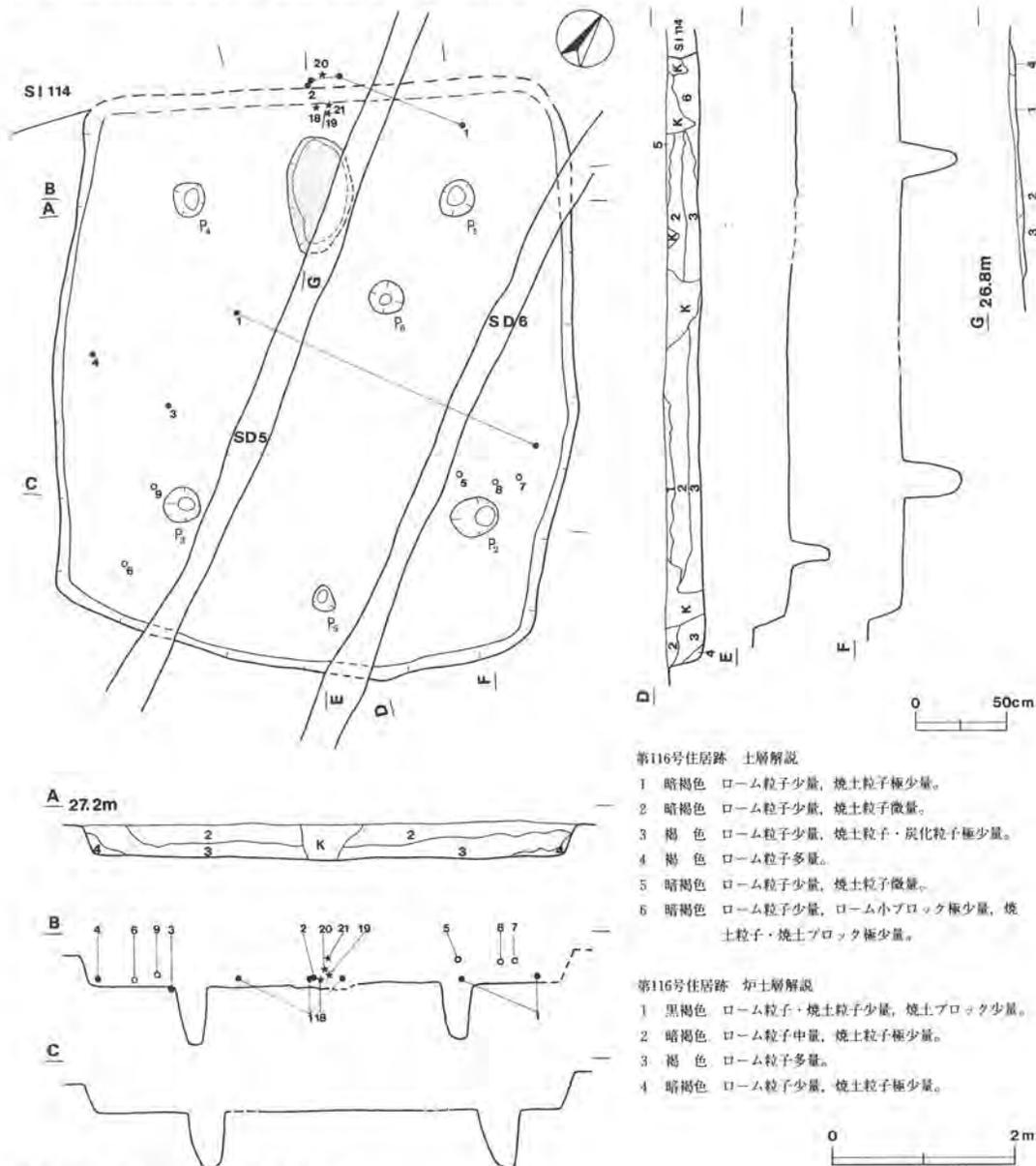
床 平坦で、中央部がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径38～52cm、短径34～44cmの楕円形で、深さ60～66cmの主柱穴である。P<sub>2</sub>はP<sub>3</sub>側に傾斜している。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は、長径30cm、短径24

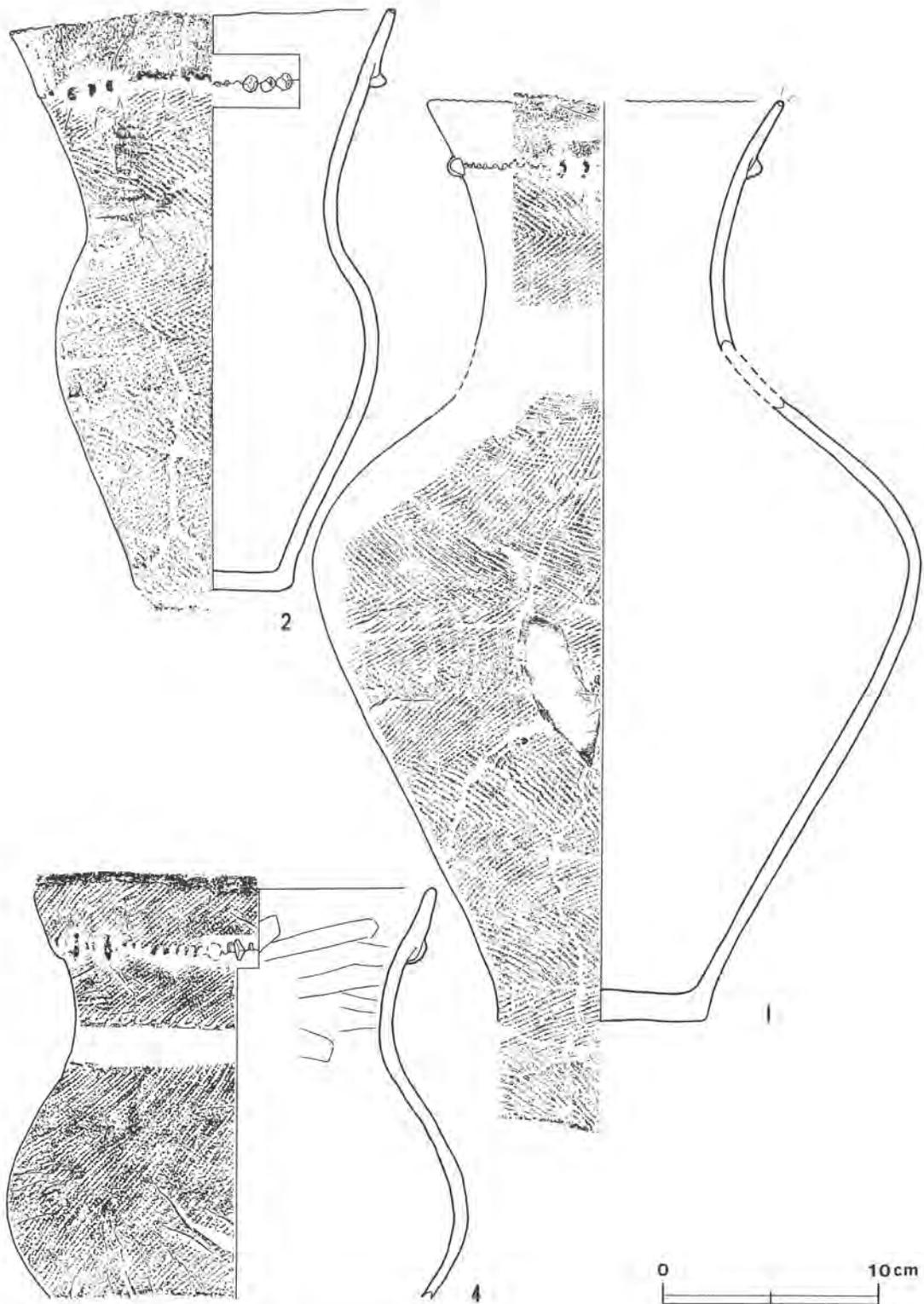
cmの不整楕円形で深さ45cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央から北西寄りのP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の中間にあり、平面形は長径128cm、短径74cmの楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、北西寄り熱を受け赤変硬化している。

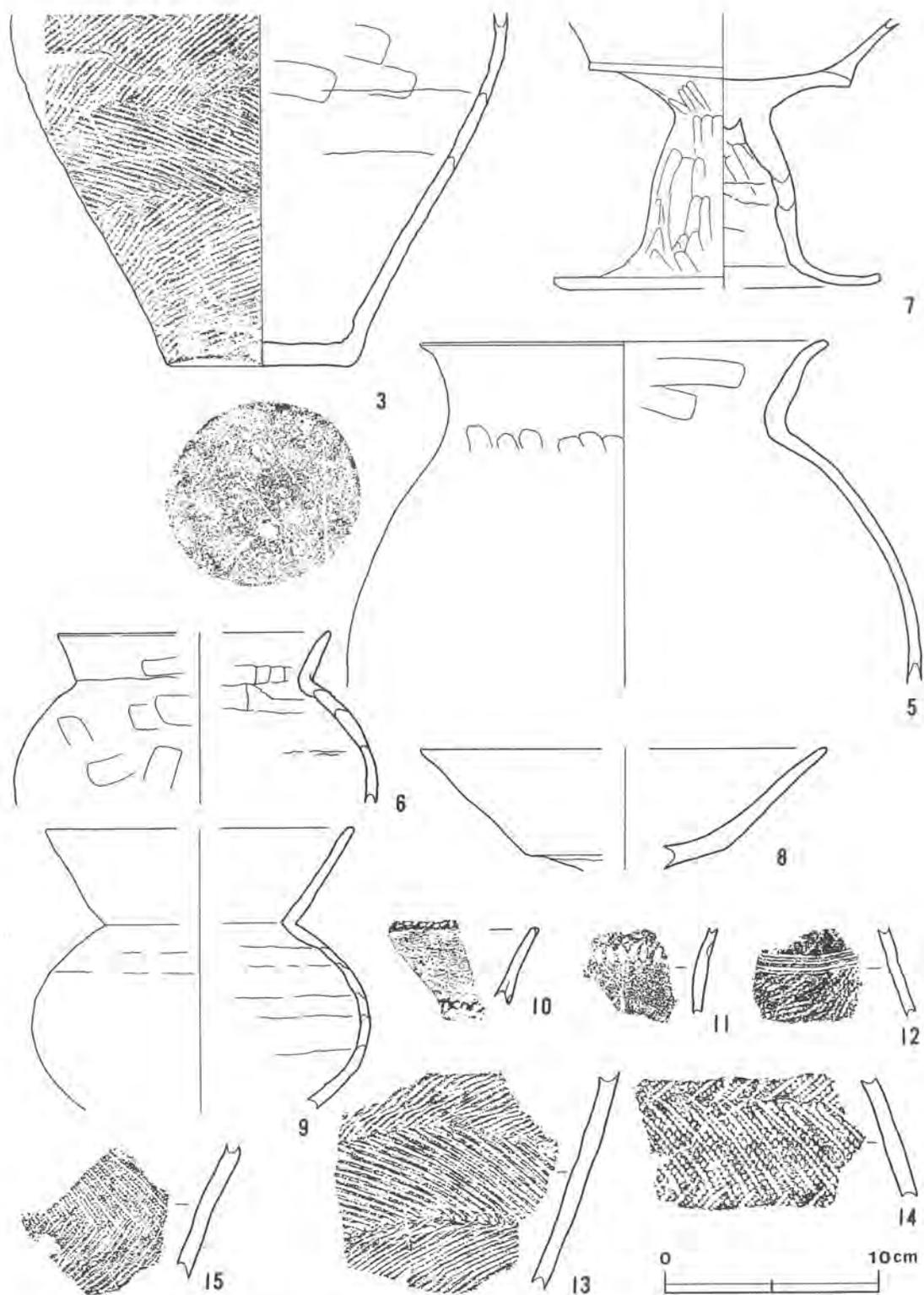
覆土 壁際には褐色土が薄く堆積し、南東壁側は焼土粒子、炭化粒子をわずかに含む。中央部覆土は2層からなり、下層は焼土粒子、炭化粒子を含む褐色土が、中層は焼土粒子をわずかに含む暗褐色土が厚めに堆積している。覆土各層中から弥生式土器片、土師器片が出土している。上層から下層間に達している攪乱は第5・6号溝によるものである。



第45図 第116号住居跡実測図

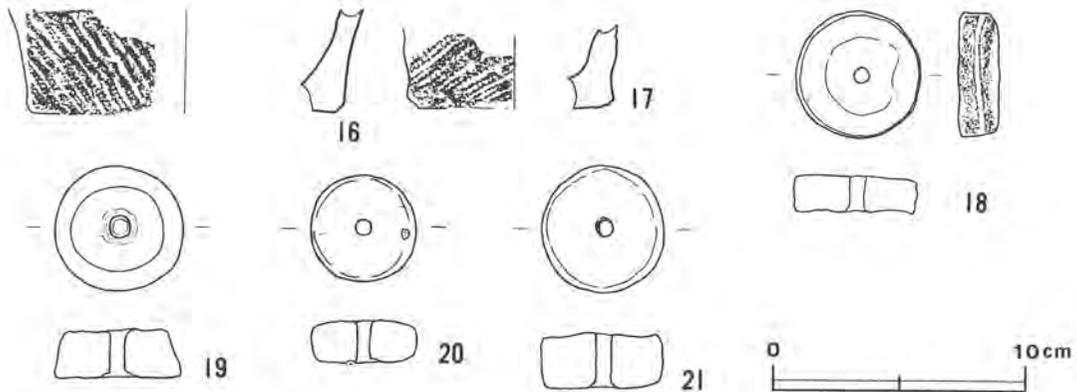


第46図 第116号住居跡出土遺物実測図(1)



第47図 第116号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

遺物 1～4は弥生式土器広口壺である。1・2は北西壁際中央部の覆土下層からつぶれた状態で、3は胴部から底部にかけてで南東壁寄りの床面から破片で、それぞれ出土している。4は口縁部から胴部上半で、南西壁中央部の壁際の床面直上から正位で出土している。5・6の土師器甕は、5が北東壁寄りの覆土上層から、6は南コーナーの床面近くから出土している。7・8は高坏で、東コーナー付近の覆土中層から一括の破片で出土している。9の罎は、南コーナー付近の覆土下層から出土している。18～21の紡錘車は、北西壁際の覆土下層から一括で出土している。所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第48図 第116号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

第116号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	広口壺 弥生式土器	A[16.4] B[40.8] C 9.4	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。最大径を胴部上位に持つ。複合口縁で、下端には刺突文が周回し、さらに2個1組の瘤が6単位貼られている。口縁部を無文とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 明赤褐色 普通	P171 70%
2	広口壺 弥生式土器	A 17.7 B 27.1 C 7.3	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外傾する。最大径を口縁部に持つ。複合口縁で、下端には縄文原体による押圧が施され、さらに3個1組の瘤が6単位貼られている。口縁部と頸部下位を無文とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にふい橙色 普通	P172 70% 内・外面炭化物付着 二次焼成
第47図 3	壺 弥生式土器	B(16.6) C 8.8	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、横回転による羽状構成をとる。底面には木葉痕がある。内面はヘラナデされ、輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 明赤褐色 普通	P173 50% 内・外面炭化物付着
第46図 4	広口壺 弥生式土器	A 18.5 B(19.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は頸部から外反する。複合口縁で、下端には刺突文が周回し、さらに2個1組の瘤が6単位貼られている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。口縁部から頸部にかけて内面ヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 明黄褐色 普通	P174 50%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 5	甕 土師器	A 19.2 B(16.3)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は球形状で、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内面ヘラナデ、外面ナデ。 頸部外面ヘラナデ。	砂粒、石英、長石 スコリア 明赤褐色 普通	P 175 30% 内・外面炭化物付着
6	甕 土師器	A[12.6] B( 8.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は球形状で、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内、外面ヘラナデ。体部 外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘ ラナデ、輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 176 20% 外面スス付着
7	高 土師器 坏	B(12.6) D[15.3] E 8.4	口縁部欠損。脚部はラッパ状で 裾部はほぼ水平に開く。坏部は 下位に稜を持ち、外傾して立ち 上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ヘ ラナデ、内面ヘラナデ。輪積み 痕有り。	砂粒、石英、雲母 スコリア 明赤褐色 普通	P 177 70%
8	高 土師器 坏	A[19.0] B( 5.7)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち 外傾して開く。	坏部内・外面ナデ。	砂粒、雲母、スコ リア 明赤褐色 普通	P 178 20%
9	埴 土師器	A[14.3] B(13.2)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は偏平な球形状で、最大径 を中位にもつ。口縁部は外傾し て立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部外面 ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒、雲母、スコ リア にぶい橙色 普通	P 179 30% 外面スス付着

第47・48図10～17は、第116号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10は複合口縁で、口唇部と口縁部下端は縄文原体で押圧されている。11は頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部下端は棒状工具によって刺突され、頸部には格子目文が施されている。12は胴部から頸部にかけての破片で、胴部と頸部を6本櫛歯による横走文で区画し、頸部に格子目文を施している。13～15は縄文施文の胴部片で、いずれも羽状構成をとっている。縄文原体は、13・14は附加条1種（附加2条）、15は附加条1種（附加2条）と附加条1種（附加1条）である。16・17は胴部に附加条1種（附加2条）の縄文施文の底部片である。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第48図18	紡錘車	4.9	5.0	1.5	7.0	47.2	100	覆土下層	D P 12
19	紡錘車	5.0	5.0	1.9	9.0	(54.8)	95	覆土下層	D P 13
20	紡錘車	4.2	4.2	1.2	6.0	(35.3)	95	覆土下層	D P 14
21	紡錘車	5.0	4.8	2.1	7.0	65.2	100	覆土下層	D P 15

### 第118号住居跡（第49図）

位置 G地区南部，G5hs区を中心に確認されている。

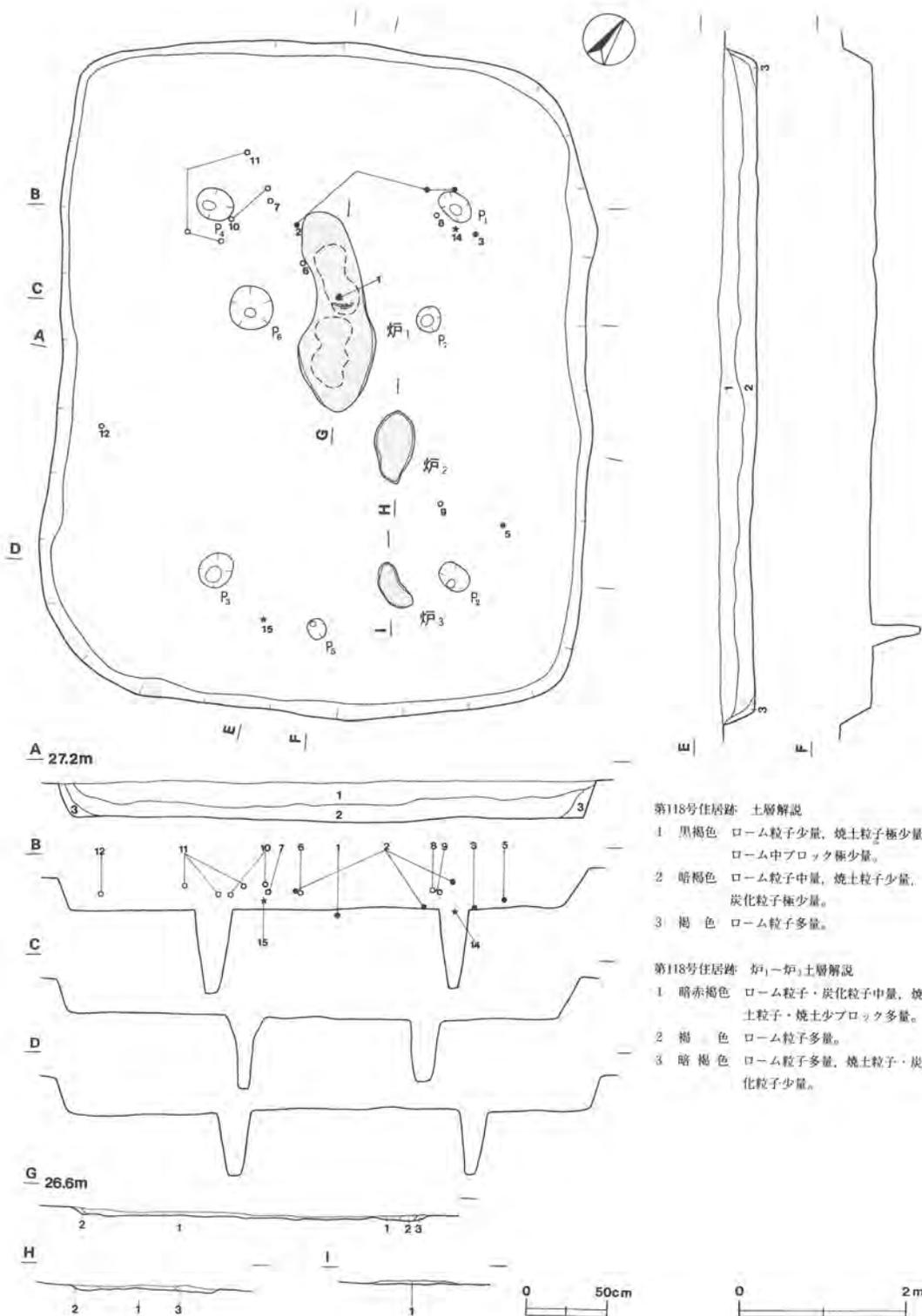
規模と平面形 長軸8.30m，短軸6.36mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-39°-W

壁 壁高40～54cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部と炉<sub>1</sub>周辺がよく踏み固められている。

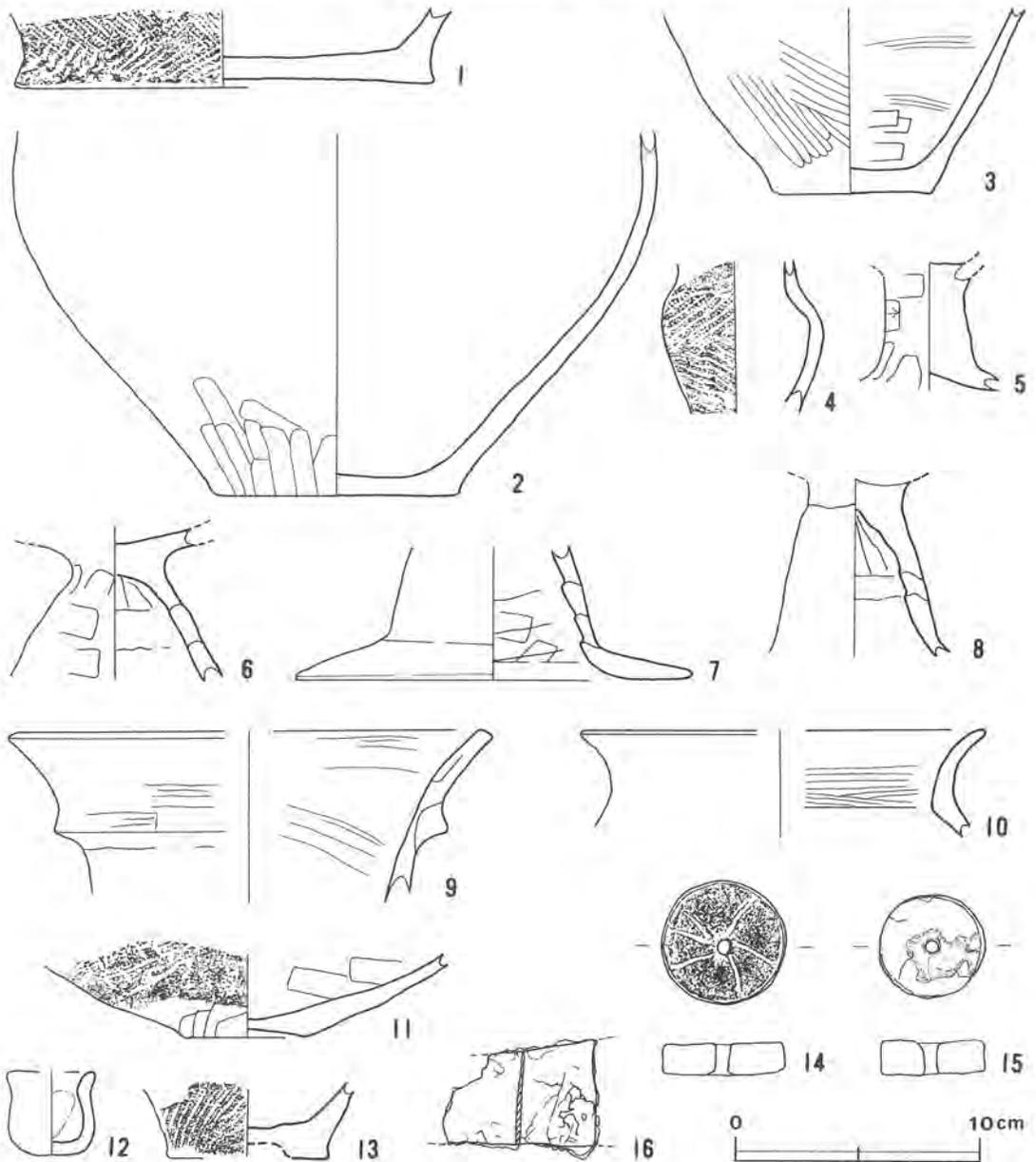
ピット 7か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径40～46cm，短径28～38cmの楕円形で、深さ80～104cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は、径12cmの円形で深さ62cmの出入口施設に伴う



第49図 第118号住居跡実測図

ピットと思われる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は、径32～50cmの円形で深さ78～92cmの補助柱穴である。

炉 3か所。炉<sub>1</sub>は、中央からやや北西寄りのP<sub>6</sub>とP<sub>7</sub>の中間にあり、平面形は長径246cm、短径92cmの不定形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は熱を受けて赤変硬化し、中央部で南東側と北西側にわずかに切れ南東側の炉床は北西側の炉床よりやや低い。炉の中央部に、大型の広口壺と思われる底部を3分割した土器片が、割れ口を上にして立てた状態で出土している。炉<sub>2</sub>は、中央からやや東寄りの位置で、平面形は長径90cm、短径50cm不整楕円形で床を4cm掘り込ん



第50図 第118号住居跡出土遺物実測・拓影図

だ地床炉である。炉床は、中央部がよく熱を受け赤変硬化している。炉<sub>3</sub>は、炉<sub>2</sub>の南東方向でP<sub>2</sub>とP<sub>5</sub>を結ぶ線上中央にあり、平面形は長径62cm、短径26cmの不定形で床を2cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際には褐色土が堆積し、中央部は2層からなっている。第2層は、焼土粒子、炭化粒子を含む暗褐色土で、第1層はローム中ブロック、焼土粒子を含む黒褐色土である。第1層と第2層の境付近から多くの土師器片が出土している。

遺物 1・3は弥生式土器広口壺で、3は北コーナー付近の覆土下層から破片で、1は炉床から3片が一括で、それぞれ出土している。4は小形壺で覆土中から、5は高坏の脚部で北東壁寄りの覆土中層から、それぞれ出土している。6～8は、土師器高坏の脚部で覆土中から出土している。2・9は壺で、2はP<sub>1</sub>付近の床面から破片で、9の口縁部はP<sub>2</sub>付近の覆土中層から破片で、それぞれ出土している。10・11は甕で、覆土第1層と第2層の境界付近から破片で、それぞれ出土している。12は手捏土器で、南西壁寄りの覆土上層から、16は覆土中から出土している。14・15の紡錘車は、14が炉の北側の床面から、15が南東壁寄りの覆土中層から出土している。

所見 炉<sub>1</sub>は当遺跡内の他の住居跡の炉に比べてかなり長く、また中央部で炉床にわずかであるがレベル差があり拡張か、作り替えた可能性が高い。炉石の代わりとして使われたと考えられる土器片が、炉<sub>1</sub>の中央に出土しているが、炉が北西側へ作り替えているとすると他の住居跡から出土している炉石の位置とほぼ同じになる。ピットの配列からみてもP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>を主柱穴としてP<sub>5</sub>を共有し、炉<sub>1</sub>の南東側半分を炉とする住居跡の時期があり、その後北西側に炉を作り替え、P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>を主柱穴として住居跡を拡張したと考えられる。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

#### 第118号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	壺 弥生式土器	B(3.2) C 17.4	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 197 5%
2	壺 弥生式土器	B(15.2) C 10.0	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部下位外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 198 30% 二次焼成 外面スス附着
3	壺 弥生式土器	B(7.8) C 6.5	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部下位外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 明赤褐色 普通	P 199 30%
4	小形壺 弥生式土器	B(6.4)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部を無文とし胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 200 50% 外面スス附着
5	高坏 弥生式土器	B(5.3)	脚部片。脚部は「ハ」の字状で、裾部では水平に広がる。脚部外面はヘラケズリ後ナデられている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 201 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 6	高坏 土師器	B(6.4) E(5.0)	脚部片。脚部は「ハ」の字状である。	脚部外面ヘラナデ、内面上位指ナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、雲母にふい橙色 普通	P202 20%
7	高坏 土師器	D 16.4 E(5.6)	裾部から脚部にかけて破片。脚部は「ハ」の字状で裾部で水平に広がる。	脚部外面ナデ、内面ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、雲母明赤褐色 普通	P203 30% 二次焼成
8	高坏 土師器	E(7.3)	脚部片。脚部はラッパ状である。	脚部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、スコリアにふい橙色 普通	P204 15%
9	壺 土師器	A[20.0] B(7.3)	口縁部片。口縁部は複合口縁で外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。	砂粒、石英、スコリアにふい橙色 普通	P205 5%
10	甕 土師器	A[16.8] B(4.5)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面ナデ、内面ハケ目調整。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアにふい橙色 普通	P206 5%
11	甕 土師器	B(3.4) C 5.0	底部から体部下半にかけての破片。平底で体部は内彎気味に立ち上がる。	底部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。体部下半外面に沈線有り。	砂粒、石英、長石にふい褐色 普通	P207 5% 外面スス付着
12	手捏土器 土師器	A[3.7] B 3.6 C 2.8	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ、内面指ナデ。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアにふい橙色 普通	P208 60% 内面炭化物付着

第50図13は、第118号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。13は底部片で、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第50図14	紡錘車	5.2	5.1	1.4	6.0	48.4	100	床面直上	D P 16
15	紡錘車	4.3	4.3	1.5	5.0	(38.7)	90	覆土中層	D P 17

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第50図16	鎌	(6.5)	(4.5)	(0.2)	(22.8)	M 3 覆土上層 破片

### 第119号住居跡（第51図）

位置 G地区南東端部，G5h8区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部は、第200号土坑により掘り込まれている。北西壁から南東壁にかけては、第5・6号溝に掘り込まれている。第6号溝は浅いため本跡の床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.88m，短軸4.39mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高18～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、あまり踏み固められていない。

ピット 確認されていない。

炉 確認されていない。

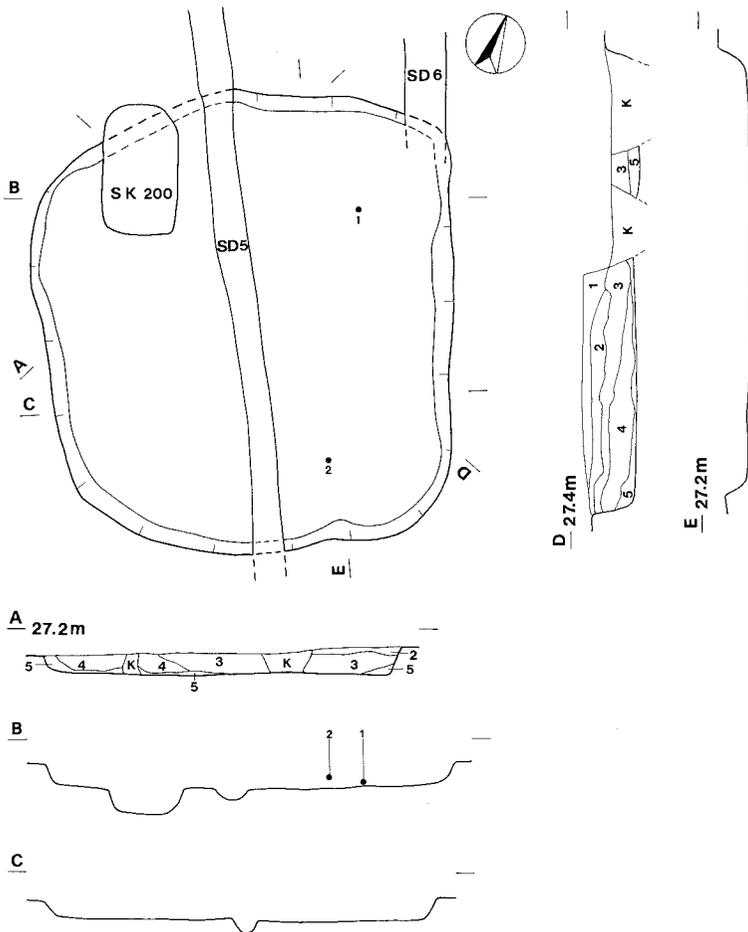
覆土 各壁際から床面にかけて明褐色土が流れ込んでいる。西側は攪乱が数箇所あるが、東側は攪乱を受けていない。第4層は、焼土粒子、炭化粒子を含む褐色土で、第3層は褐色土の中に黒

色土をまだら状に含んでいる。第2層はローム小ブロック、焼土粒子を含む黒褐色土である。

遺物 1は弥生式土器壺で、北コーナー付近の覆土下層から横位で、2は高坏で南東壁寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 覆土第4・5層は自然堆積で、第1～3層は人為体積と考えられる。ピットと炉は確認できなかったが、覆土下層に焼土ブロック、焼土粒子が含まれており溝との重複により破壊されたと考えられる。本跡は、弥生

時代後期後半の時期と思われる。



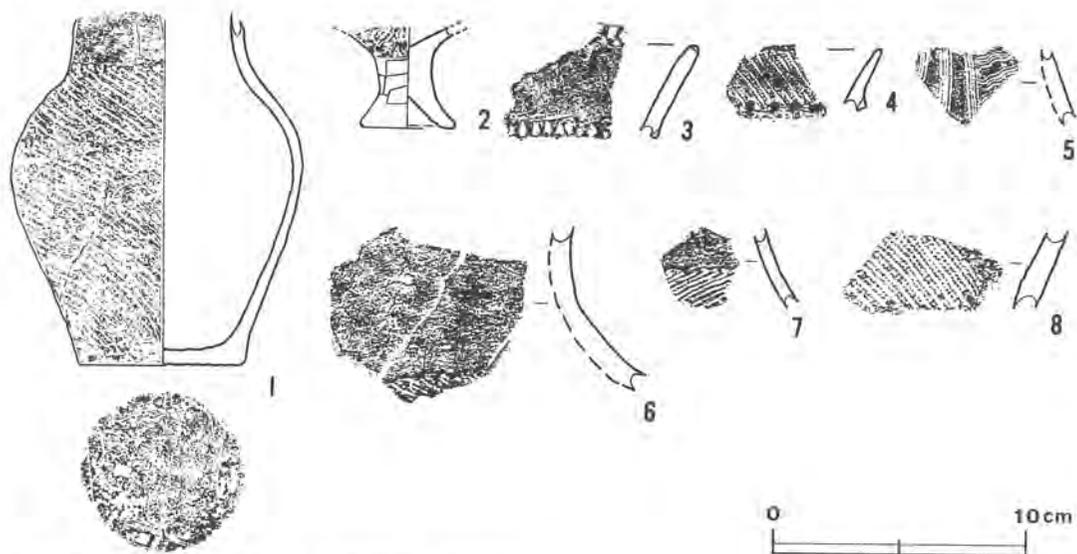
第119号住居跡 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量、黒色土を斑点状に含む。
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量。

第51図 第119号住居跡実測図

第119号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	壺 弥生式土器	B(13.8)	口縁部欠損。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。頸部を無文とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 209 70%
		C 6.3			
2	高坏 弥生式土器	B(4.0)	坏部欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。脚部外面はヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 210 40%
		D 3.7			
		E 2.8			



第52図 第119号住居跡出土遺物実測・拓影図

第52図3～8は、第119号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は口縁部片である。3は、口唇部と口縁部下端が縄文原体により押圧されている。4は附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部下端には瘤が貼られている。5～7は頸部片である。5はスリット手法による縦区画をし、充填波状文が施されている。6・7は頸部を無文とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

### 第120号住居跡（第53図）

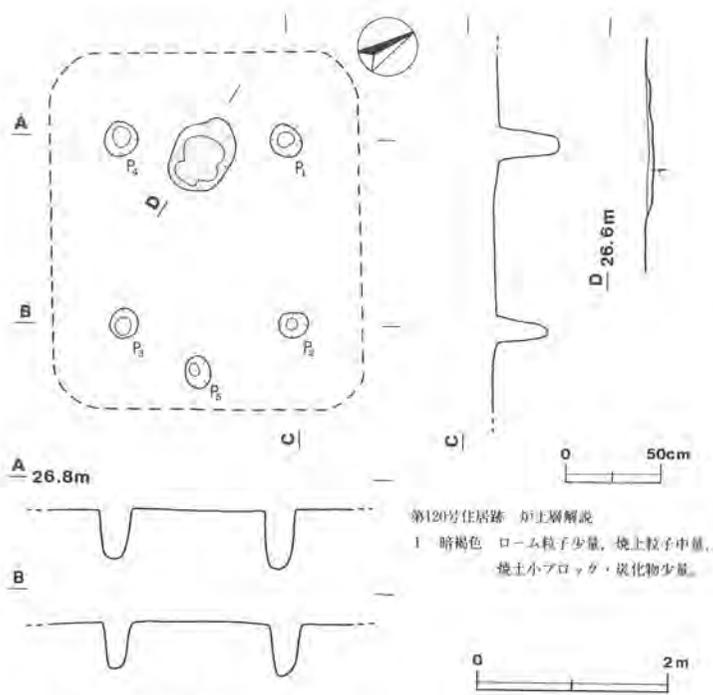
位置 F地区中央部，D5g5区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸[3.83]m，短軸[3.26]mの隅丸長方形と思われる。土取りにより深くまで削平されており，残存しているのは炉とピットのみである。

主軸方向 N-61°-W

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径32～38cmのほぼ円形で深さ50～64cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形である。P<sub>5</sub>は、長径18cm，短径14cmの楕円形で深さ36cmの出入口施設に伴うピットと思われる。床面が削平されているため実際の径・深さはこの計測値よりやや大きくなると思われる。

炉 中央からやや北西寄りにあり，平面形は長径86cm，短径64cmの楕円形で，床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく熱を受け赤変硬化している。上部が削平されているため平面形の計測値は，実際はやや大きくなると思われる。



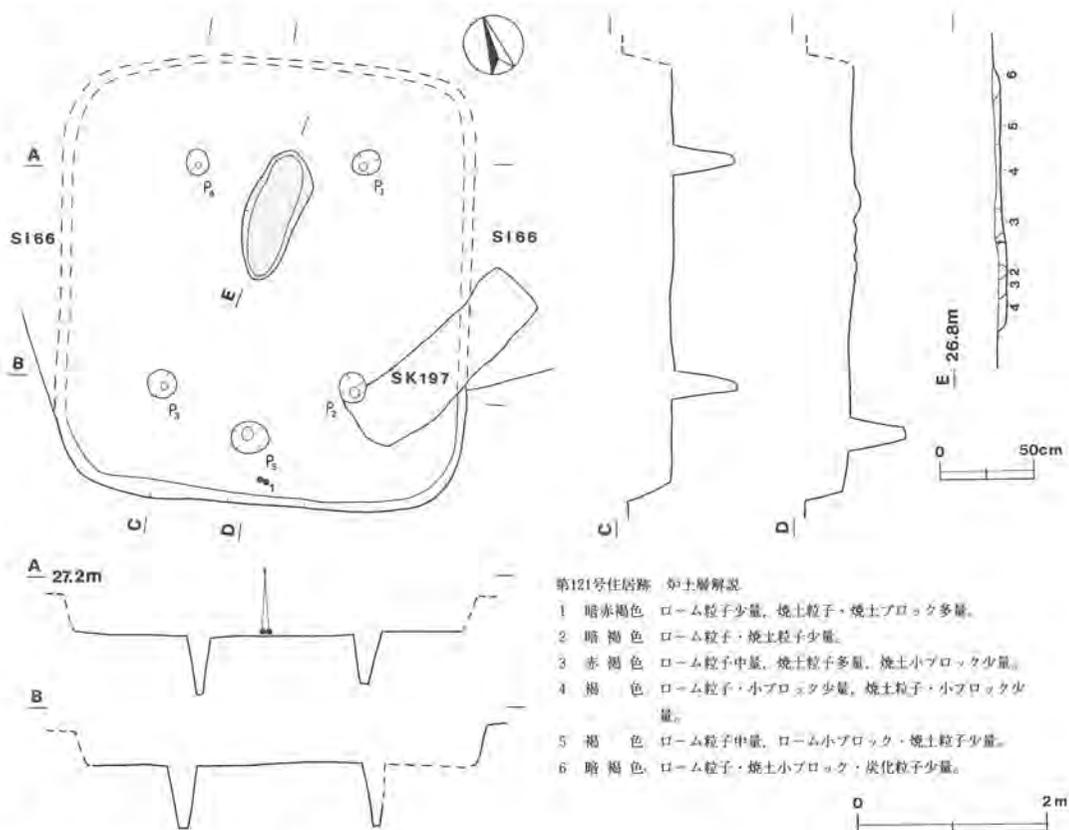
遺物 出土していない。本跡周辺から弥生式土器細片が数点出土している。  
 所見 本跡は出土遺物はないが、確認された炉とピットの配置を基に推定される規模と平面形から判断して、弥生時代後期の時期と思われる。

第53図 第120号住居跡実測図

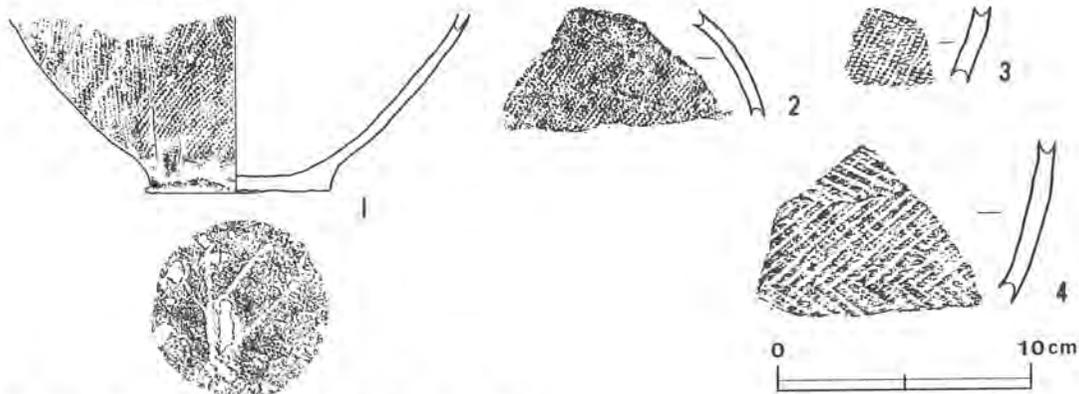
第121号住居跡（第54図）

位置 G地区北西端部、F4h8区を中心に確認されている。  
 規模と平面形 長軸[4.80]m、短軸4.34mの隅丸長方形と思われる。  
 重複関係 南西壁を除くほとんどを第66号住居跡により掘り込まれている。さらに、南東部を第197号土坑により掘り込まれている。  
 主軸方向 N-75°-W  
 壁 壁高38~42cmで、外傾して立ち上がっている。  
 床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。  
 ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径24~32cmのほぼ円形で深さ56~72cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は、長径40cm、短径36cmの楕円形で深さ60cmの出入口施設に伴うピットと思われる。  
 炉 中央からやや北東寄りにあり、平面形は長径144cm、短径55cmの楕円形で、床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。  
 覆土 ほとんど第66号住居跡と重複しているため、覆土のほとんどが掘り取られ確認できない。  
 遺物 1は弥生式土器広口壺で、南西壁際の床面直上から斜位で出土している。  
 所見 本跡と重複している第66号住居跡の大部分は、平成3年度に調査し既に報告されているが、

今回の調査で全体が調査できた。その結果、第66号住居跡のP<sub>15</sub>とP<sub>13</sub>は本跡の一部であることが判明したので改めて報告する。本跡は、弥生時代後期後半の時期と思われる。



第54図 第121号住居跡実測図



第55図 第121号住居跡出土遺物実測・拓影図

第121号 住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	壺 弥生式土器	B(7.0) C 7.2	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、わずかに張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕有り。	砂粒・石英・長石 雲母・スコリア 橙色 普通	P21) 10%

第55図2～4は、第121号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は胴部から頸部にかけての破片、頸部を無文とし胴部には単節縄文が施されている。3・4は胴部片で、どちらも附加条1種(附加2条)の縄文が施され、4は羽状構成をとっている。

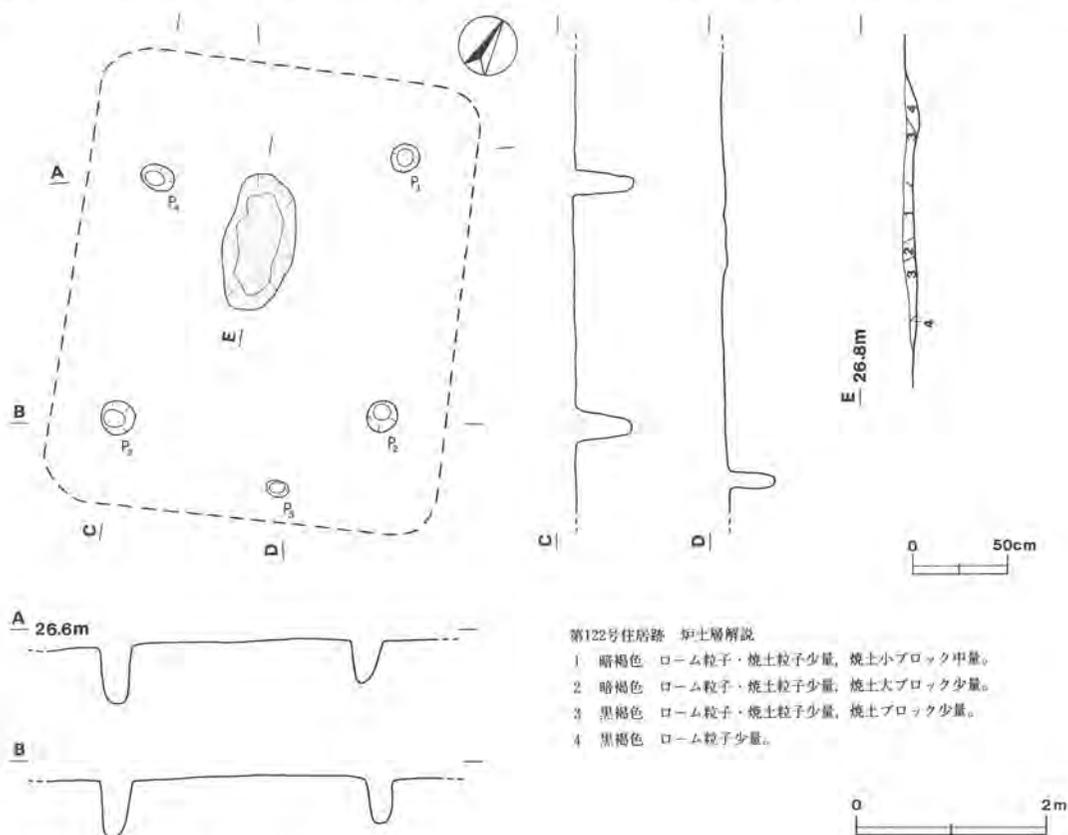
第122号住居跡(第56図)

位置 F地区中央部、D5g1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸[4.88]m、短軸[4.10]mの隅丸長方形と思われる。土取りのため深くまで削平されており、壁と床は確認できない。

主軸方向 N-25°-W

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は径32～36cmの円形で深さ44～60cm、P<sub>4</sub>は長径36cm、短径26cmの楕円



第56図 第122号住居跡実測図

形で深さ64cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P<sub>5</sub>は、長径24cm、短径20cmの楕円形で深さ50cmの出入口施設に伴うピットと思われる。床面が削平されているため実際の径と深さは、この計測値よりやや大きくなると思われる。

炉 中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径148cm、短径74cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。床が削平されているため実際は計測値よりやや大きくなると思われる。

遺物 遺構確認時に出土していた弥生式土器片が数点あるが、本跡に伴うかどうかは判断が困難である。削平時に流れ込んだとも考えられる。



所見 本跡は、遺物の出土地点が不明確なため時期決定は困難であるが、確認できた炉とピットの配置から判断して弥生時代後期の時期と思われる。

第57図 第122号住居跡出土遺物拓影図

第57図1・2は、第122号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は附加条1種(附加2条)、2は附加条2種(附加1条)の縄文が施されている。

#### 第123号住居跡(第58図)

位置 F地区中央部、D5g<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

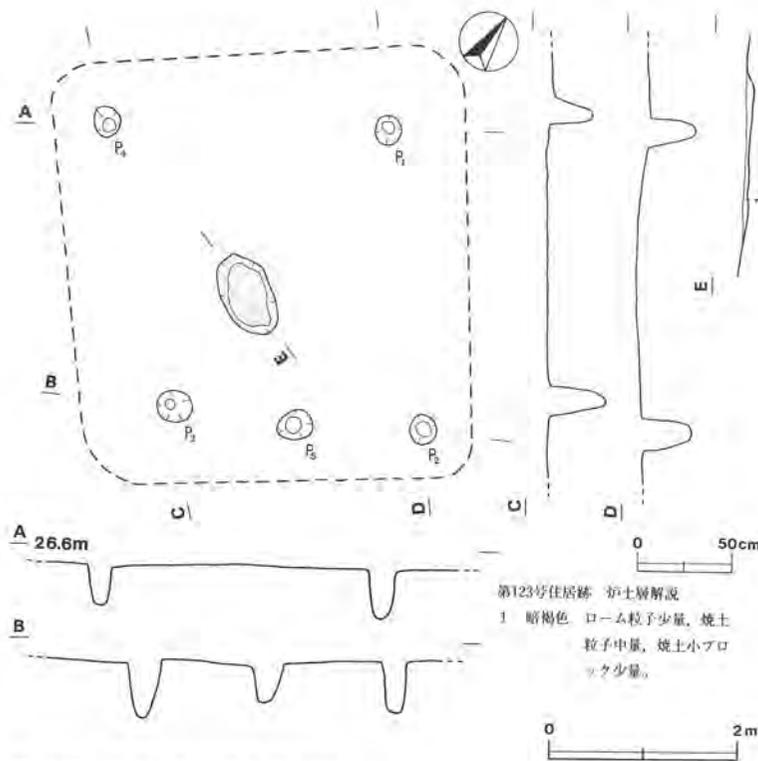
規模と平面形 長軸[4.57]m、短軸[4.27]mの隅丸方形と思われる。土取りのため深くまで削平されており、壁と床は確認できない。

主軸方向 N-35°-W

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径32~38cmのほぼ円形で深さ41~66cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P<sub>5</sub>は、長径38cm、短径32cmの楕円形で深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。床面が削平されているため実際の径と深さは、この計測値よりやや大きくなると思われる。

炉 中央からやや南東寄りにあり、平面形は長径92cm、短径54cmの楕円形で、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。床が削平されているため実際は計測値よりやや大きくなると思われる。

遺物 出土していない。



所見 本跡は、出土遺物がなく時期決定は困難であるが、確認された炉とピットの配置から弥生時代後期の時期と思われる。

第58図 第123号住居跡実測図

第124号住居跡 (第59図)

位置 E地区南東部, F3h8区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.91m, 短軸3.94mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-34°-E

壁 壁高31~43cmで外傾して立ち上がっている。北西壁, 南東壁は攪乱されている。

床 大きく攪乱され中央部の床面は確認できない。原存部は, 平坦で踏み固められて硬い。

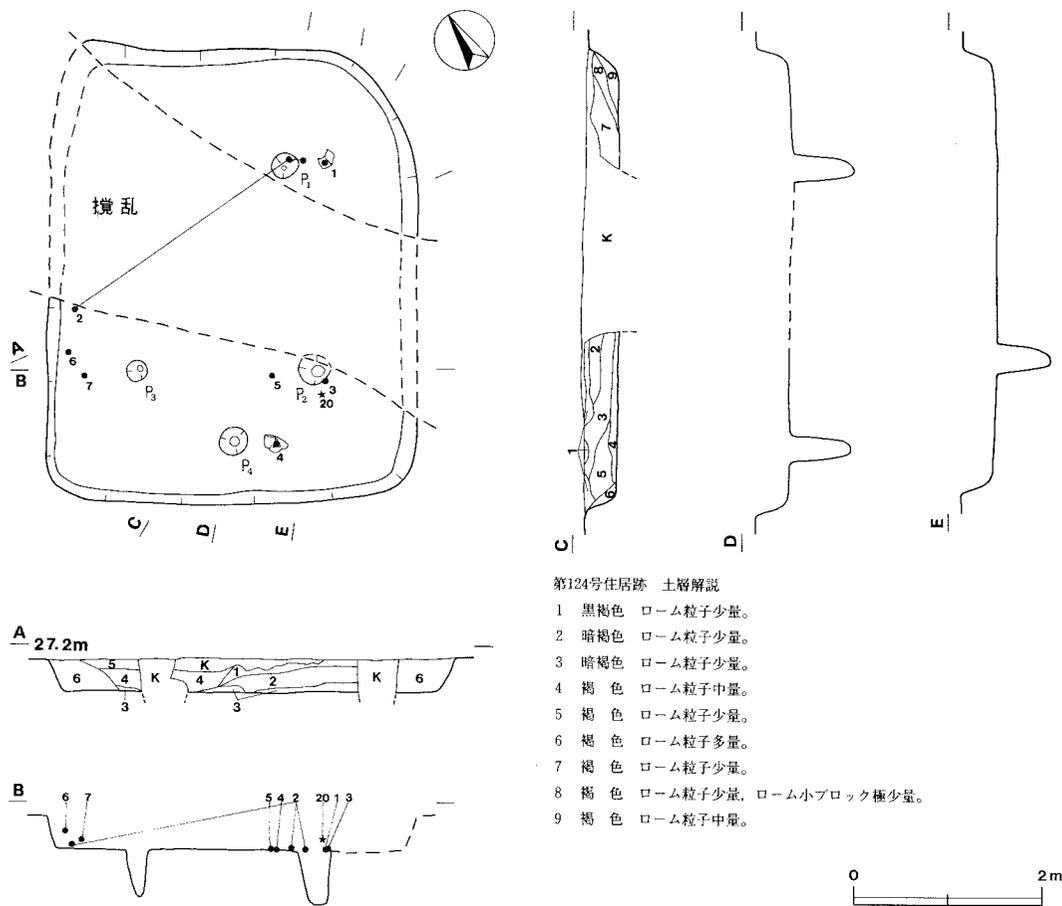
ピット 4か所。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は, 径22~34cmのほぼ円形で, 深さ51~63cmの主柱穴である。P<sub>4</sub>は, 径15cmの円形で深さ63cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 攪乱のため確認できない。

覆土 中央部の覆土は大きく攪乱されているが, 壁よりは原存している。壁際は, ローム粒子多量の褐色土が堆積している。中層はローム小ブロックと焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。

覆土中の遺物は弥生式土器片, 土師器片が, 第6・7層から多く出土している。

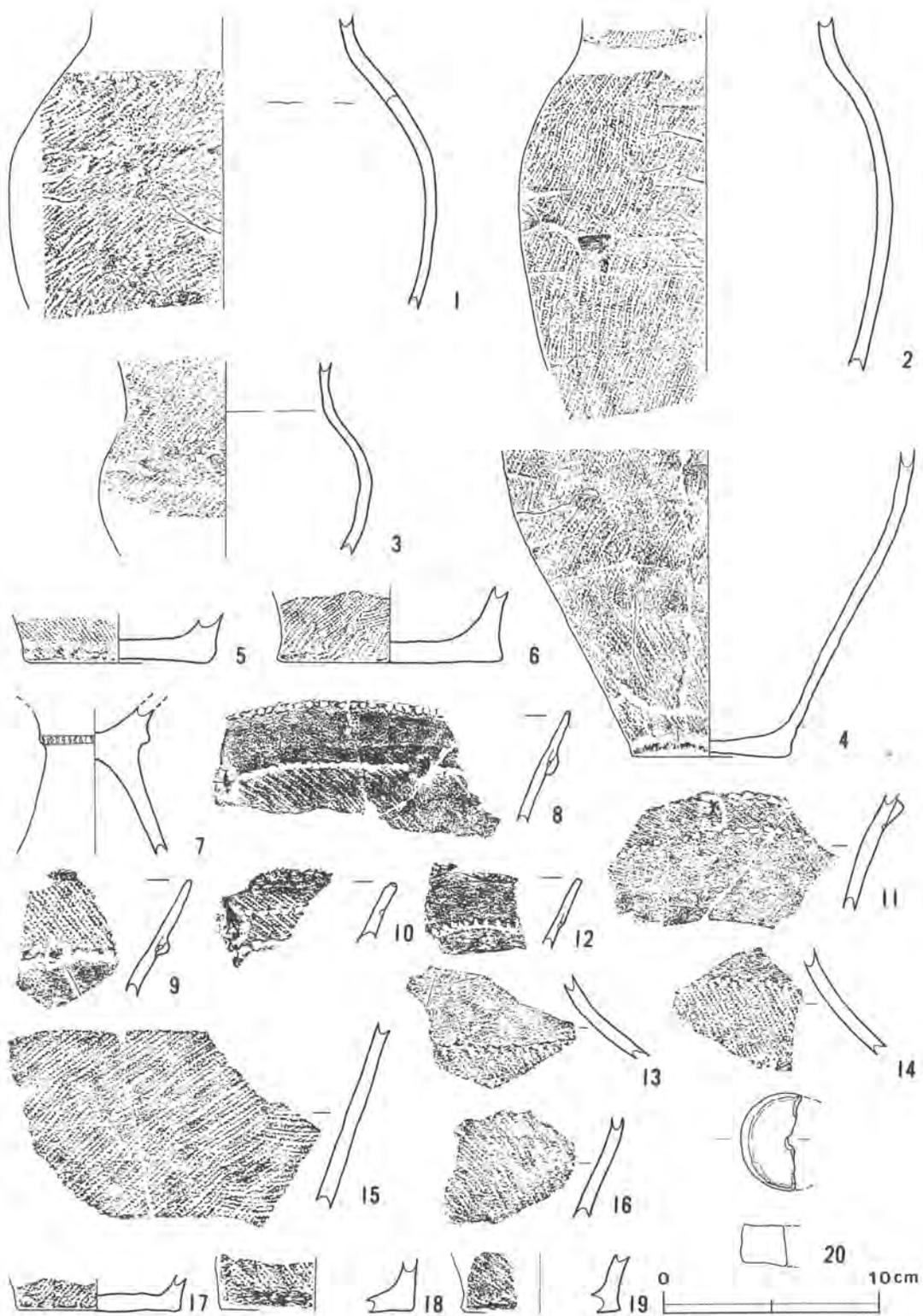
遺物 1~6は, 弥生式土器広口壺である。1・2は胴部で北東コーナー付近の覆土下層から, 3は頸部から胴部で南コーナー寄りの覆土下層から, 4は胴部から底部で南西壁よりの床面付近から破片で, 5は底部でP<sub>2</sub>付近の床面近くから, 6の底部はP<sub>3</sub>付近の覆土中層からそれぞれ出



第59図 第124号住居跡実測図

第124号住居跡出土遺物観察

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	壺 弥生式土器	B(13.6)	胴部上半から頸部下半にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部下半を無文とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。胴部内面に輪轆み痕がある。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい褐色 普通	P 212 20%
2	壺 弥生式土器	B(16.5)	胴部から頸部下半にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がる。頸部下半を無文とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい褐色 普通	P 213 30%
3	壺 弥生式土器	B(9.0)	胴部上半から頸部下半にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反する。頸部下半を無文とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい橙色 普通	P 214 20% 外面炭化物付着 二次焼成
4	壺 弥生式土器	B(14.3) C 7.4	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 明赤褐色 普通	P 215 20% 外面スス付着 二次焼成
5	壺 弥生式土器	B(2.3) C 8.8	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい橙色 普通	P 216 5%
6	壺 弥生式土器	B(3.6) C 10.4	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい橙色 普通	P 217 5%
7	高坏 弥生式土器	B(6.8) E(4.9)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。坏部と脚部の接合部に突帯が有り、そこにキザミ目を施している。脚部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。赤彩されている。	石英,スコリア バミス 赤褐色 普通	P 218 30%



第60图 第124号住居跡出土遺物実測・拓影图

土している。7の土師器高坏の脚部は、北東壁中央付近の覆土下層から出土している。20の紡錘車は、P<sub>2</sub>付近の覆土中層から出土している。

所見 支柱穴は3か所で、もう1か所は攪乱により確認できなかったが4本柱の住居跡と考えられ、支柱穴を結んだ線は不整形と思われる。本跡は、住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と思われる。

第60図8～19は、第124号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8～12は口縁部片である。8・9は縄文施文の複合口縁で、瘤が貼られている。10・11は縄文施文の単口縁で、縄文原体による2列の押圧が施され、その間に瘤が貼られている。12は複合口縁で、下端に棒状工具によるキザミ目が施されている。13・14は、胴部から頸部にかけての破片で、頸部下半を無文とし胴部には縄文が施されている。15・16は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。17～19は底部片で、胴部には縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第60図20	紡錘車	4.5	(2.8)	(1.9)	—	(28.8)	50	覆土中層	D P 18

## (2) 古墳時代の住居跡

### 第17号住居跡（第61図）

位置 G地区西端部、G5b<sub>1</sub>区を中心に確認されている。南西部は、平成3年度に調査済で既に報告されている。

重複関係 本跡は第115号住居跡の壁全面と覆土中層までを掘り込み、その上に構築している。

規模と平面形 長軸8.50m、短軸〔7.80〕mの不整形である。

主軸方向 N-27°-W

壁 壁高9～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉周辺は踏み固められている。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>については、既に報告されている。P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は、径16～18cmのほぼ円形で、深さ55～58cmの支柱穴である。P<sub>6</sub>は、径30cmの円形で深さ63cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

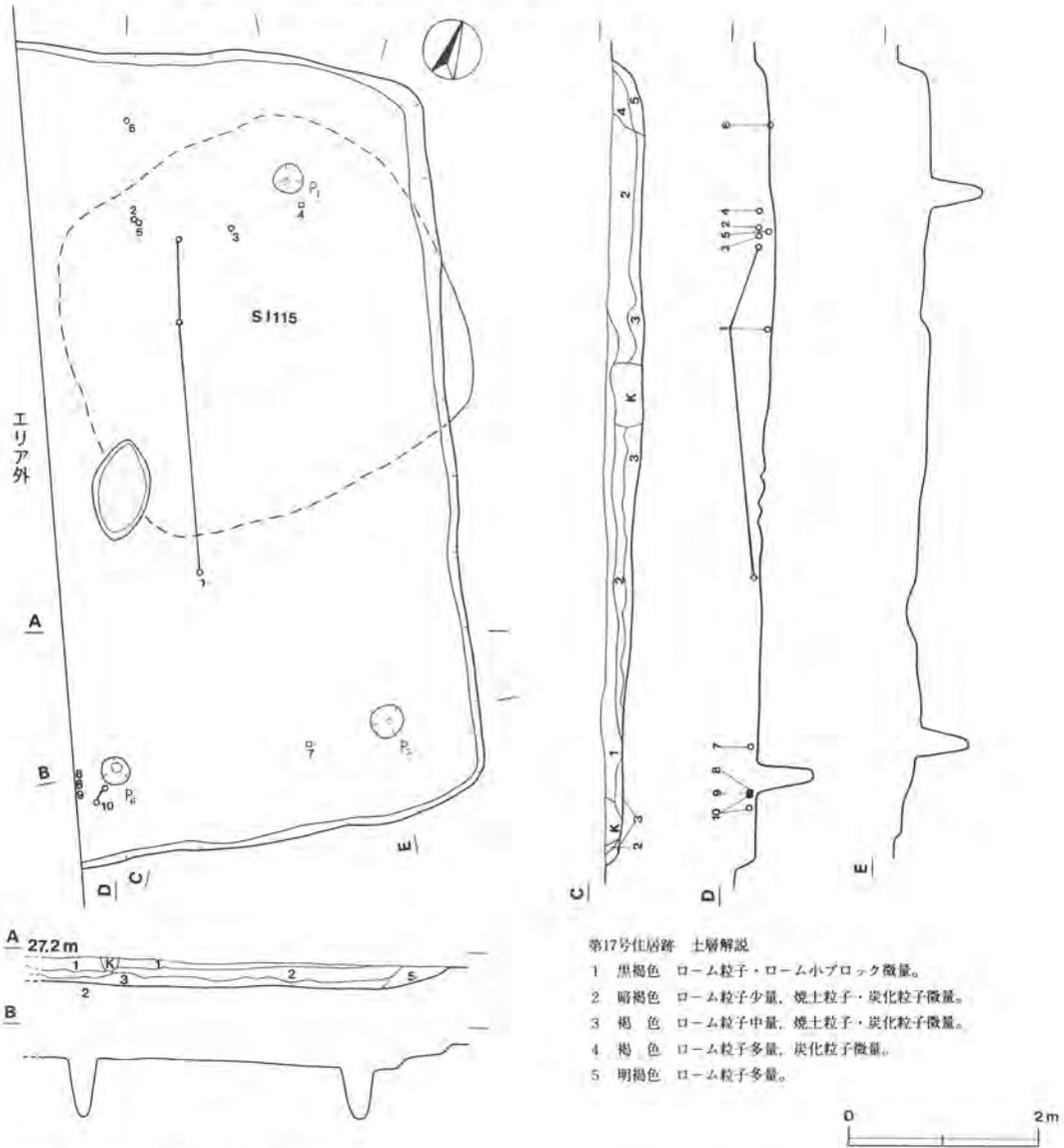
炉 3か所。炉<sub>1</sub>・炉<sub>2</sub>については既に報告済である。炉<sub>3</sub>はほぼ中央にあり、平面形は長径110cm、短径62cmの楕円形で、床を2cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 北東・北西壁際には、明褐色土が堆積しているが、南東壁際は焼土粒子・炭化粒子をわずかに含む褐色土が堆積している。覆土中・下層は、炭化粒子・焼土粒子をわずかに含み、上層に

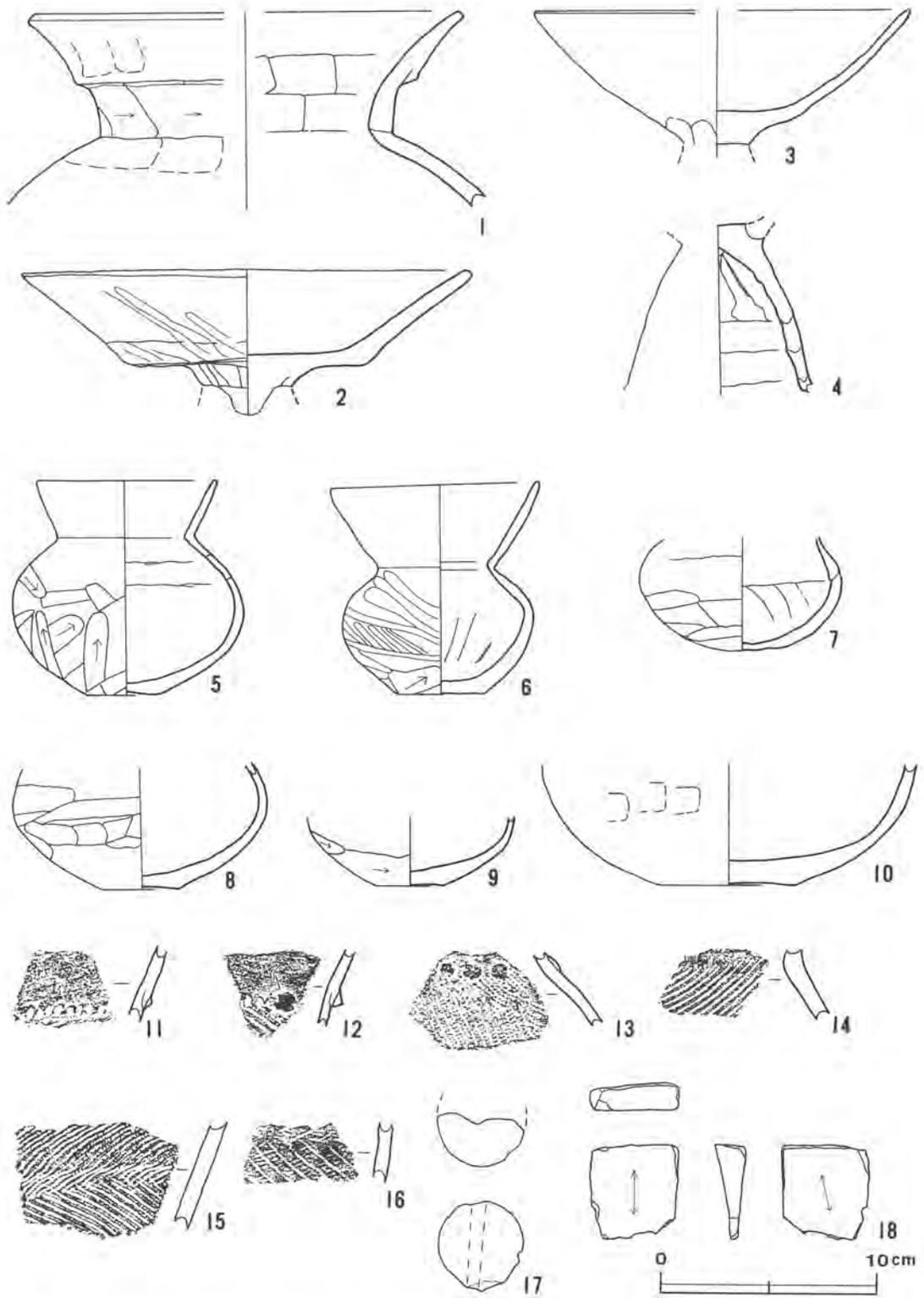
はローム小ブロックが混入している。北コーナー付近には攪乱がある。遺物は弥生式土器片、土師器片が、中層から多く出土している。

遺物 1の土師器壺の口縁部、2～4の高坏はいずれも覆土中層から出土している。5～10の埴は覆土中層からで、5・6は北西壁寄りから横位で出土している。17の土玉と18の砥石は覆土中層から出土している。

所見 覆土中から弥生式土器片も多くでているが、覆土第2層からは土師器片が多量に出土しており、この時期に一括投棄されたと思われる。床面直上の遺物は土師器細片でまとまったものがない。本跡は、古墳時代中期（和泉式期）の時期である。



第61図 第17号住居跡実測図



第62図 第17号住居跡出土遺物実測・拓影図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	壺 土師器	A[20.2] B(9.3)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は、複合口縁で外傾して立ち上がる。	口縁部外面ヘラケズリ、内面横ナデ。頸部内・外面ヘラケズリ、外面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 1 5%
2	高坏 土師器	A 20.9 B(6.6)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち外反気味に立ち上がり、大きく開く。	坏底部外面ヘラケズリ後ヘラナデ。坏部外面斜位のヘラミガキ内面ナデ。	砂粒、雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 2 50%
3	高坏 土師器	A[17.4] B(6.4)	坏部片。坏部下位に稜を持ち内彎気味に立ち上がる。	坏底部外面ヘラケズリ。坏部外面ナデ。	砂粒、石英、長石、雲母 にぶい橙色 普通	P 3 10%
4	高坏 土師器	B(8.0)	脚部片。脚部は円筒状である。	脚部内面上半縦位の指ナデ、内面下半3段の輪積み痕有り。内面下位に赤彩痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 4 30%
5	埴 土師器	A 8.4 B 10.2 C 3.5	体部は扁平な球形状で、最大径を中位に持つ。口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ。口縁部内外面横ナデ。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 5 95%
6	埴 土師器	A 9.8 B 10.1 C 3.8	平底。体部は扁平な球形状で、最大径を上位に持つ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ヘラナデ、内面縦位のヘラケズリ。口縁部内・外面ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 6 95%
7	埴 土師器	B(5.3)	口縁部欠損。丸底。体部は扁平な球形状で、最大径を中位に持つ。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 8 60%
8	埴 土師器	B(5.8) C 3.6	体部片。平底。体部は扁平な球形状で、最大径を中位に持つ。	体部外面下半ヘラケズリ後ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色、普通	P 9 10%
9	埴 土師器	B(3.3) C 3.2	体部下半から底部の破片。平底。体部下半は内彎する。	体部外面下半ヘラケズリ後ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、 橙色 普通	P 10 20%
10	埴 土師器	B(5.7) C[6.0]	体部下半から底部の破片。平底。体部下半は内彎する。	体部外面下半ヘラケズリ後ナデ。	石英、長石、雲母 スコリア、バミス にぶい橙色 普通	P 11 20%

第62図11～16は、第17号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。11・12は複合口縁で、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部は無文としている。どちらも口縁部下端には縄文原体による押圧が施されている。13・14は胴部から頸部にかけての破片で、どちらも頸部を無文とし、13は胴部と頸部をボタン状の瘤で区画している。15・16は胴部片で、15は附加条1種（附加2条）、16は附加条2種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第62図17	土玉	2.8	2.7	—	4.0	(9.3)	50	覆土中層	D P I

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第62図18	砥石	(4.4)	(4.1)	(1.3)	(26.1)	珪質頁岩	覆土中層	Q 2 破片

第58号住居跡（第63図）

位置 E地区南西端部、G3c<sub>2</sub>区を中心に確認されている。本跡の大部分は平成3年度に調査済で既に報告されている。今回の調査は東端部だけであるが、全体が明確になったため前回の報告と

まとめて1軒の住居跡として記述する。

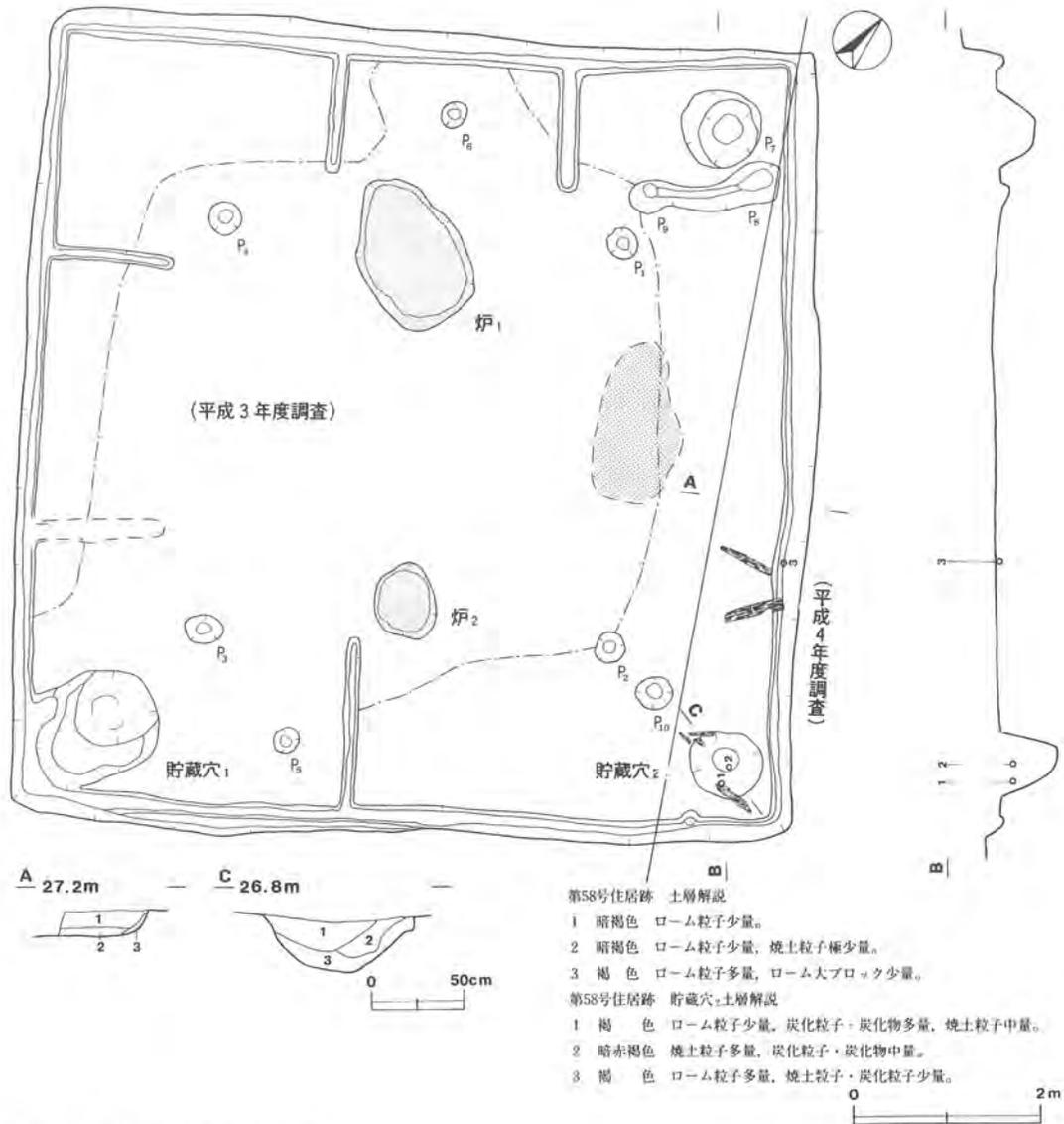
規模と平面形 長軸8.65m、短軸8.52mの方形である。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高22~35cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周している。上幅11~20cm、深さ8~11cmで断面形は「U」字状である。

間仕切り溝 4条で、南東壁のP<sub>3</sub>寄り、南西壁のP<sub>4</sub>寄り、北西壁のP<sub>4</sub>寄り及び北西壁のP<sub>1</sub>寄りから、それぞれ中央に向かって延びている。長さ1.24~1.64m、上幅12~22cmで、断面形は「U」字状である。



第63図 第58号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められている。

ピット 10か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径14～21cmの円形で、深さ45～97cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は、径14cmの円形で、深さ51cmの出入口施設に伴うピットと考えられる。P<sub>6</sub>～P<sub>10</sub>は、径16～36cmの円形で深さ15～47cmである。性格は不明である。

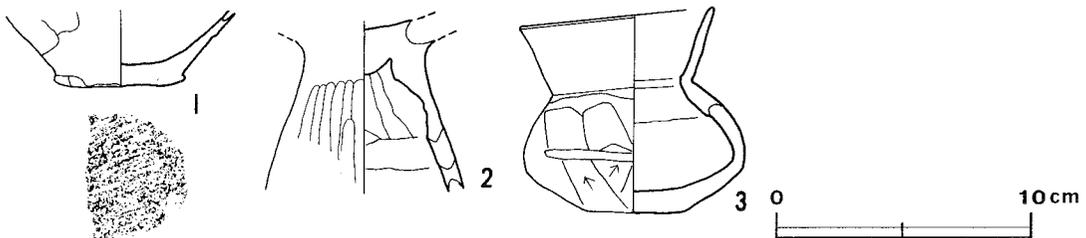
炉 2か所。炉<sub>1</sub>は中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径83cm、短径56cmの楕円形で、床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉<sub>2</sub>は、中央から南東寄りにあり、平面形は長径40cm、短径32cmの楕円形で、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、いずれも中央部が熱を受け、赤変硬化している。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴<sub>1</sub>は、南コーナーにあり平面形は長径73cm、短径52cmの楕円形で、深さ32cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。貯蔵穴<sub>2</sub>は、東コーナーにあり、平面形は長径80cm、短径74cmの楕円形で深さ58cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 覆土のほとんどが前年度に調査済みのため、今回の調査では北東壁側のわずかな部分のみである。壁際には、ローム大ブロックを含む褐色土が堆積し、床面上には焼土粒子をわずかに含む暗褐色土が堆積している。

遺物 1は土師器鉢の底部で、貯蔵穴<sub>2</sub>の覆土上層から出土している。2の高坏は、貯蔵穴<sub>2</sub>の覆土上層から横位で出土している。3の埴は、北東壁側の壁溝の覆土上で床面と同一レベルに横位で出土している。

所見 床面や覆土下層から炭化材や焼土が確認されていることから、焼失住居跡と考えられる。



第64図 第58号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	鉢 土師器	B( 3.0) C 5.0	底部片。平底で楕円形状。体部は外傾して立ち上がる。	底部粗いヘラケズリ。体部外面下位ヘラケズリ。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアにぶい褐色 普通	P18 5%
2	高坏 土師器	B( 6.8) E( 5.5)	脚部片。脚部はラップ状。	脚部外面ヘラミガキ。脚部内面上半は縦位の指ナデ、内面下半に輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアにぶい橙色 普通	P19 20%
3	埴 土師器	A 7.5 B 8.2 C 3.7	平底。体部は偏平な球形状で最大径を下位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ後横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、雲母、スコリア 黄橙色 普通	P20 100% 内・外面炭化物付着

本跡は、古墳時代中期（和泉式期）の時期である。

#### 第66号住居跡（第65図）

**位置** G地区北西端部，F4g9区を中心に確認されている。本跡の大部分は平成3年度に調査済で既に報告されている。今回の調査は南端部だけであるが，全体が明確になったため前回の報告とまとめて1軒の住居跡として記述する。

**重複関係** 本跡の南西部が，第121号住居跡を掘り込んでいる。南壁は，第197号土坑に掘り込まれている。

**規模と平面形** 長軸11.16m，短軸10.80mの方形である。

**主軸方向** N-0°

**壁** 壁高19～40cmで，外傾して立ち上がっている。

**壁溝** 南壁の西側部が，第121号住居跡との切り合いで確認できなかったが，壁下を全周していたと思われる。上幅10～24cm，深さ8～10cmで断面形は「U」字状である。

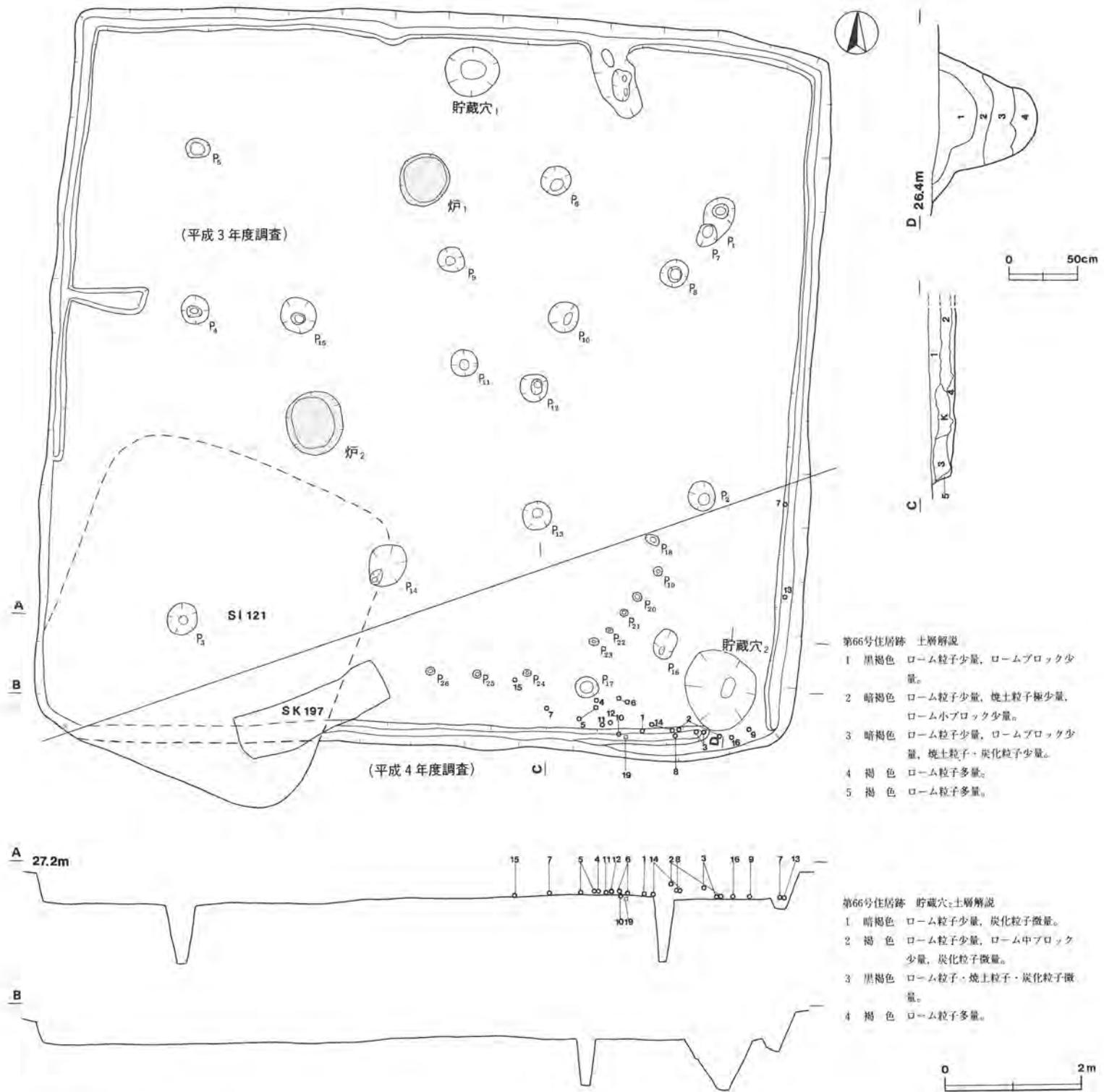
**間仕切り溝** 1条で，西壁中央から住居跡中央に向かって伸びている。長さ1.09m，上幅18～40cmで，断面形は「U」字状である。

**床** ほぼ平坦で，全体に踏み固められている。

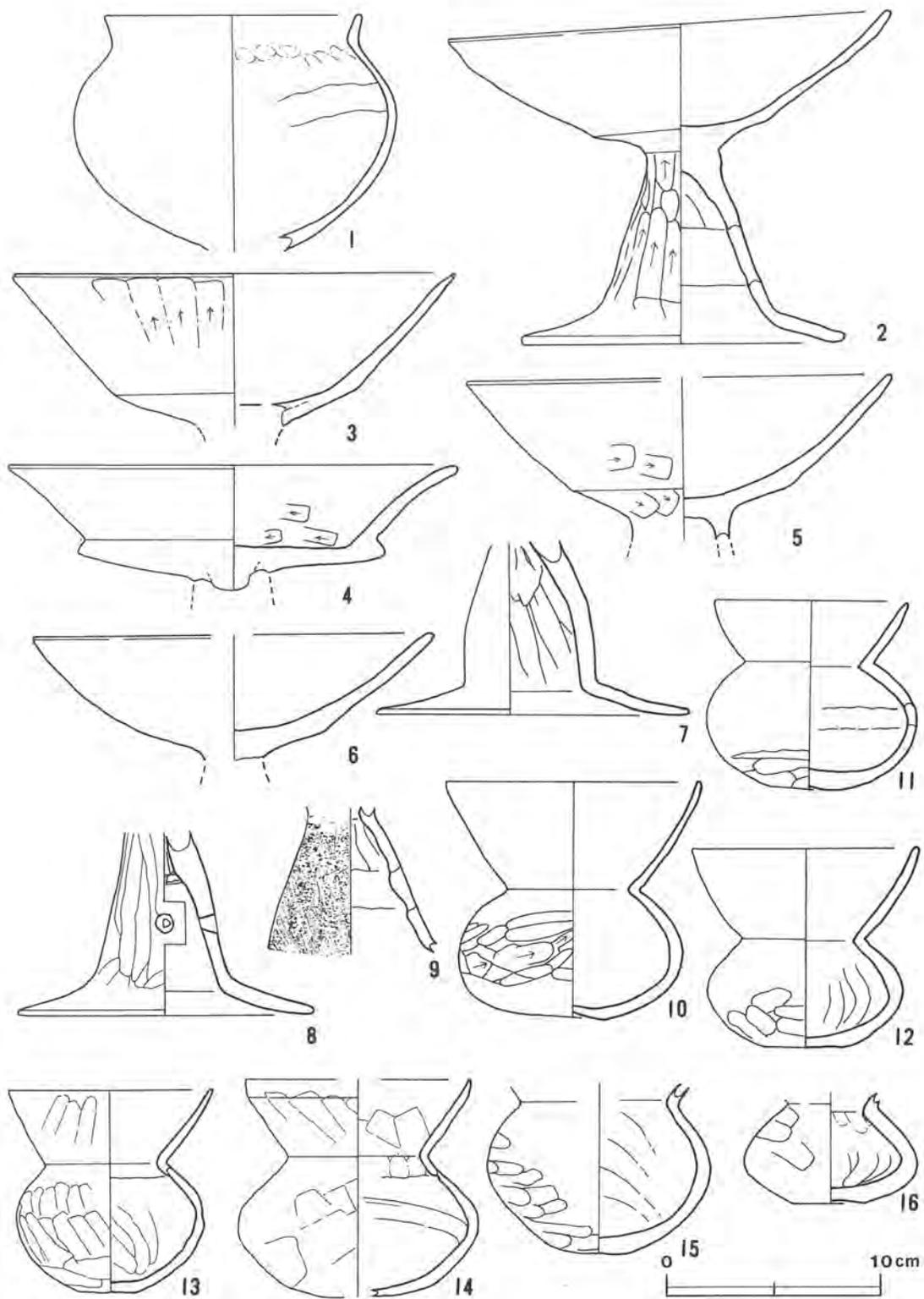
**ピット** 26か所。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>・P<sub>16</sub>は，径34～58cmの円形で，深さ36～92cmの支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>17</sub>は，径34～49cmの円形で，深さ32～41cmの補助支柱穴と思われる。P<sub>9</sub>～P<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>は，径39～52cmの円形で深さ22～60cmである。性格は不明である。前年度の調査で報告されたP<sub>15</sub>は，今回の調査により第121号住居跡の支柱穴であることが確認されたため除外し，以下の番号を繰り上げた。P<sub>18</sub>～P<sub>26</sub>は，径10～22cmのほぼ円形で深さ22～36cmである。P<sub>19</sub>～P<sub>23</sub>は，南東コーナー付近に16～34cm間隔で，一直線に並んでいる。P<sub>24</sub>～P<sub>26</sub>は，68～74cm間隔で南壁に対し平行に一直線に並んでいる。P<sub>18</sub>～P<sub>26</sub>の性格は不明である。

**炉** 2か所。炉<sub>1</sub>は中央から北寄りにあり，平面形は長径77cm，短径73cmのほぼ円形で，床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉<sub>2</sub>は中央から西寄りにあり，平面形は長径85cm，短径82cmのほぼ円形で，床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，いずれも中央部が熱を受け赤変硬化している。前回の調査で報告された炉<sub>3</sub>は，今回の調査で第121号住居跡の炉であることが確認されたため除外した。

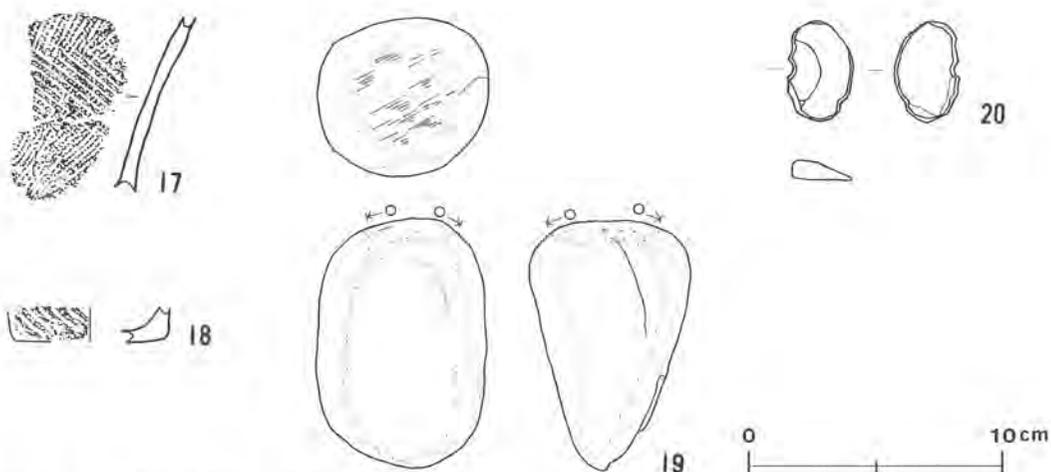
**貯蔵穴** 2か所。貯蔵穴<sub>1</sub>は北壁中央部付近にあり，平面形は径74cmの円形で深さ54cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴<sub>2</sub>は，南東コーナーにあり，平面形は長径114cm，短径106cmの不整楕円形で深さ81cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。



第65図 第66号住居跡実測図



第66図 第66号住居跡出土遺物実測図(1)



第67図 第66号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

**覆土** 覆土のほとんどが前年度に調査済みのため、今回の調査では南壁側のわずかな部分のみである。壁際には褐色土が堆積し、下層も褐色土で中層はロームブロック・焼土粒子を含む暗褐色土が、上層はロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。弥生式土器片、土師器片が覆土中層から上層にかけて多量に出土している。覆土下層である第3・5層中からまとめて土師器片が出土している。

**遺物** 2～8の高坏は、南東コーナー付近の覆土下層から破片で一括して、それぞれ出土している。9の高坏は、南東コーナー壁寄りの床面から斜位で出土している。10～13・15の埴は、南東コーナー付近の南壁よりで覆土下層から一括して出土している。14・16の埴は、同じ南東コーナー付近の床面からで、14は横位で16は正位で出土している。1は台付甕で、南東コーナー付近の床面近くから正位で出土している。19の磨石は南東コーナーの覆土下層から、20の紡錘車は覆土中層から出土している。

**所見** 土師器片が第3・5層からまとめて出土しており、この層の形成過程に一括投棄されたと思われる。覆土は前回の調査で人為堆積と報告されている。P<sub>24</sub>～P<sub>26</sub>は南壁に平行でかつ等間隔な直線で、P<sub>19</sub>～P<sub>23</sub>は貯蔵穴<sub>2</sub>のある南東コーナーをふさぐような直線で並んでいる。明らかに南壁や貯蔵穴<sub>2</sub>を意識しており、間仕切り状施設に伴うピットと考えられる。本跡は、古墳時代中期（和泉式期）の時期である。

第66号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	甕 土師器	A 11.8 B(11.2)	底部欠損。体部は球形状で最大径を中位よりやや上に持つ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。	体部から口縁部にかけて外面横ナデ。体部内面上半ヘラナデ。頸部内面に指ナデ。口縁部内面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 明赤褐色 普通	P21 90%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 2	高坏土師器	A 15.7	脚部はラッパ状で、裾部ではほぼ水平に広がる。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して開く。	脚部外面ヘラケズリ、内面上位指ナデ。坏部外面ヘラナデ、内面横ナデ。脚部内面下半に輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母 橙色 普通	P 23 80%
		B 12.2				
		D 10.2				
		E 7.6				
3	高坏土師器	A 20.8	脚部欠損。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して開く。	坏部外面ヘラケズリ後ナデ、内面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 24 50%
		B( 7.2)				
4	高坏土師器	A 21.0	脚部欠損。坏部は底部周縁が突き出し、口縁部は外反して立ち上がり大きく開く。	坏部外面ヘラナデ、内面下位ヘラケズリ後ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 25 40%
		B( 5.9)				
5	高坏土師器	A[19.8]	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり大きく開く。	坏部外面ヘラケズリ後ナデ、内面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 26 30%
		B( 7.8)				
6	高坏土師器	A[18.8]	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がり大きく開く。	坏部内・外面ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 27 30%
		B( 5.9)				
7	高坏土師器	D 14.6	坏部欠損。脚部はラッパ状で、裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部外面ナデ、内面縦位の指ナデ。	砂粒、石英、雲母 スコリア 明赤褐色 普通	P 28 40%
		E( 8.2)				
8	高坏土師器	D 13.8	坏部欠損。脚部はラッパ状で、中央に円孔(径7mm)が1か所穿たれている。裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。裾部内・外面ヘラナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 29 40%
		E( 8.5)				
9	高坏土師器	B( 6.9)	脚部片。脚部はラッパ状である。	脚部外面ヘラケズリ後ハケ目調整、内面上位指ナデ、下位輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア。 にぶい橙色 普通	P 30 20%
		A 11.8				
10	坩土師器	B 11.2	平底。体部は偏平な球形状で最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がり、上位でわずかに内彎する。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母 にぶい褐色 普通	P 31 95%
		A 9.0				
		C 4.5				
11	坩土師器	A 9.0	平底。体部は偏平な球形状で最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母 橙色、普通	P 32 95%
		B 9.0				
		C 3.9				
12	坩土師器	A 10.5	平底。体部は偏平な球形状で最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面縦位の指ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母 明褐色、普通	P 33 95%
		B 9.4				
		C 3.8				
13	坩土師器	A 9.5	平底。体部は偏平な球形状で最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面斜位の指ナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部内面輪積み痕有り。	石英、長石、雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P 34 95%
		B 9.6				
		C 2.7				
14	坩土師器	A[10.5]	平底。体部は偏平な球形状で最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。口縁部外面ヘラケズリ後ナデ、内面横ナデ。	石英、長石、雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P 35 50%
		B(10.2)				
15	坩土師器	B( 7.9)	口縁部欠損。平底。体部は偏平な球形状で最大径を中位に持つ。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。	石英、長石、雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P 36 60%
		C 3.2				
16	坩土師器	B( 5.2)	口縁部欠損。平底。体部は偏平な球形状で最大径を中位に持つ。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面下位ヘラナデ、内面上位指ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 37 50%
		C 3.2				

第67図17・18は、第66号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。17は胴部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。18は底部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67図19	磨石	9.9	6.7	6.2	581.0	砂岩	覆土下層	Q4
20	紡錘車	(4.0)	(2.5)	(0.8)	(10.7)	滑石	覆土中層	Q5 破片

### 第98号住居跡（第68図）

位置 E地区中央部，F3d<sub>5</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.30m，短軸5.70mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-56°-W

壁 壁高39～54cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下をほぼ全周しているが，南コーナー付近では確認できない。上幅12～16cm，深さ4～10cmで断面形は「U」字状である。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

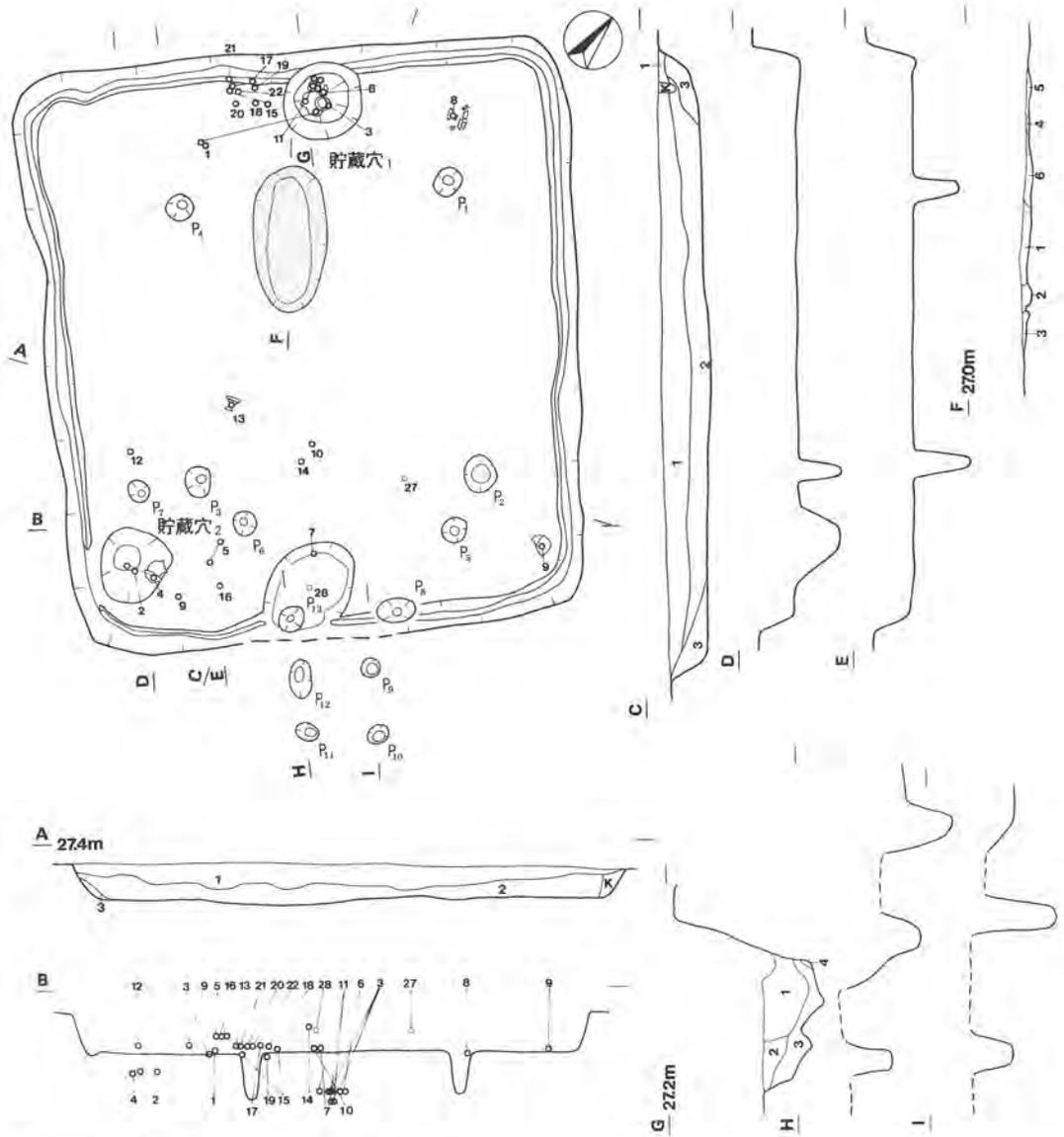
ピット 13か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径30～36cmのほぼ円形で深さ50～58cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>～P<sub>12</sub>は，長径22～42cm，短径20～26cmの楕円形で深さ40～72cmの出入口施設に伴うピットと思われ，P<sub>7</sub>～P<sub>10</sub>は壁外にある。P<sub>13</sub>は，径24cmのほぼ円形で深さ45cmの補助柱穴と思われる。

炉 中央から北西寄りにあり，平面形は長径158cm，短径78cmの楕円形で，床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け，特に長径の両端部が赤変硬化している。炉周辺には炭化粒子が散乱している。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴<sub>1</sub>は，北西壁中央部で壁に接してあり，平面形は径82cmのほぼ円形で深さ54cmである。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴<sub>2</sub>は，南コーナーにあり，平面形は長径82cm，短径72cmの楕円形で深さ46cmである。底面は平坦で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 壁際には，褐色土が堆積し，中央部は2層からなる。下層にはローム小ブロックをわずかに含む暗褐色土が床面から堆積し，上層には焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土が堆積している。

遺物 8～13は土師器高坏で，8は北コーナー付近の覆土下層から，9は東コーナーの床面から正位で，10・13は覆土上層から，11は貯蔵穴<sub>1</sub>の覆土下層から，12は南コーナー付近の覆土下層から斜位でそれぞれ出土している。15・16の埴は，16が南東壁寄りの覆土上層から横位で，15は北西壁中央付近の覆土下層から横位で出土している。1は北西壁中央付近の覆土下層からつぶれた状態で，2・4は貯蔵穴<sub>2</sub>の覆土上層から横位で，3は貯蔵穴<sub>1</sub>の覆土下層からおしつぶれた状態で，5は南コーナーの覆土上層から，6は貯蔵穴<sub>1</sub>の覆土下層から，14は中央寄りの覆土上層から，7は南東壁寄りの覆土下層から逆位でそれぞれ出土している。17～22は手捏土器で，北東壁の中



第98号住居跡 土層解説

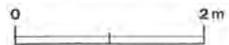
- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。

第98号住居跡 炉土層解説

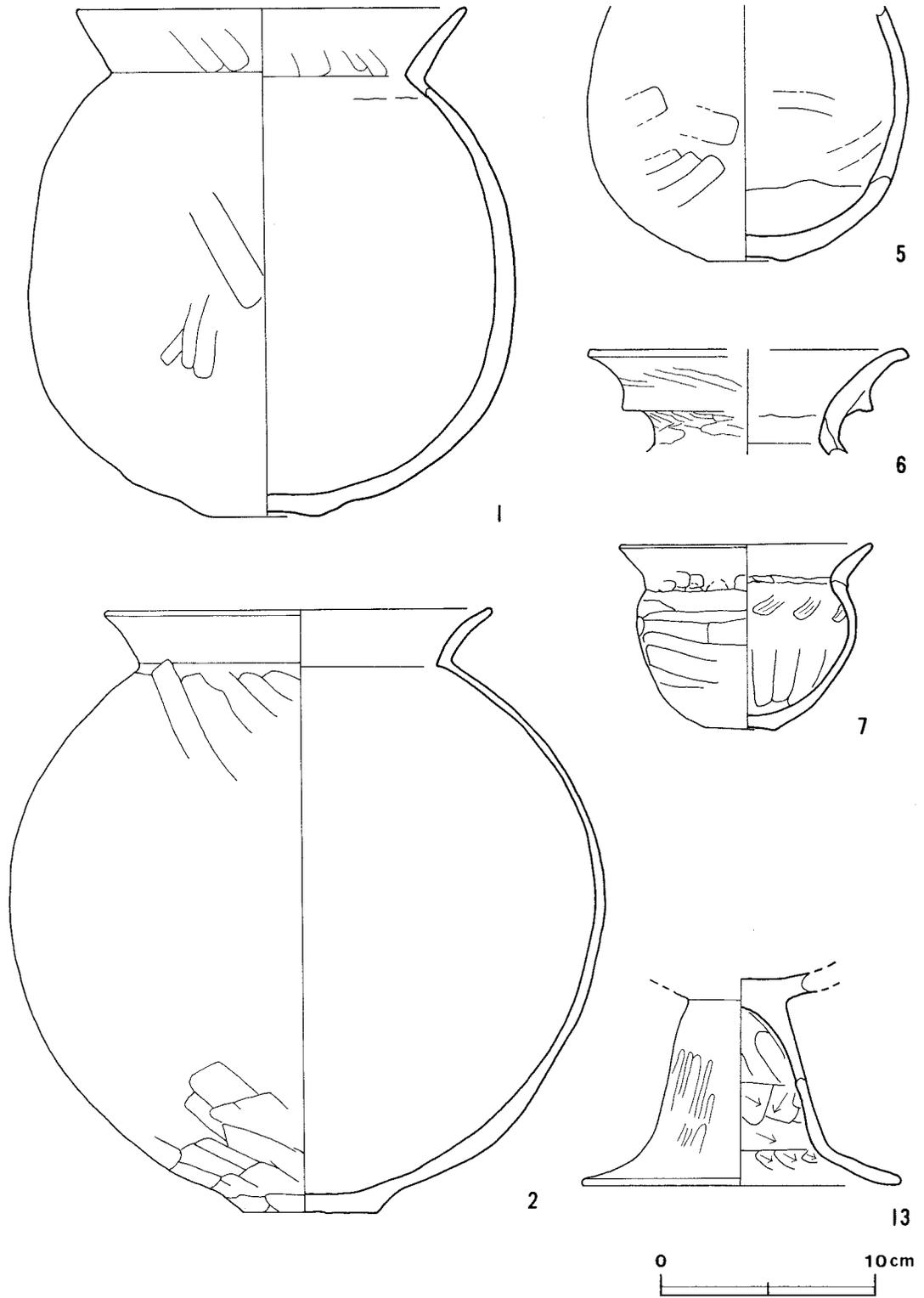
- 1 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子・ローム小ブロック微量。
- 2 極暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量。
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土ブロック少量。
- 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量, ローム粒子多量。
- 6 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化粒子少量。

第98号住居跡 貯蔵穴土層解説

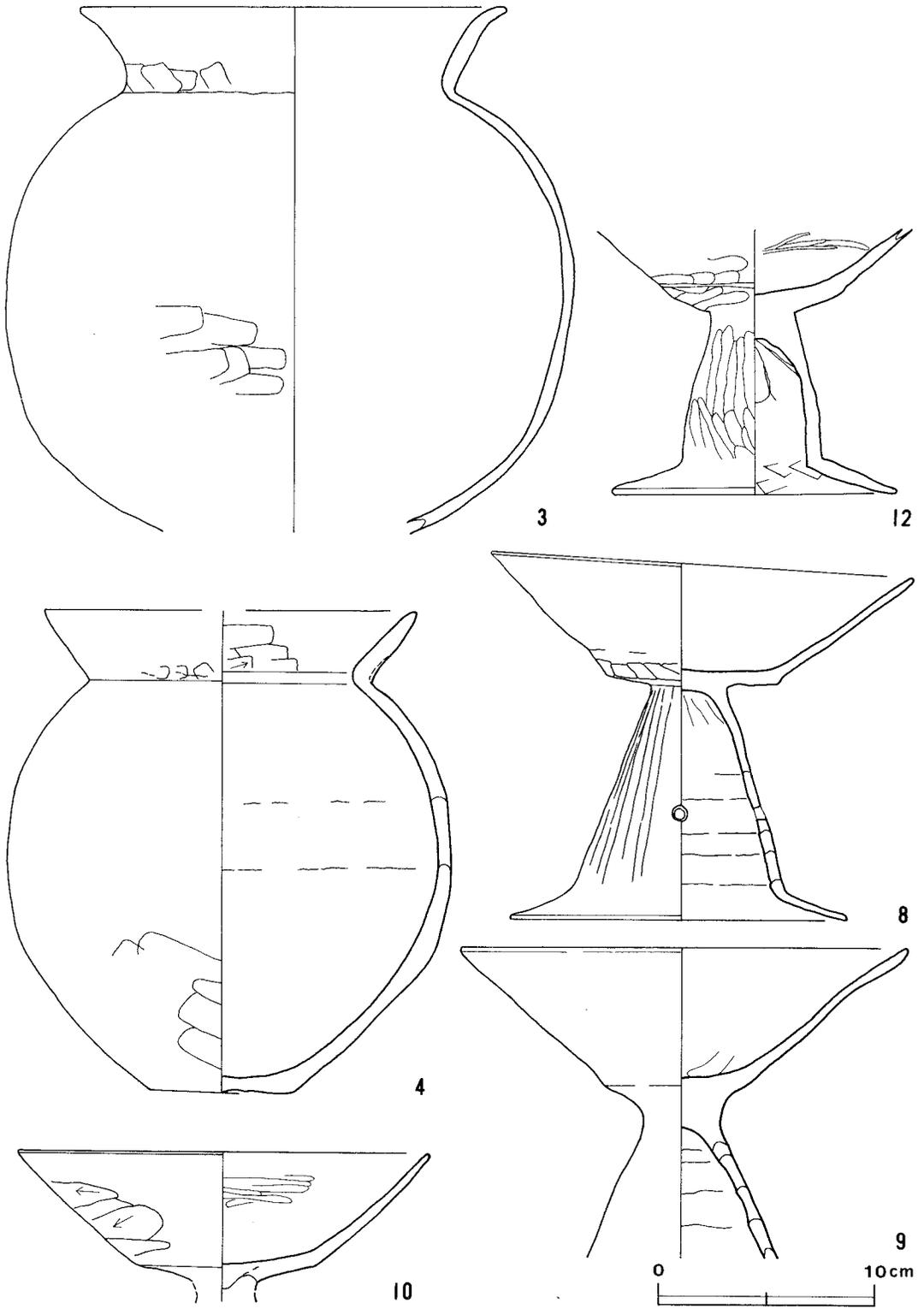
- 1 褐色 ローム小ブロック多量。
- 2 褐色 ローム小ブロック多量。
- 3 褐色 ローム小ブロック極多量。
- 4 褐色 ローム小ブロック極多量。



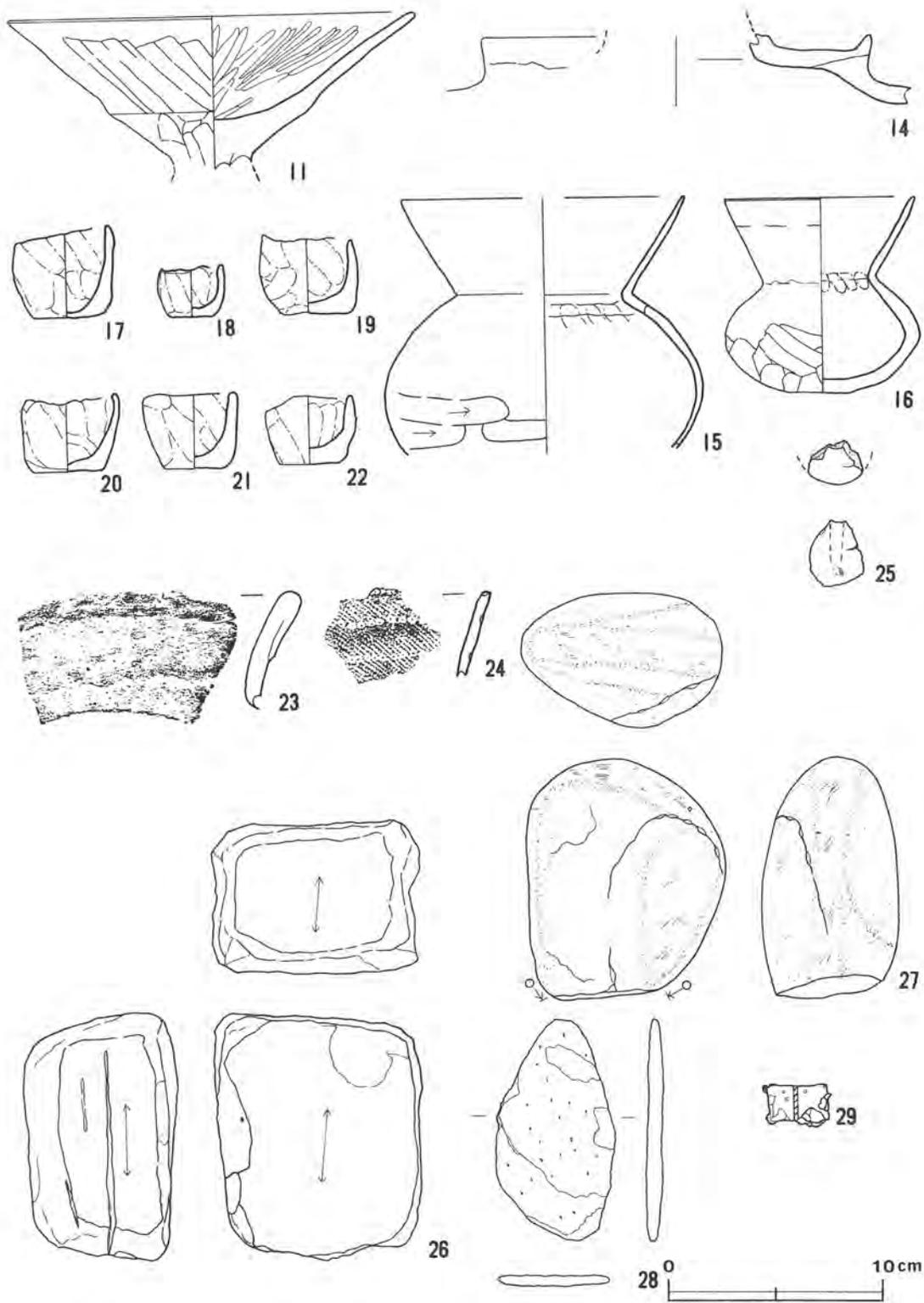
第68図 第98号住居跡実測図



第69図 第98号住居跡出土遺物実測図(1)



第70图 第98号住居跡出土遺物実測図(2)



第71図 第98号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

央付近の覆土下層から一括で出土している。26の砥石は南東壁寄りの覆土上層から、27の磨石は東コーナー寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。28の穂摘具と25の土玉及び29は、覆土上層から出土している。

所見 P7～P10は確認面を更に掘り下げてとらえているため実際の深さは、計測値より大きくなる。P7とP10、P8とP9は、それぞれが対を成し底面のレベルがほぼ同じで、階段状を形成している。P5～P12は、主軸線に対し左右対称の配置になっており、住居跡の形態から判断して、出入口施設を形成していたと考えられる。本跡は、古墳時代中期（和泉式期）の時期である。

### 第98号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	甕 土師器	A 18.2 B 23.8 C 5.0	平底。体部は球形状で最大径を中位に持つ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラケズリ後ナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。体部内面輪積み痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P43 80% 内・外面炭化物付着
2	甕 土師器	A 17.8 B 28.3 C 6.3	平底。体部は球形状で最大径を中位に持つ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母 橙色 普通	P44 50%
第70図 3	甕 土師器	A 19.5 B(24.5)	底部欠損。体部は球形状で最大径を中位に持つ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面ヘラケズリ後ナデ、内面横ナデ。体部外面ヘラケズリ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P45 60% 内・外面炭化物付着
4	甕 土師器	A[17.1] B 22.5 C 6.6	平底。体部は球形状で最大径を中位に持つ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラケズリ後ナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P46 60%
第69図 5	甕 土師器	B(11.9) C 3.6	体部から底部にかけての破片。平底。体部は球形状で、最大径を中位に持つ。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P47 50% 内・外面炭化物付着
6	壺 土師器	A[14.9] B(4.9)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は複合口縁で、外反して立ち上がる。	頸部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P48 5%
7	小形鉢 土師器	A 11.7 B 8.7 C 3.3	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内外面ヘラナデ。口縁部外面ヘラナデ、内面横ナデ。口縁部外面下位指頭圧痕有り。口縁部外面輪積み痕有り。	砂粒、石英、雲母 スコリア にぶい褐色 普通	P49 95%
第70図 8	高坏 土師器	A 19.5 B 17.2 D 15.5 E 10.9	脚部はラップ状で裾部で大きく開く。坏部は外傾して立ち上がる。脚部中央に円孔（径6mm）が1か所穿たれている。	脚部内・外面ナデ、外面下位ヘラケズリ。脚部外面縦位のヘラナデ、内面上位指ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P50 80%
9	高坏 土師器	A 20.5 B(14.5) E(6.9)	裾部欠損。脚部はラップ状で、坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面摩滅している。坏底部内面ヘラケズリ、脚部内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 明赤褐色 普通	P51 60%
10	高坏 土師器	A 19.1 B(6.1)	坏部片。脚部はラップ状で、坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内面上位ヘラミガキ、外面ヘラナデ。	砂粒、石英、雲母、 スコリア 橙色、普通	P52 50%
第71図 11	高坏 土師器	A 18.9 B(6.9)	坏部片。脚部はラップ状で、坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラナデ、内面ヘラミガキ。脚部外面ヘラケズリ後ナデ。	砂粒、石英、長石、 スコリア、 明赤褐色、普通	P53 50%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 12	高坏土師器	B(12.3) D[13.0] E 8.5	脚部から坏部にかけての破片。脚部はラッパ状で坏部ではほぼ水平に開く。坏部は下位に稜を持ち傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラナデ、内面ヘラミガキ。脚部外面縦位のヘラケズリ、内面上位指頭圧痕有り。裾部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 赤褐色 普通	P54 60%
第69図 13	高坏土師器	B(9.9) D 14.9 E 8.5	坏部欠損。脚部はラッパ状で裾部ではほぼ水平に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ、内面上位指頭圧痕有り、下位横位のヘラケズリ。裾部外面ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P55 50%
第71図 14	高坏土師器	E(3.3)	裾部片。脚先端からほぼ水平に大きく開いた後、突帯部から屈曲して更に大きく開く。	裾部外面ナデ、内面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P56 5%
15	埴土師器	A[13.2] B(11.9)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は扁平な球形状で、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面上位指頭圧痕・輪積み痕有り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、雲母、スコリア にふい橙色 普通	P57 30%
16	埴土師器	A 8.9 B 9.2	平底。体部は扁平な球形状で、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面上位指頭圧痕有り。	砂粒、雲母、スコリア にふい橙色 普通	P58 95%
17	手握土器 土師器	A 4.3 B 4.3 C 3.3	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面指頭圧痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P59 100%
18	手握土器 土師器	A 4.4 B 3.6 C 3.0	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面指頭圧痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P60 100%
19	手握土器 土師器	A 4.0 B 3.9 C 3.1	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面指頭圧痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P61 100%
20	手握土器 土師器	A 4.2 B 3.7 C 3.2	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面指頭圧痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P62 95%
21	手握土器 土師器	A 4.4 B 3.6 C 2.9	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面指頭圧痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P63 90%
22	手握土器 土師器	A 4.1 B 3.3 C 2.9	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面指頭圧痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P64 80%

第71図23～24は、第98号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。23は無文の複合口縁部片である。24は単節縄文施文の単口縁で、口唇部にも縄文が施されている。口縁部中位には、竹管状工具による刺突文が2列横位に施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第71図25	土玉	(2.1)	(1.7)	—	4.0	(3.1)	20	覆土中層	D P 2

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第71図26	砥石	11.6	9.8	7.2	1334.4	砂岩	覆土上層	Q6 石皿の転用
27	磨石	11.4	9.3	6.3	(940.0)	砂石	覆土上層	Q8 破片
28	穂摘具	10.4	5.7	0.6	55.8	ホルンフェルス	覆土上層	Q9

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第71図29	刀子	(2.9)	(1.8)	0.2	(3.4)	M1 覆土上層 破片

第101号住居跡（第72図）

位置 E地区西部，F3g2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.27m，短軸5.27mの隅丸方形である。

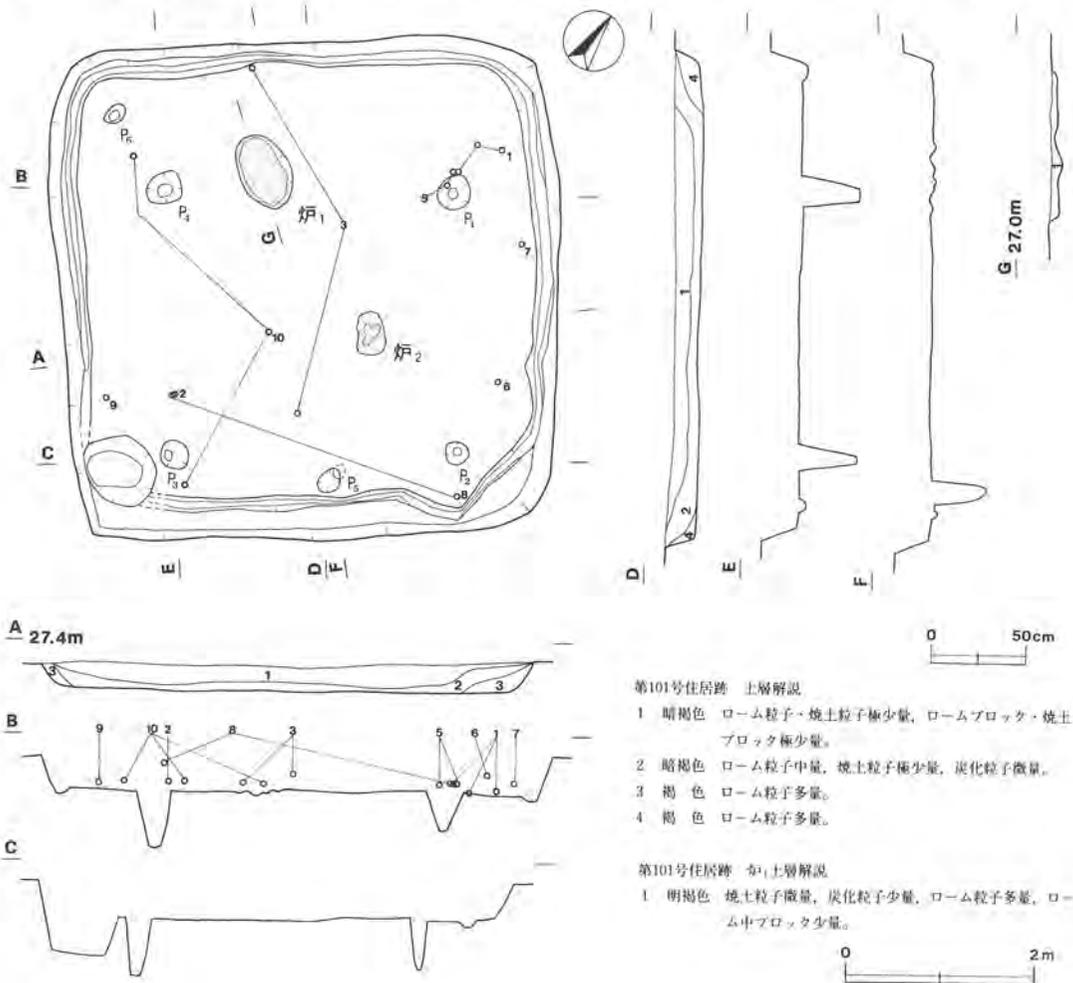
主軸方向 N-37°-W

壁 壁高35~40cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下をほぼ全周し，南東壁側は壁から21~24cm離れている。東コーナー付近では，壁の形状に沿わない不規則な曲がり方をしている。上幅8~23cm，深さ6~8cmで断面形は「U」字状である。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，径25~33cmのほぼ円形で深さ46~63cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は，長径28cm，短径21cmの楕円形で，深さ52cmの出入口施設に伴うピット



第72図 第101号住居跡実測図

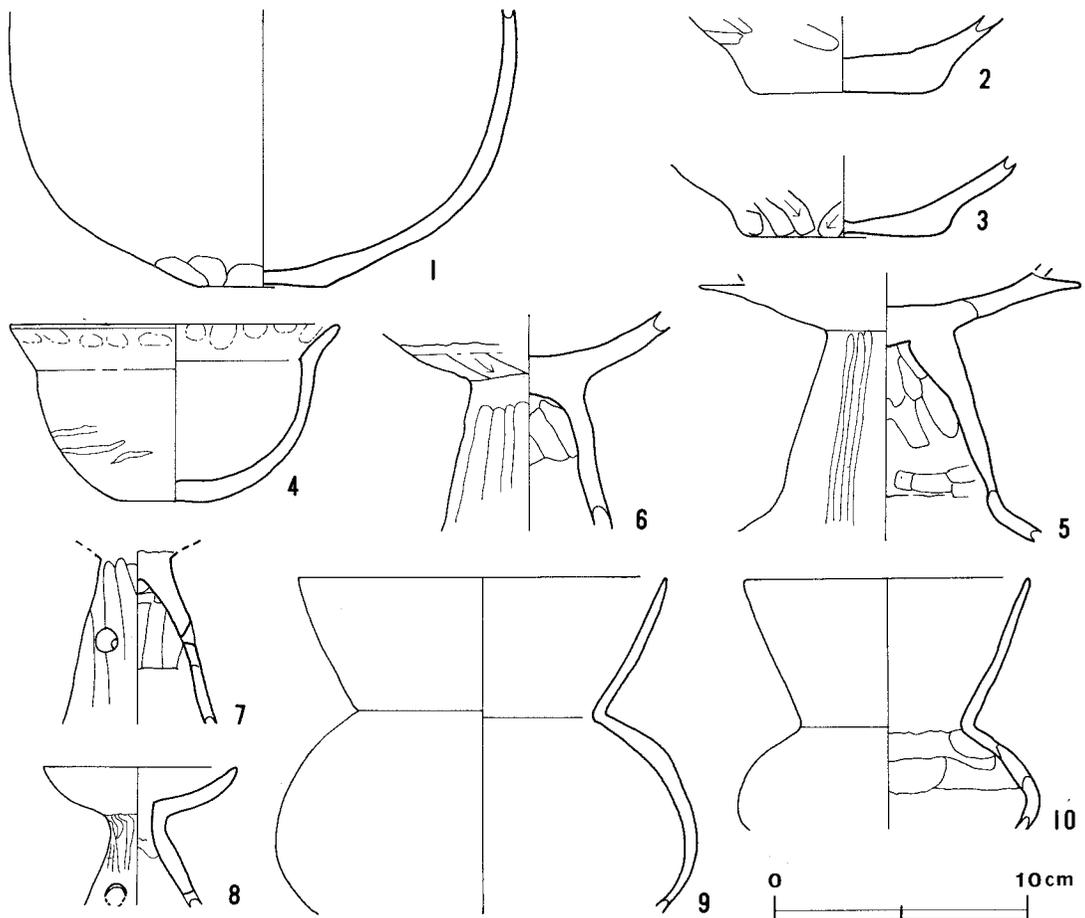
ットと思われる。南側に傾斜し南東壁に近接する。P<sub>6</sub>は、長径26cm、短径17cmの楕円形で、深さ35cmの補助柱穴と思われる。

炉 2か所。炉<sub>1</sub>は、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結ぶ線の中央からP<sub>4</sub>寄りにあり、平面形は長径81cm、短径54cmの楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉<sub>2</sub>は炉<sub>1</sub>の東南東方向で、住居跡の中央部からやや東側にあり、平面形は長径47cm、短径28cmの不整楕円形で床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、いずれも中央部が熱を受け赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナー付近にあり、平面形は長径78cm、短径65cmの楕円形で、深さ42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 壁際には褐色土が堆積し、中央部は2層からなる。下層には、焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が堆積し、上層にはロームブロック・焼土粒子・焼土ブロックを含む暗褐色土が堆積している。遺物は、覆土下層である第2層から多く出土している。

遺物 4は土師器小形鉢で、南西壁寄りの覆土下層から逆位で出土している。5～7は高坏で、



第73図 第101号住居跡出土遺物実測図

5は北コーナー付近の覆土下層から、6は東コーナー付近の覆土上層から、7は北東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。8は器台で、南コーナー付近の覆土上層と東コーナー付近の覆土上層からの破片が接合している。1・9・10は埴で、9は南西壁際の覆土下層から、1は北コーナーの床面直上からそれぞれつぶれた状態で出土している。10は、中央部の覆土下層からの破片と西コーナー付近覆土下層からの破片が接合している。2・3は壺の底部で、2は南コーナー付近の覆土下層から、3は南東壁寄りの覆土下層から破片の状態で出土している。

所見 本跡は、古墳時代中期（和泉式期）の時期である。

第101号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	甕 土師器	B(11.0) C 4.8	体部下層の破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデ。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 赤褐色 普通	P70 15% 外面スス付着
2	甕 土師器	B(3.1) C 7.7	底部片。突出した平底。	底部外面ヘラケズリ。	砂粒、石英、長石 雲母 明褐色 普通	P71 10%
3	甕 土師器	B(3.2) C 8.2	底部片。突出した平底。	底部外面ヘラケズリ。	砂粒、石英、長石 雲母 橙色 普通	P72 10% 外面スス付着
4	小形鉢 土師器	A 13.0 B 7.1 C 3.5	平底。外部は内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ、指頭圧痕有り。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	砂粒、石英、長石 スコリア 明褐色 普通	P73 75% 内・外面炭化物付着
5	高坏 土師器	B(10.4) E(8.3)	坏底部から脚部にかけての破片。脚部はラップ状で坏底部は周縁部が突き出ている。	坏底部外面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ、内面指ナデ下位ヘラナデ。坏底部周縁に凹線有り。	砂粒、石英、長石 雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P74 40%
6	高坏 土師器	B(8.6) E(5.9)	坏底部から脚部中位にかけての破片。脚部はラップ状で、坏部は内彎して立ち上がる。	坏底部外面ヘラケズリ。脚部外面縦位のヘラナデ、内面上位指ナデ、下位横位のヘラナデ。	砂粒、石英、長石 雲母 スコリア 赤褐色 普通	P75 20%
7	高坏 土師器	B(6.9) E(6.7)	脚部片。脚部はラップ状で中に円孔(径8mm)が1か所穿たれている。	脚部外面縦位のヘラナデ、内面ヘラナデ。	砂粒、雲母 にぶい橙色 普通	P76 10%
8	器台 土師器	A 7.5 B(5.5) E(3.6)	脚部下半欠損。脚部は「ハ」の字状で、器受部は椀状である。器受部中央に単孔有り。脚部中位に等間隔に3孔有り。	器受部外面横ナデ。脚部外面縦位のヘラミガキ、内面横位のヘラナデ。	砂粒、バミス にぶい橙色 普通	P77 70%
9	埴 土師器	A 14.7 B(13.4)	体部下半から底部欠損。体部は扁平な球形状で、最大径を中位に持つ。口縁部は内彎気味に外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ナデ。	砂粒、石英、長石 スコリア 明赤褐色 不良	P78 70% 内・外面摩滅 内・外面炭化物付着
10	埴 土師器	A[11.2] B(10.0)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は扁平な球形状で、縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 スコリア にぶい橙色 普通	P79 30%

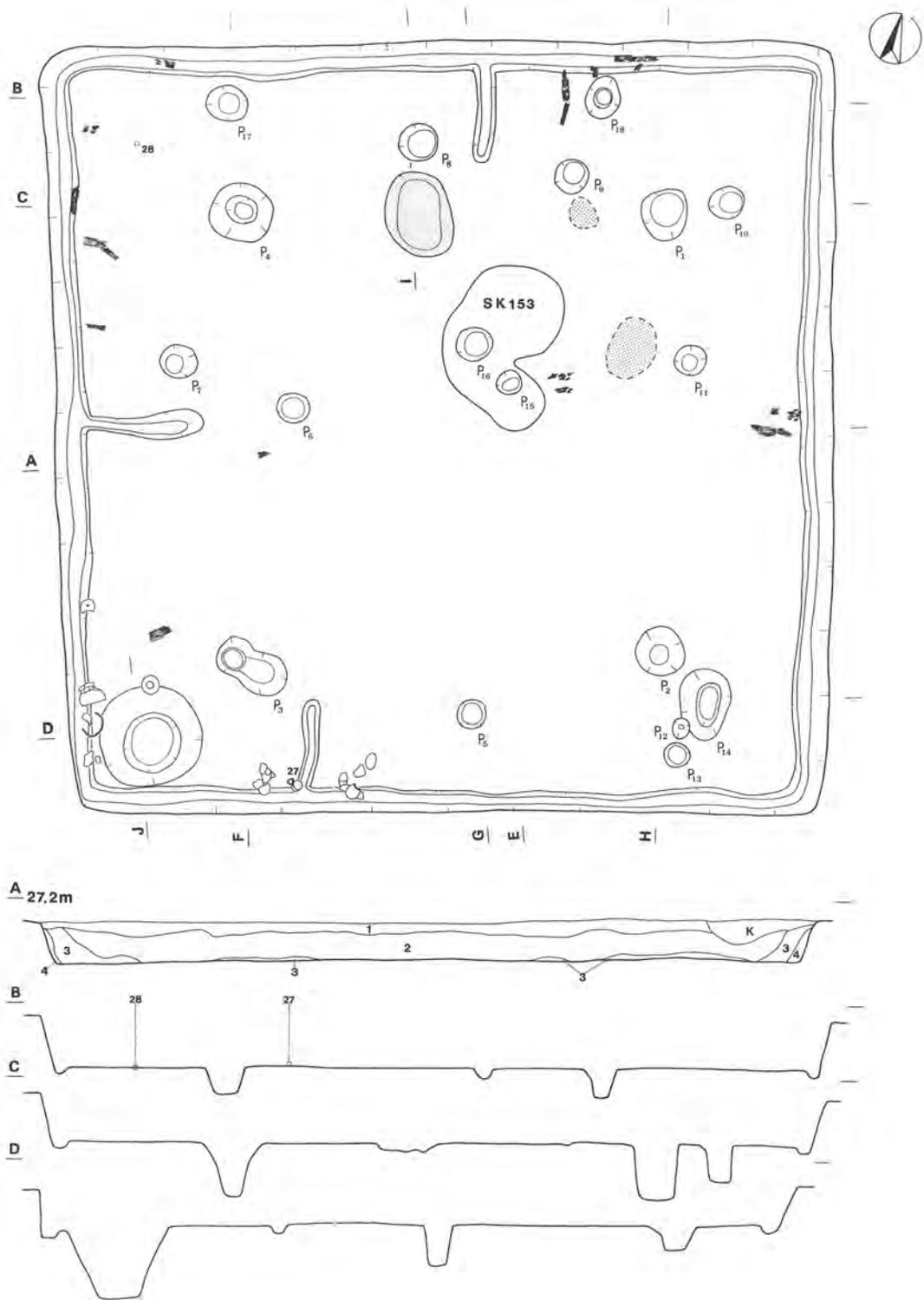
第104号住居跡（第74図）

位置 E地区南部、G3b6区を中心に確認されている。

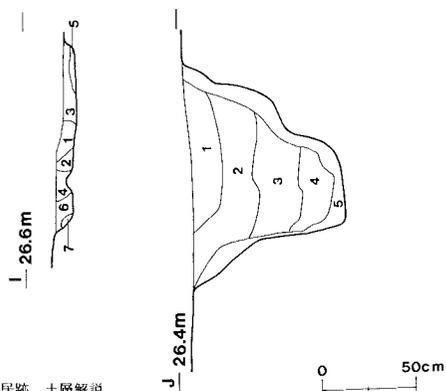
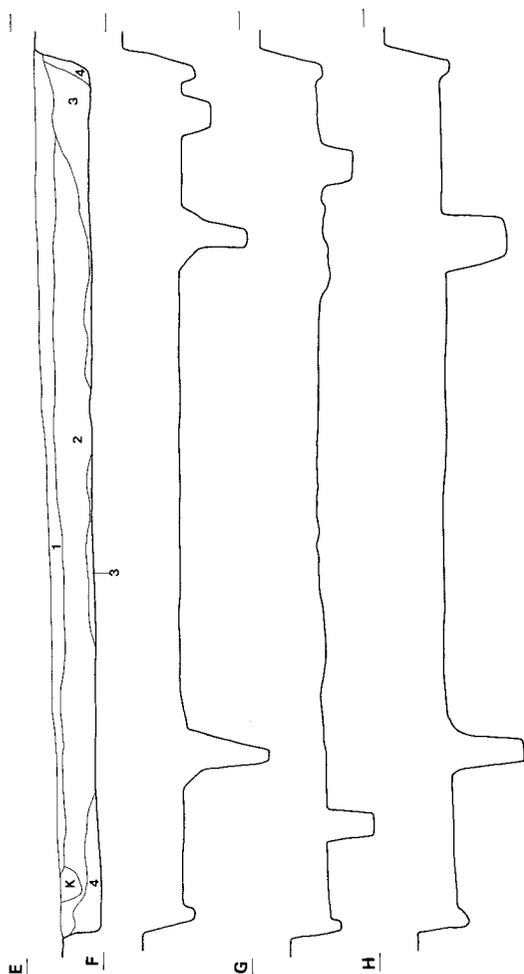
重複関係 本跡の中央部が、第153号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸9.55m、短軸9.53mの方形である。

主軸方向 N-18°-W



第74图 第104号住居跡実測图



第104号住居跡 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、焼土ブロック・炭化物極少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。

第104号住居跡 炬土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ロームブロック少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土中ブロック少量。
- 5 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物極少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量。
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量。

第104号住居跡 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック極少量、炭化物少量。
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子極少量。
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック極少量、炭化物少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量、炭化物極少量。



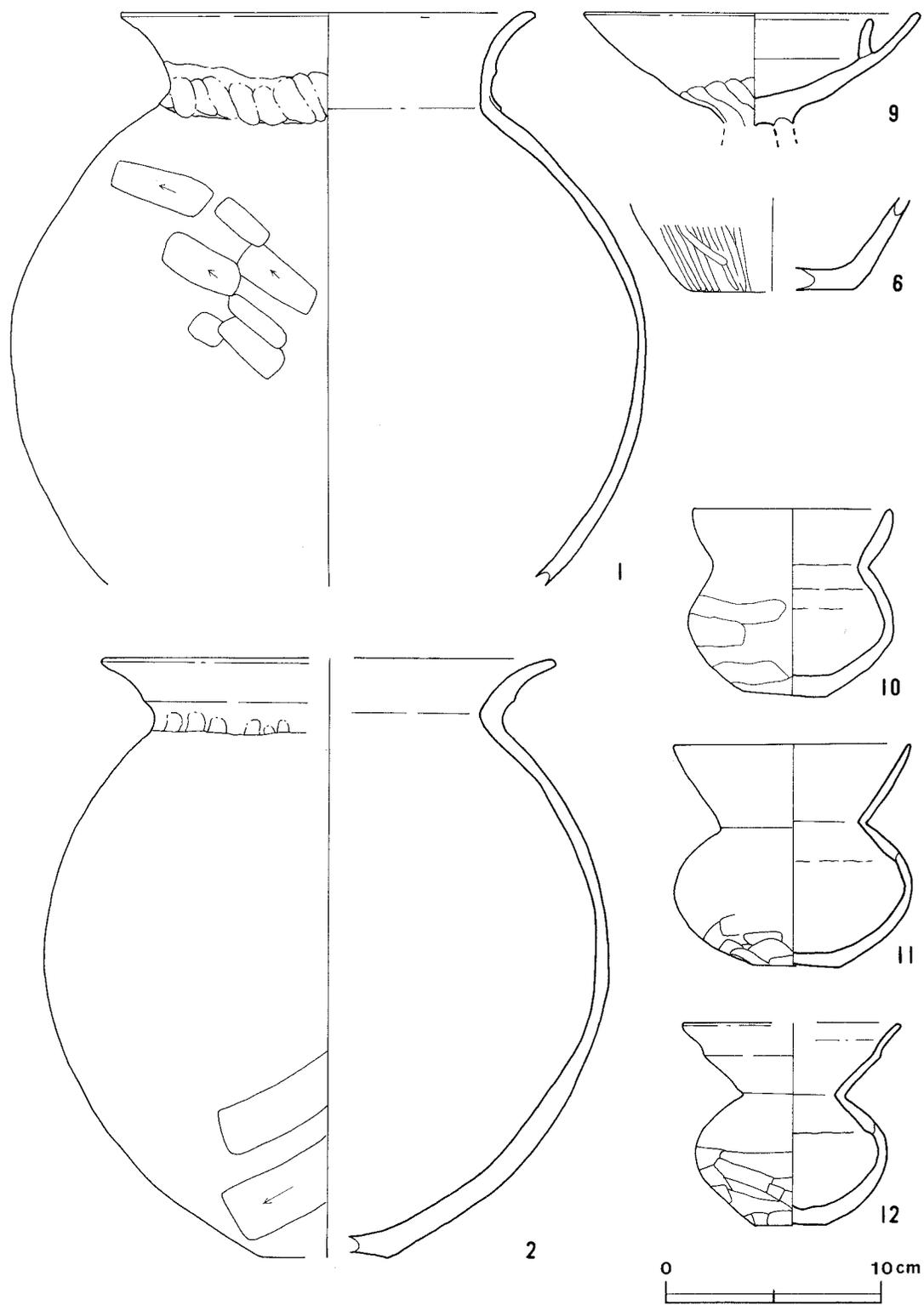
壁 壁高42～66cmで、外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁下を全周しており、上幅16～22cm、深さ8～16cmで断面形は「U」字状である。

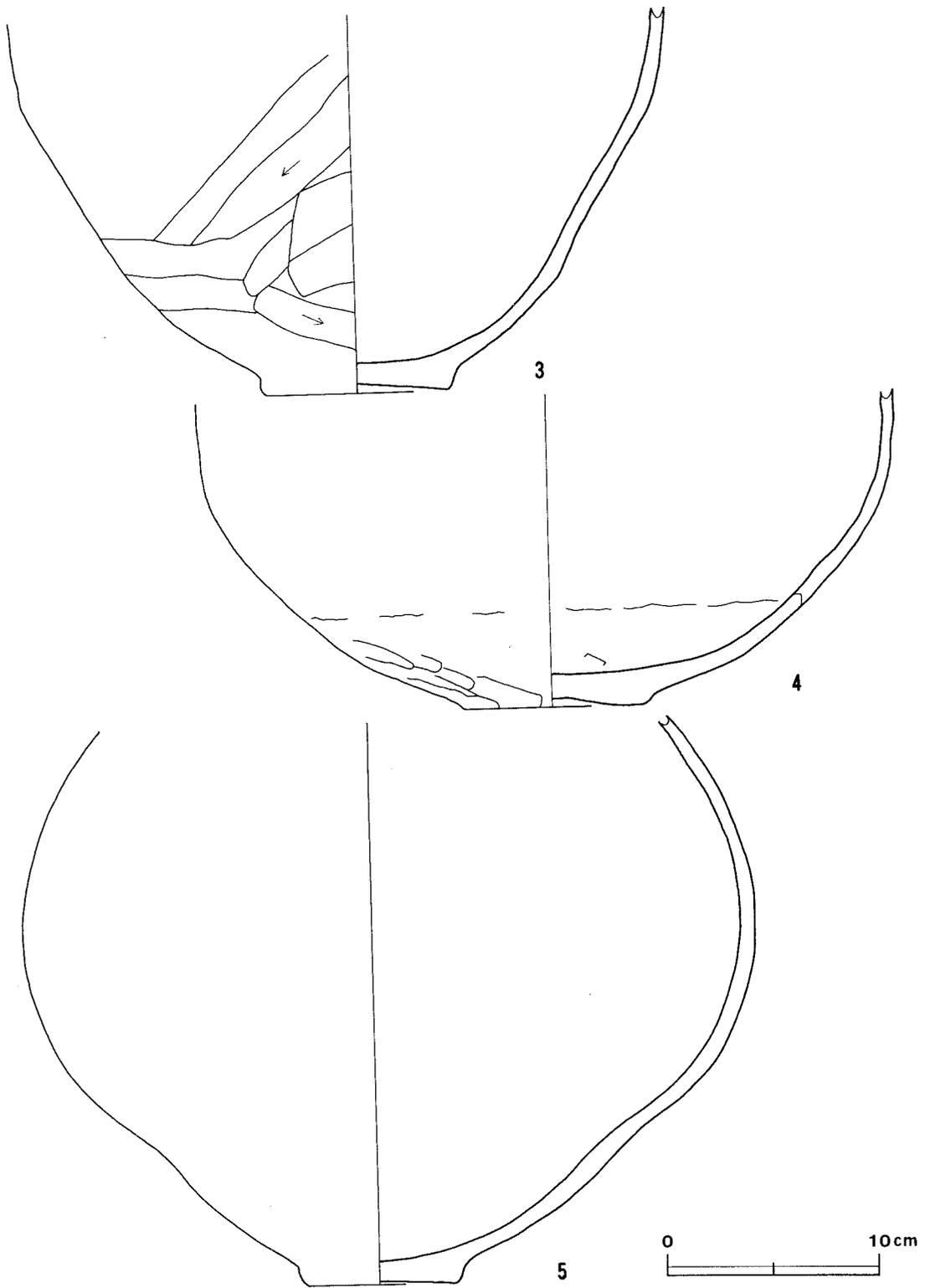
間仕切り溝 3条ある。南東壁のP<sub>3</sub>寄り、南西壁のほぼ中央部、北西壁のほぼ中央部でいずれも壁溝からほぼ直角に内側に向かって延びている。長さ1.08～1.44m、上幅16～34cmで断面形は「U」字状である。

床 平坦で、全体に踏み固められている。広い範囲で焼土が広がっており、床面が赤変硬化している所もある。

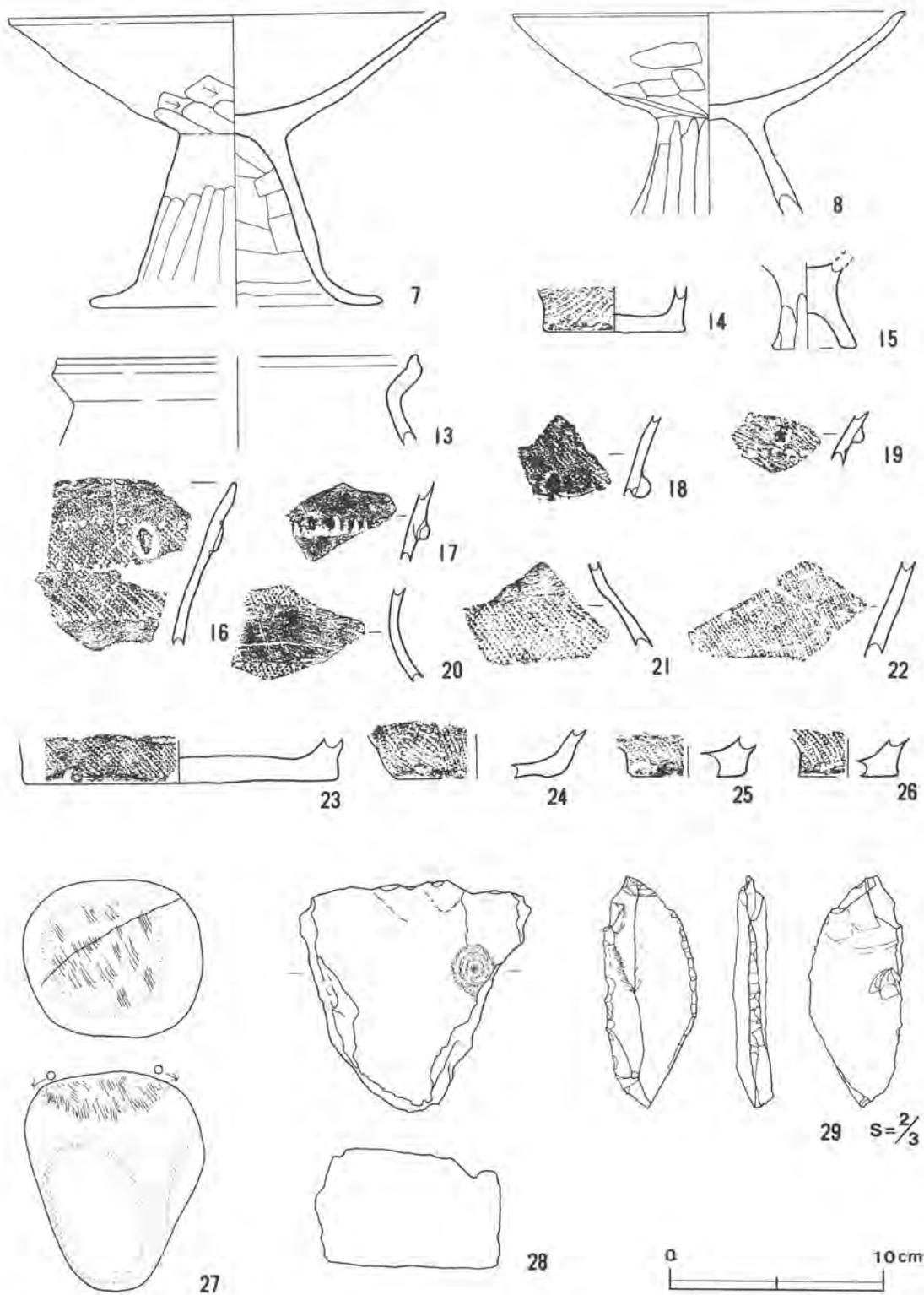
ピット 18か所。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は、径56～76cmの円形で深さ67～82cmである。P<sub>3</sub>は、長径92cm短径40cmの不整楕円形で深さ92cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、規模や配列から支柱穴と考えられる。支柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は、径34cmの円形で深さ50cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>～P<sub>13</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>16</sub>は、径20～46cmの円形で深さ12～100cmである。P<sub>14</sub>は、長径86cm、短径60cmの楕円形で深さ30cmである。P<sub>6</sub>～P<sub>16</sub>は、補助柱穴と思われる。P<sub>17</sub>・P<sub>18</sub>は、長



第75図 第104号住居跡出土遺物実測図(1)



第76図 第104号住居跡出土遺物実測図(2)



第77图 第104号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

径52～54cm，短径42～44cmの楕円形で深さ33～36cmである。性格は不明である。

炉 中央から北西壁寄りでP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の中間にあり，平面形は長径110cm，短径82cmの楕円形で，床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け，赤変硬化している。

貯蔵穴 南西コーナーにあり，平面形は径124cmの円形で深さ92cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 壁際には，焼土粒子，焼土中ブロックを含む暗褐色土が堆積し，その上には炭化粒子・焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。中央部は主に2層からなり，覆土下層は焼土粒子を含む褐色土で，覆土上層には焼土小・中ブロックを含む暗褐色土が堆積している。弥生式土器片，土師器片が覆土下層から多く出土している。

遺物 7～9は土師器高坏で，7・8は南東壁際中央の床面から横位で，9は北西壁際の覆土上層から，それぞれ出土している。10～12の埴は，10が東コーナーの床面から横位で，11は南東壁中央付近の床面から逆位で，12は北西コーナーの覆土下層から横位でそれぞれ出土している。1・2・4・6の甕は，1が南西壁際の覆土下層から横位のつぶれた状態で，2は南西壁寄りの覆土下層から破片で，4は南東壁際のほぼ床面から破片で，6は覆土上層から破片でそれぞれ出土している。13は口縁部で覆土上層から，3は胴部下半から底部で南西壁際の南コーナー寄りの覆土下層から正位で，5の底部は南東コーナー付近のほぼ床面からそれぞれ出土している。15は弥生式土器高坏の脚部で，覆土上層から出土している。14は壺の底部で，南西コーナー付近の覆土下層から出土している。27の磨石は南壁際の床面直上から，28の凹石は北西コーナーの床面直上から，29は覆土中から出土している。

所見 床面に赤変硬化している所が数か所あることや，床面に炭化材や焼土粒子が散在していることなどから，焼失住居跡と考えられる。覆土は，含有物や堆積状況から判断して人為堆積と思われる。まとまった遺物は，貯蔵穴周辺から出土している。本跡は，古墳時代中期（和泉式期）の時期である。

第104号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	甕 土師器	A 19.0 B(26.8)	体部下半欠損。体部は球形状で，頸部から口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ，内面ナデ。頸部外面指ナデ。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア 赤褐色 普通	P 87 60% 二次焼成 外面スス付着
2	甕 土師器	A(21.0) B 28.1 C〔5.7〕	底部欠損。体部は球形状で，頸部から口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。頸部外面指ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ナデ。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア 橙色 普通	P 88 60% 二次焼成
第76図 3	甕 土師器	B(17.9) C 8.9	体部下半の破片。平底で突出している。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒，雲母 にぶい黄橙色 普通	P 89 20% 二次焼成 外面炭化物付着
4	甕 土師器	B(14.8) C 8.4	体部下半の破片。平底で突出している。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒，雲母 にぶい橙色 普通	P 90 20% 内面炭化物付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 5	甕 土師器	B(26.8) C 7.6	体部から底部にかけての破片。 平底で突出している。体部は球 形状で中位に最大径を持つ。	体部内・外面ナデ。	砂粒,スコリア 橙色 普通	P91 30% 内・外面炭化物付着
第75図 6	甕 土師器	B(4.2) C(7.6)	底部片。平底。	底部外面縦位のヘラナデ, 内面 横位のヘラナデ。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 灰褐色 普通	P92 5% 外面スス付着
第77図 7	高 坏 土師器	A 20.5 B 13.9 D[13.8] E 8.1	脚部はラッパ状に開き, 裾部で ほぼ水平に広がる。坏部は下位 に弱い稜を持ち, 外傾して立ち 上がる。	坏部外面下位ヘラ削り, 上位ヘ ラナデ, 内面ナデ。脚部内・外 面ヘラナデ。裾部内・外面ナデ。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい橙色 普通	P93 70%
8	高 杯 土師器	A 18.5 B(9.6) E(5.3)	脚部下半欠損。坏部は下位に弱 い稜を持ち, 内彎気味に立ち上 がる。脚部はラッパ状に開く。	坏底部外面ヘラケズリ。坏部内 ・外面横ナデ, 脚部内・外面ヘ ラナデ。	砂粒,石英,雲母 スコリア 橙色 普通	P94 60%
第75図 9	高 杯 土師器	A 15.5 B(5.5)	坏部片。坏部は下位に弱い稜を 持ち, 外傾して立ち上がる。坏 部内面中位にうすい突帯を持ち 内面を一周している。	坏部内・外面横ナデ。坏底部外 面ヘラナデ。	砂粒,雲母,スコ リア にぶい橙色 普通	P95 40%
10	埴 土師器	A 9.3 B 8.7 C 3.3	平底。体部は扁平な球形状で最 大径を中位に持つ。口縁部は外 傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部 外面ヘラナデ, 内面輪積み痕有 り。	砂粒,雲母,スコ リア にぶい褐色 普通	P96 95% 内・外面炭化物付着
11	埴 土師器	A 11.0 B 10.4 C 3.9	平底。体部は扁平な球形状で最 大径を中位に持つ。口縁部は外 傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 面下位ヘラケズリ, 上位ヘラナ デ。内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母,スコ リア にぶい褐色 普通	P97 95% 内面炭化物付着
12	埴 土師器	A[10.2] B 9.5 C 3.3	平底。体部は扁平な球形状で最 大径を中位に持つ。口縁部は外 傾して立ち上がり, 中位に明瞭 な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 面下位ヘラケズリ, 上位ナデ。 内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母,スコ リア 橙色 普通	P98 80%
第77図 13	甕 土師器	A[16.3] B(4.2)	口縁部片。口縁部は, 強く頸部 から外反し, 口唇部は上方につ まみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 赤褐色 普通	P99 5% 内面炭化物付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第77図 14	壺 弥生式土器	B(2.2) C 6.4	底部片。平底。胴部は底部からやや外傾して立ち上がり, 附加条 1種(附加2条)の縄文が施されている。羽状構成はとらない。	砂粒,石英,長石 雲母 にぶい橙色 普通	P100 5%
15	高 坏 弥生式土器	D[3.9] E(4.0)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。外面ヘラケズリされている。	砂粒,石英,長石 橙色 普通	P101 20%

第77図16～26は, 第104号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。16～19は口縁部片である。16は口縁部中位に竹管状工具による2列の刺突文, 17・18は口縁部下端に棒状工具による1列のキザミ目, 19は口縁部中位に縄文原体による押圧が1列施されている。また, いずれも瘤が貼られている。20は頸部片で中位を無文とし, 胴部には単節縄文が施されている。21は胴部から頸部にかけての破片で, 頸部は無文とし胴部には単節縄文が施されている。22は胴部片である。23～26の底部片は, いずれも胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第77図27	磨 石	10.4	8.2	7.5	791.7	砂 岩	床面直上	Q12
28	凹 石	10.9	10.8	5.7	832.4	砂 石	床面直上	Q13 石皿の転用
29	ナイフ形石器	5.4	2.2	0.9	9.5	頁 岩	覆土中層	Q14

第114号住居跡（第78図）

位置 G地区中央部，G5b5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部が第201号土坑に，東コーナー付近が第5号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸7.84m，短軸7.76mの方形である。

主軸方向 N-43°-E

壁 壁高12～25cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 南東壁中央部から東コーナーにかけては確認できなかったが，壁下を全周していたと思われる。上幅12～18cm，深さ6～12cmで断面形は「U」字状である。

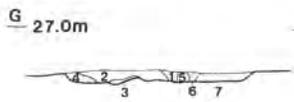
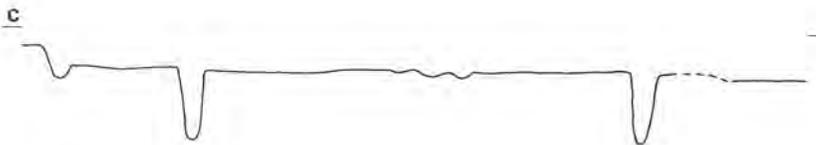
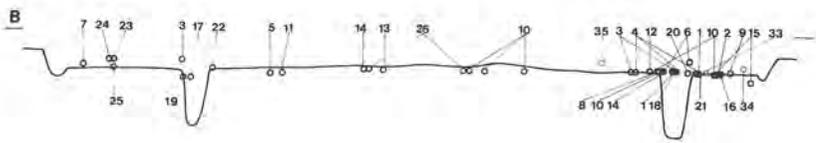
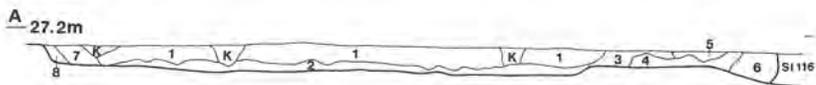
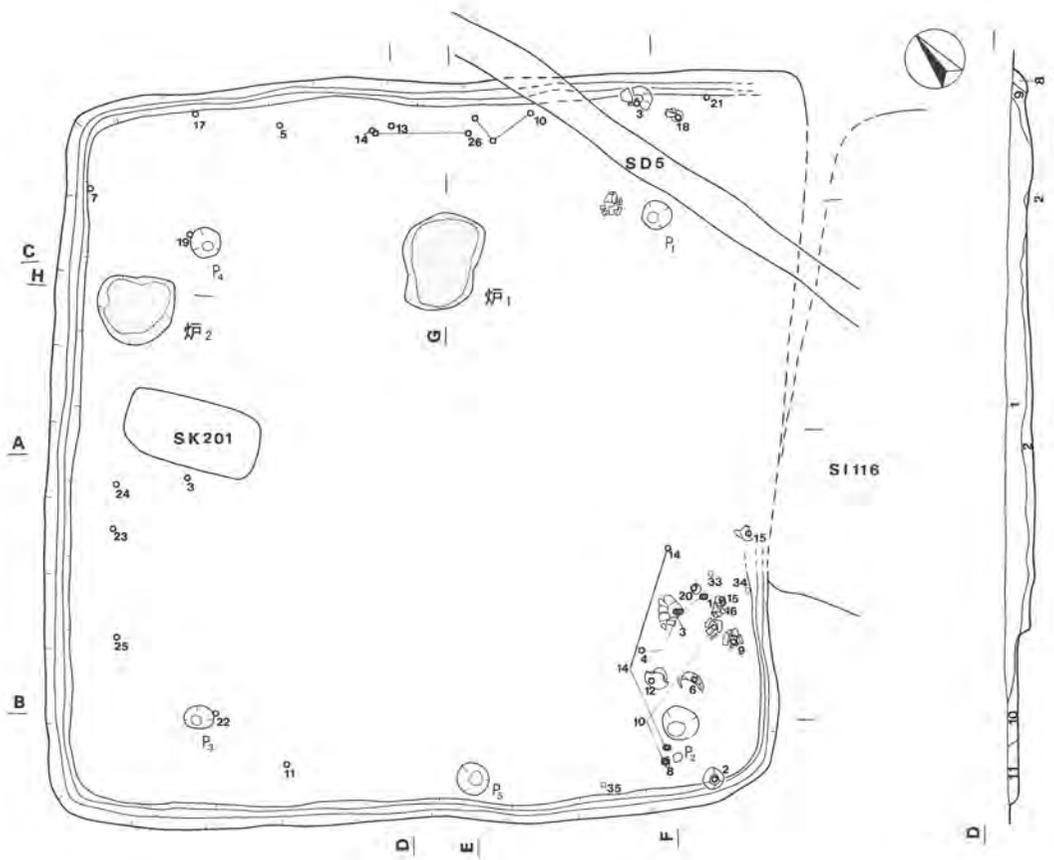
床 ほぼ平坦で，全体にあまり踏み固められておらず軟らかい。南コーナー付近は一段高まりがある。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径24～40cmのほぼ円形で深さは62～82cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は，径34cmの円形で深さ65cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

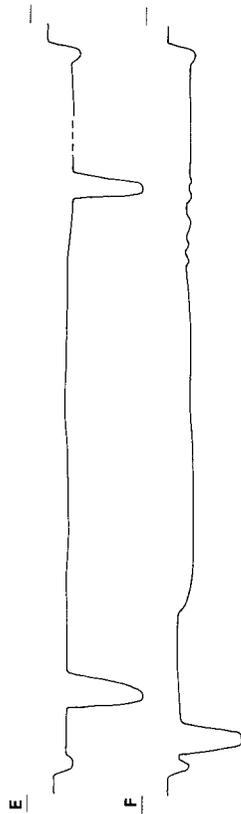
炉 2か所。炉<sub>1</sub>は中央から北東壁寄りにあり，平面形は長径102cm，短径84cmの不整楕円形で，床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。炉<sub>2</sub>は北西壁近くでP<sub>4</sub>寄りにあり，平面形は長径82cm，短径72cmの不整楕円形で床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，北側が熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際には褐色土が堆積し，床面付近には焼土粒子・焼土大ブロックを含む褐色土が堆積している。覆土上層には焼土中ブロック，焼土粒子をわずかに含む暗褐色土が堆積している。弥生式土器片，土師器片が覆土下層から多く出土している。特に南コーナー付近から土師器片が多量に出土している。

遺物 6は土師器鉢で南コーナー付近の床面直上から横位で出土している。7・8は小形鉢で，7は北コーナー付近の覆土下層から，8は北東壁際の覆土下層から破片でそれぞれ出土している。9～12の高坏は，9は南コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で，10は北東壁中央付近の覆土下層から破片で，11は南西壁寄りの覆土下層からつぶれた状態で，12は南コーナー付近の床面直上から横位で，それぞれ出土している。13～17は高坏の脚部で，13は北東壁寄りの覆土下層から，14は南東壁際の覆土下層からと北東壁際の覆土下層から出土した破片が接合している。15・16は南東壁際の覆土下層から，17は北東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。19・20は埴の胴部から底部で，19は北コーナー付近の覆土下層から逆位で，20は南東壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。1～3の壺は，1は南東壁付近の覆土下層から破片で，2の口縁部は南コーナー際の覆土下層から逆位でおしつぶれた状態で，3は東コーナー寄りの覆土下層から，それぞれ出土している。18の埴は，北東壁際の覆土下層から横位のおしつぶれた状態で出土している。4・5の甕は，4が南東壁寄りの覆土下層から破片で，5は北東壁際から破片でそれぞれ出



第78图 第114号住居跡実測图



第114号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ロームブロック少量、焼土粒子・焼土ブロック微量。
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック極少量、焼土粒子微量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量、ロームブロック極少量。
- 4 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土ブロック極少量。
- 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック極少量。
- 8 褐色 ローム粒子多量。
- 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物少量。
- 10 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
- 11 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック極少量。

第114号住居跡 如<sub>1</sub>土層解説

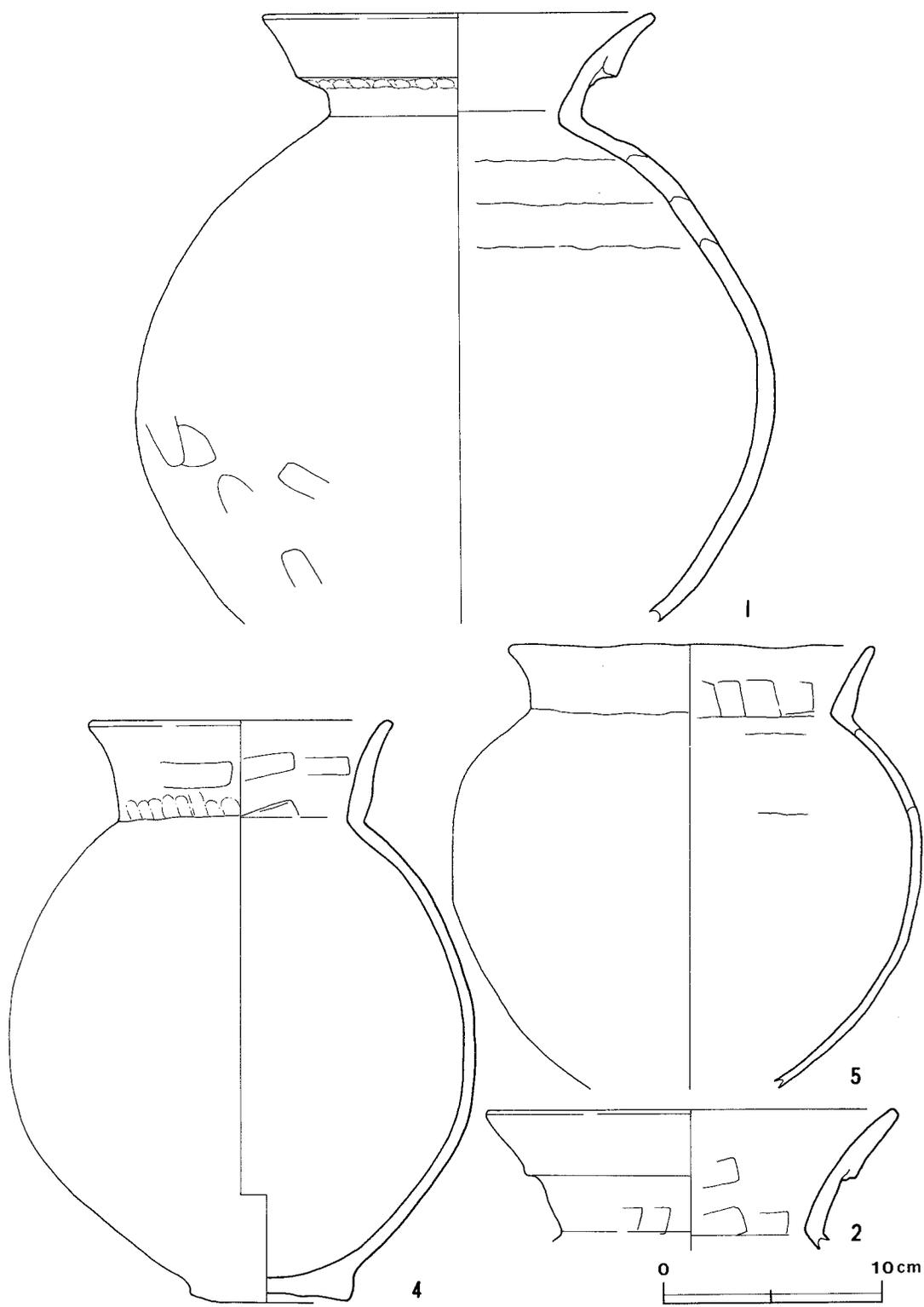
- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量。
- 7 褐色 ローム粒子多量。

第114号住居跡 如<sub>2</sub>土層解説

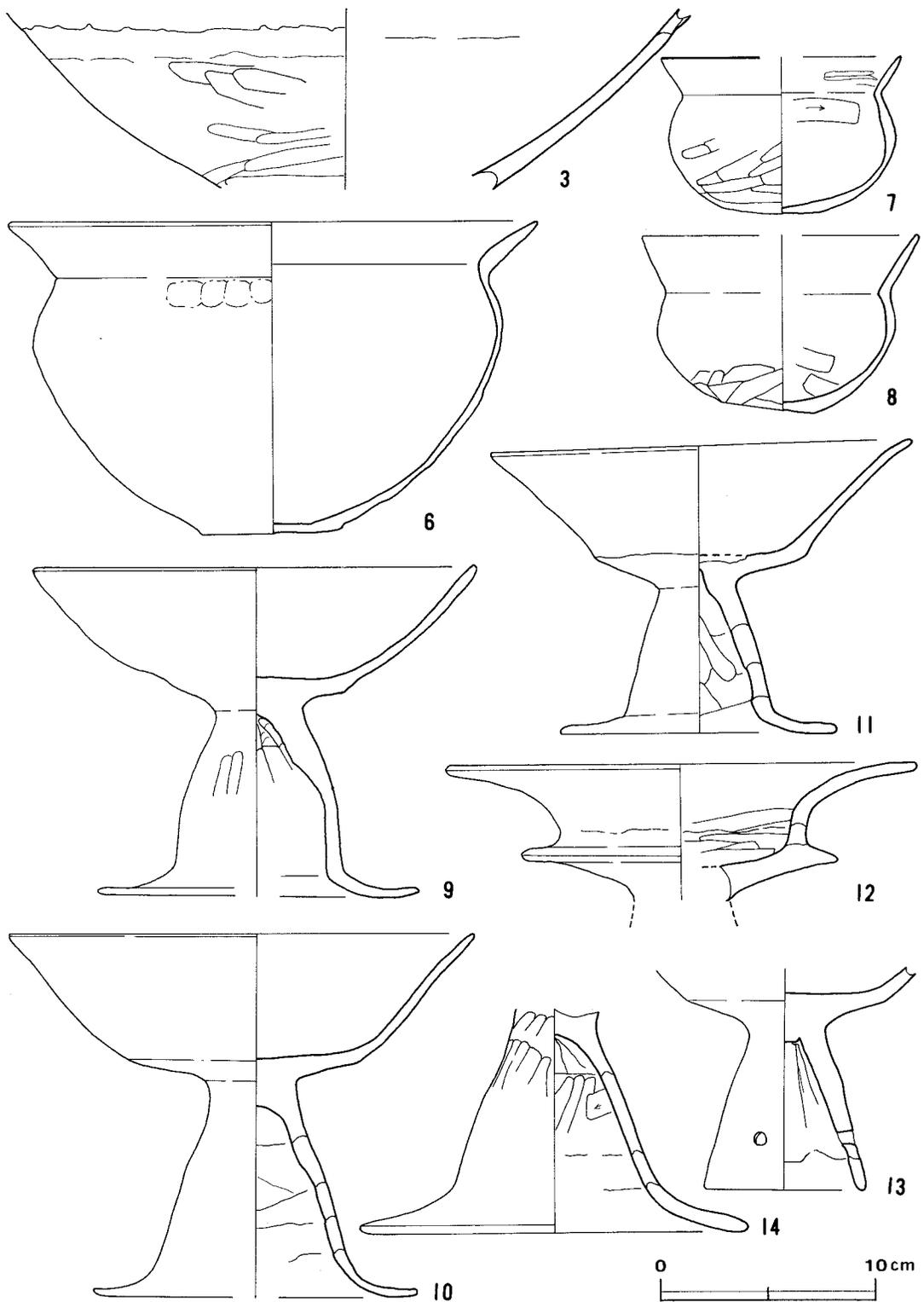
- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量。

土している。21は小形甕で、北東コーナー付近の覆土下層から出土している。22～26は手捏土器で、西コーナー付近の覆土下層から一括で出土している。33・34は南コーナー付近の覆土下層からで、35は南コーナー付近の覆土中層から出土している。35は穂摘具と思われる。

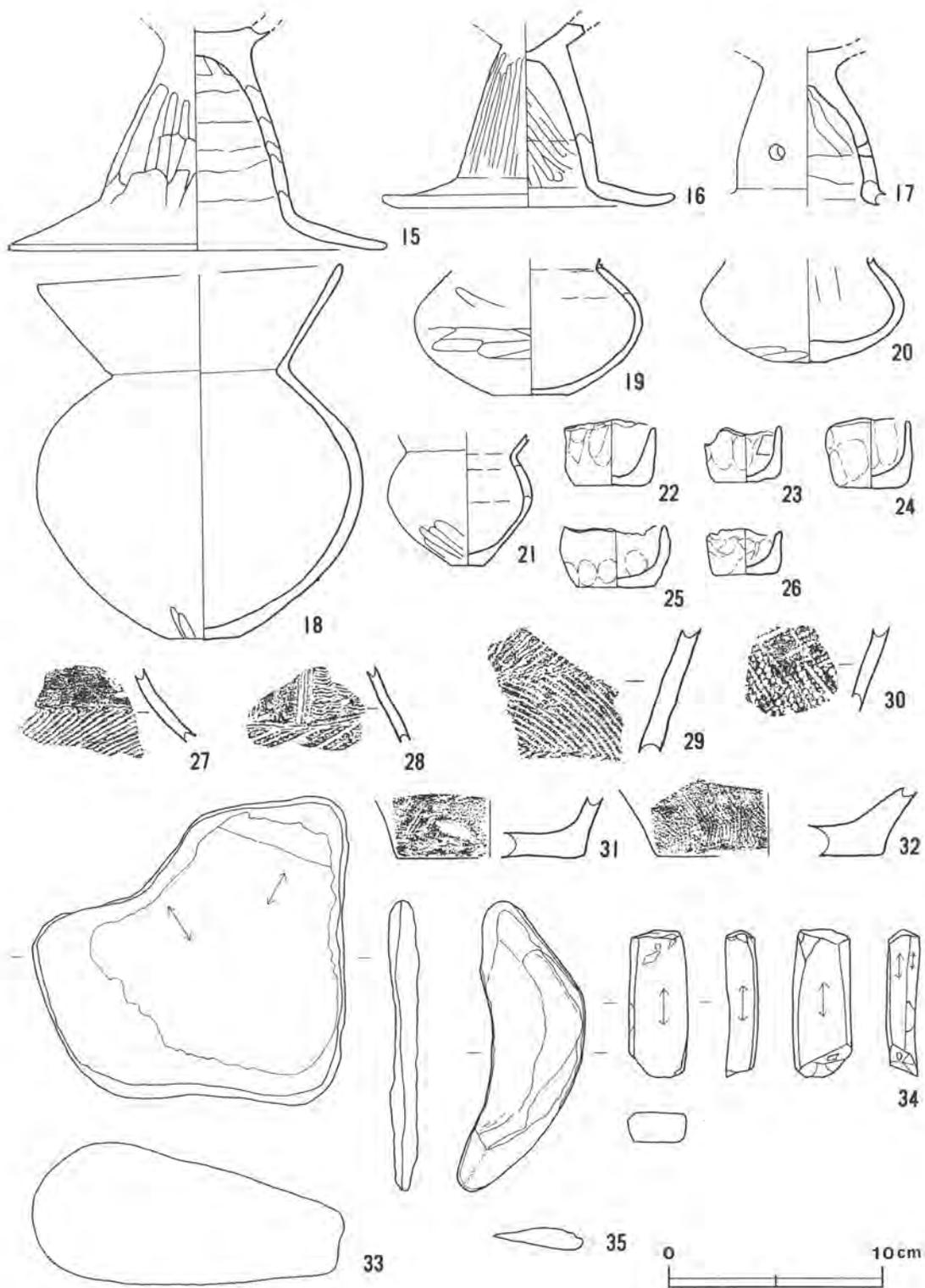
所見 大量の土師器片が覆土下層から出土しており一括投棄されたと考えられる。遺物は壁際に多い。覆土中には、焼土粒子・焼土ブロックが、ほぼ全層にわたって混入しており人為体積と考えられる。本跡は、古墳時代中期（和泉式期）の時期である。



第79图 第114号住居跡出土遺物実測図(1)



第80图 第114号住居跡出土遺物実測図(2)



第81图 第114号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)

第114号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	壺 土師器	A 18.0 B(23.5)	底部欠損。体部は球形状で最大径を中位に持つ。口縁部は複合口縁で、頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。口縁部下端指頸圧痕有り。頸部外面ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P 139 80% 内・外面炭化物付着
2	壺 土師器	A 18.9 B( 6.6)	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。複合口縁。	口縁部外面ナデ、内面ヘラケズリ後ヘラナデ。頸部内・外面ヘラケズリ後ヘラナデ。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 赤褐色 普通	P 143 20% 内・外面炭化物付着
第80図 3	壺 土師器	B( 8.5)	体部下半の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。輪積み痕有り。体部外面に隆帯を貼り補強している。	砂粒,石英,長石 スコリア にぶい橙色 普通	P 142 15% 内・外面炭化物付着
第79図 4	甕 土師器	A 14.2 B 27.0 C 7.4	平底で突出している。体部は球形状で、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。頸部外面指頸圧痕有り。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒,石英,長石 雲母 橙色 普通	P 140 90% 内・外面炭化物付着 二次焼成
5	甕 土師器	A 16.8 B(20.7)	底部欠損。体部は球形状で、口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部内・外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒,石英,長石 雲母 橙色 普通	P 141 70% 内・外面炭化物付着 二次焼成
第80図 6	鉢 土師器	A 24.5 B 14.5 C 6.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾して大きく開く。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ヘラナデ。	砂粒,スコリア 橙色 普通	P 144 95% 内・外面炭化物付着 二次焼成
7	小型鉢 土師器	A[11.0] B 7.4 C 4.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒,雲母 にぶい黄褐色 普通	P 145 70% 内・外面炭化物付着 二次焼成
8	小型鉢 土師器	A[12.8] B 8.3 C 4.5	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒,雲母 にぶい黄褐色 普通	P 146 50% 内面炭化物付着
9	高坏 土師器	A 20.3 B 15.4 D[14.8] E 10.3	脚部上半はラッパ状で、下半は円筒状である。裾部はほぼ水平に開く。坏部は下位に稜を持ち内彎気味に立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 明赤褐色 普通	P 147 85% 外面スス付着
10	高坏 土師器	A 21.5 B 16.9 D[15.0] E 10.1	脚部はラッパ状で裾部はほぼ水平に開く。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒,スコリア 赤褐色 普通	P 148 70% 内面炭化物付着
11	高坏 土師器	A 19.4 B 13.8 D 13.0 E 7.0	脚部はラッパ状で裾部はほぼ水平に開く。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ナデ、内面指ナデ。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にぶい赤褐色 普通	P 149 80% 内面炭化物付着
12	高坏 土師器	A 21.8 B( 6.4)	坏部片。坏部は底部の周縁が突き出ており、外反して立ち上がり大きく開く。	坏部内・外面ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母,スコリア にぶい橙色 普通	P 150 40% 内面炭化物付着
13	高杯 土師器	B(10.4) D 7.6 E 7.5	脚部から坏部にかけての破片。脚部はラッパ状で、坏部下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。脚部下位に円孔(径6mm)が3か所穿たれている。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ナデ、内面指ナデ。脚部内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母,スコリア 橙色 普通	P 151 50% 裾部欠損後再利用
14	高坏 土師器	D 18.1 E(10.6)	脚部片。脚部はラッパ状で裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部外面ヘラナデ、内面上位指ナデ。中位から下位ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母,スコリア 赤褐色 普通	P 152 50% 内面炭化物付着
第81図 15	高坏 土師器	D 17.5 E(10.3)	脚部片。脚部はラッパ状で裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部外面ヘラナデ、内面上位指ナデ。中位から下位ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母,スコリア にぶい黄褐色 普通	P 153 50% 内面炭化物付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 16	高坏 土師器	B( 8.6) D 13.6 E 7.5	坏部欠損。脚部はラッパ状で裾部ではほぼ水平に広がる。	脚部内・外面ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母,スコリア 明赤褐色 普通	P 154 50%
17	高坏 土師器	B( 7.5) E( 6.1)	脚部片。脚部はラッパ状で下位に円孔(径6mm)が2か所穿たれている。	脚部外面ナデ, 内面ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒,雲母 にぶい橙色 普通	P 155 20%
18	埴 土師器	A[14.1] B 17.6 C 3.2	平底。体部は球形で, 最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒,スコリア 橙色 普通	P 156 80%
19	埴 土師器	B( 6.4) C 3.5	口縁部欠損。平底。体部は扁平な球形状で最大径を中位に持つ。	体部内面ナデ, 外面ヘラナデ。	砂粒,雲母,スコリア にぶい橙色 普通	P 157 70%
20	埴 土師器	B( 4.9) C 1.7	口縁部欠損。平底。体部は扁平な球形状で最大径を中位に持つ。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒,雲母,スコリア 明黄橙色 普通	P 158 70%
21	ミニチュア 土師器	B( 6.2) C 1.6	口縁部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ヘラナデ, 内面ナデ。体部内面輪積み痕有り。	砂粒,スコリア にぶい黄橙色 普通	P 159 80%
22	手捏土器 土師器	A 4.2 B 3.1 C 3.5	平底。体部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部内・外面指ナデ。	雲母,スコリア にぶい黄橙色 普通	P 160 95%
23	手捏土器 土師器	A 3.6 B 2.7 C 3.0	平底。体部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部内・外面指ナデ。	雲母,スコリア 褐灰色 普通	P 161 90%
24	手捏土器 土師器	A 3.7 B 3.2 C 3.2	平底。体部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部内・外面指ナデ。	雲母,スコリア 淡黄色 普通	P 162 80%
25	手捏土器 土師器	A[ 4.6] B 2.9 C 3.7	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面指ナデ。	雲母,スコリア 橙色 普通	P 163 70%
26	手捏土器 土師器	A 3.5 B 2.0 C 2.9	平底。体部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部内・外面指ナデ。	雲母,スコリア にぶい黄橙色 普通	P 164 100%

第81図27～32は, 第114号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。27・28は胴部から頸部にかけての破片である。28は, 胴部と頸部を櫛歯状工具による横走文で区画し, 頸部にはスリット手法による区画をし, 充填波状文を施している。29・30は胴部片で, どちらも羽状構成をとっている。31・32は底部片で, 胴部には31が附加条1種(附加2条)の縄文が施され, 32はハケ目調整されている。

図版番号	器種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第81図33	石 皿	14.7	14.4	6.8	1797.7	砂 岩	覆 土	Q 19
34	砥 石	(6.9)	2.8	1.5	(44.2)	頁 岩	覆 土	Q 20 破片
35	穂 摘 具	13.5	6.1	1.5	80.5	ホルンフェルス	覆 土 中 層	Q 22 石鎌の可能性有り

## 第117号住居跡（第82図）

位置 G 地区中央部，G5e5区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.40m，短軸6.31mの方形である。

主軸方向 N-37°-W

壁 壁高40～49cmで，外傾して立ち上がっている。

壁溝 南東壁中央部を除き，壁下をほぼ全周している。上幅6～14cm，深さ4～6cmで断面形は「U」字状である。

床 ほぼ平坦であるが，炉の南側が少し低くなっている。中央部と炉の西側が踏み固められている。

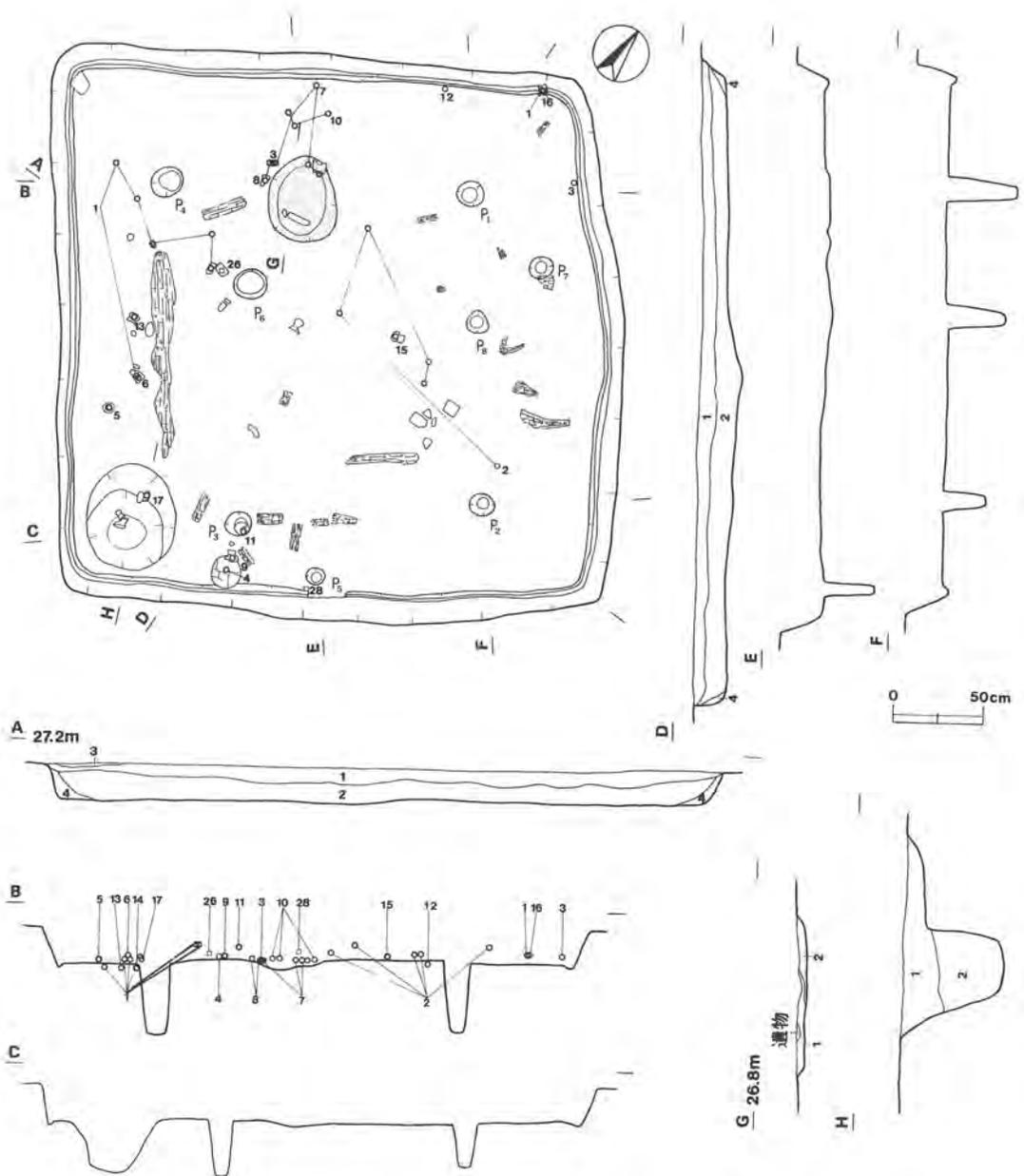
ピット 8か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径28～32cmの円形で深さは49～81cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P<sub>5</sub>は，径20cmの円形で深さ61cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は，径24～34cmの円形で深さ49～76cmの補助柱穴である。

炉 中央からやや北西寄りP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結ぶ線上にあり，平面形は長径96cm，短径76cmの楕円形で，床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

貯蔵穴 南コーナーにあり，平面形は長径118cm，短径59cmの楕円形で深さ62cmである。壁は，南東側が外傾して立ち上がり，北西側は床面から46cmと26cm下がった所にそれぞれ段をもち，緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は，平坦である。

覆土 壁際には，褐色土がわずかに堆積し，第2層には焼土粒子，焼土小ブロック，炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。弥生式土器片・土師器片が，覆土上層である第1層から多く出土している。

遺物 5は土師器鉢で，南西壁際の貯蔵穴寄りの床面直上から正位で出土している。6～11は高坏で，6は貯蔵穴の覆土上層から横位で，7・8は北西壁寄りの床面直上から，9は南東壁際の貯蔵穴寄りで床面直上から，10は北西壁中央付近の床面直上から，11は南東壁寄りの覆土下層からそれぞれ破片で出土している。12は高坏の脚部で，北西壁際の床面直上から逆位で出土している。13～17は埴で，13は南東壁中央の床面直上から横位で，14は南コーナー付近の床面直上から横位で，15は中央部の床面直上から横位で，16は北コーナーの壁際で覆土下層から横位で，17は貯蔵穴の覆土下層から横位でそれぞれ出土している。3・4は甕で，3は北西壁中央付近から，4は南東壁際の貯蔵穴寄りからで，それぞれ床面直上から破片で出土している。2は小形壺で，中央部の覆土下層から破片で出土している。1の壺は，中央部から南西壁寄りにかけての床面から破片で出土している。24・25の石鏃は覆土中から，26の石皿は中央部付近の床面直上からそれぞれ出土している。27の磨製石斧は覆土中から，28の敲石は南西壁寄りの床面直上から出土している。29は覆土中から出土している。



第117号住居跡 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、ロームブロック極少量、焼土ブロック少量、炭化粒子極少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。

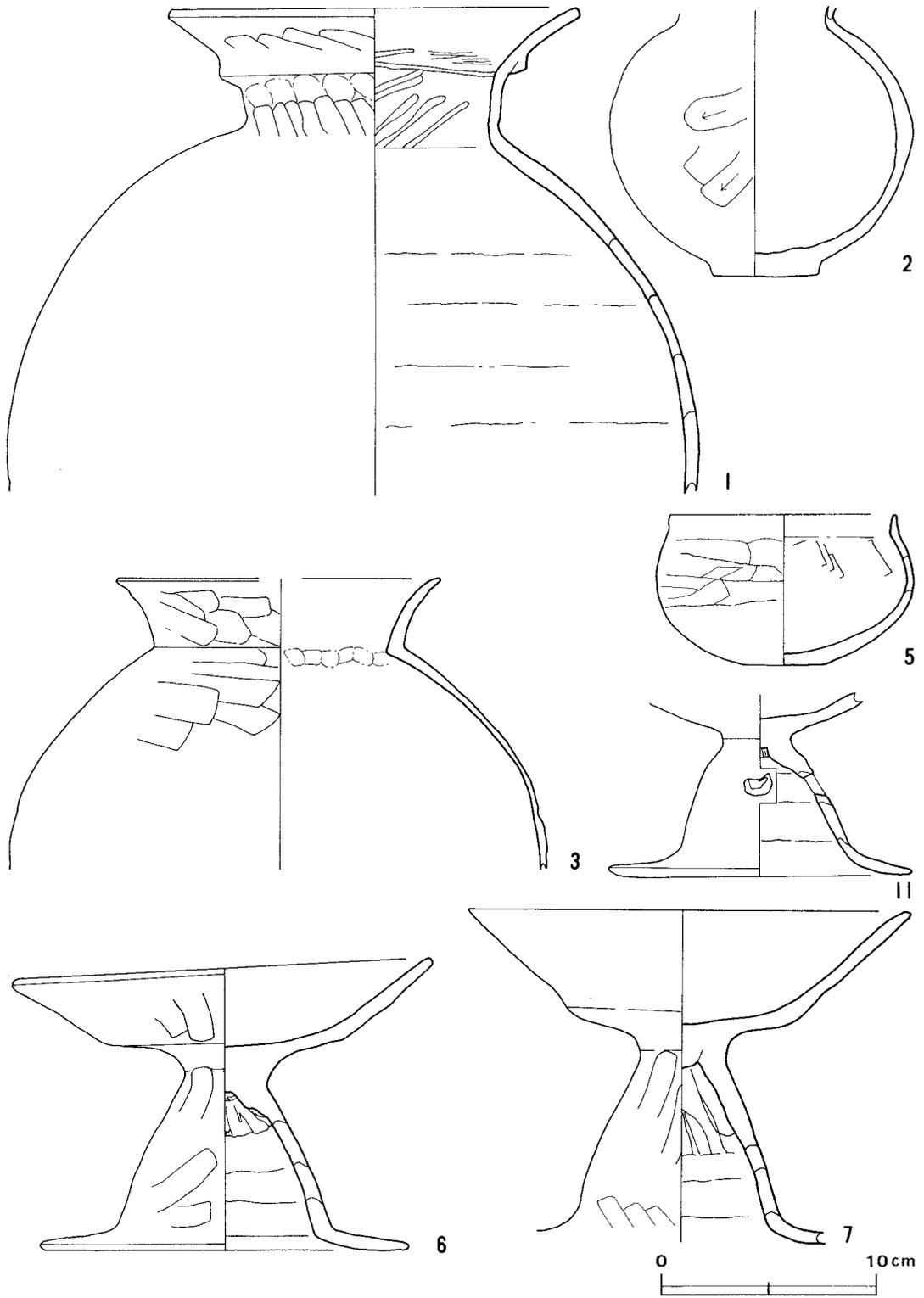
第117号住居跡 如土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量、炭化物中量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。

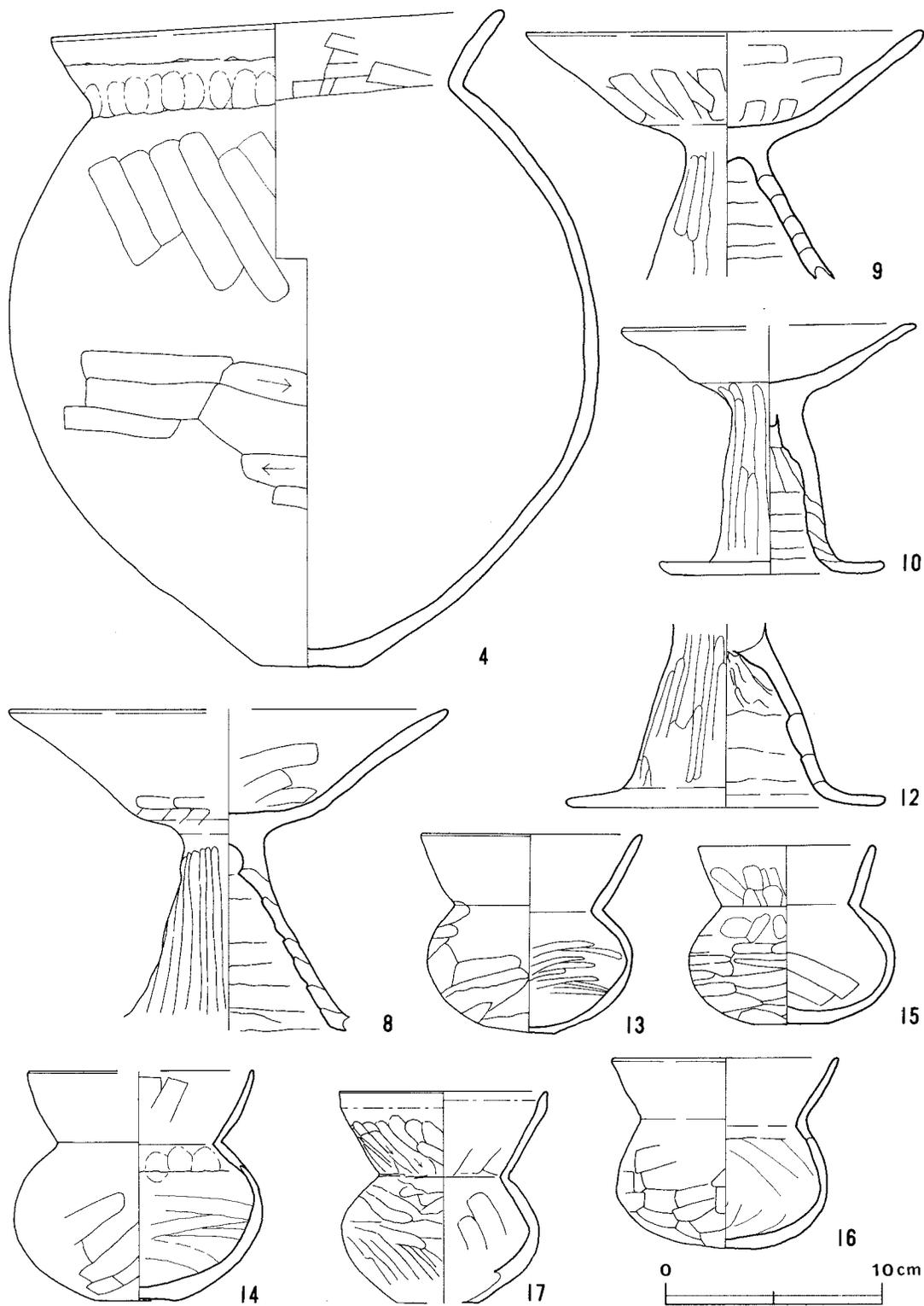
第117号住居跡 貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック中量、炭化物多量。

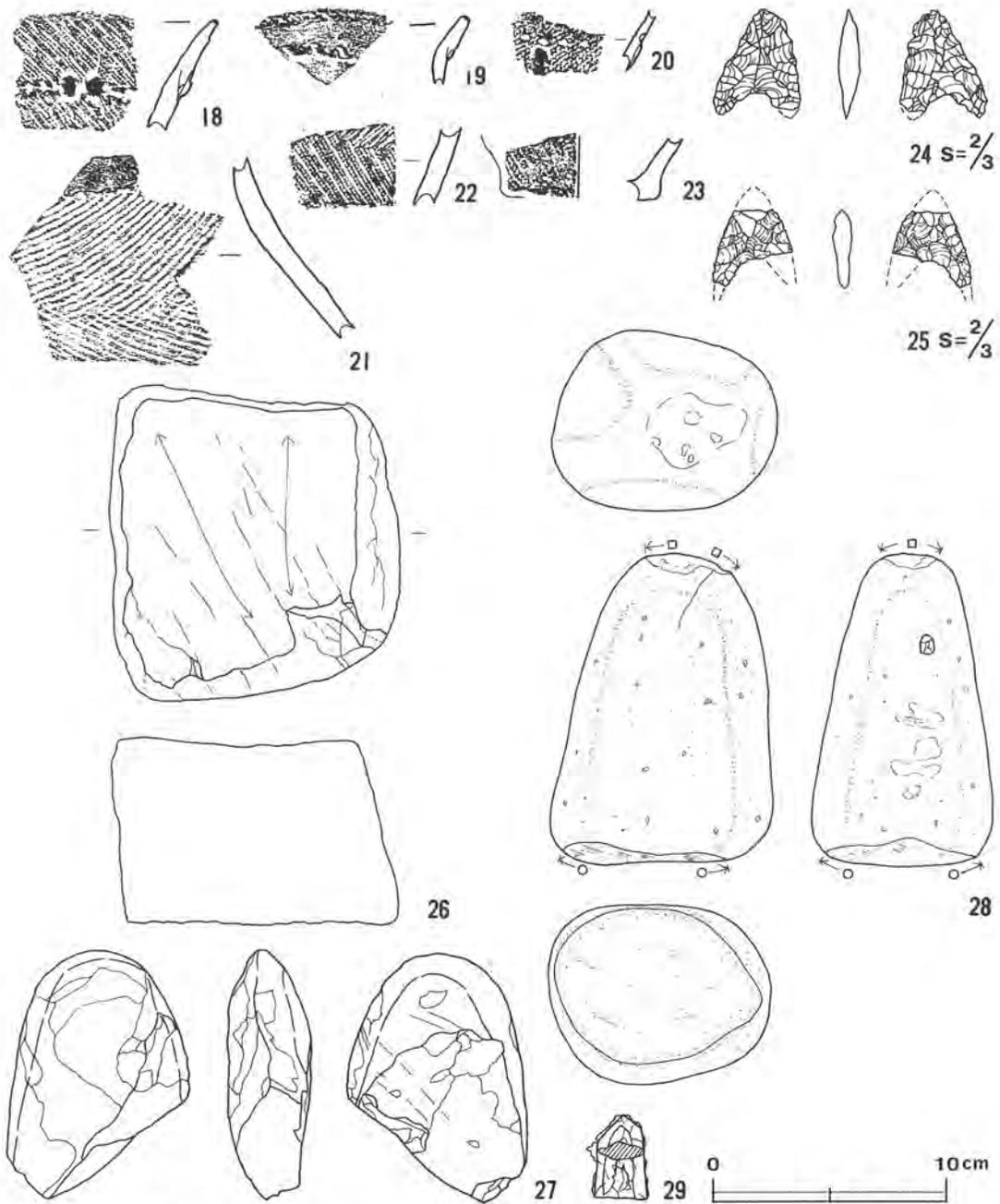
第82図 第117号住居跡実測図



第83図 第117号住居跡出土遺物実測図(1)



第84图 第117号住居跡出土遺物実測図(2)



第85図 第117号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)

所見 床のほぼ全体に焼土粒子が散乱しており、特に北東コーナー付近、南西壁寄り、中央部が多量である。また、炭化材が床面上に散在し、特にP<sub>4</sub>から貯蔵穴にかけて形の分かる状態で出土しており、焼失家屋と考えられる。そのためか、遺物は床面直上からの出土が多い。覆土第2層には焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積しており、人為体積と考えられる。本跡は、古墳時代中期（和泉式期）の時期である。

第117号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	壺 土師器	A 19.1 B(22.9)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は球形で、口縁部は複合口縁で外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。頸部外面指ナデ後ヘラナデ、内面ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 スコリア 橙色 普通	P 180 30% 内・外面炭化物付着
2	小形壺 土師器	B(12.7) C 5.0	底部から体部にかけての破片。 底部は平底で突出している。胴部は球形で、最大径を中位に持つ。	底部外面ヘラケズリ。体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。	砂粒、スコリア 明赤褐色 普通	P 182 70% 二次焼成
3	甕 土師器	A(15.0) B(13.7)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は球形で、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒、石英、長石 スコリア 橙色 普通	P 181 20% 内・外面炭化物付着
第84図 4	甕 土師器	A 21.0 B 30.6 C 5.0	平底。体部は球形で、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面指ナデ、内面ヘラナデ。体部外面上位ヘラナデ、下位ヘラケズリ、内面ナデ。	砂粒、石英、長石 スコリア にぶい褐色 普通	P 183 90% 内・外面炭化物付着
第83図 5	鉢 土師器	A 10.6 B 7.1 C 3.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英、雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P 184 100% 二次焼成 内・外面炭化物付着
6	高土師器	A 19.4 B 13.7 D[17.0] E 9.5	脚部はラップ状で、裾部ではほぼ水平に開く。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部外面ヘラナデ、内面ナデ。脚部外面ヘラナデ、内面上位指ナデ、下位輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 明赤褐色 普通	P 185 90% 外面スス付着 二次焼成
7	高土師器	A 20.5 B(15.5) E 10.2	裾部欠損。脚部はラップ状で裾部で大きく開く。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 橙色 普通	P 186 70%
第84図 8	高土師器	A[20.4] B(15.0) E( 9.1)	裾部欠損。脚部は「ハ」の字状で、坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、雲母 褐色 普通	P 187 70%
9	高土師器	A[18.5] B(11.7) E( 7.1)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状で、坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ヘラナデ。脚部外面ヘラナデ、内面指ナデ、輪積み痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 褐色 普通	P 188 50%
10	高土師器	A[13.8] B 11.6 D 10.5 E 8.0	脚部上位は「ハ」の字状、下位は円筒状で裾部は水平に開く。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がる。	坏部内・外面ナデ。脚部外面ヘラナデ、内面上位指ナデ、下位輪積み痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 褐色 普通	P 189 70% 二次焼成 外面スス付着
第83図 11	高土師器	B( 8.5) D 14.1 E 7.3	坏部欠損。脚部はラップ状で、裾部ではほぼ水平に開く。脚部上位に凹孔(12mm)が1か所穿たれている。	脚部内・外面ナデ、内面輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 褐色 普通	P 190 55%
第84図 12	高土師器	B( 8.6) D 14.6	坏部欠損。脚部はラップ状で、裾部はほぼ水平に開く。	脚部外面ヘラナデ、内面指ナデ、輪積み痕有り。	砂粒、雲母、スコリア 褐色 普通	P 191 40%
13	埴土師器	A 10.2 B 9.4 C 3.4	平底。体部は偏平な球形で、上位に最大径を持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒、雲母、スコリア 褐色 普通	P 192 100%
14	埴土師器	A[10.5] B 10.7 C 4.0	平底。体部は偏平な球形で、中位に最大径を持つ。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ヘラケズリ後ヘラナデ。内面上位指ナデ、ほかヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒、雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P 193 80% 外面スス付着
15	埴土師器	A 8.2 B 8.3 C 3.5	平底。体部は偏平な球形で、中位に最大径を持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面ヘラナデ、内面ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒、雲母、スコリア 明赤褐色 普通	P 194 90%
16	埴土師器	A 10.3 B 9.0 C 3.2	平底。体部は偏平な球形で、中位に最大径を持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	砂粒、雲母、スコリア 褐色 普通	P 195 90% 外面スス付着
17	埴土師器	A 9.6 B 10.0 C[ 3.7]	底部欠損。体部は偏平な球形で、中位に最大径を持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒、雲母、スコリア 褐色 普通	P 196 75% 二次焼成 外面スス付着

第85図18～23は、第117号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。18～20は口縁部片である。18は縄文施文の複合口縁で、下端には棒状工具による刺突文が施され、さらに2個1組の瘤が貼られている。19は口唇部に縄文が施された複合口縁で、下端は棒状工具により刺突されている。20は、縄文原体による押圧が施され、瘤が貼られている。21は胴部から頸部にかけての破片で、頸部を無文とし胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。22の胴部片は、附加条1種（附加1条）の縄文施文で、羽状構成をとっている。23は縄文施文の底部片である。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第85図24	石 鉢	2.3	1.8	0.5	1.2	黒曜石	覆土	Q26
25	石 鉢	(1.7)	(1.7)	0.4	(0.9)	黒曜石	覆土	Q27 破片
26	石 皿	13.6	12.5	8.0	(2142.8)	砂岩	床面直上	Q28
27	磨製石斧	(10.7)	7.7	(3.5)	(343.4)	砂岩	覆土	Q33 破片
28	敲石	13.4	9.6	7.7	1316.7	緑色凝灰岩	床面直上	Q35 磨石兼用

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第85図29	鉄 鉢	3.7	2.3	0.8	6.6	M2 覆土上層

表2 原田北遺跡住居跡一覧表

注 ( )は、平成3年度調査で確認された数である。

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸	壁高 (cm)	床面	内部施設				炉	覆土	出土遺物	備考	
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット					入口
17	G5b1	N-27°-W	不整形	8.50 × [7.80]	9-34	平坦	/	3(1)	0	6(3)	1	3(2)	自然	土師器、弥生式土器、土玉、砥石	古墳 南西部は平成3年度調査、S1-115と重複
27	H5a4	N-67°-W	隅丸長方形	6.40 × 5.12	47-55	平坦	/	4(3)	0	4(3)	0	1	自然	弥生式土器、土師器、磨石	弥生 南東部は平成3年度調査
58	G3c3	N-38°-W	方形	8.65 × 8.52	22-35	平坦	全周	4(4)	2(1)	10(10)	1(1)	2(2)	人為	土師器、弥生式土器	古墳 大半は平成3年度調査
66	F4g3	N-0°	方形	11.16 × 10.80	19-40	平坦	全周	7(6)	2(1)	26(16)	-	2(2)	人為	土師器、弥生式土器、石製紡錘車、磨石	古墳 大半は平成3年度調査
76	E5c4	N-33°-W	隅丸長方形	6.80 × 5.75	42-52	平坦	/	4	0	7(4)	1(1)	3	人為	弥生式土器、土師器、石器	弥生 南東部は平成3年度調査
96	F4j1	N-33°-W	隅丸長方形	5.90 × 4.58	38-52	平坦	/	2	0	3(2)	1	1	自然	弥生式土器、土師器	弥生 北東部は平成3年度調査
97	G3d3	N-21°-E	隅丸長方形	[5.30] × [3.70]	10	凹凸	/	4	0	6	1	1	自然	弥生式土器、土師器	弥生
98	F3d3	N-56°-W	隅丸長方形	6.30 × 5.70	39-54	平坦	全周	4	2	13	8	1	自然	土師器、弥生式土器、土玉、穂筒具、砥石、刀子	古墳
99	G5c4	N-54°-W	隅丸方形	3.45 × 3.40	25-33	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、石器	弥生
100	F2d3	N-11°-W	方形	5.01 × 4.88	15-28	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、土師器	弥生
101	F3g2	N-37°-W	隅丸方形	5.27 × 5.27	35-40	平坦	全周	4	1	6	1	2	自然	土師器、弥生式土器	古墳
102	F3h7	N-71°-W	隅丸方形	4.40 × 4.02	33-40	平坦	/	4	0	6	1	1	自然	弥生式土器、土師器、紡錘車、石鏃	弥生
103	G3a3	N-30°-W	隅丸方形	4.49 × 4.02	40-51	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、土師器、紡錘車	弥生
104	G3b3	N-18°-W	方形	9.55 × 9.53	42-66	平坦	全周	4	1	18	1	1	人為	土師器、弥生式土器、磨石、凹石	古墳 SK-153と重複 焼失
105	F3j1	N-25°-W	方形	3.28 × 3.06	24-27	平坦	/	4	0	4	0	1	自然	弥生式土器、土師器	弥生 SK-186と重複
106	E5d1	N-41°-W	隅丸方形	4.50 × 4.05	10-22	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、土師器、紡錘車、砥石	弥生
107	E5d2	N-7°-W	隅丸長方形	[3.80] × 4.09	13-25	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、土師器、紡錘車	弥生
108	E5c4	N-43°-E	隅丸長方形	[5.01] × [2.69]	18-30	平坦	/	4	0	5	1	0	自然	弥生式土器	弥生
109	E5d3	N-23°-W	隅丸方形	2.55 × 2.54	24-40	平坦	/	2	0	2	0	0	自然	弥生式土器	弥生
110	D5j3	N-76°-E	隅丸方形	4.79 × [4.52]	27-35	平坦	/	4	0	5	1	2	自然	弥生式土器	弥生
111	D6e1	N-29°-E	隅丸長方形	4.42 × 3.51	22-26	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器	弥生
112	F5i1	N-34°-W	隅丸方形	4.34 × 4.19	38-46	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、土師器	弥生
113	G5a3	N-44°-W	隅丸方形	4.10 × 3.82	38-46	平坦	/	3	0	4	1	1	自然	弥生式土器、土師器、不明石製品	弥生
114	G5b3	N-43°-E	隅丸方形	7.84 × 7.76	12-25	平坦	全周	4	0	5	1	2	人為	土師器、砥石、石鏃、石皿	古墳 S1-116、SK-201、SD-5重複
115	G5b1	N-43°-W	隅丸方形	4.05 × 4.07	8-20	平坦	/	4	0	6	1	1	自然	弥生式土器、紡錘車、石鏃、砥石	弥生 S1-17と重複
116	G5c3	N-36°-W	隅丸長方形	[6.29] × 5.75	20-44	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、土師器、紡錘車、磨石	弥生 S1-114、SD-5・6と重複
117	G5e3	N-37°-W	方形	6.40 × 6.31	40-49	平坦	全周	4	1	8	1	1	人為	土師器、鉄鏃、石鏃、砥石、磨石、砥石、磨製石斧	古墳 焼失
118	G5h3	N-39°-W	隅丸長方形	8.30 × 6.36	40-54	平坦	/	4	0	7	1	3	自然	弥生式土器、土師器、紡錘車、鏃	弥生
119	G5h3	N-24°-W	隅丸長方形	4.88 × 4.39	18-30	平坦	/	0	0	0	0	0	人為	弥生式土器	弥生 SK-200、SD-5・6と重複
120	D5g3	N-61°-W	隅丸長方形	[3.83] × [3.26]	-	-	/	4	0	5	1	1	-	-	弥生 土取りによる削平有り
121	F4h3	N-75°-W	隅丸長方形	[4.80] × 4.34	38-42	平坦	/	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器	弥生 S1-66、SK-197と重複
122	D5g1	N-25°-W	隅丸長方形	[4.88] × [4.10]	-	-	/	4	0	5	1	1	-	-	弥生 土取りによる削平有り
123	D5g2	N-35°-W	隅丸方形	[4.57] × [4.27]	-	-	/	4	0	5	1	1	-	-	弥生 土取りによる削平有り
124	F3h3	N-34°-E	隅丸長方形	4.91 × 3.94	31-43	平坦	/	3	0	4	1	-	自然	弥生式土器、土師器、紡錘車	弥生

## 2 土 坑

当遺跡からは、67基の土坑が確認されている。土坑番号は、前年度（平成3年度）調査の番号に続けて付した。それぞれの土坑からの遺物が少なく時期や性格については不明なものが多い。形状に特徴のある10基の土坑について個々に解説を加え、その他については一覧表に記載した。

### 第138号土坑（第86図）

**位置** F地区中央部，D6g1区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 長径2.05 m，短径1.41 mの楕円形で，深さは94 cmである。

**長径方向** N-28°-W

**壁面** 北西壁と南西壁は，14～20 cm程オーバーハングしている。北東壁と南西壁は，外傾して立ち上がっている。壁高は，92～96 cmである。

**底面** ほぼ平坦で，中央には一列に並んだ3か所のピットがある。ピットの平面形は，径14～22 cmの円形で深さ26～28 cmである。

**覆土** 壁際にはローム小ブロックを含む明褐色土が，下層にはローム中ブロックを含む褐色土が厚く堆積している。中層には暗褐色土が，上層には黒褐色土が堆積している。

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は，出土遺物がなく時期は不明である。形態から陥し穴と思われる。

### 第147号土坑（第86図）

**位置** F地区西部，D4i7区を中心に確認されている。

**重複関係** 本跡の北西端部を第148号土坑に掘り込まれている。

**規模と平面形** 長径1.99 m，短径1.04 mの不整楕円形で，深さは1.45 mである。

**長径方向** N-62°-W

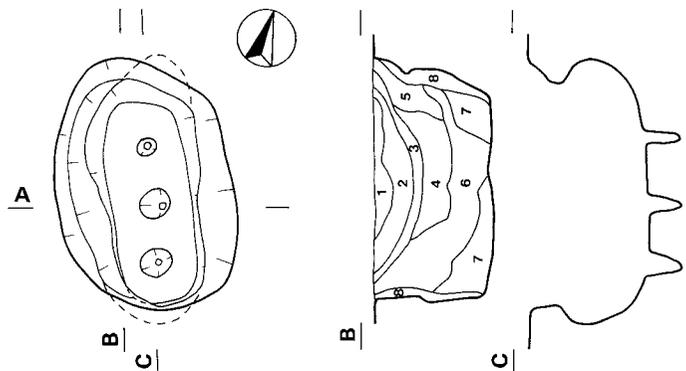
**壁面** 西壁はややオーバーハングしているが，東壁は垂直に立ち上がっている。北・南壁は外傾して立ち上がり，南壁は確認面から約52 cmの所で段をもつ。壁高は1.50～1.54 mである。

**底面** 平坦で，軟らかい。

**覆土** 下層は明褐色土で，中層から上層にかけてはローム小・中ブロックを含む褐色土に黒色土がまばらに混入しており人為堆積である。

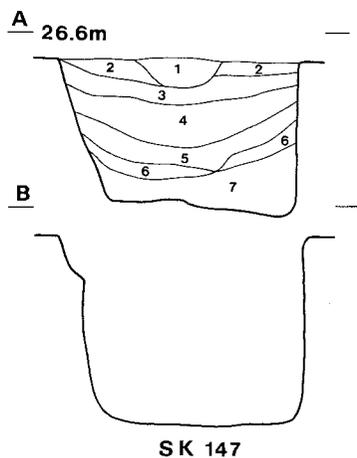
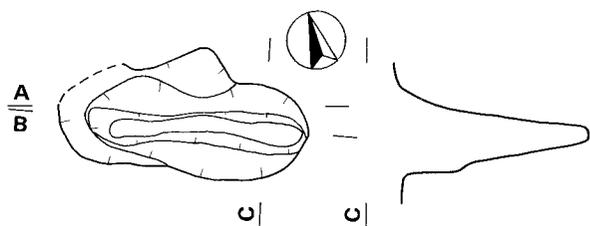
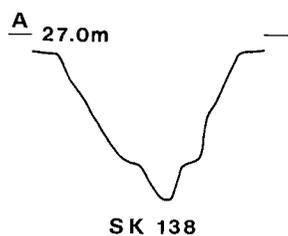
**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は，出土遺物がなく時期は不明であるが，形態から陥し穴と思われる。



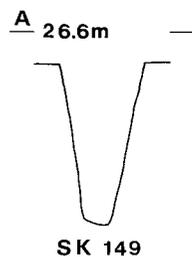
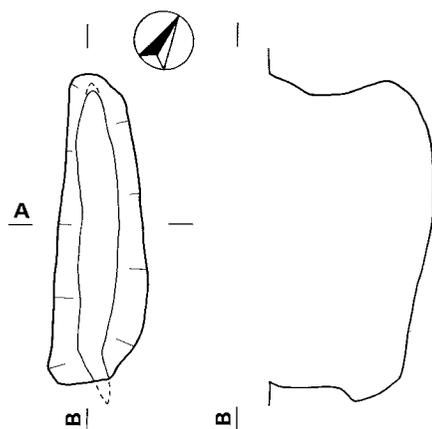
第138号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 黒色土多量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 黒色土多量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 黒色土多量。
- 4 褐色 ローム粒子中量, 黒色土少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量, 黒色土少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量。
- 7 明褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック多量。
- 8 明褐色 ローム粒子多量。



第147号土坑 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量, 炭化粒子微量, 黒色土多量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量, 黒色土少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 黒色土少量。
- 5 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 黒色土少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 黒色土少量。
- 7 明褐色 ローム粒子多量。



第86図 第138・147・149号土坑実測図

第149号土坑（第86図）

位置 F地区北西部，D4h<sub>0</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.48m，短径0.69mの不整楕円形で，深さは1.33mである。

長径方向 N-34°-W

壁面 北西壁と南東壁は10cm程オーバーハングし，北東壁と南東壁は外傾して立ち上がっている。

壁高は1.08～1.32mである。

底面 ほぼ平坦で，北西壁側に比べ南東壁側は緩やかに傾斜している。

覆土 自然堆積。

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期は不明である。形態から陥し穴と思われる。

第181号土坑（第87図）

位置 F地区北東端部，D6c<sub>9</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.50m，短径0.85mの楕円形で，深さは0.80mである。

長径方向 N-0°

壁面 北壁と南壁はオーバーハングし，東壁と西壁は外傾して立ち上がっている。壁高は，0.64mである。

底面 凸凹で中央部がやや落ち込んでいる。

覆土 壁際には褐色土が堆積し，中央は3層からなりローム中・大ブロックを含み第2層の暗褐色土は床面まで達しており，人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期は不明であるが，形態から陥し穴と思われる。

第186号土坑（第87図）

位置 E地区南西部，G3a<sub>3</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部が第105号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.40m，短径0.65mの隅丸長方形で，深さは0.80mである。

長径方向 N-36°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は0.58～0.62mである。

底面 平坦で軟らかく，やや南西側に傾斜している。

覆土 ローム小・中ブロックを含む褐色土が厚く堆積し，人為堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明である。骨片は確認されていないが、形態から考えて墓壙と思われる。

#### 第197号土坑（第87図）

位置 G地区北西端部，F4is区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第66号住居跡の南壁寄りの床と第121号住居跡の東寄りの床を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径2.34m，短径0.64mの長方形で，深さは0.47mである。

長径方向 N-67°-E

壁面 外傾して立ち上がり，壁高は0.44～0.50mである。

底面 平坦で，軟らかい。

覆土 1層でローム中・大ブロックを含む暗褐色土が厚く堆積し，人為堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明である。骨片は確認されていないが、形態から考えて墓壙と思われる。

#### 第200号土坑（第87図）

位置 G地区南東端部，G5hs区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部が，第119号住居跡の北西壁を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.41m，短径0.80mの長方形で，深さは0.56mである。

長径方向 N-21°-W

壁面 外傾して立ち上がり，壁高は0.56mである。

底面 皿状で，軟らかい。

覆土 1層でローム小・中ブロックを含む暗褐色土が堆積し，人為堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明である。骨片は確認されていないが、形態から考えて墓壙と思われる。

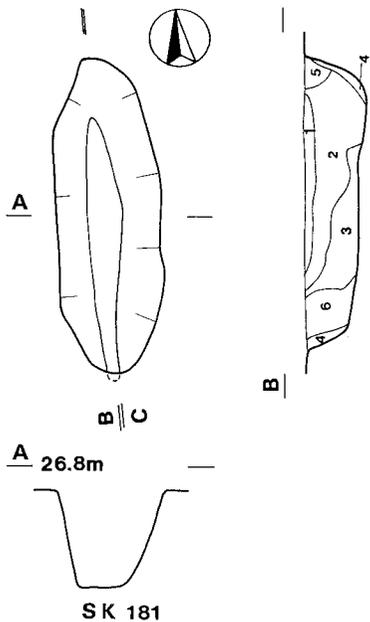
#### 第201号土坑（第87図）

位置 G地区中央部，G5bs区を中心に確認されている。

重複関係 本跡が，第114号住居跡の北東壁寄りの床を掘り込んでいる。

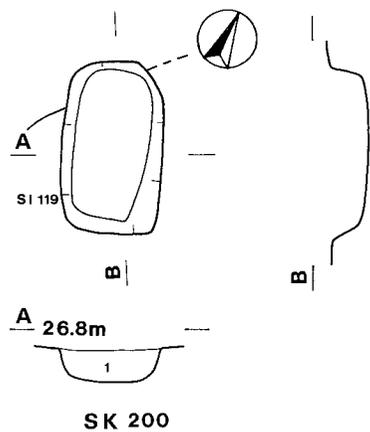
規模と平面形 長径1.47m，短径0.73mの隅丸長方形で，深さは0.27mである。

長径方向 N-32°-W



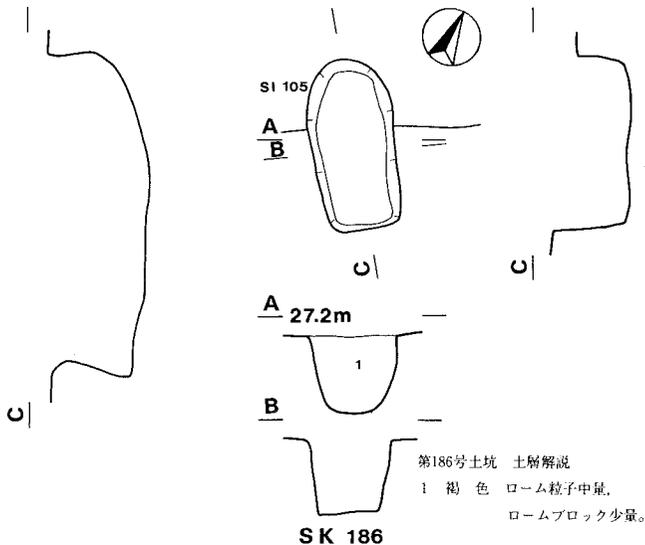
第181号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量。



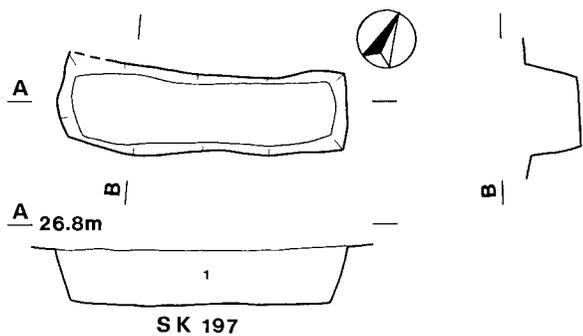
第200号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック中量。



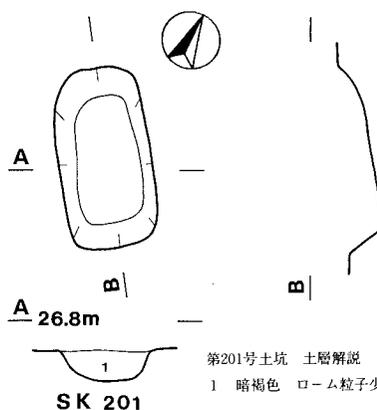
第186号土坑 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量。



第197号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック中量, 炭化材少量。



第201号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック多量。



第87図 第181・186・197・200・201号土坑実測図

壁面 外傾して立ち上がり、壁高は0.25mである。

底面 平坦で、南東壁寄りには緩やかに傾斜している。

覆土 1層でローム中・大ブロックを含む暗褐色土が堆積し、人為堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明である。骨片は確認されていないが、形態から考えて墓壙と思われる。

### 第202号土坑（第88図）

位置 G地区北東端部、G5a5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東壁部が、第5号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径2.35m、短径〔0.91〕mの隅丸長方形で、深さは0.72mである。

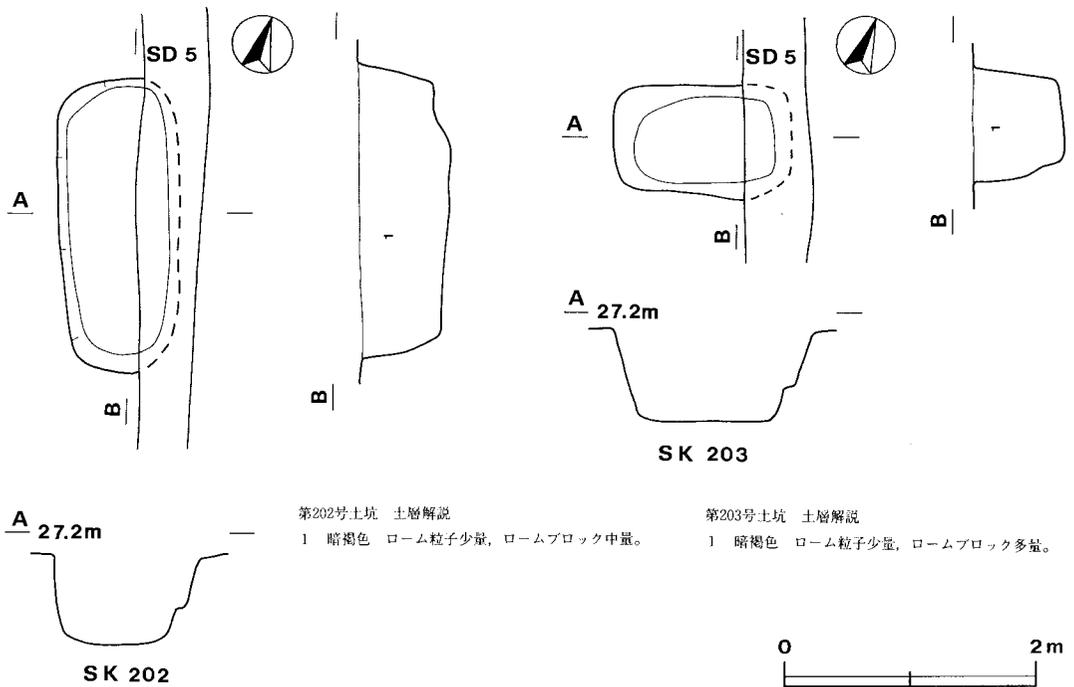
長径方向 N-20°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.70mである。

底面 平坦で、軟らかい。

覆土 1層でローム小・中ブロックを含む暗褐色土が堆積し、人為堆積である。

遺物 出土していない。



第88図 第202・203号土坑実測図

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明である。骨片は確認されていないが、形態から考えて墓壙と思われる。

第203号土坑（第88図）

位置 G地区北西部，F5is区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東側が，第5号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.40m，短径0.90mの隅丸長方形で，深さは0.72mである。

長径方向 N-70°-E

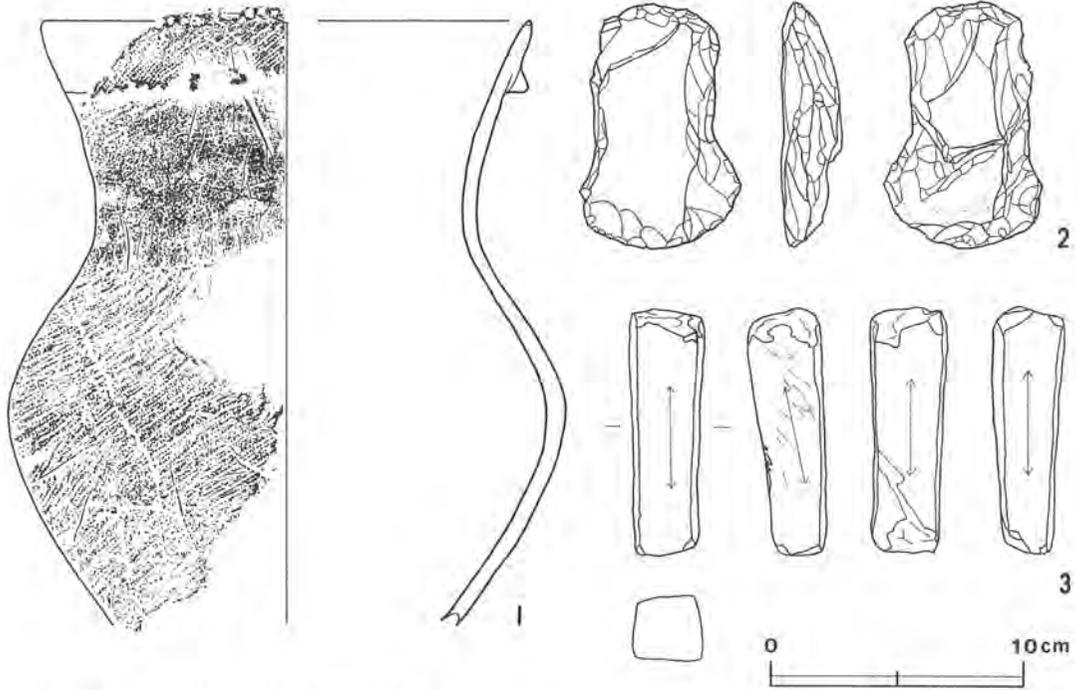
壁面 外傾して立ち上がり，壁高は0.72mである。

底面 平坦で，軟らかい。

覆土 1層でローム中・大ブロックを含む暗褐色土が堆積し，人為堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期は不明である。底面から骨片が出土していることと，形態から考えて墓壙と思われる。



第89図 第150・155・157号土坑出土遺物実測図

第157号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	広口壺 弥生式土器	A[19.4] B(24.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は頸部から外反する。複合口縁で下端には縄文原体による押圧が施され、さらに2個1組の瘤が貼られているが単位数は不明である。頸部を無文とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい赤褐色 普通	P219 20% 内・外面炭化物付着

第150・155号土坑出土石製品一覧表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第89図2	打製石斧	9.7	6.3	2.3	(132.5)	安山岩	SK-150覆土	Q38 一部欠損
3	砥石	9.8	3.0	2.8	(101.4)	頁岩	SK-155覆土	Q39 一部欠損

表3 原田北遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
134	E5e1	N-86°-W	不整楕円形	2.21×1.21	33	緩斜	凹凸	自然		
135	E4e0	N-33°-E	不整楕円形	2.18×0.81	48	緩斜	凹凸	自然		
136	E4b9	N-44°-E	楕円形	1.55×1.04	38	緩斜	凹凸	自然		
137	E5c6	N-63°-W	楕円形	1.97×1.52	48	外傾	平坦	自然		
138	D6g1	N-28°-W	楕円形	2.05×1.41	94	垂直	平坦	自然	陥し穴	
139	D6g3	N-108°-W	楕円形	2.05×1.15	22	緩斜	凹凸	自然		
140	D6b3	N-30°-W	不整楕円形	3.46×2.71	90	垂直	凹凸	自然		
141	G5d6	N-97°-W	円形	1.02×0.95	74	垂直	皿状	自然		
142	D4i1	N-126°-W	不整楕円形	5.80×4.50	88	緩斜	平坦	自然		
143	G5e7	N-10°-W	円形	0.84×0.84	40	緩斜	皿状	自然		
144	G5d7	N-110°-W	円形	0.88×0.83	42	緩斜	皿状	自然		
145	G5d7	N-7°-W	不整楕円形	0.82×0.76	40	外傾	皿状	自然		
146	E4a7	N-38°-W	不整楕円形	3.23×2.67	114	緩斜	皿状	自然		
147	D4i7	N-62°-W	不整楕円形	1.99×1.04	145	垂直	平坦	自然	SK-148と重複	陥し穴
148	D4i7	N-9°-E	不整楕円形	1.79×0.98	47	緩斜	凹凸	自然	SK-147と重複	
149	D4h0	N-34°-W	不整楕円形	2.48×0.69	133	垂直	平坦	自然	陥し穴	
150	F2a8	N-45°-E	[円形]	3.90×[2.60]	90	緩斜	平坦	自然	土師器片、磨石、打製石斧	北西側エリア外
151	E2j9	N-47°-E	[楕円形]	3.50×[1.25]	40	緩斜	皿状	自然	北西側エリア外	
152	E2h0	N-45°-E	[楕円形]	4.35×[1.60]	29	緩斜	凹凸	自然	北西側エリア外	
153	G3b8	N-7°-W	不整楕円形	1.97×1.32	50	緩斜	平坦	自然	SI-104と重複	
154	F3h1	N-46°-W	不整楕円形	1.50×1.10	27	緩斜	皿状	自然		
155	F3a1	N-60°-W	不整楕円形	2.00×1.70	15	緩斜	平坦	自然	弥生式土器片、土師器片、砥石	
156	F3a1	N-50°-E	楕円形	1.05×0.80	40	垂直	平坦	自然		
157	E5e1	N-44°-W	不整楕円形	1.20×0.80	40	外傾	凹凸	自然	弥生式土器片	
158	F3b2	N-33°-W	不整楕円形	3.10×1.8	25	緩斜	平坦	自然		

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
159	F3d <sub>1</sub>	N-61°-E	楕円形	3.53×1.56	71	外傾	皿状	自然		
163	E5e <sub>2</sub>	N-54°-E	不整楕円形	2.14×1.91	30	緩斜	凹凸	自然		
164	E5d <sub>3</sub>	N-24°-E	不整楕円形	1.19×0.72	77	外傾	皿状	自然		
165	F3g <sub>3</sub>	N-03°-E	円形	2.30×2.12	36	緩斜	凹凸	自然		
166	F3j <sub>2</sub>	N-21°-W	楕円形	2.64×1.66	46	緩斜	皿状	自然		
167	F3h <sub>8</sub>	N-18°-E	円形	2.65×2.29	30	緩斜	平坦	自然		
168	F3f <sub>6</sub>	N-33°-W	不整楕円形	1.80×1.58	24	緩斜	凹凸	自然		
169	F3d <sub>3</sub>	N-13°-E	楕円形	1.41×1.08	30	外傾	皿状	自然		
170	F3g <sub>6</sub>	N-27°-W	楕円形	2.54×1.59	33	緩斜	凹凸	自然		
171	G3b <sub>7</sub>	N-73°-E	円形	1.11×1.00	36	緩斜	皿状	自然		
172	G3c <sub>8</sub>	N-34°-W	円形	1.00×0.92	17	緩斜	平坦	自然		
173	G3c <sub>7</sub>	N-58°-E	不整楕円形	1.14×0.86	22	緩斜	皿状	自然		
174	G3d <sub>6</sub>	N-25°-E	不整楕円形	2.34×1.34	76	外傾	皿状	自然		
175	G3d <sub>7</sub>	N-12°-E	円形	1.25×1.17	50	緩斜	平坦	自然	土師器片	
176	G3d <sub>7</sub>	N-30°-W	楕円形	0.73×0.58	35	垂直	平坦	自然	弥生式土器	
177	G3d <sub>4</sub>	N-40°-E	不整楕円形	1.25×1.17	28	緩斜	平坦	自然		
178	D5e <sub>3</sub>	N-11°-W	楕円形	2.57×1.08	47	外傾	平坦	自然		
179	D6c <sub>2</sub>	N-67°-E	不整楕円形	1.50×0.95	27	緩斜	皿状	自然		
180	D6c <sub>3</sub>	N-74°-E	楕円形	2.00×1.10	30	外傾	平坦	自然		
181	D6c <sub>9</sub>	N-0°	隅丸長方形	2.50×0.85	80	垂直	平坦	自然	陥し穴	
182	D6d <sub>7</sub>	N-87°-W	楕円形	1.90×1.05	60	外傾	平坦	自然		
183	D5c <sub>1</sub>	N-38°-E	隅丸長方形	2.45×1.30	80	外傾	平坦	自然		
184	C6j <sub>8</sub>	N-49°-E	不整楕円形	2.15×1.60	55	緩斜	凹凸	自然		
185	C6i <sub>9</sub>	N-80°-E	楕円形	2.15×1.60	50	緩斜	平坦	自然		
186	G3a <sub>3</sub>	N-36°-W	隅丸長方形	1.40×0.65	60	垂直	平坦	人為	土師器片	SI-105と重複 墓塚
187	G3e <sub>5</sub>	N-64°-W	楕円形	1.10×0.80	35	緩斜	皿状	自然		
188	G3e <sub>5</sub>	N-57°-W	楕円形	0.70×0.60	40	緩斜	皿状	自然		
189	G3e <sub>4</sub>	N-90°-W	円形	0.85×0.80	30	緩斜	皿状	自然		
190	F4j <sub>1</sub>	N-39°-W	円形	1.64×1.49	41	緩斜	平坦	自然		
191	G5b <sub>3</sub>	N-36°-E	円形	1.13×1.01	19	緩斜	皿状	自然		
192	G5a <sub>4</sub>	N-33°-E	不整楕円形	2.10×1.89	32	緩斜	平坦	自然		
193	G5c <sub>4</sub>	N-53°-W	円形	1.79×(1.75)	30	緩斜	平坦	自然	SI-99・114と重複	
194	G5d <sub>5</sub>	N-27°-W	楕円形	1.55×(0.73)	48	緩斜	皿状	自然	SI-116と重複	
195	G5i <sub>4</sub>	N-118°-W	不整楕円形	2.24×1.64	49	緩斜	皿状	自然		
196	G5a <sub>1</sub>	N-27°-E	不整楕円形	1.73×1.27	33	外傾	平坦	自然		
197	F4i <sub>8</sub>	N-67°-E	長方形	2.34×0.64	47	外傾	平坦	自然	SI-66・121と重複 墓塚	
198	G5e <sub>7</sub>	N-39°-E	円形	1.32×1.30	37	緩斜	皿状	自然		
199	G3e <sub>4</sub>	N-19°-W	楕円形	2.00×1.00	20	緩斜	凹凸	自然	石皿	
200	G5h <sub>7</sub>	N-21°-W	長方形	1.40×0.80	56	緩斜	平坦	自然		
201	G5b <sub>5</sub>	N-32°-W	楕円形	1.47×0.73	27	緩斜	皿状	人為	SI-114と重複 墓塚	

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
202	G5a5	N-20°-W	長方形	2.35×(0.91)	72	垂直	平坦	人為	SD-5と重複 墓壙	
203	F5i5	N-70°-E	長方形	1.40×0.90	72	外傾	平坦	人為	SD-5と重複 墓壙	

### 3 井戸

当遺跡からは、F地区の南西端部に3基の井戸がまとまって確認されている。3基とも接近し過ぎていたため同時期に存在していたとは考えにくい。しかし、規模や形状が似通っているため近い時期にそれぞれ作られたと思われる。遺構に伴う出土遺物がなく時期等不明な点が多い。

#### 第1号井戸（第90図）

**位置** F地区南西端部，E4gs区を中心に確認されている。

**規模と形状** 掘り方は、上面が径1.82mの円形で、確認面から0.94mの深さまで急傾斜をもち、そこから下は径1.04mの円筒形で深さは2.38mである。

**覆土** 各層にロームブロックを含み褐色土と暗褐色土が交互に堆積し、人為堆積である。

**遺物** 覆土上層から弥生式土器片，土師器片，須恵器片が少量出土している。

**所見** 本跡は、遺物がなく時期は不明である。

#### 第2号井戸（第90図）

**位置** F地区南西端部，E4gs区を中心に確認されている。

**規模と形状** 掘り方は、上面が径1.56mの円形で、確認面から0.68mの深さまで急傾斜をもち、そこから下は径0.96mの円筒形で深さは2.28mである。

**覆土** 各層にロームブロックを含み褐色土と暗褐色土が交互に堆積し、人為堆積である。

**遺物** 覆土上層から土師器片が少量出土している。

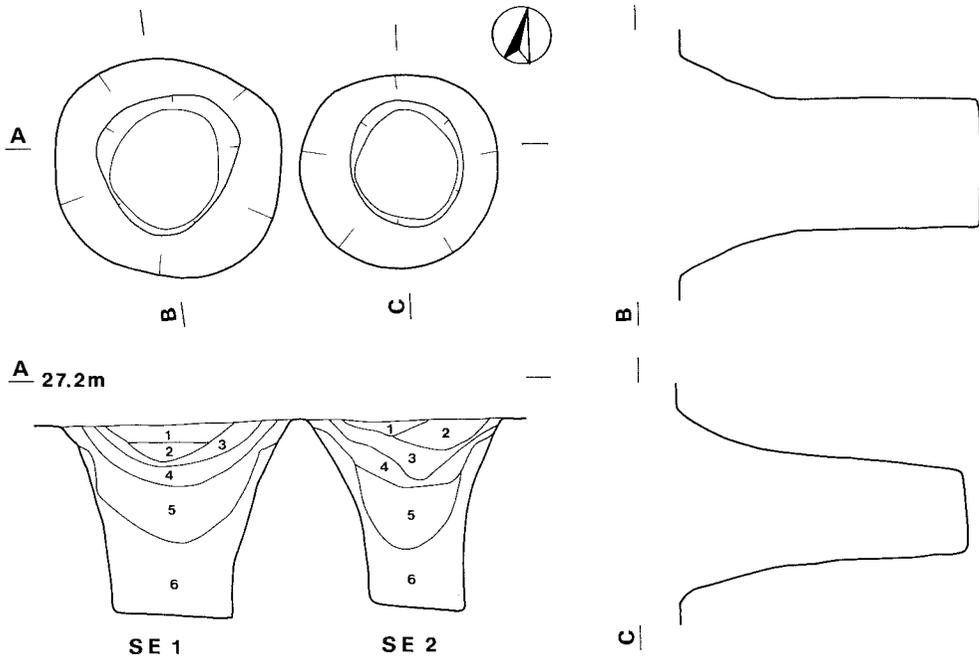
**所見** 本跡は、遺構に伴う遺物がなく時期は不明である。

#### 第3号井戸（第90図）

**位置** F地区南西端部，E4f7区を中心に確認されている。

**規模と形状** 掘り方は、上面が径1.84mの円形で、確認面から0.8mの深さまで急傾斜をもち、そこから下は径0.96mの円筒形で深さは2.44mである。

**覆土** 各層にロームブロックを含み褐色土と暗褐色土が交互に堆積し、人為堆積である。

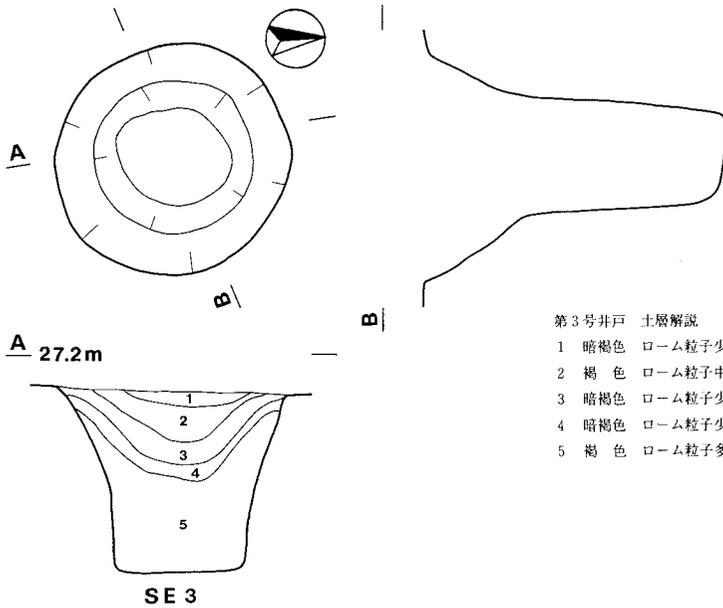


第1号井戸 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 黒色土多量。
- 2 明褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック多量。
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 黒色土斑点状に含む。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量。
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 黒色土少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, 黒色土少量。

第2号井戸 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 黒色土多量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック多量。
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 黒色土斑点状に含む。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量。
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 黒色土少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, 黒色土少量。

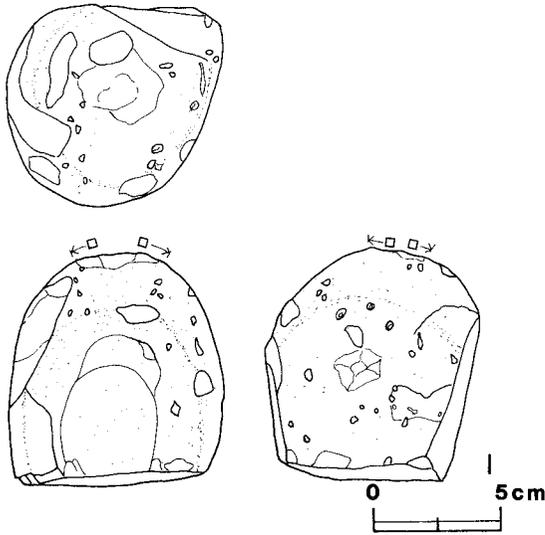


第3号井戸 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 黒色土斑点状に含む。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック中量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, 黒色土少量。



第90図 第1・2・3号井戸実測図



遺物 覆土上層から弥生式土器片，土師器片が少量出土している。1の敲石は覆土中から出土している。

所見 本跡は，遺構に伴う遺物がなく時期は不明である。

第91図 第3号井戸出土遺物実測図

第3号井戸出土石製品観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第91図1	敲石	(9.1)	(8.4)	(8.6)	(931.6)	砂岩	覆土上層	Q40 一部欠損

#### 4 溝

当遺跡からは，溝が4条確認されている。各溝の構築時期や性格については，遺構に伴う出土遺物はなく不明な点が多い。遺構番号は，前年度調査した溝の番号に続けて付した。

##### 第4号溝（第92図）

位置 F地区北東端部，D6a9区～D6c0区にかけて確認されている。南東側はエリヤ外へ延びている。

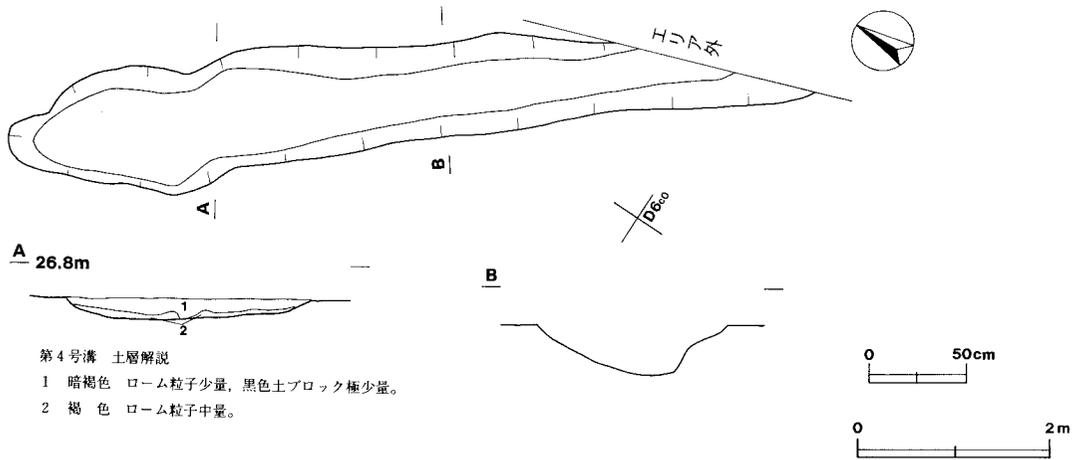
規模と形状 長さ7.20mで，上幅0.98～1.22m，下幅0.38～1.00m，深さ10～26cmである。断面径は「U」状である。

方向 D6c0区から北西（N-40°-W）へほぼ水平で，直線的に延びている。

覆土 床面付近は褐色土で，上層には暗褐色土が堆積している。

遺物 出土していない。

所見 本跡は出土遺物がなく，時期・性格等は不明である。



第92図 第4号溝実測図

### 第5号溝 (第93図)

**位置** G地区東部, G5h8区~F5g4区にかけて確認されている。南側はエリヤ外に延びている。

**重複関係** 本跡は, 第114・116・119号住居跡を掘り込んでいる。また, 第202・203号土坑が本跡を掘り込んでいる。

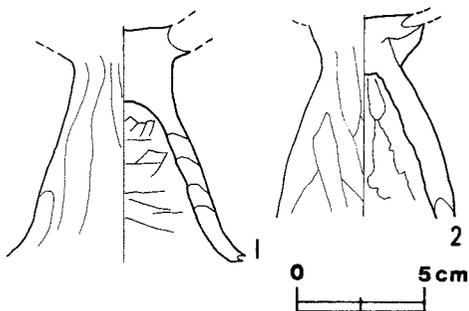
**規模と形状** 長さ約49mで, 上幅44~60cm, 下幅12~24cm, 深さ42~48cmである。断面形は「U」字状である。

**方向** G5h8区から北北西 (N-30°-W) へほぼ水平で直線的に延び, 第6号溝と並列している。

**覆土** 底面付近には褐色土が, 上層には暗褐色土が堆積している。

**遺物** 覆土中層から1・2の土師器高坏が出土している。他に, 流れ込みと思われる弥生式土器片, 土師器片が少量出土している。

**所見** 本跡は, 古墳時代中期の住居跡である第114号住居跡を掘り込んでいることから, 古墳時代中期以降の溝と考えられるが, 遺構に伴う遺物がなく時期・性格等は不明である。第6号溝と並列して掘られており, 対をなすものと思われる。



第94図 第5号溝出土遺物実測図

## 第5号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	高坏 土師器	B(10.5) E(8.0)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。内面輪積み痕有り。	砂粒、スコリア 橙色 普通	P220 15%
2	高坏 土師器	B(7.9) E(6.0)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒、雲母、スコリア 赤褐色 普通	P221 10%

### 第6号溝（第93図）

**位置** G地区東部，G5h8区～F5d4区にかけて確認されている。両端部はエリヤ外に延びている。  
**重複関係** 本跡は，第116・119号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長さ約53mで，上幅24～56cm，下幅12～32cm，深さ20～32cmである。断面形は「U」字状である。底面は軟らかい。

**方向** G5h8区から北北西（N-24°-W）へほぼ水平で直線的に延び，第5・7号溝と並列している。

**覆土** 底面付近には褐色土が，上層には暗褐色土が堆積している。

**遺物** 覆土中層から，流れ込みと思われる弥生式土器片，土師器片が少量出土している。

**所見** 本跡は，第5・7号溝と並列して掘られており，対をなすものと考えられるので，時期も第5号溝と同じ古墳時代中期以降と考えられるが，遺構に伴う遺物がなく時期・性格等は不明である。

### 第7号溝（第93図）

**位置** G地区北部，F5e4区～F5g4区にかけて確認されている。北側はエリヤ外に延びている。

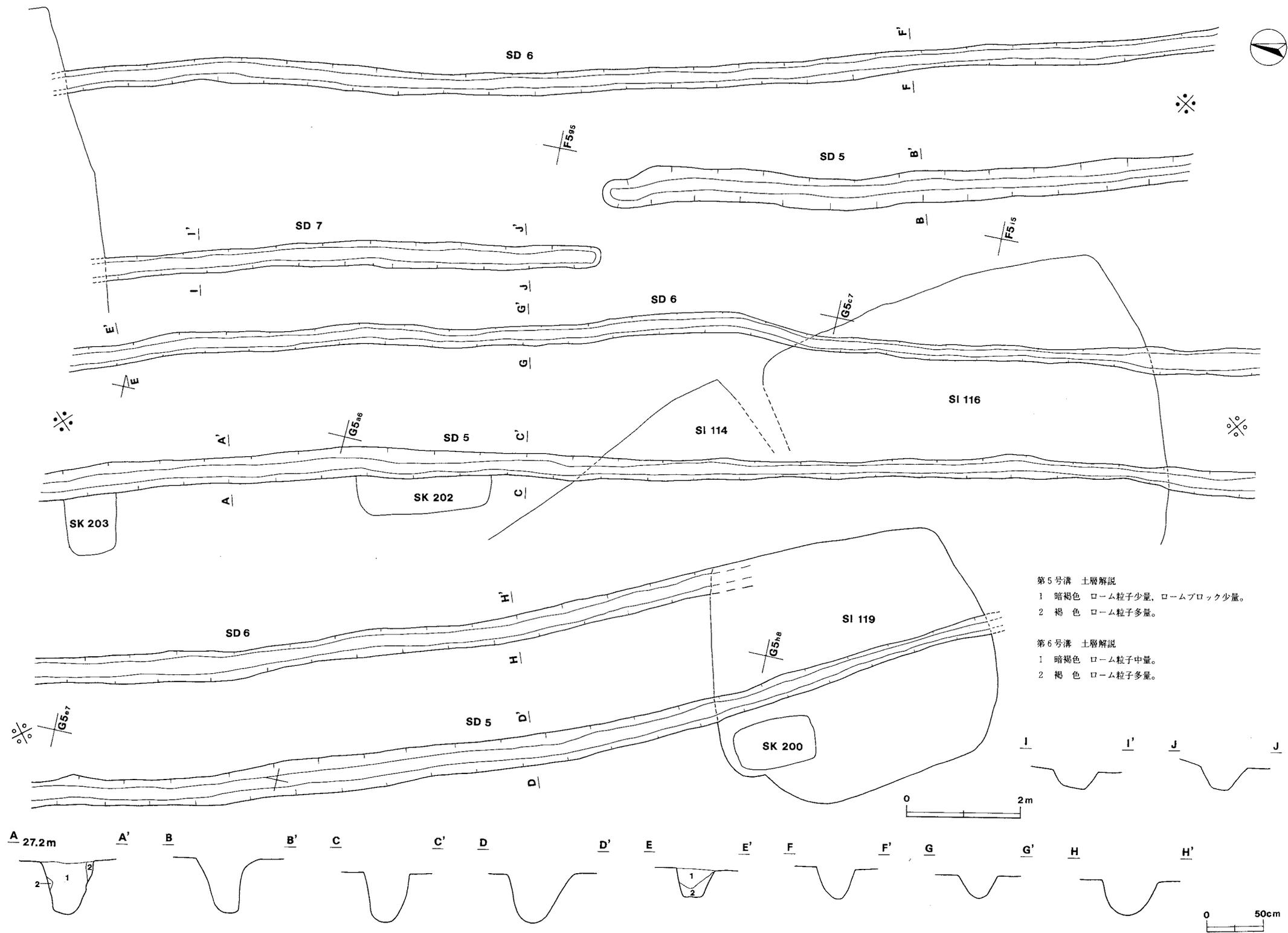
**規模と形状** 長さ約8.7mで，上幅32～46cm，下幅18～26cm，深さ22cmである。断面形は「U」字状である。底面は軟らかい。

**方向** F5g4区から北北西（N-16°-W）へほぼ水平で直線的に延び，第5・6号溝と並列している。

**覆土** 底面付近には褐色土が，上層には暗褐色土が堆積している。

**遺物** 出土していない。

**所見** 本跡は，第5・6号溝と並列して掘られており対をなすものと考えられるので，時期も第5号溝と同じ古墳時代中期以降と考えられるが，時期・性格等は不明である。



第93図 第5・6・7号溝実測図

## 5 遺構外出土遺物

当調査区からは、直接遺構に伴わない縄文時代・弥生時代の土器片や土製品・石製品等が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて取り上げて記載する。

### (1) 縄文式土器

出土した土器は、縄文時代前期から後期の土器片である。縄文式土器を時期や特徴から第1～3群に分類し記載する。

#### 第1群 前期後葉の土器群（第96図4～15）

##### 第1類 後葉の土器（興津式）

4～6は平行沈線文が、7～10は波状貝殻文が施されている。

##### 第2類 末葉の土器（粟島台式，十三菩提式）

11は、極細の粘土紐を貼り付け、モチーフを施している口縁部片である。口縁部内面には、渦巻き状の隆帯が貼られている。12・13は口縁部片で、どちらも単節縄文が施されている。13の口縁直下には、2条の結節文が施されている。14・15は単節縄文施文の胴部片で、どちらも横位に結節文が施されている。

#### 第2群 中期後葉の土器群（第96図16）

16は胴部片で、縄文を施して沈線を垂下し、沈線内は磨消している。（加曾利EⅢ式）

#### 第3群 後期前葉の土器（第96図17～19）

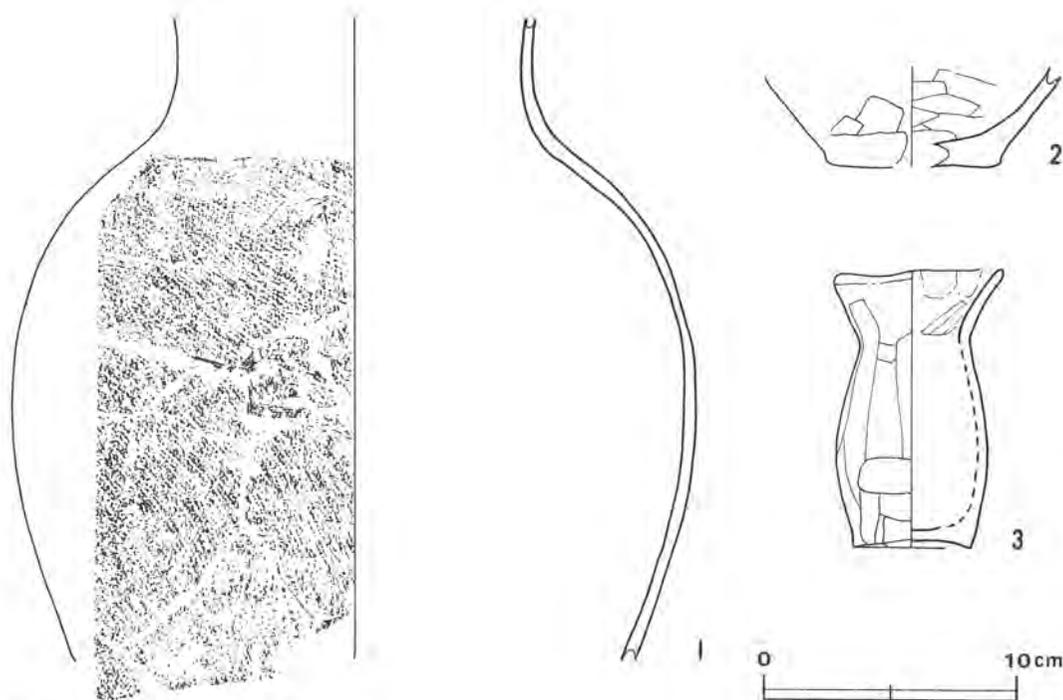
17は口縁部片で、口縁部に横位の沈線文、口縁部下端には縦位・斜位の沈線文が施されている。18・19は単節縄文を地文とする胴部片で、縦位・斜位の沈線文が施されている。（堀之内Ⅰ式）

### (2) 弥生式土器

出土した土器は、弥生時代後期の土器片である。弥生式土器を特徴から第1～4群に分類し記載する。

#### 第1群 刺突文や押圧が施されている土器（第96図20～23）

20は口唇部と口縁部下端に縄文原体による押圧が施されている。21は附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部下端は竹管状工具により刺突文が施されている。22・23の口縁部下端には、22が縄文原体による2列の押圧、23は棒状工具による2列の刺突文が有り、さらに間に瘤が貼り付けられている。



第95図 遺構外出土遺物実測図(1)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第95図 1	壺 弥生式土器	B(25.7)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反する。頸部を無文とし胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 スコリア にぶい橙色 普通	P222 30%
2	壺 弥生式土器	B( 3.9) C[ 6.9]	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部内・外面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P223 10%
3	ミニチュア 弥生式土器	A 6.7 B 11.1 C 4.6	平底で胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部外面ヘラナデ、口縁部内・外面ヘラナデされている。口縁部内面上位に指頭圧痕がある。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 褐色 普通	P224 100% 外面スス付着

第2群 頸部を無文帯とする土器(第96図24-26)

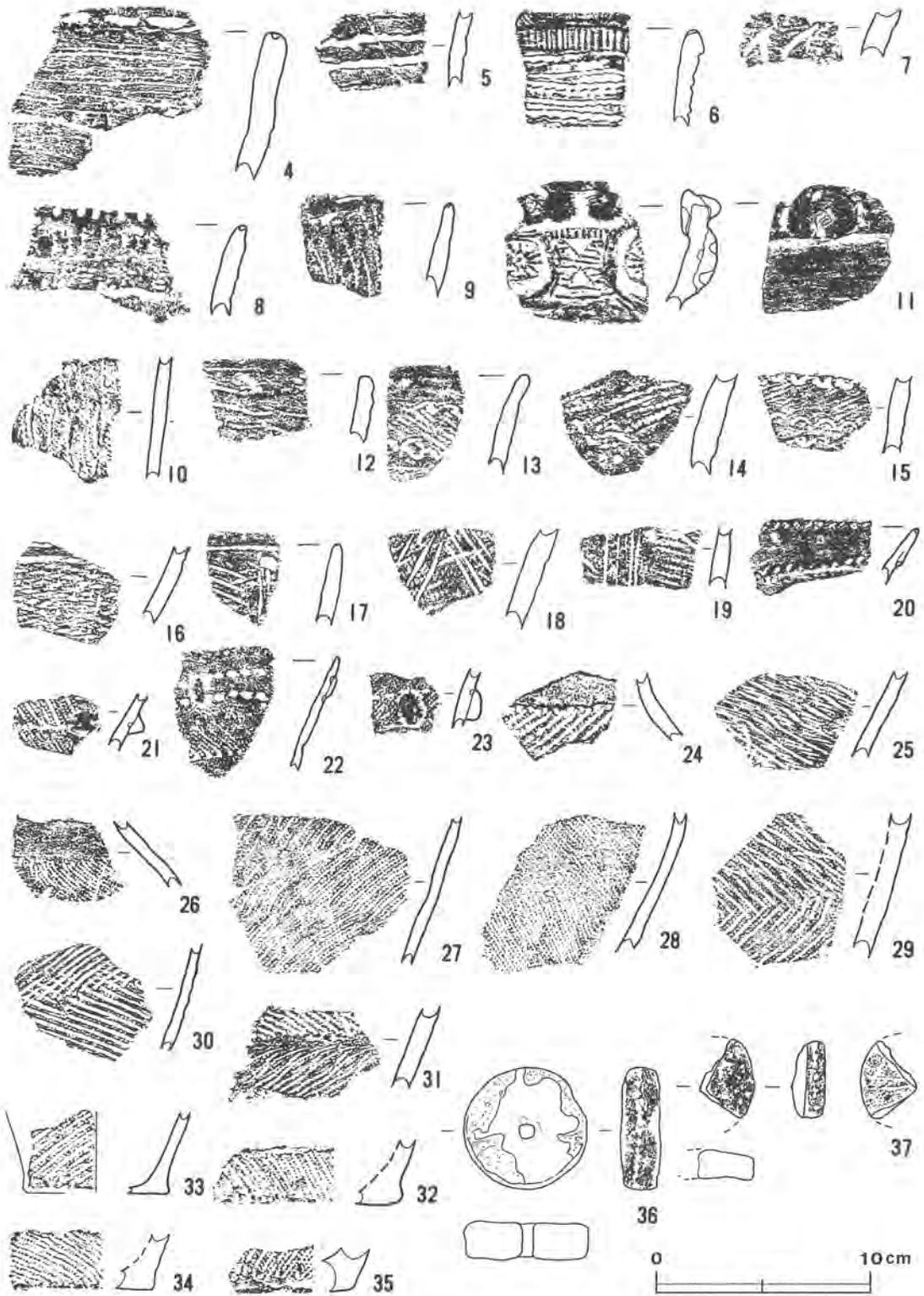
24-26は胴部から頸部にかけての破片である。頸部を無文とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第3群 縄文が施されている土器(第96図27-31)

27-31は胴部片で、いずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施され、29-31は羽状構成をとっている。

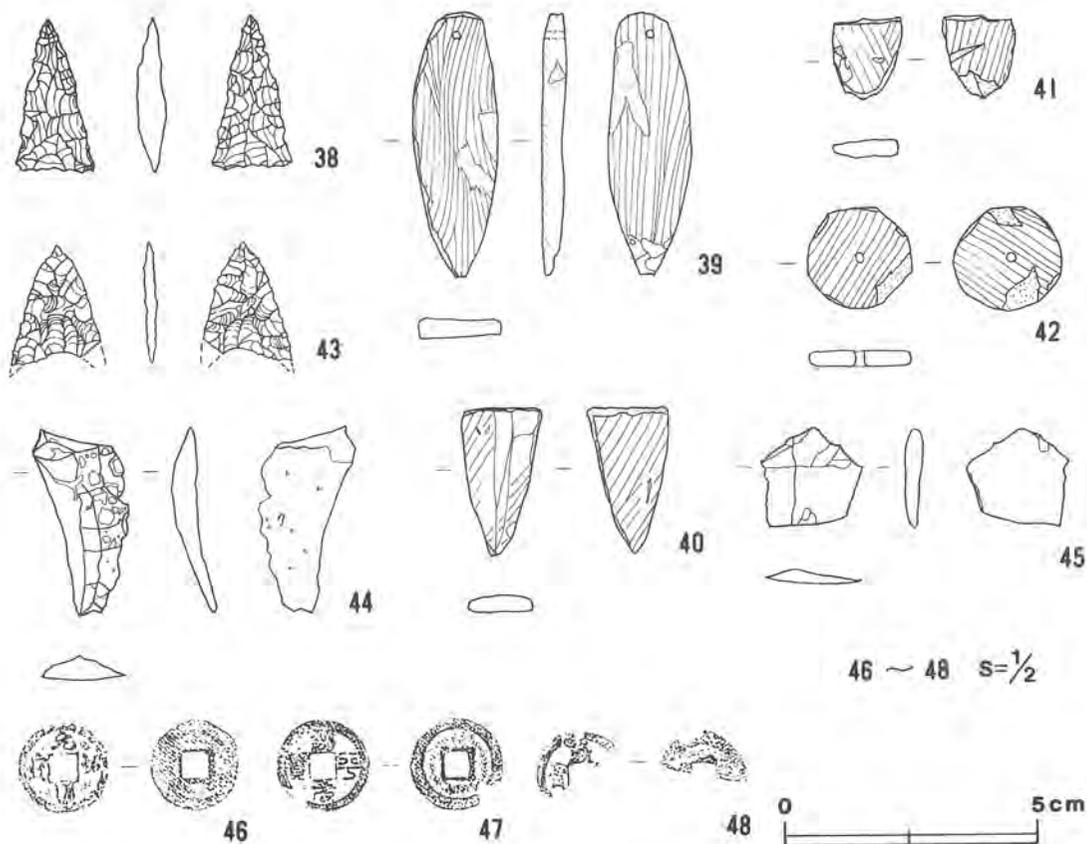
第4群 底部片(第96図32-35)

32-35は、いずれも胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。



第96図 遺構外出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第96図36	紡錘車	5.7	5.7	1.3	1.2	(69.8)	70	G地区第4グリット	D P 19
37	紡錘車	(3.7)	(2.6)	(1.4)	—	(10.1)	30	G地区第1グリット	D P 20



第97図 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第97図38	石 鏃	3.1	1.6	0.6	1.8	チャート	E地区表探	Q41
39	石 剣	5.2	1.7	0.4	5.9	滑石	E地区表探	Q42
40	石 剣	(2.9)	(1.6)	0.3	(2.0)	滑石	E地区表探	Q43 破片
41	石 剣	(1.6)	(1.4)	0.4	(1.2)	滑石	E地区表探	Q44 破片
42	有孔円板	2.1	2.1	0.3	2.4	滑石	E地区表探	Q45
43	石 鏃	(2.4)	(1.8)	0.3	(1.1)	黒曜石	G地区表探	Q46 一部欠損
44	剥片	3.7	1.4	0.5	2.0	安山岩	G地区表探	Q47
45	剥片	2.0	1.9	0.3	0.9	安山岩	G地区表探	Q48

図版番号	鑄名	初鑄年(西曆)	鑄造地名	出土地点	備考
第97図46	元祐通寶	1 0 8 6	北 宋	表 採	M 4
47	治平元寶	1 0 6 4	北 宋	表 採	M 5
48	不 明	不 明	不 明	表 採	M 6 破片

### 第3節 まとめ

当遺跡は、平成2年から4年にかけての3年間にわたり調査しており、その大半を占めるA～D・Z地区についての成果は平成5年に「原田北遺跡Ⅰ・原田西遺跡」として報告されている。その報告書の中で原田北遺跡の時期区分をⅠ～Ⅵ期とし、弥生時代後期後半から古墳時代中期にかけての遺構・遺物について詳しく紹介されている。今回の調査報告においても同様にその時期区分のⅠ～Ⅲ期を用い、3年間に調査された弥生時代後期後半の住居跡89軒を総括して、時期別住居跡配置図を作成した。それをもとに、住居跡形態と集落について気づいた点を簡潔に記し、まとめとする。

#### 住居跡形態と集落について

今回の調査区であるE・F・G地区で確認された弥生時代の竪穴住居跡は26軒であるが、前回の調査との重複を除くと24軒となる。本節では、これらの住居跡を中心にして解説するが、削平等により良好な資料の得られなかった第97・105・120～123号住居跡は除外した。

#### 原田北Ⅰ期

長岡式期直後、上稲吉式期直前の時期であるが、今回の調査では確認されていない。

#### 原田北Ⅱ期

上稲吉1（古）式期のもので、今回の調査区では第27・111～113・115・116号住居跡の6軒が該当し、G地区を中心にして確認されている。前回の調査区の住居跡と合わせると26軒になり、当遺跡の中央よりに位置している。特にG地区と前回の調査区であるZ地区に多く確認され、平面形は、隅丸長方形2軒、隅丸方形3軒、不整長方形1軒となり、長方形の住居跡と方形の住居跡の割合がほぼ同じであることが特徴としてあげられる。炉の位置は北寄りで支柱穴間に位置するものが3軒、北寄りであるが支柱穴間でないものが3軒で、北側支柱穴間に炉を持つものが定着化しつつある。住居跡の床面積は10～20㎡が4軒、20～30㎡が1軒、30～40㎡が1軒で、平均床面積は22.5㎡となる。第116号住居跡は36.2㎡と面積規模が最も大きく、第112・113・115号住居跡をグループとする「世帯共同体」の中心的役割を果していたものと思われる。

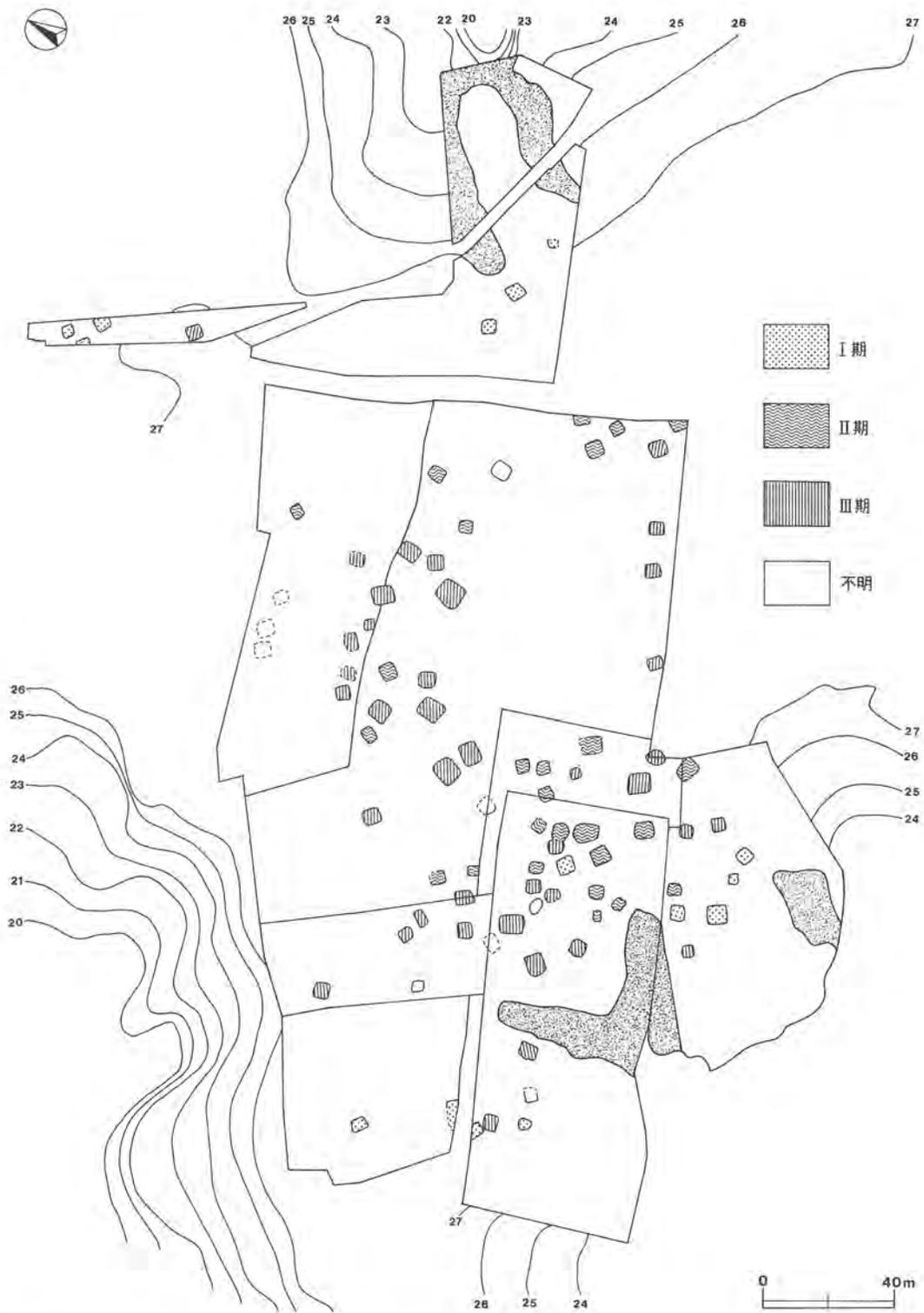
#### 原田北Ⅲ期

上稲吉1（新）式の土器を有するもので、E地区では第96・100・102・103・124号住居跡、F地区では第76・106～110号住居跡、G地区では99・118・119号住居跡の14軒が該当する。当遺跡内でのこの時期の住居跡は総数で39軒となり、全体の約44%を占めており全盛期であったと思われる。平面形は隅丸長方形7軒、隅丸方形6軒、方形1軒である。炉の位置は北寄りで、北側支柱穴の中間に位置するものが6軒、北側寄りであるが北側支柱穴間でないものが3軒である。残

る5軒は削平と攪乱により炉が明確でないため除くことにした。北側支柱穴の中央に炉を持つ住居跡の割合が高いことはこの時期の特徴ということができ、前回調査分の報告内容とも一致する。住居跡の床面積は50㎡以上が1軒、20～30㎡が5軒、10～20㎡が7軒、10㎡以下が1軒で、平均床面積は22.7㎡である。中でも第76・118号住居跡は規模が大きく、特に第118号住居跡は床面積が52.8㎡で長軸方向は8mを超え「世帯共同体」の中心的役割を果たしていたと考えられる。また、この2軒は炉を3基持っている点にも注目したい。しかし、最初からこの規模であったとは思われず、柱穴や炉の配置及び形状等から判断して、段階を追って拡張していると考えられる。その好例として第117号住居跡の炉<sub>3</sub>は、柱を抜き取ったと思われる柱穴の覆土上に構築され、炉<sub>2</sub>は火床上にローム土が一部張られた状態で確認されている。これは、住居の拡張とともに炉の配置換えを行ったためと思われる。本時期の住居跡は前時期よりも軒数が増加し、当遺跡中央部から北東部にかけて集中して確認されている。このことについては、「原田北遺跡Ⅰ・原田西遺跡」でも報告されており今回調査分の住居跡を加えた事により、その傾向はさらに明らかになった。前回調査したB地区中央部付近が当時期の集落の中心と考えられ、大規模住居跡が集中していることは大変興味深いことである。Ⅰ～Ⅲ期にかけて、B地区南部には住居跡が確認されておらず、何らかの特別な意味を持つ場所であったと推測される。

#### 参考文献

- (1) 大洗町教育委員会 『茨城県大洗町長峰遺跡』 1973年
- (2) 井上義安 『髭釜鹿島線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報』 1980年
- (3) 都出比呂志 『日本農耕社会の成立過程』 1989年
- (4) 茨城県教育財団 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集 1990年
- (5) 茨城県教育財団 「一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』第65集 1991年
- (6) 茨城県教育財団 「土浦工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡Ⅰ・原田西遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』第80集 1993年
- (7) 栃木県文化振興事業団 「赤羽根遺跡」 『栃木県埋蔵文化財調査報告』第57集 1984年
- (8) 勝田市史編纂委員会 『勝田市史別編Ⅲ 東中根遺跡』 1982年



第98図 原田北遺跡弥生時代時期別住居跡配置図

## 第6章 西原遺跡

### 第1節 遺跡の概要

西原遺跡は、天の川右岸の標高23～27mの新治台地北西部に位置し、当遺跡の南西約150mには原田北遺跡が、また南には隣接して原出口遺跡がある。調査面積は7.833㎡で調査前の現況は畑であり、周辺には弥生式土器片が散乱していた。

今回の調査によって確認された遺構は、旧石器時代の石器集中地点2か所、竪穴住居跡23軒、土器棺墓6基、火葬墓1基、土坑34基、掘立柱建物跡1棟、溝3条、炭焼窯跡2基である。

旧石器時代としては、石器集中地点2か所が調査区南端の表土から40cmほど下がったソフトローム層で確認され、そこから尖頭器や剥片等が出土している。

縄文時代の遺構は確認されなかったが、前期の栗島台式・十三菩提式や後期の加曽利BⅡ式・三十稲葉式などの土器片が数点出土している。

弥生時代の遺構は、調査区全域で竪穴住居跡が23軒確認されている。時期はすべて後期のもので、形状は隅丸長方形や隅丸方形のものが多い。また、同時期と思われる土器棺墓が6基確認されている。

古墳時代の遺構は確認されていないが、土師器片が数点出土している。

奈良・平安時代の遺構としては、焼けた骨がはいった火葬墓が1基確認されている。

近世の遺構は、炭焼窯跡2基と掘立柱建物跡が1棟確認されている。

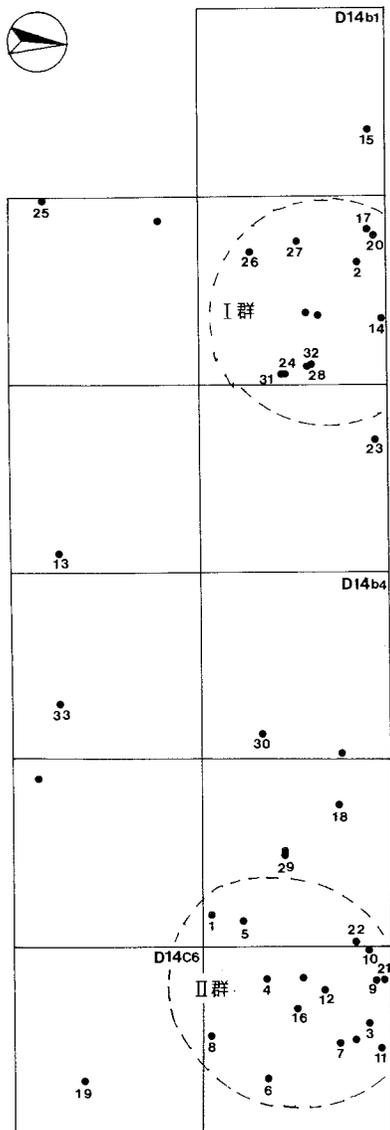
当遺跡からの遺物は、遺物収納箱で39箱ほど出土している。主な遺物は弥生式土器を中心に、縄文式土器、土師器、土製品（紡錘車、土玉等）、石器（磨石、敲石、尖頭器、石鏃、剥片、穂摘具等）、陶器・磁器片等である。また、特に住居跡からアブライト（半花崗岩）礫が多量出土している。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1 旧石器時代

当遺跡における旧石器時代に関する調査を行った区域は、遺跡の中央部からやや南寄りに位置し、現地表面の標高は約27mである。

当遺跡における旧石器時代の存在については、他時期の遺構調査の過程で旧石器時代の剥片等が多数出土していたことから予測されていた。そこで、特に分布密度の濃い地点を中心にローム面を精査したところ、2か所の石器集中地点を確認した。また他時期の遺構調査中に出土したり、



集中地点周辺で表採された剥片等も多数ある。

(1) 旧石器時代調査エリア内出土遺物

旧石器時代調査エリア内から出土したものは剥片等31点とナイフ形石器1点，尖頭器1点である。平面分布については第99図で示したとおりであり，あまり明瞭ではないが石器集中地点は，I・II群とした2か所と考えられる。石器集中地点の範囲は，どちらも直径約4mで石材構成や出土レベルがほぼ同じである。

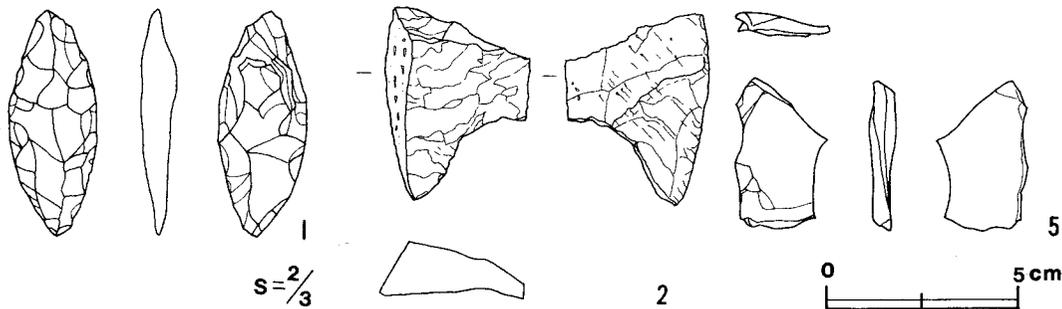
石材は，安山岩24点，頁岩8点，ホルンフェルス1点である。

(2) 旧石器時代調査エリア外出土遺物

当遺跡における該期外の遺構調査の段階で，旧石器時代に属すると思われる剥片や石器等が出土している。ほぼ確認面付近からと遺構の覆土中から出土しており，石器集中地点I・II群周辺からが多い。

石材は安山岩が多く79点，頁岩19点，メノウ1点の総数99点が出土している。器種別では剥片が大変多く91点，尖頭器5点，ナイフ形石器2点，石核1点である。

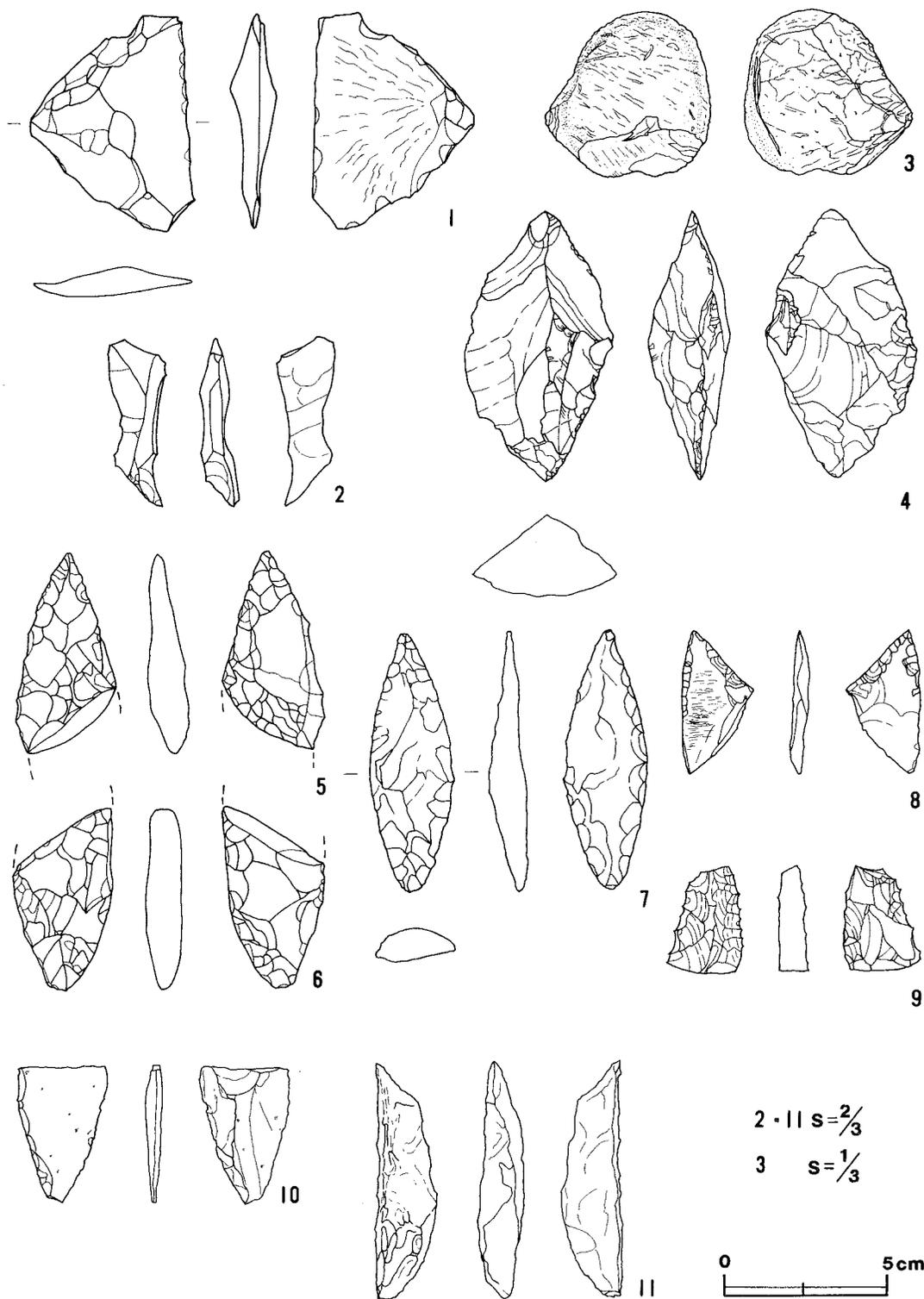
第99図 旧石器時代調査エリア内遺物出土地点図



第100図 旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図(1)

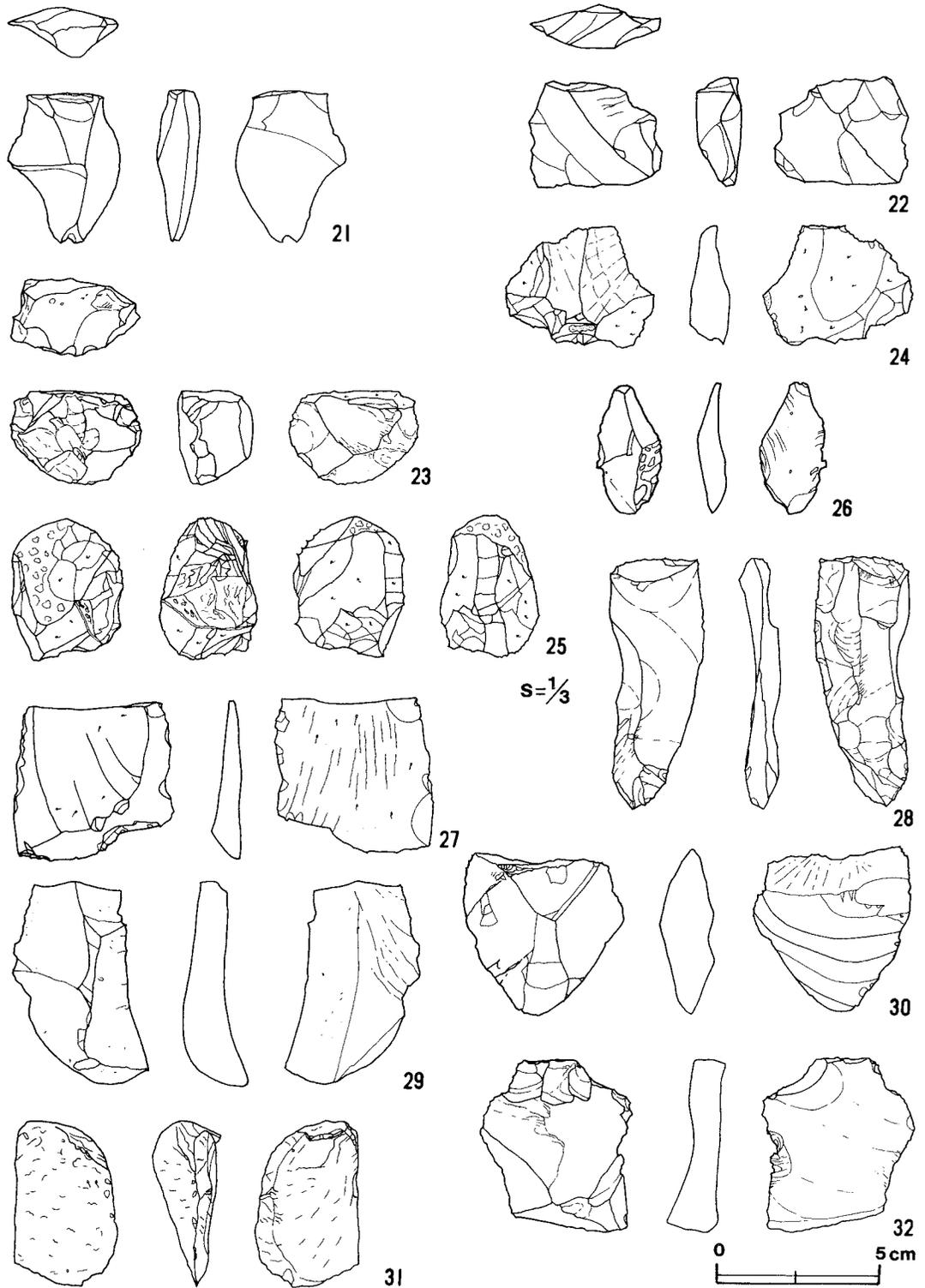


第101図 旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図(2)

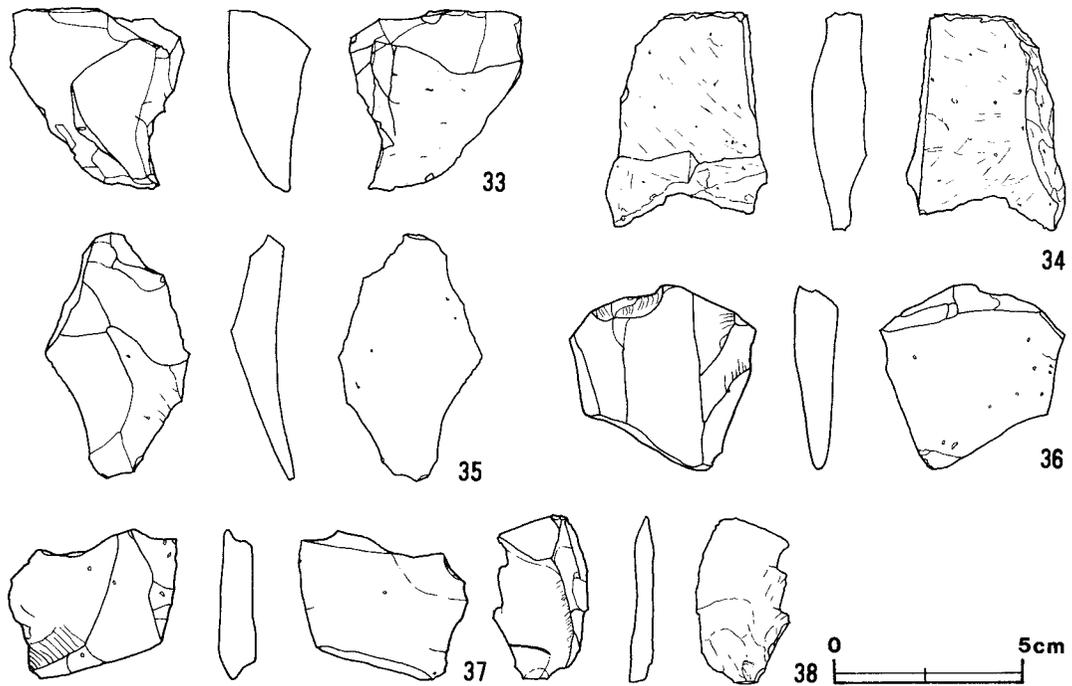


第102図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(1)





第104図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(3)



第105図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(4)

旧石器時代調査エリア内出土石器観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第100図1	尖頭器	4.6	1.8	0.7	4.8	安山岩	D14b <sub>5</sub>	Q80
2	剥片	5.1	3.8	1.5	21.6	ホルンフェルス	D14b <sub>2</sub>	Q81
第101図3	剥片	3.6	4.6	1.3	15.4	頁岩	D14b <sub>6</sub>	Q82
4	剥片	3.7	3.9	1.1	5.5	頁岩	D14b <sub>6</sub>	Q83
第100図5	剥片	4.0	2.5	0.7	3.5	頁岩	D14b <sub>5</sub>	Q84
第101図6	剥片	2.9	1.5	0.5	1.2	頁岩	D14b <sub>6</sub>	Q85
7	剥片	2.2	1.3	0.2	0.4	頁岩	D14b <sub>6</sub>	Q86
8	剥片	2.4	1.6	0.2	0.6	頁岩	D14b <sub>6</sub>	Q87
9	剥片	1.2	1.5	0.2	0.3	頁岩	D14b <sub>6</sub>	Q88
10	剥片	1.5	1.0	0.3	0.3	頁岩	D14b <sub>6</sub>	Q89
11	剥片	6.4	2.6	1.7	19.2	安山岩	D14b <sub>6</sub>	Q90
12	剥片	5.3	3.1	0.8	10.7	安山岩	D14b <sub>6</sub>	Q91
13	剥片	3.9	2.8	0.8	8.1	安山岩	D14c <sub>3</sub>	Q92
14	剥片	3.4	3.1	0.7	3.5	安山岩	D14b <sub>2</sub>	Q93
15	剥片	3.6	2.0	0.9	5.1	安山岩	D14b <sub>1</sub>	Q94
16	剥片	3.5	2.5	0.4	3.8	安山岩	D14b <sub>6</sub>	Q95
17	剥片	2.7	2.2	0.7	3.8	安山岩	D14b <sub>2</sub>	Q96
18	剥片	2.3	2.7	0.7	2.4	安山岩	D14b <sub>5</sub>	Q97

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第101図19	剥片	3.1	2.0	0.4	1.5	安山岩	D14c6	Q98
20	剥片	2.7	2.6	0.5	2.4	安山岩	D14b2	Q99
21	剥片	3.6	2.0	0.5	3.6	安山岩	D14b6	Q100
22	剥片	3.6	1.7	0.7	1.7	安山岩	D14b5	Q101
23	剥片	3.0	1.7	0.5	2.3	安山岩	D14b3	Q102
24	剥片	1.7	1.7	0.4	1.3	安山岩	D14b2	Q103
25	剥片	2.6	1.7	0.7	1.4	安山岩	D14c2	Q104
26	剥片	2.3	1.9	0.6	2.0	安山岩	D14b2	Q105
27	剥片	1.8	1.7	0.5	1.2	安山岩	D14b2	Q106
28	剥片	1.5	1.5	0.3	0.6	安山岩	D14b2	Q107
29	剥片	2.3	1.2	0.3	0.5	安山岩	D14b5	Q108
30	剥片	2.3	1.4	0.2	0.5	安山岩	D14b4	Q109
31	剥片	1.9	1.5	0.2	0.6	安山岩	D14b2	Q110
32	剥片	1.2	1.3	0.3	0.4	安山岩	D14b2	Q111
33	剥片	5.1	2.1	0.7	5.9	安山岩	D14c4	Q112

旧石器時代調査エリア外出土石器観察表

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
1		剥片	2.2	1.3	0.4	0.8	安山岩	SI-2	Q1
2	第102図1	剥片	5.1	3.8	1.0	11.8	頁岩	SI-5	Q3
3		剥片	5.5	3.0	0.9	13.5	頁岩	SI-6	Q7
4		剥片	6.7	5.3	1.6	43.5	安山岩	SI-15	Q13
5		剥片	5.6	3.1	0.8	13.2	安山岩	SI-15	Q14
6		剥片	3.6	3.9	1.1	11.3	安山岩	SI-15	Q15
7		剥片	4.0	1.7	0.5	3.3	安山岩	SI-15	Q16
8		剥片	4.1	4.1	0.8	10.5	安山岩	SI-16	Q19
9		剥片	3.1	3.8	0.7	7.0	安山岩	SI-16	Q20
10		剥片	4.9	2.2	0.9	10.9	安山岩	SI-16	Q21
11		剥片	3.5	2.6	1.3	7.9	安山岩	SI-16	Q22
12		剥片	3.7	2.6	0.8	7.2	安山岩	SI-16	Q23
13		剥片	2.8	3.1	0.5	4.5	安山岩	SI-16	Q24
14		剥片	3.3	2.4	1.1	6.4	安山岩	SI-16	Q25
15		剥片	2.7	2.5	0.3	2.0	安山岩	SI-16	Q26
16		剥片	2.1	2.5	0.4	1.8	安山岩	SI-16	Q27
17	2	剥片	5.3	1.8	1.2	5.5	頁岩	SI-16	Q28
18	3	石核	7.8	7.7	4.1	323.2	安山岩	SI-21	Q35
19		石核	6.9	5.1	2.9	98.8	安山岩	表採	Q39
20		石核	7.7	5.8	1.4	61.7	安山岩	表採	Q40

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
21	第102図4	ナイフ形石器	6.3	3.5	1.9	25.2	頁岩	表採	Q41
22	5	尖頭器	4.6	2.4	0.9	7.6	頁岩	表採	Q42-A
23	6	尖頭器	4.3	2.4	0.8	6.6	頁岩	表採	Q42-B
24	7	尖頭器	6.1	1.9	0.8	7.6	安山岩	表採	Q43
25	8	ナイフ形石器	3.3	1.7	0.4	1.5	頁岩	表採	Q44
26	9	尖頭器	2.5	1.8	0.7	2.7	頁岩	表採	Q45
27	10	ナイフ形石器	3.2	2.1	0.4	2.5	安山岩	表採	Q46
28	11	剥片	7.4	1.9	1.4	20.7	安山岩	表採	Q47
29	第103図12	剥片	6.0	5.0	2.3	69.5	安山岩	表採	Q48
30	13	剥片	7.1	4.3	2.8	58.8	安山岩	表採	Q49
31	14	剥片	4.5	6.9	2.4	63.2	安山岩	表採	Q50
32	15	剥片	6.7	4.6	1.4	33.7	安山岩	表採	Q51
33	16	剥片	4.5	4.8	1.8	32.8	安山岩	表採	Q52
34	17	剥片	3.5	3.8	1.7	17.1	頁岩	表採	Q53
35	18	剥片	4.2	4.0	1.0	13.3	頁岩	表採	Q54
36	19	剥片	5.3	3.3	0.8	13.9	安山岩	表採	Q55
37	20	剥片	5.9	3.5	1.2	21.8	安山岩	表採	Q56
38	第104図21	剥片	4.7	3.5	1.4	15.8	頁岩	表採	Q57
39	22	剥片	3.4	4.1	1.4	15.2	安山岩	表採	Q58
40	23	剥片	2.9	4.1	2.3	32.5	安山岩	表採	Q59
41	24	剥片	4.5	3.7	1.2	13.7	安山岩	表採	Q60
42		剥片	3.2	4.9	1.4	17.5	安山岩	表採	Q61
43		剥片	4.3	2.6	1.2	13.5	安山岩	表採	Q62
44		剥片	3.6	4.1	0.4	5.9	安山岩	表採	Q63
45		剥片	5.5	3.2	1.2	9.5	安山岩	表採	Q64
46		剥片	2.6	3.4	0.9	8.3	安山岩	表採	Q65
47		剥片	4.2	1.9	0.4	4.0	安山岩	表採	Q66
48		剥片	2.2	3.8	0.9	4.8	安山岩	表採	Q67
49		剥片	3.2	2.3	0.6	4.7	安山岩	表採	Q68
50		剥片	2.2	2.5	0.4	2.5	安山岩	表採	Q69
51		剥片	3.2	2.1	0.4	2.6	安山岩	表採	Q70
52		剥片	2.5	1.8	0.5	2.1	安山岩	表採	Q71
53		剥片	3.2	2.1	0.5	2.9	安山岩	表採	Q72
54		剥片	2.2	2.1	0.4	2.2	安山岩	表採	Q73
55		剥片	2.6	0.9	0.3	0.8	安山岩	表採	Q74
56	25	剥片	6.7	5.2	4.6	170.3	安山岩	D14a <sub>2</sub>	Q79
57	26	剥片	4.1	2.1	0.9	4.4	安山岩	D14d <sub>2</sub>	Q113
58	27	剥片	6.8	5.0	1.0	23.8	安山岩	D14a <sub>6</sub>	Q114
59	28	剥片	7.9	2.9	1.3	20.9	頁岩	D14a <sub>1</sub>	Q115
60	29	剥片	6.4	4.3	2.0	29.2	安山岩	D14a <sub>6</sub>	Q116

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
61	第104図30	剥片	5.0	4.9	1.7	32.5	頁岩	D14a5	Q117
62	31	剥片	5.2	3.2	2.0	30.9	安山岩	C14a8	Q118
63		剥片	4.5	2.7	0.7	10.3	安山岩	D14a2	Q119
64		剥片	3.0	2.7	0.8	9.4	安山岩	B14e2	Q120
65		剥片	3.3	2.8	0.8	9.0	安山岩	B13i8	Q121
66	32	剥片	5.4	4.7	1.5	23.9	頁岩	D14a6	Q122
67		剥片	2.2	1.3	0.4	1.0	頁岩	D13g3	Q123
68	第105図33	剥片	4.9	4.6	2.2	41.5	安山岩	D14a6	Q124
69	34	剥片	5.8	4.2	1.4	36.8	安山岩	D14a2	Q125
70	35	剥片	6.6	3.9	1.6	21.1	安山岩	D14a6	Q126
71	36	剥片	5.0	4.9	1.1	22.6	安山岩	D14a5	Q127
72	37	剥片	4.0	4.5	1.0	16.2	安山岩	D14a2	Q128
73		剥片	3.9	3.5	0.6	8.7	安山岩	D14b2	Q129
74		剥片	3.9	2.9	1.3	10.8	安山岩	D14a6	Q130
75		剥片	2.6	2.7	0.4	3.4	安山岩	D14d2	Q131
76		剥片	2.2	3.0	0.3	2.4	安山岩	D14b2	Q132
77		剥片	3.2	2.0	0.7	3.9	安山岩	D14a1	Q133
78		剥片	2.2	2.5	0.4	2.0	安山岩	C14g2	Q134
79		剥片	2.0	2.7	0.6	2.6	安山岩	D14a3	Q135
80		剥片	2.8	1.4	0.3	1.5	安山岩	D14a6	Q136
81		剥片	2.1	1.5	0.6	1.6	安山岩	C14a8	Q137
82		剥片	1.7	2.4	0.3	1.4	安山岩	D14a5	Q138
83	38	剥片	4.4	2.5	0.6	5.2	メノウ	D14a5	Q139
84		剥片	3.7	1.9	0.5	3.0	安山岩	C14e8	Q147
85		剥片	4.1	3.2	0.9	8.7	安山岩	C14h3	Q148
86		剥片	3.0	2.3	0.7	4.0	安山岩	C14h3	Q149
87		剥片	2.8	2.0	0.5	3.1	安山岩	C14h3	Q150
88		剥片	2.7	2.8	0.6	4.0	安山岩	C14h3	Q151
89		剥片	2.5	2.2	0.6	2.6	安山岩	C14h3	Q152
90		剥片	3.6	1.5	0.7	2.3	頁岩	C14h3	Q153
91		剥片	2.6	1.8	0.3	0.9	頁岩	C14h3	Q154
92		剥片	2.3	1.8	0.3	1.7	安山岩	C14h3	Q155
93		剥片	1.9	1.4	0.3	0.6	安山岩	C14h3	Q156
94		剥片	1.9	1.8	0.2	0.7	安山岩	C14h3	Q157
95		剥片	1.8	1.0	0.2	0.5	安山岩	C14h3	Q158
96		剥片	1.2	1.5	0.2	0.1	頁岩	C14h3	Q159
97		剥片	1.9	1.1	0.2	0.4	安山岩	C14h3	Q160
98		剥片	1.7	1.0	0.2	0.2	頁岩	C14h3	Q161
99		剥片	3.2	2.3	0.6	3.4	安山岩	D14a1	Q162

## 2 竪穴住居跡

当遺跡からは、台地縁辺部に沿って23軒の竪穴住居跡が確認されている。すべて弥生時代後期のもので、平面形は隅丸長方形や隅丸方形が多い。これらの住居跡は、重複がほとんど無く遺存状態は良好である。炉石を持つ住居跡が3軒あり、いずれも董青石ホルンフェルスを用いている。また、住居跡の床面、炉床、覆土中から多量のアプライト（半花崗岩）礫が出土している。アプライト礫については、各住居跡ごとに礫の大きさ別数量と総重量を示すことにした。区分けの基準は、1～30gまでを小、31～60gまでを中、61g以上を大として表した。

以下、確認された住居跡の特徴や主な遺物について記載する。

### 第1号住居跡（第106図）

**位置** 調査区北端部、B14c<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

**規模と形状** 長軸5.59m、短軸4.67mの隅丸長方形である。

**主軸方向** N-48°-W

**壁** 壁高50～55cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められ締まっている。特に炉周辺と、出入口付近、北東壁中央部、北コーナー部が硬い。

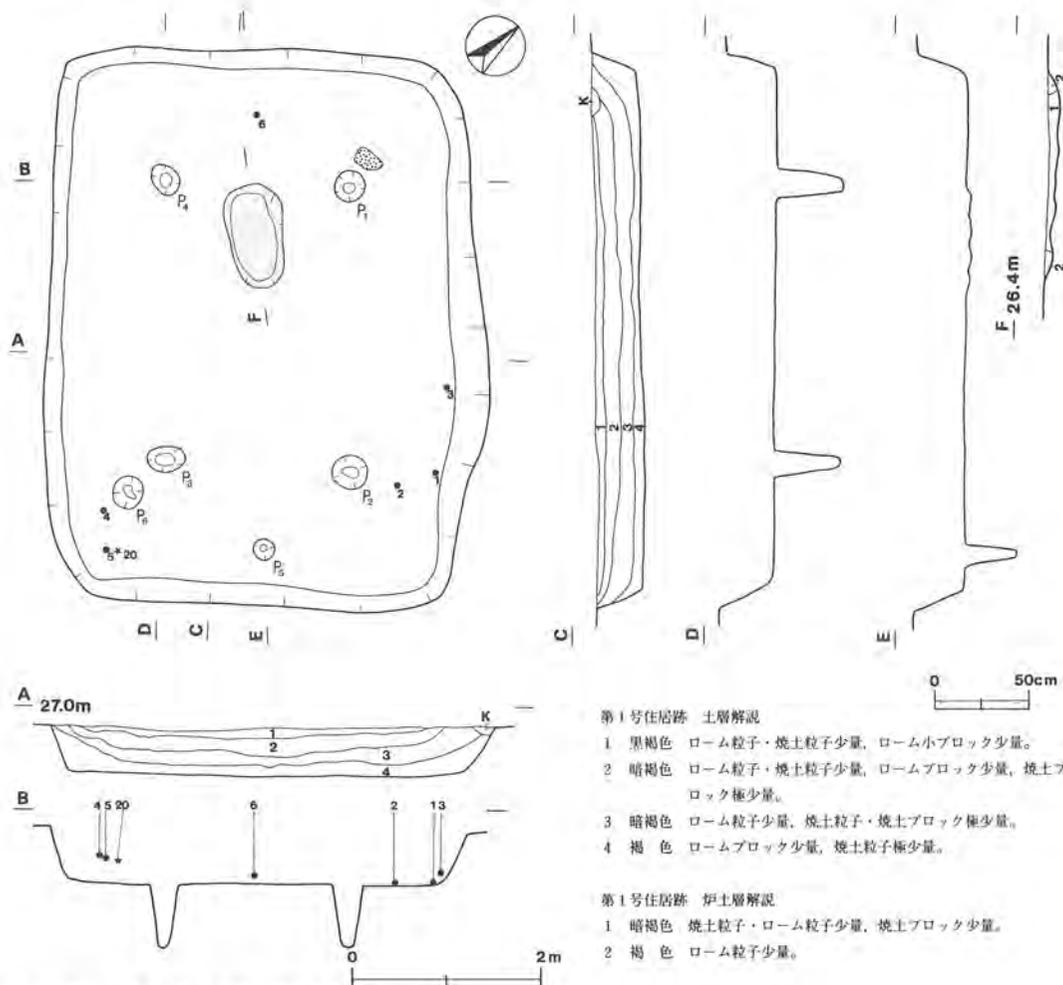
**ピット** 6か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径32～40cm、短径28～32cmの楕円形で深さ68～72cmの支柱穴である。支柱穴を結ぶ線は長方形となる。P<sub>5</sub>はやや南東壁側に傾斜し、径22cmのほぼ円形で深さ54cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>は、径32cmの円形で深さ30cmと浅く、北東壁に床面から20cm下がった所で段を持ち、補助柱穴と思われる。

**炉** 中央からやや北側で、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>とを結ぶ直線と接する位置にあり、平面径は長径110cm、短径56cmの楕円形で床を6cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

**覆土** 4層からなる。各層とも、ロームブロック、焼土粒子を含んでおり、さらに第2・3層には焼土小ブロックがわずかに混入している。第4層は褐色土で、壁際から床面上まで広く堆積している。遺物は覆土第3・4層から弥生式土器が多く出土している。

**遺物** 1～4は、弥生式土器壺で、1・2は東コーナー付近の床面直上からつぶれた状態で、3の胴部下半から底部は北東壁中央際で床面近くから、4は南コーナー付近の覆土から、それぞれ出土している。5・6は高杯で、5は南コーナーの覆土下層から、6は北壁際中央付近の覆土下層からそれぞれ出土している。20の紡錘車は、南コーナーの覆土中層から出土している。アプライト礫が25点（大1、中3、小20）出土しており、総重量は389gである。

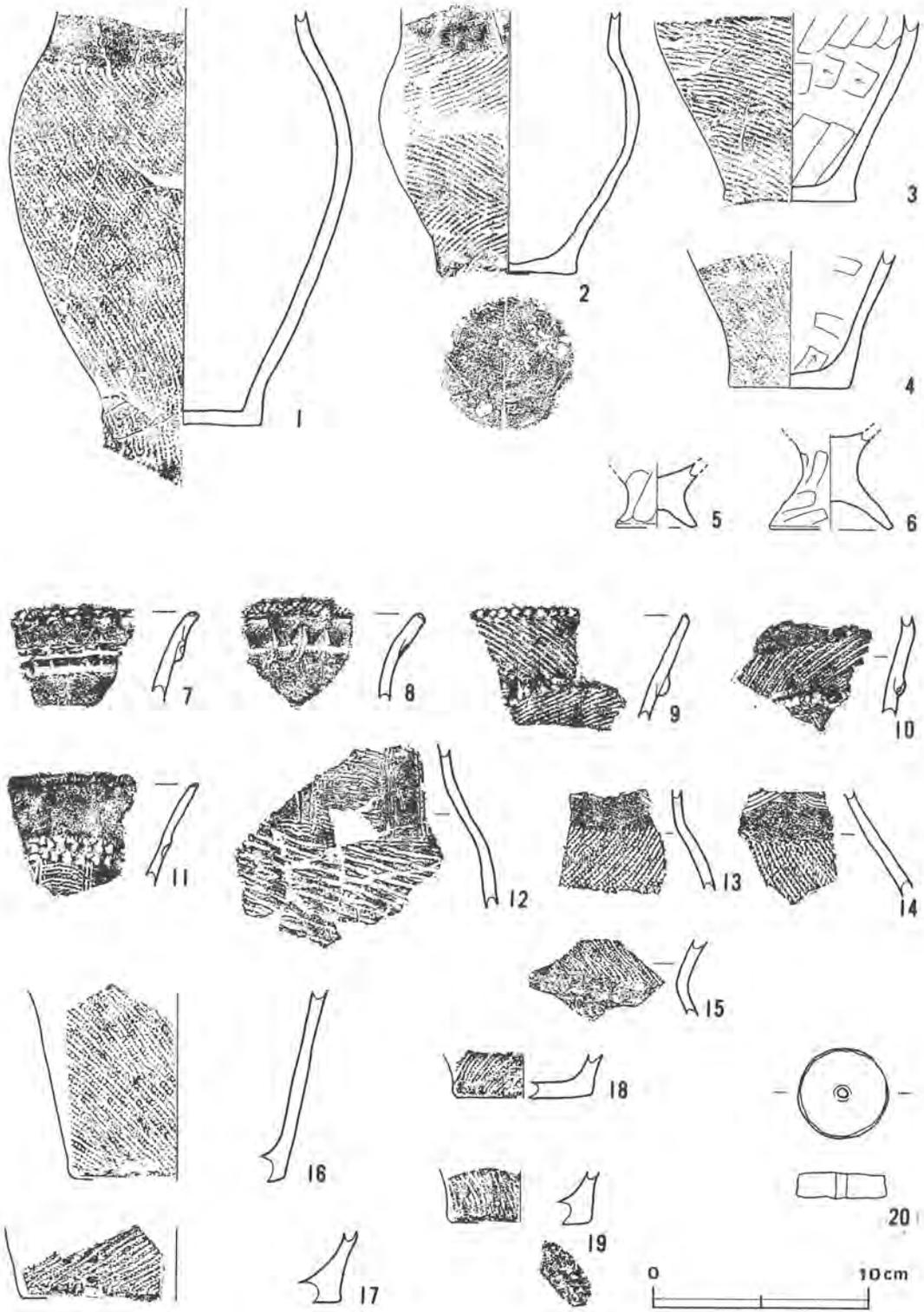
所見 北コーナー付近の床面直上から粘土が出土しており、風化が激しく砂質分が多い。覆土中と床面直上からアプライト礫が出土している。本跡は、弥生時代後期後半と思われる。



第106図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	壺 弥生式土器	B (19.4) C 7.1	頭部から口縁部にかけて欠損。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。頭部下端は無文である。胴部内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 スコリア にぶい褐色 普通	P 1 80% 外面スス附着
2	壺 弥生式土器	B (12.3) C 6.5	底部から頭部下半にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施され羽状構成をとる。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 2 50%
3	壺 弥生式土器	B ( 8.8) C 6.2	底部から胴部下半にかけての破片。平底で張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 黄橙色 普通	P 3 50%



第107图 第1号住居跡出土遺物実測・拓影图

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第107図 4	壺 弥生式土器	B(6.4) C 5.6	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、内面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P 4 15%
5	高 坏 弥生式土器	B(3.0) D〔3.8〕 E 2.3	坏部欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部外面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 黄橙色 普通	P 6 40%
6	高 坏 弥生式土器	B(4.5) D〔5.7〕	坏部欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部外面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 黄橙色 普通	P 7 70%

第107図7～19は、第1号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～11は口縁部片で、7・8は口唇部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。9の口唇部は縄文原体による押圧が、口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され羽状構成をとり、さらに瘤が貼られている。10は口縁部下端で附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。さらに、縄文原体による押圧が周回し、瘤が貼られている。11は口唇部にキザミ目が、口縁部下端は縄文原体による押圧が施されている。頸部上位には、3本櫛歯による縦区画がなされ波状文が充填されている。12～15は、胴部から頸部にかけての破片である。12は、5本櫛歯による充填波状文が施されている。13～15は、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、13・14は頸部を無文としている。16～19は底部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第107図20	紡錘車	4.1	4.1	1.3	5.0	27.2	100	覆土中層	DP1

## 第2号住居跡(第108図)

位置 調査区北端部、B14e5区を中心に確認されている。

規模と形状 長軸5.30m、短軸5.28mの隅丸方形である。

主軸方向 N-96°-W

壁 壁高10～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体的に軟らかいが、炉周辺だけは硬く締まっている。

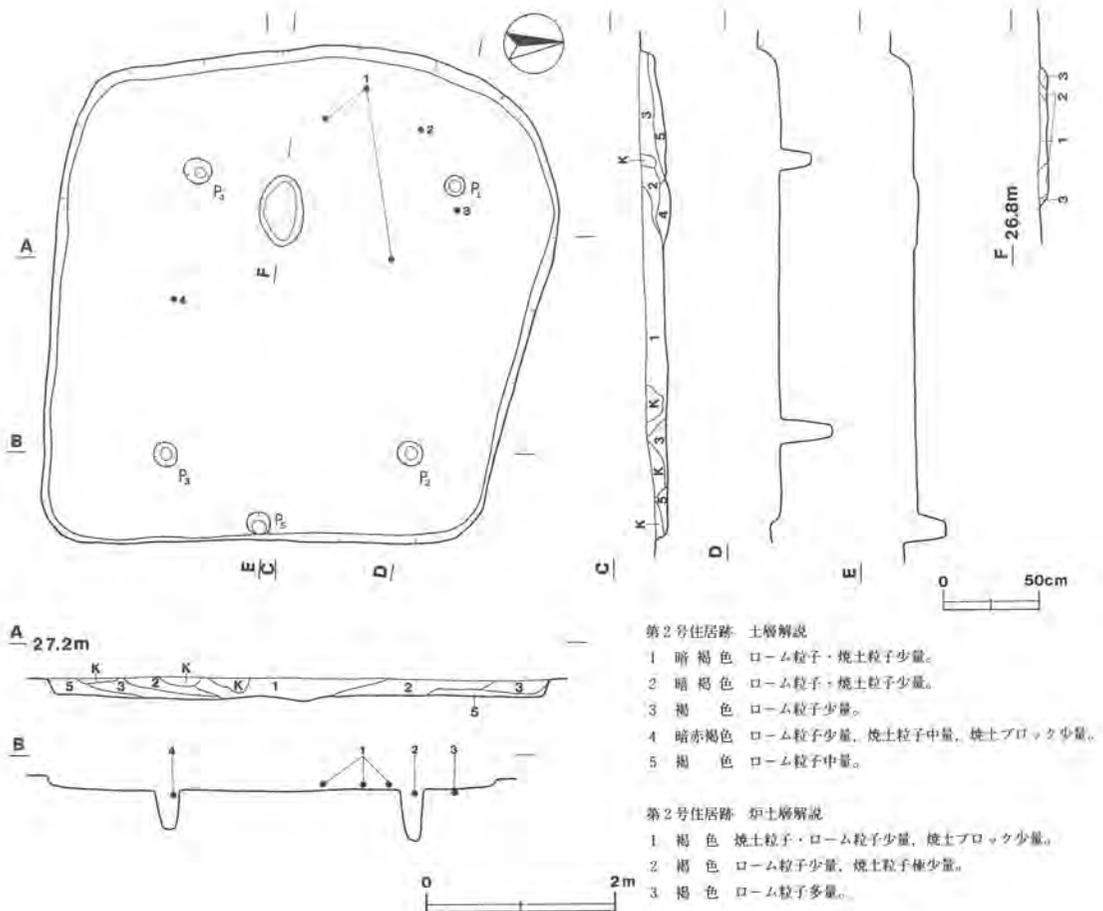
ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径22～30cmの円形で深さ32～54cmの主柱穴である。主柱穴を結ぶ線は方形となる。P<sub>5</sub>は東壁面に接して掘られており、径26cmの円形で深さ30cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央からやや南西寄りややP<sub>4</sub>側にあり、平面形は長径74cm、短径46cmの楕円形で床を5cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

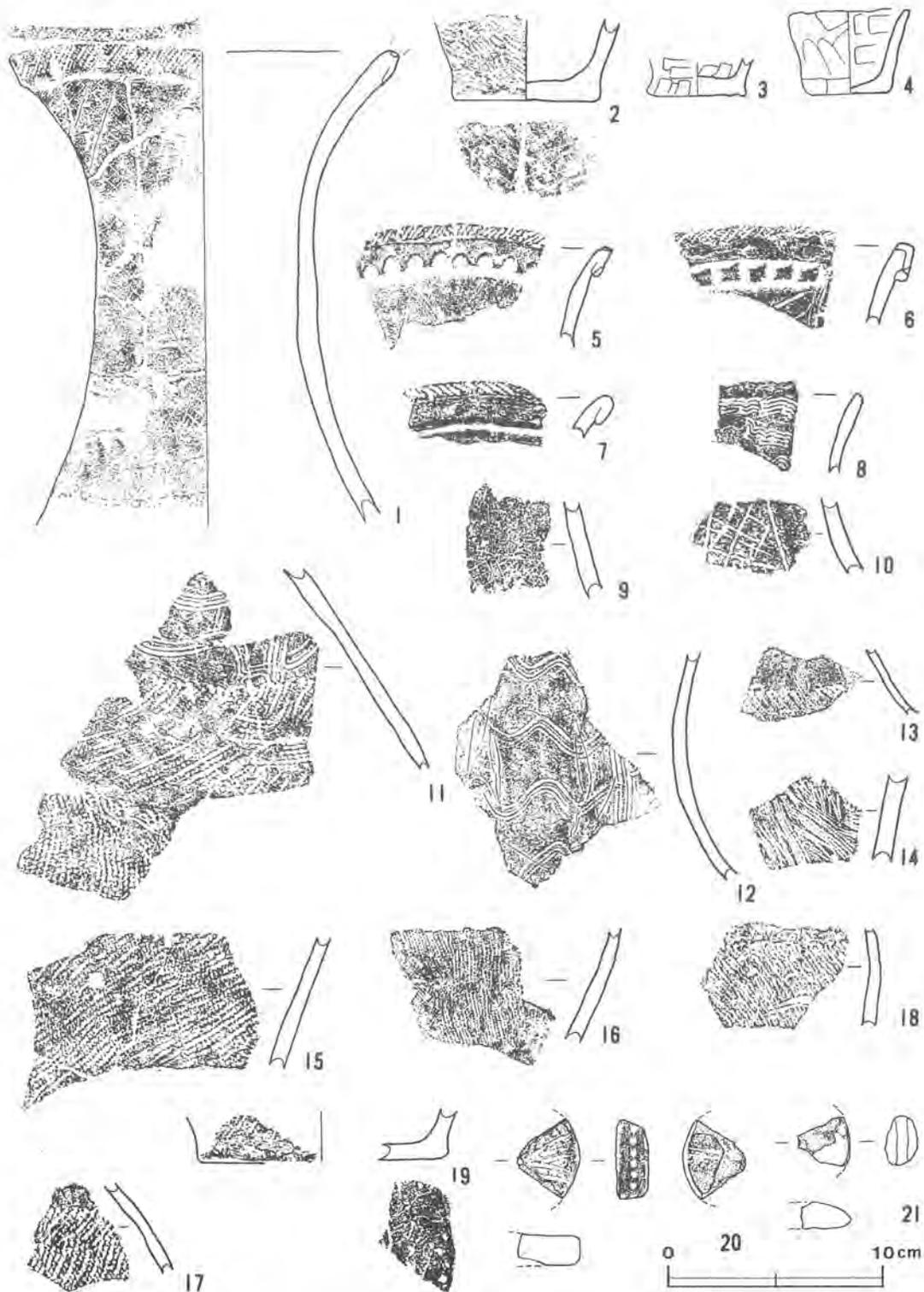
覆土 北側の覆土には攪乱が数か所あるが、床面までは達していない。全体は5層からなり、第1・2層には焼土粒子が含まれている。各層とも、壁から中央に向かって急傾斜で堆積している。第1層から土器片の出土が多い。

遺物 弥生式土器片の出土は、中央から壁際にかけて多く、北東コーナー付近からは出土していない。1・2は弥生式土器壺で、1の口縁部から頸部は中央部と西壁の覆土中層からの破片が接合している。2の底部は、覆土中層から出土している。3・4はミニチュア土器で、3の底部は北東コーナー寄りの床面直上から、4は南壁寄りの覆土中層から出土している。20・21の紡錘車は、覆土上層から出土している。アブライト礫が98点(大4, 中2, 小92)出土しており、総重量は998gになる。

所見 覆土の堆積状況から、人為堆積と考えられる。本跡は、弥生時代後期前半と思われる。



第108図 第2号住居跡実測図



第109图 第2号住居跡出土遺物実測・拓影图

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第109図 1	広口壺 弥生式土器	A 18.2 B 22.5	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。複合口縁で、頸部上半はヘラ描きによる縦区画充填格子目文が施されている。頸部下半は4段に区画され、2・4段目を無文帯とし1・3段目にはヘラ描きによる横区画充填格子目文が施されている。口縁部・口唇部・胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P 8 20%
2	壺 弥生式土器	B( 3.9) C 6.8	底部から胴部下半にかけての破片。平底で木葉痕がある。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 9 5%
3	ミニチュア 弥生式土器	B( 1.7) C 4.7	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がる。	砂粒、石英、長石 にぶい橙色 普通	P 11 10%
4	ミニチュア 弥生式土器	A 5.6 B 3.9 C 4.1	平底で体部は外傾して立ち上がる。体部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 明赤褐色 普通	P 12 80%

第109図5～19は、第2号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～8は口縁部片で、口唇部に縄文が施され、5～7は複合口縁である。9・10・12・13は頸部片で、9・10はヘラ描きによる格子目文が施されている。11・12は同一個体と思われる、頸部は縦区画された後、連弧文が充填されている。13は頸部を縄文で縦区画し、下端に附加条1種（附加2条）の縄文を施している。14～18は胴部片で、14は絡条体による捺糸文が、15～18は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。19の底部片は、胴部に縄文が施されており、底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第109図20	紡錘車	(3.8)	(2.9)	1.5	—	(14.5)	30	覆土上層	DP2
21	紡錘車	(2.3)	(2.4)	1.5	—	(6.9)	15	覆土上層	DP3

第3号住居跡（第110図）

位置 調査区北西端部，C13a4区を中心に確認されている。本跡の北西壁側が，調査エリア外に延びている。

規模と形状 長軸4.80m，短軸3.50mの隅丸長方形である。

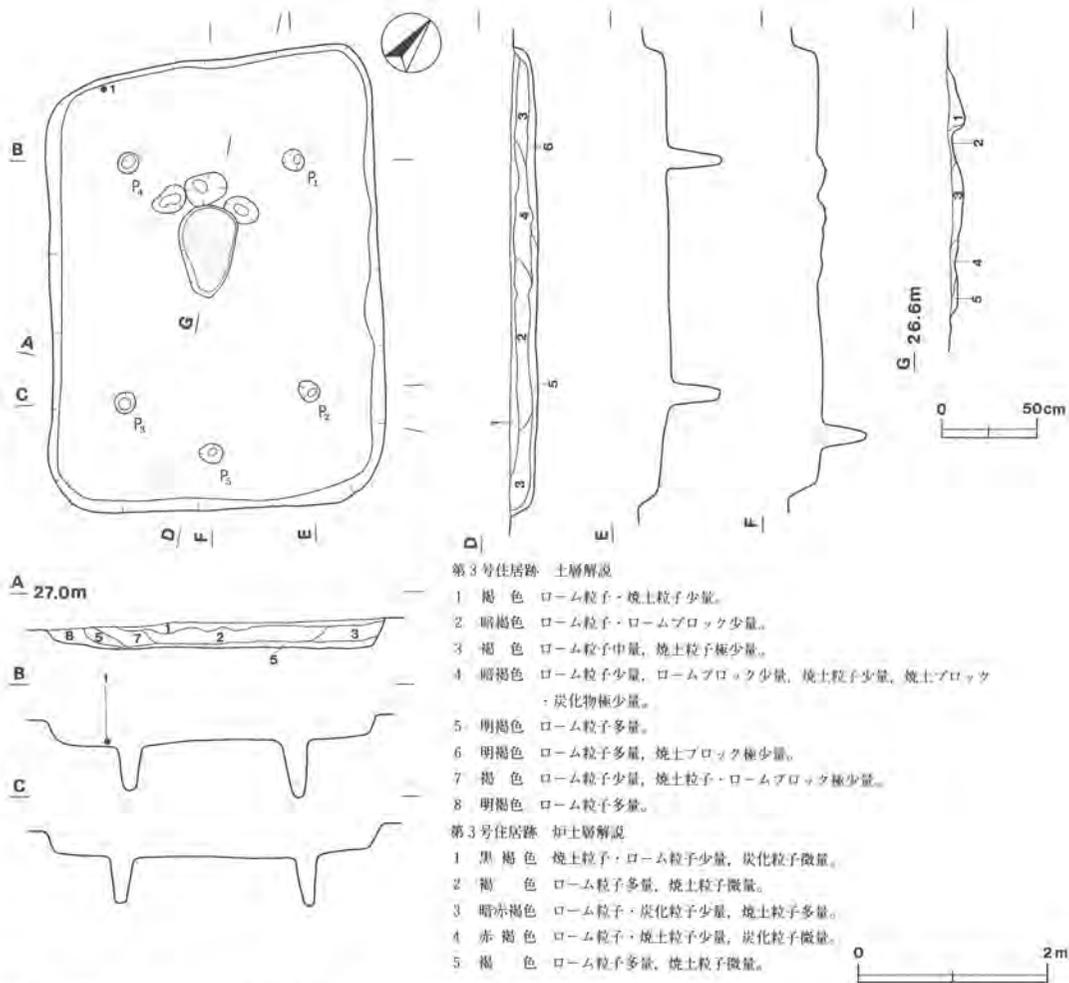
主軸方向 N-41°-W

壁 壁高24～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 凹凸があり，中央部はよく踏み固められ，特に炉の周辺は硬い。南東壁，北東壁付近はやや高い。

ピット 5か所。P1～P4は，長径22～24cmのほぼ円形で深さ48～60cmの主柱穴である。主柱穴を結ぶ線は長方形である。P5は，長径24cm，短径22cmの楕円形で深さ53cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央からやや北西寄りにあり，平面形は長径98cm，短径56cmの楕円形で床を8cm程掘り込ん



第110図 第3号住居跡実測図

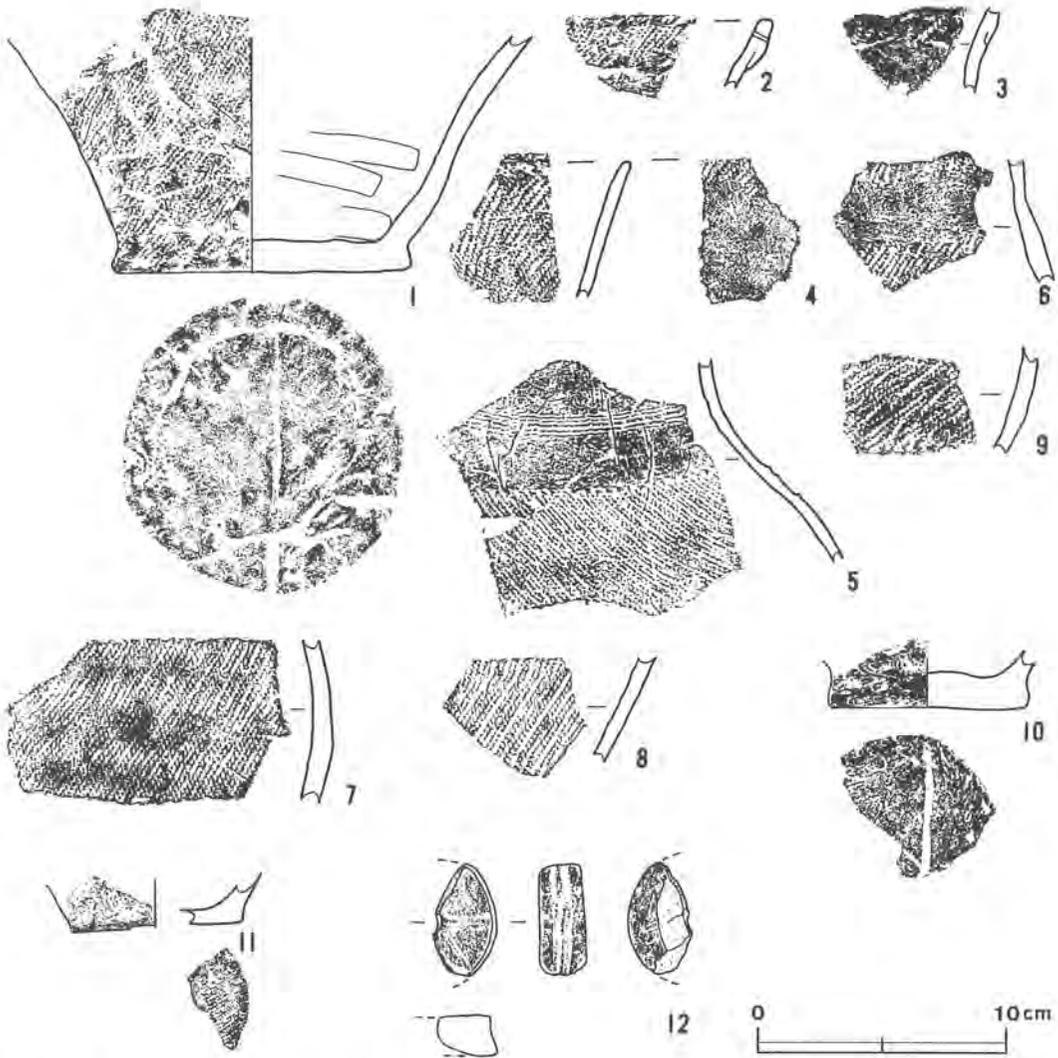
だ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。炉床中央部付近に、アプライトの小礫が多数出土している。炉の北西側に小さなくぼみが3か所あり、平面形は長径36~46cm, 短径26~32cmの不整楕円形で深さは6~10cmである。くぼみの覆土には、炭化粒子、焼土粒子が含まれており、炉の関連施設として同時期に使用されていた可能性がある。またくぼみの覆土中や底面からもアプライト小礫が出土している。

**覆土** 下層の第5・6層は明褐色土で、どちらもローム粒子を多量に含み、更に第6層には焼土小ブロックが混入している。中層は4層からなり、ローム小・中ブロック、焼土粒子、焼土小ブロックを含んでいる。上層は、ローム粒子、焼土粒子を少量含む褐色土である。下層から土器片が多く出土している。

**遺物** 1は弥生式土器壺の胴部下半から底部にかけての破片で、西コーナーの壁際から出土している。12の紡錘車は、覆土中から出土している。アプライト礫が88点(大1,小87)出土しており、

総重量は718gである。

所見 本跡は、弥生時代後期前半と思われる。



第111図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第111図 I	壺 弥生式土器	B(9.5) C 11.9	底部から胴部下半にかけての破片。平底で張り出しを持つ。胴部は外反して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。胴部内面はヘラナデされている。	砂粒・石英・長石 雲母・スコリア 橙色 普通	P13 10%

第111図2～11は、第3号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2～4は複合口縁で、2は口縁部から口唇部にかけて附加条1種（附加2条）の縄文が施され、径4mmの孔が穿られている。3は口縁部に縄文が施され、下端を無文としている。4は外面から内面上位にかけて単節縄文が施されている。5・6は胴部から頸部にかけての破片で、5は胴部に附加条1種（附加2条）の縄文を施し、頸部には5本櫛歯による縦区画をし、下位には横走文を施している。6は頸部下半を無文とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。7～9は胴部片で附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。10・11は底部片で、胴部に縄文が施され、底面には10が木葉痕、11には布目痕がある。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第111図12	紡錘車	(4.5)	(2.6)	1.8	—	(19.5)	30	覆土上層	D P4

#### 第4号住居跡（第112図）

位置 調査区北部、C14g4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.70m、短軸5.05mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高33～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉とP5周辺がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P1～P4は、径26～38cmのほぼ円形で深さ65～68cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は長方形である。P4は、長径32cm、短径22cmの楕円形で深さは36cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

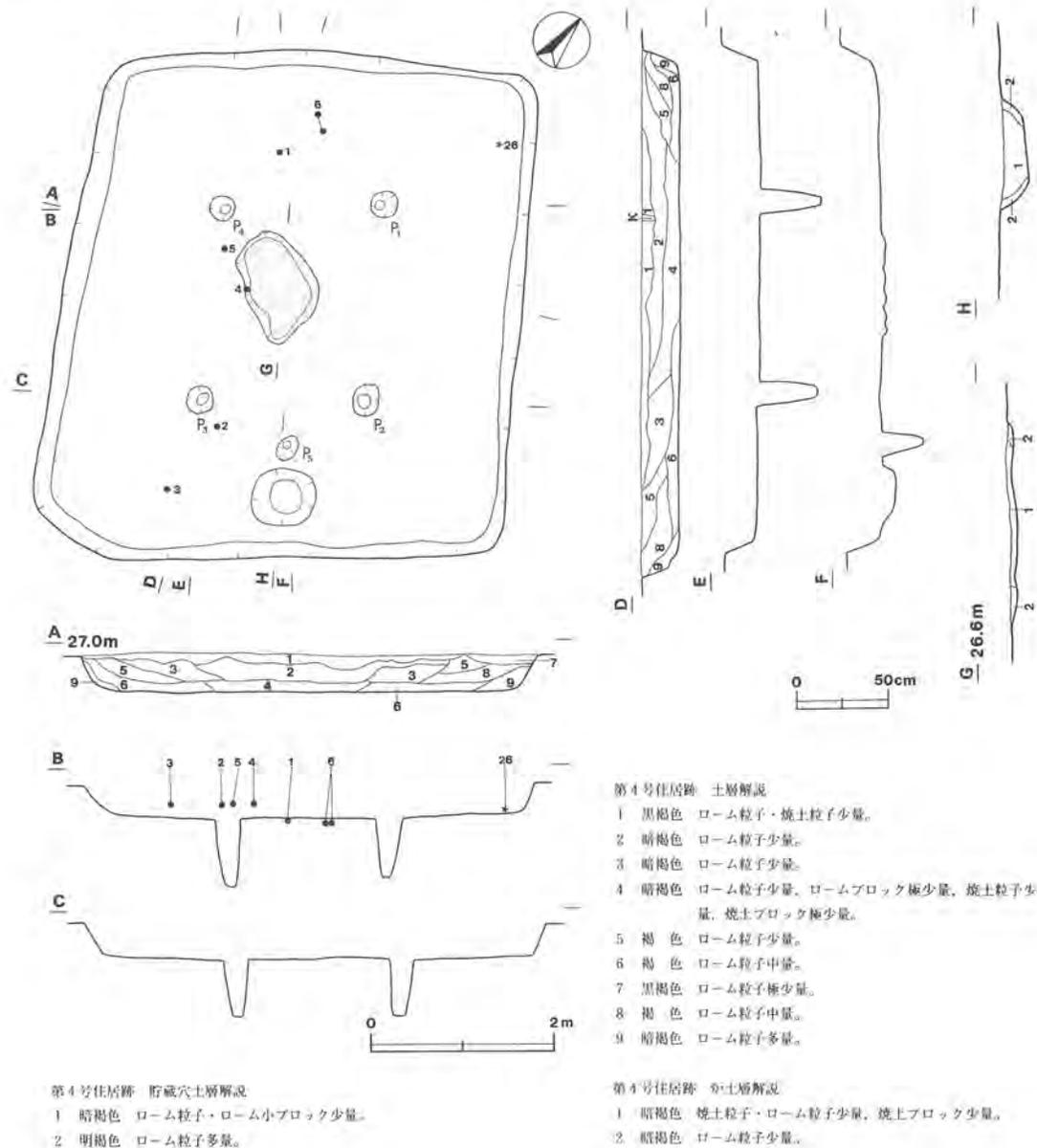
炉 中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径128cm、短径80cmの不整楕円形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、南東部が熱を受け赤変硬化している。炉床中央部付近からアプライト細礫が多数出土している。

貯蔵穴 P5と南東壁の間にあり、平面形は長径70cm、短径62cmのやや楕円形で深さ17cmである。

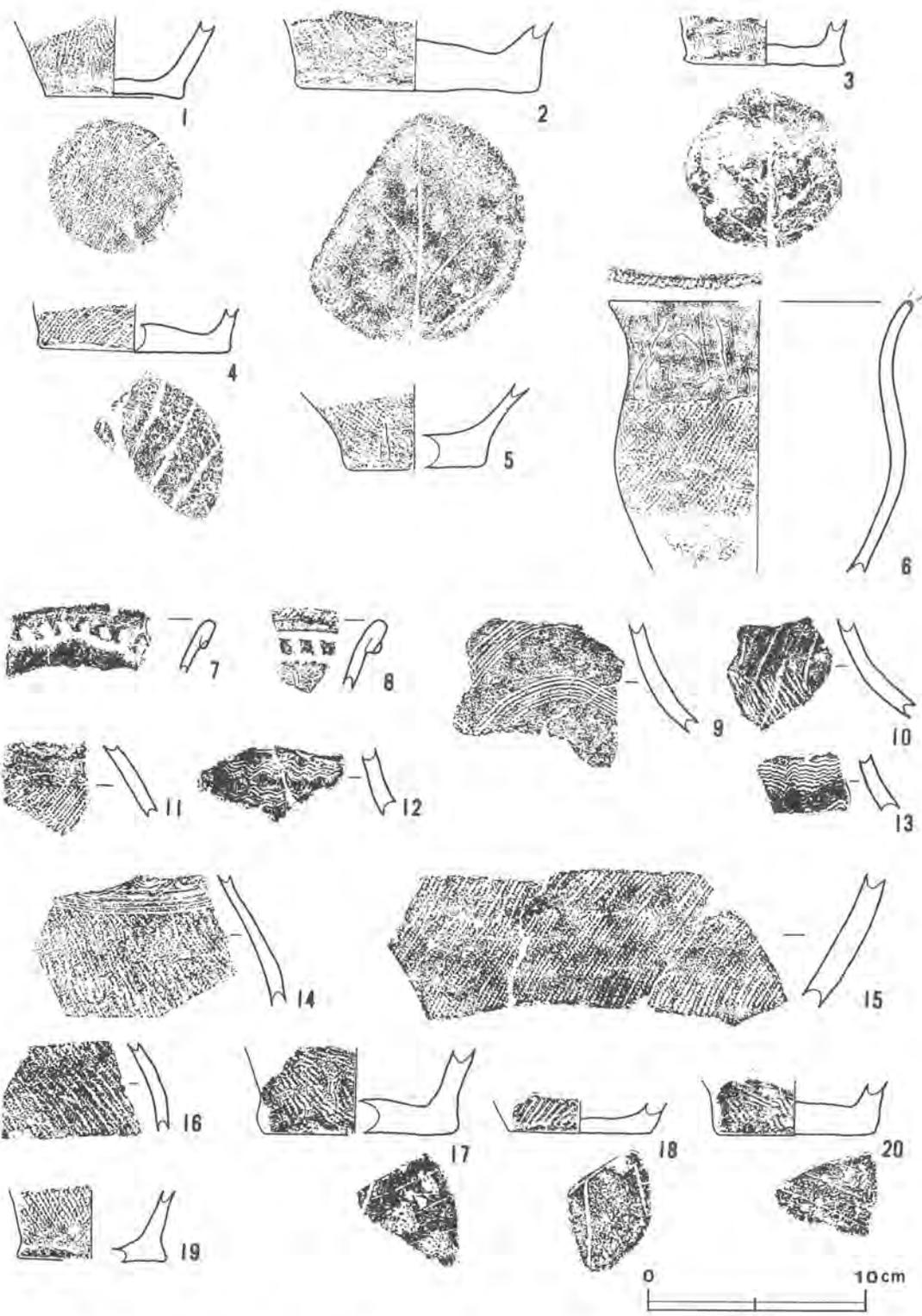
覆土 9層からなり、壁際にはローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。下層はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土である。この層から土器片が多数出土している。中層はローム粒子を少量含む暗褐色土で、上層は焼土粒子を極少量含む黒褐色土である。

遺物 1～5は弥生式土器壺の底部で、1は北西壁付近の床面直上から、2・3はP3付近の覆土下層から、4・5は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。6は甕の口縁部から胴部で、北西壁中央部の床面直上から出土している。21～23の紡錘車は、21が覆土上層から、22は炉の覆

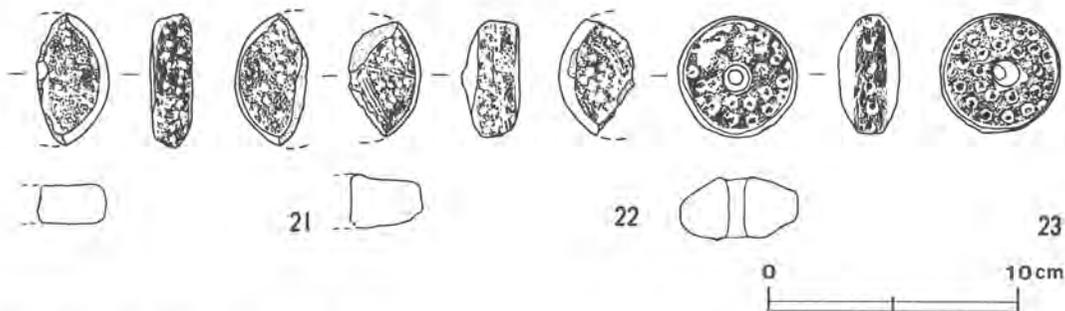
土中から、23は北コーナーの床面直上からそれぞれ破片で出土している。アプライト礫が416点（大6，中14，小396）出土しており，総重量は3,431gである。アプライト礫は，当遺跡内の住居跡中で一番多く出土している。覆土中に多いが，床面直上からもかなりの量で特に炉の周辺で多く出土している。炉床直上からもアプライト礫が出土しており，それらは全て礫細片である。所見 アプライトを材質とする石製品類は全くなく，アプライト礫の使用目的等については不明で今後の課題である。本跡は，弥生時代後期前半と思われる。



第112図 第4号住居跡実測図



第113图 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第114図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第113図 1	壺 弥生式土器	B( 3.8) C 6.3	底部から胴部下半にかけての破片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には布目痕がある。	砂粒,雲母,スコリア にぶい褐色 普通	F16 10% 内面炭化物付着
2	壺 弥生式土器	B( 3.3) C 11.2	底部片。平底で木葉痕がある。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 明褐色 普通	P17 15%
3	壺 弥生式土器	B( 2.2) C 7.4	底部片。平底で木葉痕がある。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 黄褐色 普通	P18 10%
4	壺 弥生式土器	B( 2.2) C[ 8.9]	底部片。平底で木葉痕がある。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 にぶい橙色 普通	P20 5% 内面炭化物付着
5	壺 弥生式土器	B( 4.0) C[ 6.6]	底部片。平底で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 赤褐色 普通	P21 5% 内面炭化物付着
6	甕 弥生式土器	A[14.0] B(12.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内傾して立ち上がる。口縁部は頸部から外反する。胴部と口唇部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 灰褐色 普通	P22 15% 内・外面炭化物付着

第113図7～20は、第4号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7・8は口縁部片で、口唇部には縄文が施された複合口縁である。9～13は頸部片で、9は6本櫛歯による連弧文が、10は燃糸文、11は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。12は5本の、13は7本の櫛歯による横走波状文が施されている。14は胴部から頸部にかけての破片で、胴部に附加条1種(附加2条)の縄文を施し、頸部は簾状文により胴部と区画した後連弧文を施している。15・16は胴部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。17～20は底部片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。19以外は、底面に木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第114図21	紡錘車	(5.4)	(3.0)	1.6	—	(25.0)	40	覆土上層	DP5
22	紡錘車	(4.6)	(2.9)	2.2	—	(23.8)	30	覆土上層	DP6
23	紡錘車	4.8	4.7	2.5	1.0	53.2	100	床面直上	DP7

第5号住居跡（第115図）

位置 調査区北東部，B14i7区を中心に確認されている。

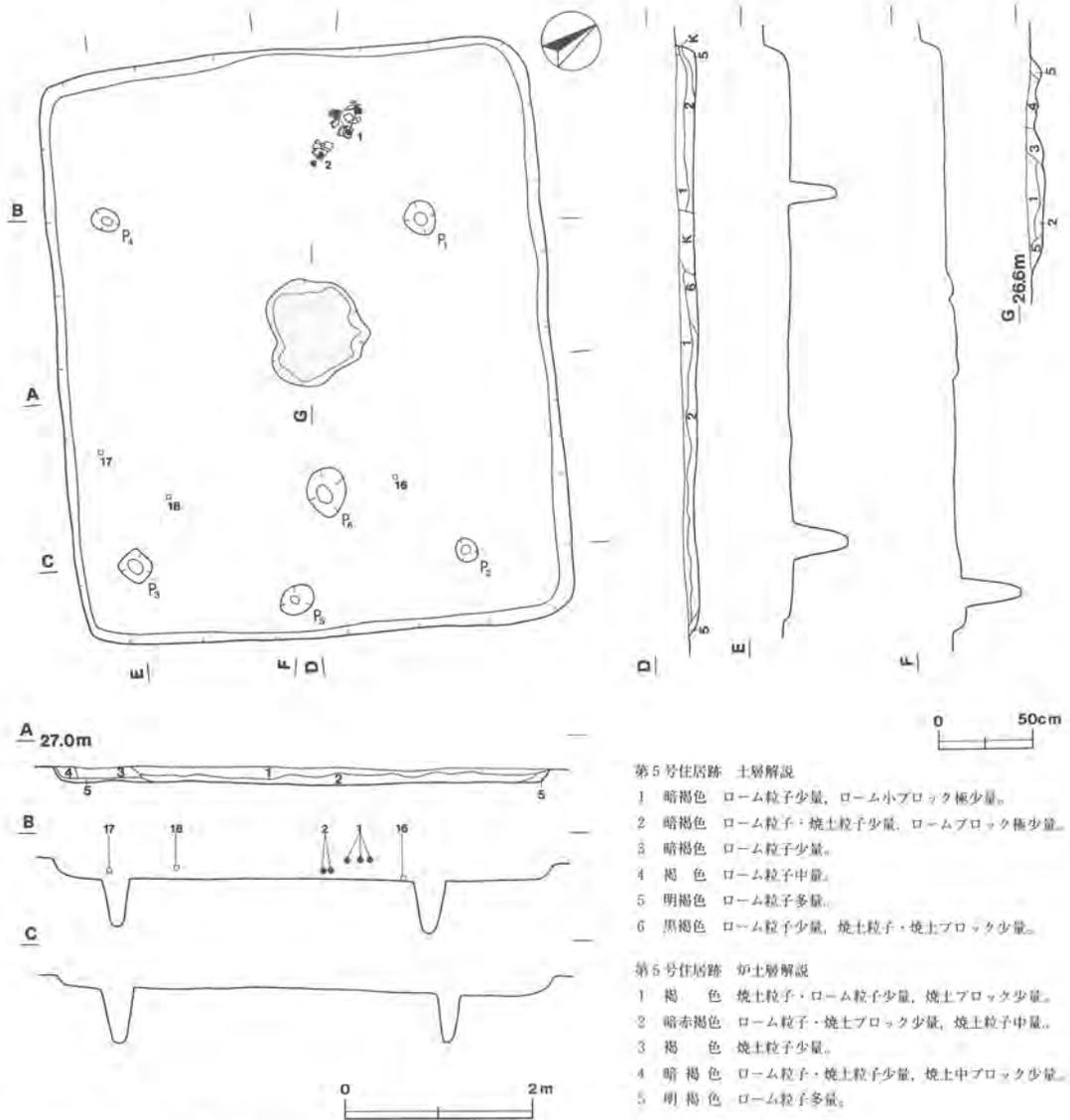
規模と平面形 長軸6.35m，短軸5.29mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-57°-W

壁 壁高13~21cmと低く，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが，炉の北西側とP<sub>6</sub>周辺に凹凸がある。中央部がよく踏み固められている。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>は，長径26~38cm，短径22~34cmの楕円形で深さ51~58cmの支柱穴で



第115図 第5号住居跡実測図

ある。支柱穴を結んだ線は方形である。P<sub>5</sub>は、長径38cm、短径32cmの不整楕円形で深さ63cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>は、長径52cm、短径42cmの楕円形で深さ43cmである。P<sub>6</sub>周辺はやや高まりがあり、特に南東側が高い。性格は不明であるが位置と形態から出入口施設と関係があると考えられる。

炉 中央にあり、平面形は長径118cm、短径100cmの不整楕円形で床を10cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際には明褐色土が堆積している。上・下層とも、ローム粒子・ローム中ブロックを含む暗褐色土で、下層には更に焼土粒子が少量混じっている。炉の北西側に攪乱がありそのためか炉の上に当たる第6層には、焼土粒子・焼土小ブロックが含まれている。土器片が覆土上層から多く出土している。

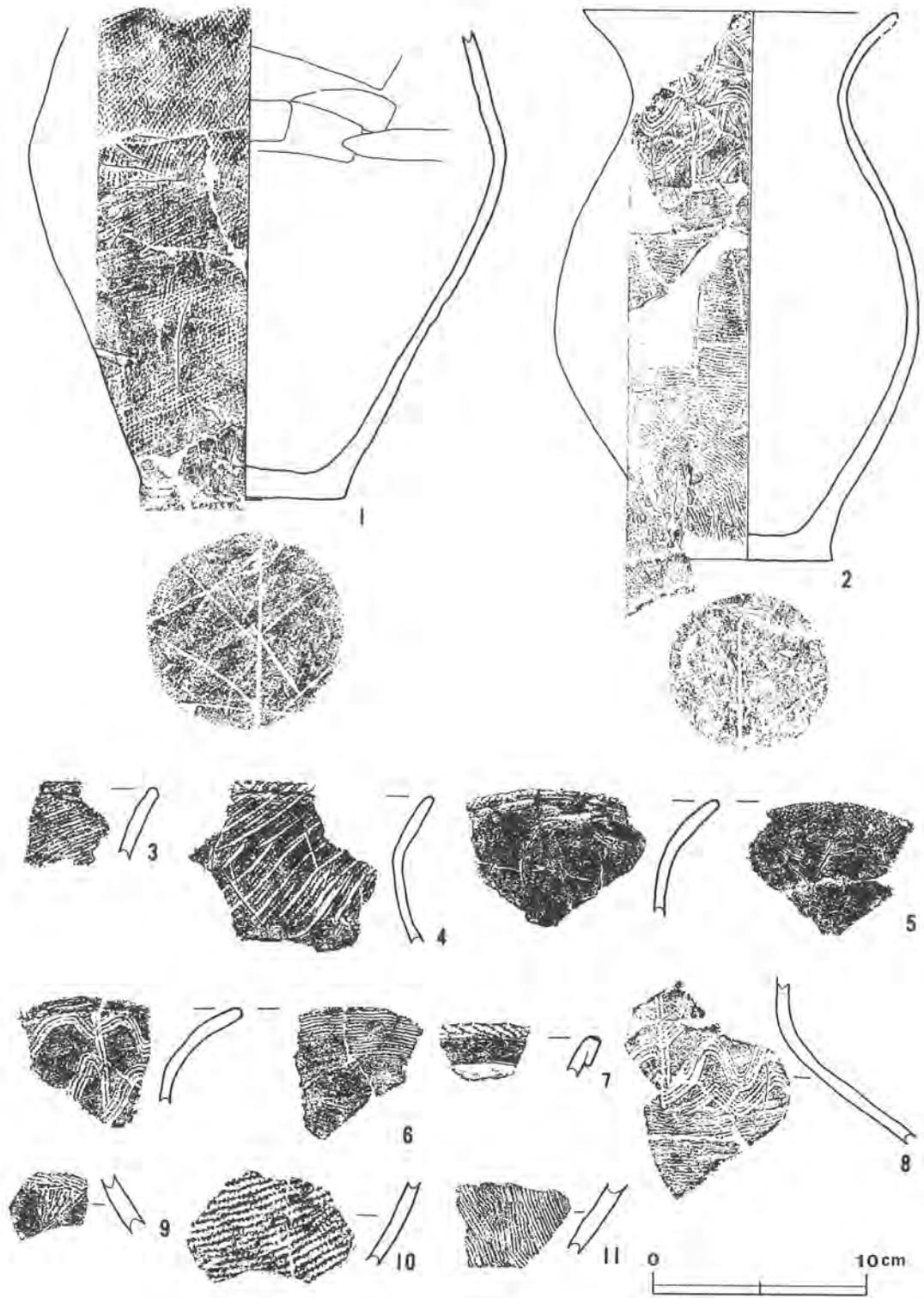
遺物 1・2の弥生式土器壺は、北西壁中央寄りの覆土上層からどちらも破片で出土している。15の紡錘車は覆土中から、16の敲石は東コーナー寄りの床面近くから、17・18は南西壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。アプライト礫が111点（大3，中8，小100）出土しており、総重量は1,265gである。

所見 当遺跡内の他の住居跡に比べてかなり掘り込みが浅い。本跡は、弥生時代後期前半と思われる。

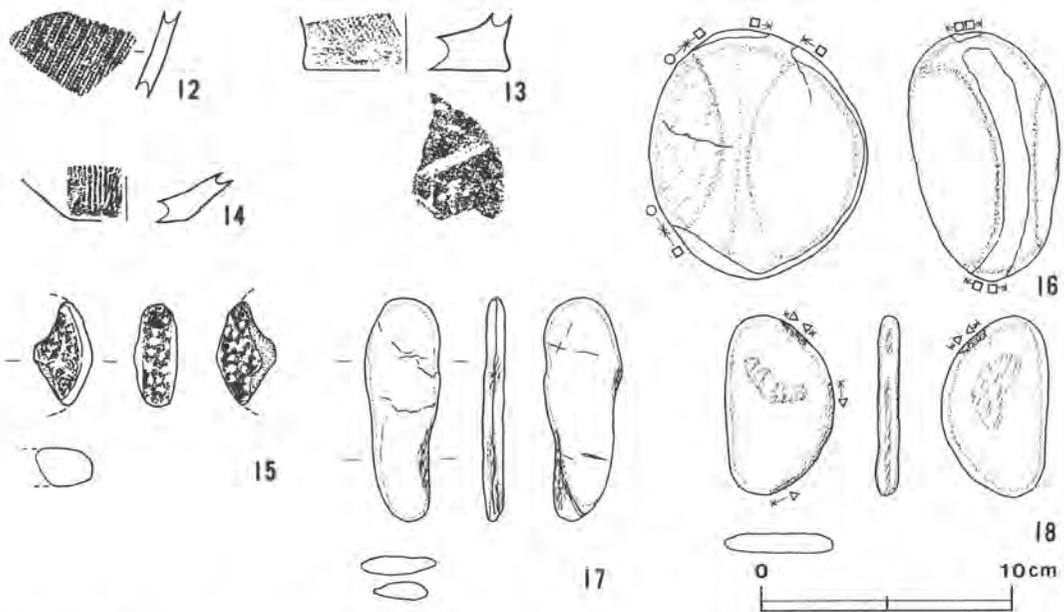
#### 第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	壺 弥生式土器	B (22.2)	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。胴部内面はヘラナデされている。	砂粒、雲母 にぶい橙色 普通	P 23 60% 内・外面炭化物付着
		C 9.6			
2	広口壺 弥生式土器	A [14.8]	平底で木葉痕がある。胴部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。頸部には4本櫛歯による横走波状文が、胴部には無節の縄の絡条体による縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 24 60%
		B 25.8			
		C 8.0			

第116・117図3～14は、第5号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～7は口縁部片で、いずれも口唇部に縄文が施されている。3・4は、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。5は外面を無文とし、内面に単節縄文が施されている。6は内面に横位の撚糸文を施し、外面は2本櫛歯による縦区画をし、その後4本櫛歯の波状文を充填している。7は口縁部に単節縄文を施し、それ以外は無文としている。8は胴部から頸部にかけての破片で、胴部は横位の撚糸文、頸部は6と同じ文様で同一個体と思われる。8は頸部下端の破片で、頸部を無文とし胴部には縄文が施されている。9は頸部片で、ヘラ描きによる山形文が施されている。10～12は胴部片で、10は単節縄文、11は絡条体による撚糸文、12は附加条1種（附加2条）の縄文がそれぞれ施されている。13・14は底部片で、胴部には13が附加条1種（附加2条）の縄文、14には縦位の絡条体による撚糸文が施されている。13は底面に木葉痕がある。



第116图 第5号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第117図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第117図15	紡錘車	(4.2)	(2.3)	(1.7)	—	(11.0)	20	覆土上層	D P 8

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第117図16	敲石	10.0	8.5	6.0	672.5	砂岩	床面付近	Q 2 磨石兼用
17	不明石製品	9.0	3.1	0.8	36.0	角閃岩	覆土上層	Q 4 穂摘具の可能性有り
18	不明石製品	7.3	4.2	0.9	43.6	砂岩	覆土上層	Q 5 穂摘具の可能性有り

### 第6号住居跡（第118図）

位置 調査区北部，B14j<sub>4</sub>区を中心に確認されている。

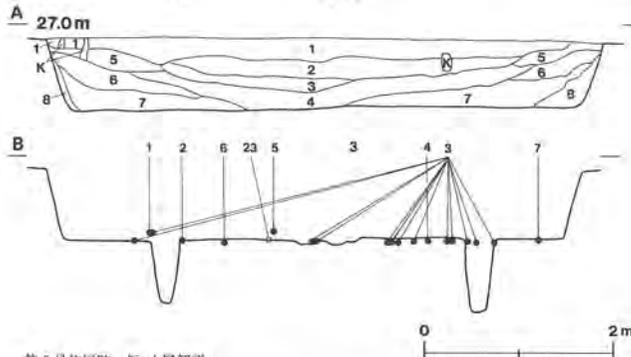
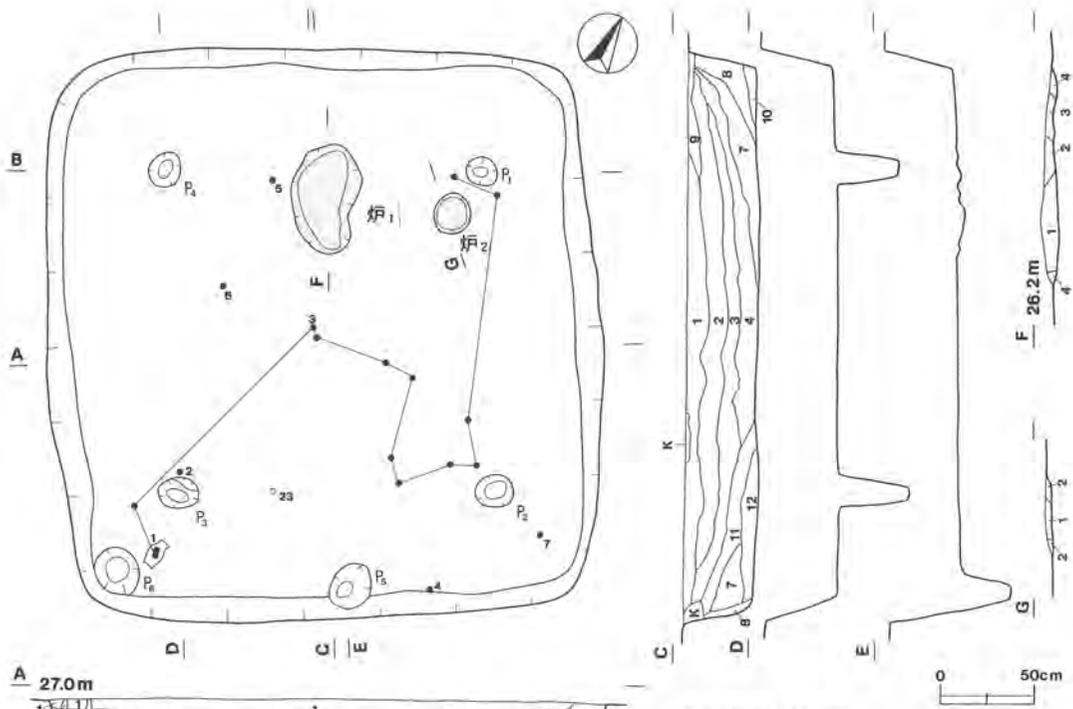
規模と平面形 長軸6.10m，短軸5.83mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高66～74cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。特にP<sub>5</sub>の北西側と炉の周辺が硬い。炉周辺の床面には炭化粒子が散乱している。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，長径34～44cm，短径30～34cmの楕円形で深さ67～77cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は，長径51cm，短径42cmの不定形で深さ56cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>は，長径54cm，短径44cmの楕円形で深さは23cmあり，性格は不明である。



第6号住居跡 炉<sub>1</sub>土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，ロームブロック少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，焼土ブロック少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。
- 4 明褐色 ローム粒子多量，焼土粒子少量。

第6号住居跡 炉<sub>2</sub>土層解説

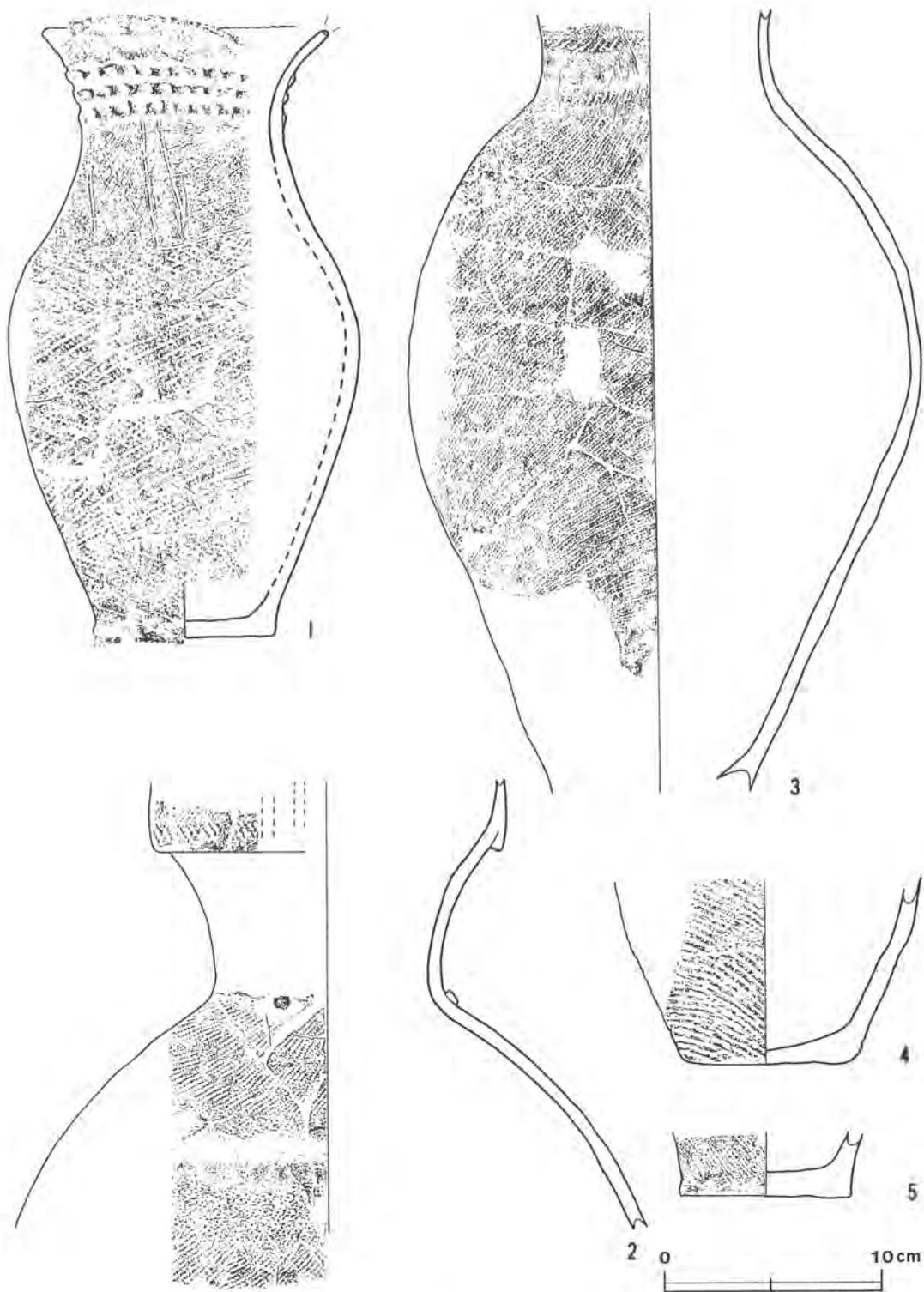
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，焼土ブロック少量。
- 2 明褐色 ローム粒子多量。

第6号住居跡 土層解説

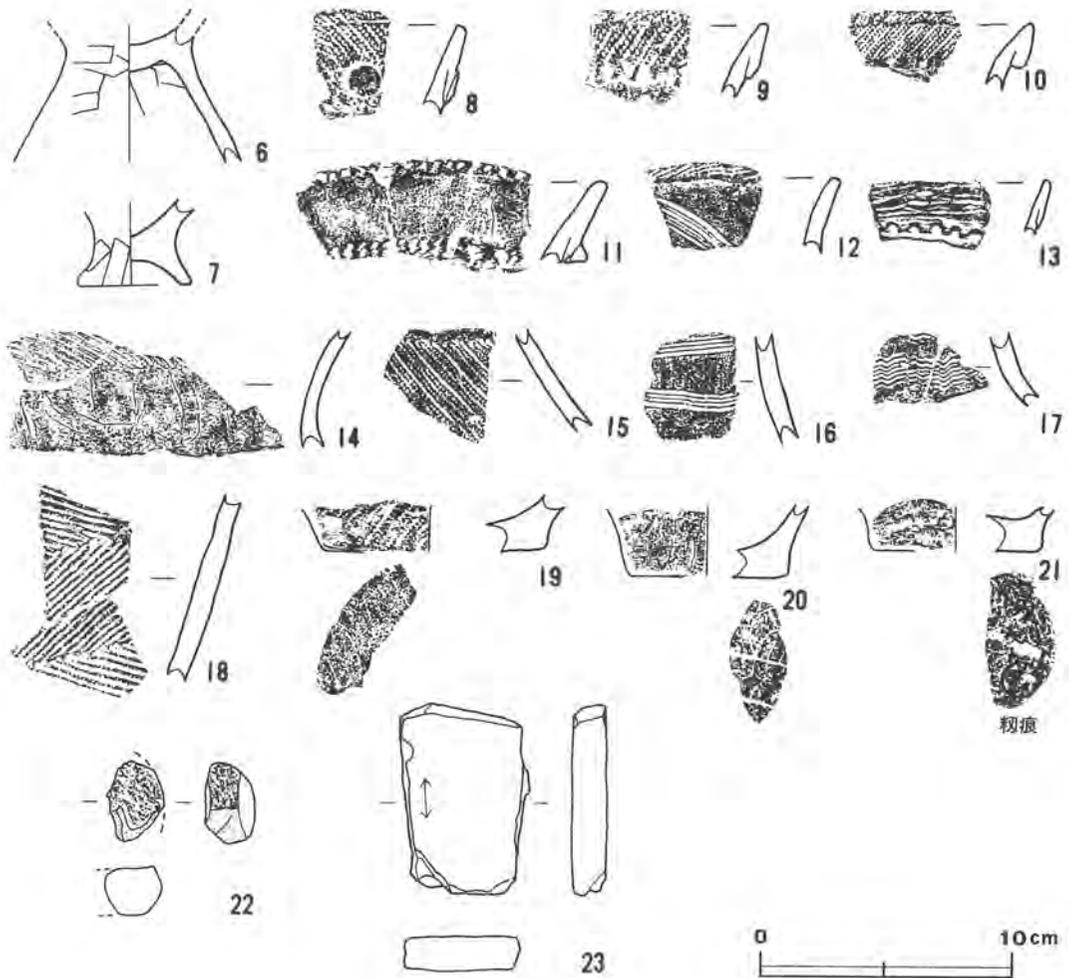
- 1 極暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック極少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子中量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量。
- 7 褐色 ローム粒子多量。
- 8 褐色 ローム粒子多量。
- 9 暗褐色 ローム粒子極少量，焼土粒子微量。
- 10 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量。
- 11 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，ローム小ブロック微量。
- 12 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，焼土ブロック少量。

第118図 第6号住居跡実測図

炉 2か所。炉<sub>1</sub>は北西寄りでP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結ぶ線上にあり，平面形は長径118cm，短径72cmの不整楕円形で床を8cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。炉床一面からアブライト礫細片が出土している。炉<sub>2</sub>はP<sub>1</sub>の南側にあり，平面形は径44cmのほぼ円形で床を4cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。



第119图 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第120図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

覆土 壁際には、ローム粒子を多量に含む褐色土が堆積しているが、南東壁中央部付近はローム小ブロックを含む暗褐色土である。下層は暗褐色土，中層はローム小ブロックを含む黒褐色土，上層は極暗褐色土である。覆土第3・4・7層から土器片が多く出土している。

遺物 1～5は弥生式土器壺である。1の広口壺は十王台式土器の完形で、南コーナーの床面近くから横位で出土している。2の口縁部から胴部は南コーナー付近の床面直上から破片で出土している。3の胴部は、東コーナー付近を中心にして中央部や北コーナーの覆土下層からの破片と接合している。3は覆土第7層が形成される途中で、東コーナー側から投げ込まれたと思われる、破片が住居跡内の広範囲に散乱している。4・5の底部は、4が南東壁際の床面直上から、5はP4付近の覆土下層からそれぞれ出土している。6の台付甕の脚部は中央部の覆土下層から、7の

高坏の脚部は東コーナーの床面近くから出土している。22の紡錘車は覆土中から、23の砥石はP<sub>3</sub>付近の床面近くからそれぞれ出土している。アプライト礫が22点（中3，小19）出土しており総重量は299gである。

所見 本跡は、弥生時代後期後半と思われる。

#### 第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	広口壺 弥生式土器	A 13.4	平底で胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。最大径を胴部上位に持つ。無文の単口縁で下端に3本の押圧隆起線が貼り付けられている。頸部はスリット手法による縦区画充填波状文が施され、1区画は充填格子目文となっている。櫛歯数は4本である。胴部には附加条2種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 灰黄褐色 普通	P 25 100%  内面剥離
		B 28.7			
		C 8.5			
2	広口壺 弥生式土器	B(21.3)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は球形状で口縁部は外反する。胴部最上位はS字状結節文上に「ボタン」状の貼り付けがなされ、その下方に単節縄文が施されている。さらに2段と4段のS字状結節文で区画した無文帯を形成し、その後にヘラ描き沈線による山形文を結節文下に施している。口縁部は縄文施文の複合口縁で、3本1組の棒状浮文が貼られていたと考えられる。頸部は無文である。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 棕色 普通	P 26 50%
3	壺 弥生式土器	B(36.8)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反する。頸部下半無文とし、それ以外は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 棕色 普通	P 27 60% 外面スス付着
4	壺 弥生式土器	B( 8.7)	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 明赤褐色 普通	P 29 5%
		C 8.0			
5	壺 弥生式土器	B( 3.1)	底部片。平底で木葉痕がある。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 棕色 普通	P 30 5%
		C 7.8			
第120図 6	台付 甕 弥生式土器	B( 5.6)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。内・外面ともにヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 黄棕色 普通	P 33 5%  内面炭化物付着
		E( 4.6)			
7	高 坏 弥生式土器	B( 3.4)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。外面ヘラケズリ後ナデ。	砂粒,石英,長石 黄棕色 普通	P 34 40%
		D 4.5			
		E 2.0			

第120図8～21は、第6号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8～13は口縁部片で、8～10は複合口縁で、口縁部から口唇部にかけて附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。11は、口唇部と口縁部下端に縄文原体による押圧が施されている。12は単口縁で櫛描きが施され、口唇部には燃糸文が施されている。13は縄文施文の複合口縁で、口縁下端には棒状工具による刺突文が施されている。14・15は胴部から頸部片で、いずれも頸部下位を無文とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。16・17は頸部片で、16は4本櫛歯による横走文が、17は7本櫛歯の横走波状文が施されている。18は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施され羽状構成をとっている。19～21は底部片で、底面にはいずれも木葉痕がある。19は胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。21は底面に靱痕がある。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第120図22	紡錘車	(3.2)	(2.3)	(2.0)	—	(13.0)	25	覆土中層	D P9

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第120図23	砥石	(7.7)	5.1	1.4	(83.2)	砂岩	床面付近	Q6 破片

## 第7号住居跡（第121図）

**位置** 調査区北東部，C14a<sub>9</sub>区を中心に確認されている。

**重複関係** 本跡の南東壁が，第2号炭焼窯跡に掘り込まれている。

**規模と平面形** 長軸6.50m，短軸5.75mの隅丸不整長方形である。

**主軸方向** N-50°-W

**壁** 壁高15～40cmで，外傾して立ち上がっている。

**床** ほほ平坦で，炉の周辺がよく踏み固められている。

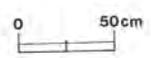
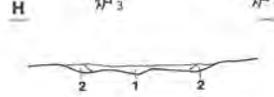
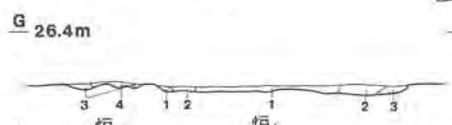
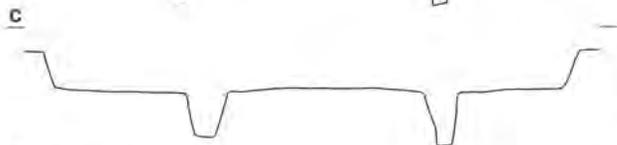
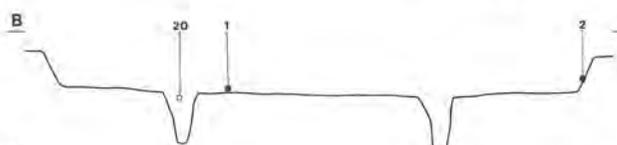
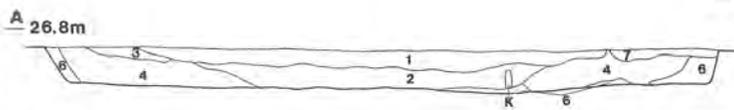
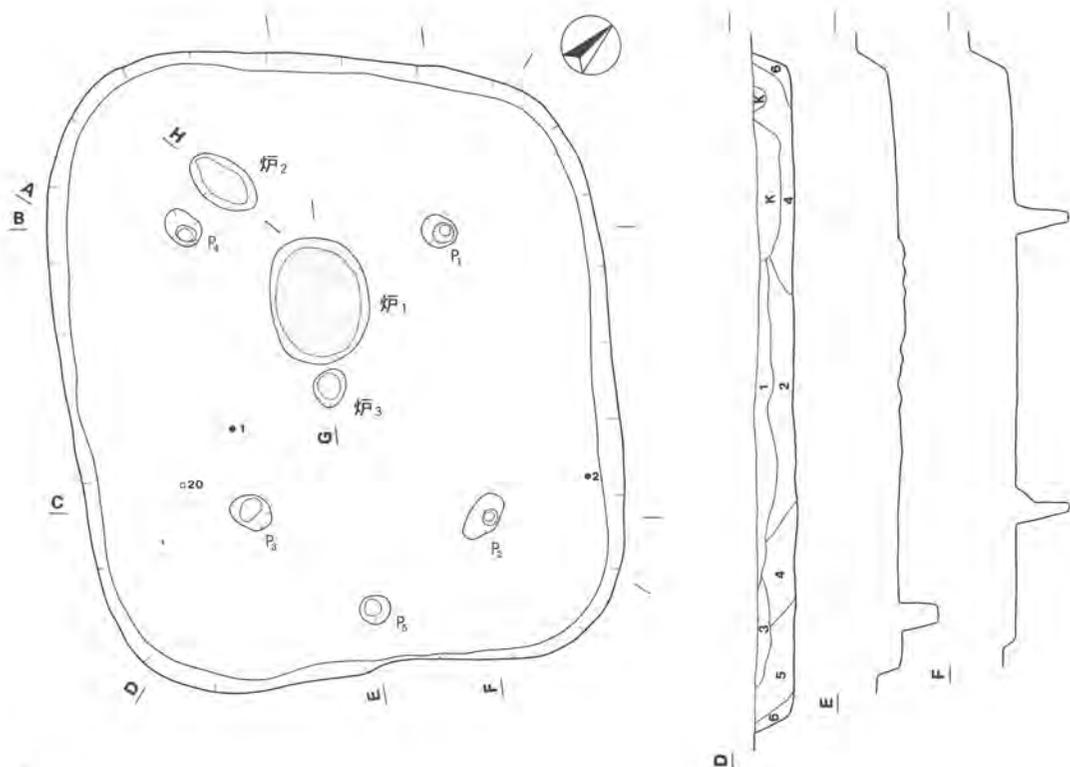
**ピット** 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，長径38～56cm，短径32～36cmの楕円形で深さ52～62cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は，径32cmのほほ円形で深さ42cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

**炉** 3か所。炉<sub>1</sub>は中央からやや北西寄りにあり，平面形は長径136cm，短径104cmの楕円形で床を8cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は，全体が熱を受け赤変硬化している。炉<sub>2</sub>はP<sub>4</sub>のやや北側にあり，平面形は長径80cm，短径48cmの楕円形で床を4cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。炉<sub>3</sub>は炉<sub>1</sub>の南東側で近接しており，平面形は長径42cm，短径34cmの楕円形で床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部が熱を受け赤変硬化している。炉<sub>1</sub>・炉<sub>2</sub>の炉床からアプライト礫細片が出土しているが，炉<sub>3</sub>からは出土していない。

**覆土** 壁際は明褐色土で，さらに焼土粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土が堆積している。中央部は2層からなり，下層は焼土粒子・ローム小ブロックをわずかに含む暗褐色土でこの層から土器片が多く出土している。上層は焼土粒子をわずかに含む黒褐色土で，レンズ状に堆積している。北コーナー付近に攪乱があるが浅く床面までは達していない。

**遺物** 1・2は弥生式土器壺の底部で，1は中央部の覆土下層から，2は東コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。20の敲石は南西壁寄りの床面近くから出土している。アプライト礫が56点（大2，中4，小50）出土しており，総重量は930gである。

**所見** 炉が3か所あるが，規模配列から考えて3か所とも同時にセットで使用されていたと思われる。本跡は，弥生時代後期前半と思われる。



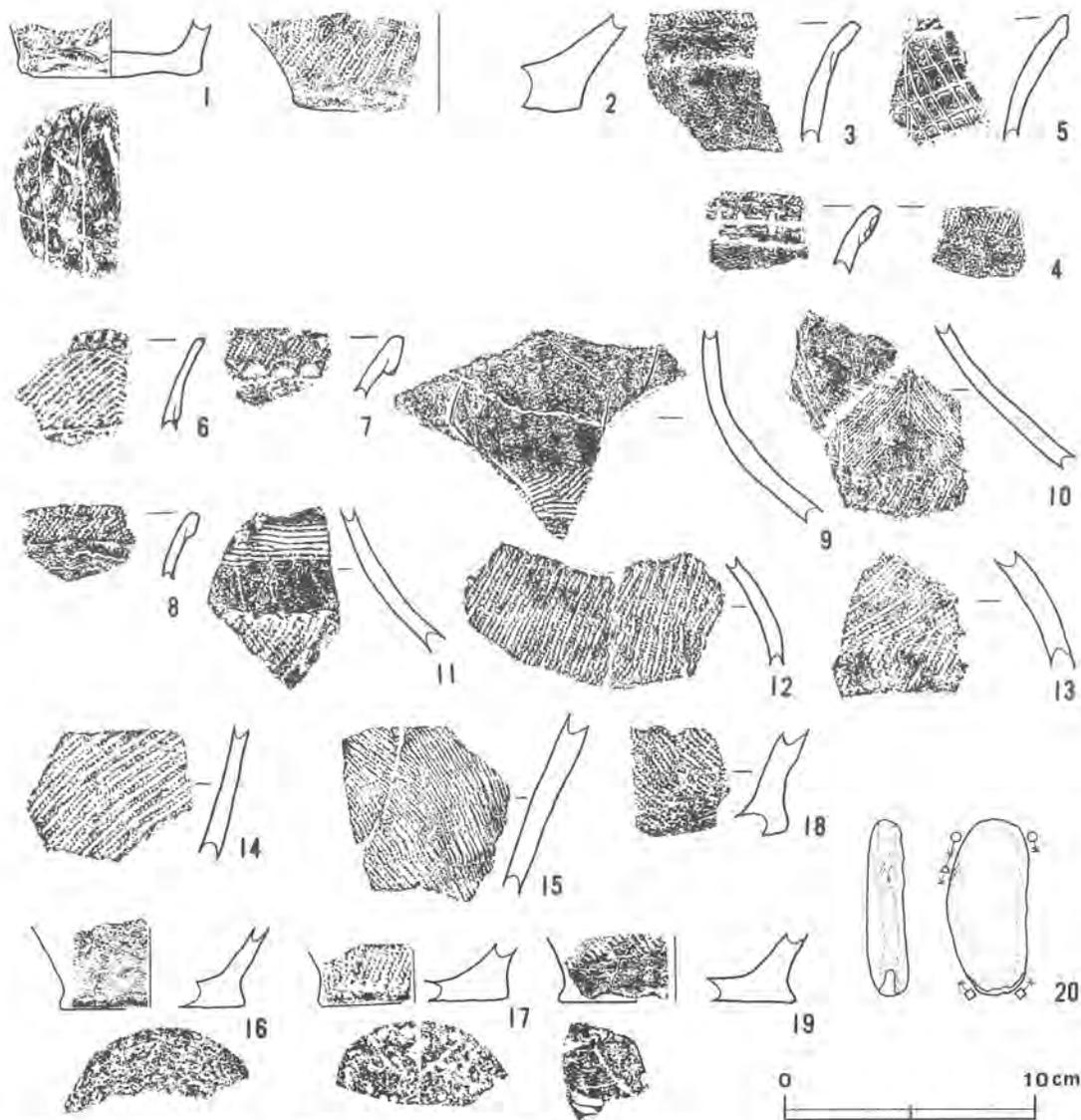
- 第7号住居跡 土層解説
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
  - 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量。
  - 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量。
  - 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量、ローム小ブロック少量。
  - 5 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量、ローム小ブロック少量。
  - 6 明褐色 ローム粒子多量。
  - 7 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。

- 第7号住居跡 炉<sub>1</sub>・炉<sub>3</sub>土層解説
- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土ブロック少量。
  - 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
  - 3 褐色 ローム粒子多量。
  - 4 褐色 焼土粒子少量。

- 第7号住居跡 炉<sub>2</sub>土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
  - 2 褐色 ローム粒子多量。



第121図 第7号住居跡実測図



第122図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	壺 弥生式土器	B( 2.4) C 7.1	底部片。平底で底面には木葉痕がある。胴部には単筋縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にふい黄褐色 普通	P 35 5%
2	壺 弥生式土器	B( 4.0) C[11.4]	底部片。平底。胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア にふい黄褐色 普通	P 36 5%

第122図3～19は、第7号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～8は口縁部片で、3は口唇部に縄文が施されている。4は複合口縁で、口唇部から口縁部内面にかけて縄文が施され、口縁部には隆帯を貼りキザミ目を施している。5はヘラ描きによる格子目文が施されている。6～8は縄文施文の複合口縁で、8の口縁部下位には5本櫛歯による横走波状文が施されている。9～11は胴部から頸部にかけての破片である。9は頸部を無文とし、胴部には単節縄文が施されている。10の胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が、頸部には山形文が施されている。11の胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が、頸部には6本櫛歯による横走文が施されている。12～15は胴部片である。12～14の胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が、15は絡条体による燃糸文が施されている。16～19は底部片で、いずれも胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第122図20	甗石	7.1	3.2	1.6	51.2	砂岩	床面付近	Q8

#### 第8号住居跡（第123図）

位置 調査区北部、B14i1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.40m、短軸4.58mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-46°-W

壁 壁高17～22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周辺がよく踏み固められ、特に炉の南側が硬い。

ピット 7か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径26～34cmのほぼ円形で深さ42～57cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は、径24cmの円形で深さ25cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は、径21～27cmの円形で深さ21～22cmの補助柱穴と思われる。P<sub>2</sub>とP<sub>7</sub>の間の床面下に第5号土器棺墓が構築されている。

炉 中央部にあり、平面形は長径92cm、短径74cmの楕円形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。

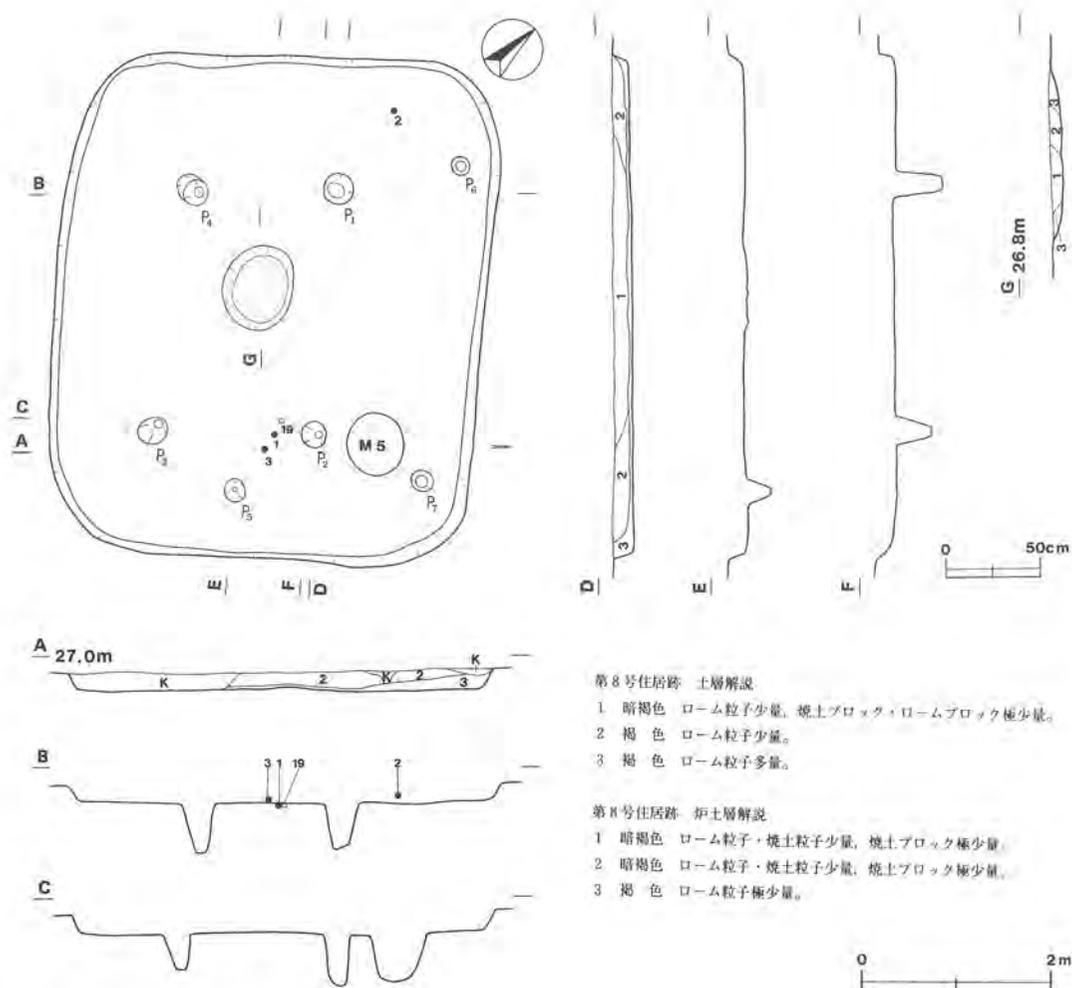
炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。炉床直上からアプライト礫細片が出土している。

覆土 攪乱が数か所あり、特に南コーナー部では床面まで掘り込まれている。壁際から床面にかけて褐色土が薄く堆積している。南東壁側には更に褐色土が厚く堆積しているが、他はローム中ブロック・焼土小ブロックを含む暗褐色土が厚く堆積している。土器片が中層から多く出土している。

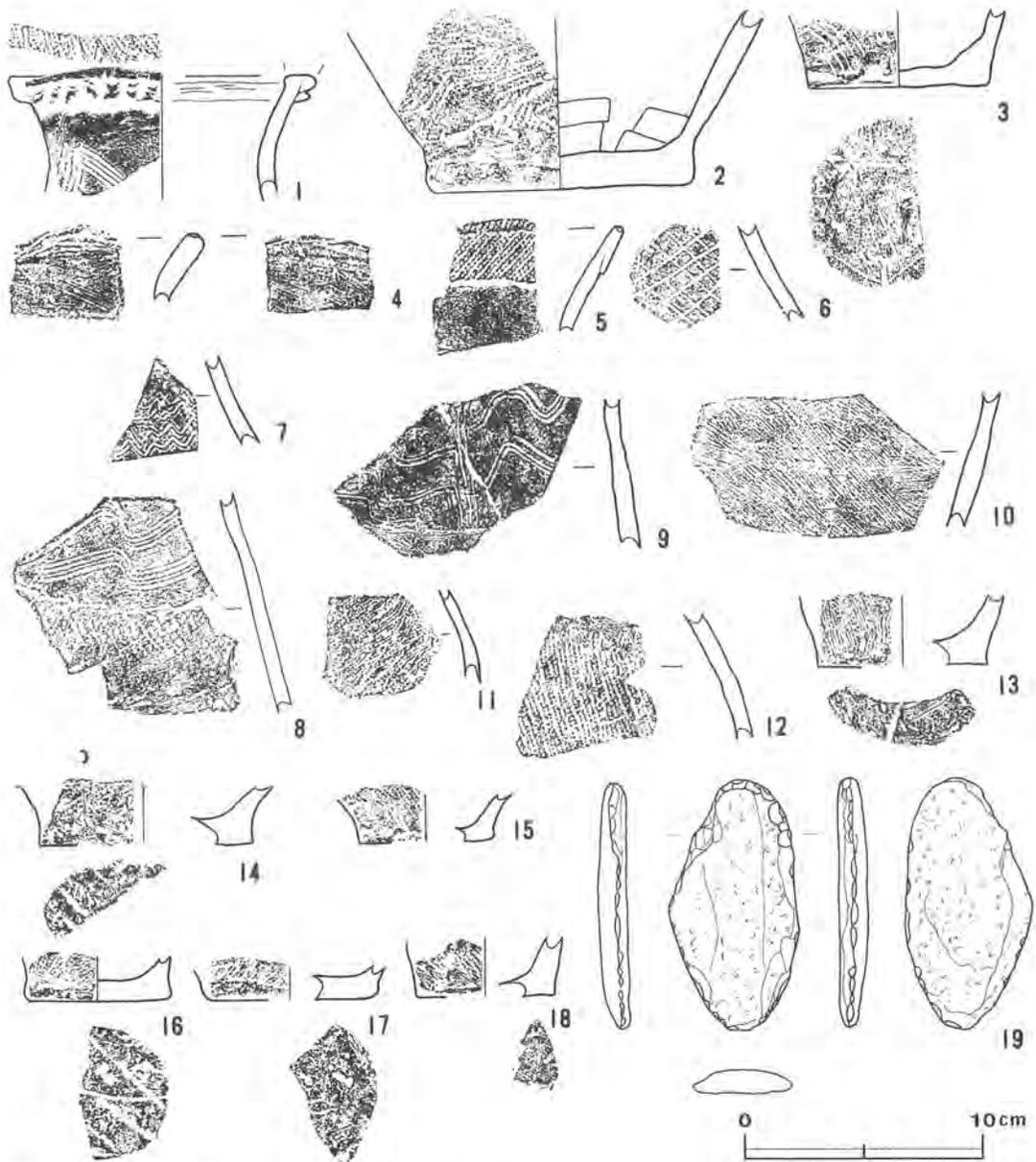
遺物 1～3は弥生式土器壺で、1の口縁部と3の底部はP<sub>5</sub>付近の床面近くから、2の胴部下半から底部は、北コーナー付近の覆土中層からそれぞれ出土している。19の穂摘具はP<sub>5</sub>付近の床

面近くから出土している。アプライト礫が202点（大4，中6，小192）出土しており，総重量は1,519gである。

所見 支柱穴の配置が南西壁側に寄っているが，これは第5号土器棺墓を埋設するために北東壁側を拡張し，支柱穴としてP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>を設けたからと考えられる。第5号土器棺墓はP<sub>2</sub>とP<sub>7</sub>のちょうど中間に位置し，埋設後ロームで張り床していることから考え，本住居跡に伴うと思われる。第5号土器棺墓についての詳細は「4. 土器棺墓」に記述した。本跡は，弥生時代後期前半と思われる。



第123図 第8号住居跡実測図



第124図 第8号住居跡出土遺物実測・拓影図

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	広口壺 弥生式土器	A(13.0) B(5.3)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部は幅が広く、縄文が施されている。複合口縁で隆帯が貼られ、棒状施工具によるキザミ目を施している。頸部には4本横溝による山形文が施されている。	砂粒・石英・長石 スコリア に白い赤褐色 普通	P38 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第124図 2	壺 弥生式土器	B( 7.3) C 11.2	底部から胴部下半にかけての破片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、内面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P 39 10%
3	壺 弥生式土器	B( 3.1) C[ 7.6]	底部片。平底で底面には木葉痕がある。胴部には4本櫛歯の沈線が施されている。	砂粒,石英,長石 にぶい黄橙色 普通	P 40 5%

第124図4～18は、第8号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は口縁部片で、5は縄文で施文された複合口縁である。6・7は頸部片で、6はヘラ描きによる縦区画充填格子目文が、7は5本櫛歯による横走波状文が施されている。8・9は胴部から頸部にかけての破片で、8は胴部に附加条1種(附加2条)の縄文、頸部は4本櫛歯による横走波状文が施されている。10～12は胴部片で、10・11は絡条体による撚糸文が、12は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。13～18は底部片で、いずれも胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、13・14・16・17の底面には木葉痕が、18の底面には布目痕が有る。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第124図19	穂摘具	10.6	5.4	1.2	85.3	ホルンフェルス	床面付近	Q10

### 第9号住居跡(第125図)

位置 調査区中央部、C14a<sub>6</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 本跡のほぼ中央から北西コーナーにかけてが、第5号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.33m、短軸3.28mの隅丸方形である。

主軸方向 N-59°-W

壁 壁高24～27cmで、外傾して立ち上がっている。

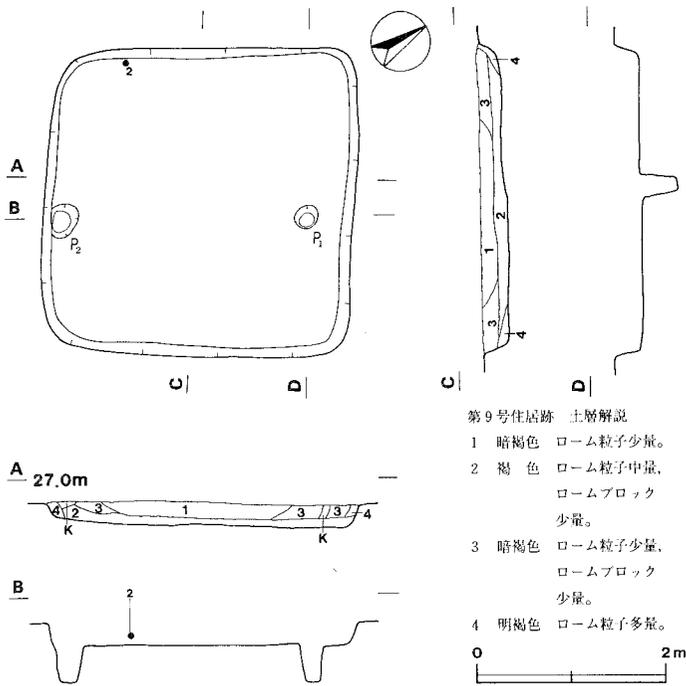
床 平坦で、中央から北側にかけてが踏み固められて硬い。

ピット 2か所。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、長径26～39cm、短径24～30cmの楕円形で深さ40cmの主柱穴である。P<sub>2</sub>は南西壁に接している。

炉 確認されていない。

覆土 壁際には明褐色土が堆積し、床面にはローム小・中ブロックを含む褐色土が薄く広がり、上層には暗褐色土が厚く堆積している。

遺物 1・2は弥生式土器壺で、1の口縁部は覆土中から、2の底部は西コーナー付近の壁際から出土している。アプライト礫が32点(中4、小28)出土しており、総重量は454gである。



第9号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック少量。
- 4 明褐色 ローム粒子多量。

0 2m

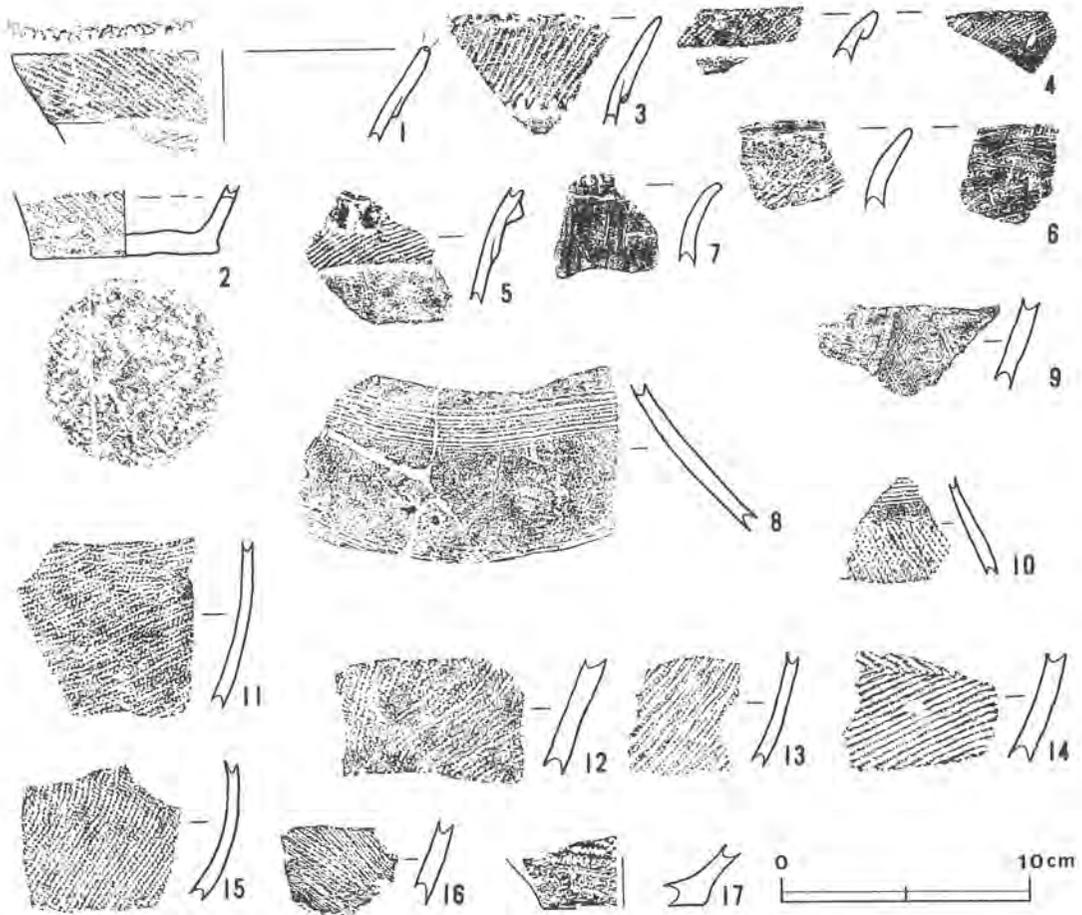
所見 炉は確認されなかったが、床面は踏み固められており住居跡として扱うことにした。本跡は、弥生時代後期と思われる。

第125図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	広口壺 弥生式土器	A(16.7) B(3.7)	口縁部片。口縁部は外傾する。複合口縁で、口縁部と頸部に附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。口唇部にも縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい黄橙色 普通	P41 5%
2	壺 弥生式土器	B(2.7) C 7.6	底部片。平底で底面には木葉痕がある。胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。胴部内面に輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい赤橙色 普通	P42 10%

第126図3～17は、第9号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～7は口縁部片で、3～5は附加条1種(附加2条)の縄文施文の複合口縁である。3の口縁部下端には縄文原体による押圧が施されている。5の口縁部には瘤が貼られている。6は撚糸文が施され、内面にはハケ目痕がある。8・9は頸部片で、8は櫛歯状工具による横走文、9は格子目文が施されている。10は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文、頸部は櫛歯状工具による横走文が施されている。11～14は胴部片で、いずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。15の胴部片は単節縄文、16の胴部片は撚糸文が施されている。17は底部片で、胴部は単節縄文が施されている。



第126図 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡（第127図）

位置 調査区北東部，C14cs区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.64m，短軸3.97mの隅丸長方形である。

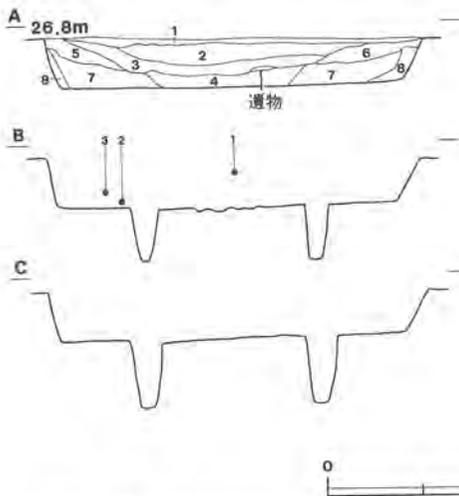
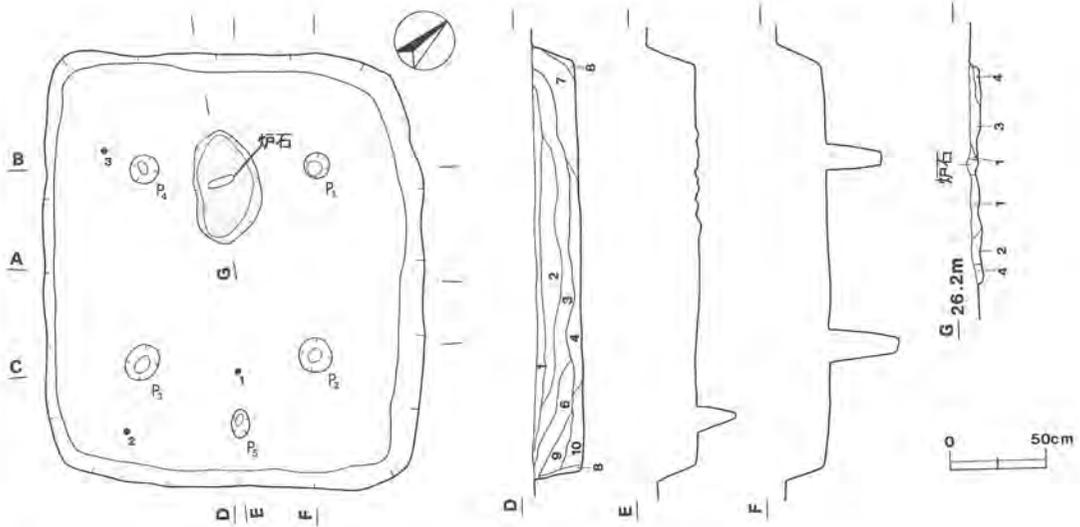
主軸方向 N-50°-W

壁 壁高42~58cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，炉の南東側とP<sub>5</sub>の北西側がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，長径28~36cmの円形で深さ55~72cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>南東壁側に傾斜しており，長径32cm，短径20cmの楕円形で深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央から北西寄りP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の間にあり，平面形は長径122cm，短径69cmの楕円形で床を4cm程掘り込んだ地床炉である。炉床中央からやや北西寄りに炉石があり，炉の長径に対してほぼ直



第10号住居跡 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量、焼土粒子極少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
- 5 暗褐色 ローム粒子中量。
- 6 褐色 ローム粒子少量。
- 7 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック極少量。
- 8 褐色 ローム粒子多量。
- 9 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量。
- 10 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量。

第10号住居跡 炉土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
- 4 明褐色 ローム粒子多量。

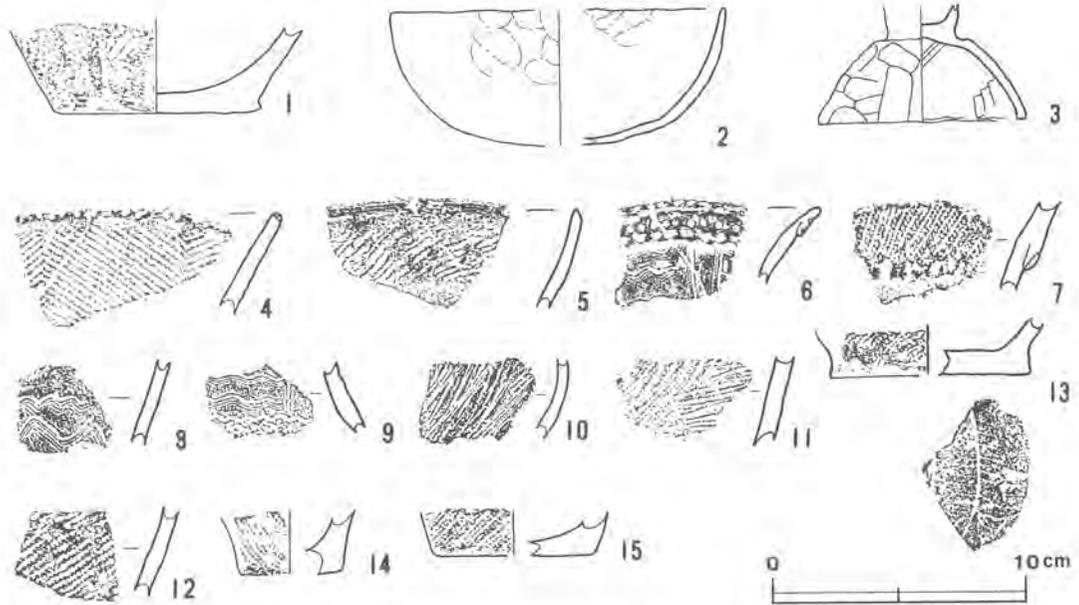
第127図 第10号住居跡実測図

交して置かれている。炉石の下には灰が確認されている。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際には薄く褐色土が堆積し、更にローム中ブロックをわずかに含む褐色土が流れ込んでいる。中央部下層は焼土粒子・焼土小ブロックを少量含む暗褐色土で、中層にはローム小ブロックと焼土粒子を含む暗褐色土が、上層にはローム小ブロックを含む暗褐色土がそれぞれ堆積している。第7層から土器片が多く出土している。

遺物 1の弥生式土器壺の底部は、P<sub>5</sub>付近の覆土中層から出土している。2・3は高坏で、2は南コーナー付近、3は西コーナー付近の覆土中層から出土している。アプライト礫が10点(小10)出土しており、総重量は58gである。

所見 炉石と炉床の間に灰が堆積していることから、炉石は最初から置かれていたのではなく途中から使用したか、使用時に移動させていると考えられる。本跡は、弥生時代後期後半と思われる。



第128図 第10号住居跡出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	壺 弥生式土器	B( 3.3) C 8.3	底部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、単節縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい黄橙色 普通	P43 5%
2	高 坏 弥生式土器	A[13.2] B( 5.5)	坏部片。坏部は内傾して立ち上がる。内・外面とも指ナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 褐色 普通	P44 10% 外面スス附着
3	高 坏 弥生式土器	B( 4.7) D 8.1 E 4.0	胴部片。胴部はやや内傾気味の「ハ」の字状である。内・外面ともにヘラナデされている。上端にヘラケズリによる稜を持つ。	砂粒、石英、長石 にぶい黄橙色 普通	P45 50%

第128図4～15は、第10号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～7は口縁部片である。4は附加条1種（附加2条）の羽状構成をとる縄文が施され、口唇部は縄文原体により押圧されている。5は太めの撚糸文が施されている。6は、口縁部には竹管状工具による2段の刺突文が、下端には縦区画充填波状文が施されている。口唇部は縄文原体により押圧されている。7は、附加条1種（附加2条）の縄文が施され、下端は指頭により押圧されている。8の頸部上半は5本櫛歯による横走波状文が施されている。9は胴部から頸部にかけての破片で、胴部と頸部を結節文で区画し、頸部は3本櫛歯による縦区画充填波状文が施されている。10～12は胴部片

で、10は絡条体による撚糸文が、11・12はいずれも附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。13～15は底部片で、13は底面に木葉痕がある。

### 第11号住居跡（第129図）

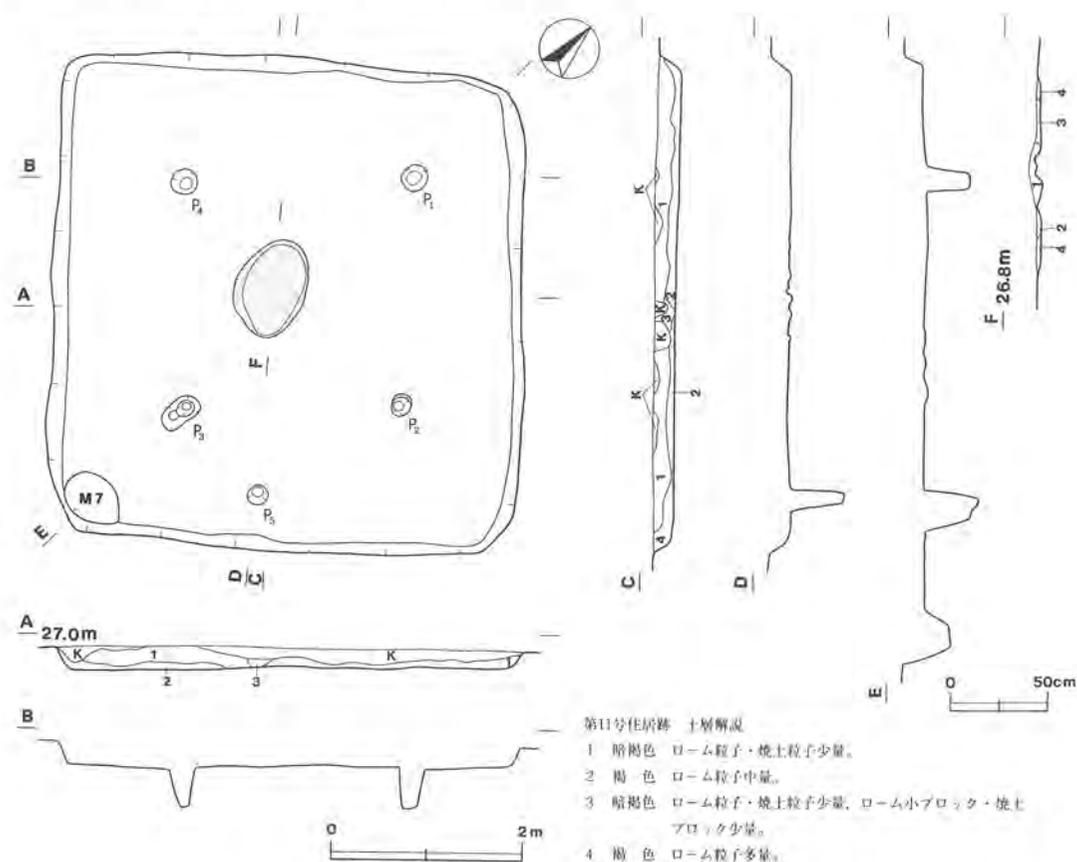
位置 調査区中央部、C14c4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.30m、短軸4.95mの方形である。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高12～26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 凹凸で、炉とP<sub>5</sub>の付近がよく踏み固められている。



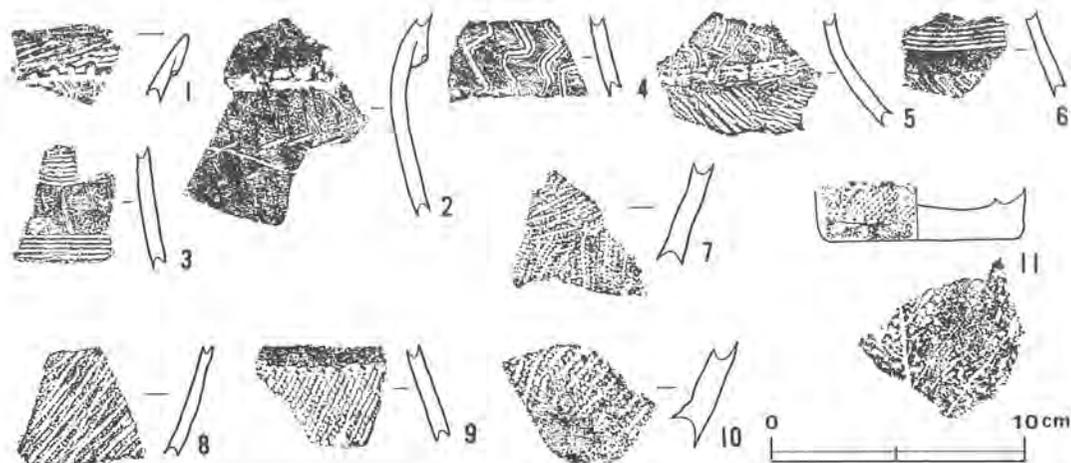
第129図 第11号住居跡実測図

ピット 5か所。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は径20～30cmの円形、P<sub>3</sub>は長径44cm、短径26cmの楕円形で、深さ44～59cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>3</sub>は床面から49cm下がった位置に段を持つ。P<sub>5</sub>は南東壁側に傾斜し、径22cmの円形で深さ60cmの出入口施設に伴うピットと思われる。炉 中央にあり、平面形は長径108cm、短径76cmの楕円形で床を8cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 北東壁付近を除く壁際から床面全体に褐色土が厚めに堆積し、その上部から北東壁付近の床面にかけて、ローム小ブロック、焼土粒子、焼土ブロックを含む暗褐色土が流れ込んでいる。

遺物 南コーナー部から弥生式土器壺が出土しているが、第7号土器棺墓として扱うことにした。弥生式土器片が覆土中から63点出土しているが接合できない。アブライト礫が4点(小4)出土しており、総重量は24gである。

所見 第7号土器棺墓が、壁際の床を掘り込んで構築されている。遺構確認時にこの位置での土坑の重複はなく、住居跡に伴うものと考えられる。第7号土器棺墓についての詳細は「4. 土器棺墓」で記述した。本跡は、弥生時代後期後半と思われる。



第130図 第11号住居跡出土遺物拓影図

第130図1～11は、第11号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は縄文施文の複合口縁で、下端には縄文原体による押圧が施されている。2は頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部下端にはキザミ目が施されている。3・4は頸部片で、3は櫛歯状工具による横走文、4は縦位の波状文が施されている。5・6は胴部から頸部にかけての破片である。5の頸部は3本櫛歯による縦位の波状文、胴部には撚糸文を施している。6は頸部には櫛歯状工具による横走文、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。7～10は胴部片でいずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。11の底部片は、底面に木葉痕がある。

第12号住居跡（第131図）

位置 調査区中央部，C14d<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.95m，短軸5.68mの長方形である。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高20~30cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，炉の南東側とP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>周辺がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，径23~50cmの円形で深さ54~60cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は南東壁側に傾斜し，長径42cm，短径36cmの楕円形で深さ52cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南東壁中央部に接してあり，平面形は長径104cm，短径60cmの楕円形で深さ12cmである。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がるが，南東壁は住居跡の壁と一体化している。

炉 2か所。炉<sub>1</sub>はほぼ中央にあり，平面形は長径198cm，短径70cmの不定形で床を8cm程掘り込んだ地床炉である。炉床の北西側にアプライト礫細片が出土している。炉<sub>2</sub>はP<sub>4</sub>の北西側にあり平面形は長径58cm，短径48cmの楕円形で床を4cmほど掘り込んだ地床炉である。いずれも炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

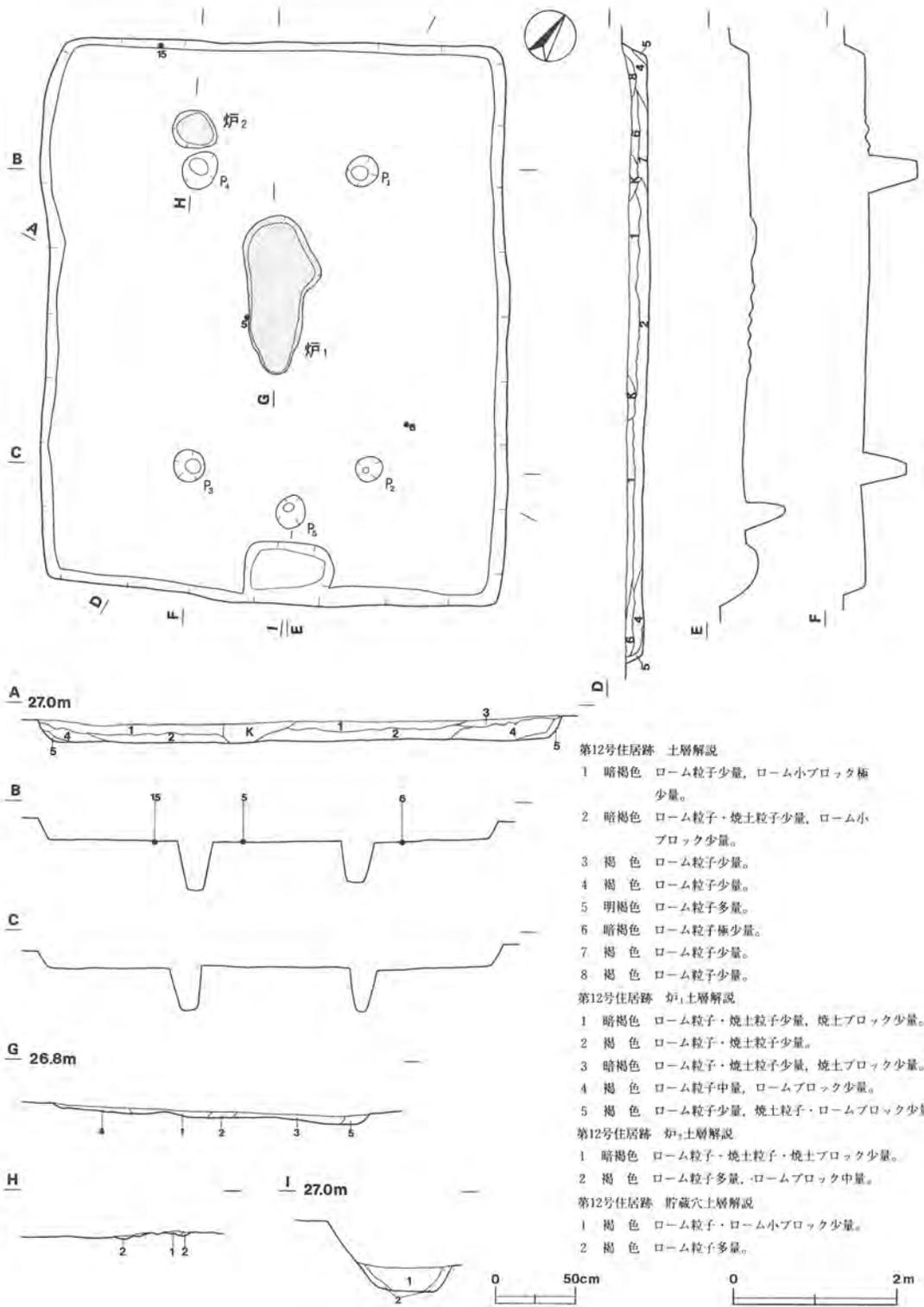
覆土 各壁際には褐色土・明褐色土が堆積し，中央部にはローム小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。土器片が覆土中層から多く出土している。

遺物 1~3は弥生式土器壺の底部で，1は北東壁寄り，2は中央部の覆土下層から出土している。4は小形壺の胴部から底部で覆土中から出土している。アプライト礫が59点（大4，中3，小52）出土しており，総重量は955gである。

所見 炉<sub>2</sub>はP<sub>4</sub>のすぐ脇にあり，炉<sub>1</sub>と違って炉床からアプライト礫細片が出土しておらず，炉<sub>1</sub>と炉<sub>2</sub>とでは使用目的に違いがあると考えられる。本跡は，弥生時代後期前半と思われる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	壺 弥生式土器	B(2.5) C[7.4]	底部片。平底で底面には木葉痕がある。胴部は外傾して立ち上がり，附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒，石英，長石 バミス にぶい褐色 普通	P46 5% 二次焼成
2	壺 弥生式土器	B(2.3) C[7.6]	底部片。平底で底面には木葉痕がある。胴部は外傾して立ち上がり，附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒，石英，長石 バミス にぶい褐色 普通	P47 5%
3	壺 弥生式土器	B(4.8) C 9.8	底部片。平底で張り出しを持ち，底面には布目痕がある。胴部は外傾して立ち上がり，附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア 橙色 普通	P65 5% 内面炭化物附着
4	小形壺 弥生式土器	B(3.6) C 4.4	底部から胴下半部にかけての破片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部に絡糸体による燃糸文が施されている。胴部内面に指頭圧痕がある。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア にぶい褐色 普通	P48 10%



第12号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量。
- 6 暗褐色 ローム粒子極少量。
- 7 褐色 ローム粒子少量。
- 8 褐色 ローム粒子少量。

第12号住居跡 炉1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土ブロック少量。
- 4 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量。
- 5 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・ロームブロック少量。

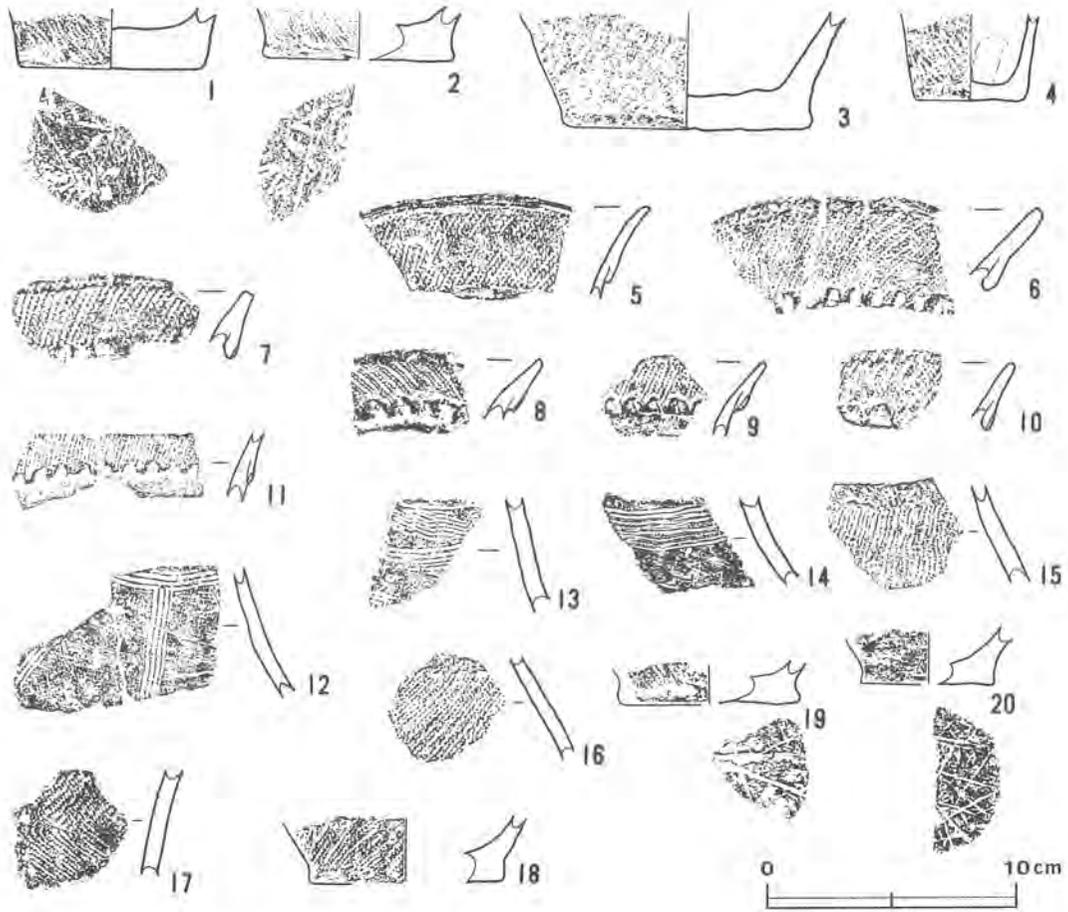
第12号住居跡 炉2土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量。

第12号住居跡 貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量。

第131図 第12号住居跡実測図



第132図 第12号住居跡出土遺物実測・拓影図

第132図 5～20は、第12号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～11は口縁部片で、いずれも縄文施文の複合口縁である。12～14は頸部片で、12は3本櫛歯による縦区画をし、横走文が施されている。13は、5本櫛歯による横走文と波状文が施されている。15と16は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。17の胴部片は、単節縄文と附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。18～20の底部片は、いずれも底面に木葉痕がある。

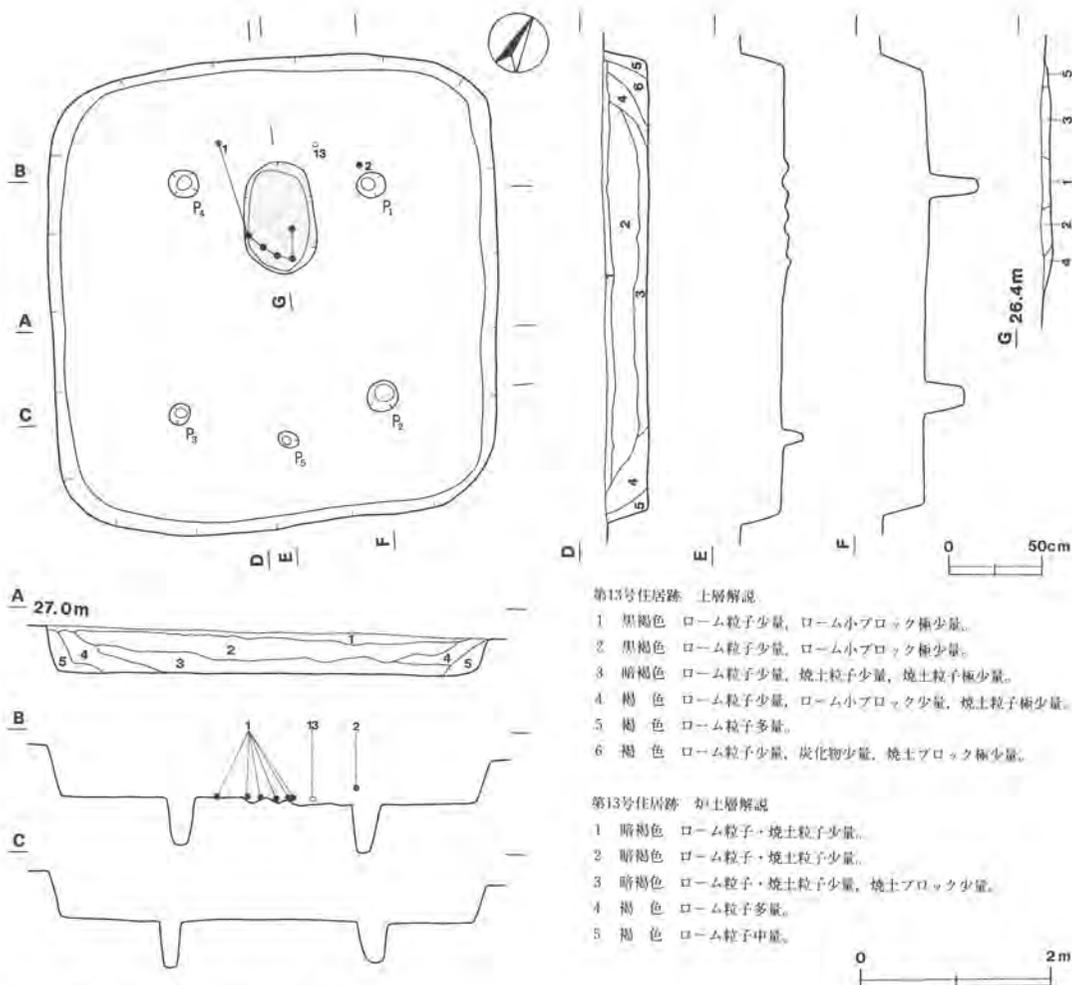
第13号住居跡（第133図）

位置 調査区東部、C14e6区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.00m、短軸4.74mの隅丸方形である。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高40～55cmで、外傾して立ち上がっている。



第133図 第13号住居跡実測図

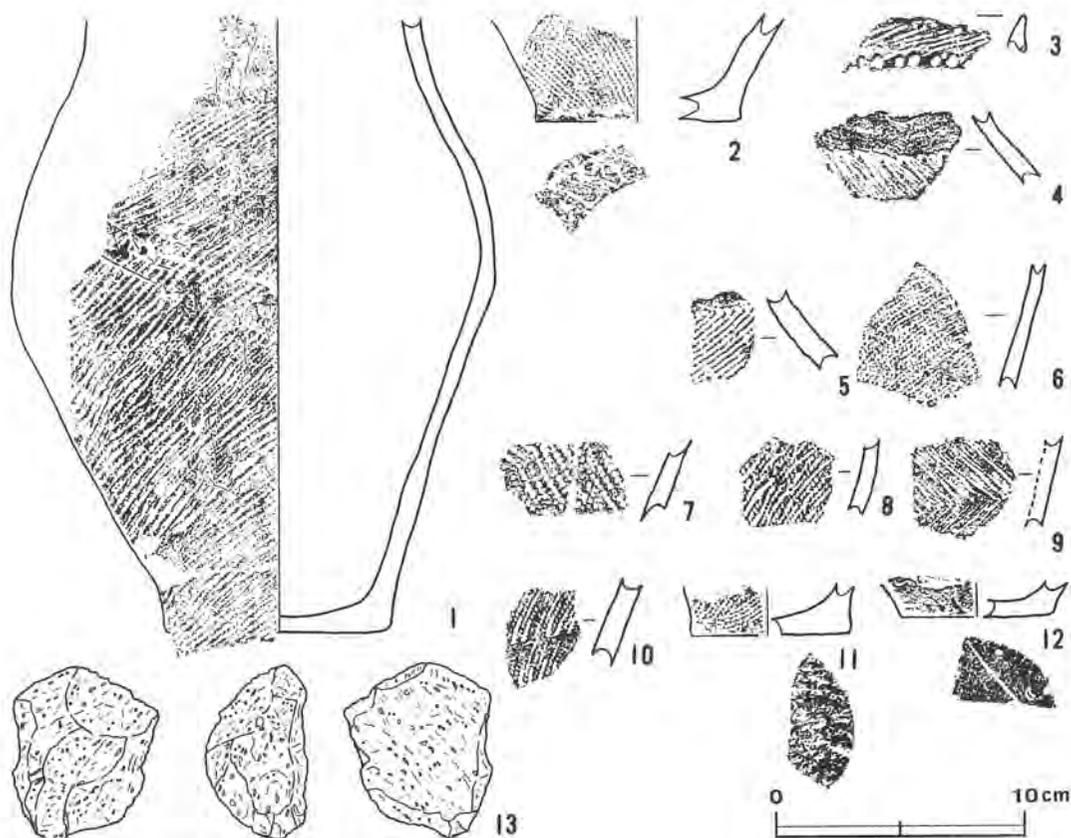
床 平坦で、炉の周辺がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径24～32cmの円形で、深さ45～54cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>4</sub>内の覆土中から炭化材がわずかに出ている。P<sub>5</sub>は、長径24cm、短径18cmの楕円形で深さ22cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央からやや北西寄りでP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の間にあり、平面形は長径122cm、短径74cmの楕円形で床を8cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 各壁際には褐色土が堆積し、中央部は3層からなり床面近くはローム小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土で、その上にはローム小ブロックを含む黒褐色土が厚く堆積している。遺物は土器片が第3層の暗褐色土層から多く出土している。

遺物 1・2は弥生式土器壺で、1の頸部下半から底部は中央部付近の床面直上から破片で、2の底部片は北コーナー付近の覆土中層から出土している。13の軽石は北西壁寄りの覆土下層から



第134図 第13号住居跡出土遺物実測・拓影図

出土している。アブライト礫が3点(小3)出土しており、総重量は19gである。

所見 本跡は、弥生時代後期後半と思われる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第134図 1	壺 弥生式土器	B 24.7 C 9.1	底部から頸部下半にかけての破片。平底で胴部は外傾して立ち上がり、中位から内彎する。頸部は外反して立ち上がり、無文帯とする。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアにぶい赤褐色普通	P49 70% 二次焼成 内・外面炭化物付着
2	壺 弥生式土器	B( 4.3) C[ 8.2]	底部片。平底で底面には木葉痕がある。胴部は外傾して立ち上がり、単筋縄文が施されている。	砂粒、石英、長石雲母、スコリア 橙色普通	P50 5%

第134図3～12は、第13号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は縄文施文の複合口縁で、口縁部下端には縄文原体による押圧が施されている。4・5は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。6～10は胴部片で、いずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施され、9は羽状構成をとる。11・12の底部片は、どちらも底面に木葉痕が有る。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第134図13	軽石	7.0	5.9	4.0	60.1	流紋岩	覆土下層	Q11

### 第14号住居跡（第135図）

位置 調査区中央部，C14f4区を中心に確認されている。

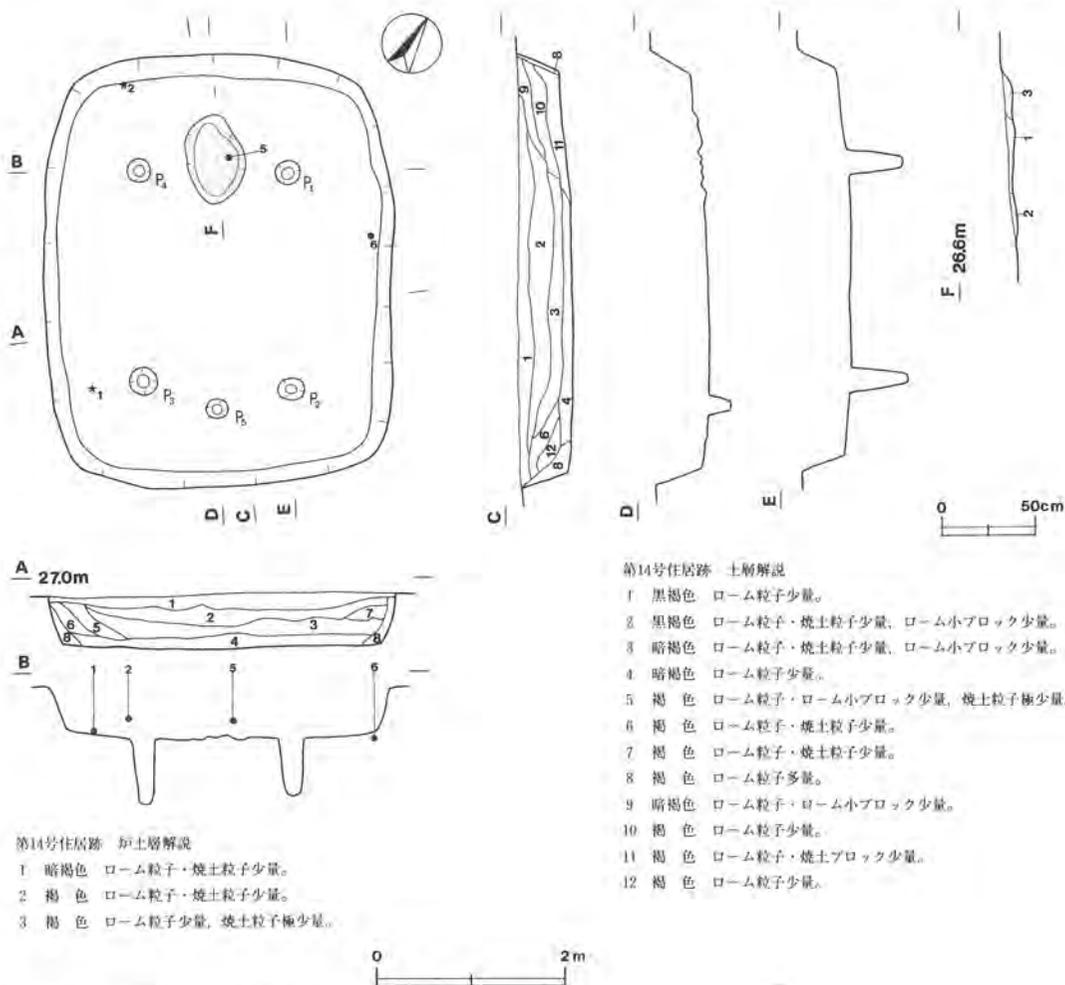
規模と平面形 長軸4.63m，短軸3.67mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高40～50cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，中央部がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径26～30cmの円形で，深さ46～73cmの支柱穴である。支柱穴を結ん



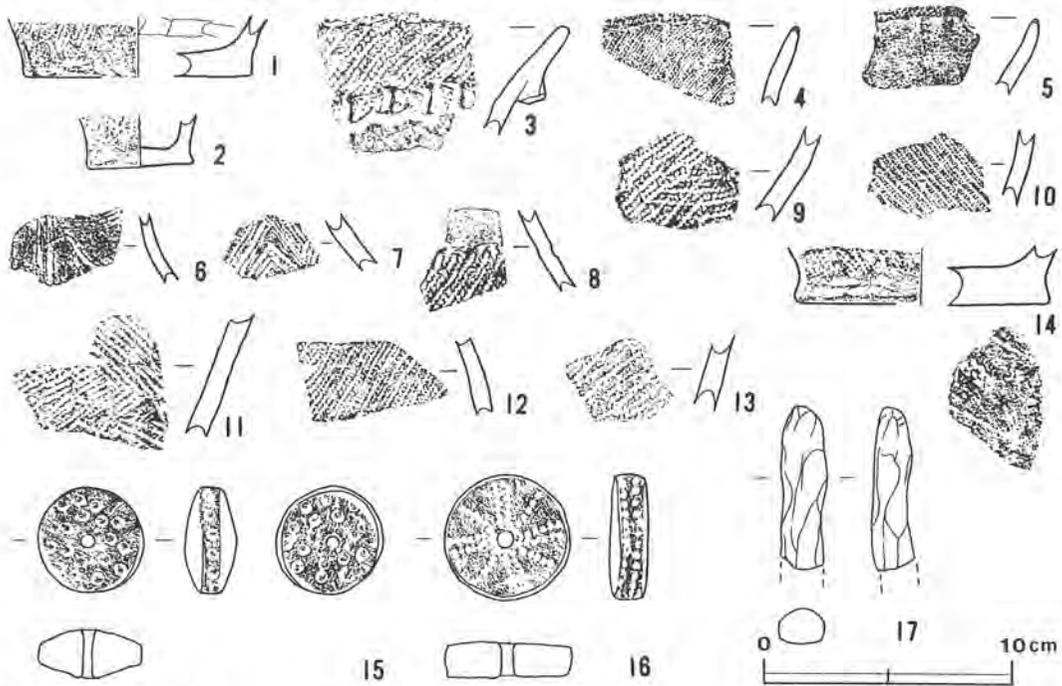
第135図 第14号住居跡実測図

だ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は、径20cmの円形で深さ28cmの出入口施設に伴うピットと思われる。  
 炉 中央から北西寄りでP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の中間にあり、平面形は長径94cm、短径62cmの楕円形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 各壁際には褐色土が堆積し、その上に流れ込みと思われる焼土粒子・焼土小ブロックを含む薄い層がある。中央部は4層からなり、第3・4層が暗褐色土で第2・3層はローム小ブロックと焼土粒子を含んでいる。土器片が中・下層から多く出土している。

遺物 1・2は弥生式土器壺の底部で、1は北東壁中央部付近の床面直上から、2の小形壺の底部は炉付近の覆土中層から出土している。15・16の紡錘車は炉の覆土中から、17の棒状土製品は南コーナー部の覆土中層から出土している。アプライト礫が5点(小5)出土しており、総重量は40gである。

所見 本跡は、弥生時代後期後半と思われる。



第136図 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	壺 弥生式土器	B(2.5) C(9.2)	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P51 5% 内面炭化物付着
2	壺 弥生式土器	B(2.6) C 4.4	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 赤褐色 普通	P52 5%

第136図3～14は、第14号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～5は口縁部片である。3は縄文施文の複合口縁で、口縁部下端にはヘラ状工具による削りを施して突出部を構成している。4は附加条1種（附加1条）の縄文が施された単口縁である。5は口唇部に縄文が施され、口縁部は無文である。6・7は頸部片で、6は楕状工具による縦区画をし、さらに横走文・波状文が、7は山形文が施されている。8は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9～13は胴部片で、9～12は附加条1種（附加2条）の縄文、13は絡条体による単節縄文が施されている。14の底部片は、底面に木葉痕が有る。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第136図15	紡錘車	4.3	4.2	2.0	6.0	34.1	100	炉覆土中	D P 10
16	紡錘車	5.1	5.1	1.5	7.0	46.6	100	炉覆土中	D P 11
17	棒状土製品	(6.6)	1.8	1.8	—	(21.2)	—	覆土中層	D P 12

### 第15号住居跡（第137図）

位置 調査区中央部，C14f<sub>1</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.46mの、短軸4.96mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高55～61cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部がよく踏み固められている。

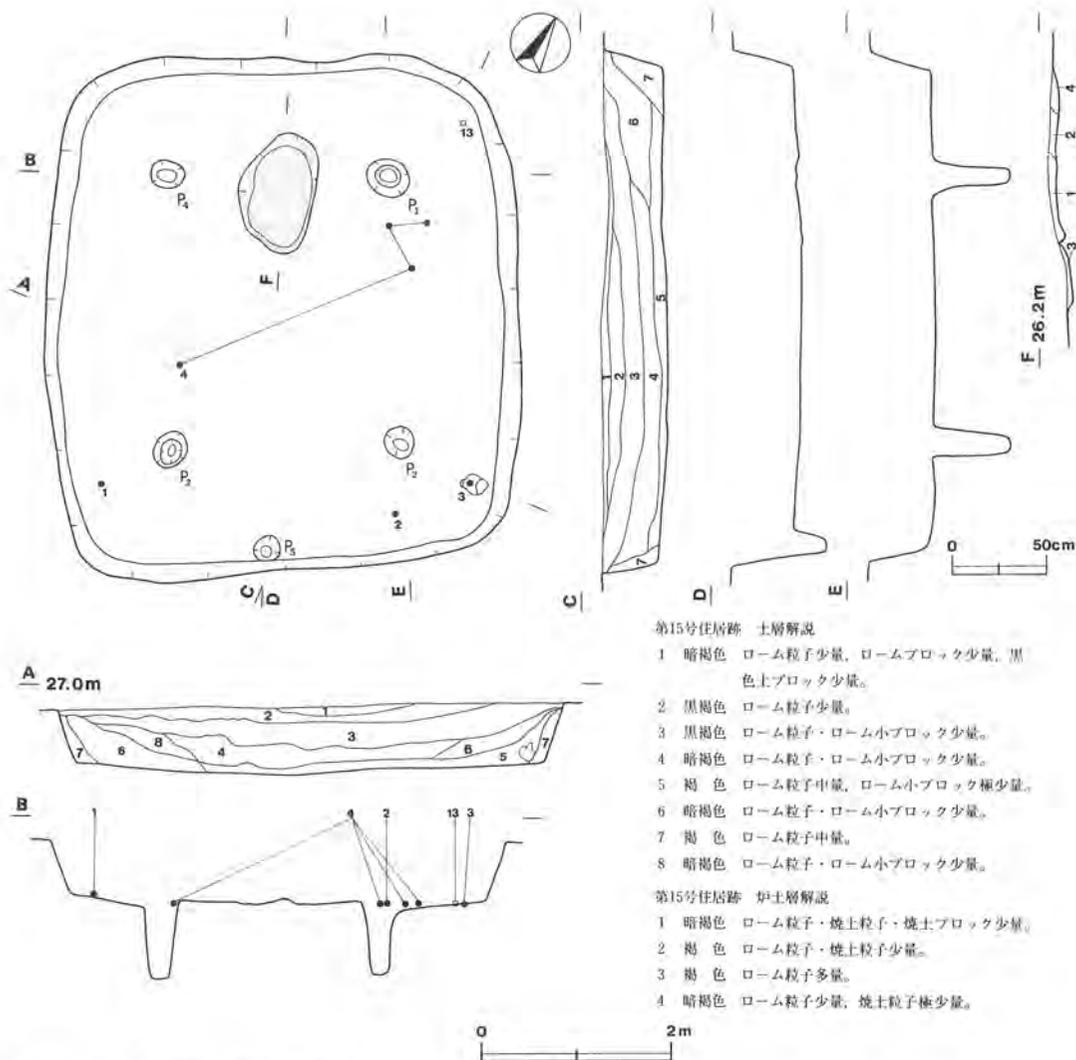
ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径32～48cm，短径28～38cmの楕円形で、深さ81～88cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は、径30cmの円形で深さ36cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央から北西寄りでP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の中間にあり、平面形は長径132cm，短径82cmの不整楕円形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 各壁際には褐色土が堆積し、中央部は5層からなり第5層は褐色土で、第4層は暗褐色土、第2・3層は黒褐色土で、第3・4・5層はローム小ブロックを含んでいる。第1層はローム小ブロックと黒色土ブロックを含む暗褐色土である。土器片が第4・5層から多く出土している。

遺物 3・4は弥生式土器台付甕で、3は東コーナー壁際の床面直上から斜位で、4は北東壁寄りの床面直上から破片で出土している。1・2は壺で、1の口縁部から頸部は南コーナー部の覆土下層から破片で、2の底部は東コーナー付近の床面直上からそれぞれ出土している。13の敲石は北コーナー部の床面直上から出土している。アプライト礫が19点（中3，小16）出土しており、総重量は241gである。

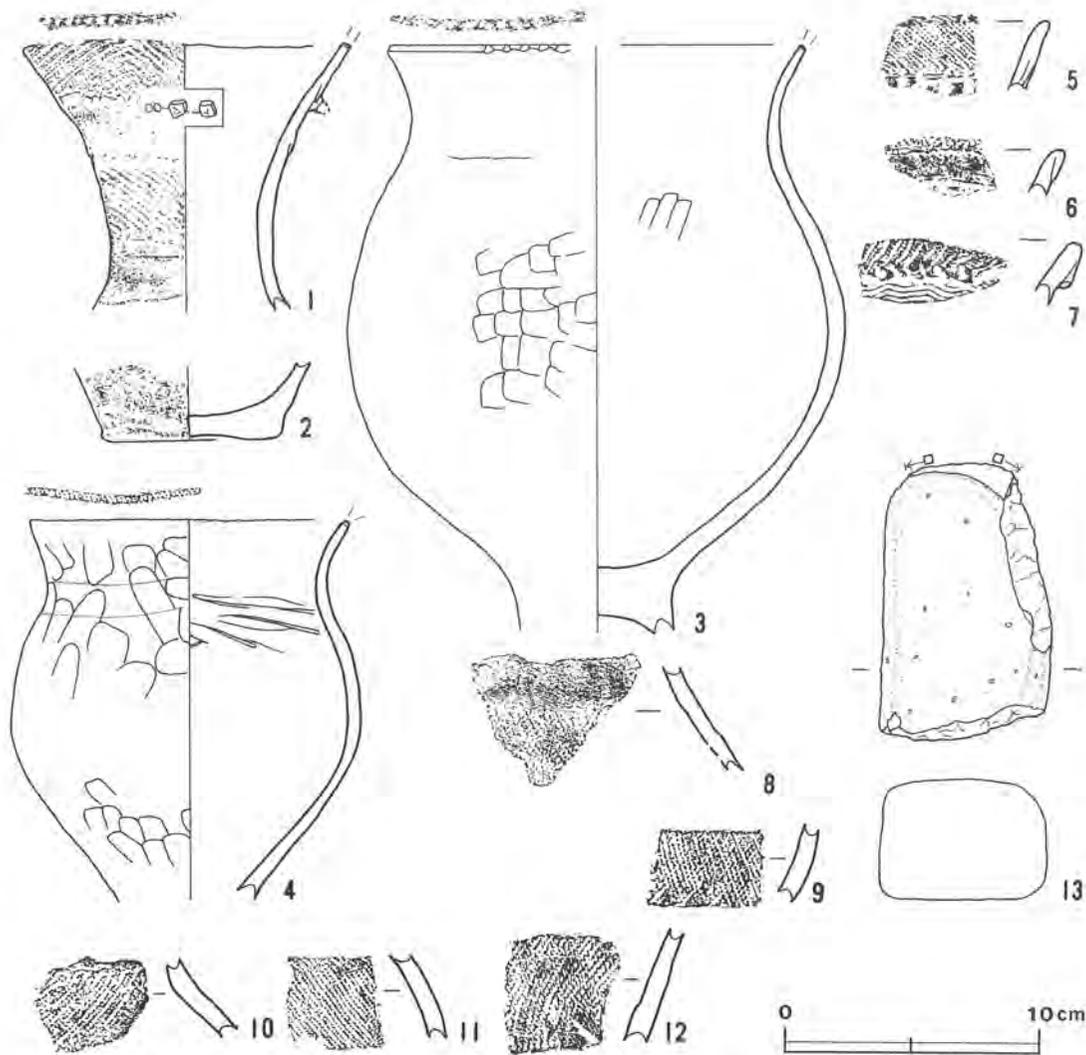
所見 本跡は、弥生時代後期後半と思われる。



第137図 第15号住居跡実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	広口壺 弥生式土器	A 7.2 B(10.9)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反する。縄文施文の複合口縁で、それぞれ下端には縄文原体による押圧が施され、さらに1段目下端には2個1組の瘤が6単位貼られている。口唇部・口縁部1段目・頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、口縁部1段目は羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアに多い褐色普通	P53 15%  内面炭化物付着
2	壺 弥生式土器	B(3.0) C 7.4	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアに多い褐色普通	P54 10%  二次焼成
3	台付甕 弥生式土器	A[16.8] B(23.8) E(0.8)	脚部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。頸部から口縁部は外反する。口唇部には指頭圧痕が施されている。胴部の内・外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石雲母、スコリアに多い褐色普通	P56 85%  二次焼成 外面スス付着



第138図 第15号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第138図 4	台付甕 弥生式土器	A 12.8 B (15.3)	脚部から底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり最大径を上位に持つ。頸部から口縁部は外反する。口唇部には縄文が施されている。頸部の内・外面と胴部の外面はヘラナデされている。	砂粒、スコリア にふい橙色 普通	P57 70% 外面スス付着

第138図5～12は、第15号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～7は口縁部片で、6は口唇部に縄文が施された複合口縁である。5と7の口縁部下端には、縄文原体による押圧がなされ、頸部には横走波状文が施されている。8は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には単節縄文が施されている。9～12は胴部片で、9～11は附加条1種（附加2条）の縄文、12は単節縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第138図13	蔽石	(11.2)	6.6	4.8	(568.4)	緑色凝灰岩	床面直上	Q12 破片

### 第16号住居跡（第139図）

位置 調査区南部，D14a2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.59m，短軸5.17mの隅丸方形である。

主軸方向 N-42°-W

壁 壁高30～41cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，P<sub>5</sub>周辺は一段高くなっておりよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径32～36cmの円形で深さ69～74cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は南東壁側にやや傾斜し，径32cmの円形で深さ26cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

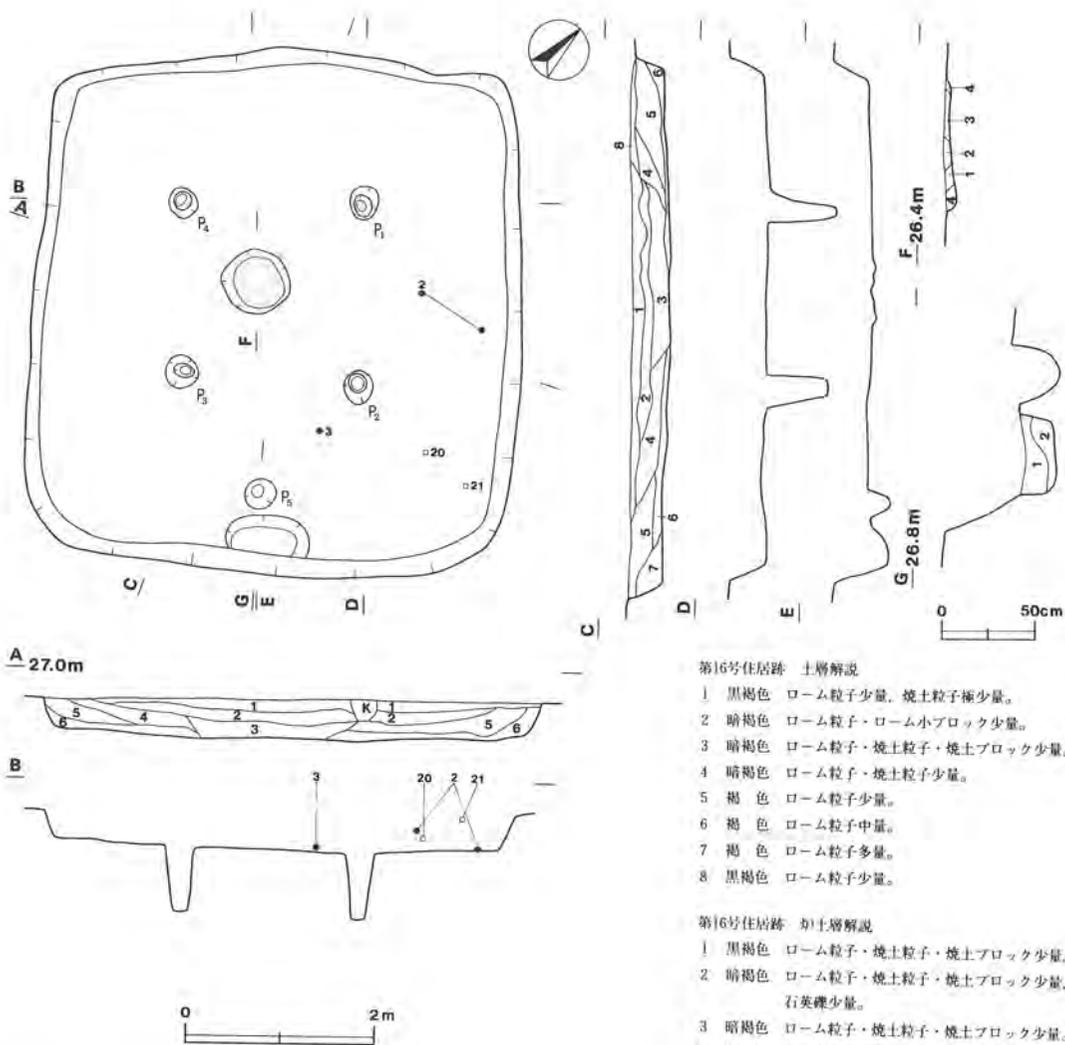
貯蔵穴 P<sub>5</sub>と南東壁の間にあり，平面形は長径88cm，短径44cmの楕円形で深さ17cmである。底面は平坦で壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

炉 中央にあり，平面形は長径76cm，短径70cmのやや楕円形で床を4cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際から中央に向かって流れ込みと思われる褐色土が薄く広く堆積し，中央部は大きく3層からなる。下層は焼土粒子・焼土ブロックを含む暗褐色土で，中層はローム小ブロックを含む暗褐色土，上層は焼土粒子を含む黒褐色土となっている。土器片が覆土中層から多く出土している。

遺物 1～3は弥生式土器壺で，1の広口壺口縁部は覆土中から，3の壺底部はP<sub>3</sub>周辺の覆土中層から出土している。2の底部は北東壁寄りの覆土下層と中層からの破片が接合している。19の不明土製品，20の磨石，21の敲石は覆土中から出土している。アプライト礫が46点（大3，中4，小39）出土しており，総重量は710gである。

所見 本跡は，弥生時代後期前半と思われる。



第139図 第16号住居跡実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第140図 1	広口壺 弥生式土器	A[ 9.0] B( 3.6)	口縁部片。口縁部は外反し、下端に弱い稜を持ち圧痕が施されている。内・外面はナデられている。	砂粒、石英、長石 雲母 にふい褐色 普通	P 58 5%
2	壺 弥生式土器	B( 3.2) C 7.0	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にふい褐色 普通	P 59 10%
3	壺 弥生式土器	B( 1.2) C 8.0	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にふい褐色 普通	P 60 5%

第16号住居跡 土層解説

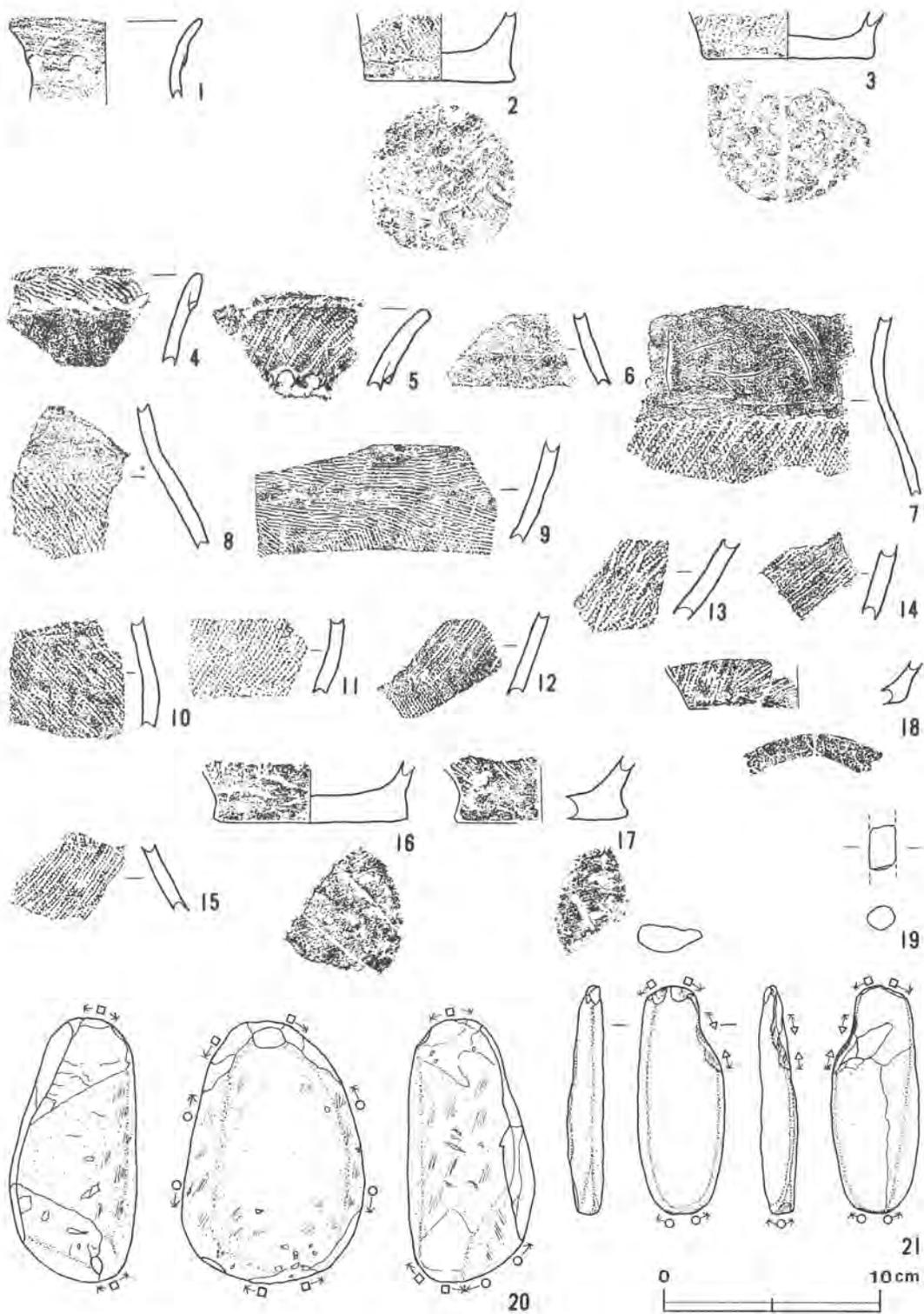
- 1 黒褐色 ローム粒子少量。焼土粒子極少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
- 5 褐色 ローム粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量。
- 7 褐色 ローム粒子多量。
- 8 黒褐色 ローム粒子少量。

第16号住居跡 加土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。  
石英礫少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。

第16号住居跡 貯蔵穴土層解説

- i 褐色 ローム粒子中量。
- 2 明褐色 ローム粒子多量。



第140图 第16号住居跡出土遺物実測・拓影図

第140図4～18は、第16号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5はどちらも縄文施文の複合口縁で、下端に棒状工具による押圧が施されている。縄文原体は、4が単節、5が附加条1種（附加1条）である。6は頸部片で、格子目文が施されている。7・8は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9～15は胴部片である。9は絡条体による撚糸文、10～15は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。16～18の底部片は、いずれも底面に木葉痕が有る。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第140図19	不明土製品	(2.0)	1.3	1.1	—	(3.6)	—	覆土上層	DP13

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第140図20	磨石	12.2	8.4	5.9	861.3	砂岩	覆土	Q17 敲石兼用
21	敲石	10.6	4.0	1.6	87.0	砂岩	覆土	Q18 穂摘具の可能性有り

#### 第17号住居跡（第141図）

位置 調査区南部、D13d<sub>0</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.03m、短軸4.83mの隅丸方形である。

主軸方向 N-54°-W

壁 壁高30～38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、P<sub>5</sub>とP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>周辺はよく踏み固められている。

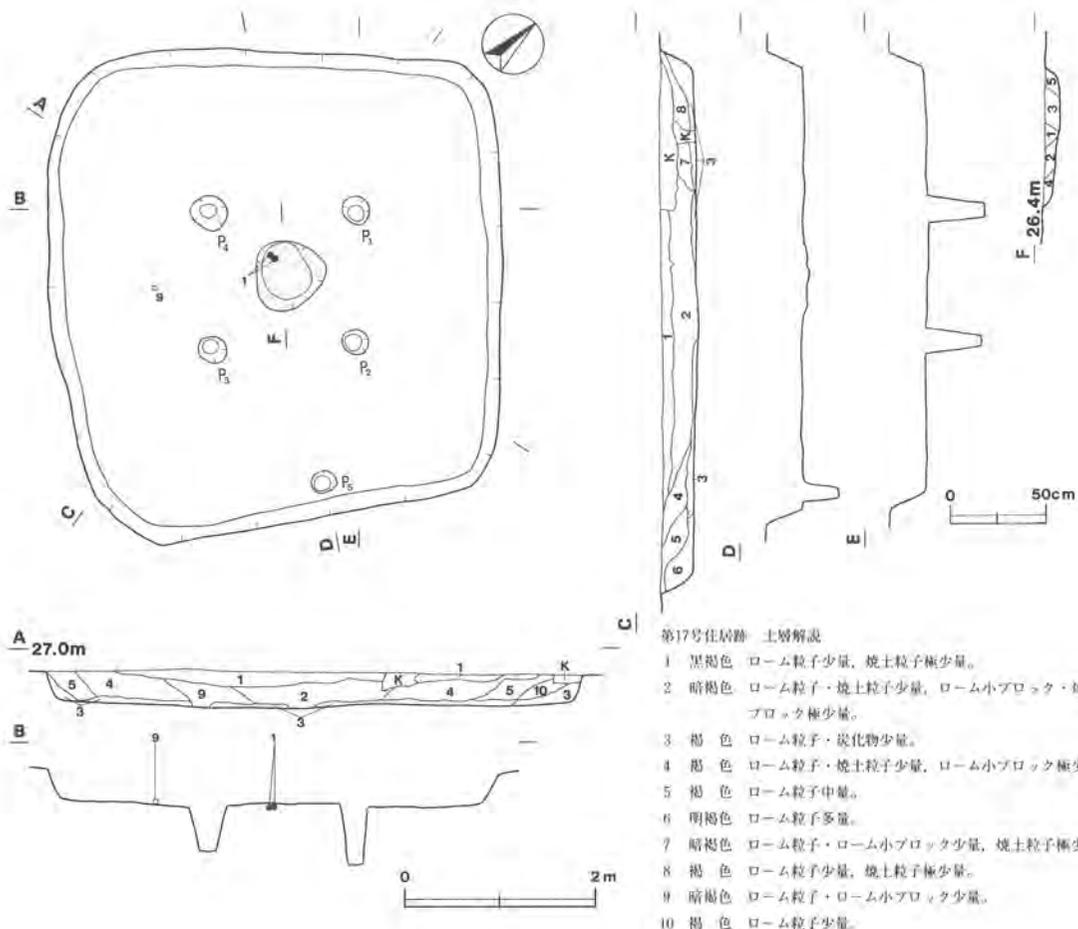
ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径26～38cmの円形で深さ52～66cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は、径28cmの円形で深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央にあり、平面形は径74cmの不定形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際と床面には褐色土が断続的に薄く堆積し、南西壁側から中央に向かっては焼土粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土が堆積している。中央部は2層からなり、第2層は焼土粒子・焼土ブロック・ローム小ブロックを含む暗褐色土で、第1層はローム小ブロック焼土粒子を含む黒褐色土である。

遺物 1は弥生式土器壺の底部で炉の覆土中から、9の敲石は南西壁寄りの床面近くから出土している。9は当遺跡から多量に出土しているアプライト礫の中で唯一の石製品で、磨石・敲石として使用されたと思われる。また、熱を受けたと思われる赤色部分がある。アプライト礫が7点（大1、小6）出土しており、総重量は195gである。

所見 覆土は含有物と堆積状況から判断して人為堆積と考えられる。本跡は、弥生時代後期前半と思われる。



第141図 第17号住居跡実測図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	壺 弥生式土器	B( 2.5) C( 5.8)	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部はやや外反して立ち上がり 単節縄文が施されている。	砂粒,石英,長石 雲母,スコリア 橙色 普通	P61 5%

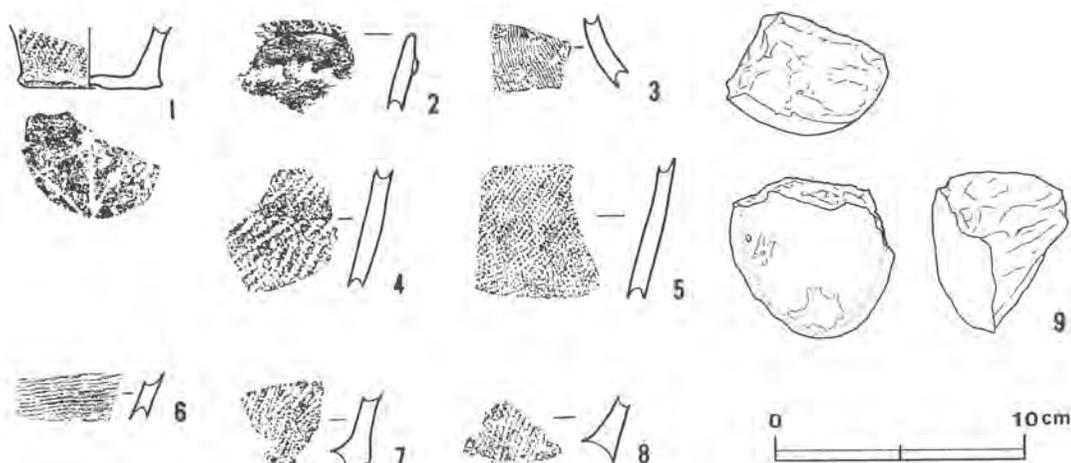
第142図2～8は、第17号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は口縁部片で、口唇部に縄文が、口縁部下端には棒状工具による押圧が施されている。3は頸部片で、撚糸文が施されている。4～6は縄文施文の胴部片で、縄文原体は4が単節、5・6は附加条1種（附加2条）である。7・8の底部片は、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第17号住居跡 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック・焼土ブロック極少量。
- 3 褐色 ローム粒子・炭化物少量。
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック極少量。
- 5 褐色 ローム粒子中量。
- 6 明褐色 ローム粒子多量。
- 7 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子極少量。
- 8 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量。
- 9 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量。
- 10 褐色 ローム粒子少量。

第17号住居跡 ①土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック少量。
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量。
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、焼土粒子極少量。



第142図 第17号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第142図9	砥石	(6.6)	(6.6)	(5.4)	(231.1)	アブライト	床面付近	Q29 磨石兼用

### 第18号住居跡（第143図）

位置 調査区南西部，B13d<sub>8</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.87m，短軸4.70mの隅丸方形である。

主軸方向 N-37°-W

壁 壁高24~34cmで，外傾して立ち上がっている。

床 凹凸で，P<sub>5</sub>とP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>周辺はよく踏み固められている。P<sub>5</sub>から中央よりの床面に浅い落ち込みがあり，中央に向かって緩やかなスロープ状になっている。この落ち込みとP<sub>5</sub>を結んだ線の南西側の床面が特によく踏み固められている。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径32~36cmの円形で深さ63~97cmの主柱穴であり，位置は中央寄りになっている。主柱穴を結んだ線は不整形となる。P<sub>5</sub>は径24cmの円形で深さ45cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>は，長径36cm，短径30cmの楕円形で深さ76cmの補助柱穴と思われる。

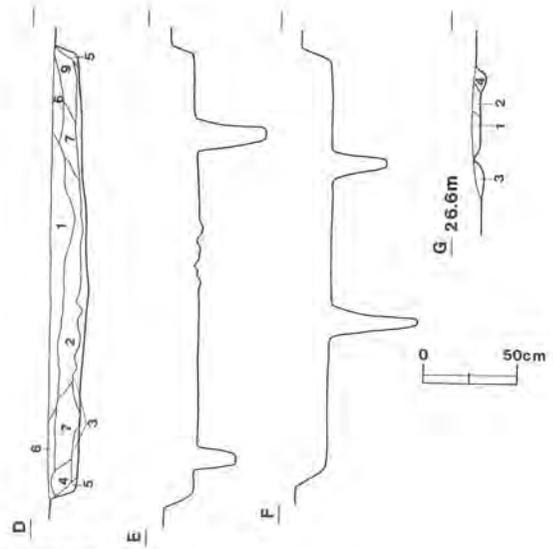
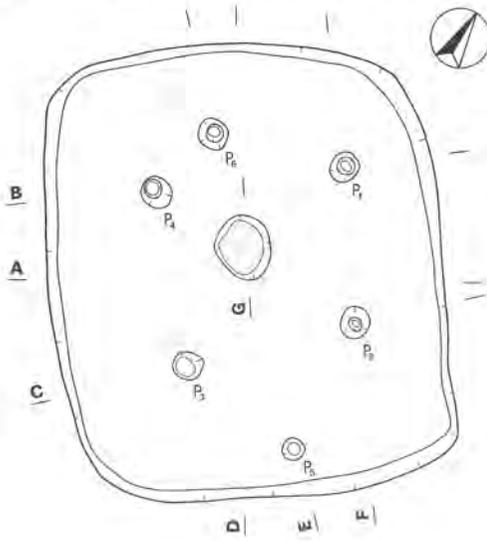
炉 中央にあり，平面形は長径72cm，短径58cmの楕円形で床を4cm程掘り込んだ地床炉である。

炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

覆土 壁際には明褐色土が流れ込んでおり，床面上にはローム中ブロック・焼土粒子を少量含む褐色土が薄く広く堆積し，その後に焼土ブロックを含む黒褐色土が堆積している。覆土全体に焼土ブロック・焼土粒子が多い。

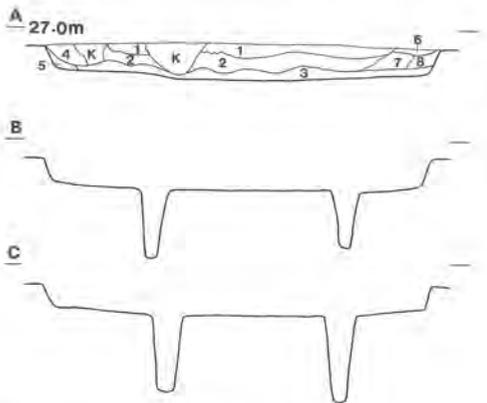
遺物 弥生式土器片が覆土中から124点出土しているが接合できない。土器片は壺の胴部と思われるものが多い。アブライト礫が9点（中3，小6）出土しており，総重量は173gである。

所見 本跡は、弥生時代後期前半と思われる。



第18号住居跡 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック極少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック・焼土ブロック極少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量。
- 6 暗褐色 ローム粒子少量。
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子少量、黒色土ブロック極少量。
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ロームブロック極少量。



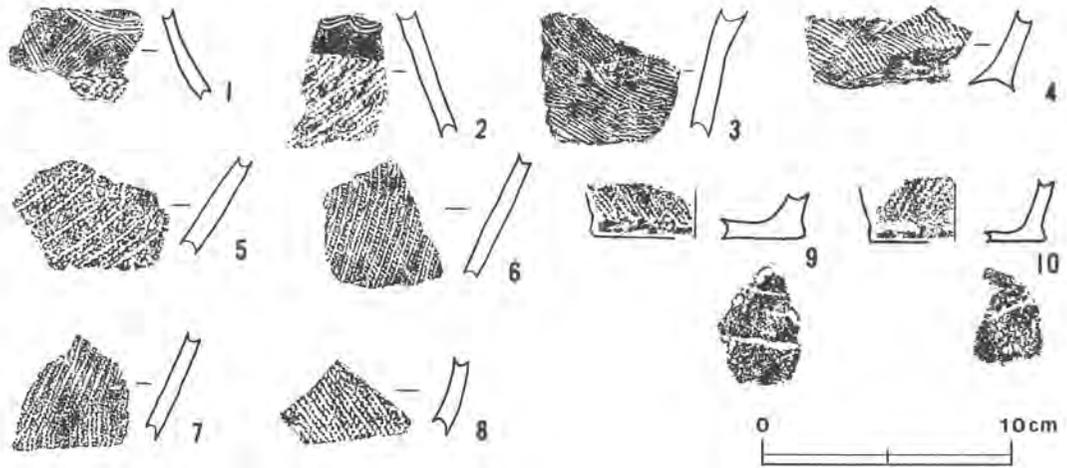
第18号住居跡 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子極少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量。



第143図 第18号住居跡実測図

第144図1～10は、第18号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は頸部片で、4本櫛歯による山形文が施されている。2は胴部から頸部にかけての破片で、頸部には櫛状工具による横走波状文が施されている。3～8は縄文施文の胴部片で、縄文原体は3・4が撚糸、5～8は附加条1種（附加2条）である。9・10の底部片は、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施され、底面には木葉痕がある。



第144図 第18号住居跡出土遺物拓影図

第19号住居跡 (第145図)

位置 調査区北西部、B13h区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.00m、短軸4.75mの隅丸方形である。

主軸方向 N-42°-W

壁 壁高34~49cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P<sub>5</sub>とP<sub>3</sub>周辺と炉の南側付近がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、長径34~50cm、短径28~40cmの楕円形で深さ83~98cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は径40cmの円形で深さ41cmの出入口施設に伴うピットと思われ、南東壁側にやや傾斜している。

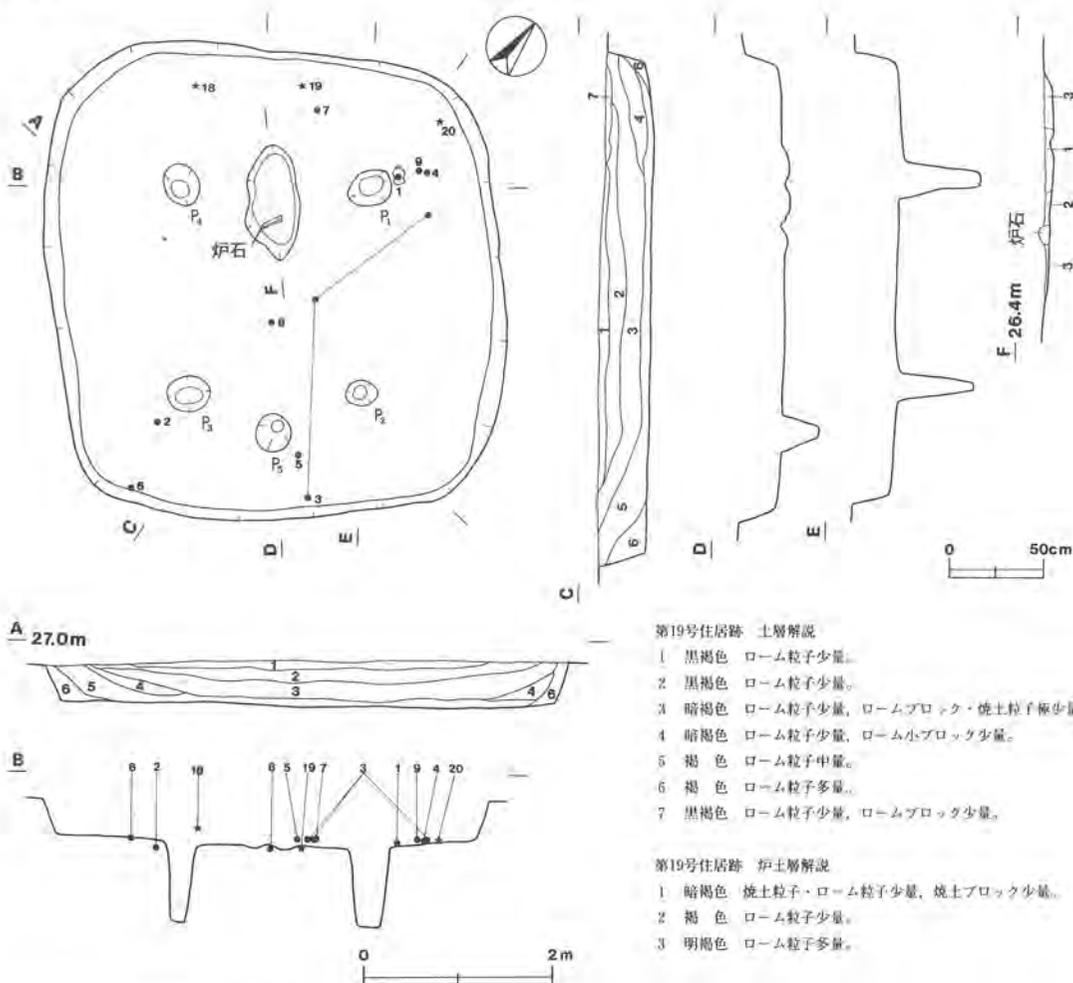
炉 中央から北西寄りでP<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>の中間にあり、平面形は長径126cm、短径58cmの不整楕円形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部が熱を受け赤変硬化している。炉石が炉床中央から南東寄りに置かれている。炉石は熱を受け二つに割れている。

覆土 壁際にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し、南西壁側から流れ込んだローム粒子を中量含む褐色土が床面を覆っている。中層にはローム小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土が、上層には黒褐色土が堆積している。土器片が第4・5層から多く出土している。

遺物 1・4は弥生式土器広口壺で、9の高坏の脚部と一緒に北コーナー付近の床面直上から、1は横位で、4は正位でそれぞれ出土している。2の広口壺の口縁部から胴部上半にかけては、南コーナーの床面直上から正位のつぶれた状態で出土している。3は壺の胴部下半から底部で、南東壁際と中央部から出土した破片と接合している。5・6の壺底部は、6が南コーナーの床面近くから、5は南東壁中央寄りの床面近くからそれぞれ出土している。7の小形壺は、北西壁中央付近の覆土下層から、8の台付甕の脚部は中央部の床面直上からそれぞれ出土している。18~

20の紡錘車は、18が覆土中から、19が北西壁中央付近の床面直上から、20が北コーナーの床面近くからそれぞれ出土している。アプライト礫が23点（大1，中2，小20）出土しており，総重量は403gである。

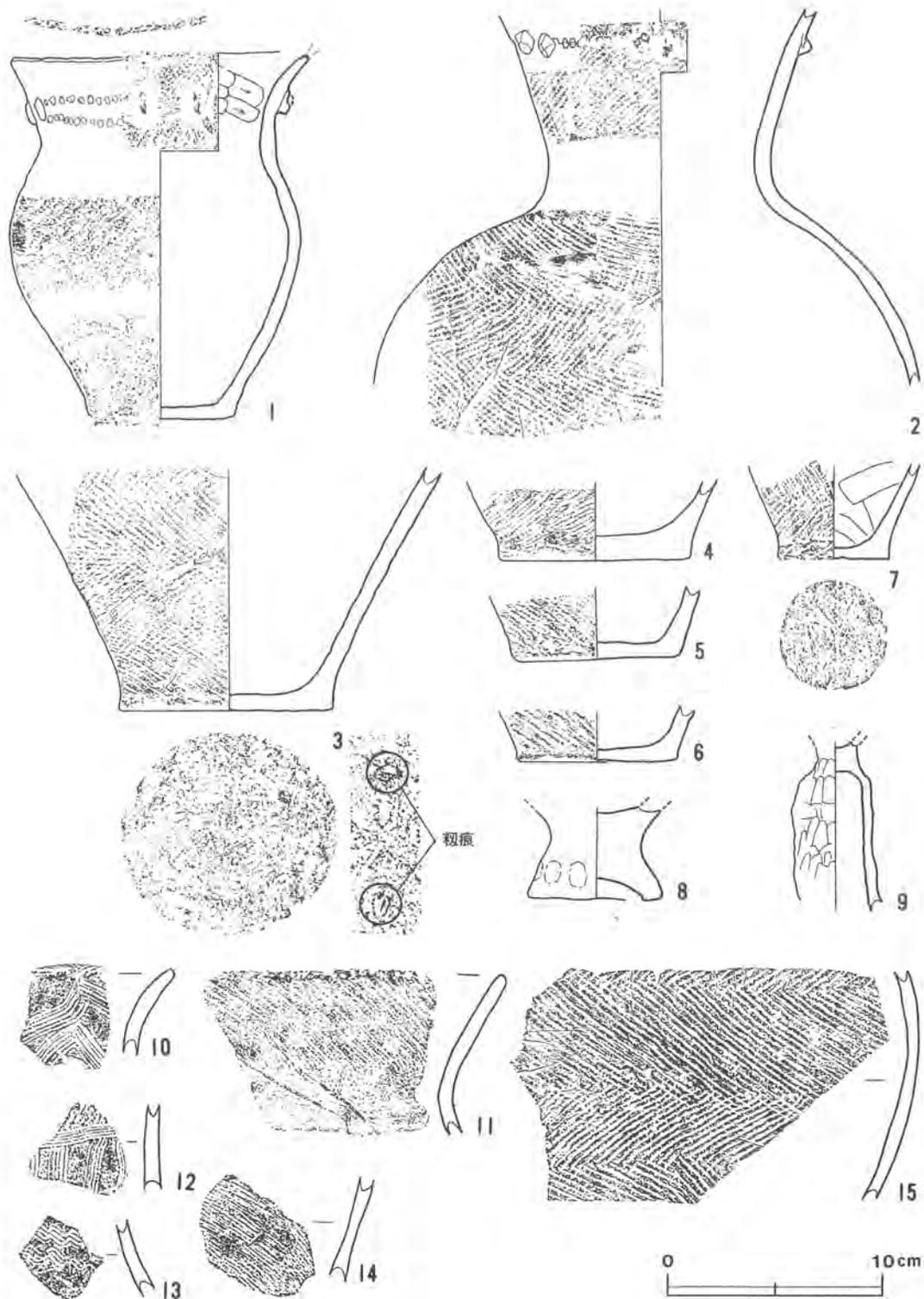
所見 紡錘車が3点とも北西壁際から出土しており，住居内空間の利用と関係があると考えられる。P<sub>1</sub>周辺から，1・4・9が並んで出土しており興味深い。本跡は，弥生時代後期後半と思われる。



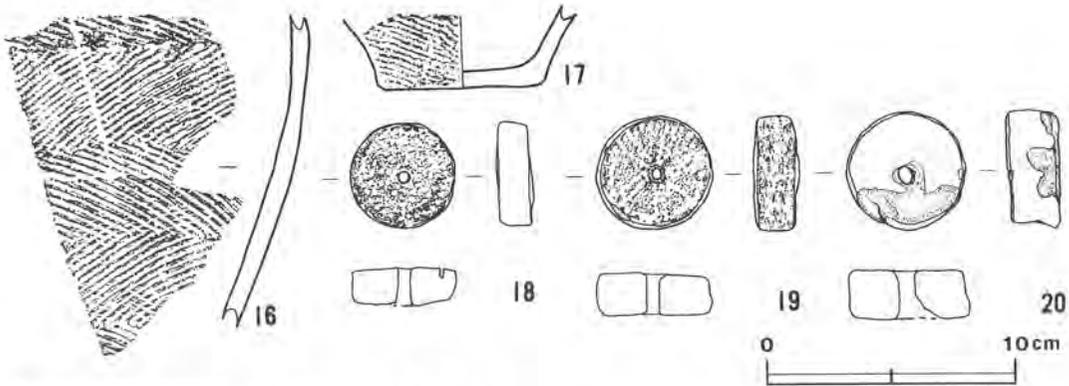
第145図 第19号住居跡実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第146図	広口壺	A 13.8	平底で，胴部は内彎して立ち上がり最大径を上位に持つ。口縁部下端に縄文原体による押圧が2段施され，その間には2個1組の瘤が5単位貼られている。頸部下半を無文とし，それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口縁部内面は，ヘラナデされている。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア にふい橙色 やや不良	P62 95% 外面スス付着 二次焼成 胴部下半摩滅
1	弥生式土器	B 17.3			
		C 6.8			



第146图 第19号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第147図 第19号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第146図 2	広口壺 弥生式土器	B(17.7)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部から口縁部にかけては外傾している。口縁部下端には縄文原体による押圧が施され、さらに2個1組の瘤が8単位貼られている。口縁部と頸部下半を無文とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、胴部は羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 63 30% 外面スス附着
3	壺 弥生式土器	B(11.1) C 9.9	底部から胴部下半にかけての破片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施され羽状構成をとる。底面に靱痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 64 10%
4	壺 弥生式土器	B( 3.7) C 8.7	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 66 5%
5	壺 弥生式土器	B( 3.4) C 7.9	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 67 5%
6	壺 弥生式土器	B( 2.6) C 7.5	底部片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 68 5%
7	小形壺 弥生式土器	B( 4.5) C 5.2	底部から胴部下半にかけての破片。平底で底面に木葉痕がある。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。胴部内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 69 5%
8	台付甕 弥生式土器	B( 4.3) D 6.2 E 4.0	脚部片。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。外面に指頭圧痕が有る。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 70 10% 外面スス附着
9	高坏 弥生式土器	B( 7.9)	脚部片。脚部は円筒状で上位に最大径を持つ。外面はヘラナデ、内面は指ナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 71 20%

第146・147図10～17は、第19号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10は口縁部片で6本櫛歯による山形文が施されている。11は頸部から口縁部下半にかけての破片で、縄文原体によると思われる押圧が施されている。12・13は頸部片で、12は5本櫛歯による横走文で2段に区画し、上部には格子目文、下部には縦線文が施されている。13は3本櫛歯による横走波状文が施されている。14～16は胴部片で、縄文原体は14が撚糸、15・16は附加条1種(附加2条)である。15・16は羽状構成をとる。17の底部片は、胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第147図18	紡錘車	4.2	4.3	4.2	5.0	(31.7)	95	覆土上層	D P 15
19	紡錘車	4.6	4.6	1.8	5.0	45.1	100	床面直上	D P 16
20	紡錘車	4.8	4.9	2.1	6.0	(57.5)	80	床面付近	D P 17

## 第20号住居跡（第148図）

**位置** 調査区北西部，B13j7区を中心に確認されている。

**重複関係** 本跡の西コーナー部を第2号溝が掘り込んでいる。

**規模と平面形** 長軸6.04m，短軸5.33mの隅丸長方形である。

**主軸方向** N-47°-W

**壁** 壁高54～61cmで，外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で，あまり踏み固められておらず全体に軟らかい。

**ピット** 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，長径34～54cm，短径28～30cmの楕円形で深さ72～76cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>1</sub>内の覆土中から弥生式土器壺の底部細片が出土している。P<sub>5</sub>は南東壁側に傾斜し，径29cmの円形で深さ32cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

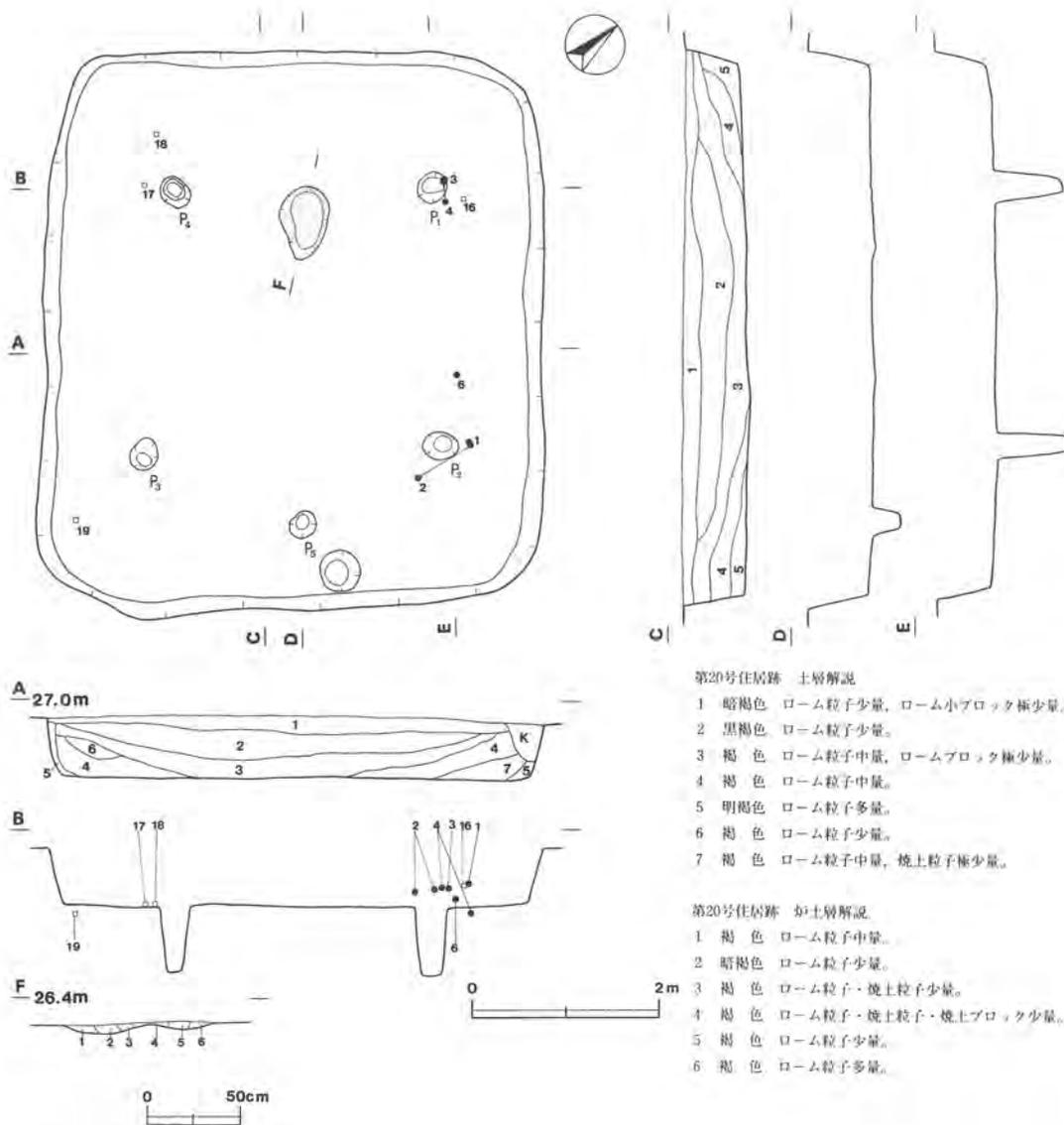
**炉** 中央から北西寄りにおり，平面形は長径78cm，短径50cmの不整楕円形で床を8cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

**貯蔵穴** 南東壁中央部に接してあり，平面形は径46cmのほぼ円形で深さ10cmである。底面は皿状で緩やかに外傾して立ち上がる。

**覆土** 壁際にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し，中央部は3層からなる。下層にはローム小ブロックを極少量含む褐色土が，中層には黒褐色土が，上層にはローム小ブロックを含む極暗褐色土が堆積している。土器片が各層から出土している。

**遺物** 1は弥生式土器広口壺の口縁部で東コーナー寄りの覆土中層から出土している。2の壺の胴部から底部は東コーナー付近の覆土中層から，3～5の壺底部は北コーナー付近の覆土中層から出土している。6の小形壺は，北東壁中央付近の覆土下層から逆位で出土している。19の浮子片は，南コーナーの床面直上から出土している。16は北東壁寄りの覆土中層から，17・18は西コーナー付近からで，17は床面直上から，18は床面近くから出土している。粘土が東コーナーの床面直上から出土している。アプライト礫が14点（小14）出土しており，総重量は107gである。

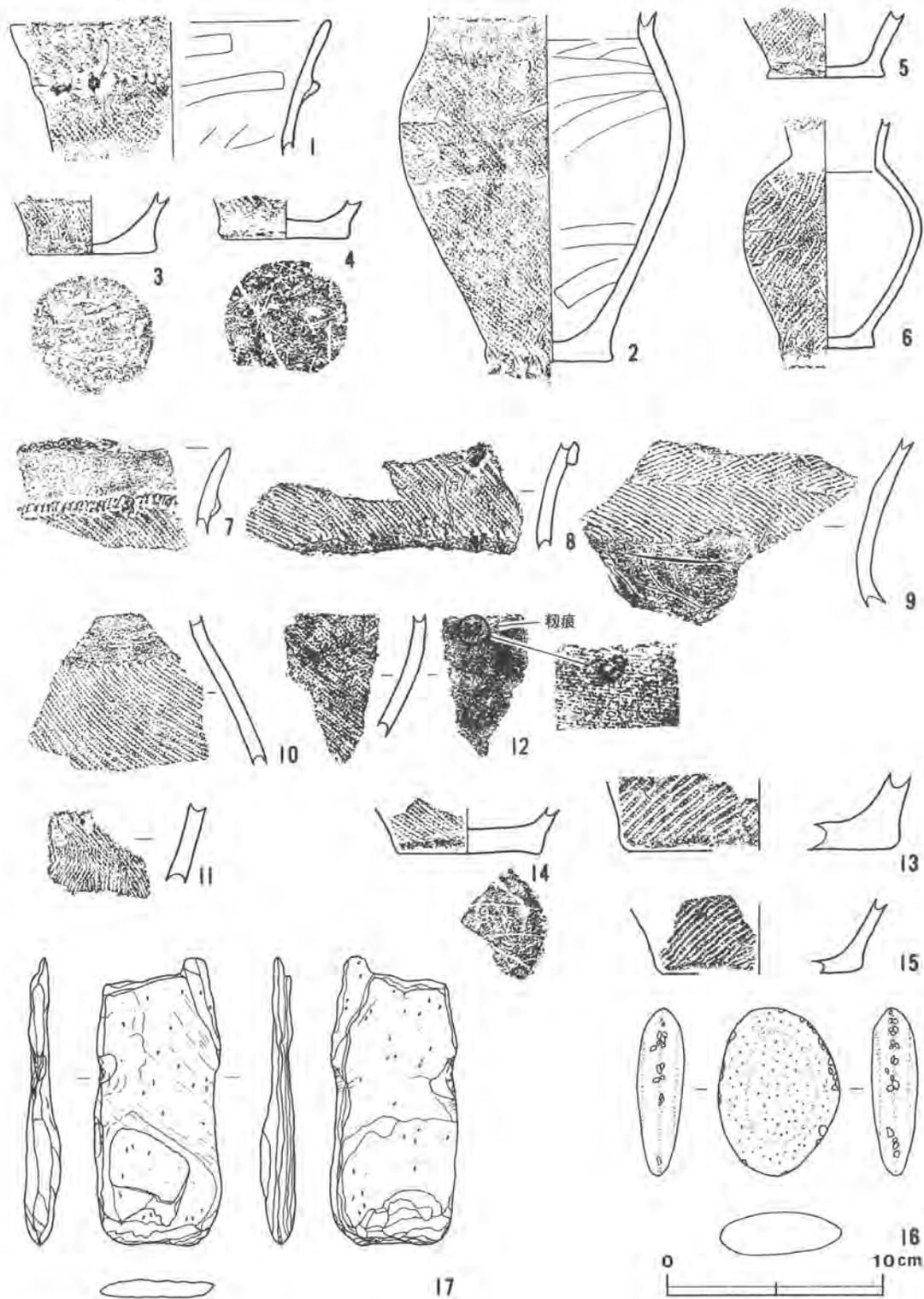
**所見** 本跡は，弥生時代後期後半と思われる。



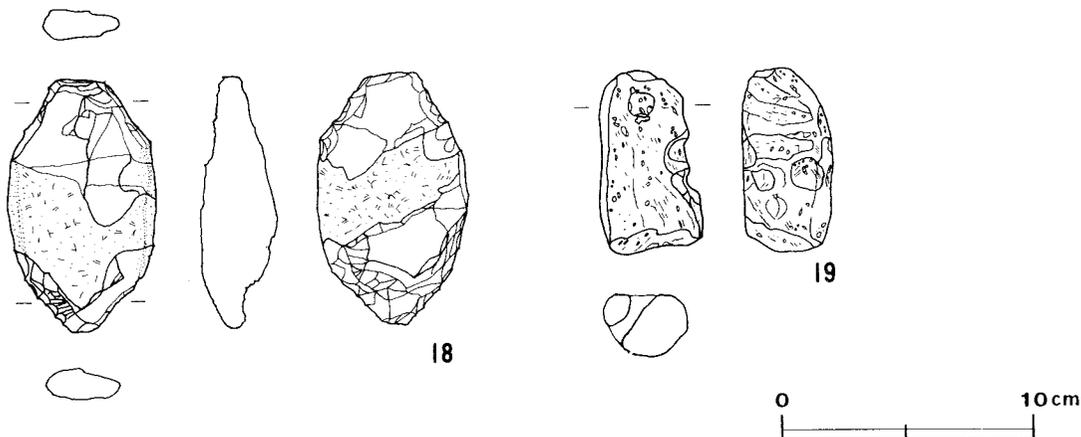
第148図 第20号住居跡実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第149図 1	広口壺 弥生式土器	A[15.0] B(6.4)	頸部上半から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反する。口縁部下端には縄文原体による押しが施され、さらに2個1組の瘤が5単位にわたり貼られている。頸部から口唇部までは附加条1種(附加2条)の縄文が施され、内面はヘラナデされている。	砂粒, 石英, 長石 雲母, スコリア 橙色 普通	P72 5%
2	壺 弥生式土器	B(16.5) C 6.1	頸部上半から口縁部にかけて欠損。平底で張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がり最大径を上位に持つ。頸部下半を無文としそれ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、胴部内面はヘラナデされている。	砂粒, 石英, 長石 雲母, スコリア ぶい黄橙色 普通	P73 85% 内面炭化物付着



第149图 第20号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第150図 第20号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第149図 3	壺 弥生式土器	B( 2.8) C 6.1	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 74 10% 外面スス付着
4	壺 弥生式土器	B( 1.8) C 5.8	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 75 5%
5	壺 弥生式土器	B( 3.1) C 5.6	底部片。平底で張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P 76 90%
6	小形壺 弥生式土器	B(10.6) C 4.4	口縁部欠損。平底で張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持ち頸部は外反する。頸部下半を無文とし、それ以外には、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P 77 5%

第149図7～15は、第20号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7は複合口縁で、口唇部には縄文原体による押圧がなされ、口縁部下端にはキザミ目が施されている。8は口縁部下半の破片で、瘤が貼られている。9は頸部から口縁部下半にかけての破片で、上部には瘤が貼られていたと思われる痕が2か所ある。頸部は無文である。10は胴部から頸部にかけての破片である。11・12は胴部片で、11には絡条体による捺糸文が、12には単節縄文が施されている。12の内面には靱痕が有る。13～15の底部片は、いずれも胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施され、13・14の底面には木葉痕が有る。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第149図16	敲石	8.0	5.7	2.1	116.0	安山岩	覆土中層	Q30
17	不明石製品	13.5	5.8	1.5	154.4	ホルンフェルス	床面直上	Q31 穂摘具の可能性あり
第150図18	穂摘具	10.2	6.0	3.1	99.2	ホルンフェルス	床面付近	Q32 未製品か
19	浮子	(5.4)	3.9	3.5	(18.0)	流紋岩	床面直上	Q33 破片

第21号住居跡（第151図）

位置 調査区西部，C13b7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.60m，短軸4.60mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-47°-W

壁 壁高55～60cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，あまり踏み固められておらず全体に軟らかい。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>は長径52cm，短径32cmの楕円形で，P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>は径22～32cmの円形で深さ61～72cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は長方形となる。P<sub>5</sub>は南東壁側に傾斜し，長径30cm，短径24cmの楕円形で深さ31cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央から北西寄りにあり，平面形は長径66cm，短径44cmの楕円形で床を4cm程掘り込んだ地床炉である。炉石が炉の南東端部に置かれている。炉床は，中央部が熱を受け赤変硬化している。

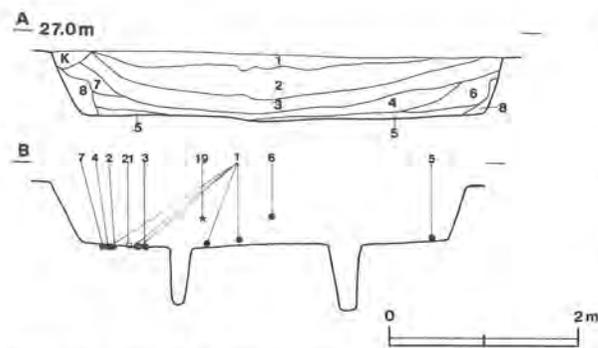
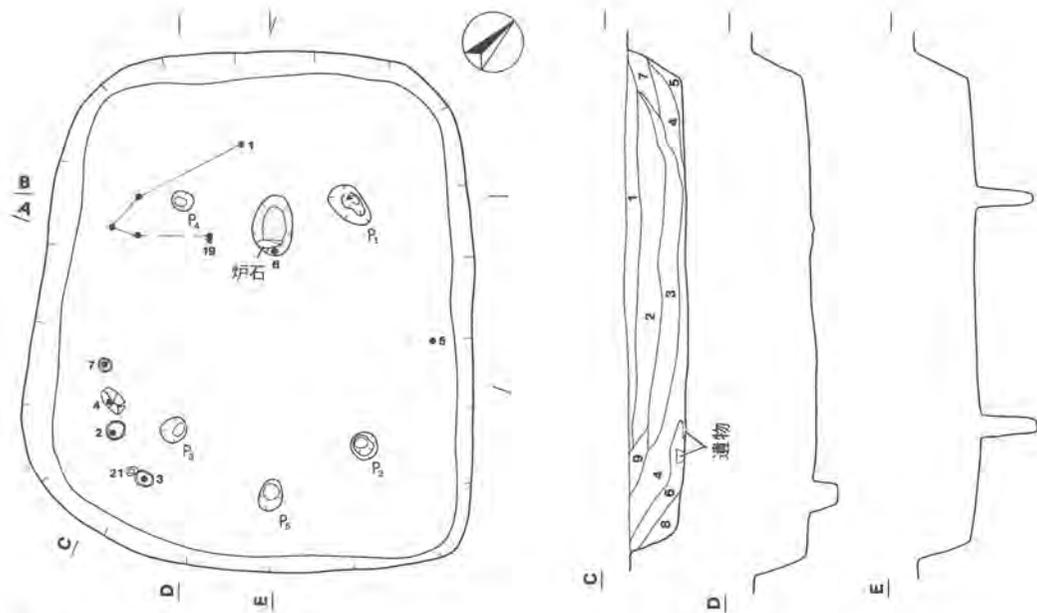
覆土 北東壁を除く壁際にはローム小ブロックを含む明褐色土が堆積し，その上に北西壁側から床面まで褐色土が広がっている。中央部は4層からなり，第1～3層まではローム小ブロックを含み，第3・4層には焼土粒子が極少量含まれている。土器片は第4層から多く出土している。

遺物 1～7は弥生式土器広口壺で，1は西コーナー付近の床面直上から破片で，2～4・7はP<sub>3</sub>と南コーナーの間に一列に並んだ状態で，2・3・7は正位で，4は横位でそれぞれ出土している。5・6の胴部から底部は，5が北東壁中央部の床面近くから，6は覆土中層から出土している。19・20の紡錘車は，19が西コーナーの覆土中層から破片で，20が覆土中から出土している。21の砥石は南コーナー付近の床面直上から，22の石鏃は覆土中からそれぞれ出土している。粘土塊が東コーナー床面直上から出土している。アプライト礫が13点（大12，中1）出土しており，総重量は135gである。

所見 第152図の2・3・4・7は一列に並べられた状態で出土しており，住居内の利用方法を考える上で貴重な資料である。本跡は，弥生時代後期後半と思われる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	広口壺 弥生式土器	A(17.5)	平底。胴部は内彎して立ち上がり，最大径を上位に持つ。頸部から口縁部は外反する。口縁部下端には縄文原体による押圧が施されている。頸部を無文とし，それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。頸部内・外面はヘラナデされている。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア にぶい黄褐色 普通	P78 90%  内・外面炭化物付着
		B 30.0			
		C 6.6			
2	壺 弥生式土器	A 19.2	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反する。複合口縁部下端には縄文原体による押圧が施され，さらに2個1組の瘤が5単位貼られている。頸部下半を無文とし，それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア 橙色 普通	P79 30%  内面剝離
		B(15.5)			
3	壺 弥生式土器	B(17.2)	底部から胴部にかけての破片。平底で，胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され，羽状構成をとる。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア 明赤褐色 普通	P80 50% 内・外面炭化物付着 二次焼成
		C 9.8			



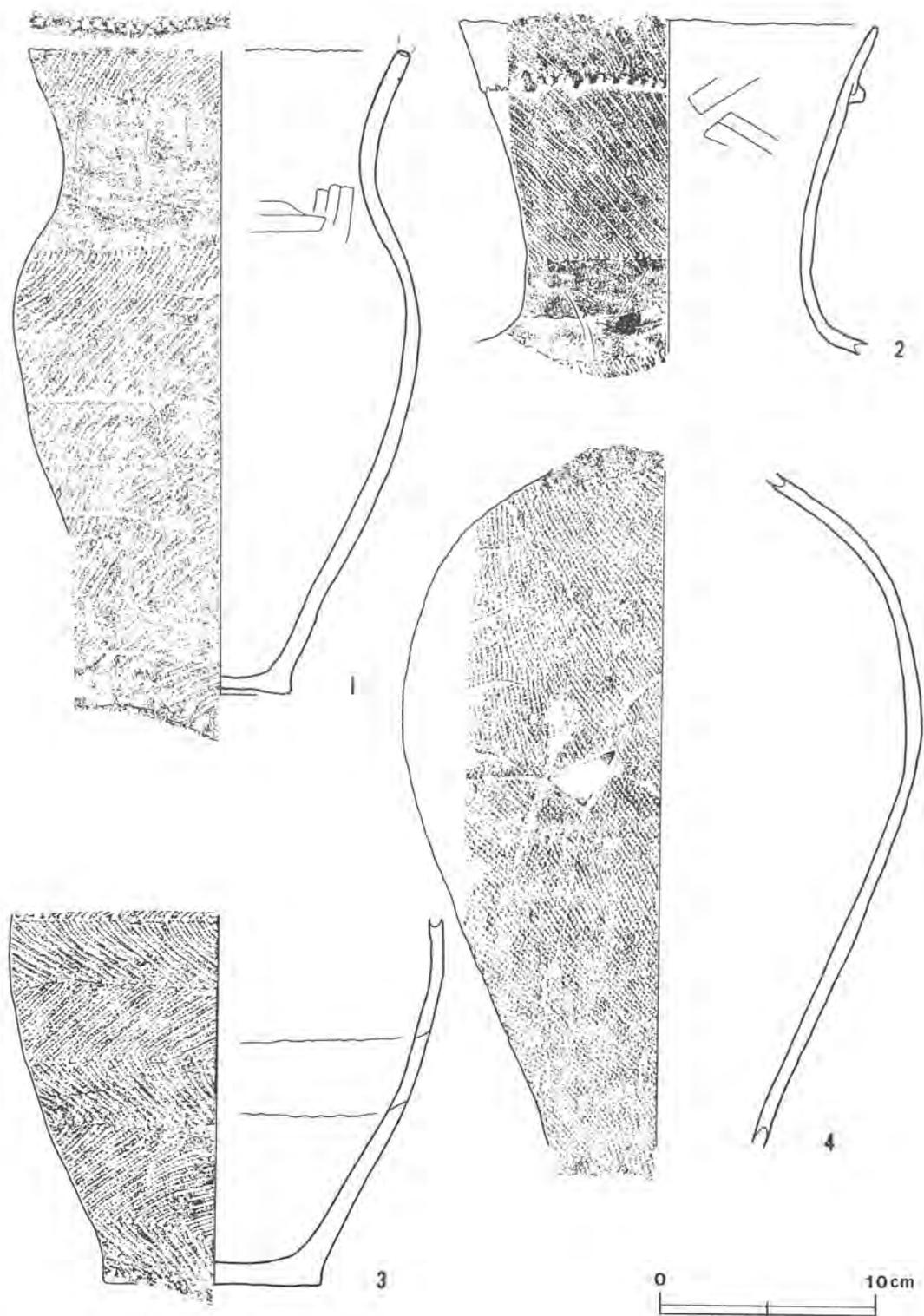
第21号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック少量、焼土粒子極少量。
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子極少量。
- 5 褐色 ローム粒子多量。
- 6 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量。
- 7 褐色 ローム粒子少量。
- 8 明褐色 ローム粒子多量。
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量。

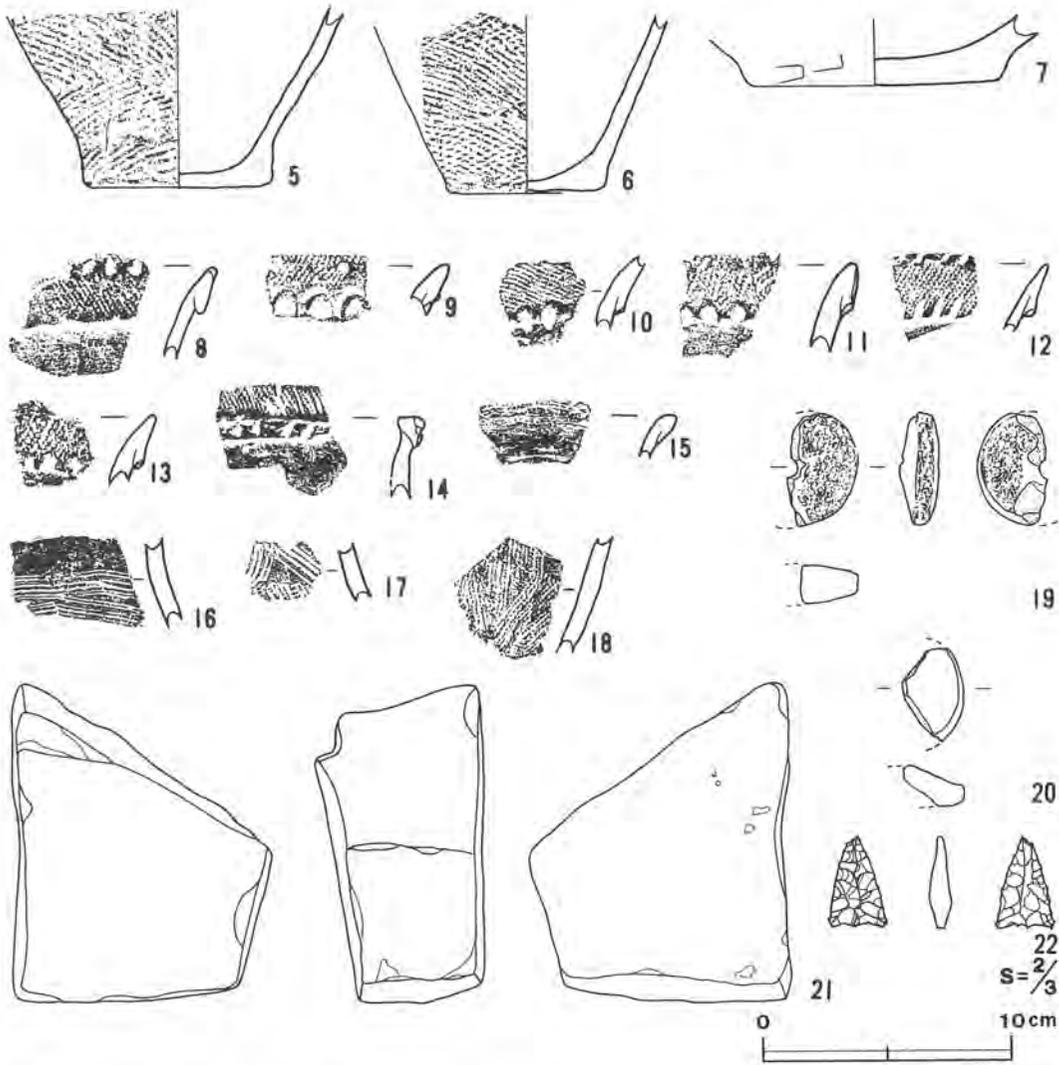
第151図 第21号住居跡実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第152図 4	壺 弥生式土器	B(31.8)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。頸部下端を無文とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 褐色 普通	P81 40% 内面下位剝離
第153図 5	壺 弥生式土器	B(7.2) C 7.7	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P82 15% 内面炭化物付着
6	壺 弥生式土器	B(7.2) C 6.5	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P83 10%
7	壺 弥生式土器	B(2.7) C 10.3	底部片。平底で突出する。胴部外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P84 5%

第153図8～18は、第21号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8～15は縄文施文の複合口縁で、縄文原体は8～10が単節縄文、11が附加条1種(附加2条)、12・13が附加条1



第152図 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



第153図 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

種（附加1条）である。8の口唇部には縄文原体による押圧がなされている。14の口唇部には単節縄文が施され、口縁部下位には隆帯を貼りキザミ目が施されている。15は口縁部から口唇部にかけて撚糸文が施されている。16は頸部片で、7本楕歯による横走文が施されている。17は胴部から頸部にかけての破片で、頸部には4本楕歯による山形文が、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。18は胴部片で、単節縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第153図19	紡錘車	(4.5)	(2.8)	1.6	—	(15.0)	50	覆土中層	DP18
20	紡錘車	(3.8)	(2.5)	(1.7)	—	(9.5)	20	覆土上層	DP19

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第153図21	石皿	(12.9)	(10.6)	6.8	(1221.7)	砂岩	覆土中層	Q34 破片
22	石鉢	1.8	1.2	0.4	0.7	チャート	覆土中層	Q36

## 第22号住居跡（第154図）

位置 調査区南西端部，D12j<sub>2</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.20m，短軸5.07mの隅丸方形である。

主軸方向 N-42°-W

壁 壁高50～60cmで，外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で，P<sub>5</sub>と炉の周辺がよく踏み固められている。中央部に炭化粒子が散乱している。

ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径26～36cmの円形で深さ46～50cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は長径32cm，短径26cmの楕円形で深さ38cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央から北西寄りのP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の中間にあり，平面形は長径126cm，短径60cmの不整楕円形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は北西側と南西側とでレベルに差があり，北西側がやや高い。炉床は中央部がよく熱を受け赤変硬化している。

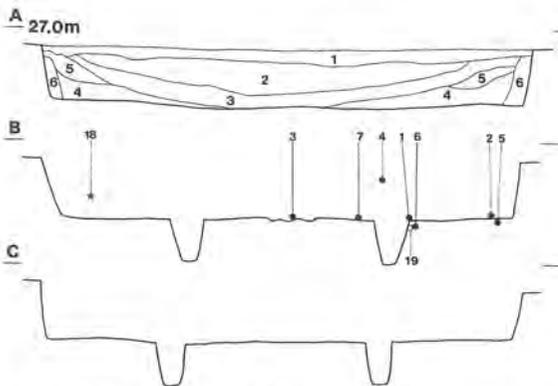
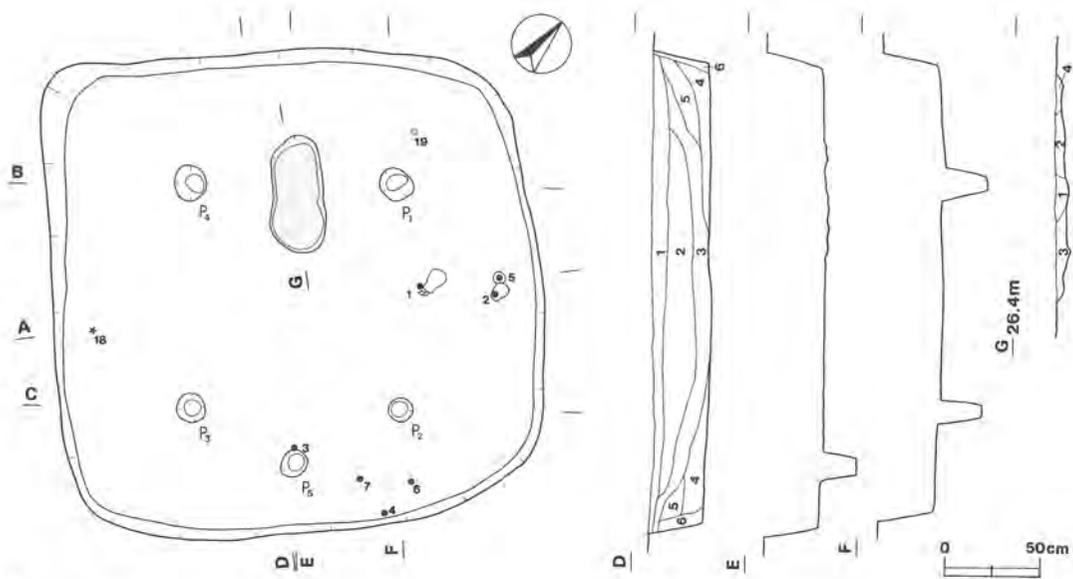
覆土 壁際には，明褐色土と焼土粒子を極少量含む褐色土が緩やかな傾斜で堆積している。中央部は3層からなり，各層ともローム小ブロックを含んでいる。第3層が暗褐色土，第2層が黒褐色土，第1層が極暗褐色土で，第2層が厚く堆積している。土器片が第4・6層から多く出土している。

遺物 1・2は弥生式土器広口壺の口縁部から胴部にかけてで，1は北東壁寄りの床面直上から横位のつぶれた状態で，2は5の底部片と隣合わせで北東壁中央付近の床面直上から破片でそれぞれ出土している。3の胴部から底部は，P<sub>5</sub>付近の床面直上から横位で，4の底部は南東壁際の覆土上層から出土している。6・7のミニチュア土器は，南東壁際中央寄りの床面付近から横位で出土している。18の紡錘車は南西壁際の覆土中層から，19の凹石は北コーナー付近の床面直上からそれぞれ出土している。アブライト礫が1点（小1）出土し，重量は22gである。

所見 炉は炉床の状況から判断して拡張あるいは二つに分けて使用された可能性が有る。本跡は，弥生時代後期後半と思われる。

## 第22号住居跡出土遺物観察表

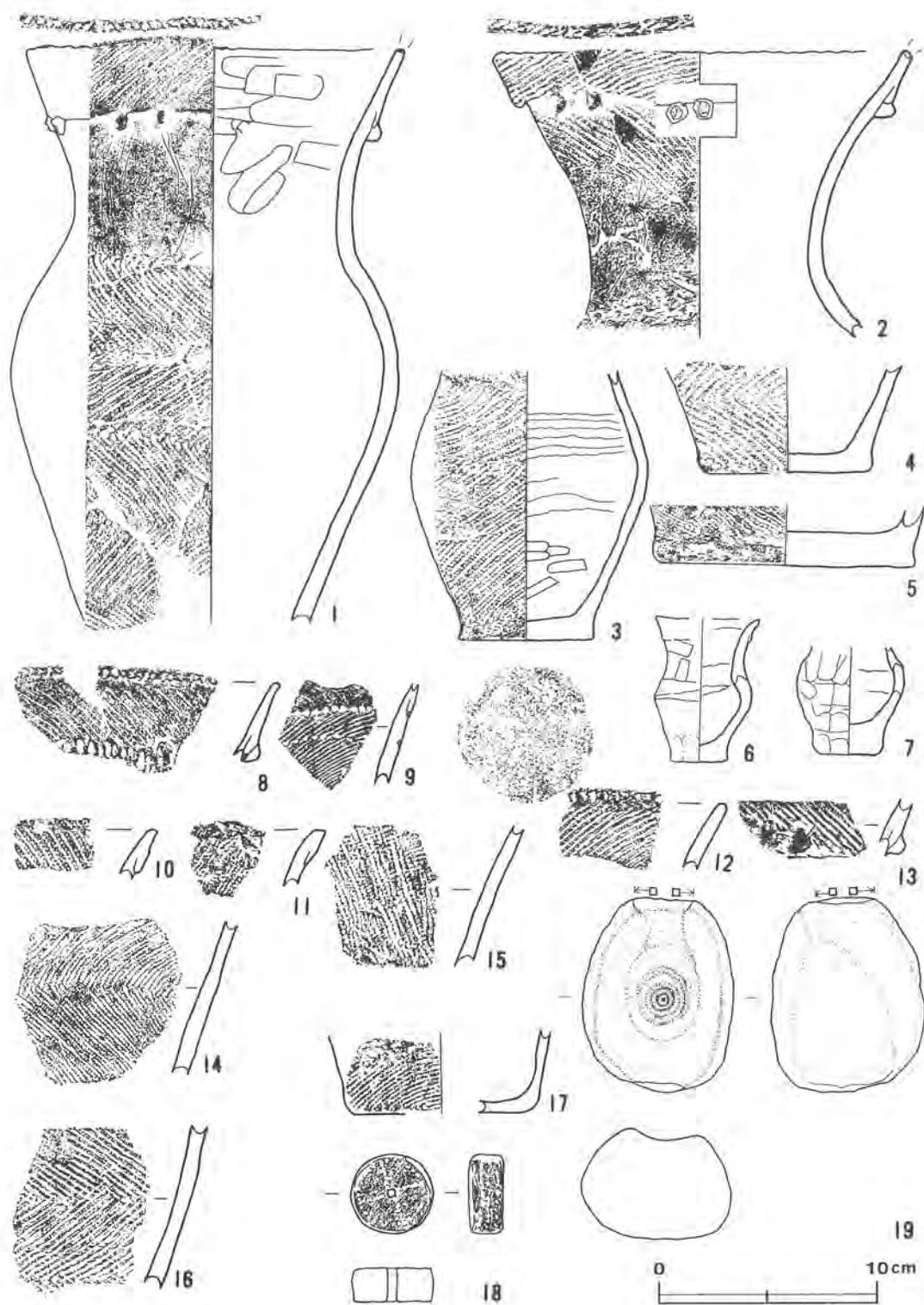
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第155図 1	広口壺 弥生式土器	A 17.5 B (27.0)	底部欠損。胴部は内燻して立ち上がり，頸部から口縁部は外反する。縄文施文の複合口縁で，下端には2個1組の瘤が6単位貼られている。頸部を無文とし，胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとる。内面はヘラナデされている。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア にぶい赤褐色 普通	P85 90% 内・外面炭化物付着 二次焼成



- 第22号住居跡 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量。
  - 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量。
  - 3 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック少量、焼土粒子極少量。
  - 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子極少量。
  - 5 褐色 ローム粒子中量。
  - 6 明褐色 ローム粒子多量。
- 第22号住居跡 炉土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
  - 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック少量。
  - 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土ブロック少量。
  - 4 褐色 ローム粒子多量。

第154図 第22号住居跡実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第155図 2	広口壺 弥生式土器	A 19.4	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反する。複合口縁で、下端には2個1組の瘤が7単位貼られている。縄文原体による押圧が施され、さらに2個1組の瘤が5単位貼られている。頸部下半を無文とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にふい褐色 普通	P 86 20% 内面炭化物付着
		B 13.5			
3	壺 弥生式土器	B(13.7)	底部から胴部にかけての破片。平底で、張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にふい褐色 普通	P 87 70% 外面スス付着 二次焼成
		C 6.3			
4	壺 弥生式土器	B(5.0)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にふい褐色 普通	P 88 10% 内面炭化物付着
		C 7.8			
5	壺 弥生式土器	B(2.9)	底部片。平底で、張り出しを持つ。胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にふい褐色 普通	P 89 10%
		C 12.0			
6	ミニチュア 弥生式土器	A[4.7]	平底で、張り出しを持つ。胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。胴部から頸部外面は、ヘラケズリ後ヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 黒褐色 普通	P 90 90%
		B 6.8			
		C 2.7			



第155图 第22号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第155図 7	ミニチュア 弥生式土器	B(5.0) C 3.3	底部から胴部にかけての破片。平底で突出する。胴部は内彎して立ち上がり、外面はヘラケズリ後ナデ、内面には輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 黒褐色 普通	P91 90%

第155図8～17は、第22号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8～13は口縁部片である。8・9は附加条1種(附加2条)の縄文施文の複合口縁で、口縁部下端には8が棒状工具によるキザミ目、9は竹管状工具による2列の刺突文が施されている。10・11は縄文施文の複合口縁で、口縁部から口唇部にかけて施されている。縄文原体は、10が附加条1種(附加2条)、11が単節である。12の口唇部には縄文原体による押圧がなされている。13の口縁部下端には瘤が貼られている。14～16は胴部片で、14・15には附加条1種(附加1条)、16には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。17は底部片で、胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第155図18	紡錘車	3.7	3.7	1.6	4.0	28.6	100	覆土中層	D P20

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第155図19	門石	9.1	7.0	5.2	489.9	砂岩	覆土中層	Q37 敲石兼用

### 第23号住居跡(第156図)

位置 調査区東端部、C14c0区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.73m、短軸4.23mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-62°-W

壁 壁高10～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>の周辺がよく踏み固められている。

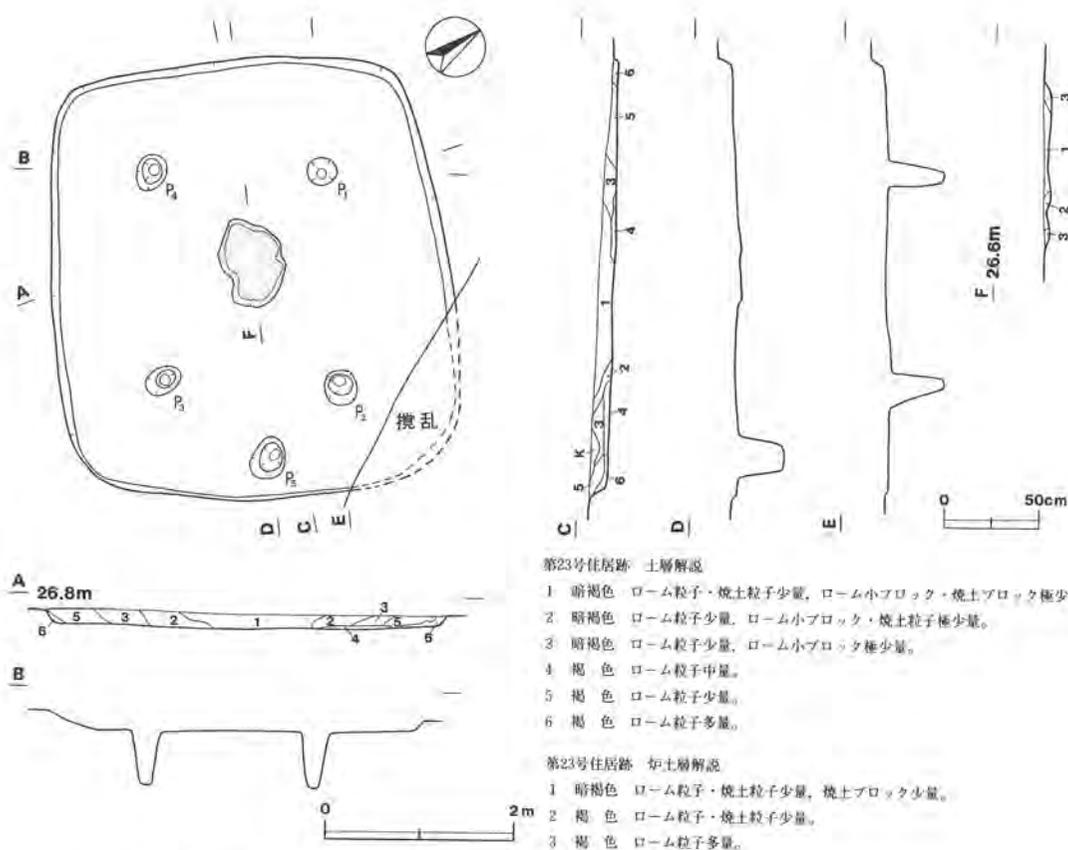
ピット 5か所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径30～40cm、短径28～36cmの楕円形で深さ61～65cmの主柱穴である。主柱穴を結んだ線は方形となる。P<sub>5</sub>は長径46cm、短径34cmの不整楕円形で深さ54cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央にあり、平面形は長径68cm、短径58cmの不定形で床を6cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく熱を受け赤変硬化している。北西側の炉床からアブライト礫細片が出土している。

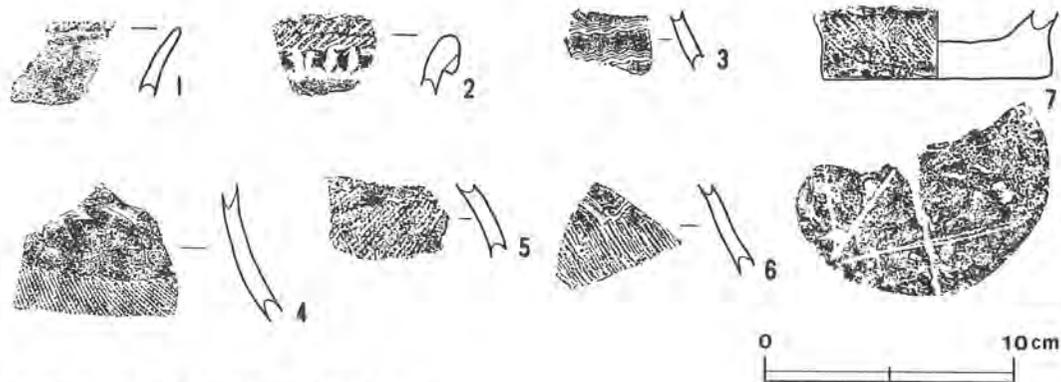
覆土 第4～6層は褐色土で、壁際から中央に向い急傾斜で堆積している。中央部は3層からなる暗褐色土で、ローム小ブロック・焼土粒子を含んでいる。

遺物 覆土下層から弥生式土器壺の細片が少量出土しているが接合できない。アブライト礫が27点（小27）出土しており、総重量は184gである。

所見 覆土は堆積状況と含有物から人為堆積と考えられる。本跡は、弥生時代後期前半と思われる。



第156図 第23号住居跡実測図



第157図 第23号住居跡出土遺物拓影図

第157図1～7は、第23号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1・2は口縁部片である。1は口唇部に縄文が施され、口縁部は無文である。2は口縁部から口唇部にかけて附加条1種（附加2条）の縄文が、口縁部下端にはキザミ目が施されている。3は頸部片で、3本櫛歯による横走波状文が施されている。4～6は胴部から頸部にかけての破片である。胴部には、4は附加条1種（附加2条）、5は単節の縄文が施されている。6は胴部に捺糸文、頸部には3本櫛歯の山形文が施されている。7は底部片で、底面には木葉痕が有る。

表4 西原遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主(長)軸 方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設					炉	遺土	出土遺物	備考
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	B14c2	N-48°-W	隅丸長方形	5.95×4.67	50-55	平坦	／	4	0	6	1	1	自然	弥生式土器、紡錘車、石英礫、粘土	弥生
2	B14e5	N-96°-W	隅丸方形	5.30×[5.28]	10-20	◇	／	4	0	5	1	1	人為	弥生式土器、縄文式土器、紡錘車、石英礫	弥生
3	C13a3	N-41°-W	隅丸長方形	4.80×3.50	24-34	凹凸	／	4	0	5	1	1	自然	弥生式土器、紡錘車、石英礫	弥生 北西部はエリア外
4	B14g3	N-38°-W	隅丸長方形	5.70×5.05	33-40	平坦	／	4	1	5	1	1	◇	弥生式土器、紡錘車、石英礫	弥生
5	B14i7	N-57°-W	隅丸長方形	6.35×5.29	13-21	◇	／	4	0	6	1	1	◇	弥生式土器、紡錘車、石英礫、敲石、不明石製品	弥生
6	B14j3	N-30°-W	隅丸長方形	6.10×5.83	66-74	◇	／	4	0	6	1	2	◇	弥生式土器、紡錘車、敲石、石英礫	弥生
7	C14a3	N-50°-W	隅丸長方形	6.50×5.75	15-40	◇	／	4	0	5	1	3	◇	弥生式土器、敲石、石英礫	弥生 第2号炭窯と重複
8	B14i1	N-46°-W	隅丸長方形	5.40×4.58	17-22	◇	／	4	0	7	1	1	◇	弥生式土器、榎摘具、石英礫	弥生 第5号土器棺墓有り
9	C14a5	N-59°-W	隅丸方形	3.33×3.28	24-27	◇	／	4	0	2	1	0	◇	弥生式土器、石英礫	弥生 第5号土坑と重複
10	C14e3	N-50°-W	隅丸長方形	4.64×3.97	42-58	◇	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、縄文式土器、石英礫	弥生 炬石有り
11	C14c4	N-38°-W	方形	5.30×4.95	12-26	凹凸	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、石英礫	弥生 第7号土器棺墓有り
12	C14d2	N-35°-W	長方形	6.95×5.68	20-30	平坦	／	4	1	5	1	2	◇	弥生式土器、土師器、石英礫	弥生
13	C14e3	N-38°-W	隅丸方形	5.00×4.74	40-55	◇	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、石英礫、軽石	弥生
14	C14f3	N-32°-W	隅丸長方形	4.63×3.67	40-50	◇	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、紡錘車、棒状土製品、土師器、石英礫	弥生
15	C14f1	N-33°-W	隅丸長方形	5.46×4.96	55-61	◇	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、土師器、敲石、石英礫	弥生
16	D14a2	N-42°-W	隅丸方形	5.59×5.17	30-41	◇	／	4	1	5	1	1	◇	弥生式土器、不明土製品、石英礫、敲石、磨石	弥生
17	D13d3	N-54°-W	隅丸方形	5.03×4.83	30-38	◇	／	4	0	5	1	1	人為	弥生式土器、敲石、石英礫	弥生
18	B13d3	N-37°-W	隅丸方形	4.87×4.70	24-34	凹凸	／	4	0	6	1	1	自然	弥生式土器、土師器、石英礫	弥生
19	B13h3	N-42°-W	隅丸方形	5.00×4.75	34-49	平坦	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、土師器、紡錘車、石英礫	弥生 炬石有り
20	B13j7	N-47°-W	隅丸長方形	6.04×5.33	54-61	◇	／	4	1	5	1	1	◇	弥生式土器、榎摘具、石英礫、粘土	弥生 第2号溝と重複
21	C13b3	N-47°-W	隅丸長方形	5.60×4.60	55-60	◇	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、紡錘車、石鍬、砥石、石英礫、粘土	弥生 炬石有り
22	D12j2	N-42°-W	隅丸方形	5.20×5.07	50-60	◇	／	4	0	5	1	1	◇	弥生式土器、土師器、紡錘車、凹石、石英礫	弥生
23	C14e3	N-62°-W	隅丸長方形	4.73×4.23	10-20	◇	／	4	0	5	1	1	人為	弥生式土器、石英礫	弥生 第1号掘立柱建物跡と重複

### 3 土坑

当遺跡からは、34基の土坑が確認されている。それぞれの土坑からの遺物が少なく時期や性格については不明なものが多い。形状に特徴のある5基の土坑について個々に解説を加え、その他については一覧表に記載した。

#### 第1号土坑（第158図）

位置 調査区西端部，C13f<sub>0</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.60m，短径0.95mの不整楕円形で深さは1.50mである。

長径方向 N-40°-W

壁面 外傾して立ち上がっている。南西壁上部は攪乱されている。

底面 皿状で柔らかい。

覆土 壁際には明褐色土が，下層にはローム小ブロックを含む褐色土が，上層には暗褐色土が堆積している。

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期は不明であるが形態から陥し穴と思われる。

#### 第5号土坑（第158図）

位置 調査区中央部，C14a<sub>6</sub>区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第9号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長径2.58m，短径0.84mの不整楕円形で，深さは0.89mである。

長径方向 N-37°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 上層から下層まで褐色土が厚く堆積し，北西端部に暗褐色土が流れ込んでいる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は，出土遺物がなく時期は不明であるが形態から陥し穴と思われる。

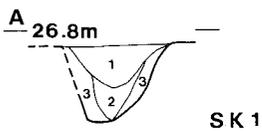
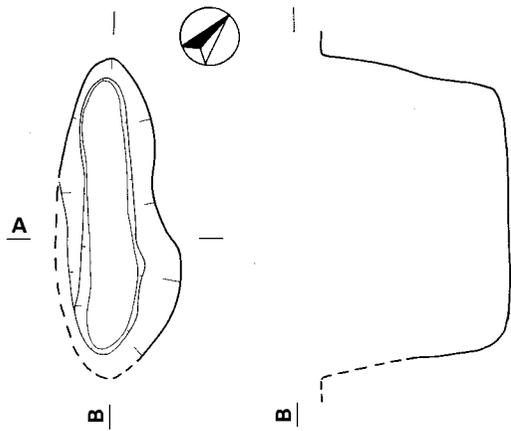
#### 第6号土坑（第158図）

位置 調査区中央部，C14b<sub>4</sub>区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.85m，短径0.78mの長方形で深さは0.75mである。

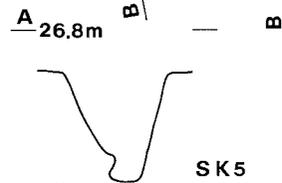
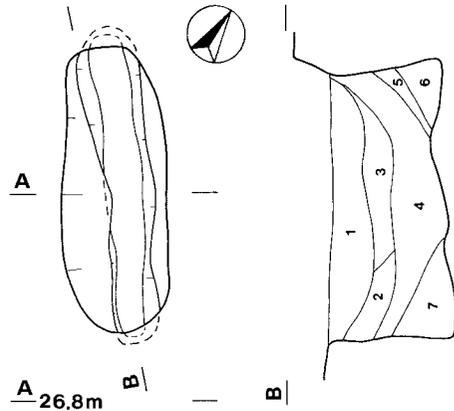
長径方向 N-79°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。



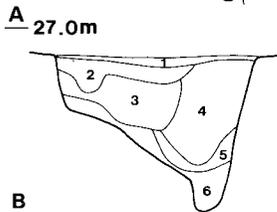
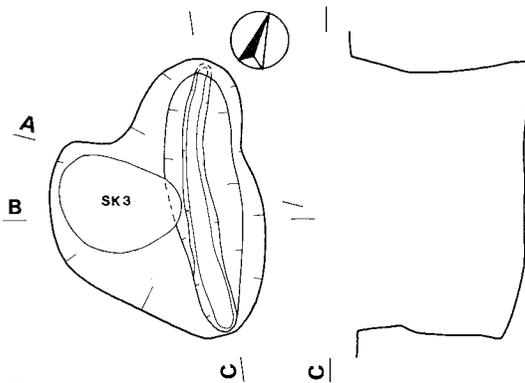
第1号土坑 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック少量。
- 3 明褐色 ローム粒子多量。



第5号土坑

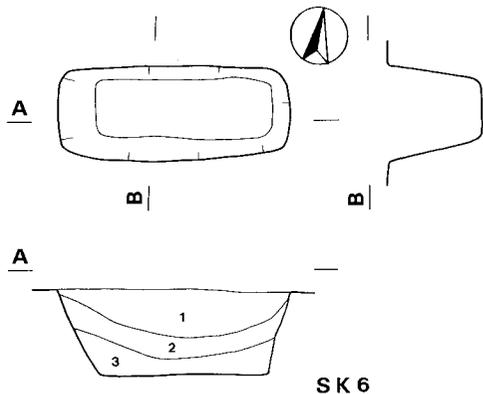
- 1 褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 暗褐色 ローム粒子中量。
- 6 明褐色 ローム粒子多量。
- 7 にぶい褐色 ローム粒子多量。



SK7

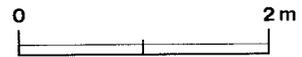
第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，炭化物微量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量，炭化粒子微量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量，炭化粒子微量。
- 5 褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量。



第6号土坑 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量，ロームブロック中量。
- 2 褐色 ローム粒子少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量。



第158図 第1・5・6・7号土坑実測図

底面 平坦で軟らかい。

覆土 3層からなり、各層とも褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器片が極少量出土している。底面からは、わずかであるが骨片が確認されている。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明であるが墓坑と思われる。

#### 第7号土坑（第158図）

位置 調査区中央部、C14a5区を中心に確認されている。

重複関係 第3号土坑が本跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径2.23m、短径[0.7]mの不整楕円形で、深さ1.35mである。

長径方向 N-39°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 長楕円形で、皿状である。

覆土 下・中層は褐色土で、上層は暗褐色土が堆積している。中・上層にロームブロックが混入している。

遺物 出土していない。

所見 時期は不明であるが、形態から考えて陥し穴と思われる。

#### 第32号土坑（第159図）

位置 調査区北部、B14f7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.95m、短径1.70mの楕円形で深さは2.57mである。

長径方向 N-73°-E

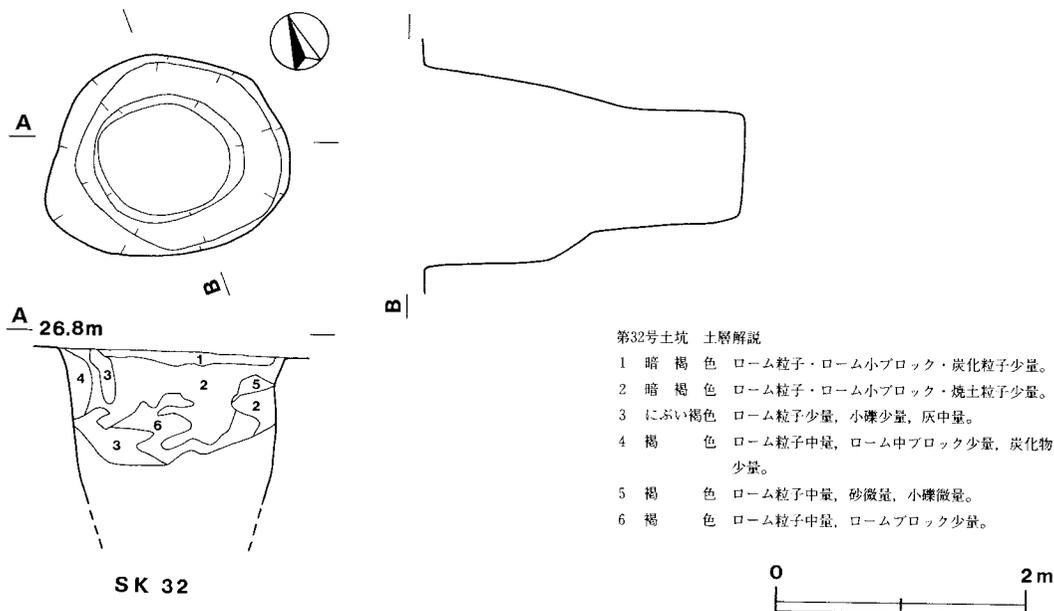
壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦で軟らかい。

覆土 覆土中にロームブロックや小礫が混入している。

遺物 覆土中から流れ込みと思われる弥生式土器片と、Q189の敲石が出土している。

所見 本跡は、遺構に伴う出土遺物がなく時期は不明であるが形態から井戸と思われる。



第159図 第32号土坑実測図

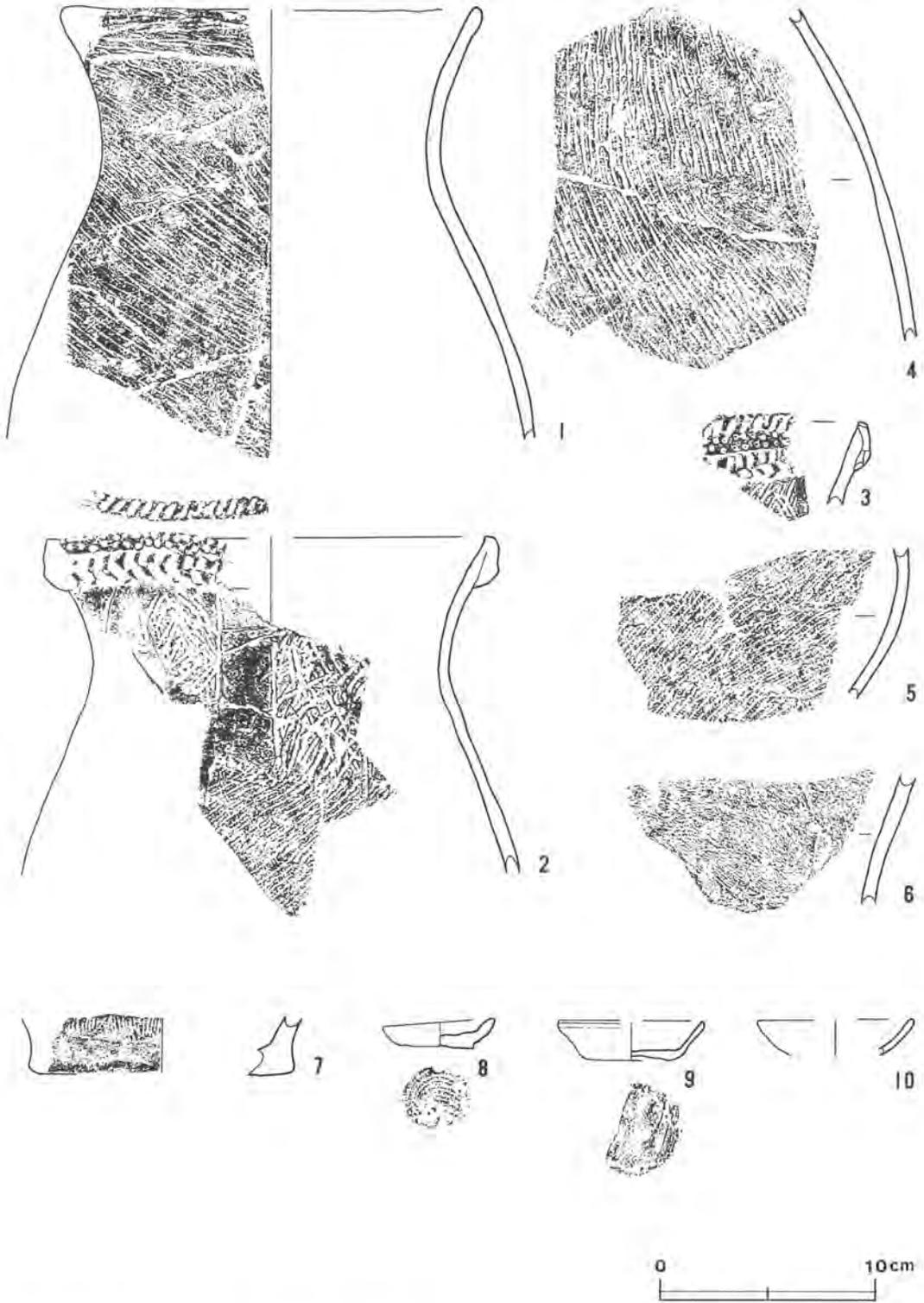
第4号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第160図 1	広口壺 弥生式土器	A [19.6]	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 黄褐色 普通	P 103 5% 内・外面炭化物付着
		B (20.2)	頸部から口縁部は外反する。胴部から口縁部にかけて燃糸文が施されている。複合口縁である。		
2	広口壺 弥生式土器	A [21.0]	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P 104 5% 内・外面炭化物付着
		B (15.7)	頸部から口縁部は外反する。複合口縁で刺突文が2条周回し、下端と口唇部には棒状施文具によるキザミ目が施されている。頸部には縦区画充填格子目文が、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。		

第33号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 8	皿 土師質土器	A 5.0	平底。体部から口縁部は内彎して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切りで雑な切断。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P 105 100%
		B 1.4				
		C 2.7				
9	皿 土師質土器	A [ 6.7]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P 106 40%
		B 1.9				
		C 4.6				
10	皿 土師質土器	A [ 7.3]	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒、雲母、スコリア 橙色 普通	P 107 10%
		B ( 1.7)				

第160図3～7は、土坑から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は口縁部片で、キザミ目と竹管状工具による刺突文が施された複合口縁である。口縁部下端には格子目が施されている。4～6は胴部片である。胴部には、4・5が附加条1種(附加2条)の縄文、6には絡条体による燃糸文が施されている。7の底部片は、胴部には縦位の燃糸文が施されている。



第160图 第4・8・33号土坑出土遺物実測・拓影图

表5 西原遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	C13f <sup>o</sup>	N-40 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	2.60×[0.95]	150	外傾	皿状	自然		陥し穴
2	B14d <sup>o</sup>	N-83 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	1.90×1.20	25	緩斜	皿状	自然		
3	C14a <sup>s</sup>	N-34 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	1.40×[0.95]	57	外傾	平坦	自然		SK-7と重複
4	C13a <sup>s</sup>	N-61 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	2.30×1.68	24	緩斜	平坦	自然	弥生式土器片	
5	C14a <sup>s</sup>	N-37 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	2.58×0.84	89	外傾	皿状	自然		陥し穴 SI-9と重複
6	C14b <sup>e</sup>	N-79 <sup>o</sup> -E	長 方 形	1.85×0.78	75	外傾	平坦	人為	弥生式土器片, 石英礫	墓塚
7	C14a <sup>s</sup>	N-39 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	2.23×[0.70]	135	垂直	皿状	自然		陥し穴 SK-3と重複
8	C14e <sup>s</sup>	N-39 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	2.18×1.59	39	緩斜	皿状	自然	弥生式土器片, 須恵器	
9	C14b <sup>e</sup>	N-75 <sup>o</sup> -E	不整楕円形	2.12×1.46	45	緩斜	皿状	自然		
10	D14c <sup>s</sup>	N-76 <sup>o</sup> -E	不 整 円 形	1.14×1.04	22	緩斜	皿状	自然		
11	C14b <sup>e</sup>	N-18 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	4.58×3.96	38	緩斜	平坦	自然	弥生式土器片, 縄文式土器片, 石英礫, 剥片	
12	C13f <sup>o</sup>	N-45 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	2.30×1.53	31	緩斜	平坦	自然		
13	D13j <sup>o</sup>	N-60 <sup>o</sup> -E	楕 円 形	1.53×0.92	16	緩斜	皿状	自然		
15	C14b <sup>o</sup>	N-49 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	1.90×1.67	84	緩斜	平坦	自然		
16	D14a <sup>o</sup>	N-19 <sup>o</sup> -E	不整楕円形	1.88×1.04	58	緩斜	門凸	自然		
17	D14a <sup>o</sup>	N-36 <sup>o</sup> -E	不 整 形	3.36×1.92	51	緩斜	平坦	自然	弥生式土器片, 剥片	
18	D12j <sup>o</sup>	N-44 <sup>o</sup> -W	楕 円 形	1.49×1.00	17	緩斜	皿状	自然		
19	B14g <sup>s</sup>	N-80 <sup>o</sup> -W	楕 円 形	1.04×0.90	48	緩斜	皿状	自然	弥生式土器片	
20	B14g <sup>s</sup>	N-64 <sup>o</sup> -W	楕 円 形	1.03×0.78	66	外傾	皿状	自然	弥生式土器片	
21	B14f <sup>s</sup>	N-67 <sup>o</sup> -W	楕 円 形	1.08×1.81	39	外傾	皿状	自然		
22	B14g <sup>o</sup>	N-33 <sup>o</sup> -W	円 形	0.98×0.96	37	緩斜	皿状	自然		
23	B14f <sup>s</sup>	N-76 <sup>o</sup> -W	楕 円 形	1.15×0.86	17	緩斜	皿状	自然		
24	B14g <sup>s</sup>	N-49 <sup>o</sup> -E	楕 円 形	0.87×0.69	22	緩斜	皿状	自然		
25	B14d <sup>s</sup>	N-23 <sup>o</sup> -E	楕 円 形	1.39×1.08	57	緩斜	平坦	自然		
26	B14e <sup>s</sup>	N-59 <sup>o</sup> -E	楕 円 形	1.69×1.07	39	緩斜	皿状	自然		
27	B14d <sup>s</sup>	N-65 <sup>o</sup> -W	楕 円 形	1.69×1.50	40	緩斜	皿状	自然		
28	B14c <sup>o</sup>	N-17 <sup>o</sup> -E	不整楕円形	2.59×1.30	72	緩斜	皿状	自然		
29	B14i <sup>o</sup>	N-79 <sup>o</sup> -E	不整楕円形	2.40×1.18	61	緩斜	平坦	自然		
30	B14j <sup>o</sup>	N-72 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	4.14×1.47	40	外傾	平坦	自然	弥生式土器片	
31	C15a <sup>o</sup>	N-61 <sup>o</sup> -E	楕 円 形	1.23×0.89	81	緩斜	平坦	自然	弥生式土器片	
32	B14f <sup>o</sup>	N-73 <sup>o</sup> -E	楕 円 形	1.95×1.70	257	垂直	平坦	人為	弥生式土器片, 土師質土器, 石英 礫, 磁石	井戸
33	B15f <sup>o</sup>	N-63 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	1.87×0.80	32	緩斜	皿状	自然	土師質土器	
34	B15j <sup>o</sup>	N-1 <sup>o</sup> -W	不整楕円形	1.09×0.74	20	緩斜	平坦	自然		
35	D13c <sup>o</sup>	N-30 <sup>o</sup> -W	不 整 円 形	3.40×3.29	25	緩斜	平坦	自然		

## 4 土器棺墓

当遺跡からは6基の土器棺墓が確認されている。その中の2基は、住居跡内から出土しておりどちらも床面を掘り込んでいる。他の4基は、掘り込みが浅いため土器の大部分が耕作等により失われている。いずれも土器棺内から骨片は確認されていない。以下、形態や特徴等について個々に解説する。

### 第2号土器棺墓（第161図）

位置 調査区中央部、C14g4区を中心に確認されている。

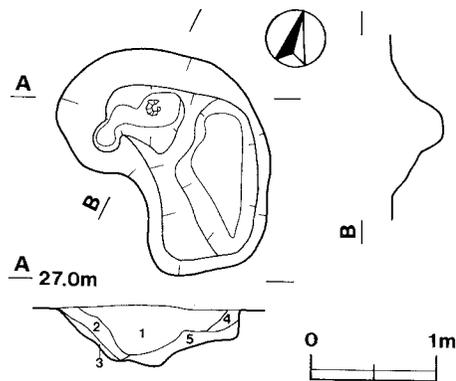
規模と形状 長径156cm，短径98cmの楕円形で、深さ42cmである。

長径方向 N-71°-E

壁 壁高は40~42cmで外傾して立ち上がる。

底面 凹凸があり、中央部はやや窪んでいる。

覆土 各層にロームブロックが含まれ、中央部には暗褐色土が厚く堆積している。



#### 第2号土器棺墓 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量。
- 2 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。
- 4 褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック中量。
- 5 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック中量。

遺物 墓壙のほぼ中央から、3の弥生式土器壺の下半部がつぶれた状態で出土している。細片のため接合できたのはわずかな部分だけである。骨片は検出されていない。

所見 本跡は、弥生時代後期の遺構と考えられる。

第161図 第2号土器棺墓実測図

### 第2号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第163図 1	壺 弥生式土器	B(4.4)	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P113 5%

### 第3号土器棺墓（第162図）

位置 調査区南東端部、D14d7区を中心に確認されている。

規模と形状 長径190cm，短径90cmの不整楕円形で、深さは28cmである。

長径方向 N-65°-W

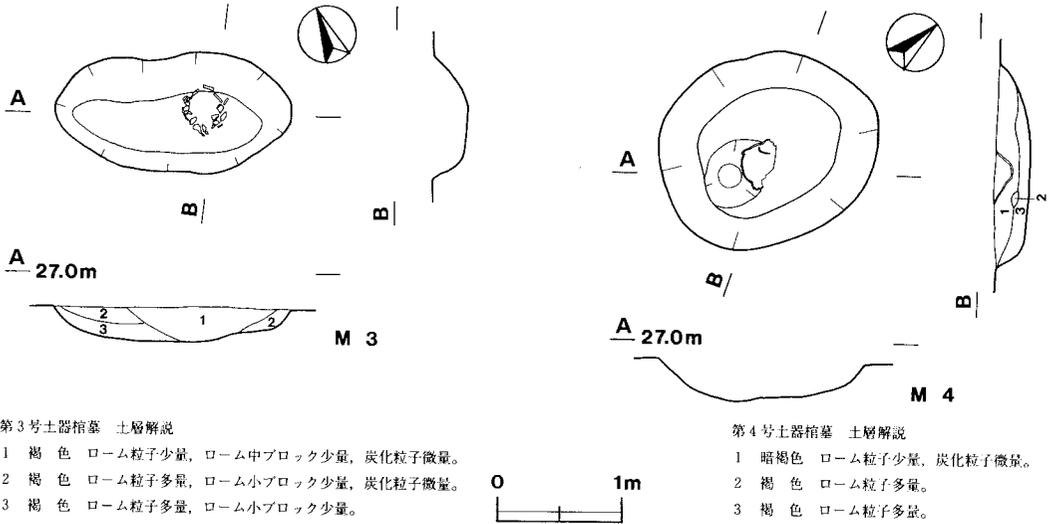
壁 壁高は24~28cmで緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 ロームブロックと炭化粒子を含む褐色土が堆積している。

遺物 中央からやや南東寄りに、1の弥生式土器壺が正位のつぶれた状態で出土している。壺の中や周囲から骨片は検出されていない。

所見 本跡は、遺物の形態から弥生時代後期の遺構と思われる。



第162図 第3・4号土器棺墓実測図

第3号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第163図 2	壺 弥生式土器	B(33.4) C 12.8	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石 雲母, スコリア にぶい黄褐色 普通	P114 50%

第4号土器棺墓(第162図)

位置 調査区南西端部, D13e7区を中心に確認されている。

規模と形状 長径180cm, 短径150cmの楕円形で, 深さは36cmである。

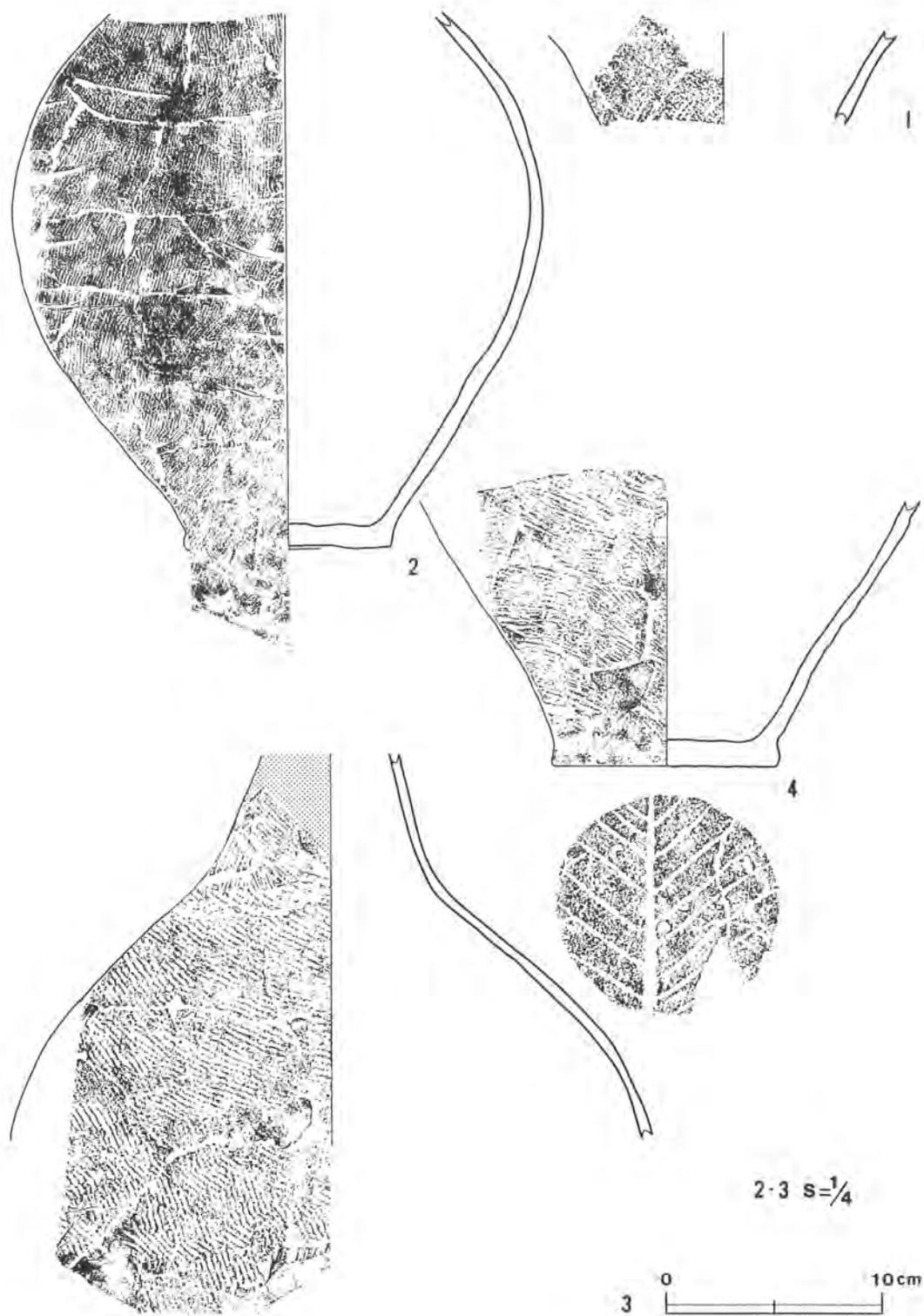
長径方向 N-20°-E

壁 壁高は28~36cmで緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。

遺物 墓塚のほぼ中央から, 2の弥生式土器壺が斜位の状態で出土している。3は2の中から破片の状態で出土している。壺の中や周囲から骨片は検出されていない。



第163图 第2·3·4号土器棺墓出土遺物実測図

所見 本跡は、遺物の形態から弥生時代後期と思われる。

#### 第4号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第163図 3	壺 弥生式土器	B(24.0)	胴部上半から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反する。頸部下半にはヘラ描きによる山形文が6か所施され、それ以外の無文部を赤彩している。胴部と頸部を横走波状文で区画し、胴部には単節縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P115 30%
4	壺 弥生式土器	B(12.3) C 10.5	底部から胴部下半にかけての破片。平底で突出し、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には熱糸文が施され、下端はヘラケズリされている。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P116 20%

#### 第5号土器棺墓（第164図）

位置 調査区北部、B14i<sub>0</sub>区を中心に確認されており、第8号住居跡の北東コーナーに位置している。

規模と形状 長径84cm、短径80cmの不整円形で、深さは48cmである。

長径方向 N-45°-W

壁 壁高は46~48cmで外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

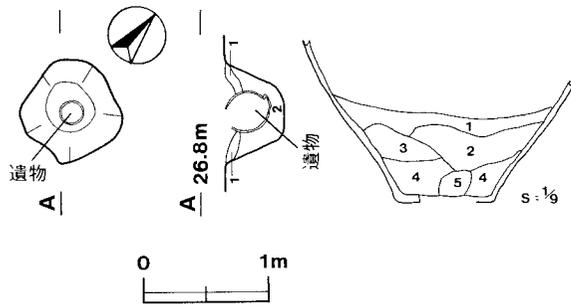
覆土 ローム粒子多量の褐色土が堆積している。

遺物 墓壙の中央から1の弥生式土器壺と、その上部には2の壺胴部片を蓋にしてのせた状態で出土している。壺内部は、空洞で下位にはさらっとした土が堆積していた。底部は穿孔されており、骨片は検出されていない。

所見 本跡は、第8号住居跡内のP<sub>2</sub>の東側床面下から確認されており、上をロームで貼り支柱穴と支柱穴の間に納られていることから、住居跡に伴う遺構と考えられる。第8号住居跡は、支柱穴をそれぞれP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の北東側に設け拡張しており、これは土器棺墓を構築するために行ったと思われる。遺存状態は大変良く、土が少し堆積しているだけでほとんど空洞の状態で出土している。壺内の堆積土は、各層ともロームブロックを含む褐色土で第4層だけが締まっている。本跡は、弥生時代後期前半の遺構と思われる。

#### 第5号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第166図 1	壺 弥生式土器	B 43.0 C 11.8	頸部から口縁部にかけて欠損。平底で、焼成後に穿孔されている。胴部は内彎して立ち上がり、単節縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい黄褐色 普通	P117 80%
2	壺 弥生式土器	B(27.7)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面に輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 褐色 普通	P118 30%



第5号土器棺墓 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量。
- 2 褐色 ローム粒子多量。

第5号土器棺墓 土器棺内土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量 締まり無し。
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 締まり無し。
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, 締まり有り。
- 5 明褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量。

第164図 第5号土器棺墓実測図

第6号土器棺墓 (第165図)

位置 調査区北西端部, C13b5区を中心に確認されている。

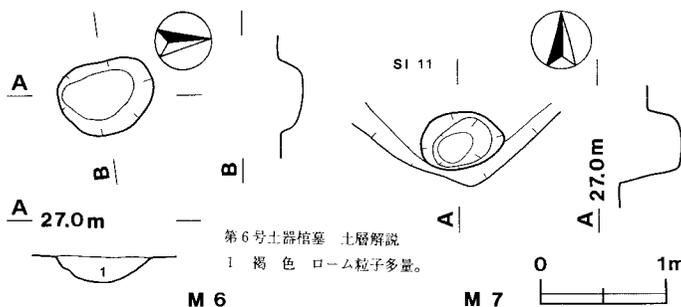
規模と形状 長径76cm, 短径62cmの不整楕円形で, 深さ20cmである。

長径方向 N-25°-W

壁 壁高は14~20cmで, 外傾して立ち上がる。

底面 やや傾斜しているが, 平坦である。

覆土 ローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。



第6号土器棺墓 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量。

遺物 墓壙のほぼ中央から弥生式土器壺がおしつぶされた状態の破片で, まとまって出土している。細片のため接合不可能である。

所見 本跡は, 弥生時代後期の遺構と思われる。

第165図 第6・7号土器棺墓実測図

第7号土器棺墓 (第165図)

位置 調査区中央部, C14c4区を中心に確認されており, 第11号住居跡の南コーナーに位置している。

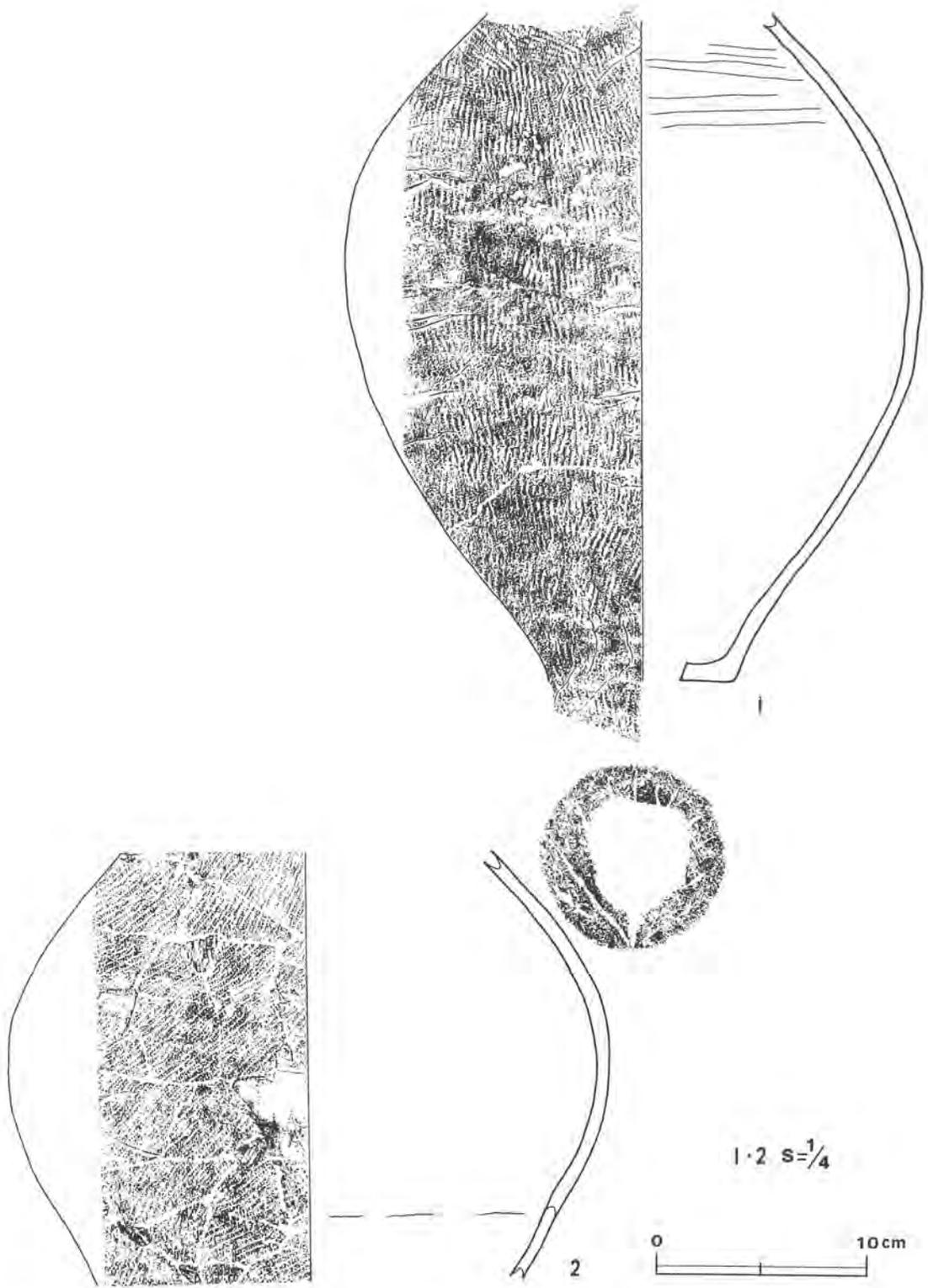
規模と形状 長径70cm, 短径48cmの楕円形で, 深さ24cmである。

長径方向 N-90°-W

壁 壁高は24~28cmで, 外傾して立ち上がる。

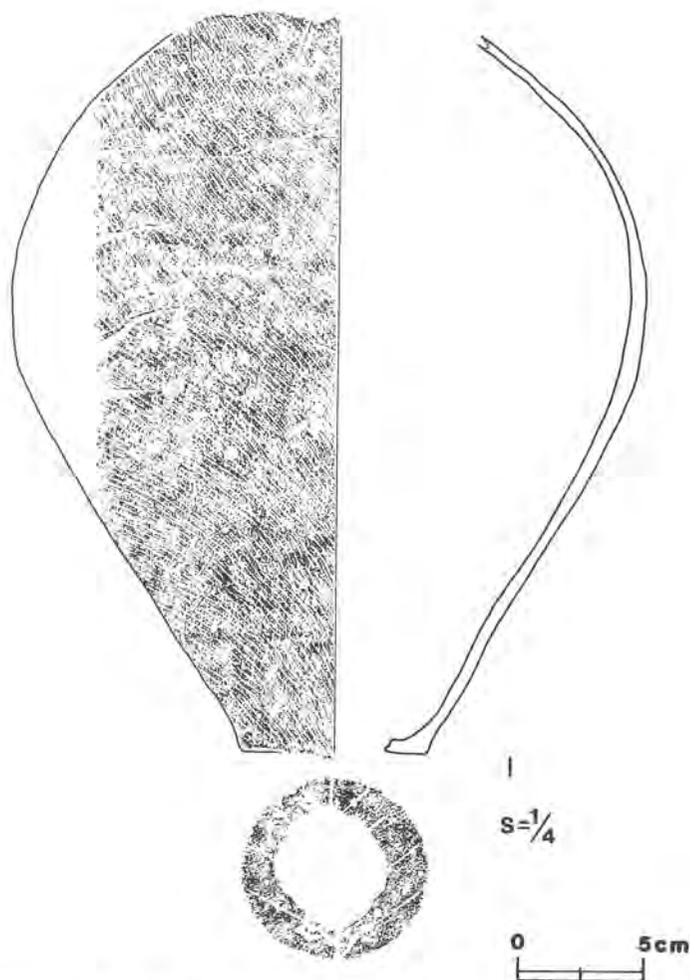
底面 皿状である。

遺物 墓壙の中央から1の弥生式土器壺が正位の状態で出土している。壺内部から骨片は検出されていない。底部は穿孔されている。



第166图 第5号土器棺墓出土遺物実測図

所見 本跡は、第11号住居跡の南コーナーに接して構築されており、壁の一部を共有している。住居跡と土坑の重複はなく、出土状況から判断して住居跡に伴うと思われる。本跡は、弥生時代後期前半の遺構と思われる。



第167図 第7号土器棺墓出土遺物実測図

第7号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第167図 I	壺 弥生式土器	B(38.8) C 10.0	頸部から口縁部にかけて欠損。平底で、焼成後に穿孔されている。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P119 80%

## 5 火葬墓

当遺跡からは、火葬墓が1基確認され土器内から焼けた骨が検出されている。奈良・平安時代のものと考えられるが、他に当該期の遺構は確認されていない。以下、形態や特徴等について解説する。

第1号火葬墓（第168図）

位置 調査区北部，B14f3区を中心に確認されている。

規模と形状 長径80cm，短径42cmの楕円形で，深さ32cmである。

長径方向 N-51°-W

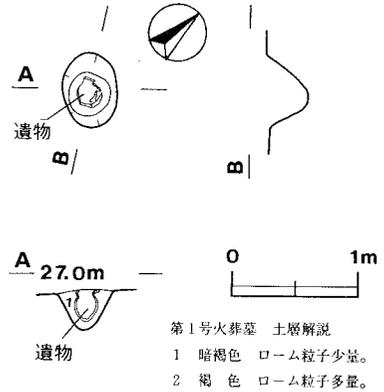
壁 壁高は30~32cmで外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

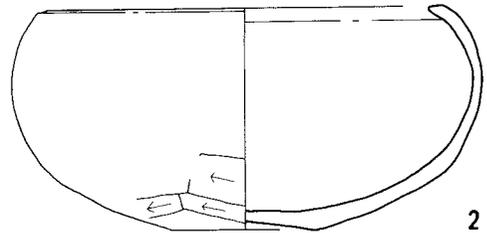
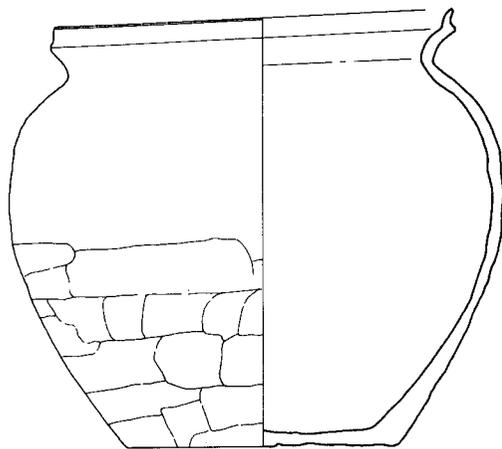
覆土 ローム粒子を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物 墓壙の中央から，1の土師器甕が正位の状態出土している。甕の口縁部上から2の鉢が逆位で出土しており，蓋として置かれていたものと思われる。甕内部からは焼骨の細片が多量に検出されている。

所見 本跡は，甕の内部から多量の焼骨が検出されたことから火葬墓と思われ，土師器の甕の形態から，8世紀末葉から9世紀初頭の遺構と考えられる。



第168図 第1号火葬墓実測図



第169図 第1号火葬墓出土遺物実測図

第1号火葬墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第169図 1	甕 土師器	A 15.8 B 17.7 C 10.9	平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から強く外反し、口唇部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部下 半ヘラケズリ、上半ナデ。底面 に木葉痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P111 90%
2	鉢 土師器	A 16.2 B 9.0 C [ 5.8]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内彎して立ち上 がる。	体部内・外面ナデ。底面に木葉 痕有り。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P112 50%

6 溝

当遺跡からは、溝が3条確認されている。各溝の時期や性格については遺構に伴う出土遺物がなく不明な点が多い。

第1号溝（第170図）

位置 調査区西端部，D13b<sub>3</sub>区～D13e<sub>2</sub>区にかけて確認されている。本跡の南端部は，原出口遺跡へ延びている。

規模と形状 確認された長さは15.40mで，上幅1.12～1.14m，下幅0.60～0.68m，深さは0.40～0.46mである。断面形は，逆台形状である。

方向 D13e<sub>2</sub>区から北（N-7°-E）へほぼ直線的に延び，第2号溝と並列している。

覆土 3層からなり，下層は褐色土，中層は暗褐色土，上層は黒褐色土である。

遺物 覆土中から流れ込みと思われる弥生式土器片が極少量出土している。1は弥生式土器のミニチュア土器（高坏）で覆土中層から出土している。

所見 本跡は，遺構に伴う出土遺物がなく時期・性格等は不明である。

第2号溝（第171図）

位置 調査区西部，D13g<sub>3</sub>区～B13f<sub>7</sub>区にかけて確認されている。本跡の南端部は，原出口遺跡へ延びている。

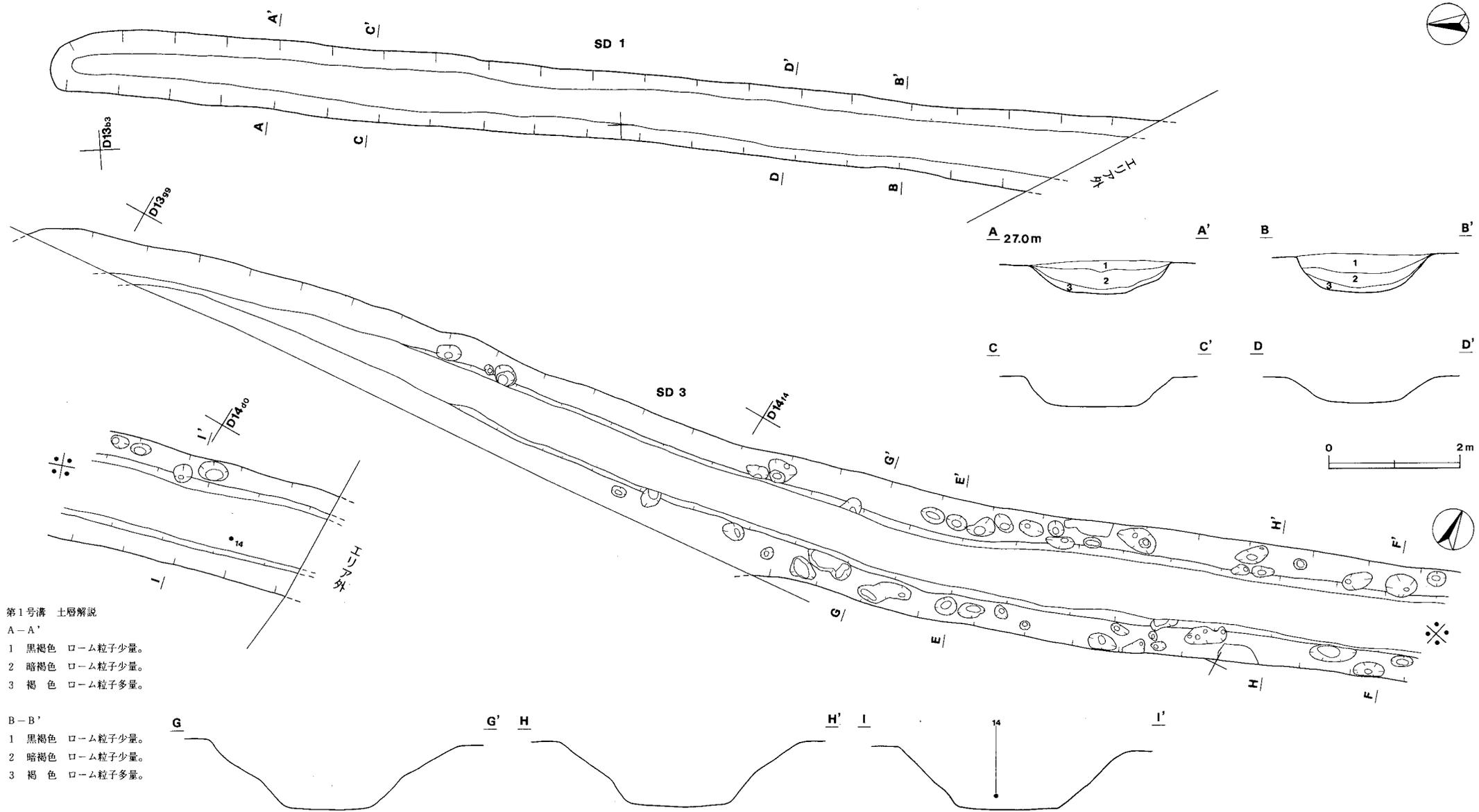
規模と形状 確認された長さは85.78mで，上幅1.10～1.50m，下幅0.48～0.62m，深さは0.32～0.52mである。断面形は，逆台形状である。

方向 D13g<sub>3</sub>区から北（N-15°-E）へほぼ直線的に延び，第1号溝と並列している。

覆土 3層からなり，下・中層は暗褐色土，上層は黒褐色土である。

遺物 覆土中から流れ込みと思われる弥生式土器片が極少量出土している。2は弥生式土器高坏で覆土中層から出土している。

所見 本跡は，遺構に伴う出土遺物がなく時期・性格等は不明であるが，第1号溝と並列しており同時期もしくは近い時期に構築されたと思われる。



第1号溝 土層解説

- A-A'
- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
  - 2 暗褐色 ローム粒子少量。
  - 3 褐色 ローム粒子多量。

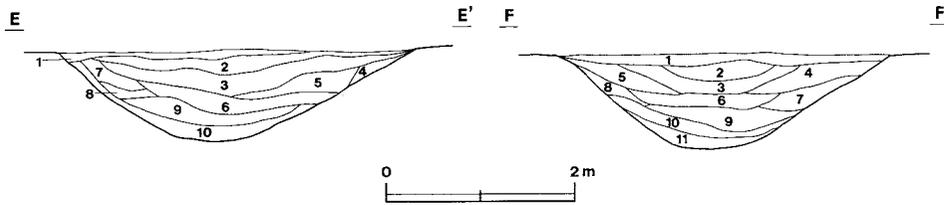
- B-B'
- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
  - 2 暗褐色 ローム粒子少量。
  - 3 褐色 ローム粒子多量。

第3号溝 土層解説

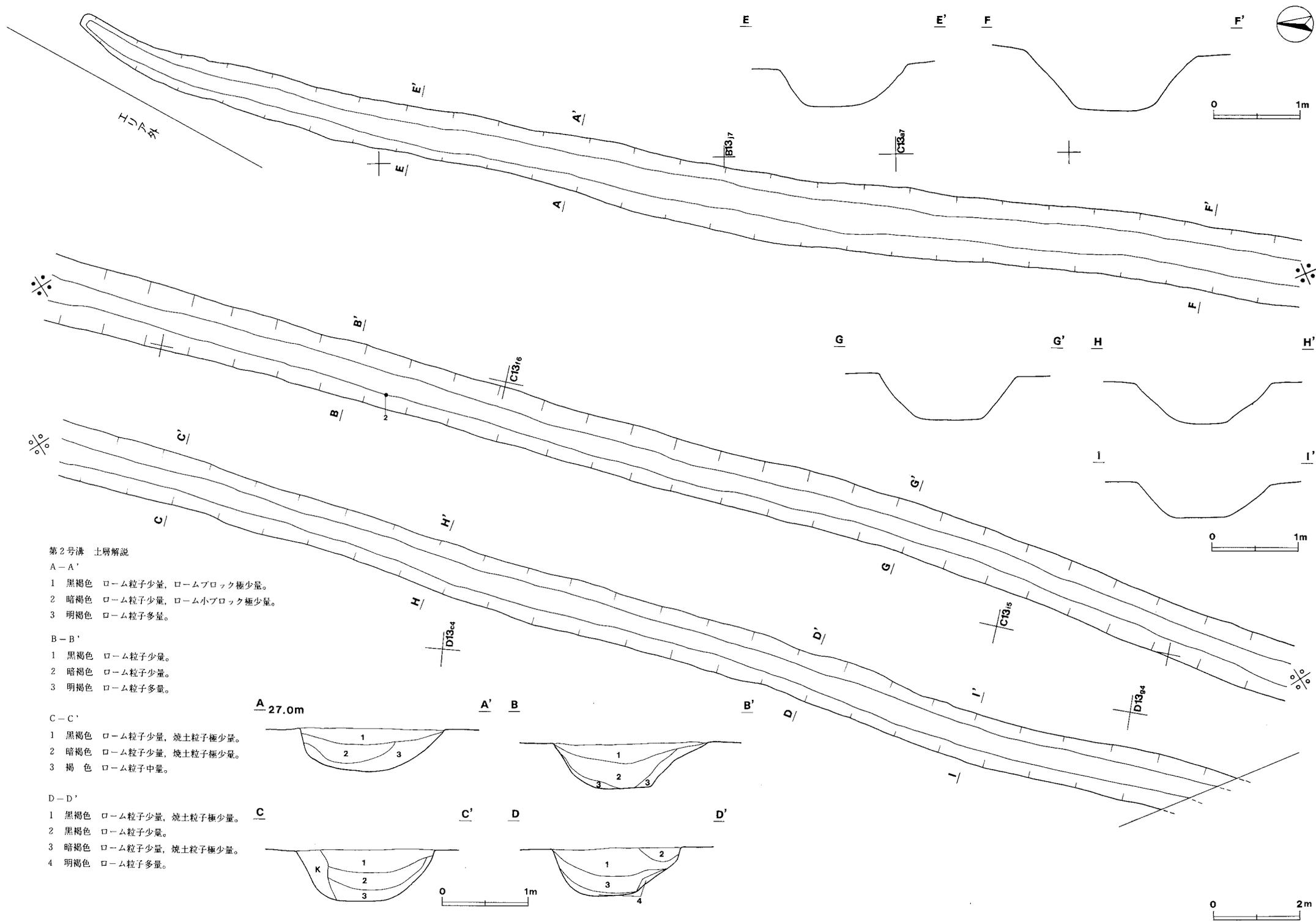
- E-E'
- 1 黒褐色 ローム粒子極少量。
  - 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
  - 3 黒褐色 ローム粒子少量, 黒褐色土ブロック多量。
  - 4 明褐色 ローム粒子多量。
  - 5 黒褐色 ローム粒子少量。
  - 6 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量。
  - 7 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
  - 8 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量。
  - 9 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量。
  - 10 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量。

F-F'

- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 黒褐色土ブロック多量。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 黒色土ブロック少量。
- 6 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量。
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
- 8 暗褐色 ローム粒子少量。
- 9 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量。
- 10 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量。
- 11 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量。



第170図 第1・3号溝実測図



A-A'

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック極少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック極少量。
- 3 明褐色 ローム粒子多量。

B-B'

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量。
- 3 明褐色 ローム粒子多量。

C-C'

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子極少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子極少量。
- 3 褐色 ローム粒子中量。

D-D'

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子極少量。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子極少量。
- 4 明褐色 ローム粒子多量。

第171図 第2号溝実測図

第3号溝（第170図）

位置 調査区南端部，D14e0区～D13h9区にかけて確認されている。本跡の両端部は，エリヤ外へ延びている。

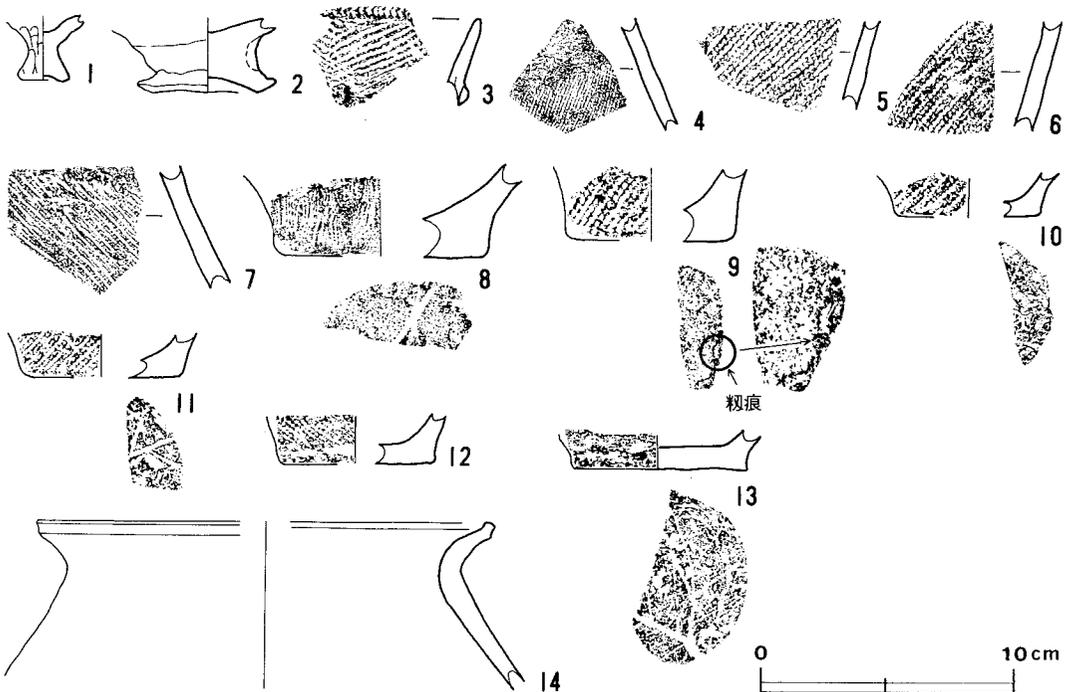
規模と形状 確認された長さは48.44mで，上幅3.47～3.83m，下幅1.32～1.56m，深さは0.98～1.04mである。断面形は，逆台形状である。

方向 D13h9区から東（N-82°-E）へ直線的に延びている。

覆土 10層からなり，暗褐色土層が主で間に黒褐色土層が数層入り，ロームブロックが多くの層に混入している。第2・3・6層は大変硬く締まっており，特に第3層には黒褐色土がブロック状に含まれている。

遺物 覆土中から流れ込みと思われる14の土師器甕が出土している。他には弥生式土器片や土師器片が極少量出土している。

所見 覆土の状況から，道路として使用された可能性がある。壁面の中央から上の部分には多くのピットが有り，第6層のレベルとほぼ同じに関連性があると思われる。本跡は，遺構に伴う出土遺物がなく時期・性格等は不明である。



第172図 第1・2・3号溝出土遺物実測・拓影図

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	ミニチュア 弥生式土器	B( 2.7) D 2.1 E 1.4	高坏。脚部から坏底部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開き，坏部は外傾して立ち上がり下位に稜を持つ。外面はヘラケズリ後ナデられている。	砂粒，石英，長石 雲母，スコリア にぶい褐色 普通	P100 60%

## 第2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第172図 2	高坏 弥生式土器	D[ 5.6] E( 3.0)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部と坏部の接合部に隆帯を貼り補強している。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P101 30%

第172図3～13は、第2号溝から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は縄文施文の複合口縁で、口縁部下端には瘤が貼られている。4は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。5～7は胴部片である。8～13は底部片で、胴部には縄文が施されている。縄文原体は、8が撚糸、9～12が附加条1種（附加2条）である。底面には、8・10・11・13には木葉痕、9には稗痕が有る。

## 第3号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 14	甕 土師器	A[16.2] B( 4.5)	口縁部片。口縁部は頸部から強く外反し、口唇部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、石英、長石 スコリア にぶい褐色 普通	P102 5%

## 7 炭焼窯跡

当遺跡からは東部に2基隣接して確認されている。地元の人のお話では、当遺跡の東側に元は浅く緩やかな小支谷が入り込んでいたが、土を入れて耕作地に変えたとのことで、炭焼窯が構築された当時は緩やかな斜面になっていたと考えられる。

### 第1号炭焼窯跡（第173図）

**位置** 調査区東端部、B14j0区を中心に確認されている。

**規模と平面形** 全長2.52m、最大幅1.34mの不整楕円形で深さは0.40mである。断面形は「ㄣ」状である。

**主軸方向** N-65°-W

**壁** 壁高は24～32cmでほぼ垂直に立ち上がっている。壁全体に20cm前後の花崗岩の割石を積み窯壁としている。

**窯体底部** 一辺20～50cm前後の花崗岩の偏平な割石が全面に敷かれている。

**焚口部** 窯体南東端にあり、長さ0.36m、幅0.34mで底部は広い花崗岩1枚で構築されている。

**焚口部前面** 攪乱により不明。

**煙道部** 奥壁中央にあり、孔径約24cmで入口部は花崗岩で補強されている。底面から上面までは28cm程でほぼ垂直に立ち上がり、周囲は厚く赤変硬化している。

**覆土** 焼土ブロック・焼土粒子・花崗岩の礫を含む赤褐色土が堆積しており、窯体の崩落による

ものと思われる。

遺物 出土していない。

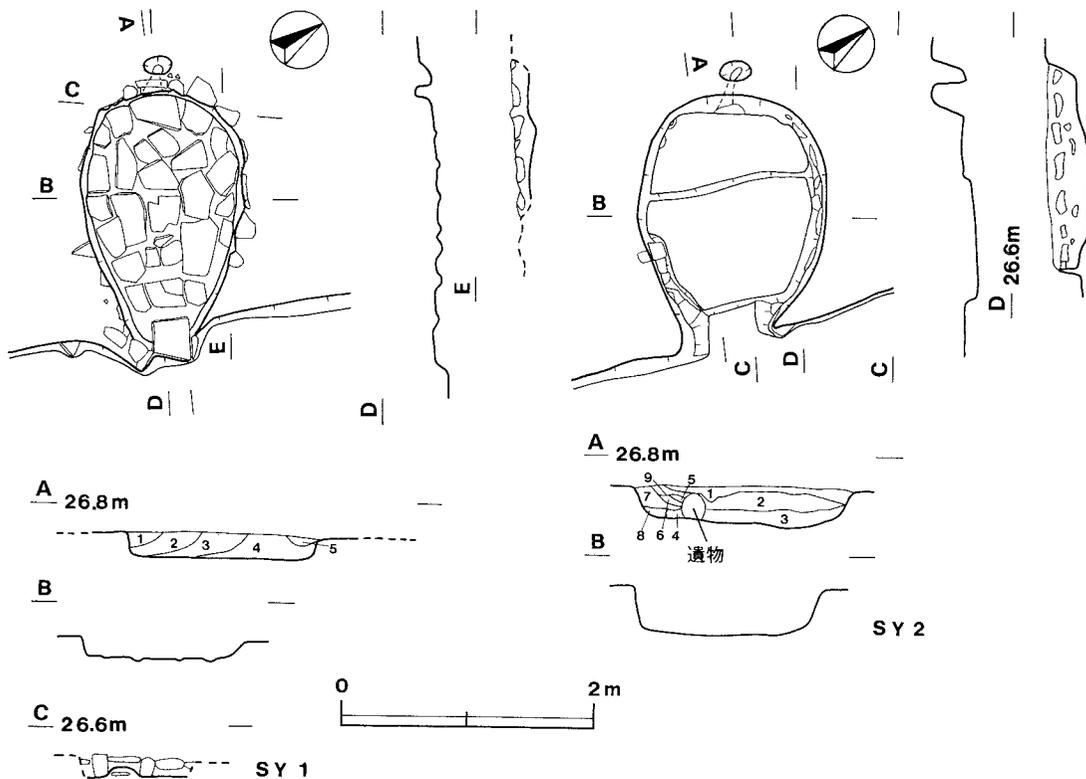
所見 敷石周囲と壁の土は砂質土で窯体の構築材として用いられている。敷石を除去した結果、下の砂質土もよく熱を受け赤変硬化している。本跡は、遺構に伴う出土遺物はないが遺構の形態と構築材から近世以降に構築されたと思われる。

### 第2号炭焼窯跡（第173図）

位置 調査区東端部，C14a9区を中心に確認されている。

重複関係 本跡が第7号住居跡の南東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 全長2.50m，最大幅1.84mの不整楕円形で深さは0.40mである。断面形は「U」



#### 第1号炭焼窯跡 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 2 赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量，ローム粒子少量。
- 3 赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量，粘土ブロック少量。
- 4 赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量，粘土ブロック少量。
- 5 におい褐色 焼土粒子中量。

#### 第2号炭焼窯跡 土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土粒子多量，焼土大ブロック少量，ローム粒子少量，炭化物少量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，ローム粒子少量，炭化物少量。
- 3 灰赤褐色 焼土粒子多量，炭化物少量，砂少量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土中ブロック中量，炭化物少量。
- 5 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量。
- 6 灰褐色 焼土粒子少量。
- 7 明赤褐色 焼土粒子多量。
- 8 褐色 焼土粒子少量，炭化物少量，塵少量。
- 9 におい赤褐色 焼土粒子中量，炭化物少量。

第173図 第1・2号炭焼窯跡実測図

状である。

主軸方向 N-50°-W

壁 壁高36~38cmで、外傾して立ち上がっている。壁全体が熱を受け赤変硬化している。側壁には20cm前後の花崗岩の割石を積み隙間には砂質土を詰めて窯壁としている。

窯体底部 平坦であるが、中央からやや奥壁寄りに段を持ち少し高くなっており、焚口部側は緩やかに傾斜している。

焚口部 窯体南東端にあり、長さ0.46m、幅0.74mで窯体底部と段差が有り8cm程上がる。底面は熱を受け赤変硬化している。

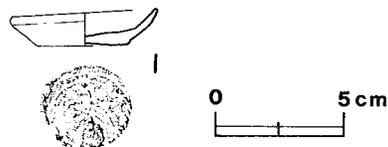
焚口部前面 攪乱により不明。

煙道部 奥壁中央にあり、孔径18~26cmの楕円形で底面から上面までは26cm程でほぼ垂直に立ち上がり、周囲は厚く赤変硬化している。

覆土 焼土ブロック・焼土粒子・花崗岩の礫を含む赤褐色土が堆積しており、窯体の崩落によるものと思われる。

遺物 覆土中から1の土師質土器皿が出土している。

所見 窯体底部は煤かタール状の物でほぼ全面が覆われ黒色となっている。壁面の花崗岩はまばらで雑な造りである。2基が近接しすぎており、構築の仕方にも違いが有ることから、同時に構築されたのではなく第2号の後に第1号を増設か作り替えをしたものと思われる。本跡は、遺構に伴う出土遺物はないが遺構の形態と構築材から近世以降に構築されたと思われる。



第174図 第2号炭焼窯跡出土遺物実測図

#### 第2号炭焼窯跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 1	皿 土師質土器	A 5.8	底部から口縁部にかけての破片。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母、スコリア 橙色 普通	P108 70%
		B 1.5	平底。体部から口縁部は外傾し			
		C 3.7	て立ち上がる。			

## 8 掘立柱建物跡

調査区東端部の緩やかな傾斜地に、掘立柱建物跡が1棟確認されている。遺構は調査区外に延びており、調査できたのは西側半分で全体としては不明な点が多い。

以下、特徴や出土遺物について記載する。

### 第1号掘立柱建物跡（第175図）

位置 調査区東端部、C15b1区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、第15号土坑に掘り込まれている。

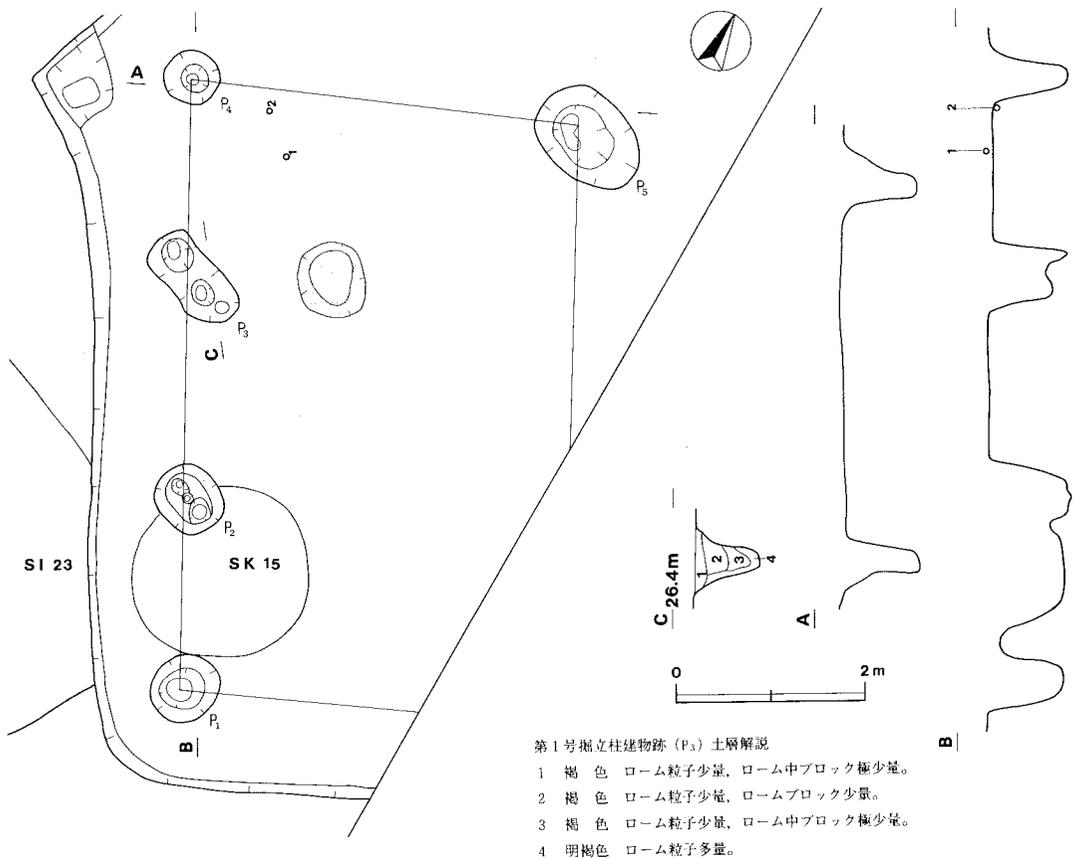
長軸方向 N-26°-W

規模 東西1間(4.1m)、南北5間(6.5m)の建物で、柱間寸法は桁行2.1~2.6m、梁行4.3mである。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.6~0.9mの楕円形で、深さは0.6~0.8mである。柱痕跡はP<sub>3</sub>で確認されており、柱の径は約26cm前後である。

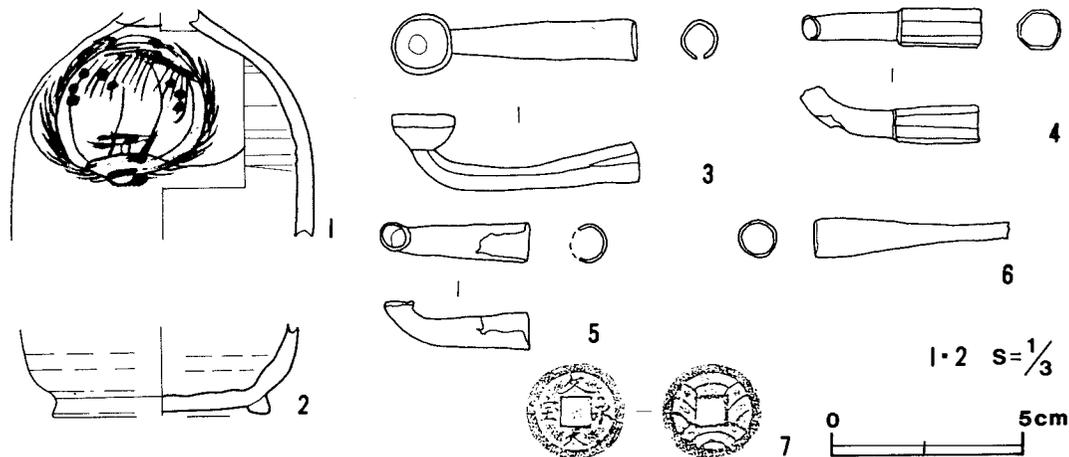
炉 P<sub>3</sub>の東側に位置し、長径82cm、短径70cmの楕円形で、深さ6cmの地床炉である。炉床は中央部がよく熱を受け赤変硬化している。

遺物 1の磁器片と2の陶器片はP<sub>4</sub>の東側から、3~6の煙管は炉の覆土中からそれぞれ出土している。7の古銭(文久永寶)は柱穴の覆土中から出土している。

所見 配置や時期等から考えて第1・2号炭焼窯跡の関連施設であった可能性もある。本跡は、出土遺物から17世紀後半以降と思われる。



第175図 第1号掘立柱建物跡実測図



第176図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測・拓影図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第176図 1	瓶 磁器	B( 9.2)	体部上半の破片。体部上半は内彎して立ち上がる。	体部外面に、円窓を描き中に楼閣山水文がある。体部内面に轆轤成形痕有り。	明緑灰色 (釉) 透明 良好	P 109 10% 肥前系
2	瓶 陶器	B( 3.7) C( 8.6)	底部から体部にかけての破片。低い高台。体部は内彎して立ち上がる。	黄釉が外面に薄く施され、体部下位は狭い幅で釉がぬけている。底面に釉が付着している。	淡橙色 (釉) 茶 良好	P 110 5% 瀬戸・美濃系

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第176図3	煙管	(6.5)	2.1	1.1	(7.9)	覆土 M10 雁首
4	煙管	(4.7)	1.4	1.0	(4.9)	覆土 M11 雁首
5	煙管	4.0	1.2	1.0	(2.3)	覆土 M12 雁首
6	煙管	5.2	—	1.1	(3.7)	覆土 M 8 吸口

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
第176図7	文久永宝	1863	日本	覆土	M13

## 9 遺構外出土遺物

当調査区からは、遺構に伴わない縄文時代・弥生時代及び中・近世の土器片や土製品・石製品等が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて取り上げて記載する。

### (1) 縄文式土器

出土した土器は、縄文時代前期から後期の土器片である。縄文式土器を時期や特徴から第1～

3群に分類し記載する。

#### 第1群 前期後葉の土器群（第178図6～9）

6は胴部片で、貝殻波状文が施されている。7～9は、いずれも細沈線が施されている胴部片である。6は浮島式、7～9は十三菩提式土器と考えられる。

#### 第2群 中期後葉の土器群（第178図10～13）

10は口縁部片で、沈線によって区画され、区画内には単節RLの縄文が施されている。11は胴部片で、沈線で区画され、区画内には縄文が施されているが摩滅している。12・13の胴部片は単節RLを施して沈線を垂下させ、沈線内は磨消している。12と13は同一個体と思われる。加曾利EⅢ式土器と考えられる。

#### 第3群 後期の土器群（第178図14～21）

##### 第1類 前葉の土器（三十稲葉式）

14は胴部片で、胴部全面に半截竹管による刺突文が施されている。

##### 第2類 中葉の土器（加曾利B2式）

15～17は単節縄文施文の胴部片である。15は、縄文地文に斜位の沈線が施されている。16の縄文原体は、単節LRである。18・19は口縁部片で、口縁部下位は横位の沈線で区画し、口縁部には縦位の沈線が施されている。20は波状口縁で、下位には横位の沈線が施されている。

##### 第3類 後葉の土器（安行Ⅰ式）

21は、口縁に沿って縄文施文の隆起帯が巡っている。各隆起帯の下端には棒状工具による刺突文が施されている。

#### (2) 弥生式土器

出土した土器は、弥生時代後期の土器片である。弥生式土器を特徴から第1～6群に分類し記載する。

#### 第1群 複合口縁の土器（第178図22～29）

22～24は口縁部に附加条1種（附加2条）の縄文が施され、棒状工具により押圧されている。25・26は口縁部を無文とし、下端は棒状工具による押圧が施されている。27は口縁部に撚糸文が施されている。28・29は口唇部にキザミ目が施され、28の口縁部は竹管状工具により刺突されている。

#### 第2群 櫛描文の施されている土器（第178図30～34）

30は縄文施文の単口縁で、2本櫛歯による横走波状文が施されている。31は複合口縁で、頸部上位に4本櫛歯による横走文が施されている。32の頸部片は横走波状文が施されている。33・34は胴部から頸部にかけての破片で、胴部には縄文が施されている。櫛描文は、33が山形文、34が

2本櫛歯による横走波状文である。

第3群 格子目文の施されている土器（第178図35）

35は頸部片で、ヘラ状工具により縦区画され、区画内に格子目文が施されている。

第4群 頸部下半を無文帯とする土器（第178図36・37）

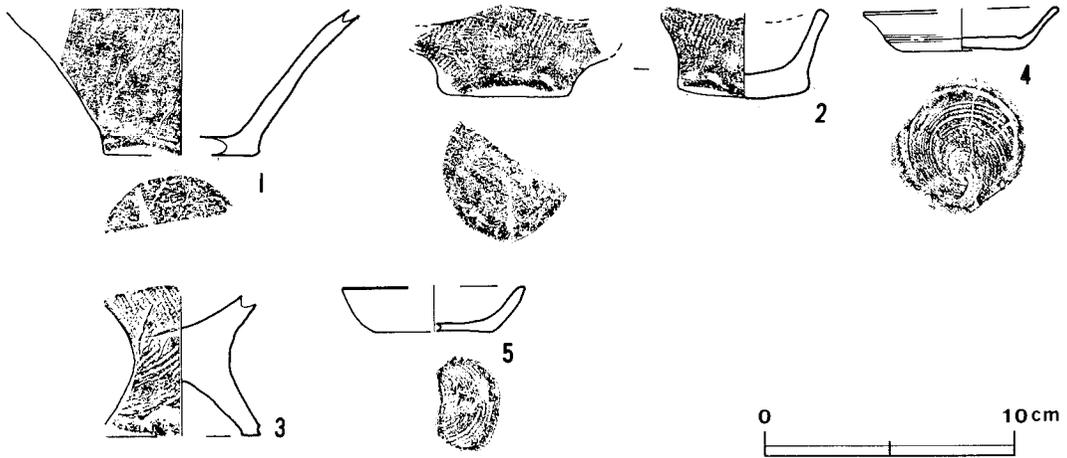
36・37は胴部から頸部にかけての破片で、頸部を無文とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第5群 縄文の施されている土器（第178・179図38～40）

38は胴部から頸部にかけての破片で、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文を施し、頸部は縄文原体を押圧して縦区画している。39・40は胴部片である。39は附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。40は附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。

第6群 底部片（第179図41～49）

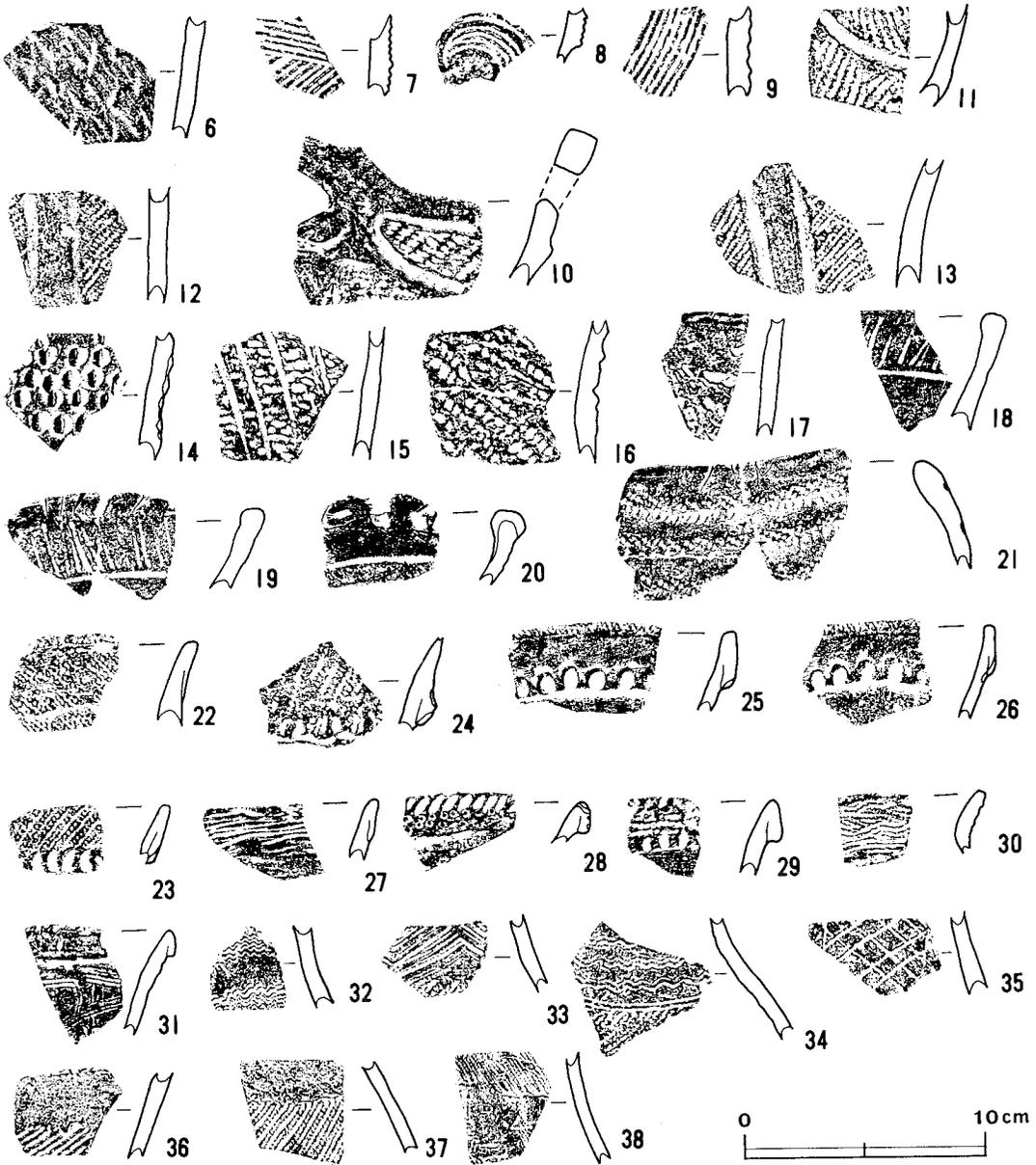
41・42はいずれも胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。42の底面には木葉痕がある。43・44の胴部は附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。45～47の胴部は撚糸文が施され、底面には45・46が木葉痕、47には布目痕がある。48・49は胴部に縄文が施されているが摩滅している。底面にはどちらも木葉痕がある。



第177図 遺構外出土遺物実測図(1)

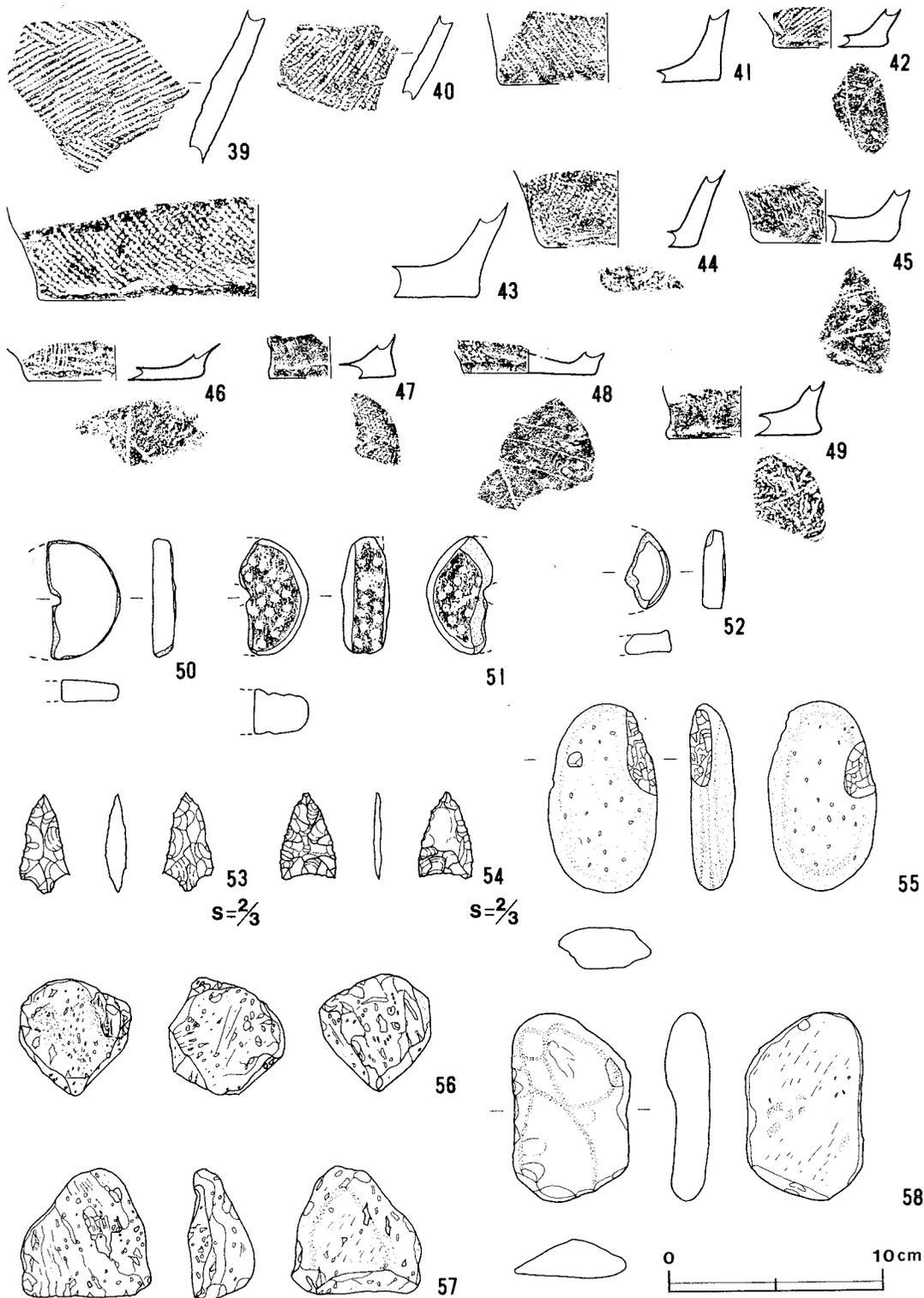
遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第177図 1	壺 弥生式土器	B( 6.0) C( 6.0)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で突出する。胴部は外反して立ち上がる。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい褐色 普通	P93 10%
2	小形鉢 弥生式土器	A( 6.5) B 3.6 C 5.2	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、弱い張り出しを持つ。胴部から口縁部は外傾して立ち上がり、平面形は楕円状である。外面には縄文が施され、内面はナデられている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア 橙色 普通	P94 80%

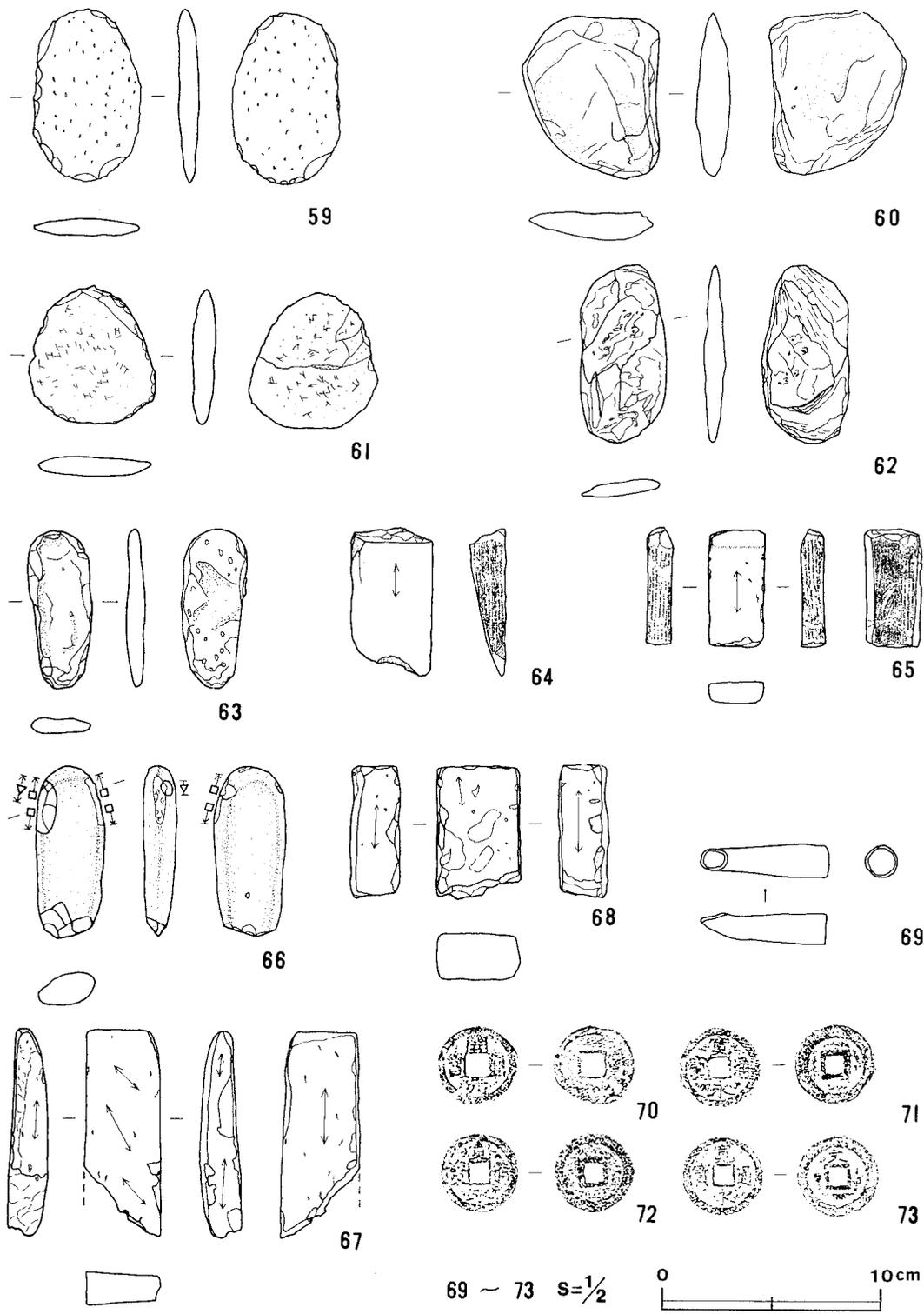


第178図 遺構外出土遺物拓影図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第177図 3	高坏 弥生式土器	B(5.7)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。 外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 雲母、スコリア にぶい橙色 普通	P95 20%



第179図 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)



第180図 遺構外出土遺物実測・拓影図(4)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 4	皿 土師質土器	A〔7.8〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒、雲母 黒色 普通	P96 50% 内・外面炭化物付着
		B 1.7				
		C 5.2				
5	皿 土師質土器	A〔7.4〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は内彎して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒、雲母、スコリア 赤褐色 普通	P97 20%
		B 1.8				
		C〔4.8〕				

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第179図50	紡錘車	5.6	3.4	1.0	—	(22.2)	50	表 採	D P 21
51	紡錘車	5.4	3.0	2.1	—	(32.7)	40	表 採	D P 22
52	紡錘車	(3.8)	(2.0)	1.1	—	(5.9)	20	表 採	D P 23

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第179図53	石 鏃	2.3	1.1	0.5	0.9	チャート	表 採	Q 38
54	石 鏃	2.0	1.3	0.2	0.6	チャート	表 採	Q 76
55	不明石製品	8.8	5.0	2.1	127.2	凝灰岩	表 採	Q 75 穂摘具の可能性有り
56	軽石	5.5	5.2	5.4	21.2	流紋岩	14グリット	Q 77
57	軽石	6.1	6.1	3.1	13.6	流紋岩	14グリット	Q 78
58	不明石製品	8.7	5.4	1.9	118.7	砂岩	2グリット	Q 140 穂摘具の可能性有り
第180図59	穂摘具	7.9	4.9	0.9	47.6	ホルンフェルス	C13h <sub>1</sub>	Q 141
60	穂摘具	7.6	6.2	1.4	78.4	ホルンフェルス	43グリット	Q 142
61	穂摘具	6.3	5.8	1.1	49.6	ホルンフェルス	36グリット	Q 143
62	穂摘具	8.3	3.9	0.9	35.9	ホルンフェルス	11グリット	Q 144
63	穂摘具	7.4	3.1	1.0	22.2	ホルンフェルス	C13h <sub>1</sub>	Q 145
64	砥石	6.7	3.7	1.6	50.2	凝灰岩	SD-3覆土	Q 146 破片
65	砥石	5.5	2.6	1.2	27.5	凝灰岩	SD-3覆土	Q 164 破片
66	敲石	7.9	3.3	1.6	57.2	砂岩	SK-32覆土	Q 165 穂摘具の可能性有り
67	砥石	9.6	3.5	1.8	79.7	凝灰岩	SD-1覆土	Q 166 破片
68	砥石	4.1	4.0	2.4	96.7	凝灰岩	SB-1覆土	Q 167 破片

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
第180図69	煙管	(3.9)	1.0	1.0	(3.8)	M 6 表採 雁首(火皿欠損)

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
第100図70	開元通寶	621	唐	表 採	M 2
71	寛永通寶	1668	日本	表 採	M 3
72	寛永通寶	1668	日本	表 採	M 4
73	寛永通寶	1668	日本	表 採	M 5

### 第3節 まとめ

当遺跡から確認された遺構は、弥生時代後期の住居跡23軒、土坑34基、土器棺墓6基、火葬墓1基、炭焼窯跡2基、掘立柱建物跡1棟、溝3条である。また、遺構は確認されていないが旧石器・縄文時代の遺物も出土している。弥生時代の堅穴住居跡は、後期前半から後半にかけての時期のものが確認されており、後期後半である原田北遺跡より時期幅をもつことが当遺跡の特徴の一つといえる。3年間にわたる調査において、天の川流域での弥生時代後期の文化の一端をわずかではあるが明らかにすることができたという点では、意義深いことである。しかし、整理作業を終えた段階で新たな疑問点が出てきている。そこで本節では、そうした疑問点と遺跡の特徴等を簡潔に記し、まとめとしたい。

#### 1 第5・7号土器棺墓について

土器棺墓は6基確認されており、いずれも弥生時代後期前半と思われるが、詳しい時期については今後更に検討しなければならない。出土状況では、第5・7号土器棺墓に特に着目したい。どちらも住居跡内から出土しており、それが単独の遺構として存在するのか、住居跡に伴うものなのかの判断は大変重要な事であり慎重にならざるをえない。そこで確認時の状況等について少し説明を補充しておく。第7号土器棺墓は、第11号住居跡の南西コーナー部床面から正位で確認され、確認当初は住居廃絶後に偶然にコーナー部に掘り込まれたものと考えたが、第11号住居跡の遺構確認時での土坑等の重複は見受けられなかった。また、土器棺墓の掘り方は壺の大きさをあらかじめ計測して掘ったのかと思われるほど壺と同形・同寸法に掘られ、住居跡の壁を壊しておらず、大きめ目の土坑状である第2～4・6号土器棺墓とは明らかに異なる丁寧な造り方である。すなわち当墓は位置と掘り方から住居として存在している時点で構築されたと判断した。第5号土器棺墓は、第8号住居跡のP<sub>2</sub>東側床面下で確認したが、床面精査まで気づかないほど上を丁寧なローム土で張っている。さらに、出土地点が主柱穴と支柱穴の間であることから住居跡に伴うものと考えて間違いないと思われる。また、柱穴の位置から判断して埋設に関連して住居を拡張したものと思われる。どちらの土器棺墓も住居跡の出入口側に構築されていることも重要な事と思われ、縄文時代晩期の埋甕を想起させるものがある。

#### 2 アプライト礫について

アプライト礫は住居跡の床面直上や覆土内から多量に出土しているが、加工しているものは第19号住居跡から出土している敲石（磨石の転用）のみである。アプライト礫の大きさは様々で一性はみられない。当遺跡から多数出土している上稲吉式土器の胎土中には石英粒が多量に含まれており粘土に混入させるためかとも思われたが、アプライト礫を砕く道具のような物は出土していない。桜川沿岸の粘土には自然状態ですでに石英粒が混入しており、人為的に入れる必要性

はなかったものと考えられる。簡単な使い捨ての礫器の様な物として使用した可能性も考えられ、さらに検討していく必要がある。本文中でアプライト礫細片として記した物は、大きさ1 cm以下で炉床上から多数出土している。その好例が第3・4号住居跡の炉にあり、この点についても着目しなければならない。

### 3 穂摘具について

稈痕を有する弥生式土器片が、第6・19号住居跡と第2号溝から出土しており、原田北遺跡でも1点確認されている。当遺跡近辺でも稲作が行われていたと考えられるが、有孔・抉入りの石包丁や穂摘具等は出土していない。しかし、穂摘具として使用されたと思われる薄くて小形の石製品が住居跡の床面直上や床面近くから出土しており、似たような形態の物が覆土中からも数点出土している。長さは8～14cm、幅4～6cm、最大厚1～2cmで、いずれも手のひらによく納まり持ち易く、形に規格性がうかがわれる。石質はホルンフェルス系が使用されている。ホルンフェルスは俗に「筑波石（雲母片岩）」と呼ばれている董青石ホルンフェルスで、筑波山系で岩脈が露出しており手軽に採取できる石材である。このホルンフェルスは古墳の石室・石棺等によく利用されており、硬いが表面は風化し易いという特徴がある。そのため、擦痕等の使用痕を確認することは困難であるが、使用によると思われるわずかな窪みを有するものもある。ホルンフェルスは粘板岩同様薄く剝離するという性質があり加工し易く、また身近ですぐ手に入る石材なため、それを有効に活用しているものと考えられる。穂摘具として報告することにしたが、形態が独特で類例が見当たらず、資料の増加を待ち更に検討していく必要がある。

### 4 紡錘車について

当遺跡から紡錘車が20個出土しており、紡錘車の出土数が多いことも遺跡の特徴としてあげられる。その内17個が住居跡内からで、特に第4・19号住居跡からは3個ずつ出土している。原田北遺跡のE・F・G地区から18個の紡錘車が出土しているが、当遺跡出土の物とは文様の施文部位に違いがある。何らかの文様が施されている紡錘車の割合は、原田北では44%であるのに対し西原では70%に達する。原田北遺跡では文様が片面だけの物が多く、全面に文様を有する物は極端に少ない。当遺跡の住居跡内から出土している紡錘車の内で文様が施されている13点を住居跡の時期別に分類すると、一定の傾向がうかがえる。すなわち後期前半と思われる住居跡から出土した6個は、いずれも全面に文様が施されているが、後期後半と思われる住居跡から出土している物で全面に文様が施されている物は7個の内2個のみで、前半に比べ全面施文の紡錘車が極端に少なくなっている。後期後半の集落跡である原田北遺跡の今回の調査区内では、文様を有する紡錘車が6個出土しているが、全面に文様が施されている物は遺構外に1個あるのみである。文様は、竹管状工具による刺突文と棒状工具による放射状の沈線の2タイプがあり、両方を組み合わせている物もある。後期後半の紡錘車では、放射状の沈線単独のものは出土しておらず、刺突

文と沈線文が同一面に施されており、放射状の沈線文は少なくなるようである。後期前半から後半になるにつれて、施文面積が減少し文様も簡素化して刺突文だけの物が多くなる傾向がうかがえる。

## 5 集落について

当遺跡の弥生時代後期を以下のように時期区分し住居跡を分類した。

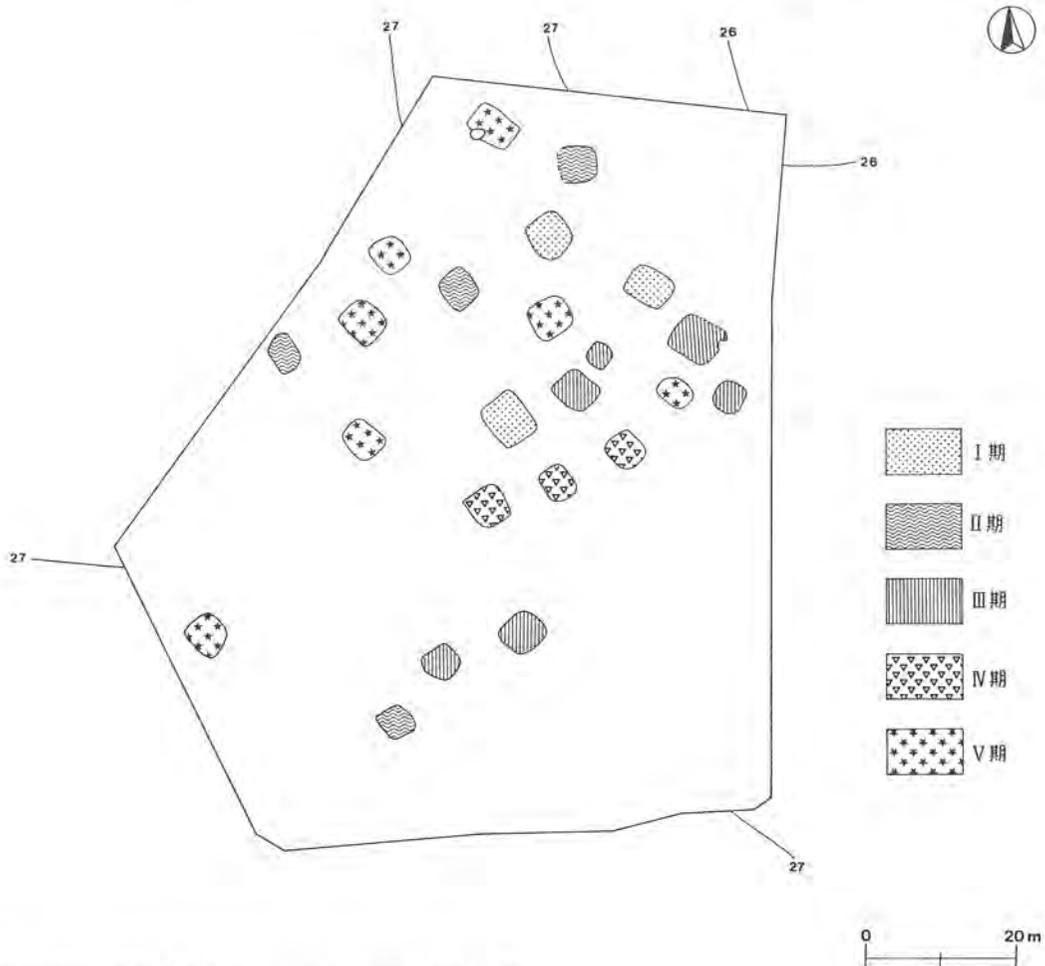
- I期 初頭（餓鬼塚式期） 第4・5・12号住居跡（3軒）
- II期 前葉（志筑Ⅰ式期） 第2・3・8・18号住居跡（4軒）
- III期 中葉（志筑Ⅱ式期） 第7・9・11・16・17・23号住居跡（6軒）
- IV期 後葉（長岡式期） 第13～15号住居跡（3軒）
- V期 末葉（上稲吉式期） 第1・6・10・19～22号住居跡（7軒）

当遺跡ではⅢ・Ⅴ期の住居跡軒数が多く、この時期が当集落の全盛期であったと思われる。Ⅲ期では第7・9・11・23号住居跡のグループと第16・17号住居跡のグループが、「世帯共同体」を形成していたと思われる。平面形は隅丸長方形2軒、隅丸方形3軒、方形1軒である。住居跡の床面積は、10～20㎡が1軒、20～30㎡が4軒、30㎡以上が1軒で、平均24.6㎡である。なかでも第7号住居跡は37.4㎡と規模が大きく、「世帯共同体」の中心的役割を果たしていたと思われる。Ⅴ期では、第19～21号住居跡のグループと第1・6・10号住居跡のグループが、「世帯共同体」を形成していたと考えられる。平面形は隅丸長方形が5軒、隅丸方形が2軒で長方形の住居跡の割合が大きい。住居跡の床面積は、10～20㎡が1軒、20～30㎡が4軒、30㎡以上が2軒で、平均27.14㎡となる。第6号住居跡は35.6㎡、第20号住居跡は32.2㎡でどちらもグループ内では規模が大きく、「世帯共同体」の中心的役割を果たしていたと思われる。

## 参考文献

- (1) 山田康弘 「遠賀川系土器使用の壺棺葬の系譜とその性格について」『筑波大学 先史学・考古学研究 第4号』 1993年
- (2) 千葉県文化財センター 「石器石材の自然科学的研究」『研究紀要 11』 1987年
- (3) 柴田徹 「考古学のための岩石鑑定ミニ図鑑－王子の台遺跡出土石器をもとにした－」『東海大学校地内遺跡調査報告2』 1991年
- (4) 徳島県教育委員会 『土成町北原遺跡』 1988年
- (5) 塩谷修 「霞ヶ浦沿岸における弥生時代土器棺墓の一例」『土浦市立博物館紀要 第1号』 1989年
- (6) 山岸良二 「弥生時代の墓制」『原始・古代日本の墓制』 同成社 1991年
- (7) 海老澤稔 「土浦市原田遺跡群における南関東系土器と地域交流」『研究ノート 2号』 茨城県教育財団 1993年

- (8) 小高春雄 「『北関東系土器』の様相と性格」 『研究紀要 10』 千葉県文化財センター1986年
- (9) 藤岡孝司 「印旛沼南部地域における後期弥生集落の一形態」 『研究紀要 10』 千葉県文化財センター 1986年
- (10) 潮来町遺跡調査会 『棒山古墳群（庚申塚古墳）調査報告書』 1991年
- (11) G. ボジンスキー 『ゲナスドルフ』 六興出版 1993年
- (12) 新宿区内藤町遺跡調査会 『放射5号線整理事業に伴う緊急発掘調査報告書 内藤町遺跡』 1992年
- (13) 栗原文蔵 「東松山出土の備蓄古銭」 『研究紀要 第11号』 埼玉県立歴史資料館 1989年
- (14) 中村修身 「弥生系石器の成立にみる初期稲作農耕社会」 『古代』 第95号 早稲田大学考古学会 1993年
- (15) 設楽博己 「壺棺再葬墓の基礎的研究」 『国立歴史民族博物館研究報告 第50集』 1993年



第181図 西原遺跡弥生時代時期別住居跡配置図

# 写 真 图 版

原田北遺跡Ⅱ

西原遺跡



原田北遺跡出土遺物



調査後全景 E 地区



調査後全景 F 地区



調査後全景G地区(1)



調査後全景G地区(2) (南方向から)



遺構確認状況E地区（南東方向から）



遺構確認状況G地区（南方向から）

PL4

原田北遺跡



第27号住居跡



第76号住居跡



第76号住居跡炉



第96号住居跡



第96号住居跡遺物出土状況



第97号住居跡



第99号住居跡



第99号住居跡遺物出土状況(1)



第99号住居跡遺物出土状況(2)



第100号住居跡



第102号住居跡



第103号住居跡



第105号住居跡



第106号住居跡



第106号住居跡遺物出土状況



第107号住居跡

PL6

原田北遺跡



第107号住居跡遺物出土状況



第108号住居跡



第109号住居跡



第110号住居跡



第110号住居跡遺物出土状況



第111号住居跡



第112号住居跡



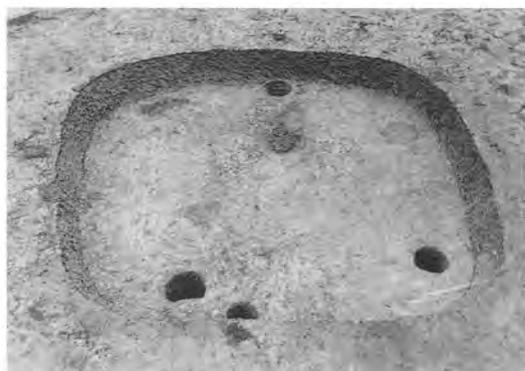
第112号住居跡遺物出土状況(1)



第112号住居跡遺物出土状況(2)



第112号住居跡遺物出土状況(3)



第113号住居跡



第113号住居跡遺物出土状況



第115号住居跡



第115号住居跡遺物出土状況(1)



第115号住居跡  
遺物出土状況(2)



第115号住居跡  
遺物出土状況(3)



第116号住居跡



第116号住居跡遺物出土状況(1)



第116号住居跡遺物出土状況(2)



第118号住居跡



第118号住居跡遺物出土状況(1)



第118号住居跡遺物出土状況(2)



第119号住居跡



第119号住居跡遺物出土状況



第121号住居跡



第124号住居跡



第17号住居跡



第17号住居跡遺物出土状況



第58号住居跡



第66号住居跡



第66号住居跡小ピット列



第66号住居跡遺物出土状況(1)



第66号住居跡  
遺物出土状況(2)



第98号住居跡



第98号住居跡遺物出土状況(1)



第98号住居跡遺物出土状況(2)

PL12

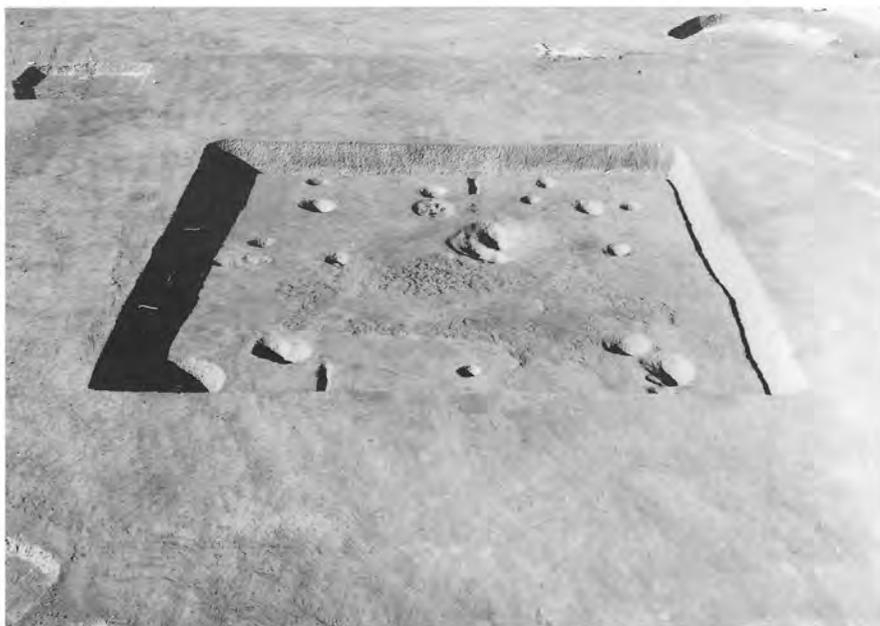
原田北遺跡



第101号住居跡



第101号住居跡遺物出土状況



第104号  
住居跡



第104号住居跡遺物出土状況(1)



第104号住居跡遺物出土状況(2)



第114号住居跡



第114号住居跡遺物出土状況(1)



第114号住居跡遺物出土状況(2)



第114号住居跡遺物出土状況(3)



第117号住居跡



第117号住居跡遺物出土状況(1)



第117号住居跡遺物出土状況(2)



第117号住居跡遺物出土状況(3)



第138号土坑



第147号土坑



第181号土坑



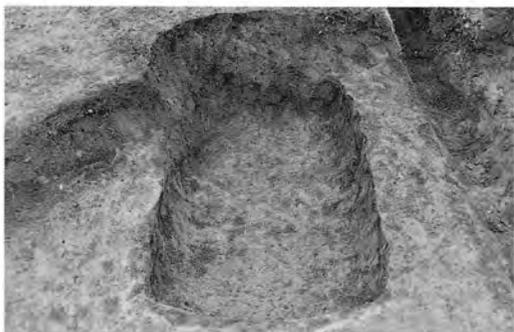
第183号土坑



第186号土坑



第197号土坑



第200号土坑



第201号土坑



第202号土坑



第203号土坑



第1～3号井戸



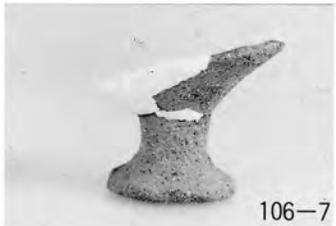
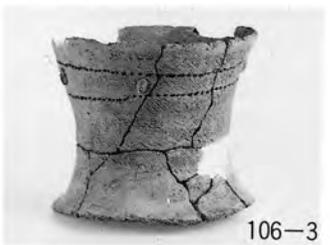
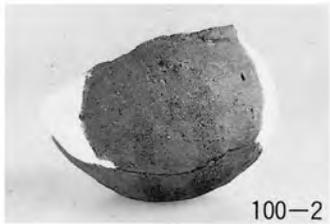
第4号溝



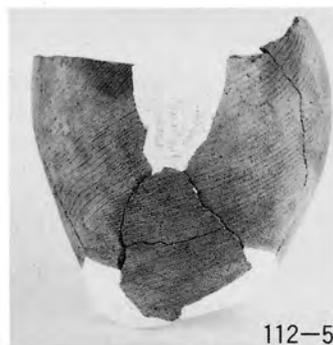
遺構外遺物出土状況

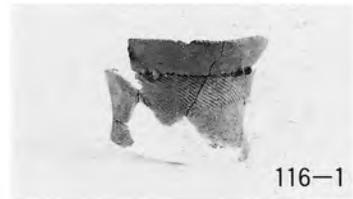


第5・6号溝

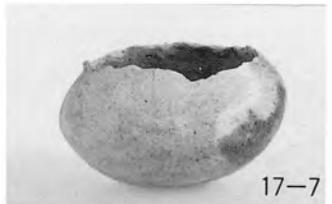


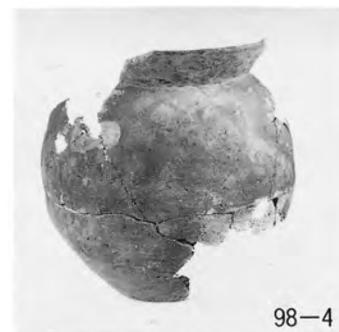
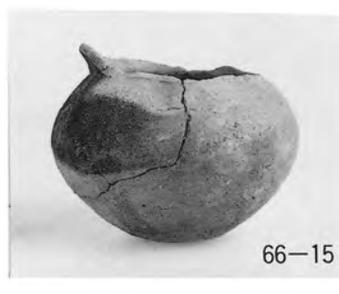
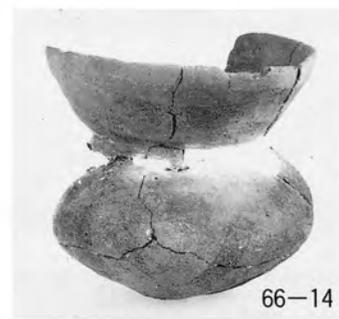
第76・96・99・100・102・103・106号住居跡出土土器















98-15



101-1



101-4



101-5



101-8



101-9



101-10



104-4



104-3



104-7

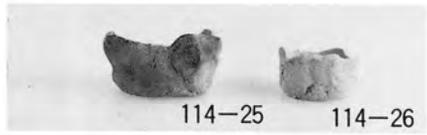


104-8





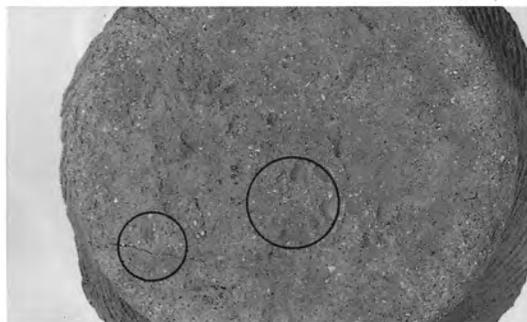
第114号住居跡出土土器



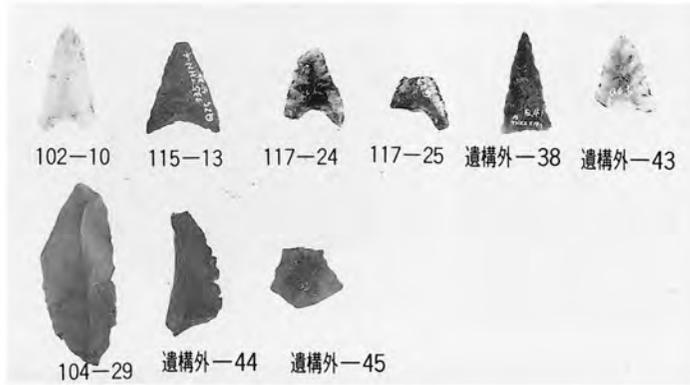
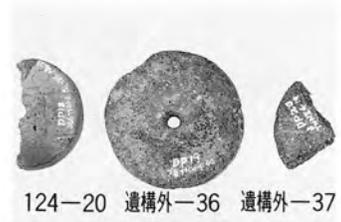
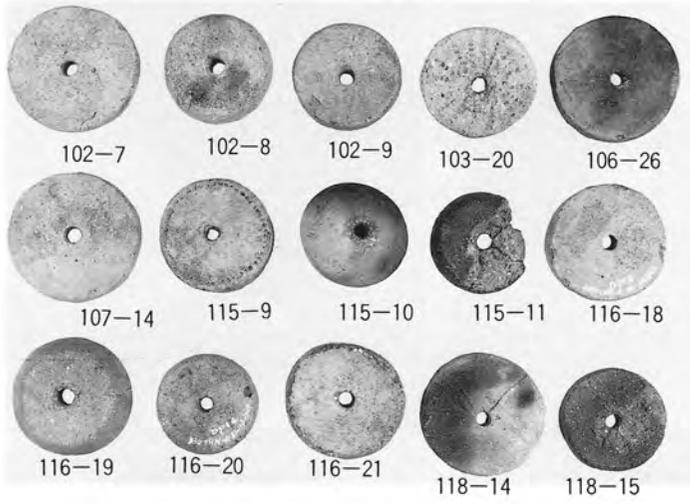


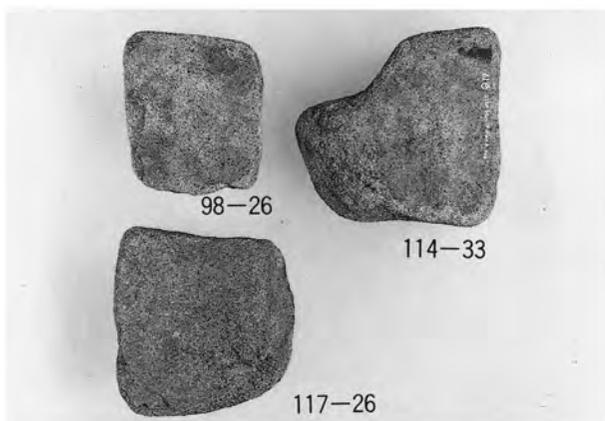
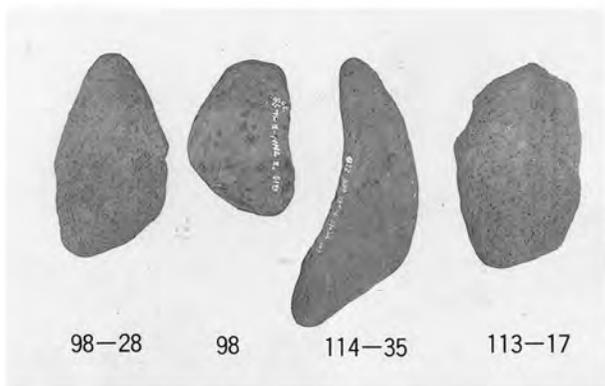
○=靱痕

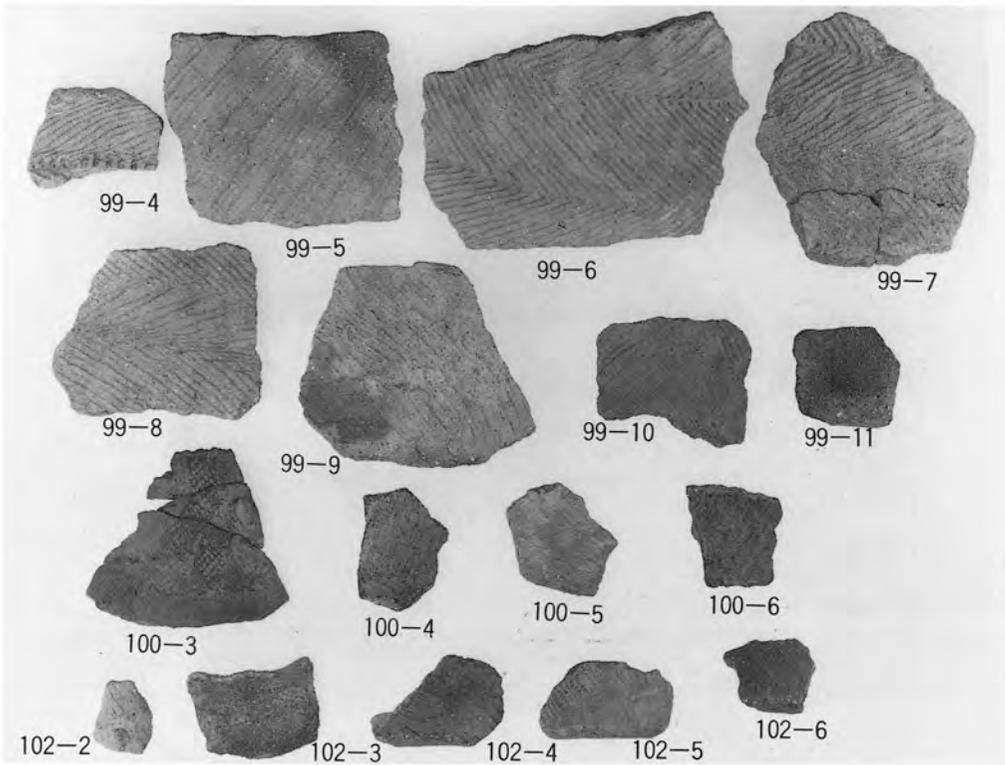
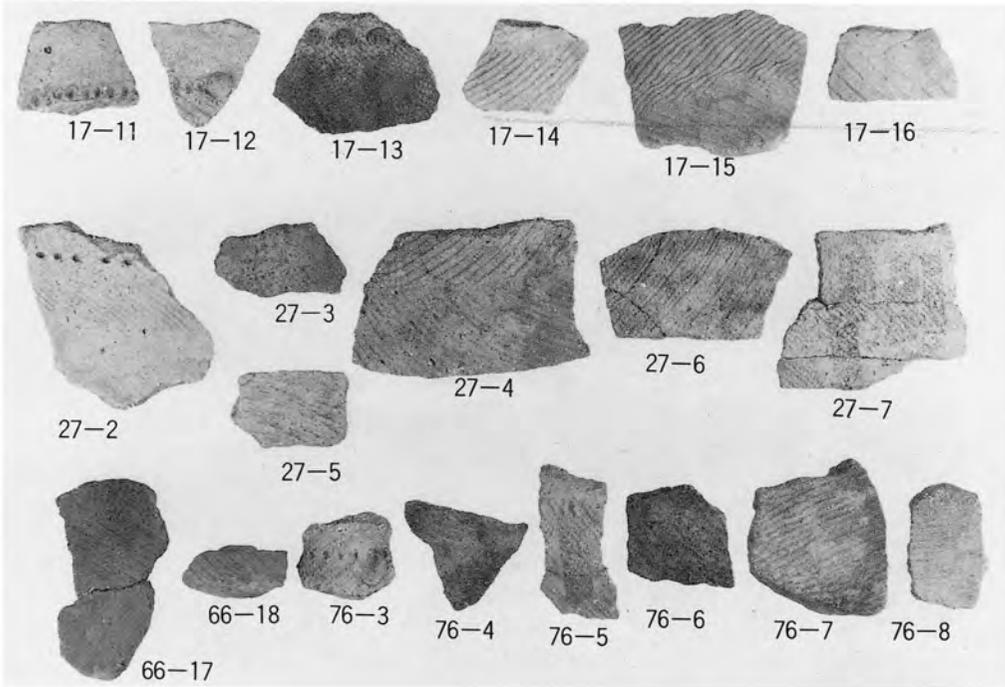
76-1



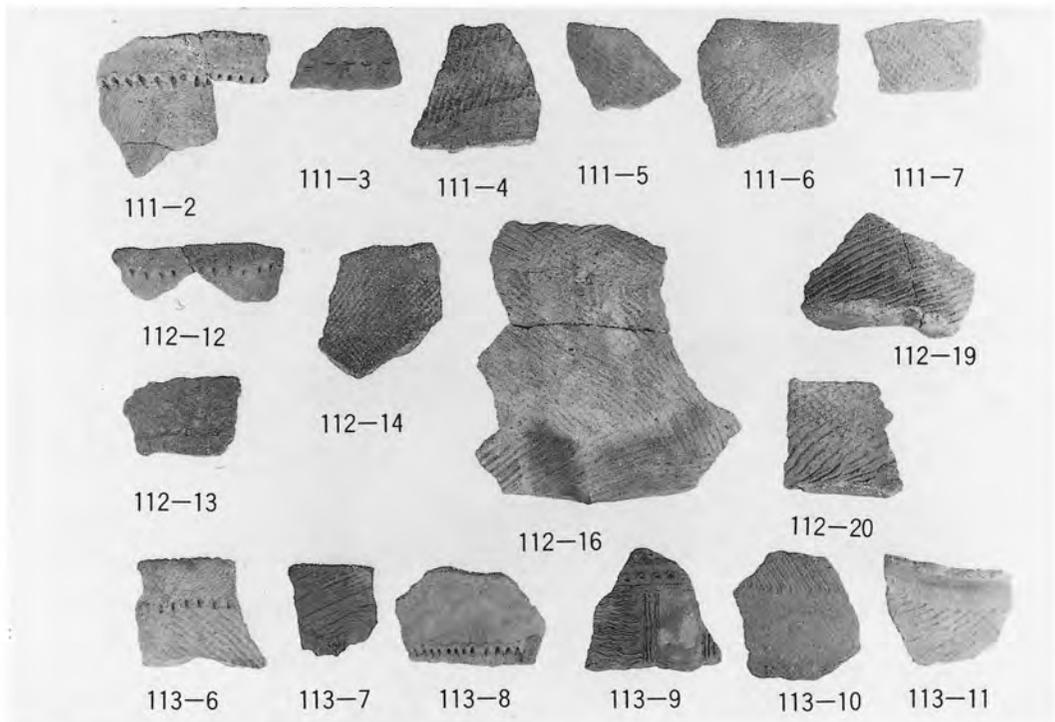
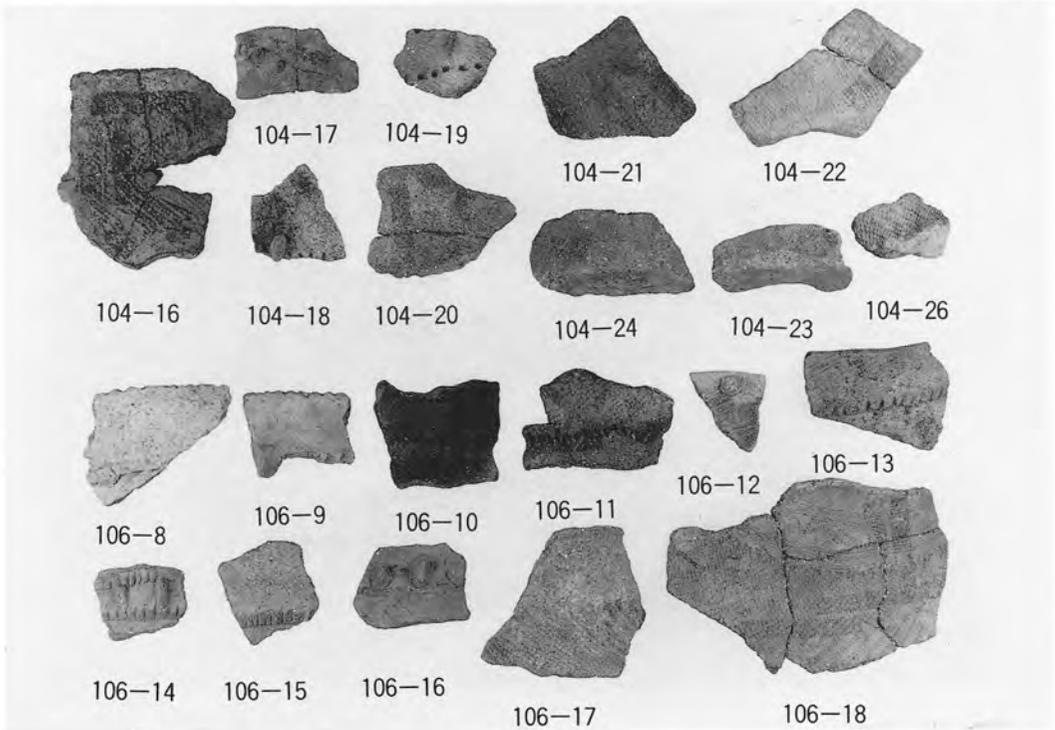
第117号住居跡・157号土坑・遺構外出土土器



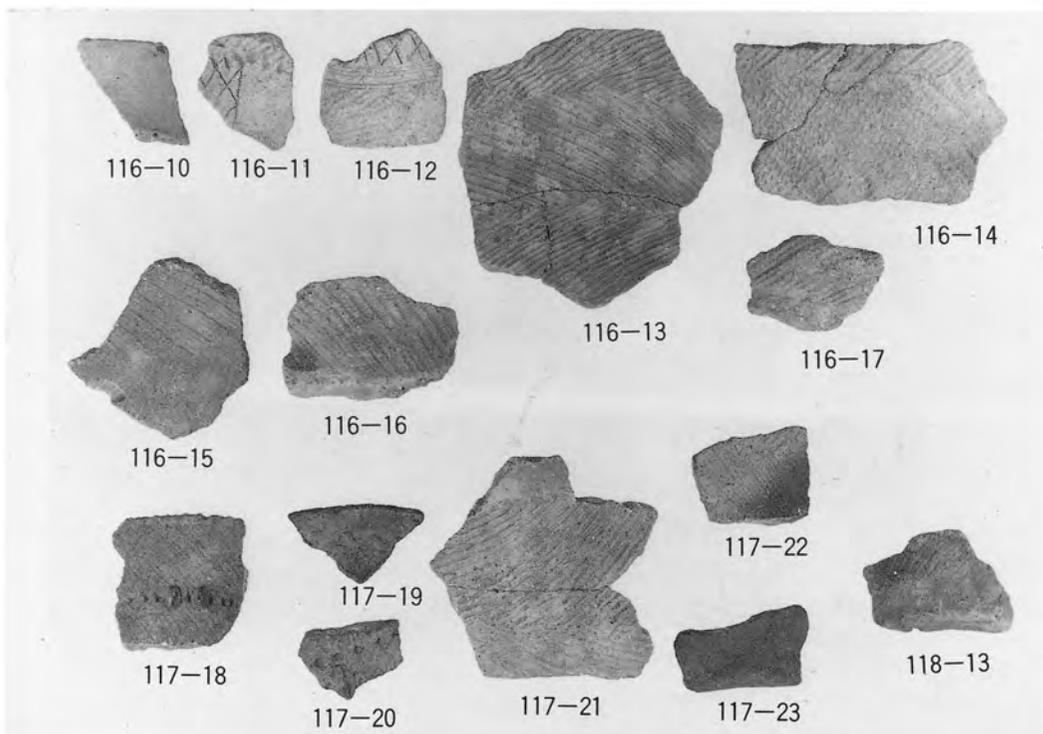
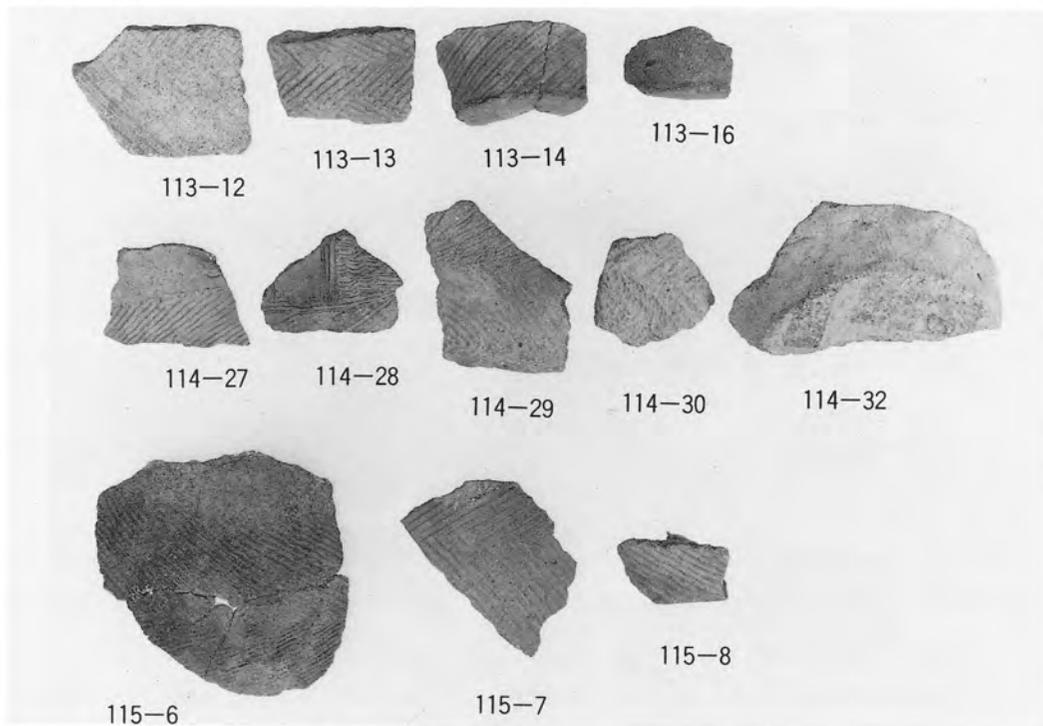




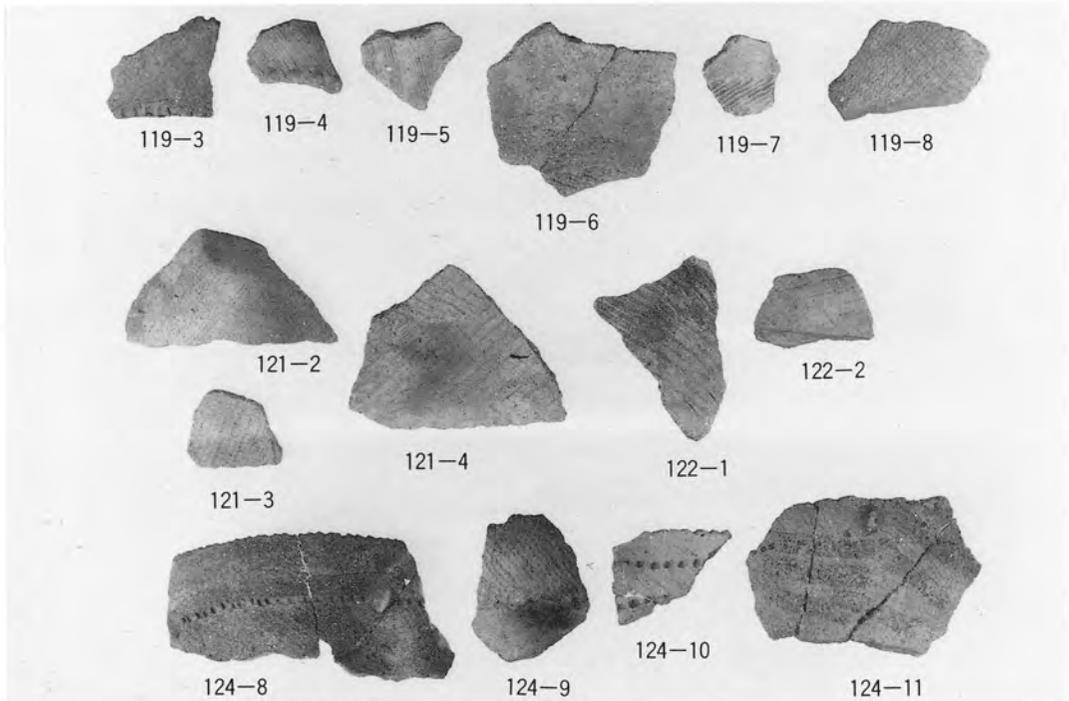
第17・27・66・76・99・100・102号住居跡出土土器



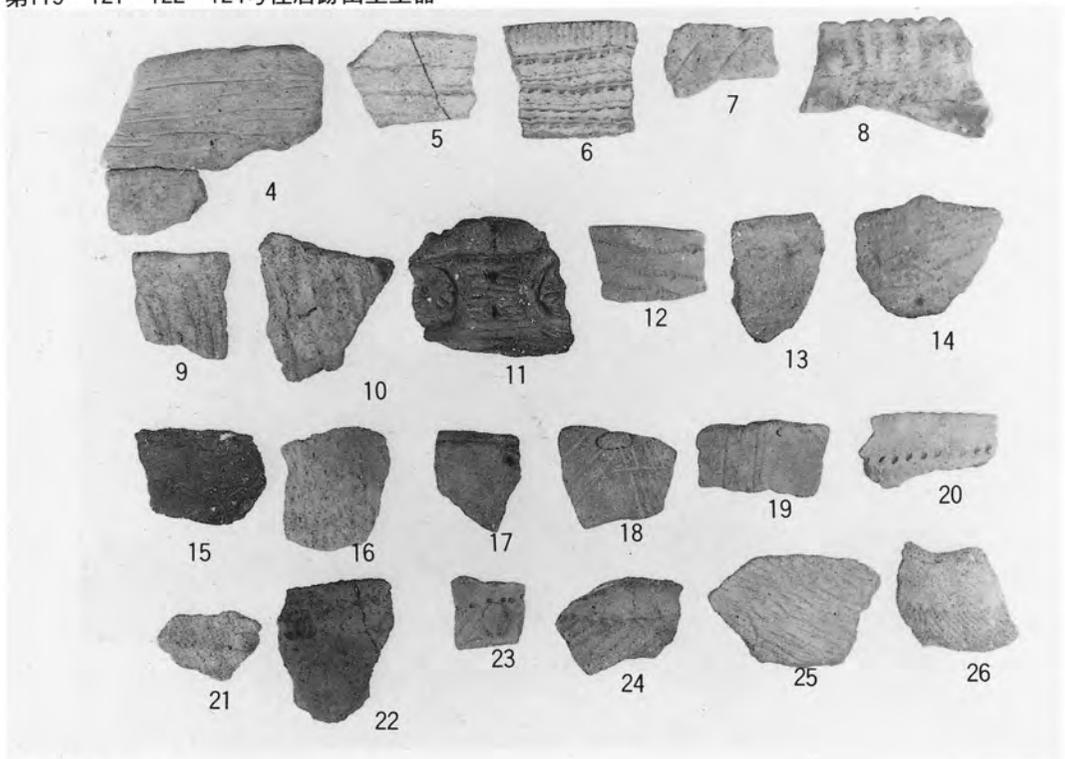
第104・106・111・112・113号住居跡出土土器



第113~118号住居跡出土土器



第119・121・122・124号住居跡出土土器



遺構外出土土器



調査後全景



遺構確認状況（西から）



調査後全景（南東方向から）



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡



第3号住居跡炉石英礫出土状況



第3号住居跡



第4号住居跡



第4号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡



第6号住居跡遺物出土状況(1)



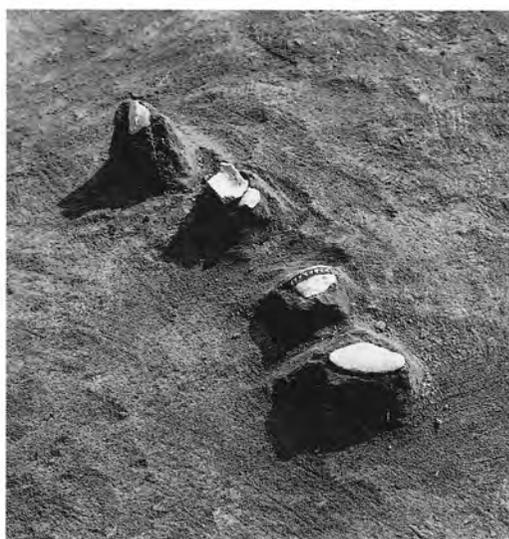
第6号住居跡遺物出土状況(2)



第7号住居跡



第7号住居跡炉アプライト細礫出土状況



第8号住居跡遺物出土状況



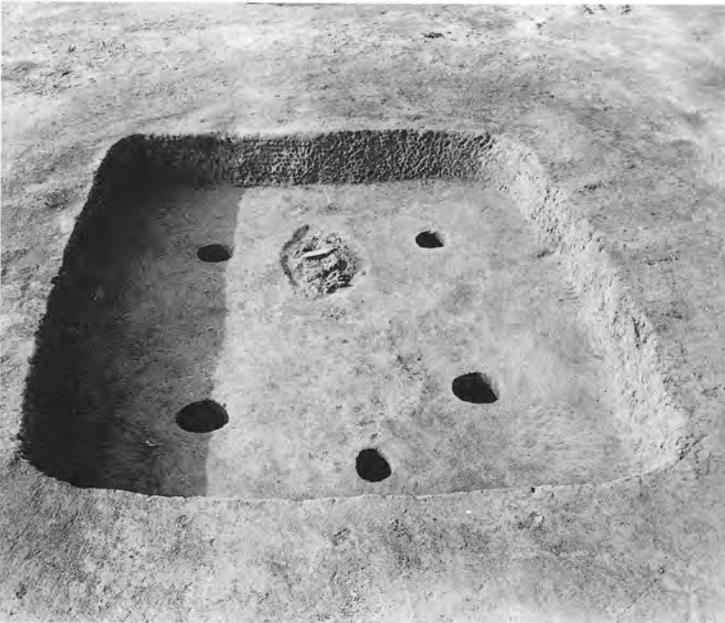
第8号住居跡



第9号住居跡



第10号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡



第10号住居跡炉



第11号住居跡



第11号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡



第13号住居跡



第14号住居跡



第14号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡



第15号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡



第17号住居跡



第18号住居跡



第19号住居跡



第19号住居跡遺物出土状況(1)



第19号住居跡遺物出土状況(2)



第19号住居跡遺物出土状況(3)



第20号住居跡



第20号住居跡遺物出土状況(1)



第20号住居跡遺物出土状況(2)



第21号住居跡



第21号住居跡遺物出土状況(1)



第21号住居跡遺物出土状況(2)



第21号住居跡遺物出土状況(3)



第22号住居跡



第22号住居跡遺物出土状況



第23号住居跡



第1号土坑



第4号土坑遺物出土状況



第5号土坑



第6号土坑



第3・7号土坑



第32号土坑



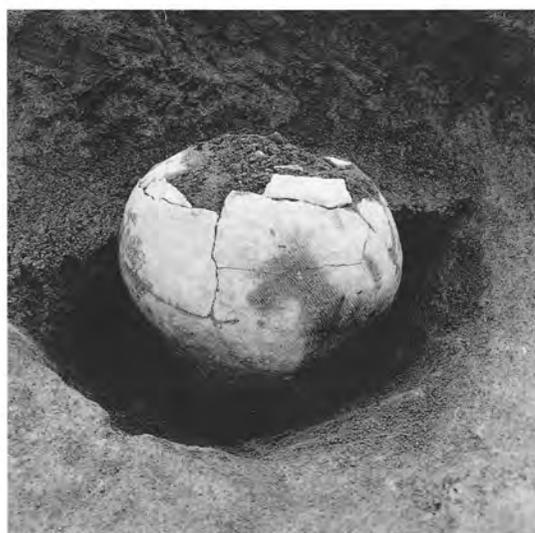
第2号土器棺墓遺物出土状況



第3号土器棺墓遺物出土状況



第4号土器棺墓遺物出土状況



第7号土器棺墓遺物出土状況



第5号土器棺墓遺物（土層セクション）



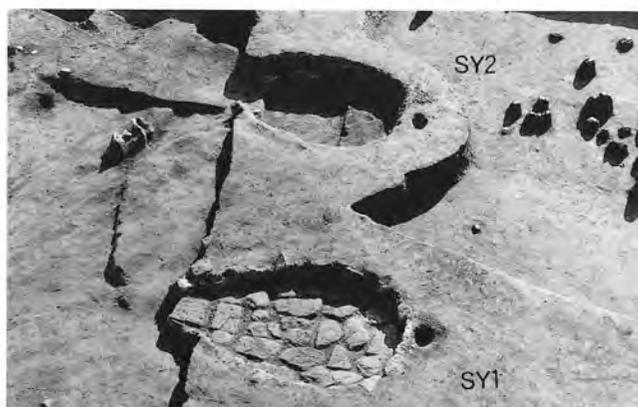
第5号土器棺墓（第8号住居跡内）



第5号土器棺墓遺物出土状況



第1号火葬墓遺物出土状況



第1・2号炭焼窯跡(1)



第1・2号炭焼窯跡(2)  
(石材除去後)

第3号溝



第3号溝土層断面



第3号溝遺物出土状況



PL48

西原遺跡



試掘土層断面



遺構外遺物出土状況(1)



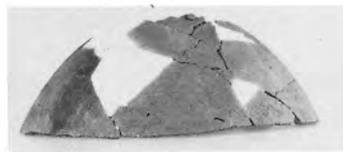
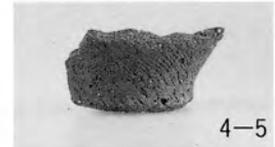
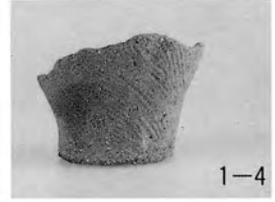
遺構外遺物出土状況(2)



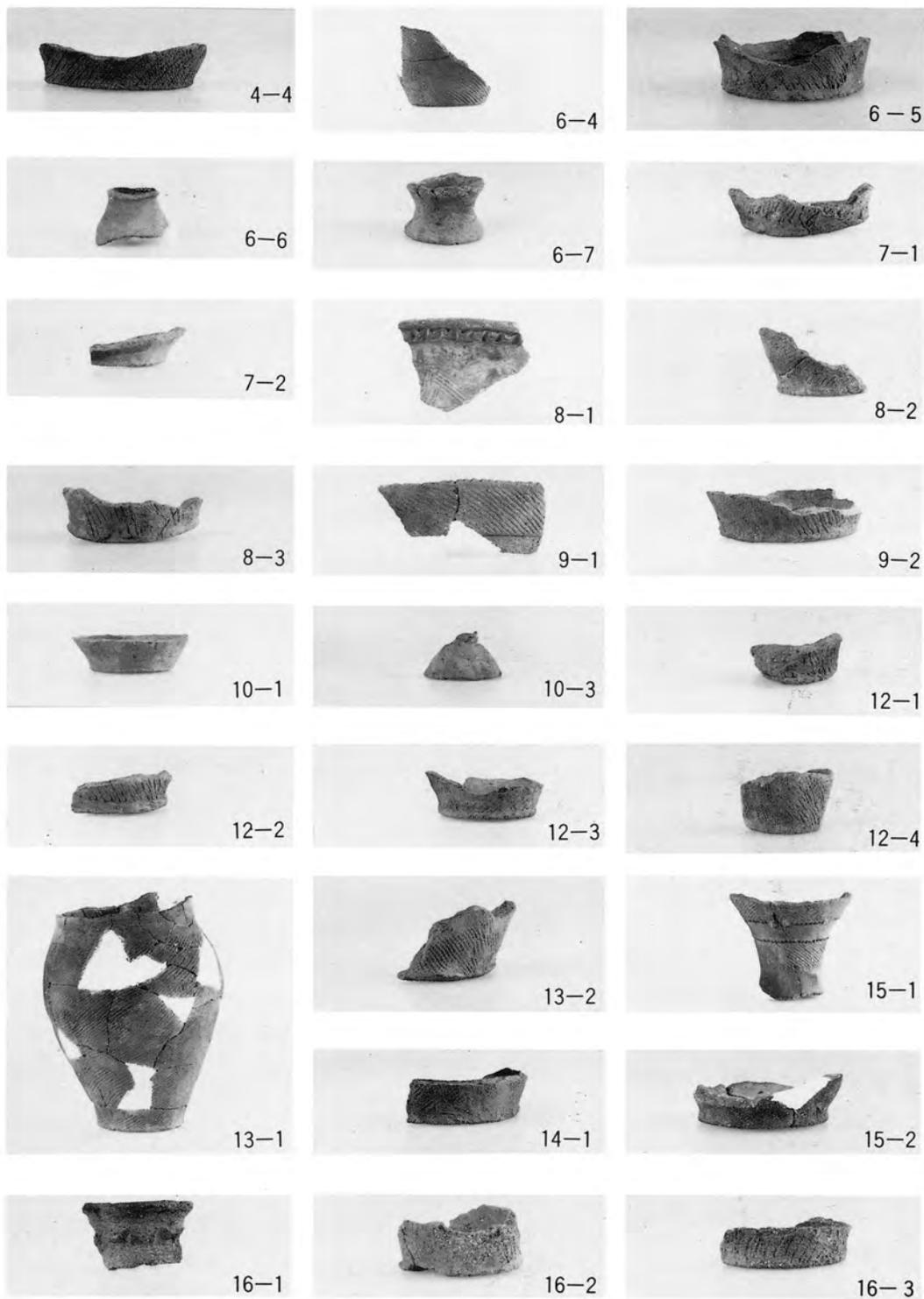
西原遺跡出土遺物



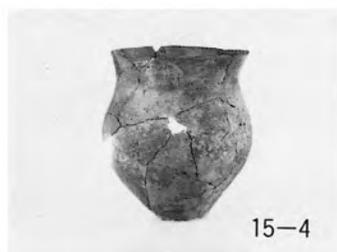
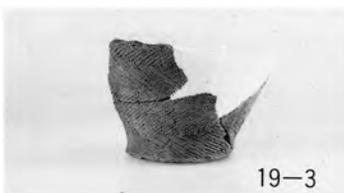
土器棺墓出土遺物



第1～6号住居跡出土土器

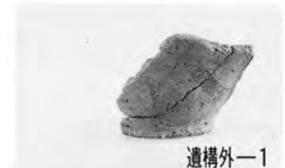
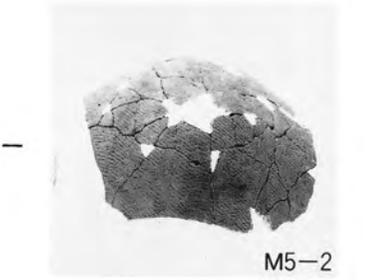


第4～10・12～16号住居跡出土遺物

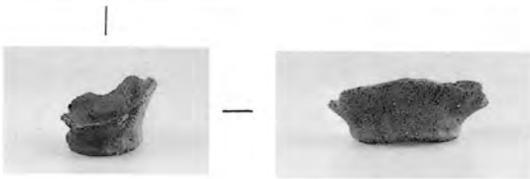
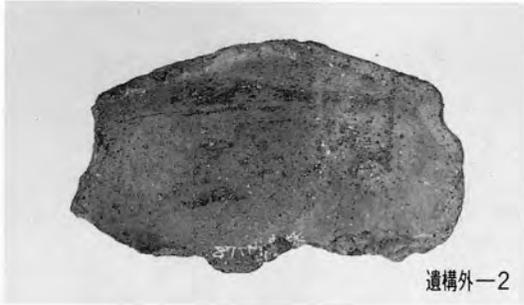


第15・17~21号住居跡出土遺物





第3～5・7号土器棺墓・1～3号溝・2号炭焼窯跡・遺構外出土遺物

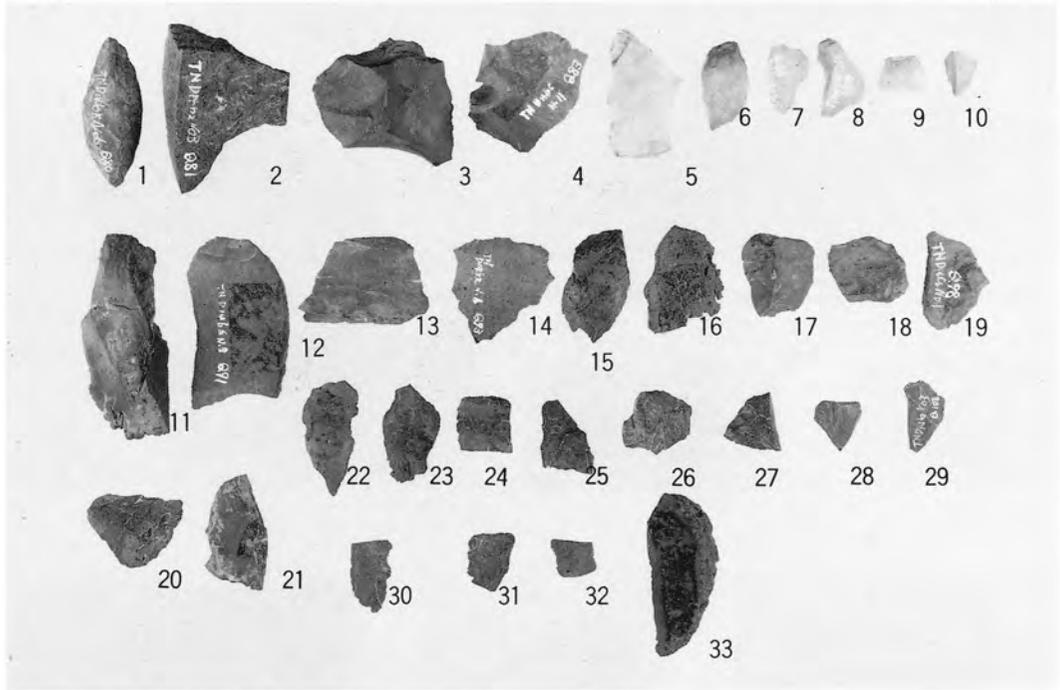


○=靱痕

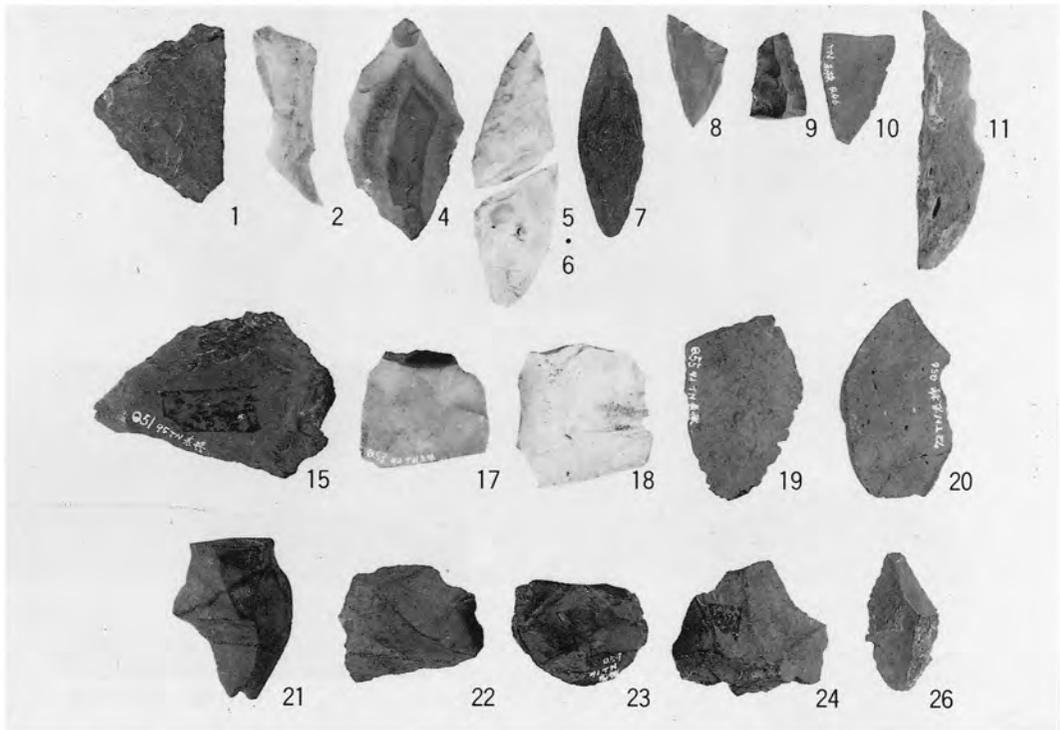


第1号火葬墓-1

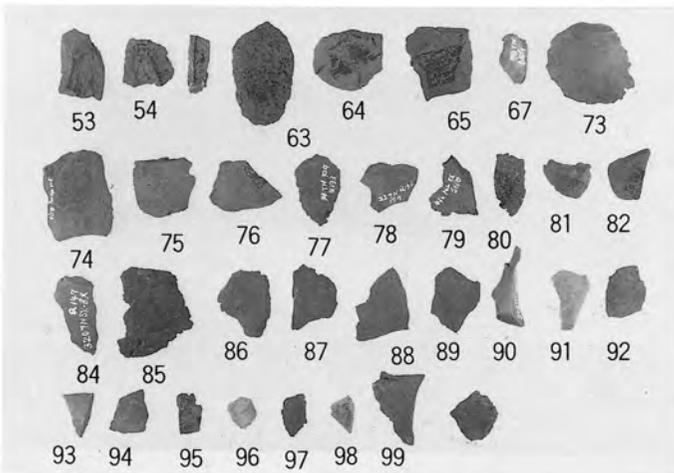
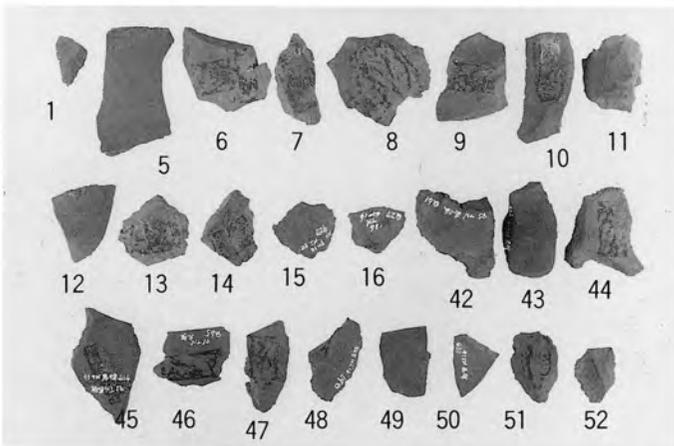
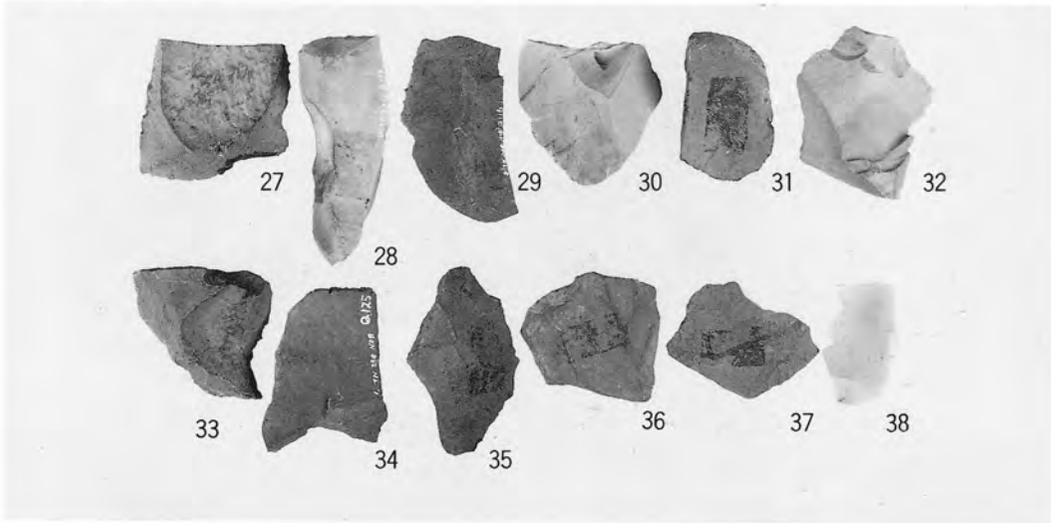
出土土器（靱・布目・木葉痕）



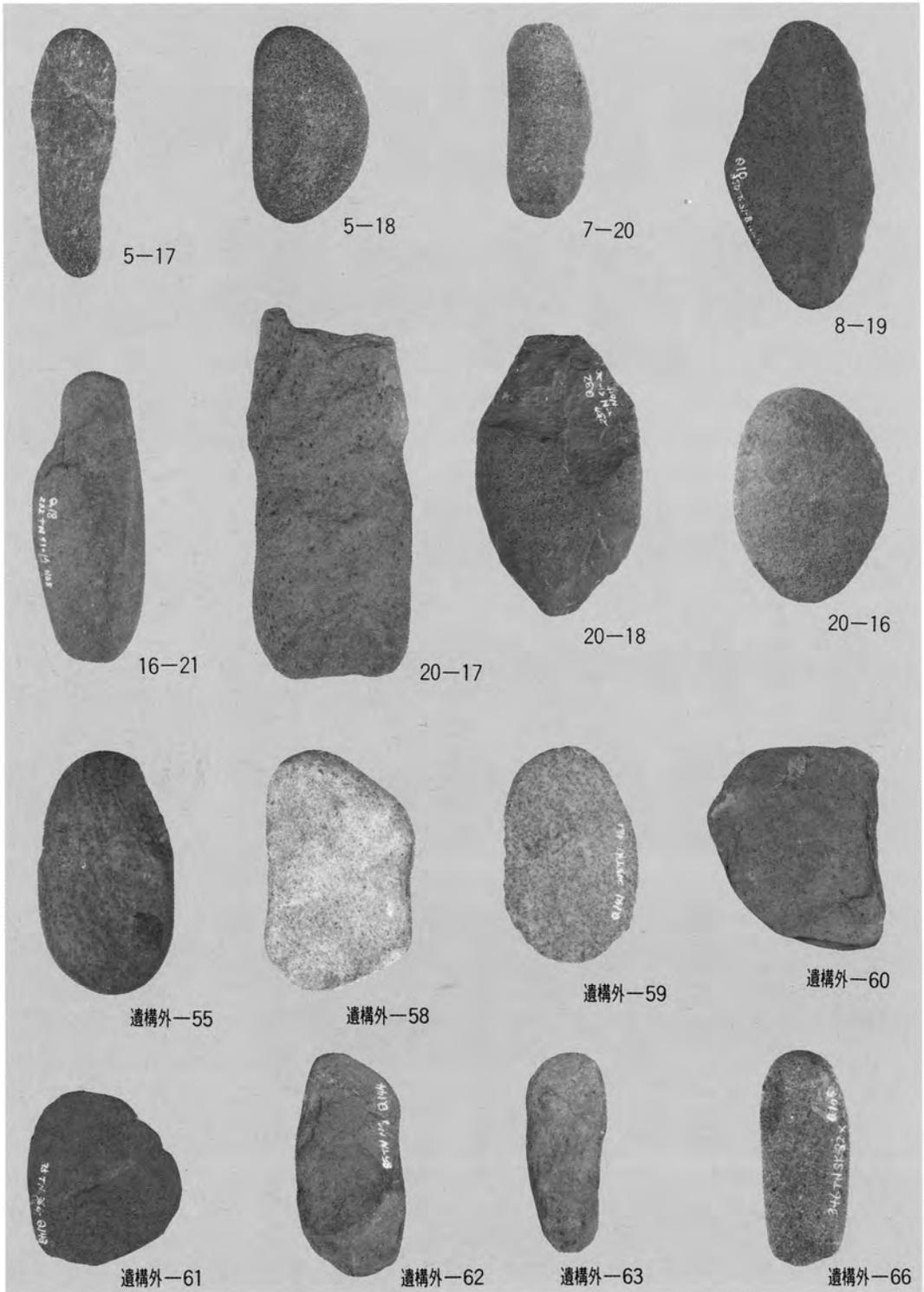
旧石器時代調査エリア内出土遺物



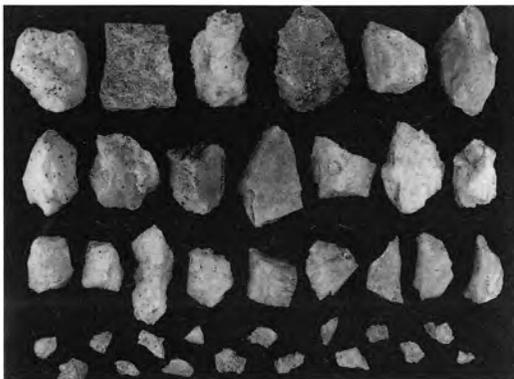
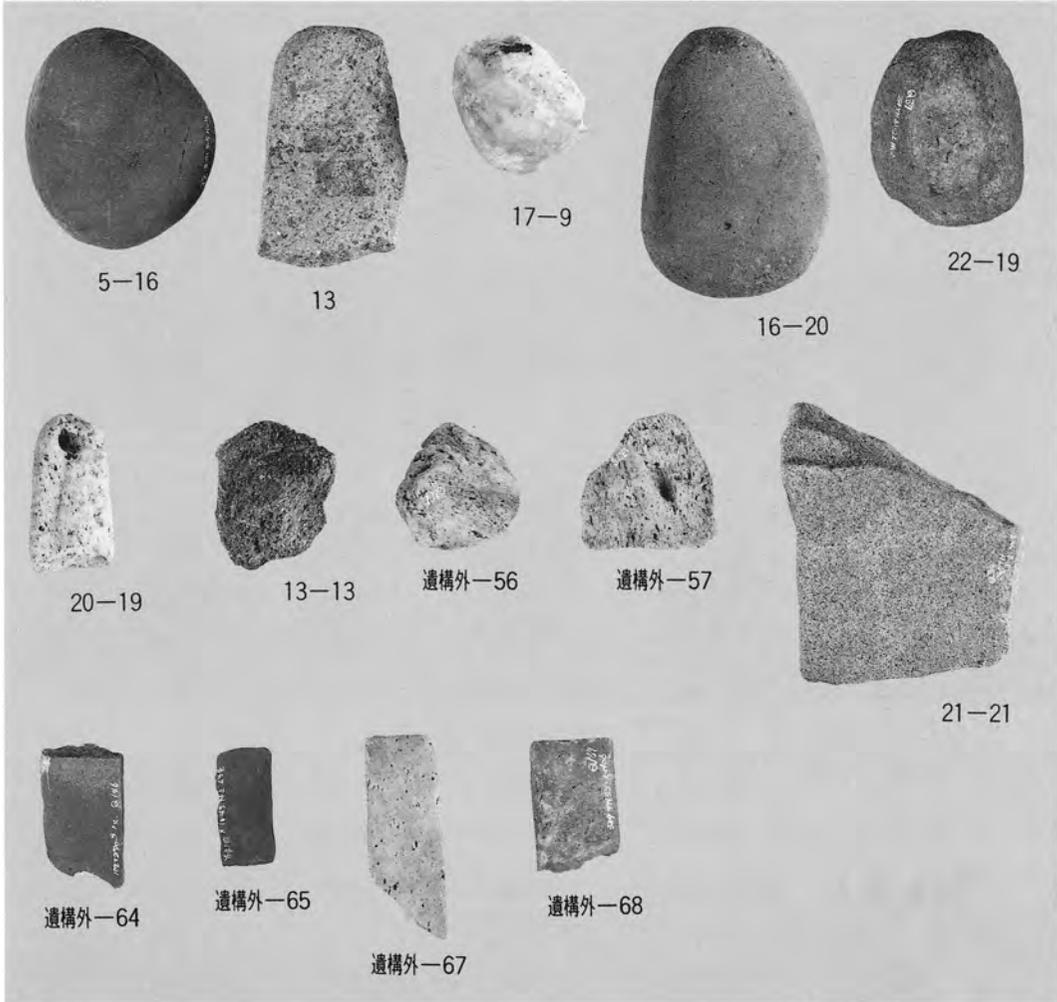
旧石器時代調査エリア外出土遺物(1)



旧石器時代調査エリア外出土遺物(2)



出土石器(1)

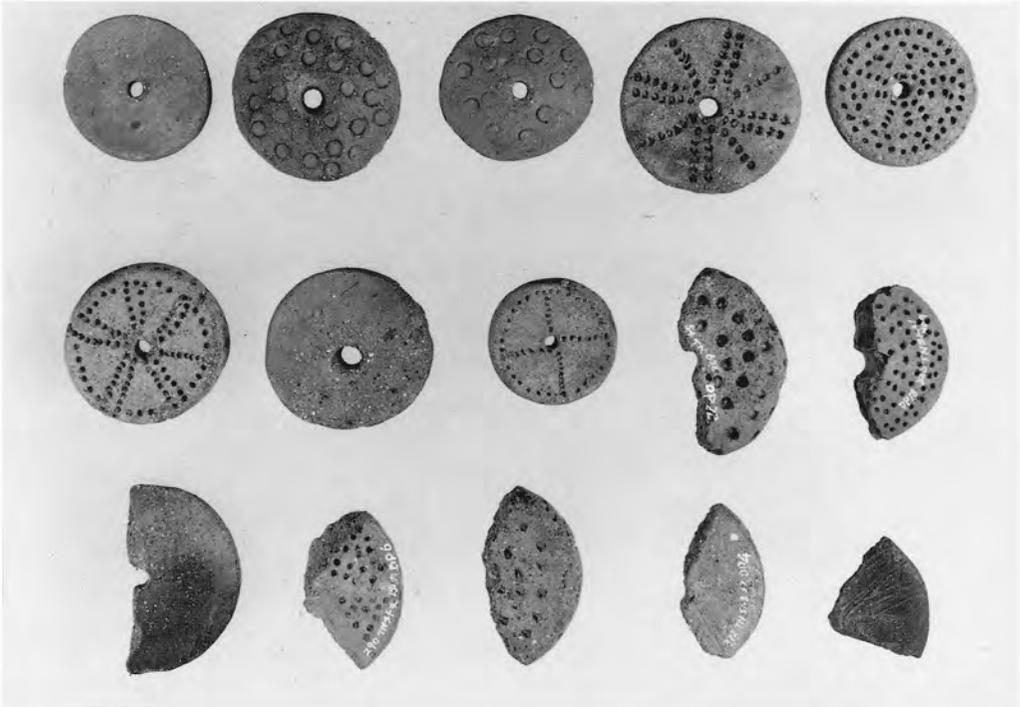


第4号住居跡アプライト礫(大・中・小・細礫)

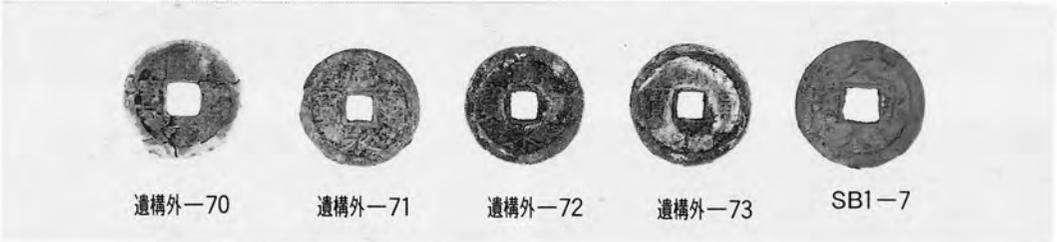


第4号住居跡全アプライト礫(2)

出土石器(2)



1-20	4-23	14-15	14-16	19-18
19-19	19-20	22-18	遺構外-51	21-19
遺構外-50	4-22	4-21	3-12	2-20



遺構外-70

遺構外-71

遺構外-72

遺構外-73

SB1-7



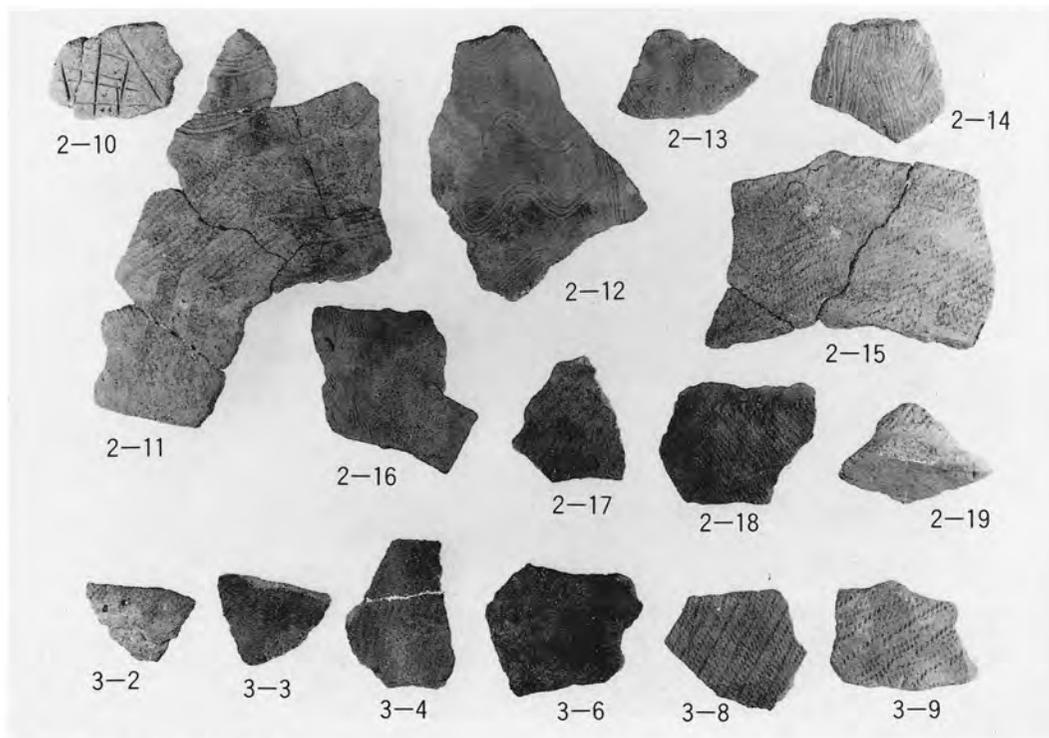
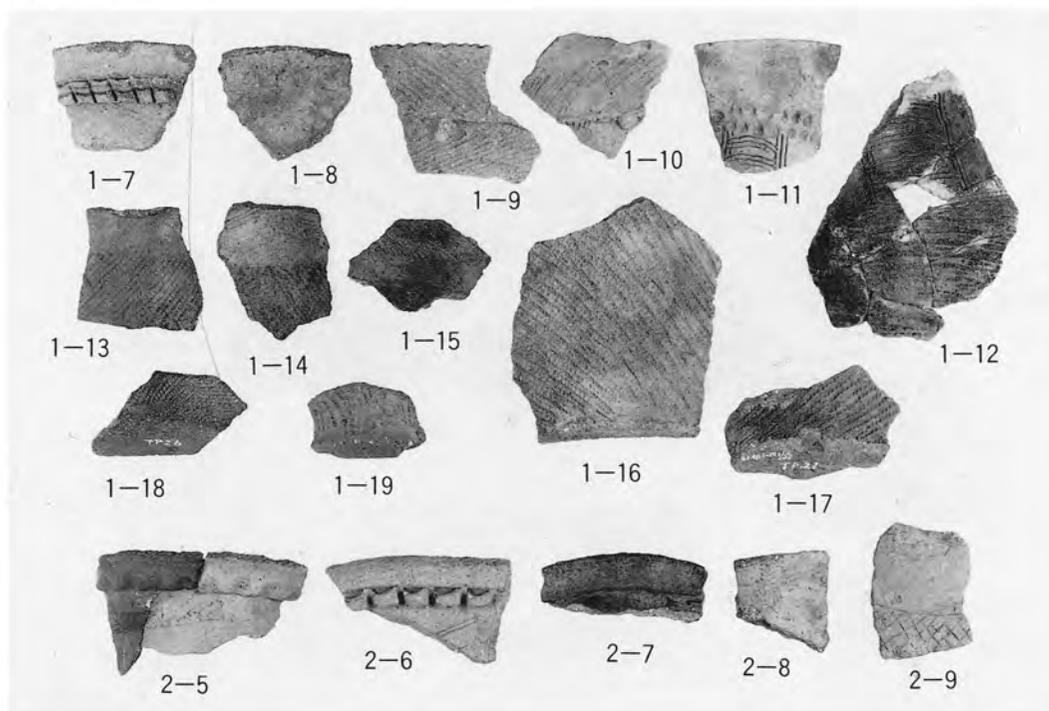
遺構外-69

SB1-3

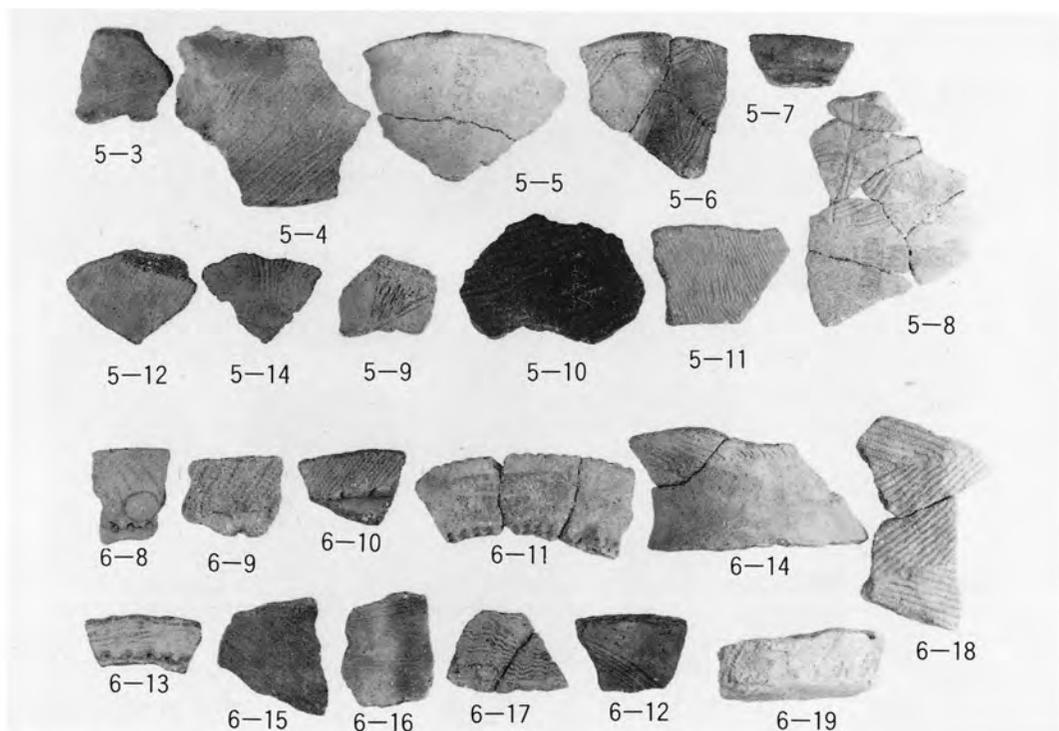
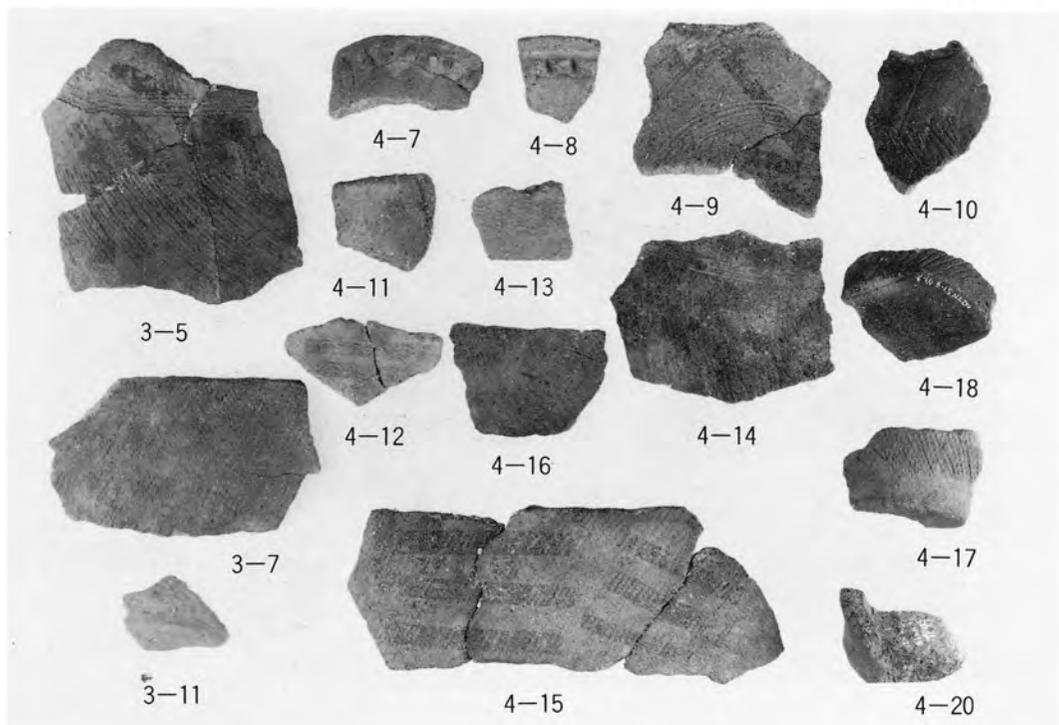
SB1-4

SB1-5

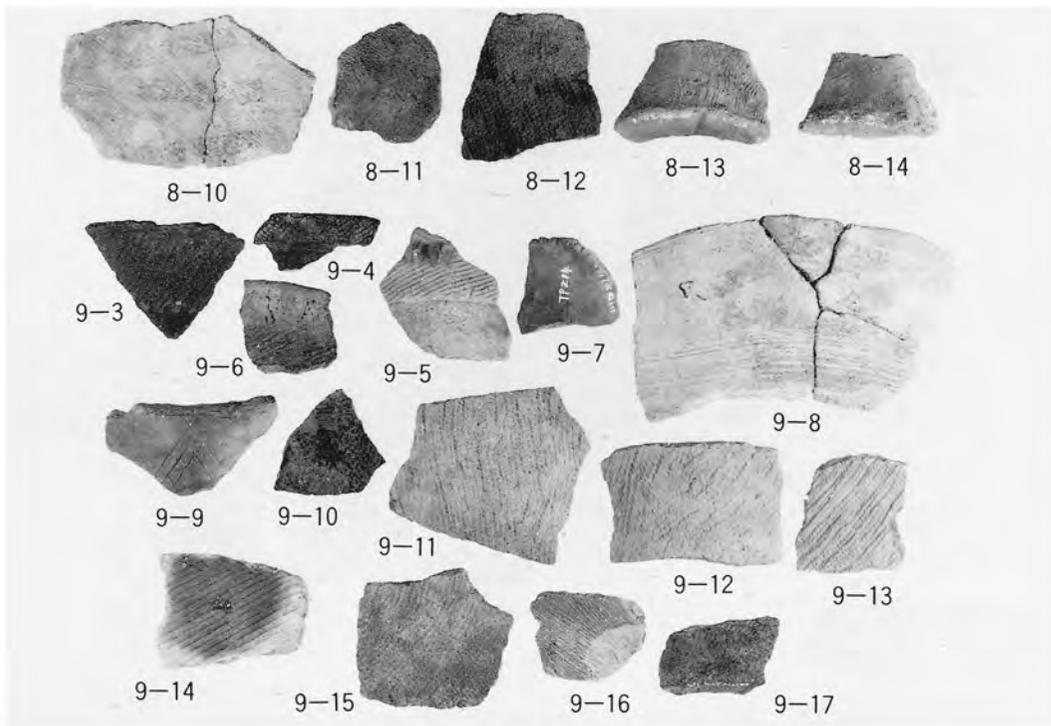
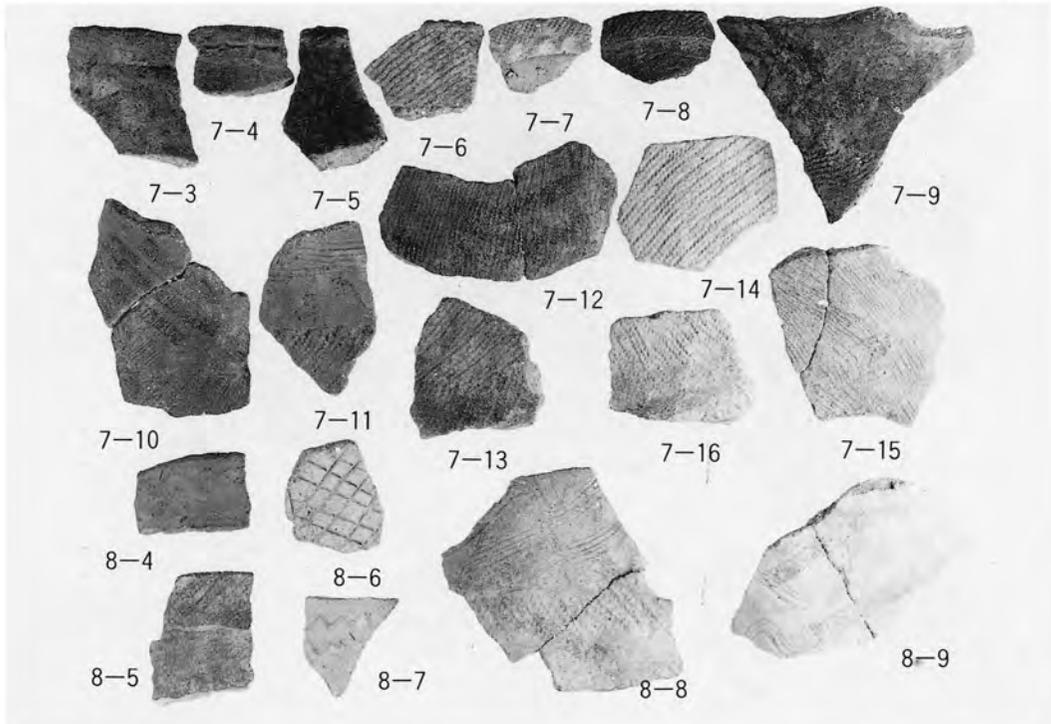
SB1-6



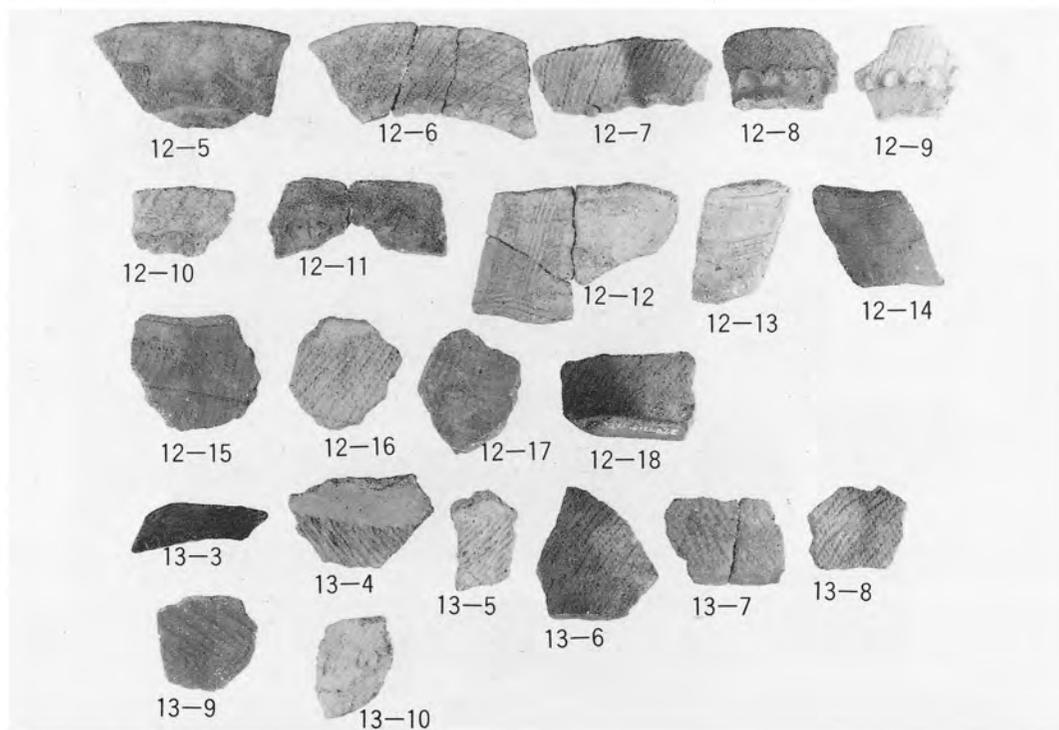
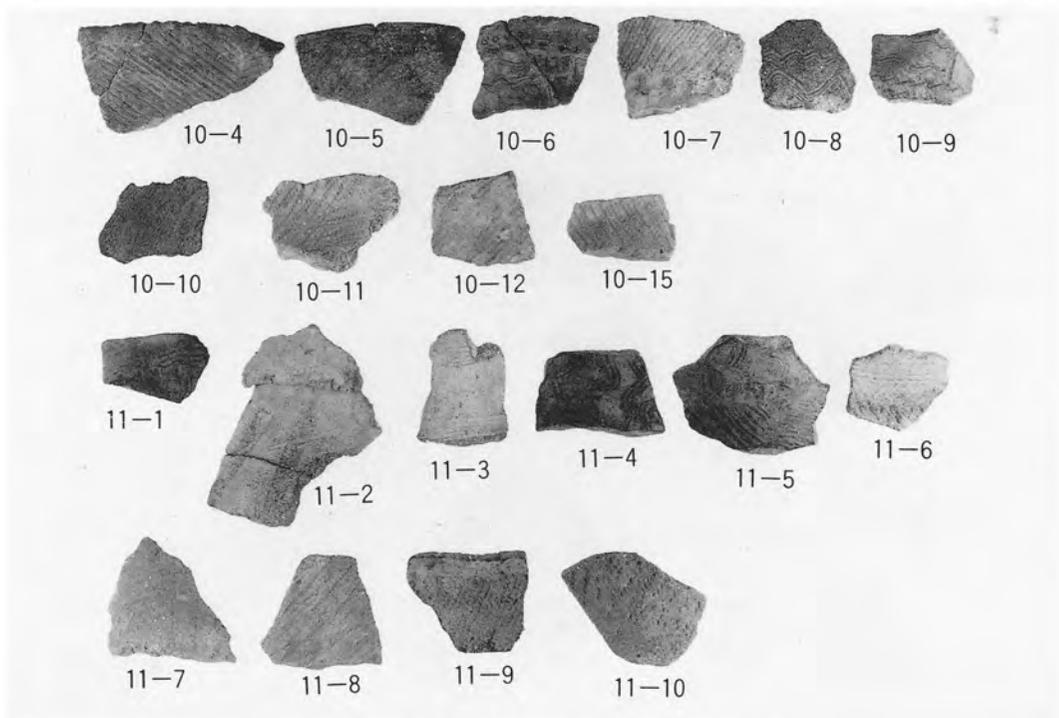
第1～3号住居跡出土土器



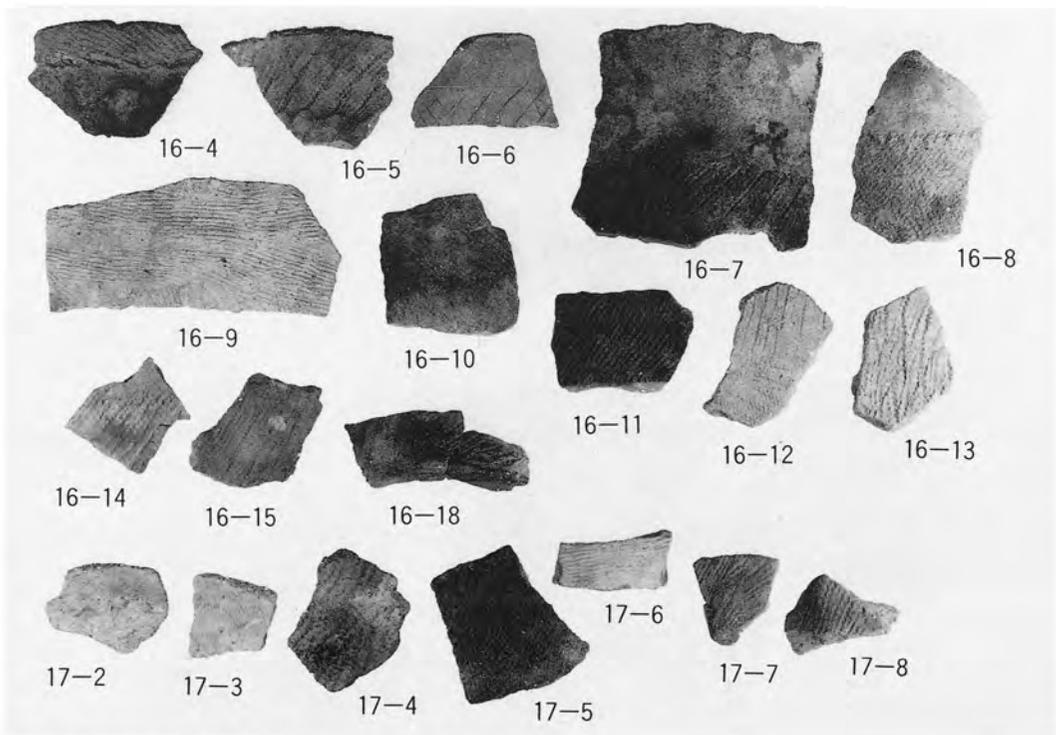
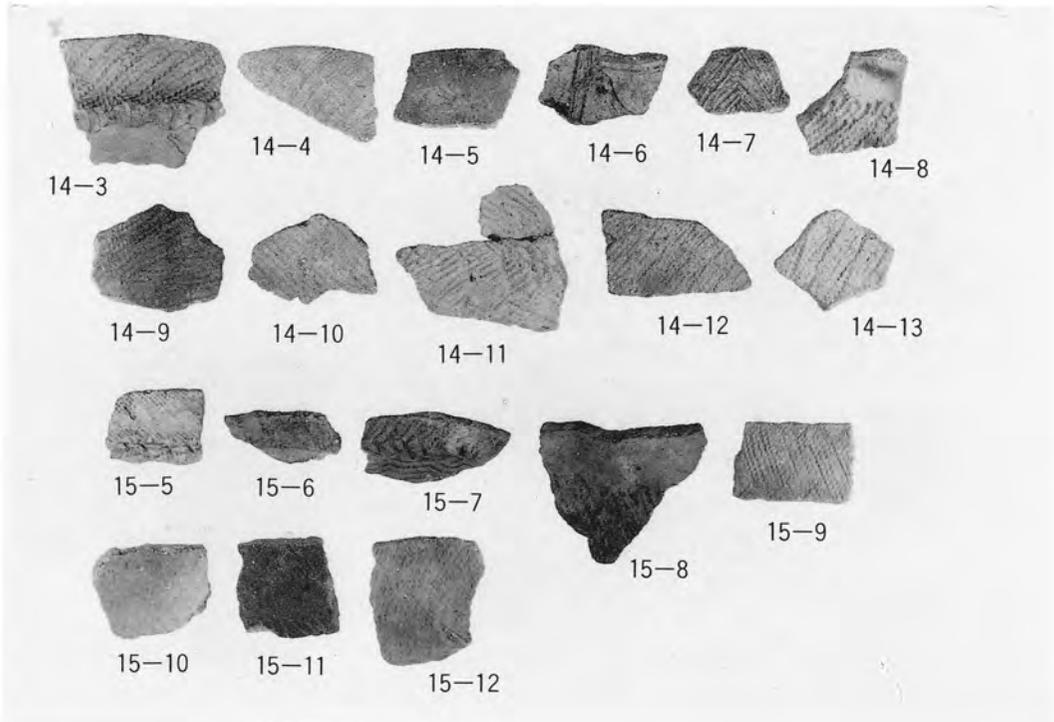
第3～6号住居跡出土土器



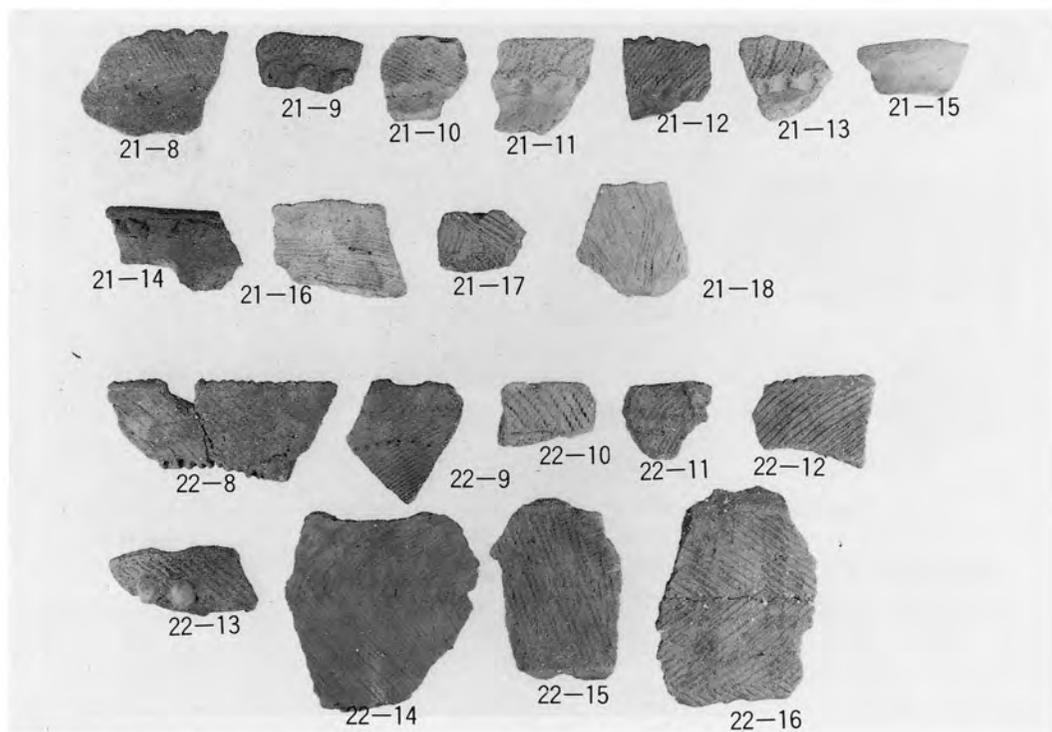
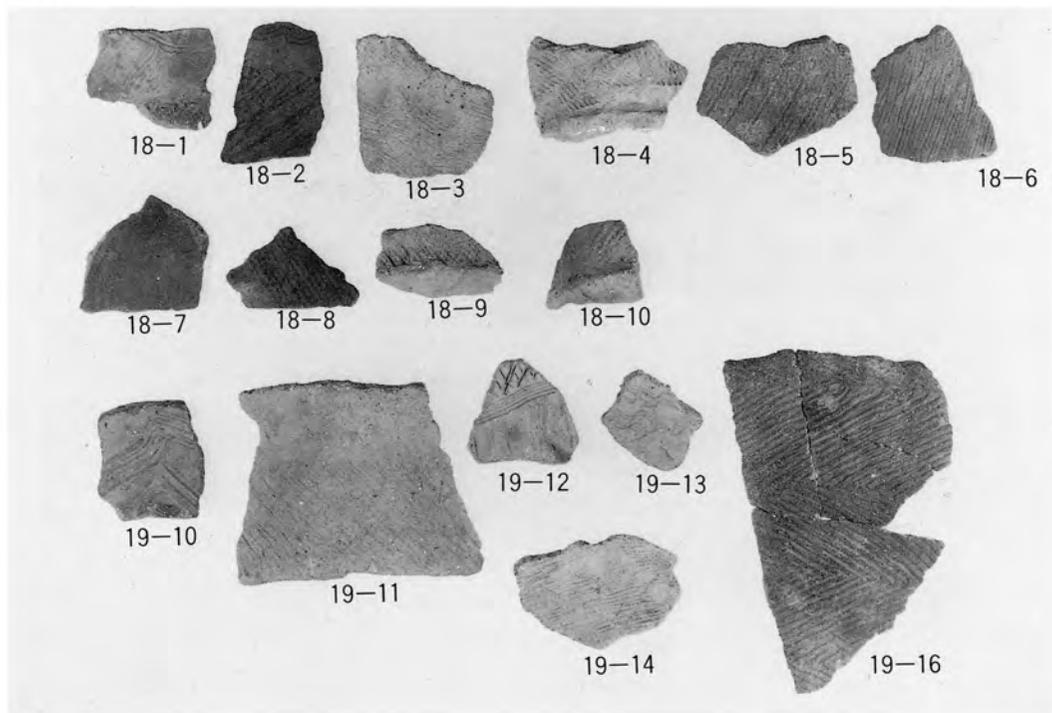
第7～9号住居跡出土土器



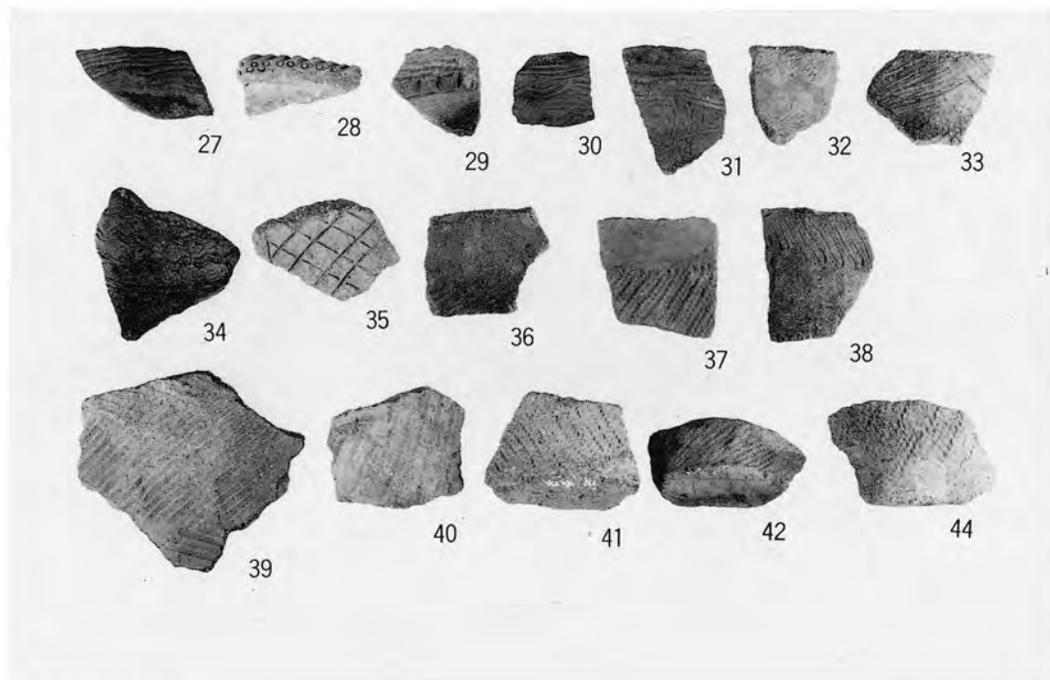
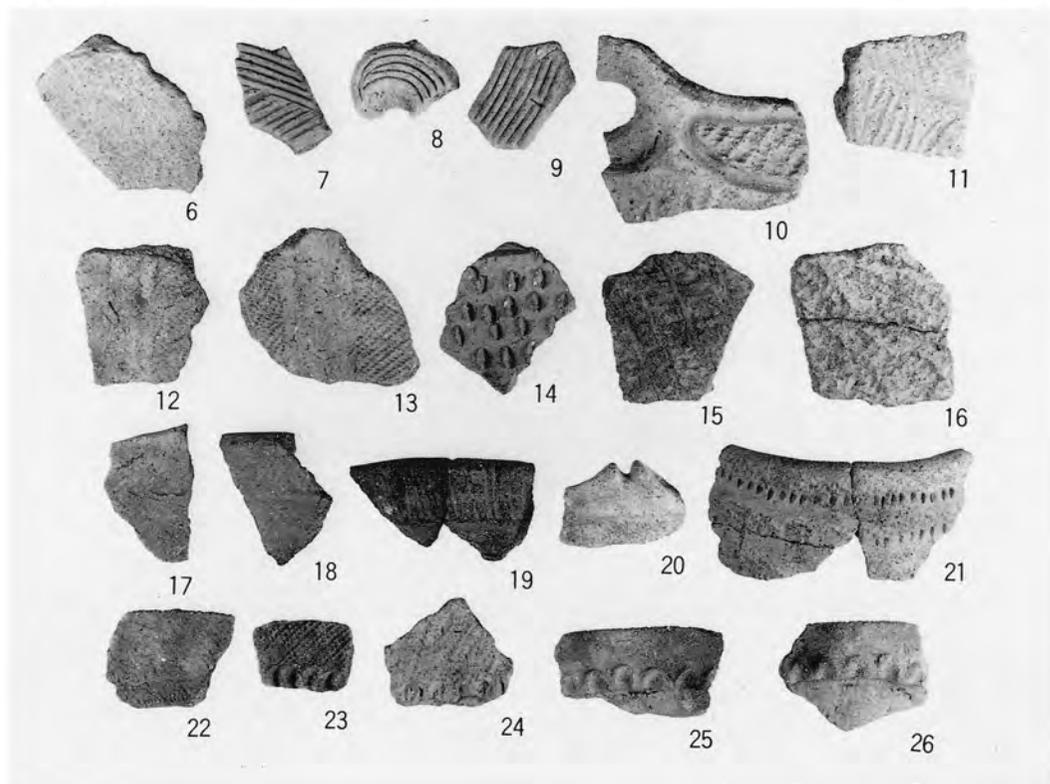
第10~13号住居跡出土土器



第14~17号住居跡出土土器



第18・19・21・22号住居跡出土土器



遺構外出土器

茨城県教育財団文化財調査報告第85集

土浦北工業団地造成地内  
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

原田北遺跡Ⅱ  
西原遺跡

平成6年3月25日 印刷  
平成6年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市見和1丁目356番2号  
T E L 0292-25-6587  
印刷 株式会社 高野高速印刷  
水戸市東原2-8-1  
T E L 0292-31-0989



付図 原田北・西原遺跡遺構全体図



